



第204話 携帯電話症候群

道を歩きながら携帯を見つめている通行人。自転車に乗ってまで携帯を見ている女子高生。禁止されているにも関わらず車の運転中に携帯で話しているもの。電車のシートにずらりと座って、同じポーズで携帯をいじくっている乗客。会社でも、仕事もしないで机に向かって携帯でメールを送っている女子社員たち。平成十五年、国民の三人に二人がこの病気に罹っていた。小学生から年寄りまで、日本中で、同じ格好で、道路でも階段でもトイレでも学校でも地下鉄でも歩いても、座っていても、横になっていても、片手にはしっかりと携帯が握られて、一日中手から離れることはなかった。

「先生、うちの子の携帯が、手にくっついたみたいで離れないんですよ」

母親が心配して、子供を外科につれていった。

「お宅の子もですが、今日は朝から、そんな患者ばかりです。まるで、瞬間接着剤でくっつけたように、取れないでしょう。うちに来た患者で、どうしようもないのは、手首から切断いたしました。最悪の場合はそれでも構いませんか」

「どうしましょう。困りましたわ。だから、小さいうちに持たせなければよかった」と、しくしく泣いている母親の手にもしっかりと携帯。それを治療する医者の方にも、実は携帯がくっついていました。

「社長、会社の営業成績が下がってきたのには訳があります。社員の殆どが、仕事もしないで携帯ばかりいじくっているんです」

「ふむふむ」と、社長も部長の話を聞いていないで、専ら携帯にはまっていた。

「し、社長、聞いているんですか」部長は激怒した。

「わしだって、ちゃんと仕事をしているところだ。いまも、関西支店に携帯で指示を出していたし、銀行の支店長ともメールで話していたところだ」

「そ、それは結構ですな。社長は最近、重要な相談もすべて携帯で済ませてしまうようで、やはり、相手方とお逢いして直接話してもらったほうがいいのではないかと...」

「それもそうだが、面と向かって云えない本音も、メールなら書けるよ。断るときは都合がいい利器だ」

「判りました。もう二度と口出しいたしません。失礼いたしました」

総務部長は、社内ではコミュニケーションから孤立していた。いまどき珍しく携帯を持っていない一人だった。呑みの誘いも、相談にも、お祝い事にも、すべて外されている。

その部長が、総務部に戻る。全員、携帯を見つめながら、ピコピコやっている。その音も気に障るが、着メロもうるさい。汽車の音、踏み切りの音、あゆの新曲、島歌、ワルキューレ、新世界交響曲、犬の鳴き声、コマソン、あちこちで、いろいろとかかるので、クラシック音楽なら、それに統一してもらいたいのに、演歌からロック、童謡までごちゃまぜの音楽が、事務所内で鳴り続ける。それに加えて、ピコピコだ。部長は精神的に追いつめられて、病院に行った。

「ああ、お宅もですか、携帯電話を持っていない、少数派が罹る耳障り症候群ですな。治す方法

はあります。簡単なことです。あなたも携帯をやればいいのです。すぐに治りますよ」と、その医者も携帯をいじくりながら、話している。

携帯を持つ者も、持たない者もどちらも病気になってしまった。ただ、携帯を持っていないのに、病気にならない極、少数の隠れ人間たちがいた。携帯を持たない会という全国組織ではあるが、実は、秘密結社だった。彼らは、耳栓をして、携帯をみつめている幽霊のような患者たちを、密かに救おうと立ち上がっている団体だった。その月一の会合が、ビルの地下室で行われていた。

「いま、日本だけではなく、世界的に病気が蔓延しています。それは、単に、ドコモや通信会社の野望ではなく、各国の政府も絡んでいることが、内偵して判明いたしました。政治をやりやすくするためには、いまのくだらない政治から国民の目を逸らせばいいわけで、そのために携帯という大人のおもちゃを開発し、普及させたのは、すべて財界、政界の親玉たちの陰謀です。可哀想に、国民の大半が、いま夢遊病者のように、携帯の催眠にかかり、小さなディスプレイから目を離せないように心理操作されています。テレビ番組で、一時、国会議員の汚職や、税金値上げ、福祉切り捨ての政策に、マスコミが嘔み付きましたが、いまは、みんなテレビを見ることもしなくなりました。まんまとうまく行ったわけです」

支部長の挨拶のあと、これからどうして市民の手から携帯を放棄させるかということが、討議された。

「やはり、最後の手段に出るしかないな。研究班が完成させたウイルスだ。ケイタイに侵入して機能を破壊し、使用不能にする強力なやつだ」

市民に携帯離れを訴えたが、何を叫んでも、聞く耳持たない。みんな、聞かない、見ない、云わないと、のめりこんでいるからだ。すでに結論は出ていた。地下室の研究室からメールで一斉にウイルスが発信された。

全国的な規模でパニックになった。携帯が使えない。新しいものと取り替えてても、またウイルスにやられる。添付ファイルが隠されているところがみそだ。多くの使用者は気付かないで開いてしまう。いままで、縛られていたものが、なくなると、ヒステリーになるもの、鬱病になるもの、パニック障害に陥るものなど、精神が不安定になり、人々は怒ったり、泣いたり、歩き回ったりして、依存症の禁断症状を訴えた。病院という病院に長い列が出来た。部屋に閉じこもって出てこないものもかなりいた。

秘密結社は、そうなるであろうことをすでに予測して、代替品を用意していた。哺乳壺から放された乳児におしゃぶりを与えるように、彼らは、文庫本を市民に無料で配りはじめた。患者の多くは、何かをとにかく手にしていなければ落ち着かないので、本に飛び付いた。携帯から本へと、すみやかに移行していった。

電車の中でも、シートに座った乗客がずらりと文庫本を開いて読んでいた。町を歩くものも、歩きながら二宮尊徳のように本を読んでいた。会社でも学校でも、公園でもどこでも読書に没頭している姿が見受けられた。

秘密結社の会員の多くは古本屋と書店のおやじたちだった。

「これで、またお客が帰ってきますな。大成功です」

古本屋らの陰謀であったとは誰も気付かない。

第205話 異常性欲者たち

ホームページで検索してみると、驚くほど多数のフェチ・サイトが出てくる。全世界で、様々な嗜好に則って愛好者のページがあるのだ。靴下、ガーター、パンスト、下着、靴、レッグ、髪、尻、胸、女装、糞尿と挙げればきりがなほどのサークルまである。

雑誌記者の棟方史郎は、さ来月号の特集企画で、フェチを取り上げるので、ホームページに掲載している主とコンタクトをとって、取材に走り回る事となった。

「ごめんください。月刊ホームレスですが、匿名で取材させてください。写真も撮りますが、モザイクを入れますからご心配なく」

史郎が最初に訪ねたのは、靴屋の店主だった。ハイヒールマニアの彼は、趣味が高じてとうとう、靴屋まで経営していた。表から見ると何の変哲もない普通の靴屋だが、婦人靴専門店である。それも若い女の子の靴ばかり品揃えしていた。入口に紙を貼っている。

一履きつぶした貴女の靴を下取りいたします

「これですか、下取りしたコレクションを見せてもらえませんか」

店主は狐目の三十代の男で、不気味に笑って奥へ案内した。奥が住まいになっていた。居間の隠し戸棚にズラリとハイヒールからミュール、パンプスと、若い女性の履きつぶした靴やサンダルが並んでいる。三百足以上はありそうだ。彼は、それをさらに飽きたらネットで通販もしていた。一挙両得で趣味と実益が一致していた。これ以上素敵な商売はない。しかも、彼は、これらの靴を履いていた本人の顔を確認してからコレクションに入れているので、美人が履いた靴ばかりだった。

「これをどうするんですか。ただ眺めているんですか」

と史郎が訊くと、店主は顔を赤らめながら、

「とんでもない、こうするんです」と、ハイヒールの一足を棚から取ると、くんくんと犬のように匂いを嗅ぎだした。それで、恍惚感に浸っている。多分、誰が履いた靴か、客の顔と足を思い出しながら嗅いでいるのだ。それから、徐ろにハイヒールの中を舐めだした。それも犬がやるのと同じだった。だんだん興奮してくるのが目つきで判る。靴を終いには嚙りだすのも犬と全く同じだった。

「あのう、お楽しみ中、お聞きしますが、汚いと思ったことはありませんか。それに、持ち主が水虫だったかもしれないと、考えたことも」

「折角、人が空想の世界でエクスタシーに登りつめているところを、あんたは、全くロマンがない人だ」

「ロマンなんですか。女性の靴下には興味がないんですか」

すると、店主はきっと目をむいて、

「靴じゃないといけないんだ。君はなんということを云っているのだ。靴だよ、靴」

まるで、狂喜に周囲が見えなくなったような目を史郎に向けてきた。ぞっとする目つきだった。次に男はむしゃむしゃとハイヒールを食いちぎって食べ始めた。皿に載せて、ナイフとフォークを用意して上品に食べればまさにチャップリンだった。

「すごい世界だ、とてもついてゆけない。し、失礼いたします」

史郎は逃げるように靴屋を出た。

次に史郎が訪問したのは、県警の捜査一課だった。こちらも、内密に取材したいと、ある中年の鬼の刑事と呼ばれている、ベテランの男を訪ねた。

「ここじゃ、まずいから、外へ出ようか。くれぐれも内緒に頼むな」

刑事はいかにも鋭い目つきをして、いかめしい顔だけでも怖かった。刑事は、繁華街の個室喫茶に案内した。そこも風俗店に入るのか、刑事の取締管轄のようで、顔パスで入れた。みんな、ヤ一サンぽいのも「ご苦労様です」と、刑事に挨拶した。個室は、三畳くらいの狭い部屋が、完全に仕切られていて、隣の声も聞こえない。ここでは何をしても、誰にも見られることはないのだ。若いカップルがモテルの代わりに利用しているという。ドリンクは倍以上の値段だ。

「ここなら、いくら写真撮っても構わん。それじゃ、脱ぐからな」

と、刑事が背広とネクタイとシャツを脱ぎ始めた。笑ってはいけないので、史郎はぐっと我慢するのに必死だった。ワイシャツの下に女性の下着を着ている。キャミソールを脱ぐとブラジャーまでしている。史郎は、カメラのシャッターを切り続けた。ブラジャーからはみ出ている胸毛が迫力があつた。ズボンと脱ぐと、ピンクのパンスト。そこまでくると、史郎はゲタゲタとついに吹き出した。

「失礼、初めて見たものですから」

刑事はついに可愛らしいフリフリにリボンまでついたショーツだけになると、怖いものがあつた。毛深い男ほど女らしいとはいうけれど、そのアンバランスがたまらない。臍毛もつま先まで繁殖しているのに。

女装マニアというのが、かなりの隠れ人間でいるという。会社の社長や、政治家にもいるという。厳格な仕事ほど、その対照的な趣味に逃げたがる。

「どこが楽しいんですか」

「そうね、このパンストの肌触りだとか、ショーツのフィット感かしら」

史郎はぞっとした。声まで女の子になっている。気色悪い。薄い、繊細な素材で肌が包まれる感触を楽しんでいるのだという。家では寝るときまで、着換えして楽しんでいるという。ワンピースを着たり、すけすけのネグリジェを着たりして、人知れず鏡に向かって陶醉しているのを想像しただけで、史郎は具合が悪くなった。

次にコンタクトをとったのは、ホラー小説ばかり書いている三流の小説家だった。彼の書く小説はまるで、見たように描写がリアルだった。想像力だけではない、凄まじい凄惨な殺戮場面を書くことで定評があつたが、青少年には見せられないし、あまりにも内容がエログロなので、発禁になったりした。彼は出版界から締め出され、密かにウェブ小説でネットで発表しているに過ぎない。いままで取材してきた男たちの中で一番薄気味悪い顔をしている。

「あなたは、口は軽い方ですか」と、小説家が訊いてくる。

「いいえ、商売柄、告訴されたりしますので、プライバシーは口外してはならないことになって

います。何かあるとわたしたちは首ですから」

「そうですか、絶対に誰にも話しませんね。たとえ警察でもね」

「勿論、どんなことも他人には話しません。あなたが人を殺してもですね」

「そうですか、それではどうぞお入りください」

小説家の家は普通の二階建のこぢんまりとした家だった。独身で他に家族はいないようだった。居間で取材することになった。隣の部屋でモーターの呻る音がする。

「あなたのは、ホームページでは死体愛とありますが、まさか、病院の霊安室とかに行かれるんじゃないですね。それとも、川端康成の小説にある『眠れる美女』のような、愛好家たちの秘密のアジトがあるとか」

小説家は、隣室へ来るようにと立ち上がり手招きした。そして、襖を開けると、そこには巨大なプレハブの冷凍庫があった。肉屋で使うやつだった。その分厚い頑丈なドアを開けて、小説家が入った。史郎も後に続いた。

そこには、全裸の若い女の死体が、数十体もロープで宙吊りにされていた。

第206話 売国奴

二〇〇X年、政府は赤字財政補填のために、とうとう消費税を三割、所得税を平均して四割、諸々の間接税、直接税、年金、健保で三割引くこととなった。給与天引きで差引ゼロという異常事態で国民はそれでも怒らなかった。江戸時代なら一揆打ち壊しというところだ。無気力無関心な国民の大半は、

「あれれ、これじゃ、食費はどこから出すんだ」と首を傾げるぐらい。ゼネストも革命も何も起こらない。インテリゲンツァでも、あまりの馬鹿らしさにただ、呆れているだけ。そんなアホな政策を真面目に執っている国にまともにかかってゆくやつはいなかった。

ただ、江戸時代でも高い年貢に耐えかねて、農民たちは領地から他国へ逃げる、逃散ということをやった。多いときは五万、六万の大移動だった。あまりに政府がアホなので、少し頭のいい者から、海外移住が始まった。昔、ハワイへ、ブラジルへ、満州へと行った国民だ。多いときは、人口の割以上が移住していた。日本人は保守的で島国根性と云うが、どうして、フロンティア精神に溢れ、土地に縛られない。どこへでも行くのだ。パリ市だけで現在、二万人以上の日本人がいると聞くと驚く。実際、パリへ行くと、旅行者だけでなく、日本人がやたら目に付く。

ということで、こんな国はこっちから願い下げだと、さっさとみんな待遇のいい、税金の安い、物価の安い、暮らしやすい外国へと引っ越ししていった。食品店の親父は、店ごと移住した。技術で喰っているものは、裸一貫でやってゆける。

成田と関西の両空港だけでは間に合わず、ローカルの空港からもチャーター国際便が出た。一億二千万人を出国させるとなると、夏休みのバカンスと訳が違う。各港からも、旅客船が出た。

どこもここも押すな押すなの出国ラッシュとなった。

「このままでは、尻の毛どころか、殺される」と、命からがら逃げ出すのだ。

人口が半分、十分の一とだんだんと減ってきた。道路は都心でも閑散として、いつもは渋滞している首都高速もがらがら。当然、デパート、スーパー、商店もみんな店仕舞い。海外の支店を増やして、従業員ごと移住していった。

政府は歳入がゼロに近くなったので、全くやりくりがつかなくなった。そこで、またアホな考え休むに似たりで、出遅れた最後の国民にその分を課税することとなった。たまたま、移住の準備に手間取っていた魚屋さんのところに、税金支払い内容書が来た。四期の分割が可能だった。見ると、魚屋、目玉が飛び出る。

「ひえー、合計で二十億円」

日本はがらんとなった。残ったのは、国会議事堂にいた政治家だけだった。閣議が夜通し行われていた。

「もう、わしらを選ぶ国民はいなくなった。選挙はどうするんだ」

「内閣総理大臣」

「それでも百人、二百人はおるでしょう。憲法にも、法律にも国民の数は定義されておられません。残った国民の中で投票権のある者がわれわれを選ぶのです」

「それは判りますが、ああた、二百人しか全国でいない有権者が、どうして四百八十人の衆議院議員を選べるんです。一人一票ですよ。みんながそれぞれ違う候補者に投票しても、半分以上は票が入りません。その点を今後どう考えているのか、総理にお聞きしたい」

「内閣総理大臣」

「選挙云々よりも、いまは、信号も電車も銀行もコンピュータも電気も水道も止まったままです。それを操作するオペレーターもみんな逃げました。われわれの当面の問題は、今夜の夕食をどうするかでしょう。女房に子供まで家族も見放して逃げて行ったんですよ。だれが御飯を作るんです。ガスも水道も出ないし、これでは、タバコも買えんでしょう」

「議員の中にはすでに他国へ脱出した者もいます。総理、われわれも逃げませんか。天皇陛下にあらせられましては、勿体なくも、すでに、英国へご避難されておいでです」

国会議員たちも困っていた。腹は減るし、喉も乾いた。国内の商品も原料もすでに外国へすべて売却された。人も物もすべて空っぽだった。ビルや道路、家だけがそのまま残っているだけだった。

「わたしにいい考えがある。もう、この日本は国としての機能を果たしていない。国民は国民としての権利を放棄したものと見なして、国ごと売りさばきましょう。その代金は、ここにいる議員たちで山分けというのはいかがなものですか」

日本を売る。総理はすごい愚挙に出た。最後の最後まで私利私欲にまみれた政治家魂はここまできると立派だった。

その総理の提案は圧倒的多数決で可決され、衆参通過して、いよいよ売ることとなった。首相官邸から総理はホットラインを通じて、各国の首相にセールスしていた。

「債権債務を帳消しにして譲渡いたしましょう。日本の新幹線は世界一です。その設備と、原発も工場もビルもすべて、あなたの国のものです。三兆ドルは高い買い物ではありませんよ。何、

もっと負けろと、それじゃ仕方ありませんな、極東を欲しがっていたロシアさんにいい物件だと思えますよ。二兆ドルにお負けしましょう」

暫くして、ロシア側から売買契約を結びたいと申し入れがあった。

総理はロシアの大統領と契約のお礼の挨拶をホットラインで話していた。総理は云った。

「そうそう、忘れていました。この国にはおまけがついています。わたしも含めて政治家をすべてお付けいたしましょう。契約書に特約事項として、そのことが...。ええ？ 話しが違う？ それなら契約は解消するって」

電話は一方的に切れた。

第207話 夏休みの宿題は

長い夏休みも今日で終わりだ。ラジオ体操も、最初のうちは真面目に六時に起きて、町内の公園でやっていたのが、だんだん、近所の子も迎えに来なくなる。小学生でも休みとなると大人の真似して昼まで寝ていたりする。全く子供らしくない。夜更かしが原因なのだが、生活パターンが大人化している。

通信簿に母親がコメントを書く。明日からまた二学期だ。さっぱりすると、どこの親も思っていた。夏休みとなると、昼御飯の心配もしなければならぬのが、これでせいせいする。

内田家では、夏休み最後の日曜日、何故か一人息子の五年生の翔太が朝から塞ぎ込んでいる。母親が心配して、

「どうしたの、熱でもあるの？」と、額に手をあてがったが、風邪ではなさそう。

「うん、それがね」と、ぐずぐずしている。

「どうしたのよ、はっきりと云いなさい。何かあったの」

すると、急に翔太は泣き出した。母親は訳を聞いて慌てふためいた。

「あなたー」と、父親を起こしに行く。「大変だわ、起きてよ、翔太が夏休みの宿題やっていないんですって」

父親はがばっと起きて、

「なんだと、明日から学校だろうが」と、共に狼狽える。

「キャンプや、旅行、お祭り、花火大会、お盆と遊びすぎたものね」

「ともかくも、翔太はどこだ」

二人が下へ降りてゆくと、翔太がまさに脱走するところを玄関で拘束した。

「宿題の進捗率はどうなっているんだ」と、父親が聞く。

「シンチョコク...？」

「どこまでやったの？」

「全然」「何、何もやっていないってか」

「あなた」「これは大変なことになった...」

それから、内田家の宿題の突貫作業が分担して進められた。日曜もくそもない。毎年のごとく、どこの家庭でも見受けられる、夏の最後の日曜の慌ただしい風景だ。

「翔太は国語と算数のワークブックをやれ。ママは壁新聞の下書きだ。字は翔太のでなければバレルから、テーマはなんだ、夏休みの自然体験だと、キャンプのことか、おれは、工作をやる。なんでもいいのか、ログハウスか、パソコン自作機とか」と、かなり取り乱している。

親子三人は居間で宿題に追われた。母親は近くの文具店から模造紙を買ってくると、壁新聞の作成に取りかかる。鉛筆でレイアウト割付する。大見出しも考える。キャンプで撮ってきた写真も貼ったらいいのか。

翔太は泣き泣き、しゃっくりまでして算数の計算問題をやっている。それを脇から母親が助ける。父親は、腕組みして、何を作ろうか、タバコばかり吸っていて、先に進めないでいた。テレビで、盆栽をやっていた。無意識に見ていたが、

「これだ、ジオラマを作ろう」と、父親は急にひらめいた。

早速、行動に移した。文具店からのベニヤの板を買ってきた。紙粘土を作ろうと、鍋にテッシュと洗濯糊、つい、いつもの癖でだしの素も入れた。紙粘土を板にくっつけて、山を作る。糊を塗り、庭の砂を撒く。接着剤で小石も付ける。それに絵の具で色付けをする。庭の木から小枝をもいで、それも箱庭に固定した。父親は次第に工作に夢中になり、壁新聞の下書きを終えた母親と二人で制作に取り組んでいた。お昼になったのも知らない。

「お腹空いたよう」と、翔太が母親の手を引いても、黙々と二人とものめりこんでいる。翔太は仕方なく自分でレトルトカレーを温めて食べていた。ワークブックも大方適当に書いた。工作はだいぶ出来上がってきた。実に楽しそうだ。

「ぼくも手伝うよ」と、翔太はどっちの宿題か忘れていた。それで割り込もうとすると、両親に手で追い払われた。

「うるさい、おまえはあっちへ行ってる」

もう誰の宿題なのか判らない。

「あなた、ここに、港を作りましょうよ。堤防もいるわね」

「そうだな、堤防の先には赤い灯台だ。待てよ、豆電球も付けて、点灯するようにスイッチも付けよう。タッチセンサーで、ハイテクにするんだ」

だんだんと、凝ってきていた。簡単に済むはずの宿題も大がかりになってきていた。初めは、ベニヤ板一枚のジオラマも、畳二枚になった。

「パパ、これじゃ大きすぎて、学校へ持ってゆけないよう」と、翔太はごねる。

「大丈夫だ、パパがトラックを借りてきて、明日の朝、運んでやるから心配するな」

「あなた、とうとう完成したわね。これなら、クラスのどの子にも負けないわ。翔太のが金賞間違いなしだわ」

翌朝、小学校の校門にトラックやクレーン車までが何台も来ていた。児童たちは啞然としてその運搬作業を見ていた。

夏休みの工作は体育館に展示されていた。それを審査員の校長と教頭が見て回る。ソーラーで発電し永久に回り続ける扇風機とか、貧乏ゆすりをエネルギーに変換して、肩を揉む機械とか、高さ三メートルもあるエッフェル塔の模型とか、力作揃い。とても小学生が作れるものではない、かなり高度な発明品もあった。

「ふむふむ、教頭先生、今年の夏は、お父さん方はかなり頑張りましたな」

「はい、そのようすな。いつからでしょうな、父親の工作コンテストになったのは」
過保護な親の作品展は、それから町の名物となった。

第208話 現代とりかえばや物語

「てめえ、いつまでもじくじくと泣くんじゃねえよ」

と、乱暴な言葉遣いは姉の薫、中学三年だ。

「でもね、指が蜂に刺されたのよ、こんなに腫れて、真、死ぬかもしれない」

と、指を押さえて泣いているのは小学六年の弟、真。

「ざけんじゃねえよ、そんなの小便かければ治るって」

姉弟でどうしてこうも違うのか、それは産まれたときから始まった。赤ん坊の時から姉は活弁でやんちゃ、弟はおとなしく泣き虫だった。両親は口癖のように云う。

「薫の置いてきたものを真が拾ってきてね」金玉のことだった。

だんだんと成長するにつれて、薫はより男の子のようになり、真は女の子のようになっている。薫は近所の悪ガキの頭になり、半ズボンに髪もショートにして、リボンなどつけることもしないし、スカートも履かないで、棒きれを手によく喧嘩をしに行った。手や顔はいつも傷だらけで、鼻血を出しても泣きもしない。首すじにこびがたかっても、風呂が嫌いで、親が風呂場へ引きずってきて、強引に暴れるのを押さえながら、洗ってやらねばならなかった。

一方、真はいつも近所の女の子たちに混ざって、おままごとだ。優しい子で、言葉遣いもいつのまにか女の子のようになり、長くした髪にはバレッタ、着る服も女の子の服を好んで着ていた。

「どうしたものかね、あの二人」と、両親で話し合った。

「三つ子の魂百までもというから、あの性格は直らないでしょう。このままなら、性同一性障害で将来とも悩むことになるわ。あなた、思い切って薫を男の子で育てましょうよ。真は女の子にしまいましょう。近所の人みんなそう信じているんだから、誰も疑わないわ」

小学校に入学するときから、二人とも男と女を逆に出したら通過した。先生もそう思いこんで疑わない。ただ、林間学校や修学旅行で、クラスの子と一緒に風呂に入らねばならないときは、体にあざがあるという嘘を先生に話して、一人だけ、別にして貰った。本人も、同性と風呂に入

るのを嫌がっていた。

薫が自分の体の特徴を意識してきたのは、友達のを見てからだだった。

「どうして、おれにはチンポがないんだよ。みんな持っているのによ。この前も、みんなで立ちょんするときに、おれだけが前を濡らしちゃって、出るものが出ないからよ、引っ込んでいるのかって、いじくってみたけど、出てこないんだよ」

女の子には生まれたときからペニス羨望のコンプレックスがある。それが人一倍強い薫に、両親は教えてやらねばならなかった。それがだんだんと判る年になってくると、体は女で中身は男ということを本人も理解するようになってきた。そして、自分が女の体をしていることを周囲に悟られまいとひた隠すようになった。

逆に真の方は、ないはずのものがあるので、判る年頃になると一人悩んだ。

「わたしは女の子じゃないの？ みんなおちんちんなんか付けていないのに」

真にも両親は云ってきかせた。体が男の子で中身は女の子だと。それは我が家だけの秘密にしておこうと。

薫が小学六年のときに初潮がきた。話しには聞いていたが、自分に起こると、病気と思う。大変だと、青ざめて、包帯を巻いたりして、自分で出血を止めようとしていた。それを母親に発見された。

「薫にはおめでたくもなんともないのね、普通なら大人になったのだから、赤飯でお祝いするところだけど、あなたもやはり女の子だったのよ」

そう云われて薫はショックだった。中学に入ってから胸も痛くなった。蕾のように胸も膨らんできていた。ここまできて、いまさら、女の子でしたとは云えない。両親も困っていた。本人はブラジャーなんかやってられっかいと、まるで怪我でもしたみたいにサラシを胸に巻いて、目立たないようにしていた。押さえたからといってへこむものでもない。下着も当然男ものだから、体型が変わってくると、いろいろ合わなくなる。

中学までは男の子で騙せた薫も、三年になると、ジャニーズ系の美少年になり、女の子たちにもてもてだった。それが気に入らない他の不良グループに薫は目をつけられた。放課後に裏の公園で待っているとまるで果たし状。喧嘩好きな薫はひるまないどころか、わくわくして授業も耳に入らない。

「よし、来たか。おまえなあ、生意気なんだよ。ちょっとばかし女にもてるからって、いい気になりやがってよお」と、リーダーの生徒が薫の胸ぐらを掴んだ。

「なんだとお、てめえらこそ、威張りやがって」と、薫から先制パンチ。

「やっちまえ」と、男の子七人がかりだから、さすがの薫も袋叩きにあった。学生服を脱がされ、シャツも破かれると、乳房がペロリと見えた。不良グループは意外な展開に呆然とっ立っていた。そのうち、誰かが大声で云った。

「女だ。薫は女だ。わーい、わーい、薫の女」

その噂はたちどころに全校に伝わった。

小学校でも同じ頃、真がクラスの男の子からラブレターを貰って、大騒ぎになっていた。真もボーイッシュなところが素敵な女の子に見えた。こちらもクラスの女の子たちからやきもちを妬かれ、虐めにあっていた。椅子の上に画鋏をいくつも置いてあったのを知らないで、座ったも

のだから、尾てい骨にも刺さった。真は飛び上がって泣いた。担任の女の先生と、仲のいい友達、真を保健室に連れていった。保健婦さんが、嫌がる真のスカートと下着を脱がせにかかった。本人は痛さで、半分意識がない。パンツを脱がせて、みんなの目は一点に集中した。そして、声を揃えて云った。

「あっ、チンポコ」

両親が揃って、中学と小学校へ呼び出された。学校では大問題になっていた。校門から車が入った。薫の両親が揃って、入ってくる。生徒たちも全員、窓から下を眺めていた。薫の父親は、前スリットのスカートに派手なブラウス、茶髪にピアスだ。母親は会社からそのまま来たようで、背広にネクタイ。ちょっと目には宝塚という雰囲気、格好いい母親だ。

「このたびは、うちの薫のことでいろいろと驚かせてすみませんでした」

母親が謝る。

「お父さんですか」と、校長は険しい顔をしていた。

「いいえ、わたしが父親ですよ」

一同、母親と思っていた父親の方を見た。

「すみません、実はぼくたちはおなべとおかまが結婚したんです。娘、息子までが逆になっちゃって」

校長と教頭、その場に卒倒した。

第209話 ハンドル・ネーム

—あなたの中にいる玲奈です。メル友になりませんか。

甲斐義矩にある日こんなメールが入った。ケイタイでもパソコンでも、どこで調べるのか義矩のアドレスを知ってか知らずか、見ず知らずの人から突然メールが来ることはたまたまある。パソコンに入ってきたメールは、玲奈という女性名も気になるが、何か義矩のことを知っているふしがあった。

義矩は二十五の独身、電子部品の会社のエンジニアをしている。日頃、機械を操作するという無機質な仕事なので、会社ではひどい疎外感にさい悩まされていた。みんなそれぞれが隔絶したポジションで仕事しているので、同僚と話すこともなく、友人もいなかった。近代的な広い工場の中で、一日人と話すこともなく、機械に向かって独り言を吐いている。真面目な青年で、酒も博打もやらない。交際している女性もいないばかりか、この年になっても童貞だった。

日頃からコミュニケに飢渴していたので、それを夜、アパートの自室でパソコンに向かうことで解消していた。

メーリングリストに登録しているので、無趣味というサークルで、何かを求めてみつからない若い人々からメールが配信されてくる。その名前も顔も知らない、全国のどこに住んでいるか判

らない相手とメールのやりとりをする。みんな、ハンドル・ネームを使っている。義矩もヨッシーというネームで相手に送っている。そのミステリアスなところがマスカレード的でいい。そのほか、義矩はチャット・ルームにパソコンで入り込んで、やはり見知らぬ人たちと会話を楽しんでいる。会話といっても、メッセージャーを使っただけの声ではない。まだ、生の声で会話する勇気はないので、文字で書き込む会話だ。自分の気にいった部屋があれば、そこに数人が入って、すでに会話している中にゲストとして参加するだけでよかった。

—彼女を作らない会ってのも素敵ね。

—それは僻みっぽい人の集まりのようだね。

—いまは、結婚しない主義の人が多い。

—シングルはそれで思想です。

—たまたまじゃないの。

—みんな恋はしたい、結婚はしたい。

—こんにちは、初めまして。ヨッシーです。

—どうも、よろしく。

—わたし、玲奈です。ヨッシーさんのことよく知っているわ。

義矩はぎくりとして、キーボードの手が止まった。

—誰、君は。

—さあ、わたしは誰でしょう。ふふふふ。

義矩は気味悪くなって、焦ってチャットを切断した。

それから、まもなく、パソコンの受信トレイに玲奈の名前でメールが入っていた。

—あなたの中にいる玲奈です。メル友になりませんか。あなたの本名は甲斐義矩くん。恋人はいない。理工系の大学ではガリ勉で優秀。でも、友達いない。寂しい人。今夜の食事はカップラーメンと缶詰。それじゃ、栄養がとれないわよ。

—君は誰だ。どうして、ぼくのことを知っている。

—だから、云っているでしょう。わたしは、あなたと一心同体なの。あなたの考えていることは何だって判るわ。

そうして、義矩は戸惑っていたが、玲奈の方が積極的で、一日に十数通のメールを送ってくる。義矩は、玲奈という女性が案外、自分の理想の女性ではないかと、メールのやりとりで確信してきた。引っ込み思案の義矩にとって、リードしてゆくようなきつい性格の女性は魅力だった。ただ、何処で調べたのか、義矩の生年月日から本籍、家族構成までなんでも知っている。ひょっとして、自分のデータが外部に流れたのではないかと疑った。それだけではなさそうだ。絶対に誰も知らない、義矩だけの秘密も知っている。義矩が昨年、コンビニでつい万引きしたことも、会社の備品を持ち出したことも知っている。

メールが来たよ、と、パソコンが声で教えてくれる。来るのは玲奈よりなかった。他にメル友はいまのところいない。暗い、消極的な義矩の性格が相手に見破られ、みんな離れてしまう。オフでもオンでも自分は駄目なやつだと、義矩は自信喪失気味だった。それでも、どうも玲奈の図々しさは義矩は好まなかった。

—玲奈よ。返事くらいくれたっていいでしょう。わたしのことが嫌いなもの。こんなにも、あなた

のことを好きなのに。わたしの写真、添付して送るわね。解凍して見てね。

玲奈の写真が送られてきた。どうも、CGIで作成したような、本物の写真ではなさそうだ。それでも、二十歳くらいか、シャープな輪郭に吊り上がった眉、大きな瞳が確かに美人で、義矩の理想の女性そのものだった。

一見たよ。とだけメールで返信する。

一何よ、そっけない返事。だからあなたは駄目なのよ。少し、女性に対して上手したら。あなたの会話には形容詞がないのよ。女って誉められると嬉しいものなの。判った？

玲奈はずかずかと人の思惟の内面まで土足で入ってくる。それが義矩は許せなかった。少し、無視した方がいいと、返信しないことにした。

一どうして、返事くれないの。わたしのことを嫌いになったの？

一ねえ、わたしとオフで逢って。あなたとホテルでいいことしたい。

一あなたはわたしを愛しているくせに、拒絶するのは、あなたの中の潔癖なトラウマだわ。あなたのおかあさんに起因することね。

一いいわ、わたしの方からあなたの部屋に押し掛けてゆくわよ。覚悟していてね。

一いま、あなたのアパートの前にいるわ。これは、モバイルで送信しているの。

一いい、恥ずかしがらないでね、わたしをきつく抱きしめて、いま、あなたのドアの前にいるわ。

一わたしも、寂しいのよ。あなたの分身なの。さあ、振り向いて、あなたの後ろに立っているわ。

義矩はそっと後ろを振り向いた。そこに写真の女が立っていた。義矩はものすごい恐怖から声にならない悲鳴を上げた。

翌日、義矩は警察署にいた。

「ストーカーですか。一日に何十というメールを送りつけてくる。名前は玲奈、それしか判らないんですね」

最近、そういった相談、被害届が後を絶たない。ブロードバンド時代の申し子だ。犯罪も含めて、訴訟件数も鰻登りだった。

「相手のメールアドレスが判るでしょう。こちらで調べてみましょう。すぐに、つきとめられますよ。お宅のノートパソコンを今度持ってきてください」

刑事にそう云われて、義矩はノートパソコンを警察署に持参した。

コンピュータに詳しい捜査員が、義矩の着信記録を保存メールなどから調べていた。気むずかしそうな顔をして、別の刑事と何やらこそこそ話していた。

刑事が義矩に向き直って、こう云った。

「あなたの相談の窓口はどうやら、警察ではないようですね。病院を紹介しましょう。精神科医で、いい医者がおります。この着信記録を調べたら、玲奈という名前でメールを打っているのは、すべて甲斐さん自身じゃありませんか。自作自演というより、統合失調症かもしれません。あるいは二重人格。いずれにしても、病院でご相談ください」

義矩は呆然と椅子に座っていた。彼の中の女が笑っていた。

来る日も来る日も雨ばかりだった。まだ、陸が見えない。狭い船底には、大勢の善男善女たちが閉じこめられていた。それと、多くの動物たちだ。家畜は労働力であり、貴重なタンパク質補給源だ。食糧は一月分ほどは積み込んでいるだろうか。水は雨に頼ることでなんとかなる。その食糧もあと数日で底をつくだろう。どれだけの日数で新天地へ着くのかということは誰も予想しなかった。船の限界まで積み荷を積んだが、それは長い航海が予想されたから、最低必要な食糧や医薬品、衣類寝具などに限られた。特に、金子や貴金属の類は持ち込めない。そんなものは、旧世界に置いてきてあたりまえだった。

わたしは、詩人だった。自分でいうのもおかしいが、農業をなりわいとしながらも、暇なときには詩を書き付けていた。詩も田も作るというわけで、誰からも文句は云わせない。この船の中でぐったりと寝転がっている人々を見ると、何もすることがないというのは、ひとつの病気のような気がしてくる。何日も何日も、この牢獄のような船の中に閉じこめられていれば、発狂する者が出てきてもおかしくはない。一日中、寝ていてもいいのだが、寝ていては疲れる。何も考えない。考えることは、過ぎた思い出だけだった。いまを考えることは無意味だった。ただ、ギシギシと波に揺れて鳴る板の壁だけだった。外はどんなになっているのか、顔も出せないでいた。灯りもないから、ただ真っ暗な闇に半日ごろごろしているか、後の半日は天井近くの小さな明かり取りの窓から漏れる薄明かりで、船底の中がぼんやりと見えるから、食事の支度やら、家畜の世話などを分担してやっていた。

初めは元気のいいものたちは、お喋りしあい、歌も出ていた。それにも飽きて疲れると、次第にひとりひとりと無口になってゆくのだ。終いには、誰も何も喋らなくなる。必要な会話だけが、時折、ひそひそと、低く聞き取れない声で聞こえるだけだった。鶏だけは、朝になれば定刻に鳴いた。つられて牛や馬までが鳴くときがある。

そんな閉塞した状況の中で、わたしだけは、日々、無駄な時間というものがない。暇さえあれば、詩を舟板に刻んでいた。壁一面がわたしの詩で埋まっていった。日記のように日々の些細なできごとを歌うこともあれば、過ぎた昔を回想する歌もあった。また、別の床板には、長い叙事詩を物語にして書いていた。ストーリーを考えるだけで、一日は楽しく過ぎてしまう。わたしは、どんなところに閉じこめられていようが、石や木があれば、それだけで、退屈はしないのだ。言葉は無料の玩具だった。言葉遊びは無限にある。韻なども、その遊びのレトリックだ。いつ、いかなるときでも、詩人は第三者的に物事を記述しなければならない。後生に伝えるための速記者として、人々に歌い継がれる吟遊詩人として、それが娯楽のひとつであったとしても、生き証人亡きあとにも歌だけは残り続ければそれでいい。

朝は小麦を練ったものが一掬いと、塩漬けの野菜がひと切れ、そして牛の乳がカップで配給された。昼はない。夜は雑穀を臼で挽いた粉を舐める。火が使えないから、粉食か、それを餅のように練ったものが主食となった。水は雨からいくらでも吞めたが、ここには酒はない。男たちは、暫く口にしていない酒の匂いを思い出して、唾を呑んだ。また女たちは、天火で焼いたふっく

らとしたパンや羊の肉を炙ったものを連想しては、食べ物に夢ばかり見ていた。子供たちは、そうではない。この狭く臭い船底から、陸地へ飛び出て、前のように原っぱや海浜を思いっきり走りたいと思いを巡らしていた。

わたしは、この不自由な子供たちが飽きるであろうと思い、小さな独楽をこしらえてやったり、指先くらいの小さな動物を木ぎれを削って作ることを教えた。工夫次第では、どんな小さな屑でも材料にして、玩具はいくらでもできる。それをこしらえる時間も楽しいのだ。それから、子供たちを集めては、毎日決まった時間に、長い長い果てのないお話を聞かせてやった。その物語もわたしの創作なのだが、いつか語り継いで、のちの世に伝承されてゆくといい。わたしは人生の半分は過ぎた。あと生きて二十年。だが、わたしの歌と物語は永遠に残り続けてもらいたい。

長老が、天窓を開けて、外の様子を眺めては、下の者たちに報告してくれた。まだ陸地は見えなかった。四方が荒れ狂う海だ。初めは、みんな船酔いしていたが、慣れてくると、酔うものはなくなる。もう、四十日もこの船に閉じこめられているのだ。食糧がなくなりかけたので、今日からは一日一食、それもとても空腹を満たす量ではない。体力を消耗しないように、じっと横になっている日が多くなった。

長老は、鳩を一羽、窓から放してやった。その鳩は、やがて、船の周辺を飛び回って帰ってきた。

二度目に長老が鳩を飛ばせたとき、鳩は帰ってはこなかった。みんな心配して、突風にやられたのか、嵐に迷ったのかと、噂していた。だが、数日して、その鳩が、天窓の枠に止まっているではないか。みんなは、指さして見ていた。鳩のくちばしにはしっかりと緑の葉をつけたオリーブの枝がくわえられていた。

長老は、緑の木が育っている陸地が近いことを確認して、みなと共に悦んだ。

「もうじき、陸地が見えるぞ、われわれは自然神の加護のもとに救われたのじゃ。みんなで祈ろう、全能の父なる自然神に」

船は数日後に、座礁して止まった。みんな一斉に甲板に出た。雨は止み、海は穏やかで、久しぶりの青空が眩しかった。そして、前方に島のような広い陸が出現していた。木々や草花がすでに生い茂り、緑の山も確認された。

「助かった、われわれは生き延びたのじゃ」

動物たちや、生き残った人間たちは、方舟から、続々と浅瀬を歩いて、上陸しはじめた。

わたしはこの善き日の出来事を書き付けた。全世界が、聖書にあったように、雨の洪水で流されはしなかったが、アトランティスのように、大陸という大陸が海中に沈み、高い山だけが海の上に島として残っていた。わたしたちの船は、その山頂に流れ着いたのだ。これは、何十万年の地球の呼吸に過ぎなかった。文明は悪に染まり、水に流され、海に沈む。核戦争をしたり、テロをしたり、誤った神を信仰した罰が、われわれの上に降り注いだに過ぎない。いま、新しい地には愚かな文明を持ち込むのだけはやめようと話し合った。火も鉄も、戦のために使用したあらゆる危険な道具を廃止して、原始に還ること。

アルカディアにはコンピュータも電気もいらない、青いままの空と海があればそれでいい。

科学者たちの究極の目的は太陽を盗むことだった。ゼウスに反逆した人間たちの手によって、地上に太陽を創り出す実験炉がついに完成した。イーター一号機は実用までの試験機として、テストが繰り返されることになる。各国がその研究に参加していて、全世界の注目するところとなった。

北のさい果ての原野にによきりと立つ、煙突と、ドームがモスクを連想させた。それは、科学の神を崇める礼拝場なのだ。

その実験炉の場所を提供した県知事と、科学者チーム、そして、会社側の代表から記者会見が行われた。

「この実験炉は九十九パーセント安全です」と、一パーセントの危険を残していた。ニューヨークタイムズが、その一パーセントの危うさを攻撃した。

「われわれは、その一パーセントをゼロにするよう、集中的に安全管理をするつもりです」と、具体的な回答を避けていた。

その会場前ではハンストも含めて、反対派の座り込みが続けられていた。機動隊がガードしていた。全国から数万人規模の機動隊が集められていた。テロの攻撃の格好の的にもなる。

物理学者の高城は、声を嚙らして、実験炉の点火をやめさせようと叫んでいた。すでに、何時間もマイクで叫んでいたので、喉が病んだ。

「この実験は、世界の物理学者はすでに見切りをつけていたことです。いま、やろうとしているのは、われわれの仲間ではない。企業の手先となって、すべて金で飼われた工学者たちだ。学者の名を冠するものとして恥を知れと云いたい。それは、膨大な研究費が出るから、現代の錬金術師たちなのだ。ロシアやアメリカはうすうす危険を感じているから、金を出さないではありませんか。われわれの計算では、核分裂反応は制御不可能と出ています。彼らの発表では、核融合は暴走しないと断定していますが、その根拠はどこにあるのでしょうか。無理に反応させ、プラズマが暴れると、三百トンの装置が一センチも上がるほどの力が装置に加わります。それだけではありません。スイッチを入れたら、未だ人類が経験したことのない、温度まで、上昇してゆくわけで、彼らは、コンピュータのシミュレーションだけで、先に進もうと判断しているのです」

高城は、そこまで話すと、その場に倒れた。

「先生」と、同士たちが駆け寄る。以前から癌で二度の再発、手術と病気と闘ってきた高城博士は、とうとう、性も根も尽き果てたように目を閉じていた。

「先生を病院にお連れしろ」

すると、高城はうっすらと目を開けて、みんなに何かを伝えたいような口の動きをした。

「何ですか、先生」助手が耳を先生の口に近づける。

「...逃げろ。ここからできるだけ遠ざかれ、風向きは南南西か。北だ、北へ...」

高城はそこまで云うと、意識を失った。

座り込みは即刻中止された。もう時間がなかった。少数の無防備の市民団体がどうストライキをしようが、実験炉の点火を阻止することはできそうもなかった。

あと、五時間で点火スイッチを入れるセレモニーが行われる。科学技術庁の大臣と知事と会社側から社長が紅白のリボンをつけたスイッチを押すことになっていた。報道陣も、その危険性を知らないでいた。ましてや、村民や遠くから車で駆けつけてきた県民たちは、お祭り騒ぎだった。露店も出て、郷土芸能も披露され、村は一挙に何倍もの人々で賑わっていた。

その騒ぎの中で、反対派だけが姿を消した。もう、誰に何を訴えても聞く耳も持たない。人間は科学に全幅の信頼を寄せていた。コンピュータは全能で、間違いはないと信じていたし、技術立国の我が国が、ロシアのような事故を起こすはずがないとたかを括っていた。

市民団体の事務局をしていた笹井は県都まで帰ると、親戚友人まで説得して、とにかく北海道に避難するよう勧めた。みんなは、まさかと信じてくれないので、笹井は、提案を思いついた。

「炉心が融解し、火災爆発が起こったときは、風向きで、高レベルの放射能汚染が、南方へ五百キロは飛散する。東北は全域が危険だ。東京も判らない。数百万単位で被爆者が出る可能性がある。いま、逃げなければ手遅れになるんだ。事故がなかったら、そのときは全額旅行費用はおれが持とう。それで納得してくれ」

電話でそうお願いしたが、聞き入れてくれたものは半数にも満たなかった。

笹井は、妻と中学、高校の息子二人を学校より呼び戻し、車のトランクに必要な書類と通帳、ノートパソコンにデータの入ったCDなどを詰め込んで、フェリー埠頭へと急いだ。市民はまだ何も知らない。金曜日という平日で、スーパーは売り出しの準備をしていたし、買い物客がのんびりと歩いていた。

「親父、部活も投げて来たんだぜ、旅行ならもっと早くから云ってほしかったよな」

「そうだよ、なんだよ、大事なものを持ち出せってさ、まるで夜逃げじゃないか」

「ばかだなあ、夜逃げるから夜逃げなんだぞ、昼逃げだ」息子たちはまだ何も知らないで冗談まで云っている。

笹井の妻は心配そうに、フェリーの甲板から海を眺めていた。

「どうなるんでしょう。これから」

「さあ、これは人類が今まで経験したことがないソドムの火なんだ。高城先生の云うことが本当なら、少なくとも、二十五年はあの街へは帰れない」

フェリーは函館へ着いた。点火まであと三十分だ。急がなければならない。猛スピードで、北へ北へと走る同じような車がいた。みんな、不安そうに、後ろを向いている。多分、信用して避難する人々なのだ。だが、大勢の市民はその話しを信じることなく、嘲笑っていた。

「ラジオを点けてみよう。そろそろセレモニーに入る頃だ」

警察の音楽隊まで出ていた。明るいブラスのマーチが流れている。多分、子供たちには風船を配っているはずだ。

一世紀の祭典と同じようです。いよいよ、実験炉に点火されます。我が国で、初めて新しいエネルギーの創造に向けて、いまその扉が開かれようとしています。

車は大沼公園を過ぎて、森町へと制限時速以上で突っ走っていた。午後三時。

いよいよ点火だ。

一いま、大臣と県知事と会社側の代表三方がスイッチを入れました。イーターの始動開始です。

多くの拍手と万歳が聞こえるでしょうか。これまでには随分と道のりが長かったと、感涙にむせている研究チームのジミー長田さんにインタビューしてみましよう。おや、警報が鳴っていますね。どうしたんでしょう。現場にいる記者に繋いでみたいと思います。長久保さん、長久保さん聞こえますか。繋がらないようですね。おかしいですね。

放送はそこで突然雑音が入り中断された。暫く、ラジオの音声が聞こえなかった。何か、走る車の後方が光ったような気がした。妻が気になって、何度も振り返っていた。

「見るな、見るんじゃない。あの光を見ると、口トの妻のように塩の柱になるぞ」
笹井はそう云って妻を脅かしていた。

プロメテウスはオオウイキョウの草を手に天上のゼウスの宮の火処から火を盗み、人間に与えた。ゼウスは怒り、人間どもに火の償いとしてその火に禍を秘めた。火によって野蛮と夜の迷妄から解き放たれた人間は、またその火の中の不幸の種をも受けることとなった。

第212話 暇潰し

「暇潰しがもっとも忙しい仕事である」という名言がある。人間、何かをしていなければ落ち着かない。ことにこの不景気で、暇な商店は開店休業状態で、来ない客をじっと待つ商売ほど辛いものはない。

喜多村商店はガラクタ専門店である。役に立たなくなったものばかり集めて売っていた。片一方しかないサンダルとか、割れ鍋とか、車輪のない自転車とか、蓋のないヤカンとか。そんないろいろなもの、不良品をメーカーからただで貰ってきて並べているが、なかなか売れない。

店主の喜多村は脱サラだが、ひとり者だから守るべきものがない。自分一人分だけなんとかなればいい。気楽な稼業だった。店は死んだ親父から譲り受けたものだから、光熱費と食費と税金だけをなんとかすればいい。売れなくても別に焦ったりしない。のんびりと仕事をしている。

ただ、日がなすることがないというのは退屈だ。何かをしていなくては、隣り近所の目もある。昼寝ばかりしては馬鹿になる。何かないかなと、周りを見ていると、電話帳が目についた。電話番号を一生懸命、電卓で足し算する。

それに熱中するとのもりこんでやめられなくなる。途中で疲れて中断するが、分厚い電話帳のこと、いつまでも終わらない。数字を見るとおいちょカブのように足し算したがる癖というものがある。喜多村もほぼ病気のようにそれが直らない。

それに飽きると、今度は言葉遊びだ。次の短歌を漢字に直すところを直して、意味が通ずるようにするという難問だ。これは昔からあるようだが、なかなか解けない。

ののののの ののののののの ののののの

ののののののの のののののしの

最後から二番目に「し」が入っているのが曲者だ。ヒントは最初が京都嵯峨野の「野々」という地名で、「野々の野の」となる。それを喜多村はもう何十年も考えている。これも金がかからない。どこにいても暇潰しができる。

ラジオはずっとかけている。客の来ない店で無音というのも気味が悪い。しーんとしている店内のレジに黙って座って、半日もいてみれば頭の中が真空になる。

「いかん、いかん」と、喜多村は頭を叩く。

そのラジオでニュースをやっていた。

一現代の奇病の「暇」が下町を中心に全国的規模で蔓延しております。「暇」は一種のウイルスで強力に伝染いたします。それに罹ると症状として、倦怠感に囚われて、やる気がなくなります。一日中、ぼんやりして、頭の中が真っ白になった感じがします。この暇病に罹った人には近づかないようにしてください。暇が移ると、売上が下がり、来店客数が減少するでしょう。感染した方は、すぐにお近くの商工会議所、もしくは市役所の商工労働課に対策窓口を設けておりますので、届け出を出してください。相談は無料となっております。

喜多村は、自分は慢性的な暇病に罹っていることによく気付いた。

「なんとかしなくては、このままでは飯も喰えなくなる」

喜多村はない知恵を絞って、どうしたらこの暇を店から追い出すことができるだろうと、あれやこれやと思案を巡らした。

「そうだ、暇のワクチンといって、店の中の暇を売ったら一儲できるかもしれない」

喜多村は、さっそく店の中の空気を紙袋に詰めて、その袋に暇と墨書きしたシールを貼った。それを沢山作って、店頭には山積みして特売の下げピラを目立つようにベタベタと貼った。

「さあ、『暇』はいかが。新発売の『暇』だよ。暇に罹る前に、この暇のワクチンを吸えば、体に抗体ができるよ。免疫ができると暇に感染しないよ。一袋三百円は安いよ、安いよ」
通行人が珍しそうに眺めてゆく。八百屋のおやじが試しに一袋買っていった。

たまたまかもしれないが、その八百屋が暇のワクチンを吸ってから、大きな注文が入って、客数が増えた。売上もよく、店は忙しくなってきた。その噂が商店街中を走った。喜多村商店に、客が押し寄せた。われもわれもと「暇」を買う行列ができて、即日完売。悦んだ喜多村は、「暇」の製造に徹夜で望んだ。紙袋を大量注文し、シールは印刷までした。医薬品でも食品でもないから、製造年月日の表示義務も、製造の許可もいらぬ。毎日、製造が間に合わないくらい売れに売れた。

「喜多村社長さんですか」と、背広の男二人が来店した。社長と聞いて、喜多村は後ろを振り向いた。誰のことかと思った。指で、自分を指して、

「おれですか」

「わたしどもは北部デパートのものですが、お宅の『暇』を是非、わが店で取り扱いたいと、お願いにきました。なんとか、全国のチェーン店で売らせてください」

大きな商談が舞い込んだ。気をよくした喜多村は、アルバイトや近所の主婦を総動員して、「暇」の生産に本格的に取りかかった。作っても作っても足りなくなる。人間の心理で、ないとなると欲しくなる。幻のワクチンとまで週刊誌に記事として載った。喜多村は、儲かった金で、工場まで作った。

というところで、喜多村は目が覚めた。ついうたた寝をしていた。暇になれば夢までおかしい。

「それにしても、暇は苦痛だ。なんとかならんものか」

喜多村は夢からヒントを得て、店でオリーブオイルを原料にした「暇し油」を試作していた。「これで油を売ることでどうだろう」

第213話 パラサイト・ポリス＝寄食国家

会社に毎日通勤するお父さんたちは、いずれも暗い顔をしている。ずるずると、重い人間のようなものを引きずっているからだ。足が重い。その物体は、お父さんの脛に嚙りついたまま、自分で立って歩こうとしないから、どのお父さんも汗を流しながら、会社へ通っている。会社のデスクで、仕事しているときもその人間の形をしたものは、食いついて離れない。

「どうにかしたいものですな」隣の同僚が憎々しげに足下を見ていた。

「全くですな。もう二十五才にもなって、何を考えているんだか。いつまでも仕事もしないで、親の脛を嚙って」

「どこの息子もそうらしいですな」

見渡せば、社内の中堅社員の殆どが、食いついて離れない息子たちをずるずると会社まで引きずってきていた。

「だが、息子でよかった。あれを見なさい。見苦しい」

専務の背中におんぶしているのは部長だった。その専務も社長の裾を引っ張っている。社長は、名誉顧問の政治家にくらいついている。ずるずると、行列をつくるように会社から一行は出ていった。どこへ行くのだろう。政治家はもっと実入りのいい大企業を捜していた。大手ゼネコンの本社までずるずると蛇のように繋がって行って、先頭を歩いている政治家は受付で、

「会長はおるか」と、東証一部上場のゼネコンの会長と逢った。逢うなり、政治家はぱくりと会長の尻に食いついた。食いつかれた会長は、困った顔もしていない。そんなものだと思っているようで、食いつかれたまま、ぞろぞろとまた一行は専用のリムジンに乗り込んだ。五人の列を乗せるには大きな車でなくてはならない。

「国土交通省へやってくれ」

リムジンは省庁のビルの前で止まった。ずるずるとみんな降りる。先頭の会長が接見するのは、高級官僚だった。大臣なんか飾り物で、すべての予算の実権を握っているのは、官僚だ。そのトップに広い会議室で逢った。逢うなり、会長は官僚の尻にぱくりと噛みつく。官僚は官僚でまんざら悪い気はしない。財界のボスが、尻にかぶりついて、名誉なことだった。

官僚は、走る応接間のような小型バスを用意させて、帳の降りた銀座へと一行を連れてゆく。高級クラブへと、またずるずると入っていった。

「ああ、ターさん、いらっしやい。今日はまた団体様でいらして。お仕事かしら」

「まあ、そんなところだ」

「麻美を呼んできましょうね」

官僚は少し紅潮させながら、「うん、頼む」

銀座のクラブでもナンバーワンの麻美は、才女で器量よく、スタイル美貌も抜群だった。官僚の愛人だった。ボックスに一行が座ると、シャンペンが抜かれた。綺麗どころが繋がっているそれぞれにかぶりついた。一挙に一行は倍の定員になった。官僚も麻美にかぶりついた。

クラブから全員にホステスまでくっついてきて、ずるずると十数人の列が小型バスに乗って、愛人のマンションまで向かった。麻布の億ションの最上階の部屋に、ぞろぞろと一行が入ってゆく。先頭は麻美だった。部屋の中には、チンピラのような男前の若いやつが待っていた。麻美のひもだった。

「あなた、みんな連れてきたけど、気にしないでね。愛しているわ。はい、今日のお手当よ」と、ひもに札束を手渡した。そして、麻美はひもの腕にがぶりとかぶりついた。

ちんぴらのひもは、ちょっと親分に挨拶してくるからと、みんなをずるずるとひきつれて、暴力団の組事務所にみかじめ料を集金してきたのを持参した。組長が、

「なんだ、今日はまたえらく賑やかじゃねえか」と、くらいつく行列を見ていた。すると、ちん

ぴらは、急に、

「親分」と、脛に嚙りついた。

「おっと、嚙るなら袖の下よ。脛には傷があるからな」

と、急にドアが蹴破られ、武装警官が雪崩れ込んだ。手入れだった。ホイッスルが鳴るや、組事務所に刑事たちも飛び込んできた。部長刑事が、逮捕状と、捜査令状を親分に見せた。

「麻薬所持容疑、及び銃刀法所持容疑で捜査する」

すると、部長刑事の片腕に親分はがぶりと噛みついた。

「おれが先頭じゃ、目立っていけねえ。日頃は仲がいい警察の旦那とこうしていたい」

刑事はヤクザが片腕とは世間体が悪い。何かに無性にかぶりつきたい衝動にかられた。見ると、行列の一番後ろにおんぶされている会社の部長がいた。いつも、会社のヤバイ取引に目を瞑ってもらうよう、袖の下をくれる部長だった。刑事は、つい、その行列の尻尾の部長の尻にかぶりついた。

これで、行列はひとつの輪になった。みんなひどく安心した。財界と政界と官僚と女と暴力団と警察が繋がった。これで日本は安泰だ。

第214話 万引天国

そのデパートにはレジが各売場になかった。客の質も悪く、目つきのおかしいもの、風采の上がないものが、うようよと、売場を歩いている。普通のデパートではないのは、その異常な様子で判る。天井にはやたらと防犯ビデオカメラが付いていたし、従業員のほかに、物陰から密かに客の動向を窺う怪しげな私服のSP隊員がうじゃうじゃといるのが、誰の目にも判った。

以前は円井デパートは普通のデパートだった。世の中が不景気になり、失業率も増え、犯罪も増えてくると、どこの店も万引きが急激に増えた。ある中学のクラスでは内密にアンケートをとると、クラスの半数が万引き経験者だったという。中学生が一番多いが、それは年寄りまで年齢を問わず、確実に増えていっている。新刊本の書店では万引きロスが三パーセントだという。十億売っている大規模店では年間三千万円の被害がある計算になる。一冊それも盗むからには、高い本を狙うのだが、その盗まれた本を穴埋めするには、二割しか利益がないから、安い本なら十冊近く売らなければならなくなる。万引きに寄ってたかってやられて、倒産した店は数知れず、店側もその対策に苦慮していた。

そこで、円井デパートでは、入口にこんな看板を出した。

一万引きさん大歓迎。無事に見つからなかったらすべて差し上げます。見つかったら、そのときはお買い求めいただきます。さあ、あなたも挑戦してみませんか。万引きゲーム。うまくいったら百万円分でもあなたのもの。

世間がぎよつとするコマーシャルも流した。

「当店は、いっさいの販売をやめました。万引き専門のデパートとしてリニューアル・オープン

いたしました。一般のお客様はご入店できません」

その広告を見て、腕試しをするもの、わざわざ遠方から、やってくるものなど、朝から万引きの長い行列ができるほどだった。

テレビ局のインタビューで店長が話していた。

「もう、万引きには疲れました。一時はあまりひどいので店をやめようかと思ったくらいです。それに負けていては商売になりません。嫌だ嫌だと思うから苦痛になるのです。向うが遊び感覚でスリルを求めてやっているのであれば、こちらも同じようにゲーム感覚で対応します。従業員の大半が万引きを捕まえる訓練をしたSP隊員です。彼らにも万引き一人捕まえればいくらか、歩合の報奨金をつけています。カメラや、センサーなど、ハイテクの粋を集めて対抗してゆきます。さあ、わたしたちのバリアーを解いて、無事に成功するか試してごらん下さい」

そう、挑戦状を叩きつけられて黙っている万引きのプロはいない。全日本万引き協会でも、挑戦を受けて立つと、マスコミに豪語していた。

高額商品には、持ち出せば、入口のセンサーが鳴る仕掛けをしていたが、プロの万引きはそんなものは怖くない。七つ道具のひとつにカミソリがあって、それで、パッケージから中身だけを抜き取るのだ。中には中身を取り出せば、色水が飛び出して、商品に付着して使い物にならなくなるものもあるが、彼らには子供騙しだった。ビデオカメラにも必ず死角がある。三方からカメラで監視されていても、販売台と体で、必ず見えなくなる陰が出てくる。それを見破るには、ダミーのカメラを天井にいっぱい設置して、実は本物のカメラを販売台の囲商品の中に仕込んでおくのだ。万引きの顔が近くですぐ見える。その写真をすばやく、店内を見張っている隊員のケイタイに送るのだ。

集団万引きは、万引きをする者を回りの仲間がガードして見えないようにするものだが、まさか、カメラが床下にも付いていようとは思ひもしない。すぐに報告が隊員に飛んで、出口で御用となる。

サンドイッチという手口もある。自分の本を二冊、小脇に抱えて、店内の書店に入る。立ち読みしている振りをして、素早く二冊の本の間に挟むのだ。それは、特殊なバーコード解除をしないと、出口で警報ブザーが鳴る仕組みになっている。

送りという手口は、まるで他人のような仲間が数人で、互いに知らん顔をしながら、素早く万引きした商品をバトンタッチしてゆくものだ。犯人と思って捕まえてみれば、すでに別の者に手渡されていて、持っていない。

下調べをしてきて、すり替えという手口も厄介だ。同じようなパッケージを用意してきて、棚の本物とすり替えておくのだ。これは、よく宝石や時計などの高額商品が狙われるやり方だ。

店側では、そんな手口の事細かに研究済みだった。どうやっても見破り、出口で捕まえる。万引きの成功率が極端に減った。そればかりか、失敗したときは購入してもらうか、警察へ行くかだから、大抵は買わされることになり、円井デパートの売上は前年対比の三割増しとなった。新車の商売は成功していた。

ところが、万引きも新たな手口を開発して、挑戦してきていた。蝶ネクタイに燕尾服の男と、レオタード姿のアシスタントがデパートに入ってきた。男は、シルクハットをかぶっていた。そ

の格好で、宝石売場に出向くと、怪しいやつと、隊員が集結してきた。よく、万引きが使う手口は、わざと派手な目立つ格好をしたものを泳がせて、それに注目を集めておいて、手下の主婦グループが、手薄になった売場で万引きするというものだ。それも心得て、他の売場にも全社員、緊張して気を配っていた。奇妙な連中が入店すると、ある隠語のように、社員同士が判るBGMが店内にいろいろと流れることになっていて、それが合図だった。このときは、「オリーブの首飾り」が流れた。他の万引きも何が始まるんだろうと、続々と宝石売場に集まってきて、人だかりができていた。シルクハットでアイマスクをしている男とレオタードで網タイツの女は始終無口だった。シルクハットの中をみんなに確認してもらってから、展示してあったブランドものの腕時計をいくつかハットの中に入れた。そして、その中に瓶から水まで注ぎ入れた。みんな息も止めてみつめていた。男がシルクハットをかぶる。もう一度、ハットを取ると、鳩が二羽飛び出した。水もどこかへ消えた。腕時計も消えた。SP隊員たちもあまりの見事さに拍手をしていた。

次々に売場の高価なものが、ハンカチや空の黒い函の中に消えていった。監視カメラで確認しても判らない。商品はどこに行ったのだ。二人のマジシャンは、そうして悠々と引き揚げて行った。出口のセンサーも鳴らない。ボディチェックしても持っていない。手品の道具も調べたが、どう振っても出てこない。不思議だった。

円井デパートにはそれから、ミスター・なんとかとか、超能力者とか、様々な奇怪な万引きが出現して、まんまと盗んで引き揚げてゆくので、とうとう店は閉鎖に追い込まれた。

店長以下、SP隊員たちが全員解雇となった。デパートを去る日、みんなは通用口で話していた。

「店長、これからどうして生活してゆくんですか」

「万引きでもするさ。われわれにはノウハウがあるからな」

第215話 健康オタク

女性雑誌の半分以上が健康美容ダイエットの広告と記事だ。どの雑誌もどの雑誌もそればかり。いかに女性が痩せて、綺麗になり、若さを保つということだけに関心があるかということを示している。通販にしても、インチキくさいその手の広告ばかり。エステや美容整形、ダイエット食事療法など、月に数十万、中には軽自動車を買える金額を惜しげもなくぽんと支払って、虚しい努力をする女性もいる。

元子は三十半ば。子育てがある程度軽くなり、お肌年齢も過ぎたら、ただ、太り、荒れてゆく肌と衰えてゆく美貌をなんとかしなくてはと、焦っていた。女性雑誌をあれこれと読んで、余計な知識を身につけていた。母親は、子育てに忙しいときは、どうしても身なりや美容には疎かになりやすい。それどころではないほど忙しい。子供たちが中学や高校に上がり、手間がかからなくなったときに、改めて、やつれ、老けた自分の顔を鏡の中に発見するのだった。もう、若いときのように、子供を産んで、崩れた体形は元通りに復元できそうにない。いまさら、もてる意味

もないが、女は死ぬまで女で、いつも誰かに綺麗だねと云われてみたい。亭主はすでに恋愛の抜け殻だった。いてもいなくても平気なただの同居人になりつつある。主婦としての時間はたっぷりとある。さあ、何をしようか。することは、美しくなりたい。いつまでも若くありたい。そのことに限られた。

カルチャー教室で、ジャズダンスやエアロビ、ヨガ、水泳などをやった。それでも不安でならない。元子はドラッグストアに毎日のように買い物に行っていた。ショッピングでどの店が楽しいかって、ドラッグストアが一番元子にとって楽しい店だ。一日中いても飽きない。ここで暮らしたいほどだ。

元子は、ビタミンC・B・Eの錠剤は毎日欠かさない。細胞を若返らせるコラーゲンは化粧品とドリンクで、疲れにはりんご酢を、貧血気味だからと、Fe入り食品に、ストレスが多い現代人にカルシウム入りウエハース。昔ハイマンナン、いまはただのこんにやくと海藻サラダの朝ご飯。糖分、油脂分、炭水化物いっさい抜きと、そればかりを食べていた。ただ、毎日まいにちでは飽きるから、たまにはキャベツの千切りを水と一緒に胃の腑に送る。満腹感を如何に感ずるか。

雑誌やテレビで、紹介されると、すぐに飛び付き即実行。毎日、ゆで卵ばかり食べ続けたり、リンゴばかり食べ続けたり、はたまたパイナップルばかり食べ続けたり、カロリーオフのコーラにビール酵母の満腹感。やれ、プアール茶だ、減肥茶だ、目指せ目標マイナス8キロの痩せるお茶。美容のためなら保湿作用のあるヒアルロン酸。いいと思えばおしっこでも吞んでいる。最近ハマっているのは、とうがらしジェル、発汗作用で少しでも汗で排出。

家に来た、セールスも玄関に應對した元子に驚いて、逃げ出した。小顔矯正の器具を口に嵌め、耳ツボダイエットだと、耳に鍼を刺し、アプトロニックを腰に巻き、指にツボ刺激のゴムを嵌め、小さなダイエットスリッパでつま先立ち、ウォーキングソックスに体型を矯正するボディースーツときたもんだ。それで、大きなヨガボールを抱いたまま、顔に泥パックのまま、「どちらさんですかあ」

毎日、毎日、元子は茶碗では足りず、丼に山盛りで、そうしたサプリメントばかり食べ続け、もう、ここ一年、白い御飯を食べたことがない。まともな食事をしたことがない。亭主が心配して、

「そんな栄養補助食品ばかり食べていて、大丈夫なのか。たまに、ちゃんとした食事をしろよ」
「だって、あなた、わたしは、お腹がいっぱいなよ。丼で毎日、こうしたものを何杯食べていると思っているのよ」

主客転倒とはこのこと。痩せるどころか、元子はますます太っていった。

そればかりではなかった。元子は原因不明の難病に罹り、長期入院することになった。美白のためにしたパックで顔が爛れ、逆に黒くなり、痩せようとして食べ続けた怪しい輸入漢方も、効果なく、却って太るはめになった。挙げ句の果てに、インチキ食品が横行していたため、なんの成分が入っていたものか、健康になるどころか、体に力が入らず、手足の筋肉が萎縮していった。立てず、歩けず、医者も治療の施しようがない、現代の奇病で、寝たきりになってしまったのだ。

「どうして、わたしだけがこうなるの。健康でありたいと、人一倍苦労していたのに」

はなくそまるめてマンキントン。昔から、いい加減な薬はあった。健康食品の半分以上が怪しいと、随分以前から問題になっていた。

世は健康ブーム花盛り。これほど食品と栄養に囲まれても、尚も栄養補助食品。明日、餓死する栄養失調の体でもあるまいし、これでもか、これでもかと、栄養を摂った犠牲者が元子だった。薬も用い方で毒になる。単品だけでは問題ないが、あれこれと混ぜて摂取すると、なんらかの副作用が起こるのかもしれない。

それを知っていた元子の亭主が火付け役だった。元子に勧め、なんでもやらせてきた。やがて病気になるのを知っていたように。

「はい、あなた、お味噌汁のお代わり」

「うん、美味しい。朝はやはり味噌汁に納豆、白い御飯に限る。おまえの作る朝食は格別だな」

「奥さんが入院したお陰で、こうして、二人で生活できるのね。あなたもあんな奥さん貰って苦労したわね」

元子の亭主は家に愛人を連れ込んで生活し始めた。元子はもう病院から出られない。

「ふつうでいいんだ。ふつうの食生活でな。おいしいものを食べて、新鮮な旬のものから栄養を摂る。それが一番」

これは計画的犯行だった。亭主はふつうの女を選んで、補助食品の妻を切ったのだ。

第216話 怒りの林檎

暗黒の木曜日が、突然兜町を覆った。朝から株は売り一色でじりじりと値を下げていた。アメリカのイラクとの戦争が予想外に早まったのに加え、大企業の粉飾決算が軒並み内部告発で露呈すると、投資家が嫌気をさした。日本でも企業の嘘やごまかし、不祥事があちこちで発覚するや、新聞は謝罪広告の特集号を出さなければ間に合わないほどになった。

木曜日、株価は一挙に九千円どころか八千円を割り込み、あっという間に七千円の前半まで暴落した。下げ幅は戦後最高で、かの昭和恐慌を彷彿とさせた。銀行の不良債権が含み損でますます増加する。倒産する銀行が増えると予測されると、朝から、銀行には預金者が押し掛けた。ペイオフもあって、預金をもっとも安全な現金に換えるか、金に交換するか、海外に移すかという人々で、ごった返していた。資金量が底をついた銀行から、どんどんシャッターを降ろした。人々は、この取付騒ぎで、閉鎖した銀行の裏口から、暴徒のように窓を壊したりして、乱入した。各地で暴動が起こっていた。大企業は続々と破産、失業者は街頭に溢れた。

林檎農園を経営していた高村耕太は、可処分所得が極端に減った消費者が真っ先に削った嗜好品、副食品の中に林檎も入っていたので、さっぱり出荷しても市場で買い手もつかない、値もつかないので、収穫した林檎を豚の飼料にした。農家としての収入がないから、出稼ぎに出なければならぬのだが、ハローワークでも、求人情報誌でも、出稼ぎの口は見あたらなかった。

無論、この北国の田舎では仕事は全くなかった。有効求人倍率が限りなくゼロに近い。商店、デパートはシャッターを降ろしたまま再開の目処が立たず、工場も閉鎖したまま。

まさか、ここまで深刻になるとは思いもしなかった。人々は収入の途が断たれたので、明日の米代にも事欠いた。当然、公共料金、税金も払えず、差し押さえ、電気は止められる。ガソリンも高騰してからは、車も動かない。山野に食べられるものを探してきて、昔のように木ぎれを拾ってきて雑穀を外で火を起こして炊いた。喰えるものはなんでも喰った。犬、猫の姿もいつのまにか消えていた。

耕太のところに関西訛の暴力団風の男がひょっこりとやってきた。玄関に上がりこんで、横を向いたままタバコをくゆらしている。耕太は、ひとり娘で小学三年の美佳によそ行きが一番いい服を着せて、云いきかせていた。

「あのおじちゃんの云うことばちゃんと聞くんだど、これから遠いところさ旅行に行くだ」奥の部屋では、母親が泣いて出てこない。耕太は男に頭を下げたお願いしていた。

「よろしく頼みます」

それで、男から幾ばくかの金を手渡された。耕太は見納めに美佳の体を抱きしめた。母親も奥から走り寄ってきて、泣かないように笑ってみせていた。

「大丈夫だよ、すぐ帰ってくるから、お土産買ってくるからね」

男に手を引かれて、ばいばいと手を振っている美佳。二人ともその場に泣き崩れてしまった。

「許してくれろ、美佳」

児童買春で、少女は高く売れた。

学校の先生が、休む児童が多いので、家庭訪問に来ていた。勉強より、野良仕事をどこの家庭でもさせていて、不登校が半分以上になった。生活のために子供の手も必要だ。

「あのう、美佳ちゃんは、どうしています」

泣いている二人に、何かあったなと思いながら、先生は恐る恐る訊いた。

「美佳は、売っただ」

「まあ」先生は声も出ない。クラスの子がこれで何人売られたのか。娘の身売りが、昭和初期の恐慌のときのように、東北の農村で頻繁に行われていた。生まれてくる子は育てられないと、間引きをしたり、川に投げ捨てられた。

国道四号線をリヤカーを引くもの、車の屋根に蒲団など家財を山積みにしてゆく家族、多くは両手に大きな風呂敷包みを持って、背中にはリュック、鍋ややかんなども腰にガラガラ下げて、持てる物はすべて持ち、歩いて国道を南下する家族が長い列を作っていた。延々と何十キロも続く、人と車の渋滞し、のろのろと道を埋め尽くして、みんな東京を目指していた。自動車賃も出ない貧しい人々の大移動だった。

「なあ、あんた、東京さ行けば、ほんとうに仕事があるんだべが」

耕太の女房が心配そうに訊いた。

「さあな、田舎よりはましかも知れねえ。ホームレスしても喰ってゆけるべさ。おめえは、まだ体売って稼げる。おらもなんでもやるつもりだ」

東京へ行けばなんとかなる。みんなそう信じて歩いていた。一日四十キロは歩ける。半月で東京に着くだろう。人々は荒れた畑から芋や野菜を取って食べていた。誰かのラジオがニュースを流

していた。

一北朝鮮との戦費を賄うために、政府は戦争国債の発行を決めました。自動車、ハイテク関連の会社はこぞって武器の製造に転向して、軍需景気で、関東方面の工場では久しぶりの明るい話題を提供しています。

空高く、ジェット戦闘機が数十機、北西の空に消えていった。

第217話 シカト

内田美土里、中学三年。クラスで虐めに遭っていたが、めげないで登校していた。一部のグループが虐めのリーダーとなって、問題を起こしていた。

その日、美土里は、体育館の体操マットが積んである用具室の隅に蹲っていたが、眠っていたようで、授業開始のベルの音で目が醒めた。

(わたし、どうしてこんなところで眠っていたんだろう)美土里には、そんなところで寝ていた記憶がまるでない。

(おかしい。まあ、いいか。それより授業に遅れる)美土里は廊下を風のように走った。廊下を走ると先生にみつかって怒鳴られるのだが、美土里はいつも爪先で走るのだ、すると、不思議と音がしない。授業に行く、先生たちと廊下ですれ違ったので、叱られるかと思い、走るのをやめて、緊張して歩いた。みんな、美土里に気づかないようにすれ違う。美土里はほっとして、二階の自分のクラスへ、後ろから入っていった。

(よしよし、まだ先生は来ていない)黒板の横の時間割を見ると、三時間目は英語だ。美土里の一番嫌いな時間だった。黒板に、九月五日と書いてある。

(あれれ、九月だって、おかしいな)美土里の時計は止まっていた。八時五分で止まっている。日付も七月十日となっていた。壊れたのかなと、美土里は腕時計を振ってみたが、なんの音もしない。電池が切れたのだ、後で、帰りにコンビニに寄って買ってゆこうと、思い直す。

自分の席に、あの虐めのグループの女子生徒が座っていた。つかつかと、美土里は、自分の席に行って、

「わたしの席よ、どいてよ」と、小声で云った。小声というのは、あとで仕返しが怖いから、勇気がないのだった。その子は、知らん振りして、教科書とノートを出している。

「どけなさいって、わたしの席じゃない!」美土里はとうとう、切れて、大声で叫んだ。

それでも女の子は無視して、知らん顔で隣りの子と笑いながら話している。

(そうだ、わたしの鞆がないわ。きっと、いじわるして、どこかへ隠したんだわ。探さなきゃ)

美土里は、やっきとなって、教室の後ろの棚や、扉の中を開けて探した。そんな、広い教室ではない。隠す場所なんかないのだ。

(そうだわ、教室の外はどこかに隠したのね。誰か隠すところを見ていなかったか、訊いてみよう)と、美土里は、仲のいい美奈代の席に行った。

「ねえ、美奈、わたしの鞆、知らない?」美奈代も、まるで美土里を見てはならないという掟があ

るように、シカトしていた。

(嘘お一、あれほど親友だった美奈代まで、あいつらの云い成りになったっていうわけ?)

「美奈一」と、美土里は、泣き出しそうな声を出して、美奈代の肩を振った。だが、堅い美奈代の肩はびくともしない。まるで石のようだった。意固地になって、美土里を拒絶しているようだった。

英語の先生が入ってきた。

「起立、礼」と、係の声がして、全員が着席した。美土里だけ、通路に立ったままだ。先生に注意される前にこっちから、云わなければと、美土里は勇気を出して、先生に云った。「先生、わたしの席がないんです。鞆も隠されました」確かに、しんと鎮まった教室に美土里の声だけが響いたのに、誰も振り向かない。先生まで無視している。

「酷い、クラス全員でわたしをシカトしている。先生まで...」

美土里は信じられない目をして、泣き出しそうになった。あんなに仲のいい友達まで、あいつらのグループになって、集団で虐める。寄ってたかって、暴力を振るってもらったほうがいい。一番陰湿で耐えられない虐めはシカトされることだ。叩いたり、死ねと云われたほうが、まだましだった。シカトされることは、人間として見ていないことだ。存在そのものを相手にしていないことだ。それ以上の仕打ちはない。

英語の女の先生は、立っている美土里にお構いなしで、授業を進めていた。

「はい、今日は、三十ページのリーダーからね。不思議の国のアリスの次のページから、福田さん、読んでください。いいというまでね」

すっかり美土里は蚊帳の外だった。

美土里は、顔を掌で押さえて、ふらふらと教室の後ろに云った。壁に席割表が貼ってあった。(ない、ないわ、わたしの名前がない。ひどい、ひどすぎる。クラス全員で、わたしの席まで奪ったんだ)

美土里は、教室をいま一度眺めてみた。全員が休みなく、授業を受けているのだ。空いている席はない。

(ということは、クラス全員でわたしを締め出したんだわ。ない、わたしの名前がどこにもない。みんなして、名前や、係りまで降ろして、わたしをいなくてもいいものとして、消したのね)美土里が、教室を冷静になって、眺めて、気がついたことは、当番にも自分の名前がないことだった。

(わたしの居場所は、もうこの学校にはないのね。たった数日だけ登校拒否しただけで、学校からも無視されるなんて)

落ち零れだけでなく、不登校など手に負えない生徒は、忙しい先生たちは切り捨てるよりなかった。かかりきりになっていれば、他の生徒の指導教育ができなくなる。それが、予算切り捨ての教育の現場にまで影響しているのだ。

美土里は、俯いたまま、そっと後ろのドアを開けて、教室を出た。みんなが一斉に後ろのドアを見た。そして、急に教室が賑やかになると、大きな笑いが起こった。

廊下に出た美土里は、自分がやはりみんなに笑いものにされていると思って、完全に打ちのめ

されていた。

(こんなことなら、学校へ出てこなければよかった。そうだ、一番信頼している先生がいたわ。保健室の先生だ。先生なら、わたしのことを判ってくれるわ)

美土里は、保健室に入っていった。

「先生、わたし、また来ました、みんなして、みんなして」と、美土里は安心感のために、どつと涙が溢れて泣いていた。保健室の先生は白衣を着たまま、別の生徒をベッドに寝かせていた。

「あら、風かしら、ドアが開いたわ。それにしても、今日も暑いわね」

先生は、窓をいっぱい開けて、グラウンドを眺めていた。

「先生」と、近寄っても、先生まで知らん顔。それには、さすがの美土里もショックを受けていた。

「ひどい、先生までが、わたしをシカトするなんて」

先生は何か、思いにふけっている様子で、独り言を云っていた。

「早いものね、三年の美土里さんが亡くなって、もう二ヶ月近く経つのね。あんないい子が電車に跳ねられるなんて、事故か自殺かいまも判らないの」

美土里は信じられないといった顔をひきつらせて立ち尽くしていた。

(わたしが死んだ。嘘よ。わたしが死んだなんて)

美土里は保健室の開けた窓に突進していった。すべてが終りだった。もう、居場所はどこにもないのだ。二階の窓から、美土里の体はするりと宙に浮いた。美土里の体は浮いたまま、落ちることはなかった。

第218話 悲 鳴

国会議事堂は古い建物だが、大型爆弾にも耐えられる設計で、堅牢であり、分厚い壁がなにか閉じこめられた歴史の冷たさを感じさせた。

代議士秘書をしていた榎洋輔は三十半ばで、大手広告代理店の企画から転身した。仕事からみて代議士の選挙戦略を請け負っていて、その技量を買われた。サラリーマンよりは幅広い舞台で活躍ができる。男としてやりがいのある仕事だと思った。国会が長引き、徹夜も続くと、秘書も寝ていられない。党内の派閥の駆け引きや、地方からの陳情、政策をレポートでまとめたり、ホームページを更新したりで、かなりハードな仕事を代議士控え室で、ノートパソコンとケイタイを駆使し、応対と連絡に追われ、いつも神経がびりびりしていた。

秘書はいつも甘い誘惑と、逆に苦情、脅迫まがいの応対に冷静に耐えなければならない過酷な仕事だった。食事は不定期で、少しの空いた時間を逃さないように、弁当で済ませた。眠気醒ましにコーヒーをやたら呑み、タバコばかり吸うから、胃薬も欠かせない。日々、くたくたで、ポロ雑巾のように酷使されて、精神的にも不安定になりがちだった。洋輔も医者から貰った、精神安定剤を飲み続けていた。耳の奥で金属を擦りあわせたような音がいつもキンキンと響いていた。

つい、椅子にもたれたまま仮眠していた。目が覚めると、時計は真夜中の三時前。

「ふう、寝ていたのか。ずっと休みなしだからな」と、栄養ドリンクを呑んで、また仕事に取りかかろうとした。すると、何かが、床下から聞こえてくるのだ。こんな、真夜中とはいえ、議事堂は深夜国会中で、廊下もマスコミや秘書たちが行き交い、慌ただしい雰囲気はあった。その床下の物音は、ざわざわと騒いでいる音に聞こえた。洋輔は、また気にもしないで、パソコンで議案を叩いていた。どうも、そのざわざわが耳について離れない。もともと気にしだしたら、いてもたってもいられない性格だったから、洋輔はついに立ち上がった。

「何なのだろう。あの音は」

議事堂は床も壁もそう薄いものではなく、隣の話しが聞こえるということはない。何か、沢山の群衆が国会へ押し掛けてきているような喧噪にも聞こえた。

「何かあったのかな」洋輔は、控え室から廊下に出た。すると、よりはっきりと聞こえてくる。いつも取材で顔馴染みの新聞記者と廊下ですれ違う。

「何か、外であったんですか。随分とざわめいているが」と、記者に訊くと、

「何も変わったことはないですよ。こんな夜中だから、ストもデモもありませんし」と、記者は首をかしげる。

「よう、海外視察が来週あるだろう。またやりますか、ゴルフ」と、スイングする格好をして、洋輔の肩を叩いたのは、同じ会派の代議士秘書で、洋輔とは昵懇の仲だった。

「おい、何か騒がしい声が聞こえないか」

洋輔が、しっと口を指で押さえて、相手に訊いた。

「いやあ、別に何も聞こえないぜ。はははは、疲れているんだよ。少し眠ったほうがいい」

洋輔は、自分だけに聞こえるのは幻聴だとでもいうのかと、頭を叩いた。神経質なたちで、安定剤は飲んでいるが、極度の疲労による神経衰弱までいっていない。まだ、自分はしっかりしている。と、洋輔は、その音が幻聴ではないと確信していた。ただ、どうして、自分にだけ聞こえて、人には聞こえないのか。

国会が休憩になり、代議士たちがぞろぞろと一斉に出てくる。洋輔の先生も議員室に帰ってきた。

「榎君、少しブランデーでもやらんかね」

洋輔は少し動揺しているので、様子がおかしいと思った代議士は、

「何をさっきから耳を澄ませているんだ」

「聞こえませんか、ほら、大勢の人間のざわめきのような声です」

代議士も耳に手をあてて、その床下の方向に聞き入ったが、

「君、何も聞こえんよ。寝不足で疲れているんだよ。少し、横になったらいい」

「そんな...」

洋輔はますます自分が狂っているのかと、なにもかも信じられなくなってきた。

議員室に、根回しのために幹事長と総理が入ってきた。

「何かあったんですか」

幹事長が、二人の異様な様子を見て訊いた。

「騒がしい声がずっと下から聞こえるんです」洋輔が云うと、

「何も聞こえないがな、耳鳴りではないのかな」と、総理も笑った。

「槇は徹夜続きでまいてるんですよ」と、代議士も笑い飛ばす。

「すみません、ちょっと、顔を洗ってきます」

洋輔は、トイレまで走った。トイレの中でもあの音が聞こえる。

「よし、確かめてやる」洋輔は、議事堂の階下へと、階段を下りていった。だんだんと音ははっきりと聞こえてくる。数人ではない、何千何万という数の人間たちのどよめきだ。まるで、国会を取り巻いて、叫んでいるようにも聞こえる。窓から外を眺めても、警備の警官以外、人影はない。周囲の庭は鎮まりかえていた。時計は三時半だ。まだ、永田町は眠っている。時折、タクシーが走るくらいで、車も少ない。ライトが走るのが見えた。洋輔は、普段、あまり降りてゆくことのない、議事堂の地下室まで降りていった。いよいよ、声は近くなってくる。

「やはり、聞こえるんだ。どうして、総理や先生方に聞こえないんだ」

地下の焼却炉や廃棄物置き場から聞こえてくるようだ。大きなマンホールの蓋があった。

「つきとめたぞ、ここだ、この下から聞こえてくるんだ」

洋輔はマンホールの分厚く、重い蓋を持ち上げた。下は下水溝になっているはずだ。すると、蓋を取るなり、はっきりとした人間の悲鳴が響いてきたではないか。

「わあー」洋輔は、深い穴の遙か下に、びっしりと無数の人間たちがひしめいているのを見た。

みんな恨みがましい目を洋輔に向けて、泣きわめき、悶え、絶叫していた。

「病院代がかかりすぎるんです」「助けてくれ。借金で身動きがとれない」「なんとかしてくれ、このままでは一家心中だ」「税金を下げてください」「不況をなんとかしてくれ」「政治家はみんな死ね」「生活費を、あしたの米代をください」

「...」

地の底から響いてくる、小さく低い国民の悲鳴が、洋輔だけには聞こえた。

第219話 通信地獄

さっきから電話が鳴る。ファックスが流れてくる。ケータイの着メロが鳴る。メールが来たこと、パソコンで教える。家中、騒々しい中で、三崎敏夫は、呆然とソファに座りこんでいた。

三崎家もご多聞に漏れず流行りのもの先取りで、すぐに飛び付く。中学の娘、高校の息子、妻まで、一家揃ってのモバイル家族。一家に一台ではなく、ひとり一台づつパソコンとケータイは持っている。いまはそれが常識だった。すべて、プライベートな世界なのだ。パソコンでどんな通信をしているのか、夫婦はお互いに知らない。まして、親子ではまったく何をしているのか判らない。それぞれが、それぞれの秘密の世界を持ってしまったのだ。

現代人の疎外感が、コミュニケーションを求めてうろたえている。モノに翻弄されてきた人間たちが最後に求めるのは人間の声だった。

「ねえ、パパ、いいでしょう。みんな持っているんだから。わたしだけ仲間外れにされてしまうもの」

中学の娘が、敏夫にケイタイを買ってとせがんでいる。

「中学生が、早いんじゃないのか」敏夫はあまりいい顔はしない。

「そんなことはないよ。前のように高くないし、家族割引だってあるし、第一、ほら、誘拐された女の子がケイタイで助かったってニュースにあったじゃない」

誘拐と聞いて、父親としては黙ってられない。しぶしぶ承諾した。

「但し、その、なんだ、プリペイドカードで支給するからな、毎月、三千円のカードだけ。節度をわきまえて使えよ」

それなら、使い過ぎることはない。基本料金もかからない。みんな玩具のように、面白がって使うから、上の息子のときは、クレジットの請求書が最初に四万円もきて、驚いて取り上げたことがあった。それで、小遣いを減らして、プリカを配給制にするといった、せこいやり方をすることとなった。ケイタイだけではない。パソコンの使い放題にそれぞれのプロバイダーの使用料、電話代と合計すると、ものすごい通信費となる。いまから十年前はそんなものなかったから、電話代だけで済んだものが、家計の半分が通信費という異常さ。どこの通信会社も莫大な利益で大きなビルが建つはずだ。

寂しい人間が増えた。対話を知らない人間が増えた。孤独が、直接ではなく、間接的なメールという通信手段にとびついた。相手の顔が見えないから、本音で話せる。爆発的に通信網が拡大していった。それに付けこみ、悪用する業者も増えた。三崎家だけではないだろうが、最新の通信機器で装備したハイテクの家も、次第に大変なことになってくる。

電話が鳴る。それは、昼とは限らない。真夜中でも早朝でも相手構わず鳴るのだ。プッシュホンになってから、ボタンの操作ミスで、間違い電話が多くなった。それが、タクシー会社や大病院など頻繁に電話のくるところと、番号がひとつ違いのため、被害者になっている家も多いだろう。

「うちは、違います。三崎です」「おかしいなあ、3393でしょう」「3394です」「本当に、3394なんですか」と、納得しない相手も長い。苛々する。

「特上の寿司五人前ね」「うちは、寿司屋じゃありません」「じゃ、何屋さんなんですか？」どうでもいいことにいちいち説明しなければならない。

耳の遠いお年寄りからの電話はもっと大変だ。

「ばあさんが死にそうなんじゃがな」「間違い電話ですよ、うちは病院じゃありません」「だからな、ばあさんがな、息しとらんで」「だから、うちはね」と、つい、声が大きくなる。

セールスもうるさい。ドアなら開けなければいいが、電話はどうしても出てしまう。先物取引、市中金融、家庭教師、靈感商法、挙げ句は子供の友達と嘘をついて、ケイタイの番号を聞く不審な電話。電話セールスは、アルバイトの女の子を歩合で雇って、自宅でもできるとかなんとか、かけやすいから、いくらでも同じ会社からかかってくる。一日に同じところから三回もかかるから、切れて、

「うるさい、何度同じことを云わせるんだ」声の主はきょとんとしている。みんな電話帳で勝手にかけてくるから、かけてくる女の子は違うのだ。そんな無駄をやっている。

そればかりではない、ファックスがすごい。人のロール紙だと思って、いくらでも流してくる。怪しい、マルチ商法まがいのものから、宗教団体、通販の価格表、うねうねと蛇のように長く出てきて、ひどいときは、一日でロールがなくなる。ファックスもそのたび、電話が鳴るから混同して、電話口に走ることになる。おちおちと、トイレにも入ってられない。天ぷら鍋なんか火にかけていようものなら、大変だ。風呂に入っている、いつ電話がかかってくるかと落ち着かない。毎日、そわそわして、電話が鳴ると、ドキリとする。脅迫されているようで、静かな生活も妨げられていた。

ワンギリで問題になった、ケータイも、家のもの四人全員が被害者となった。規制取締しても、業者はいくらでも雨後の竹の子のように出てきて暗躍するから、うるさいほどのメールが来る。「メル友になろ」と、どこのどいつか判らない相手からいつもケータイにメールが流れる。間違い電話はこちらにもかかる。怪しい無言電話はケータイも電話もだ。いたずら電話は、敏夫が出れば切れるが、娘や妻が出れば、Hな話しをしてくる変態野郎だ。まるで恨みでもあるような無言電話。相手がじっとしているが、いろんな雑音が聞こえてくる。どこかのスーパーの中からはらしいとか、テレビの音声聞こえたり、いずれにしてもきちがい、陰湿な閉じこもり野郎だろう。

家族みんなの電話が、本当にまともな相手からかかってくるのは十件に一件よりない。後はすべて不要のものばかり。ひとり一分おきにかかってくるようになった。寝ても起きても、時を選ばず、処選ばず、家の中でケータイの着メロの狂想曲だ。電話が鳴りファックスが流れる。全員、寝不足、神経症、電話恐怖症になり、請求書はどんどん高くなっていく。

「電気の省エネやりませんか」「掛け軸がお買い得で、限定品ですがね」「お子様の進路指導にお伺いしたいんですが」「娘さんの化粧品は」「奥様にはエステに興味はありませんか」「国際電話の請求ですが、ギリシャなんかかけたことがないんですが」「旦那さん、浮気していますよ」「ぼくとおつきあいしませんか」「電話アンケートにご協力ください」

「うるさい」

敏夫はとうとう真面切れた。家族全員、疲れ切って、憔悴しきっていた。ケータイを金槌でみんな砕いた。電話もぶっ壊した。パソコンも窓から地面に叩きつけて壊した。電話線はズタズタに切り刻んでやった。

「はあ、はあ、ざまあみろ」敏夫は息を切らせながら、怒りを鎮めたら実に爽快な気分になった。

「これで、やっと安眠できる」

第220話 憑き物

わたしが幼児の頃に、猫に取り憑かれたことがあった。七戸から来た、お守りが、勉強しながらわたしの面倒を見ていたので、泣くとうるさい。そこでまだ中学で、うちに住み込みでいる少女は、赤ん坊のわたしに、「天井に猫がいるよ」と、脅かしていたのだ。両親は商売で忙しく、店に出っぱなしだった。まだ一歳かそこらのわたしは、いつもびくびくとし、じっと天井ばかり見つめていたという。あまり大人しいので、変だなと思った母が、様子を見にきて、脅かしていたのをみつけた。お守りは里に即刻帰された。

わたしの神経質な性格は赤子の魂である。爾来、猫が嫌いというより怖いものになっていた。幼稚園のときに、親戚の叔母に連れられて見た、東宝の白黒映画「化け猫屋敷」もそれに拍車をかけることとなった。辺鄙な村の医者として古い武家屋敷に医院を開設しにきた一家が、江戸時代に斬り殺された女と猫の崇りに悩まされ、ついには村を出てゆくというストーリーまではっきりと覚えている。

わたしは、夢遊病もやった。寝ぼけているのではなく、夜中にむくりと起きて、歩き出すというのが小学五年まで続いた。そのときに、天井を指さしながら、震えて泣くのだという。本人は全く覚えていないから、信じがたいが、猫の格好までしてみせるという。後で、医学書を見ると、夜驚症というらしいが、小さな子供によく起こるといふ。

それを亡き祖母は、猫が取り憑いたと思った。明治二十二年生まれの祖父にわたしは可愛がられて育ったが、その祖父が、あまり悪さをする猫を南京袋に入れて海まで捨てに行っただの。我が家に住みついた捨て猫だったが、小さな食卓をひっくり返したことも覚えている。捨てに行くとき、わたしは祖父の自転車の後ろに乗っていた。よく、川や海に子猫が捨てられた。いまのような動物病院なんかないので、不妊手術もできない。どんなに沢山の犬猫が捨てられたり、始末されたか。

よく、家の前の川に箱の船に乗って、子猫が流れてきた。それを石を投げて沈没させる残酷な遊びを近所のガキとやっていた。そのとき、可哀想と思った子に猫の怨霊が取り憑くのだとよく云われた。我が家の居候猫が海に捨てられたとき、わたしは子供ながら可哀想にと思っていたと首を横に振り続けたが、どこかで可哀想だと思っていた。それで、自分に取り憑いたと暫く信じていた。

祖母は、いまでいう陰陽師を呼んできて、小さいわたしを仏壇の前に寝かせると、お祓いをして貰ったのを覚えている。何やら訳の分からない呪文を唱えながら、わたしの足から頭まで叩き、火打ち石と拍子木のようなもので、わたしの周囲を清めていた。それが終わると、煮干しと塩を懐紙にくるんで、前の川に捨ててくるようにと云われた。帰ってくると、今度は頭から塩をかけられた。わたしはさんざんなめに遭って、泣きそうになった。

それでも、その夜中の猫踊りはやめそうになかった。確か、小学五年の修学旅行の旅館でもやったと級友が先生に話していた。後日、うちの子供たちが、猫を三度飼ったことがあるが、三度とも猫に逃げられた。よほど相性が悪いとみえる。

テレビでいまはやりの陰陽師なるものが、悪霊に取り憑かれた女（何故かいつも女で男が出てこないのだが）から悪霊を退散させるというエクソシストごっこを大真面目にやっている。あれは、やらせでないとするれば、精神病の患者たちなのだ。それを娯楽番組に仕立て上げているテレビ局も程度が低い。

昔から、猫憑きや蛇、狐は聞くが、豚憑きとか、あひる憑きとかは聞かない。動物も陰険な感じの動物だけが、化け物扱いを受ける、これは差別だ。憑依した女を村人が寄ってたかってなぶり殺しにしたとか、袋に入れて殺したとかは、よく昔は聞かれた話だというのが、大概は精神病患者だったという。

その張本人のわたしが云うのだから間違いはない。実は、わたしも狂っているのである。長い間、普通の人間のように振る舞っていたが、ここで、告白しよう。

いつか、わたしの中に一匹の猫が住みついているのを発見した。いまも、パソコンで小説を打ちながら、両手の指は猫のような握りを作る。それだけではない。夜中、ひとりで鏡を覗くのが怖かったが、それは一瞬自分の顔が猫に見えるからだった。

わたしは、バターが大好きで、夜中にこっそりと起きて、冷蔵庫の前に座り、よくバターを掌につけて、ぺちゃぺちゃと舐めっていた。誰か、家人がそれを見つけたとき、わたしは振り向いて云う。

「見たな」と。

第221話 ペットロジー

わが家が次第に動物園化している。娘三人が小学校の友達からハムスターを貰ってきたのが始まりだった。ジャンガリアンだ、ゴールデンだとかいろんな種類をもらってきた。

「可愛いね、名前は付けたの」と、わたしが訊くと、幼稚園の末娘が、

「うん、コイズミ、ノナカ、イシハラというの」と、ハムスターを掌に載せて頼ずりしている。

「現実的というか、あまり可愛い名前じゃないね」

ハムちゃんのお家を買ってくるというので、ホームセンターに連れてゆく。いろいろ建て売り住宅のように並んでいる。その中で、トレーニングルームから滑り台、ベランダまでついた二階建を買った。わが家が平屋なのに、鼠ごときが豪華二階建とは許し難い。そんなのを三個も買うという。

「ひとつでいいだろう」と、云うと、

「ダメなの。喧嘩するから」と、贅沢にも広い家に一匹だけだ。鼠の世界が羨ましい。ハムちゃんのおやつに、寝藁、お散歩用の首輪と紐まで、いろいろと散財した。

それで済むわけがなかった。六年生の長女が、捨て猫を拾ってきた。

「ねえ、いいでしょう。雨に濡れたら風邪ひいて死んじゃうもの。家で飼ってもいいでしょう」あまりうるさいから、まあ猫の一匹ぐらいなら、と許可したが、ひとつ家に猫と鼠、いいのかな

。猫はペルシャの雑種らしく、毛色が悪くない。見るとメスなのだ。目の上に眉毛のように黒い毛、四つ目といって嫌われるから捨てられた。「ねえ、あなた、絶対に怒らない？ 怒らないって約束して」

と、今度はワイフだ。

「おいおい、何だよ、気持ち悪いやつだな。ははん、何か企んでいるな。怒らないから、云ってみろ」

「実はねえ、PTAの役員の奥さんから、子犬を貰ったの」と、隠していたのを出した。ラブラドルの生まれて三ヶ月という雌だった。「なんだ、また雌か。それでなくても我が家はメスだらけというのに。オスはおれひとりじゃないか」まあ、犬も可愛いものだと、容認することにした。

「その代わりに、みんな自分のペットは責任もって、世話をしろよ。糞の始末、お散歩、お風呂、巢の掃除、いいな、これ以上の仕事は増やすなよ」

わたしは、みんなにそう約束させた。そのうち、飽きて、こっちに世話係が回ってこないように釘を刺しておく。

「パパ、あのね、わたしね」と、二番目の小学三年の娘が甘えてくるときは、警戒が必要だ。わたしは、しっかりと両手で耳を塞いで、聞かないようにする。すると、娘も心得たもので、紙に書いて見せた。

一ともだちから、てのり分鳥をもらったの。科ってもいいでしょう。

「何、おまえまでか。けしからん。しかも、字が二カ所間違っている。分ではなく文鳥と書く。科ってもではなく、飼ってもだ」

お父さんは娘に頗る甘い。でれでれして、なんでも要求に負けてしまうのがいけない。

すると、最後に残ったのが、中学一年の長女。

「おやじ、みんながペット飼うから、おれも飼うからな」

「なんだなんだ、ブルータスおまえもか。それより、その言葉遣いなんとかしろよ。女の子だろう。おれはないぜよ。それより、おまえは、何を飼うんだ。えええ？」

「もう、買って来た、こいつだよ」

と、いきなり新聞読んでいるわたしの鼻先に大きい蛇がぶらさがった。ここには、とても書けない、文字では表現のできない悲鳴をそれからわたしは上げたのだ。椅子ごと後ろにぶっ倒れたくらいだ。

「あち、あっちへ持ってゆけ」言葉にならない狼狽えぶりだった。

「あら、可愛いでしょ。冬になったら、毛糸の服着せるんだ」

「ばか、蛇に長い服なんか着せるな」

というわけで、我が家は金魚から、ひかりベタから、熱帯魚、ハムスター、文鳥、兎、犬、猫、モモンガ、モルモット、蛇にイグアナとだんだんと私設動物園の様相を呈してきていた。いないのは、象とキリン、猛獣だけだ。

それだけで、終わりはしない。買ったり、貰ったりしたペットが、よそで不倫してきたり、巢の中でHするものだから、ハムスターはまさに鼠算式に、猫は一度に七匹と、あちこちで、そんな約束していないのに、大家族になってきた。巣箱が小さいと、大きなものを買ってくるから、

次第に家はペットたちに占領されてきた。夜中に鳴くもの、騒ぐもの、がさごそと夜行性で煩いものが、枕元にいる。箱の隙間に人間様が遠慮がちに寝ているのだ。

餌代もばかにならない。我が家の食費をだんぜん抜いた。世帯員の調査をしたことはないが、百匹ではきかないだろう。匂いもすごい、糞もあちこちへ。この前なんか、食卓の上に転がっていたのを甘納豆と間違っただけは食べた。

もう、勘弁ならぬ。

「いい加減にしろ。おまえら三人だけでも手に余るものを。何がペットだ」人間の生活が脅かされる。

「あら、お父さんは、やきもちやいてんのよ。自分だけが、ペット持っていないから。お父さんも何か飼ってみたら？」と、ワイフが誇らしげに云う。

「よし、判った。判ったぞ」わたしは、静かな生活がしたいのに、がちゃがちゃとした汚らしい生活に不満だらけだった。

ある日、夜遅く酔って帰宅した、わたしの前をワイフが鼻をヒクヒクさせて、嗅ぎ回る。

「何？ この香水の匂いは。それに、この首のキスマークはどうしたのよ」わたしは、ギョっとした。酒でごまかしてきたが、キスマークまでは気が付かなかった。

「あなた、応えなさい、浮気しているんでしょう」

ワイフはものすごい剣幕で迫ってくる。

「いや、はや、これは、ですね。おれも、ペットを飼っているんだ。ここじゃ飼えないから、外のマンションにな」

第222話 乞食株式会社

いまから三十年前までは、どこの街にも乞食がいた。高度成長とともに国民がある程度裕福になるに従い、乞食の姿も消えていった。ところが、この長引く不景気で、また各地に乞食が出没するようになった。東京では、乞食のテリトリーもあって、各デパートの地下食品売場の試食品を漁りに回るのだ。おかずばかりで、御飯がないのが残念だ。ビールの試飲まであるから、晩酌付きだった。

見た目は背広にネクタイの英国風乞食紳士もいた。元、会社の社長が零落して、乞食をしている。家々を回ると、セールスと間違われる。中には、立派な風采の来客と思って、応接間に通す。お茶と、ケーキまで出して、

「それで、ご要件は？」と、訊くと、

「いやあ、困りましたな。百円でもいいんですが、めぐんでくれませんかね。わしは乞食なんです」

元、大学教授の乞食や、元、芸能人の乞食など、乞食も多様化していた。駅のコンコースでごろんと寝ている乞食が読んでいる本が、「存在と無」だったりする。乞食の知的レベルも高ま

って、インテリ乞食も増えた。学歴社会で、豊かな国民が地に落ちたとき、悲喜交々の物語が始まる。

村田大二郎は、詐欺容疑で検挙されてから、自らの経営コンサルタントを廃業した。それで社会的信用がないので、復帰できずに妻子も出てゆき、ふてくさって乞食へと転落していった経緯を持っていた。公園のベンチで、ごろんと拾ってきた英字新聞を読んでいた。隣に寝転がっているのは、仲間の元銀行支店長。こちらも横領で捕まって首になった口だ。そして、もうひとりの疥癬を掻きむしる中年紳士は、中小企業の社長だったが、破産転落した。三人はいつも、ねぐらも一緒に、工事中断の現場で、下水管の中に古い蒲団を敷いて寝ていた。

「こんなにいい天気なのに、世間の人はいくせく働くか。乞食をやるまで、おれは空があんなに高く青いものだと知らなかった。眺める時間もなかったのだな。いまは、資金繰りの心配もいらないし、酒と胃薬の世話にもならない」

社長がのんびりと空を仰いで独り言のように云った。

「わたしもだ、毎日、数字が頭を掠めて、数字を並べる癖がようやく直った。いまは、道端の雑草の小さな花でも、気が付くようになったしな。いままで、上ばかり見て歩いてきたんだ」支店長もぼそりと云った。

「でも、このままでは退屈だしな、三人で、何かできそうだがな」コンサルタントの大二郎はまだ、何か策士として考えるところがあった。

「なんだ、まだ野心があるのか。もうみんな捨てたのじゃなかったのかい。この世に未練があるんだな」

「そうかもしれない。今度はきつとうまくゆく。いいアイデアがあるんだ。儲け話ではない。退屈凌ぎの遊びと思って聞いてくれ」

「何、乞食株式会社だって」

「乞食もバラバラに動くと効率が悪い。経営の原則に立ち帰るとだな、集約、分業、情報という行動の関連づけが必要だ。この辺でうろうろと残飯を探している連中を組織化するのだ。みんな社員にしてしまうのよ。われわれは社長には社長をしてもらう。支店長は財務部長、おれは企画部長でどうだ」

「で、何をやるんだ」

「実はな…」

さっそく行動開始した。三人は手分けして、街の乞食を集めた。川原に看板を立てていた。

一乞食株式会社設立準備説明会会場

設立趣意書をみんなに配布して、大二郎が説明した。

「いままで、毎日、食糧の不安定な獲得に苦慮していたみなさんも、もらいの少ないみなさんも、我が社に入社すれば、安定した分け前で安心して暮らせます」乞食の営業部では、互いにバツテングしないような、テリトリーを営業所ごとに決めて、一番効率のいい、人通りのいいところに座ることにする。服装の指導もした。元、劇団にいた男が、もっとも哀れに見える衣装を全員に着てもらうよう、穴の開け方まで工夫した制服を発表した。その制作には、元ファッションデザイナーの乞食も加わった。

「最近は、国際化で、外人も随分来ているから、英語、フランス語、韓国語はマスターしてもらいたい。はい、皆さんで声を揃えて、レフト・アンド・ライトジェントルマン、プリーズ・ギブ・ミー・サム・マネー」

語学指導は、元外国語学校の先生の乞食が担当した。

外商部は、乞食のセールスだから、訪問おもらいとなる。これは、大手チェーンストアの元店長が指導した。

「団地は効率がいいが、セールス慣れしているから、もらいは少ない。慌てる乞食は貰いが少ないのだ。狙うのはのんびりした田舎、郊外の農家だ。警戒心がなく、玄関に鍵もかけていないし、話好きが多い。玄関からではなく、縁側からさりげなく庭木の話で接近すべし。セールスは訪問数ではなく、お客の家の滞留時間がいかに長いかで決まるのだ」

徹底的指導と、マニュアルの成果で、みんな一流の乞食に教育された。どこに出しても恥ずかしくない。各地に支店、営業所まで事業は拡大していった。上がりは経費がかからない、すべて利益だ。云ってみれば、すべてが人件費なのだ。全国の乞食数十万人を組織化したら、東証一部上場しても退けをとらない立派な内容の会社になっていた。社長は豪語する。

「我が社は無借金経営であります。このノウハウで、海外進出も考えております。本当に三日やったらやめられませんか」と、左団扇。

ただ、乞食は乞食、本社はダンボールハウスだったし、営業所は土管の中だった。社是・社訓もあった。

- 一、風呂に入らなくても死なないと思うべし
- 一、乞食に埃を持つべし 誇りは捨てるべし
- 一、右も左も旦那様とへりくだるべし

この不景気にこそ、力強い会社だった。朝礼のあと、街角班と外商部が出動する。みんな乞食の旗を手に。

第223話 浮遊するものたち

何かがない。その「ない」何かを人々は探していた。何かがないことに気がついてもないので、ただうろついている人々が多かった中、足立義男だけは、その「ない」ものをつきとめようと、日々思案していた。

義男は、平凡なサラリーマンで、定年まではまだ五年ある。関西の大手証券会社に勤務していた。証券会社も、最近の株価の低迷で、客離れを起こしていて、全社員が、商いの好材料に乏しく、苦戦していた。それで、営業部は、やる気もなく、予定の数字も上げられないでいた。上司も部下も無力に陥り、何をしてもいいか判らない。仕事から逃げるものが多かった。トップが号令をかけても、空々しい非現実的な声にしか聞えない。社内には重い空気が漂って、澱んでいた。

昼に、社員食堂で、雑談もなく、みんな黙々と食事を摂っているのだが、笑っているものはひとりとしていない。テレビで、総理の支持率が下がっているのを放送していた。政権政党もそれ

は同じで、かといって、野党も一様に人材不足で、ひとつ穴の貉だ。経済もまた、何かが欠けている。どこも渋い状態で、青息吐息。笑いが止まらないほど利益を出している会社はあまりない。軒並み、ダウンしていた。政界も財界もリードしてゆくものがない。かつての銀行もリーダーとしては不甲斐ない。不良債権をなんとかしないと、やりくりがつかない。保険会社も格が下がり、いつ倒産するか判らない。電力や鉄鋼にも陰りがみえた。

いまは、残業するものもなく、そそくさと時間になれば社員は帰る。いても、することがない。じっと、会社にいなければならない時間が苦痛だった。夕方のオフィス街に吐き出されるサラリーマンはいずれも俯いて歩いていた。一様に、暗く悲しげな目を地面に落としながら、帰っても仕方のない家路へとともかくもついているかのようだった。

義男が帰宅しても、おかえりなさいの声があるわけではない。女房はパートに出ている、まだ帰っていない。大学の息子は留年して、なかなか卒業してくれない。家にいても、話もしない。何を考えているのか全く判らない。高校の娘も、外出、外泊が多く、ひとつ屋根に暮らしていても、顔も見ないで何日も暮らすことがある。以前は、あまり久し振りで家の中で顔を見たとき、化粧もしていたが、「どちらさんですか」と、挨拶したくらいだ。見ないあいだに子供も大きくなった。家庭は家庭で、みんなバラバラ。まとまって話す時間も団欒もない。何かが「ない」のだ。

夕食も義男はひとりでいつも摂る。冷蔵庫から冷たいできあいの惣菜を出して、電子レンジでチンする。それと、缶ビールを出してきて、テレビでニュースを見るときもなく、ちびりちびりとやっている。

義男は、ここ何日も、何かが「ない」ということを執拗に考えていた。それが何かが判らない。忘れたキーワードを思い出そうと、あれこれと思いを巡らせるが、人生のどこに忘れてきたものかその時間と場所も判らない。遡って、いつから、こんな気持ちになったのかと、三年前、五年前、十年前と色々な符丁を結び付け、そこから何かを見つけ出そうとして、頭の中はいつも悶えていた。そういえば、こんな気持ちは近所もだった。足立家だけの現象ではない。朝、近所と顔を合わせても、挨拶もしなくなった。みんなしょんぼりとして、元気がない。親しい人でも、無言で会釈するくらいのものだ。

義男はたまに、自分の酒や肴を近所のスーパーに買いにゆくが、そこも客足が落ちて、がらんとしている。商店街など、全滅に近い。というのも、駅前の大手デパートが閉鎖したから、客もどこに買物に行っていかが判らない。人通りはめっきりと減った。

義男はスーパーで、高校の同窓生と逢った。高校の教師をしている立原だ。

「よう、珍しいやん、こないなところで」と、声かけるが、本人はちらりと義男を上目使いで見ただけで、悪いことでもしているように、さっさと出ようとする。義男は、そこに何か「ない」ものの影を見たような気がした。それで、立原を追いかけた。

「待てよ、たまに逢うたのに冷たいやっちゃん、ちょっと、その辺で一杯ひっかけようや」立原は黙って頷いて、義男に引かれるように、駅近くのホルモン焼き屋の暖簾を潜った。どうせ、家に帰ってもひとりで呑むのも寂しいものだ。呑み屋も閑で、客がまばら、よくやっている。焼酎のお湯割りと、ホルモンを焼いてアテ(肴)にした。

「おまえ、いまは校長になったか」義男が鉄板の上で焦がさないようにホルモンを焼きながら訊

いた。

「いや、まだや、上がつかえとるで、教頭止まりですわ」

「そやな、団塊の世代やからな、どこぞの会社でも、云うてたわ、部長になれんから、副部長がその下に六人もいてて、石を投げれば副部長に当たるいうて」

「そういう、足立はどうなんや」

「わしかて、偉そうなことよう云わんわ。万年課長止まりでもう先が見えとる」
ぐびりともっきりを榊に受けて呑んだ。立原は寡黙だった。

「どや、先生稼業も最近は楽ではないんやろ」立原はぎくりと見られた顔をした。

「聞いてくれるか。わしの勤務しているのは、ランクの下の高校でな、授業なんか、まともに受けるもんが少ない。不良の溜まり場やがな。先生方も教育を真剣に考えるもんはおらん。校長も逃げ腰、生徒もバラバラや。父兄もどうでもええ家庭が多いから、問題さえ起こさねばとそればかりですわ」

「そうか、学校も会社も家庭もどこもみんな同じなんやな。その、何かが『ない』んや」「何かあっていうと」「何かは何かや」「具体的に云うたら」「それが判ったら苦労せんわ。わしは、もう何年もそのことを考えておる」「何かか」「そや、何かや」

「へえ、お待ち」と、別で頼んだ湯豆腐が、一丁まるごと削り節と刻みネギを載せて出てきた。それを義男はじっと凝視めていた。異常なくらい、視線を離さなかったから、立原が、
「何か変ですか、この豆腐」と、一緒になってじっと見る。

「そうか、これだ、わしが長年考えても判らなかつた、『ない』というものの正体がようやく判った。そうか、ないから、見へんから、判らへんやつた」

「なんですか」義男の実に晴れやかな顔を見て、立原も豆腐をまじまじと見ていた。

「昔の豆腐にはへそがあったんや、今の豆腐にはない」

エウレカを叫んで、すべての悩みが解決したような顔をしているから、立原は初めて笑った。

「そないなことで悩んでいました」

「そや、わしらの世界にはいまは中心がないんや、政治でも経済でも、家庭でも、求心力の働く、このへそがないんや。そやさかい、みんな浮遊しとるんやな」

「そうか、そんなことやったか、はははは」立原も何年ぶりかで愉快になって、腹を押さえて笑った。

「もういちど、臍のために乾杯や。豆腐の出べそのために」

その夜、二人は快気祝いをするようにぐでんぐでんに酔っ払って帰った。

第224話 寝たきり家族

しんと静まり返っている家というのも珍しい。まるで、人が住んでいないような家に、家族六

人が寝ていた。老夫婦にその息子夫婦、中学の女の子に小学の男の子の六人三世代が、暮らしていた。ばあさんは寝たきりだった。それを介護しているじいさんも、歩行困難になっていた。この家の主人の矢川健作も半年前に会社のリストラに遭って目下無職。その妻の君江は、パートに出ていた工場が倒産、給与も未払いのまま、三ヶ月、仕事がない。その子供二人も不登校で、部屋に閉じこもっている。すでに、家はローンが滞納していて、差し押さえにあっている。預貯金は使い果たし、借金だけがサラ金に残っていた。電話もガスも水道も電気も止められたまま久しい。テレビもラジオもないから家の中は静かだった。

寒くなっても灯油も買えないから、みんな蒲団に入っていた。家の中はがらんとして殺風景なのは、家具や電気器具をみんなリサイクルセンターに売って、食費にしてしまった。あっても電気が使えないから、同じこと。この家にはもう米の一粒も残ってはいなかった。「それにしても腹が減ったなあ。もう、ふらふらして、立つこともできない」

健作が云うと、云うのも面倒くさいように、君江が応えた。

「あんた、生きていたの。奥の部屋のじいさんたちは、息をしているのかしら」

「うおっほん」と、じいさんの咳払いがした。

「なんとか、持ちこたえているようだね」

「もう何日御飯食べていないのだろうね」

「それより、今日は何日の何曜日で何時なんだろう」

時計も売ったから、時間も判らない。前は、借金の取り立てもうるさく来たが、みんな留守だと思って諦めたらしい。学校の先生も家庭訪問しなくなった。学校の諸経費から給食費も払えない。

「だいぶ、トイレも匂ってきたな」水洗も止められたから、糞尿は溢れていた。最近、飯を食べていないので、出るものも出ない。水だけは雨水なんか溜めて飲んでいた。

「あの子たちも二階で、なにしているのかしら。生きてるといいわね」

みんな、立って歩けないほど衰弱しているから、様子も見に行けない。

「あんまり、喋るのはやめよう。喋るのも疲れる。できるだけ、カロリーを消耗しないことだ」

「そうね、こうしてじっとしているのが、一番体力を使わないものね。わたしたち、このまま、ここで餓死するのかしら」

社会保険もない、国保は取り上げられた。病気になっても病院にも行けない。薬を買う金もない。蒲団を抜け出すのは、たまにトイレへずるずると這って行くときだけだ。年寄たちは、垂れ流しだった。誰も介護ができない。

「まんじゅう食いたい」

突然、死んだと思ったばあさんが、寝言のように云った。

「まだ、生きている。そんな、まんじゅうなどと、思い出させないでくれ」

二階でもがたがたと音がするから、子供たちも、なんとか餓死しないでいてくれた。人間は結構強かだった。死にそうでなかなか死なないものだ。

一日中寝ているから、何時間眠っているのか判らない。初めは、食べ物の夢ばかり見ていたが、最近は夢にも出てこない。玄関のインターホンももう鳴らないし、ドアにはサラ金の督促状がびっしりと挟んでいた。差し押さえの紙まで貼ってあったから、中には誰も住んでいないと、

近所も思っている。電気のメーターも動かないから、訪ねてきた者は、みんな不在と思う。

「わたしたち、このまま、白骨死体で発見されるのよね」

君江は情けないことを云っていた。長引く不況で、こんな家庭は珍しくなくなっていた。家も売れない。仕事もない。誰も助けてくれない。飼っていた金魚も、ハムスターも食べてしまった。一日、三食が二食になり、一食になり、二日に一食とだんだん口に入らなくなったのだ。近所の手前、まさか家族で乞食もできない。ホームレスをするくらいなら、死んだほうがましだ。一家心中も考えたが、とても死ぬ勇気はなかった。結局のところ、することがないから、寝ているよりなかった。

「矢川さん、お留守ですか」と、ドアを叩く音がする。

「おや、珍しい、人が来るなんて、何週間ぶりだろう」

誰か判らないが、返事をする声も出ない。

「内鍵をにかけているな。カーテンも閉っている。本当に無人なのかな」

数人の男の話声がしている。

やがて、鍵が専門家の手によって開けられた。ドアが開いた。一月ぶりに開いた。

「なんだ、この異臭は。中に何も家財がないではないか」

ドヤドヤと数人が部屋に上がりこんでくる。裁判所の執行官だった。奥の部屋まで入ってきた。蒲団に寝ている家族を発見して、一瞬、ひるんだ。

「なんだ、死んでいるのか」

全員、逃げるように家から出ていった。それからまもなく救急車とパトカーがやってきた。

翌日の新聞は書きたてた。

一先進国日本、福祉国家も地に落ちる。餓死寸前の一家救出される。全国でもこうした不幸な家族が、白骨死体で次々に発見されている。こうした異常事態にもかかわらず、政府はなおも消費税、医療費値上げを実施してきた。このような餓死寸前の家庭は、全国で三百万世帯あると試算して...

まだまだ文明国ゆえの悲劇は終りそうもない。

第225話 エクササイズ

若さは苦しさをちょっとハスに構えてみせる。何をしても無駄なことはないが、勿体ない時間を無駄に浪費することはできる。

東北の大企業の四人の娘息子たちが、東京へ就職で出ていたとき、父親の経営する会社が倒産した。それまで、仕送りまでしてもらい、親を当てにしていた四人は、破産の意味も判らないボンボンだった。産まれたときから裕福な家庭に育って、苦労知らず、我が儘、浪費、贅沢三昧と現代っ子と揃っている彼らが、この不況の都会へ投げ出された。

長女は、音大を出たが、就職はなかった。ようやくツテ、コネ、親の七光りで、テレビ局に入

ったものの、退屈だからとふいと辞めてしまった。面白くなければ仕事ではなかった。辛く耐えることに弱い。我慢するとか、辛抱することができないで、人間関係の複雑さにすぐに投げ出したくなる。フリーターをしながら、あっという間に三十二歳になっていたが、理想が高いから、彼氏もできないでいた。かといって、キャリア組でもなく、仕事でも恋でも目的もなく、ただ、都会の波に揺られているのだった。

夜にクラブへピアノを弾きにいった、なんとかマンションの家賃を払っていたが、それでは喰えない。

「あのね、お母さん、ピンチなのよ。なんとか当面の生活費仕送りしてよ。とりあえず百万くらいね」

そんな電話を実家にしていた。実家では破産で立ち退きを迫られ、それどころではない。預貯金一切が差し押さえにあったというのに、親の心子知らずどころか、常識がなさすぎる。

長男は頭が頗るよく、最高学府どころか大学院まで卒業していたが、頭がいいだけで、人付き合いがへただった。いまでいうオタッキーだったので、就職試験では合格だが、面接で落ちる。いまの会社は頭の上より、人間性と性格を重視している。それで、人も羨む大学を出ていても、三流の会社に就職していた。ただ、そこも人間関係が思わしくなく、辞めると、さらにその下のランクの会社へ安月給なのだが、なんとか入り込む。会社の跡取りと期待されていたが、いまは帰るところがなくなった。

次男はやはり頭はよかったが要領が悪い。大学を卒業すると就職先が間違った。完全歩合制の先物取引のセールスを高給に惹かれて入社したが、この景気の悪いとき、デフレで物価も下がって、先が見えないときに、ぽんと金を出すものは減った。上にはノルマ達成していないと、ヤクザのようにすごまれて、逃げるように辞めた。それからは、プータロをしていたが、バイトくらいではアパートの家賃も払えず、荷物を倉庫に預けて自分はカプセルホテルに泊まっていた。よく、考えるとカプセルホテルの方が、高くつくのだが、いまいまのまとまった持ち金がないので、刹那的に物事を考える若者特有の浅はかさがあった。

最後に控えし次女は、大学を卒業はしたものの、花の女子大生も就職がなく、高望みするから余計になく、モラトリアムをして、また専門学校に入り直す。資格を取って出直すというのだが、授業料、入学金は大学よりも高いときている。まだ、社会人ではないので、仕送りしなければならないのに、実家は明日食べる米代もないのだ。

「お母さん、授業料、滞納しているでしょう。今日、手紙がきて、退学させられるのよ。わたしに恥をかかせないでね」と、まるで実状を理解していない。自己チューもいいところだ。アルバイトもしないで、まだべったりと臍齧りをしていた。

四人が四人ともそうだから、親の苦労は大変だが、育て方にも問題があるから、どっこいどっこいだ。

世の中の生活水準が下がっても、人間の意識は下がらないから、いろんなところで喜劇が持ち上がっている。

みんな人一倍依頼心が強い。他力本願でやってきた甘ちゃんばかりだから、ないものがないとなると、短絡的に「借りればいいじゃん」と、サラ金、カードローンに簡単に手を出した。今日一

日のことより考えない。キリスト様も仰言った。明日のことは思い煩うな。いまが腹いっぱいであればそれでいい。明日は明日の風が吹くと、無計画が祟り、サラ金の残高が返済不能まで増えた。督促状がきても、催促の電話がきても、他人事のようにけろりとしている。

長女は、壊れたピアノの墓場に壊れた自動人形のように捨てられていた。スプリングが外れている。涙も出ないほど、からりとしてスクラップの中で逆さになっていた。

長男は、ちょっと注意されたのが面白くなく、ふいと会社を辞めた。もう働く意欲がなくなった。貯金もないのですってんで、ともかく古里へ帰ろうと、ヒッチハイクをしていたが、一台も車は止まらない。世間は冷たいという勉強だ。次男は、カプセルホテルに泊まる金も底をつき、ダンボールマンションに引っ越した。公園のベンチでは寒かった。いつもなんとかかなると安易に考えていたが、誰も何もしてくれない。秋風が肌身に沁みた。

次女は、専門学校を出されてから、傷心のまま街をうろついていた。アパート代も溜めている。家主から最後通告が来ていた。どうして、わたしだけこんな目に遭うのよと、泣きそうだった。考え事しながら歩いて、交差点で躓いて倒れた。誰か、手を差し伸べて助け起こしてくれないかなと、倒れたままでいると、通行人が次女の上を踏みつけてゆく。

不況はすべての人間の勉強だった。

第226話 自立神経失調症

失業率が6パーセント近いというのは、あれは表向きのこと。本当はすでに10パーセントを越えていた。家事手伝いの女子大出も、仕方なく家業の手伝いをしているものも、日雇いのように、仕事があったりなかったりするものも、全く働く気がないものも、潜在失業者なのだ。いい仕事があれば、みんな就職したいのだが、ただ、ぶらぶらしている若者が増えた。初めはハローワークに足しげく通っていたものが、全くいい仕事がないとなると、次第に足が向かなくなる。新聞や、アルバイト情報誌も毎週買ってきて、目を通していたものが、それもしなくなる。学校を卒業して、年数が経てばたつほど、就職に対する意欲がなくなり、かといって、アルバイトをするでもなく、家でプレステをやって一日中、飽きもせず遊んでいたり、パチンコばかりすることが多くなった。

北田充弘も、現役での就職の機会を逃して、就職浪人三年生だ。だんだんと、大学受験の浪人と違い、不利になってくる。どこでも採用しないから、本人に問題があると、どこの会社も考える。まして、親元で、いい若いものが、仕事もしないで、ぶらぶらしているから、いい目で見ない。体を動かすことがなく、朝から夜まで間食して、ゲームをやったり、スカパーを見たりしているから、ぶくぶくと肥ってきた。体重は七十あったのが、三年で百二十キロになった。当然、ますます狭き門の就職戦線ではお呼びではない。

そんな充弘を見ていて、両親は心配していた。いつも、口煩く、就職のことを云うのだが、本人が嫌がって暴れたこともあって、いまは、そのことはタブーになっていた。本人のいいように

させている親もどうしようもない。ひとり息子だから甘やかせて育てた。

充弘に異変が起きたのは、三年目の秋だった。大学を出て、もう二十五歳だった。それは、いつもの夕食のときに起こった。充弘は、丼で三杯はたいらげる。おかずも大皿に山盛でなければならぬ。おかしいなと気づいたのは、母親だった。充弘は箸を使わないで手で直に食べ物を掴んでいた。

「何を汚いことしているんだ。冗談はやめて、箸で食べなさい」と、父親が注意するが、一向にやめようとしぬ。食べ物を口の周りやテーブルに散らかして、行儀が悪い。

「ふざけないで、ちゃんと箸を使いなさい」と、箸を渡すが、指からぽろりと箸が落ちて、使い方を知らないようだ。涎まで、だらだらと垂らしている。父親が叱って、睨めると、充弘は、急に泣きべそをかいた。いやいやをして、箸を投げた。

「もういい、いい加減にしろ。食べなくてよろしい」と、父親が爆発寸前で震えていた。充弘は、椅子から降りると、ダイニングルームの床を這いはじめた。

演技だと思って、笑っていた母親も青くなってきた。父親も異常に気がついた。これはただ事ではない。充弘は部屋の隅にあった缶詰を積み木のように積んで遊んでいた。

「充弘、大丈夫か」父親がしゃがんで顔を覗き込む。充弘はじっと、父親の顔を見詰めていたが、いきなり頬をひねった。「いててて」と、父親が顔を歪めると、

「キャー、キャー」と、充弘は喜ぶのだった。

「充弘、しっかりして、お母さんよ、判る」母親も充弘の体を正気に戻そうと揺すったりしていた。

「ばぶばぶ」と、すっかり赤ん坊に還ったようだ。

「ちっち」と、云ったかと思うと、「しーっ、しーっ」と自分で云いながら、ズボンから床が小便で濡れてきていた。ここまですると、何か狂っている。

両親は、翌日、立って歩けなくなった巨体の充弘を台車に乗せ、なんとか車に乗せると、総合病院へと連れていった。精神神経科の医者に充弘を見てもらった。医師は充弘の様子を暫く観察していたが、

「間違いなく今流行の自立神経失調症ですな」と、カルテになにやら書き込んだ。

「自律神経失調症ですか」

「いや、自律ではなく自立です。立つと書きます。心理学では、退行現象と云いましたが、それは幼児の段階で見られるものが、若者に起こっているのです」

「治るんでしょうか」不安そうに両親は訊いた。

「いまのところ、これといって治療法はありません。潜在的な意識が、何もしなくてもいい赤ん坊でいようとして、運動神経にまで及ぶのです。モラトリアムとか、ピーターパンとか、青い鳥とか、一時騒がれましたが、それが過度に起こるとこうなります。特に、甘やかせて育てた子供や、わがままに育てた裕福な家庭に多く見られる奇病ですな」

大学まで出したのに、このまま、就職して、社会人となり、結婚して子供が出来て、所帯を持つ過程が、狂ってしまい、両親はこれから、孫の面倒でもみながら老後を送ろうという人生設計がとんでもないことになった。父親は定年退職まであと少しというときに、また子育てに逆戻り

二人は、デパートのベビーコーナーに行った。

「あのう、すみません。おしゃぶりと、パンパースと、赤ちゃん用のスポンなんかありますか。それと涎かけもありましたら」

「あら、お孫さんのですか」と、店員に云われて、どっと落ち込んだ。

乳母車の特大も、そんな若者のために売っていた。玩具売場では、ガラガラや幼児玩具も買った。すでに、そんな病人のための特別コーナーも設置されてあるのに、二人とも驚いていた。全国的にこんな奇病に罹った若者が増え続けているという。

日曜日は秋晴れのすがすがしい日和だった。両親は充弘を乳母車に乗せて、近くの公園まで散歩に出かけた。そんな巨大乳母車が、あちこちで見かけるから恥ずかしいこともない。

「おや、北田さん、お宅の充弘ちゃん、相変わらず大きいですな。いないいないばあ」やはり、近所でこの奇病に罹った三十の娘を乳母車に乗せた老夫婦と出会った。充弘は、いないいないをされて、突然、ギャーと泣き出した。

「いやあ、泣かせてしまいましたな」

「いいんですよ、今日のご機嫌が悪くて」母親が充弘をあやすと、充弘は怖がるような顔で、母親に抱かされてきた。乳母車は倒れて、母親は百二十キロの巨体の下敷きとなった。さあ、大変だ。

「誰か、救急車、救急車を呼んでくれ」父親が慌てて、充弘を抱き起こそうとしたが、重くて起こせない。充弘は、「ぐすんぐすん」としゃくりあげながら、母親に甘えてのしかかる。公園の中はそんな異様な光景があちこちで見られた。大変な時代になったものだ。

第227話 正義と支配

孝太郎は、橋本小学校六年一組のクラス委員長だった。正義感の強い子で、みんなのリーダーシップをとっていた。というのも、PTAの会長の息子で、先生方もペコペコしている。しかも、父親は県議会議員をしている地元の大会社の社長でもあった。孝太郎の父親の会社に親が働く子も多い。孝太郎はいつも、子分のように取り巻きを従えて、廊下を歩いていた。

孝太郎のクラスには田舎から転校してきた賢治がいた。出稼ぎの母親についてきたもので、母子家庭の暗い子供だった。着ている服も貧しく、顔はコビだらけで汚らしかった。東北の田舎から来たので、言葉も違う。何を云っているか判らないので、賢治が話すとみんな笑った。

孝太郎は小学生で唯一、ケイタイを持っているのをみんなに自慢していた。本当は学校に持ってきてはいけないことになっているのだが、先生も孝太郎だけは特別扱いをしている。

「これは、昨日、新しく買い換えたんだ。ビデオメールも送れるんだぜ。ネットで、いろいろショッピングしているし、ほら、ポルノも見れる」

いつも、孝太郎の持ち物にクラスのみんなが集まって、話題の中心になっていた。ただ、ひとり

だけ、無関心なやつがいる。賢治だった。ひとりぼつんと、みんなから離れて座っていた。

その賢治がポケットからケイタイらしいものを出していじくっていたのを、クラスの男の子が見た。

「おい、あの子、ケイタイみたいなのを持っていたぞ」

ひそひそとその噂が学年中に拡がった。当然、孝太郎の耳にも届いた。自分だけが持っているから自慢できるのに、よりによって、あんな貧乏人の賢治が持っているとなると名折れだった。

「本当か、あんなやつが持てるわけがないだろう。よし、ぼくが調べてやる」

孝太郎はクラスの警察でもあった。自分のすることは正義で、クラスの規範で、法律でもあった。誰もその権力に逆らえない。それどころか恩恵を受けているものが多いから、反抗するものはいないのだ。

「ねえ、君、ケイタイを持っているんじゃないだろうね」

つかつかと、賢治の前に行って、孝太郎はスバリと訊いた。

「おら、そつたらもの、持ってねえ」賢治はぼそぼそと弁明した。

「ケイタイは学校に持ってきてはいけないことになっているんだよ。それに、君みたいな田舎者が持つには十年早いんだよ」

みんなゲタゲタ笑った。

「持ってきてはまいねもの、なんでおめは持ってるだ」賢治には解せない。

「なんと、貧乏人が生意気にも口応えするなんて。教えてやろうか。警官はピストルを持っているだろう。ふつうの人は持てないだろう。それと同じで、ぼくはこの学校の支配者なんだよ。特別に持ってもいいことになっているんだ。判ったかい」

賢治はまだ首を傾げている。同じ人間なのに、どうして、持ってもいい人と持ったら駄目な人がいるのか。

孝太郎は、このことについて、ホームルームで先生を交えて、問題提起した。「賢治くんが、ケイタイを持っているか、クラスみんなの一致した意見で、ササツしたいのですが」

「ササツってなんですか」

と、女の子が手を挙げた。

「みんなで、賢治くんの持ち物を調べることです。ケイタイを隠し持っていないかどうか」

「賛成」「異議なし」多数決で可決した。

「それでは、これから賢治くんの鞆の中やポケットの中を調べよう」

数人の児童が賢治を取り囲んだ。賢治は体を強ばらせて、俯いていた。

「まいね、これは、おらが、家の手伝いば、一月やって、母ちゃんから貰った小遣いの百円で買ったんだよう」

「出せ、出せつたら」

とうとう、喧嘩になった。先生が仲裁に入るまで、賢治はみんなに寄ってたかって叩かれ、こづかれた。賢治の持っていたケイタイが、床に落ちた。誰かが、それを踏みつけた。

「なんだ、これって、百円で売っている、使えないやつじゃないか」

散々、賢治を袋叩きにして、使用不能のケイタイも壊して、賢治はひとり泣いていた。

先生が壇上で静かに云った。

「みんなのしたことは正義だったと思いますか。いま、力づくで、暴力で、賢治くんを問いつめましたね。どうして話し合いで解決しようとしなかったのですか」「だって、アメリカもしているよ」

「そうだよ、アメリカはいつも正しいんだよ」

「悪いのはイスラムだよ」

「テレビでそう云っているもの」

「そうだ、そうだ」

先生は考え込んでしまった。力の論理、大きさの論理、それが子供達の中のルールになっている。

「それなら、正義ってなんだろう」

先生はみんなに考えてもらいたいこととして、提起した。

「はい、それは敵を殺すことです」

孝太郎は平然と手を挙げて応えた。

第228話 軽老の日

「おじいさん、何時まで寝ているの。起きて頂戴。今日は何の日だと思っているの。日曜日だけど、軽老の日なのよ」

柴田家では、今年御年八十になるじいさんを嫁が叩き起こしていた。じいさんは、もっと寝たいのだが、しぶしぶ起き出した。

「さあ、廊下とトイレとお風呂の掃除して頂戴。それが終わると庭の草むしりね」
今日だけは老人をこきつかってもいい日なのだ。年寄りには、あまり大事にしすぎると、老け込む。適当に頼りにし、仕事を与えた方が、体とボケ防止のためにはいい。生き甲斐にもなる。政府では、寝たきり老人を作らないためにも、その日を設けたのだった。寝てばかりいるから、寝たきりになるのだ。そういう習慣をつけさせないためにも、起きて働いてもらう。

独り暮らしの老人の家には、隣近所の人が、仕事を頼みにくる。

「すみません、うちの塀にニスを塗ってくれないかしら」

「おじいちゃん、うちの生け垣の刈り込み頼むわ」

「ちょっと夫婦で映画見えますから、うちの赤ちゃん預かってくれないかしら」

そうして、老人たちは、この日だけは甘やかさない。

電車の中でも、杖をついて、よちゃよちゃと歩いているばあさんが、シルバーシートに座ったら、他の立っている乗客から、注意された。

「ばあさんよ、今日は年寄りは立っていなくちゃなんねえのよ。われわれ若いもんが、シルバーシートには座れるのよ」

と、ばあさんは立たされた。年寄り優先の社会が一日だけ、逆転する。年寄りを大事にしようという標語が、今日だけは年寄りを粗末にしていい。

この考えは、これから来るべく高齢化社会に備え、おんぶにだっこの年寄りばかりがうじゃうじゃという社会では、社会そのものが持たないということに危惧し、年寄りにも自立を訴える日でもあった。

だから、この日は、孫が老人たちに肩を揉んでもらう日でもある。柴田家でも、じいさんがはりきって孫の肩こりを揉んでいた。

「最近の子供たちは、その、なんだな、年寄りくさくなってな」

お灸をしたり、エレキバンを貼ったり、ババシャツを着たり、ばばくさくなってはいた。

隣のばあさんは、嫁が昼寝している間、一生懸命、昔の手料理の仕込みをしていた。やればできるのに、台所に女二人はいらないと、さっさと隠居してからは、口出しもしない。ばあさんは、何年ぶりかで庖丁を握っていた。

「さてと」と、冷蔵庫を開けるが、見慣れない外国の野菜に、どうして使うのか判らない加工食品ばかり。香辛料もやたらあって、それもどうして使うのか判らない。仕方なく近所のスーパーへ買い出し。

見ると、スーパーはじいさん、ばあさんばかりだ。レジを打っているのもばあさんだ。

「あら、向井のとしさんじゃないの。そのエプロン、花柄で可愛いこと」

「そういう、上野のタミさんかい。かっぼうぎがなくての。今夜の献立、何を作ろうかのう」
そこで初めて嫁の苦労も判る。田舎料理しか知らない。煮しめだとか、和え物、魚のあら汁。

それが、夕食で孫たちに結構受けた。息子も嫁も、昔懐かしいおふくろの味だ。みんな舌鼓を打って、

「これじゃ、毎日ばあさんにやってもらおうかい」と、主導権を渡す動きもあった。

柴田のじいさんも、足腰が立たなくなるほど、稼いだ。

「ほう、汗をかいたのも何年ぶりかの」

普段できないことを年寄りに頼み、やってもらって大助かりだ。

「おじいちゃんのお陰で、助かったわ」

みんなから有難がられる。感謝されて悪い気はしない。普段、邪魔扱いされている年寄りたちも、昔とった杵柄で、若いものには負けない腕もある。年寄りだって、社会の役にたつこともある。まだまだ現役で働けるといふ自身もついた。

ただ、翌日からの新聞の死亡広告欄は、数ページに渡って、普段の何倍もの広告が出ていた。やはり、老人たちには無理が祟ったのか、ぽっくり死んだり、一日で一月分は逝っていた。

政府の高官たちは、軽老の日の成果を集計していた。

「課長、前年対比で二割増しで逝去が確認されました」

「そうか、これで、年金と、医療費などの福祉に関する予算が削減できるな」

「来年は、もう一日増やしましょうか」

「うん、それもいい考えだ」

祭日はまつりごとの日、すべて策略ですすめられていたことを、国民は知らない。

第229話 サディスティク歯医者

わたしは、歯医者が一番嫌いだった。よく、歯医者に通っているという人の話を聞くだけで、その人の勇気を称え、尊敬の眼差しで見ってしまう。

元々、歯が弱く、大事に手入れもしていないので、幼少の頃から歯医者との付き合いは長い。いろんな病院に通ったが、通院する年数では、歯医者ほど長いものはない。一回行くと、最低半年は通うから、トータルでは人生の一割以上は歯医者通いをすることになる。痛くなっても、我慢して、歯医者に行きたがらないのだが、だんだん歯茎が腫れてきて、どうしようもなくなる。この前なんか、前歯の差し歯が、くしゃみをした弾みで飛んだ。それを瞬間接着剤でつけたのがいけなかった。付け方が悪く、斜めに付けたものだから、出っ歯になってしまったのだ。鏡を見ると青くなった。強い接着剤らしく、おいそれと取れない。さあ、大変なことになった。

家に帰るとみんな大笑い。仕方なく、当分、マスクをしてごまかそうとした。だが、いつまでもそうしてはいられないので、歯医者に覚悟して行かなければならない。

「いつ、歯医者に行くのよ」と、女房は面白がって、マスクをとって覗く。

「うん、今日も下見に行ってきたのだが、どこの歯医者がいいものかな」実際、わたしは、歯医者の前まで行ったのだが、口を押さえて顔を歪めた患者が出てきたのと、すれ違っただけで、引き替えしてきた。

「明日もまた下見に行ってください」と、そんな情けないことを云うから、女房は優しく云った。

「わたしが連れて行ってあげましょうか」

よせやい、大の男が女房に連れられて歯医者に行くなぞ、世間体も悪い。いろんな人の意見を聞いて、わたしは翌日、うまいと評判の「荒良治歯科クリニック」へと、覚悟を決めて入っていた。心臓はダクダク、額には汗、震えまでくる。

待合室で読む週刊誌も、字面が追えないでいた。何人か初診の患者が待っていた。奥の治療室で、絞め殺されるような患者の絶叫が聞えた。それを聞いて、待っていた客の半数が逃げ帰った。わたしも腰を浮かせて、逃げようとした矢先、

「喜多村さん、どうぞ」と、呼ばれた。うろうろしていると、

「どこへ行こうとしていたんですか」と、女性助手の冷たい声が背中にズブリと刺さった。まるで、逃がさないわよ、と言葉でドアを閉めるように。

「ちょっと、トイレへ」と、わたしはトイレへ入った。さっきの悲鳴で少しだけちびっていた。

死ぬつもりで治療を受ければなんということはない。わたしはまさにカミカゼ特攻隊で出撃する飛行士の心境だった。

「どこの歯ですか」と、目をランランと輝かせた医者がマスクを取ったら、助手たちもどっと笑った。一本だけ出っ歯だったからだ。その笑いは必要以上に長く、わたしは気分を害した。

「ところで、くくく、何かアレルギーは、くくく、ありますか」と、直も笑いながら、助手が訊く。わたしはブスツとして応えた。

「歯医者アレルギーです」

「だそうです。先生」

「ふむ、確かに全身、これ石のように硬直していますな。力を抜いてください。却って神経をピリピリさせると痛いですよ。はい、リラックスしてください。汗を拭いてください」

わたしは、まな板の鯉だった。全身にすでに汗がびっしょり。それを助手が拭いてくれる。

「ちょっとだけ麻酔の注射しますからね」と、赤子に云うようになだめた。

「ふえんふえい、ふえんふいいまふいいでほねぐわいひまひ」

これを直訳すると、「先生、全身麻酔でお願いします」となる。

「と、おっしゃっていますが。先生、どうしましょう」

先生はにこにこ笑っていたが、急に険しい顔になり、怒鳴りだした。

「なんだと、てめえ、それでも男か、金玉つけてるんだろが。歯医者が怖くて戦争できるか」

「は、ふあい、ふいみまへんでひた」これも訳せば「はい、すみませんでした」となる。

「よし、手足を固定しろ。逃げられんようにな」

ええっ、と思ったが、すでにロープで手足を椅子に縛り付けられていた。もはや、完全に逃げることはできなかった。

「ふふふふ、さあ、麻酔の注射をしますからね」と、医者は不気味な笑いを忍ばせて、注射器を近づけてくる。わたしは首を振ってもがいた。助手二人が、わたしの首を押さえ、閉じようとする

る口を強引に開ける。助手の若いお姉さんたちも、意味ありげな笑いを浮かべていた。わたしは目を瞑った。ズブリと歯茎に注射針が刺さった。「ぐえっ」と、声にならない叫びを挙げた。そのうち、唇まで麻酔で痺れてくる。医者は、ペンチ、やっこ、ドライバー、のこぎりなどいろいろ工具を出して、そんなものどうするの？ というわたしの哀願の視線も無視して、作業にとりかかった。前歯を抜きにかかったが、なかなか外れない。アロンアルファは宣伝通り強力なのだ。先生の力でも取れない。わたしの頬に足を掛けて、ふんばったが、これが取れない。

「あいふえふえ」これも訳せば「あ、いててて」となる。

「痛いはずがない、麻酔が効いているからな」と、医者は云うが、痛いのは頬だ。先生が足をかけているそこだ。わたしは、あまりの痛さに涙が出てきた。唇も引っ張るから、口角が切れて血まで出てきた。このままでは、口が裂ける。わたしは、現実を直面しないで、別のことを考えようと務めた。よく見ると、若く可愛らしい助手たちだ。彼女らの細い指が口の中に入っている。若い女性の指をしゃぶる機会というのはなかなかないものだ。加えて、胸を押し付けてくる。わたしは不純にも、そっちの方の想像へ逃げようとしていた。

すっぽんと、ようやく歯が取れた。

「しぶとい差し歯だ。ようし、これから、前歯だけでなく、奥歯もいろいろ治療しないとな。ふふふ、楽しみが沢山増えたわい」医者はそうして、わたしの歯を隅々まで眺めて、目を輝かせていた。

「レントゲンを撮って、型を取る。これからお楽しみだ、ふふふふ」

「はい、もう痛くありませんからね」わたしは全身の力が抜けていった。一万メートルを全速力で走ったあとのようだった。

ふらふらと、治療室を出て、どっさりと倒れこむようにソファに座る。

「喜多村さん、お会計です」と、請求金額を見て、わたしはふたたびソファへ倒れこんだ。

第230話 疲労の街

都市は拡大する。どんどん郊外に向かって住宅を伸ばしてきた。それにつれて道路もライフラインも、街の福祉設備も増殖していった。

M市の市長を三期務める田中鋭角は、土建屋やゼネコンとの黒い噂があるにもかかわらず、なかなか尻尾を見せないで、うまく市政をやりくりしてきた。かなりの政治資金を貰っていることだが、業者との癒着は否めない。ブルドーザー市長とも云われ、小さな田舎町を地方都市としては、一番活発で、近代的に変えてしまった。モダンな橋を名所にするほど豪奢に作り、公園を作り、他の市に負けない市立大学を開設し、市民美術館から市民図書館も、高層ビルで、田舎には珍しい。クラシックファンの市長は、自分の趣味を押しつけて、高価なパイプオルガンを装備した、コンサートホールを作った。文化の街を自認するだけ、文化施設に力を入れていた。そのほか、地区別に公民館、体育館、福祉センターをバンバン建ててきた。住民へのご機嫌取り

も忘れないし、陳情には快くスマイルで応えるので人気があった。それで、圧倒的支持で、市長の座を確保してきていた。影では器物行政と悪口を云われていたが、自分の利益と街の躍進という野心のため、どんどんと街造りを進めてきたのだ。

そうして、十数年が経過して、バブルの崩壊、企業の倒産、商店街の疲弊、失業率の増加、地方交付税の減額、福祉予算の増加と、いろんな財政上での問題も発生してきていた。ランニングコストがかかりすぎるM市はあっというまに、赤字団体に転落して、歳入を歳出が上回り、予算の目処がつかなくなった。そのことは連日、マスコミで騒ぎ立てて、市長のいままでとってきたM市改造計画が、先を読めない甘さがあったと、糾弾するようになった。

「市長、コンサートホールが赤字で、マスコミが取材したいと申し入れがありました」「市長、美術館と市民病院、市営バスの赤字で、情報公開を求める市民団体が来ています」

最近、予算がないから、あちこちで手抜き、ごまかしで交わしてきた行政も、市民の目が煩くなってきた。

「連日、煩くてかなわんな。総務課長を呼んでくれ。また、第三セクターでなんとかすり替えることにするか」

その発案には課長は渋い顔をしていた。

「お言葉ですが、いままで、第三セクターにして、事業清算して市民から避難を浴びたのはまだつい先日のことです。スキー場も観光物産館も閉鎖したまま、その後始末がまだ終わっておりません。ここで、第三セクターの話を持ち上げると、マスコミが噛みつくことは明らかです」

市長、ここまで順調にきたのだが、窮地に追い込まれた。そればかりではなかった。

市民課と都市整備課に各地から苦情が殺到していた。

「道路に穴が空いて、危なくて、何度も電話しているのに、どうして来てくれないのよ」

「橋の欄干が錆びて落ちかかっている。通学路だから、早くなんとかしろ」

「橋本小学校ですが、体育館が老朽化して、雨漏りしているんですが」

「こちらは、市営住宅のですね、住民なんですがね、市長さんおられる？ いま、忙しい、あっ、そ。水道が三日前から出ないって云ってるだろう。今度の市長選には投票しないと云ってくれ」

そうした脅迫まがいの電話、ファックス、メールが連日、殺到しているから、市の窓口の職員の大半はノイローゼにかかっていた。中には、病院通いするもの、長期休暇するものも出はじめた。

「企画財政部長を呼んでくれ」

市長も額に氷嚢を載せて頭痛気味だった。

「部長、どうして、こんなことになったのだ」

部長はすべて判っていた。こうなることも予想していた。

「すべてが、バブルの崩壊ですな。世の中はすべてが、成長することを前提にして、物事は進められてきました。予算についても、長期事業にしてもです。それが、ここにきて、衰退、後退といういまだかつてない事態に直面しております。市長が押し進めてきた造成、建設事業は、限りなく収収が伸びるという上に立って試算されていきました。それが減額するとどうなりますか。加

えて、建築物の耐用年数と減価償却です。そろそろ、あちこちで、補修、改築、必要になります。それについての予算は本年度は少しよりみておりません」

「仕方ない、新しい事業はすべて凍結する。現在進められている工事も一時中断だ。住民の苦情の修理に要する予算を至急策定してくれ。前倒しでもいいから、できるだけ対応してゆこう」

形あるものは壊れる。風化し酸化し、金属疲労で崩れ始める。どんどんと、建物を建て、道路を造り、橋を造っていったのはいいが、その管理維持費が増大するとどうなるか、莫大な市の予算を毎年計上し続けなければならない。

事故は突発的に起こった。

「市長、大変なことが起こりました。東バイパストンネルが崩落して、観光バスと、乗用車が巻き込まれました」

「市長、大変です。橋が陥没して、車が川に落ちました」

「市長、浅虫小学校の体育館の屋根が落ちて、多数の死傷者が出ている模様です」大雨で、土手は決壊、下水は詰まる。側溝は泥だらけ。ゴミ処理も間に合わない。市営住宅は危険家屋に指定され、手抜き工事のせいか、地震で、図書館が傾いた。台風と大雨と地震とこの秋は災害が続いた。それで、街のあちこちに被害が出始めた。地盤ももともと弱かったのと、建設会社の明らかな手抜き工事が露呈した。

「市長、大変です。街が崩れてゆきます」

市役所の最上階の市長室から、田中鋭角はM市を見渡していた。橋が落ちてゆくのが、スローモーションビデオのように見えた。物産館のビルも崩れ始めた。大勢の市民が逃げまどい、悲鳴と喧噪が下から沸き起こっていた。次々に補修もしないで、ほったらかしにした建物が崩れてゆく。

「市長、街が崩れてゆきます。あなたの造った街が...」

部長は呆然と立ちつくしていた。やがて、市役所の建物も傾いていった。

第231話 殺意

人間はいつでもどこでも殺意を抱くことがある。自制心が働き、あわやというところで思いとどまった者が、ふたたび平穏な生活を送り、一步踏み出した者が、罪人として社会から制裁を受ける。

杉本達也の場合は、それが突然に降ってきたように、旅館の部屋で起こったのだ。

達也は、四十半のルポライターだった。よく、取材のために地方都市を旅行する。この日も原発の事故が北陸であったばかりで、東京の自宅から新幹線で駆けつけた。達也は、原発がすでに曲がり角にきていることから、事故隠しをする電力会社の背景などを、かなり突っ込んだ部分まで調べていた。新聞では書けないこともある。報道されない部分をすっば抜くのがルポライターの仕事でもある。だから、危ない橋を渡ることもしばしばで、知りすぎて抹殺されかねないとき

もあるのだ。そのネタを週刊誌に売って喰っている。社会時事のスキャンダルは、政界、財界から刑事事件の真相にまで及び、警察、暴力団、情報屋と元来の鼻で嗅ぎ分けながら事件の奥深くまで入りこんでゆくのだ。

取材を終えて、達也が海辺の旅館に戻ってきたときは、とっぴりと日が暮れて、部屋にはすでに夕食のお膳が運び込まれていた。八畳間に窓辺に板間があり、応接セットが置いてある。窓からは漁火が沖合いにちろちろと見えていた。達也が、疲れきって、部屋に入ると、何かの異変に気がついた。誰もいないはずの部屋に動くものの影がある。

「誰だ」と、叫んでみたが、そのものは応えもしない。部屋の電灯を点けてみて、達也はぎょっとした。裸で、苦しそうに、身をよじらせているそのものが、畳の上を這うようにしていた。くねくねと、艶かしく肌を晒して、首をもだげてみたり、腰を曲げてみたり、グロテスクな格好で、まさに死ぬ寸前だった。達也は暫く、その様子を伺っていたが、苦しそうな割りに、中々死なないのを見ると、見ている方が忍びなくなっていた。いっそ、とどめを刺して、楽にしてやればいいと、安楽死の考えが、脳裏を過ぎった。

達也は、恐ろしいものでも覗くように、そっと近づいていった。心臓がバクバク鳴っている。いろんな修羅場を潜ってきたわりに、達也は苦手なものがある。いままでも、惨殺死体や、トラック詰のバラバラ切断の死体なども数え切れないほど、見てきたのに、それらは、すでに肉の塊として、無言のものであった。死に直面しながらも、助かりたい一心で、逃げ惑い、身悶えする場面には遭遇したことはない。

部屋の襖が叩かれた。何者かが、廊下に立っている。

「誰だ」と、押し殺したような声で、達也は、襖の脇に身を隠しながら訊いた。

「お客さん、ビールば持ってきましたがな」

それは、まぎれもなく旅館の仲居だった。達也は、自分の動揺した姿を見られてはまずいと咄嗟に思った。

「そこに、置いてくれ。いま、着替えしているから、何かあったら電話で呼ぶから」

達也の声はかなり尋常ではない。どこか不自然に強張っていた。

「はい、かしこまりました。それでは、入口に置いてまいります」

達也は耳を澄ませていた。仲居が階段を降りてゆく足音を確認しながら、そっと、襖を開けた。廊下には人影はない。シーズンオフで、泊り客は殆どなかった。達也は急いで、ビールの二本載せられたお盆ごと、部屋に入れた。そうして、誰も入れないように、内鍵をかけると、窓の方に走って行って、カーテンも閉めた。これで、部屋の中を外部から覗かれる心配はない。

達也はしょっちゅう、こうした旅館には泊るが、このような経験はいまだかつてなかった。どう対処していいのか、震えを止めることができないでいた。冷静に落ち着こうと、混乱する頭の中を整理しようとすればするほど、ただ、真っ白になって、戸惑うだけだった。なおも畳の上をのた打ち回るものをどうするべきかと考えめぐねて、達也は、温くなったお銚子から酒を吞ませてみた。そうすることによって、少しは苦しみから解放されるのではないかと、だが、そいつはますます苦しみはじめた。くねくねと伸びに伸びた体を、何かを求めるように畳に這いつくばらせた。

どうしたものか、いっそのこと、ナイフでとどめを刺そうか、それとも火で焼くか。あれやこ

れやと殺し方を模索していた。達也にはとても手に追えない相手のようにも思えた。いまさら、内線電話で仲居を呼ぶこともできない。フロントを呼んでも、常軌を逸している。これは自分ひとりで解決しなければならない問題だ。生きたまま切り刻み、どこかへ捨てることも考えた。証拠隠滅すれば誰にも判らない。このまま、いつ死ぬか判らないものを残しておくわけにはゆかない。下手に行動すればただ怪しまれるだけだろう。刻々と時間だけが経っていった。そのうち、あの仲居が部屋にやってくるかもしれない。その前に、なんとしても始末しておかねばならない。

案の定、例の仲居が部屋にやってきた。

「お客さん、お食事済みですか」

こっちはそれどころではない。つい、声を荒げて怒鳴ってしまった。

「入るな、こっちから連絡する」

「はい、すみません。ご用がありましたら、いつでもお呼びください」

仲居は立ち去った。いよいよ不審に思われたろう。達也は焦れば焦るほど、怪しまれることを懸念した。

そのものは、やがて、一時間も悶え苦しんだ挙句、動かなくなった。達也が手を下すまでもなく、向うから命尽きたようだった。それでも、安心はしてられない。達也は、割り箸で、動かなくなった体をつついてみた。すると、生命力のあるそいつは、またもぴくりと反応して、身をくねらせた。達也は部屋の隅の壁にへばりつくように、立ったまま、硬直していた。じっと、見ているだけだったが、もう、待つという恐怖には耐えられない。とうとう、意を決したように、達也は震える手でナイフを掴むと、そいつのもたげた首めがけて一衝きにした。そいつの体の中央にナイフが突き刺さったままになっていた。そして、暫く様子を見ていたが、今度は確かに息の根を止めたようだった。達也は、割り箸でそいつの動かなくなった体をつついてみたが、ぴくりともしない。ついに殺したのだ。生きているもののおぞましい姿を見せ付けられ、度肝を抜かれたが、達也はようやくタオルで顔の汗を拭いた。

こんな、生きている鮑を見たのは初めてだった。海辺の旅館ならではのご馳走なのだろうが、どうして食べることができようか。達也は、恐る恐る大きな鮑の身をナイフで切り刻み、レモンを絞り、ビールと共に口に入れた。そいつは、死んでも確かに美味かった。

第232話 キノコ狩り

キノコ狩りのシーズンだったが、山にはいつもの年より大勢の市民が押しかけていた。キノコの数より人間のほうが多いのではないかと思うほど、山という山に人が分け入って、ちょっとしたラッシュになっていた。逆に街は閑散として、人影はない。繁華街もガランとして商店も閉めていた。

この北国では、どちらかという、春のほう山菜狩りが楽しめる。ふきのとう、たらの芽などの若芽、ぜんまい、わらびと豊富にある。キノコはみつけるのに苦労するばかりか、毒キノコの区別も判らなくてはならない。

「これは、おれが先に見つけたんだ」

「なにを、おれの方が先に手をつけた」と、キノコの群生しているところで、市民の諍いが絶えない。みんな、手にキノコの図鑑を持ちながら、見つけたものを写真と照合していた。山深く入り込んで、迷う者などいなかった。どこに入っても人がいる。人の姿の見えないところはなかった。熊が出るそうだが、熊のほうは恐れをなして、隠れて出でこない。小動物も昆虫の果てまで、悉く姿を消していた。

近藤一家も家族総出で、山に入っていた。テントと寝袋持参で、長期戦だった。近藤三千雄は、四十半ばで、商売の電気工事店を閉めた。不況でやりくりがつかず、累積赤字でどうしようもない。妻と二人の中学生の息子も学校にも行かず山籠りに入った。

「お父さん、この辺にテント設営しようか」

「そうだな、水ハケのいいところがいいな。雨が降って、水溜まりのできるどころや、雨水の通り道は雑草が生えていないから判るだろう」

三千雄は、石を集めて竈も作った。あちこちで、みんなテントを張り、ちょっとしたキャンプ村になっていた。

「お母さんは薪にできる木切れや、枯草を集めてきてね。おまえたちは近くの沢から水を鍋と水筒に汲んでこい」

三千雄は、山の斜面を攀じ登り、キノコを探したが、さすが、近くの藪は悉く採り尽くされていた。もっと、深く入らねばならない。二時間探しても一握りしか採れない。これでは、家族四人の腹を満たすことはできない。こうなったら、食べられるものはなんでも採ろうということになった。

山ぶどう、あけび、山の芋、図鑑を見ながら、食べられる野草も摘んだ。栗の木の下は人でいっぱいだった。押すな押すなのラッシュで、朝の電車並だった。

ともかくも、籠にいっぱいになったから、三千雄は引き返した。あちこちで、夕餉の煙が上がっていた。採ってきた山の幸を沢の水で洗い、皮を剥いたりした。

「なんだ、お父さん、キノコはたったそれだけなの」

息子二人は落胆して見ていた。

「ここじゃ、人が多すぎる。明日はもっと山の上へと移動しよう」

山菜鍋がぐつぐつと煮えてきた。木切れも取り尽くされ、生木を折ったが、燃えにくい。食糧だけでなく、燃料の確保も難しくなってきた。山の夜は冷えるから、薪は切らせない。懐中電灯もないから、ここでは薪の火だけが、唯一の光源だった。

それでも、みんな何日かぶりで、腹いっぱい鍋料理を喰った。体が温まってくる。肉も欲しいところだった。それは、他の家族もそう思っていた。熊でも猪でも出てきて欲しい。それこそ、恐れるどころか奪い合いになるだろう。どこかの家族が、野うさぎを捕まえてきて、枝に刺し、火で炙っていた。いい匂いが漂ってくる。みんな、恨めしそうな視線を向けていた。

翌日から、多くの家族が山奥へと移動し始めた。人間の通るところに食べられる草もキノコも

根こそぎなかったし、山ごと食べ尽くすような勢いがあった。山菜だけでは、体が持たない。穀物がなければいけない。三千雄は、他の家族がどんぐりなどを拾っているのを真似た。栃の実も拾った。それらはそのまま食べられないので、砕いて、水に晒してからすいとんのようにして食べた。まあまあ食べられる。

「お父さん、これ、不味いよ。ぼくはキノコなら食べてもいいけど」

三千雄はかっとなった。

「そんな我儘云うなら、食べなくてよろしい。昔の人はみんなこうしたものを主食にしていたのだ」

三千雄の云うのは縄文人の話か、飢饉のときの話だ。誰だって、ほかほかの米の飯が喰いたい。こんな原始的生活をしなければならぬのが情けない。生きてゆくというのが、こんなにも大変なことだとは、知らなかった。

うじゃうじゃと山肌へばりつくように市民たちが食糧を求めて群がっているのだから、どんぐりまでが、探すのが困難になってきた。三千雄は、ものの本に書いてあった、その昔は、松の皮まで剥がして喰ったことを思い出した。松の皮を粉にして団子にして煮て食べてみたが、とても食べられる代物ではない。飢饉のときは土団子まで食べたという記録も残っていた。このまま、山を食いつくしたら、ここにいる人間たちは、そこまでする者も出てくるだろう。三千雄は、蠢く昆虫の果てまで食べている家族も見た。人間、腹が減ってきたら、口に余るものはなくなる。毒キノコであたって、苦しむ家族もあちこちで見た。

次第に子供たちもガリガリに痩せてきていた。ついに女房まで弱音を吐いた。

「あなた、こんな生活するよりだったら、街にいて餓死したほうが幸せだわ」

三千雄も、そう考えたこともあった。だが、街に降りても、食べ物は何ひとつとなかった。あるのは、ミイラ化した死体だけだった。

世界的天候異変がもたらしたのは、五年に渡る食糧難だった。食糧備蓄はとっくに底をついた。他国からの輸入も止まった。食糧自給率の低い、わが国では他国より一早く餓死者が出た。いくら金があっても、絶対数の食糧の不足から、買えるものは一粒もなかった。みんな、腹だけ膨らませて、目が窪み、手足が骨皮になった餓鬼になって、野山をうろついていた。

「見ろ、農業を粗末にした罰だ。あれほど金満日本といわれ、食べ物を無駄に残してきた贅沢な国民の末路だ」

密かに人肉も食べているという噂もあった。人間が人間を食べ物として見る。気の狂ったものは崖から身を投げた。

「いつまで、地獄は続くのだろう」

太陽は隠れたまま、灰色の空だけがどんよりといつまでも垂れていた。

大変な時代がやってきた。株価もデパートの売上も三十年前に戻った。三十年前と言えば、昭和四十七年。カップラーメンが売り出され、ハンバーガーがようやく巷に出回るようになった頃だ。

学生運動も下降線で陰惨な赤軍の事件があったり、世の中騒々しいときだった。その頃に戻れと言われても出来るものではない。あのとき四万の月給がいまは二十万になっているわけだが、給与が五倍になっても売上はいまと同じだから会社もやりくりが大変なのだ。

公務員でさえ減給される時代になった。一般の会社も軒並み給与カットに入りだした。国民の大半が所得が半分以下になった。家のローンが払えず手放すものが後を立たない。それでまた昔のようにアパート住まいに戻っていった。

金澤茂則の家でもいかにしてこの貧乏生活を乗り切るか、あれこれと工夫していた。茂則は公務員なので、元々生活には堅実だった。両親も先生をしていたので、粹の中での生活には小さい頃から慣れていて、女房の加代子はこれもできたもので吝嗇ときている。この夫婦は節約にかけては町内一の自信があった。ケチのコンテストなんかあれば絶対優勝間違いはないと妙に威張っている。

小学生の息子二人には、いつも学校にビニールの袋を持たせてやっていた。学校給食は結構残す子供が多いと聞く。それは勿体ないと、毎日かき集めて持ち帰らせる。それで夕食のおかずはたいてい足りるのだ。土曜日など、学校の休みのときは仕方ない、家族全員がご飯だけ茶碗に盛って、テレビの料理番組など見ながら食べるのだ。それもなければ、食卓の上に梅干し一個乗せて、じっとみんなで見詰めていると、唾液が出てくる。それを逃がさないように、ご飯を口に入れる。

さもない話は食事ではなかった。ゴミの日に収集場からいろいろと拾ってくるのだ。燃えないゴミのときは、まだまだ使えるものが捨ててある。じっくりとゴミ捨て場を回ると家財道具は一揃い用意できる。雑誌や本を出す日にはその中から値打ちのある古書を掘り出して、古本屋に売りにゆくのだ。それは目利きの茂則の役目だ。子供たちは学校へ行くときは、必ず紐で腰からぶら下げた磁石をズルズルとひきづって行く。学校の往復で磁石に鉄クズが付いてくるのを鉄クズ屋に売りにゆくのだ。

加代子の役目はデパート、スーパーの試供品集めだ。薬から化粧品、洗剤、いくらでも手に入る。街頭でティッシュを配っているときは、そこを何度も往復して籠をいっぱいにする。

金澤家のお風呂はお湯を洗面器一杯ずつ支給だった。お湯でまず、歯を磨く。それから顔を洗う。髪を洗い、石鹸を塗った体をお湯で濡らしたタオルで拭いて終わりだ。

トイレもインド式にトイレットペーパーは使わない。コップの水一杯で済ませる。尻を指で拭いて、水で清めるからシャワートイレもいらない。

そうしてみると、なんとなければなくてもいいものが多いことか。あれもいらない、これもいらない、家もいらない、電話もいらない、電気もなくてもいい、だんだん、みんなは裸に近くなってきた。金もいらない、車もいらない、気がつけば腰にぼろ布巻いて、市民はいつのまにか縄文人になっていた。

近代国家では貧困は存在するが、南洋の未開の原住民には貧困は存在しない。

第234話 カリスマ

カリスマばやりで、どの業界にもカリスマがいるものだ。カリスマ美容師にカリスマコック、カリスマ店員までいる。

テレビ局で、カリスマの特番を組んだ。ゴールデンタイムの二時間番組。取材チームには吉本の人気タレントを起用し、全国の名物カリスマを紹介するというものだった。

「こちらは、網走刑務所からの中継です。北海道地区担当レポーターは、わたくしオカルト寛平が担当させていただきます。さて、ここ網走番外地には、なんと、泣く子も黙るという、カリスマ囚人がいるという噂で、さっそく飛んできました。普通は一般の人が入れませんが、開かれた刑務所を目指している、所長さんのご好意で、特別にカメラが刑務所の中まで入ることができました。こちらの棟は、重罪の人たちが入っているということですが、この房に、殺人、放火、詐欺、強盗、拘摸に誘拐とやっていない罪状がないという、犯罪の百科事典の白鳥さんをご紹介します。白鳥さんは、目下無期懲役で服役中です。白鳥さん、こんばんわ。どうして、カリスマと呼ばれているんですか」

「おれは、脱獄のプロだ。いままで務所を七回も脱獄したんだ。ここも一年以内にきっと抜け出してみせる。務所はおれの仮り住まなのだ」

「なんだ、そういうことでした」

「こちらは、青森からです。林語堂古書店の店主は別名カリスマ古本屋と云われています。持ち込んだ本の値段をぴたりと鑑定いたします。いままで六百万冊の本が出版されましたが、その本の相場がすべて頭に入っているというのですね。実は、わたしはいまここに一冊の本を持ってきました。さあ、いくらになるか鑑定してもらいましょう」

古本屋の親父はブスツとして愛想が悪い。ぶっきらぼうに本を手にして云った。

「喜多村拓詩集ですかい。こんな自費出版の本はぞっき本でしてな、値はつきません。しいて付ければ五円ですかな」

電話が鳴った。店主は電話口でぺこぺこして汗もかいていた。

「はい、返済期限がとっくに過ぎている。そうでしょう。なんとか、月末までには窓口にお持ちしますから。はい、すいません」

どうやら、借金返済の督促らしい。カリスマも形無しだった。

「ご商売の方は大変なんですね」

「そうよ、本を読むものが少なくなったからな。毎日、借りた金を済ますために働いているようなものよ」

「ああ、それで借り済ですか」

「こちら、東京は山谷のドヤ街です。昔は木賃宿といいまして、日雇い労働者の溜まり場がありましたが、いまはアパートなどが建ちこんでいます。この安いアパートの中で、カリスマと呼ばれる無許可の医者がいるということですよ。アラブ人のようにも見えますが、取材してみまし

よう」

テレビカメラとマイクが汚らしい小路を入っていった。

「すみません、この辺にメシアさんがいらっしゃるということを聞いてきたんですが」

髪にカールのセットをしているお水系の女の人が歯磨きしながら、指差した。

「ほら、人が並んでいるでしょう。あそこで、みんなに朝御飯を振る舞っている方が飯屋さんです」

「メ・シ・アではなく、飯屋ですか」

隣の婆さんが云う。

「そうですよ、貧しい人に炊きだしをするようになってから、ここいらの人はみんなそう呼んでいます」

「はあ、慈善事業ですね。どんな病気でも治すというのは本当ですか」

「飯屋さんの手にかかれば、あなた、癌でも治ると評判ですよ」

粗末なアパートの一階のドアの前に長い行列ができています。

「すみません、テレビ局のものです、ちょっと通してください」

中では、ボランティアの女の人が数人手伝って、おにぎりを配っていた。髭面で、髪が肩まで伸びた長身の青年が、年寄りや子供の頭に掌を掲げていた。

「お忙しいときにすみません。飯屋さんですね。おや、あなたは、どこかで見たことがあるお顔ですね。掌に穴が空いていますね。怪我をしたんですか」

「ええ、これは古い傷跡です。二千年前の」

「えっ？ ひょっとしてあなたは...」

そこへ突然、警官隊が踏み込んだ。飯屋という外人を拘束すると、刑事が逮捕状を示した。

「無免許で治療行為をした罪と、不法滞在の容疑で取り調べする。連行しろ」

哀れ、飯屋は手錠をかけられてパトカーに乗せられた。大勢の貧しい人たちが、パトカーを取り囲むように抗議していた。

レポーターはテレビカメラに向かってこう云った。

「この不況下、カリスマも楽ではありません。カリスマ破産、カリスマ夜逃げと暗いニュースばかりです。カリスマ救済募金も始めました。みなさん、ご協力ください」

カリスマもやたら増えすぎた。下手にプライドが高く、見栄も張り、器用貧乏ときている。失業するカリスマが増えたが、どこも給与が高いので使ってくれない。

「こちらは、ハローワーク前です。カリスマのデモ行進が行われています」

仕事をよこせと書いたプラカードを持ち、襷に鉢巻の落ちぶれたカリスマたちが、「われわれに仕事を、職場を、生活を」と、叫んでいた。

ブームが過ぎたら見向きもしない。カリスマは人間ブランドだった。

ヒッチハイクも実際やってみるとなかなか停まってはくれない。ひとりの青年が夏休みの最後の旅行を北海道でしていた。ケチケチ旅行で、すべてヒッチハイクで済まそうと、持ち金はゼロに近い。なんとかなるといふ若さが羨ましいほど漲っていた。宿泊はシュラフだったし、飯はコンビニに頼み込んで、賞味期限の過ぎたものを裏口で貰って食べた。勿論、犬にやるとかなんとかごまかして。

大学四年の最後の夏休みの思い出作りと江口仁志は、宗谷岬からサロマ湖、知床と、オホーツクの原生花園を眺めながら、徒歩旅行したり、気楽なひとり旅をしていた。長距離トラックでサロマ近くで降ろされたが、辺りは何もない辺鄙なところで、次の村まで三十キロはある。腹が減っていたが、民家もなにもないところだった。とぼとぼと国道を歩きながら、たまに来る乗用車に指を立ててみたが、停まる車は皆無だった。画用紙に大きく、網走と書いてサインを送ったが、男ひとりでは警戒心が強く、みんな無視するどころか、却ってスピードを上げて通過する。こんな原野で野宿もできまい。熊と遭遇するかもしれないし、雨が降ったら隠れる場所がない。喉も渴いていた。途方に暮れているとき、一台の高級車が、仁志の前にすーっと停まった。仁志は、疲れ切って路端に座り込んでいた。「お兄さん、どうかしましたか」車の窓から、上品な口髭を蓄えた、優しそうな初老の紳士が顔を出して云った。その隣にやはり品のよさそうなお婦人が座っている。二人とも仁志の顔を見るなり、一瞬、顔を見合わせて、驚いた顔をしていた。

「ヒッチハイクをしています。網走まで行きたいのですが」

仁志は、五時間も指を挙げて、停まらなかったのに、ただ座っていたら停まった車に戸惑っていた。

「もう、暗くなるから大変だのう。まあ、わたしたちも網走の家まで帰るところだ。乗ってゆきなさい」

「いいんですか、おじさん、ありがとう」

仁志は救われた思いで乗り込んだ。仁志の汚れきったジーンズには勿体ないほど、真新しい車だった。少し遠慮がちに乗っていた。

「どちらからお出でですか？」と、お婦人が聞いた。

「東京からです。夏休みの無銭旅行なんです」

「それはそれは、いまどきの若い人の割りには勇気のある人ですね。学生さんかね」紳士が楽しそうに聞く。

「ええ、学生時代、最後の思い出作りです」

「喉が渴いておいででしょう。いかがですか」

と、炭酸飲料を勧めてくれた。いつもにこやかに優しい夫婦だった。

「今夜は、どこへ泊まるんですか」奥さんの方が訊いてきた。

「あてはないんです。駅の待合ベンチか、公園の中とか」

「それじゃ、朝方は結構冷えますから、うちにお泊まりなさい。この辺は夏でもストーブを焚いたりしていますからな。野宿は風邪を引きますぞ」

「はあ」親切な夫婦に誘われるまま、仁志は家に連れて行かれた。網走の郊外の広々とした庭付きの豪邸だった。よほどの金持ちとみえた。

「こんなに広いところにご夫婦だけで住んでいるんですか」仁志は羨ましそうに訊いた。

「ここはね、夏場だけの別荘なんですよ」

仁志は、きょろきょろしながら、ログハウス風の木の匂いのする家の中で、贅沢な調度品、工芸品を眺め回していた。

「さあ、さきにお風呂へどうぞ。ひばのお風呂で匂いがいいですよ」

お言葉に甘えて、仁志は先に風呂をもらった。もう、十日も風呂に入っていないので、どろどろだったから、一番湯に入るのに気が引けた。広い風呂で、夫婦二人では余るだろう。仁志が風呂に入っていると、奥さんがいきなり、ドアを開けた。

「湯加減はどうですか。背中をながしましょう」

「いいですよ」と、仁志が遠慮がちにはにかむと、

「お客様にこうしてさしあげるのが、うちのおもてなしなんですよ」と、強引に仁志の背中を洗ってくれた。お湯は黒くなっていた。奥さんは魚を洗うように仁志の体を洗っていた。

お風呂から上がると、自分の服は洗濯されていた。別の若者向けの着換えが用意されていた。この家にこんな男ものの洋服があるなど、用意周到も怪しい。

「夕食の用意ができました」と、天井が吹き抜けのダイニングルームに案内された。チロル風の大きな照明が上からつり下げられていた。テーブルの上には、いつ作ったのだろうと疑うような、ご馳走がならべられていた。お手伝いさんか誰かいる風でもなかった。仁志は首を傾げていた。こんな沢山の料理を作る時間などなかったはずだ。まるで、自分が来るのを判っていて、歓待しているようなところがあつたと、仁志は疑心を持つようになった。

テーブルにつくと、主人は年代物のワインを出してきて、栓を抜いた。

「どうです、このワインは、わたしのコレクションでしてな、東京でもなかなか手に入りません」仁志にその高価なワインを勧めた。すっかり恐縮していた。貧乏旅行が夢のような食事にありつけるとは思わなかった。何日も口にもものが入らない時もあったし、畑に忍び込んで、大根や葉物を盗んで、生のまま食べたこともしばしばあつた。

料理は、ローストビーフに蟹のサラダ、禁猟のエゾシカのシチューなどが出た。見ると、食器も高そうだ。ステレオからはターフェル・ミュージクが流れている。何から何まで別世界の趣味で豪華だった。

「さあ、遠慮なさらずに、沢山召し上がってくださいな。お代わりしましょうね」と、奥さんはいつも微笑みながら、仁志の顔を覗いている。主人も意味ありげに懐かしそうな眼差しで、仁志はまるで子供が食事するのを見守る両親に囲まれているような照れくささを感じていた。

食事が終わると、コーヒーとディジェスティフの軽いお酒が出た。

「仁志くんと云いましたな。長旅で、肩が凝っておられるでしょう。どれ、わしが揉んであげましょうかな」

固辞する仁志を無視するように、主人は仁志の肩や、腕を撫で回すようにマッサージしていた。時折、涙ぐむのはどうしたわけか、主人は目を潤ませていた。

「次は、わたしの番ですよ」と、奥さんが今度は、仁志をソファに連れてきて、自分の膝枕で横

にさせると、耳かきまでやりだした。仁志は、この家に漲っている不気味な善意を全身で感じていたが、次第に引き込まれ、居心地のいいものとして、逆に拒むことより、包まれることに安心感を持つに至った。このまま、この家にいられたらとどこかで思っていた。気持ちがよかった。いつの間にかソファで寝入ってしまった。満腹感と、酔いと疲れとで。

真夜中に目が覚めたら、驚いて仁志は飛び起きた。ソファに横になって、毛布がかぶせてあったが、老夫婦二人の顔が、仁志の上にあったから。

「あら、起きたの。まだ、寝ていていいのよ」と、優しい声の奥さん。

二人ともじっと仁志の寝顔を見守っていたようだ。腕時計を見ると三時だった。

「さあ、ねんねしなさい」主人はまるで赤子をあやすように、仁志の髪を撫でていた。その異常に気付いた仁志は、咄嗟に逃げようと荷物をまとめていた。

「ぼく、もう出発します。お世話になりました」

二人とも何も云わずにただにここに笑っていた。仁志は入ってきた玄関を探した。広い家だが、玄関ぐらい判る。ところが、いつのまにか玄関が消えていた。部屋に窓がないことに気付いた。ドアを開けると、広間があり、そこに祭壇があった。葬儀をしているような花で飾られた立派な祭壇の上に白い布で覆われた棺があり、中央に仁志とそっくりな青年の遺影が飾られてあった。

「嘘だ、嘘だ」

仁志は、狂った鼠のように、家の中を走り始めた。どこにも出口はなかった。

第236話 空が墜ちてくる日

その日は、雲ひとつない快晴だった。気持ちがいいのを通り越して、何か怖い感じがするほど、吸い込まれそうな高い空があった。雨上りということもあって、空気は澄んでいて、秋の清々しさに気持ちまで爽快になる。

武田克己は、いつものように横浜の自宅から都心に向かう私鉄に乗っていた。東横線で渋谷まで快速で三十分。満員電車も苦にならない気持ちの余裕があった。金曜日ということもある。明日から三連休だった。車内では、いつもザウルスでダウンロードした小説を読んでいた。今日のスケジュールも見てみた。旅行代理店に勤務していた克己は、団体旅行の説明会が二箇所である。社員旅行の商談も予定に入っている。海外旅行がふたたび過熱してきて、業績は伸びていた。すべてが順調だった。

入社して十年で課長に昇進した。元ツアコンの美人の妻と幼稚園の息子、マイホームも購入した。順風満帆でいままできたことに躊躇いがあった。こんなにも幸せでいいのだろうか。何の不自由もなく、このまま人生が送れていいのだろうか。何かが突然襲ってきはしないだろうか、と怖いと思うこともあった。元来、小心者で、とんとん拍子でやってきたことに懐疑することもあった。

地下鉄に乗り換えして、会社のある駅で降りると、克己はエスカレーターで、地上へと出た。

通行人が、全員立ち止まって、空を見上げていた。朝の渋滞している道路も、車という車はすべて止まり、車の窓を開けて、乗客も空を見上げていた。ただならぬ雰囲気を感じて、克己も空を仰いだ。別に変わったことはない。飛行機が飛んでいるわけでもない。ただ、青く高い空が抜けるように広がっているだけだった。だが、地上はすべての動きが停止したように、空を見上げ、指差すものもいた。ビルというビルの窓から顔を出し、やはり空を見上げている人々の顔がたくさん見えた。

一何があったのだろう。急に克己は云えもしれぬ不安に襲われていた。まるで、時間が止まったようだった。動くものはひとつもなかった。だが、時間が止まっているのではないことが、地下鉄の出入り口から、続々と吐き出されてくる通勤途上の人々で判った。みんな地上に出るなり、金縛りにでも遭ったように、掌をかざして空を見上げるのだった。

一みんな、何を見ているのだろう。

克己は、みんなに見えて、自分には見えないことに恐怖を感じていた。それで、隣りに立って、やはり空を見上げているサラリーマンに訊いてみた。

「あのう、何かあったんですか」

サラリーマンは蒼ざめた顔をして、ちらりと克己を見ただけで、何も云わずに、また空を仰いでいた。都会の騒音は不気味にやんで、朝のラッシュとは思えないほどの静寂に包まれていた。

克己は、今度は別の二人の中年男性に声をかけてみた。二人は、なにやら空を指差して、ぼそぼそと話していた。

「すみません、何か見えるんですか」

すると、二人の男は、克己を睨みつけるように、見返した。そして、また克己を無視するように空を仰いでいた。

克己は、自分だけがおかしくなったのか、どうして何も見えないのだ。目が変になったのか、と、瞼をこすって、何度も目を凝らして見ようとしたが、どうしても、なんの変哲もない空だけしか見えない。次第に焦ってきた。立ち止まる通行人の間をすり抜けるように、克己は会社へと急いだ。会社に行けば、何かが判るかもしれない。ビルの入口にも大勢の社員が出ていて、空を見上げていた。克己は急いだ。エレベーターに乗ると、階上の旅行会社の事務所へと駆け込んだ。事務所の中でも、全員が窓辺に立って、空を見上げているではないか。動いているのは克己一人だけだった。

「おはよう、茂田くん、何があったんだ」と、窓に立つ部下に訊いてみた。すると、社員全員の視線が克己に注がれた。みんな、信じられないといった顔をしている。そして、克己をまた無視するように空を見上げているのだ。

克己は不安と怒りで体が震えてきていた。これは、大変なことが起こっているに違いない。ただ、自分には何故か見えないだけなのだ。その訳を早く知りたい。とうとう、克己は大声を出していた。

「どうしたんだ、みんな、一体、何が見えるんだ」

すると、部下だけではなく、部長までが、今度は憐れみに近い眼差しを克己に送ってきた。ようやく、部長が口を開いた。

「武田課長、君にはあれが見えんのかね」

克己はそう云われると、ますます戦慄を覚え、窓に駆け寄り、空を凝視してみた。やはり、何も見えない。どうしてだ。どうして、おれだけに見えないんだ。克己は自分が狂ったかのような錯覚を覚えた。

「あれって、何んですか、あれって、何が見えるんですか。ぼくには何も見えない」
事務所内でそう叫んでも、みんな取り合わない。応えるものもない。克己は女子社員を掴まえて、肩を乱暴に揺すりながら、問い質した。

「お願いだ、教えてくれ、一体、何が起きているのだ。何をみんなして見上げているんだ」
克己はもう泣き出しそうな声だった。すると、女子社員もまた、諦めのような眼差しで克己を見ると、

「いいんです。もう、何もかも終るんです」そう、不可解な返事をして、首を横に振り続けて、また何事もなかったかのように、空を見上げているのだった。

克己は、埒があかないと思ったのか、事務所内のパソコンで新聞社のニュースを見た。何ら変わる事のない昨日の政治経済のニュースが画面に映った。今度は、テレビを点けてみた。音声がしない。テレビの画面でも、アナウンサーが空を見上げている。どのチャンネルに合わせても、すべて、中継されたように、空を見上げているのだ。テレビの音声を上げてみたが、何も声がしない。映像だけの中継が続いていた。

みんな、どうしてしまったのだ。とてつもなく大きなものの前に硬直してしまったように、畏敬の念で仰いでいる。克己は、いてもたってもいられない精神状態で、今度は電話をかけまくった。气象台も出ない。110番も出ない。自宅も出ない。どこに電話しても呼び出し音が鳴るが電話口には誰も出てこない。いよいよ、克己は小動物のように慌てふためき、慄いていた。

すると、部長が、やさしく宥めるように、克己の肩を掴むと、

「武田課長、君もこっちへ来て、共に空を見たまい。もう、ジタバタしたところで始まらないのだ。わたしたちは、すべてを知ってしまったのだ。生かされている理由のすべてをね」
部長に云われるまま、克己は窓辺に立って、空を見上げてみた。なんら変わる事のない碧落が、果てしない高さで光っていた。心なしか、ゆっくりと落ちてくるような気がした。

「ほら、空が落下してくる。わたしたちは、最後のときを静かに受けとめなければならないのだ」

克己は、部長の腕にしがみつくように、小さくなって震えていた。

第237話 赤い人

あれは、昭和五十二年の四月だった。忘れもしない。わたしは、化粧品会社の名古屋支店に配属されていた。大学を出て、三年目で係長に抜擢され、異例の出世として騒がれていた。名古屋支店の管轄は中部地方一帯で、化粧品を美容院にセールスして歩くのがわたしの主な業務だった。その当時、わたしの区域は三重県が与えられ、サンプルや商品パンフの入ったアタッシュケースを手に、電車を乗り継いで、足で稼いでいた。

その日は、津市全域を歩いてみよう、と、国鉄の駅に降り立った。春日和で、背広を脱いでも汗ばむような陽気だった。駅には新学期の女子高校生たちが、真新しい制服姿で明るい笑いをホームに響かせていた。その女子高生たちが、くすくすと笑いながら、駅の待合所の隅を指差して、逃げるように走り去ってゆく。朝の通勤、通学客も異様なものを見るような視線を待合所の床に置いてある物体に注いでいた。わたしは、ちらりと見たが、初めは、それが、赤い置物のように見えた。

だが、そうではなかった。そのものは、頭から真赤な布を巻いて、座り込んでいる人間のようでもあり、動かないところを見ると、仏像か、祭りに使う山車の一部にも見えた。わたしは、立ち止まり、そこから身動きとれず、じっと見据えたまま、その存在そのものの異様さを認識しようとしていたが、思惟のどこかでは拒絶していた。とても、この世のものとは思われない。注視すればするほど、そこから立ち去れないでいた。そのものは、待合所の薄汚れた壁に向かって、私のほうには背中を見せていたが、派手な衣裳だけがやたら、この現実の世界には不釣り合いで、グロテスクな雰囲気醸し出しているのだった。

わたしは、薄気味悪い感じもあったが、どうしても気になるので、確かめてみよう、そのものの正体を突き止めるために、近づいていった。果たして単なる荷物なのか、人間なのか、それとも駅のオブジェとしての彫像なのか。そのものは高さが一メートル少しあったろうか。どっしりとした座りで、微塵だに動かないところを見ると、生きているものではないような気がしたが、みんな笑って眺めてゆくのをみると、そうでもないような、不思議な存在感に包まれていた。待合所のベンチには、二三人の旅行客よりおらず、その客も不気味なものを見るような目で、ちらちらと時折見ている。わたしは、タバコを吸いながら、何気なくそのものへと近づいて行ったが、背筋がざわめくような恐怖を覚えていた。その衣の色も近くで見ると、われわれの生活圏にはない色合いで、異質だったが、確かにそいつは布製には間違いがなかった。

わたしは、壁にもたれるようにしてタバコを吸いながら、ちらりとそのものの顔らしき部分を垣間見た。そのものとの距離は二メートルもなかっただろう。頭と首回りも赤い布で巻いているが、多分、一枚の長い布を体にぐるぐる巻きにしているのだ。そのものの顔は、ぎよると異常に大きな目とわし鼻と、髭が目についたが、わたしには無関心のように、じっと壁の一点を眺めているのだった。作り物のようにも見えるが、それは確かに息をしている人間だった。赤い衣裳にくるまって、待合所の床に直に胡座をかいているそのものは、どうしてそこにいるのか理由がわからなかった。しかも、そのものは、推測だが、もう何年もそこに座っているような場への慣

れがあった。わたしは、怖いもの見たさに近づいたが、そっとその場を離れた。

夕方、わたしはセールスを終えて、また津市の駅へと戻ってきた。電車の時間は調べていた。名古屋の支店まで戻る頃は日が暮れているだろう。駅の待合所にやってくると、赤いものが飛び込んできた。まだ、いる。一日中、同じ格好をして、じっと座っている異様なものが、まだ同じ場所にいるのだ。ぞくっと、また寒気がしてきた。気になって仕方がない。そのものの存在が目には焼き付いて、わたしは忘れることはないだろうと思った。なんということのない赤い色が、それからのわたしの人生で気懸かりのひとつになろうとは、そのときは思いもしなかった。

あれから、九年が経過していた。わたしは妻帯し、子供も二人もうけた。会社では課長になり、営業は新人の養成も兼ねて、中部地方を走りまわっていた。たまたま、岐阜、富山と担当が代わったので、三重県には立ち入ることがなかったが、あのことは一時も忘れたことはなかった。わたしの人生で、そんな大きな事件でもなんでもない、あのことが、どうしていつまでも気にかかるものか不思議でならなかった。

たまたま、三重で化粧品の講習会があるということで、わたしが担当として出向くこととなった。九年ぶりの津市に行くことで、何かが不安だった。あの赤い衣がふたたび網膜に浮き上がってくる。ただ、あれから長い年月が経っていて、そんなつまらないことを気にしていても仕方がないと、わたしは、九月の肌寒い日に、国鉄の津市駅へと降り立った。駅は少しはモダンになっていた。ホームから階段を降りると、改札口を潜り、待合所を通ろうとした。すると、どうだろう。わたしは信じ難いものを目撃した。赤い人が、あのときと同じ格好で、全く同じ位置に座っているではないか。

「嘘だろう。そんなはずはない、絶対にありえない」わたしは独り言のように云うと、自分の不安が当たったことに懼れていた。あれは、きっと置物なのだ。それをわたしが、人間と錯覚しただけなのだ。そのことを確かめるために、わたしは、そのものへとまた近づいていった。もう、うやむやにすることはできない。

赤い布はだいたい薄汚れて、色も褪せているような感じがした。わたしは至近距離まで近づくと、勇気を出して、そのものの頭部に触れてみた。柔らかく、温かい感触が伝わってくる。次に、わたしは、そのものを押し倒すように肩のあたりを横へと押した。すると、そのものは呆気なくそのままの姿勢で、横に倒れた。だが、驚いたことにまた自然と起き上がってくるのだった。今度は、逆の方向に押し倒してみた。そうしても、そのものはまた起き上がってくる。人間なら考えられない。何かが座りの部分に内臓されているような気がした。やはり、これは人形だったか。それにしても実にうまく作られている。生きている人間のようなようだ。わたしは、九年もの間、こんな精巧に作られた人形の置物のために、悩んでいたのだ。急に笑いがこみあげてくる。こんなつまらないことを何年も気に止めていた自分がおかしかった。

と、どうだろう。そのものは、むくりと起き上がった。そして、髭面のぎょろりとした大きい目でわたしを睨んだ。

「た、立ち上がった」

わたしはもう少しで卒倒するところだった。そのものは、大きく伸びをすると、すたすたとトイレのほうへと歩いていった。

第238話 高速道路

高速道路の半分以上は赤字だった。建設会社と政治家との明らかな癒着で、甘い汁を吸っているものが多いから、年間数十兆に及ぶ、国の予算に飛びつき群がる。それで、高速道路の建設中止を一部のものが叫んでも、赤字であろうと、「とにかく、途中でやめるわけにはゆかない。ここまできたら、通すものは通すのだ」と、変にやっきとなっているところがますます怪しい。

最近は大スコミも市民団体も煩いので、赤字道路をなんとかしなくてはならない。高速料金を値上げすれば、ますます利用者が減る。採算が取れないと長距離トラックも一般道を走るようになる、収益が逆に減るだろう。なんとか、いい方法がないものだろうか、地元選出の議員と、ローカル道路の悩みを抱えている知事たちが話し合っていた。このままでは、工事中断に追い込まれ、観光で喰っている県としても、客動員を凶れない。そのうち、新幹線が通るとJRの在来線が地域に第三セクターを設けて、地方で運営するよう払い下げになるように、高速道路も払い下げが始まった。地方の切り捨てだ。予算の少ない地方自治体が、赤字のしわ寄せをくうのはできない。なんとか採算ベースに乗せるにはどうしたらいいか、地元での話し合いがなされていた。そして、ある結論が導きだされた。それは、内密にことが進められることとなった。

神田文武は、会社の同僚の石丸広樹と三代耕太と三人で、連休を利用して秋の北海道へフェリーで渡った。途中で高速道路に入る。インターチェンジで、通行券を取ったが、料金改正になったことが、小さくゲートに書いてあったのを見逃していた。

八人乗りのワンボックスカーに三人は広々としていた。内地の高速に比べると、一車線で、何か狭い感じがした。三人ともまだ若いから、スピードは出す。ただ、追い抜くにしても狭い道路だ。しかも、どこまで走っても、車の姿は見えない。対向車も走っているのを見ない。

「さすが、北海道だな、気持ちがいいくらい広々としている」

広樹は耕太と後ろの席で、のびのびと乗っていた。

「赤字道路とは聞いていたが、こんなにも車が走っていないと何か不気味だよな。これじゃ、第三セクターでも運営が難しいだろうな。東名なんかには比べたら、貸切状態だもんな」暫く、海を遠くに眺めながら走っていると、道路に人が立っているのが遠目に見えた。

「おい、人がいるぞ、危ないから減速しようぜ。女だよ。それも若い女のような。何か事故でもあったのかな」

一直線の道路の脇でハンカチを振っている女三人組がいた。みんな派手なミニスカートなんか履いていて、セクシーなポーズでスカートをたくし上げて、下着が丸見えだった。

「おいおい、すごいぞ、こんなチャンスはまたとない」

車は女の子たちの前で止まった。

「なんかあったんですか」と、運転していた文武が訊いた。

「ねえ、わたしたち三人なんだけど、乗せていって欲しくない？」

ごくりと生唾が出た。

「すげえ、みんなピカイチの美人揃いだ。ヒッチハイクかな。それにしても旅行鞆もないぜ」広樹が、車から降りた。

「ばかな、ここは高速道路だぜ、ヒッチハイクなんかするかよ」

「どうぞ、どうぞ、八人乗りだから、席はいくらでもあります。どこまで行くの」広樹が交渉していた。

「この高速の出口までお願いね」声も可愛らしい。そろそろと三人乗り込んだ。

「他にも仲間の女の子たちがいるんだけど、わたしたちでいいかしら」と、変なことを訊く。

「勿論ですよ。旅行中なの？」と、耕太もうきうきして訊いた。

「旅行じゃないけど、ちょっとね」と、言葉を濁す。

「あたしはエミリよ」「あたしはミチって呼んで」「あたしはマリよ、よろしくね」と、三人ともわざとらしく形のいい足を組む。下着がチラリズムだった。男三人狐につままれたよう。キタキツネも人を騙すのか。女の子たちにはどうやら尻尾はなさそうだった。

「あたしたち、なんか喉が渴いたわ」と、キューティな子が甘えたような声で話す。

「次のサービスエリアに寄ろうか。何かコーラでも買ってこよう」

まもなく、車はサービスエリアに入った。何かが違う。ど派手なネオンが光っていたし、サービスエリアにしては様子がおかしい。蝶ネクタイの若い男たちが、停車した車に寄ってきた。

「お三人さん、入ります」と、大声で叫んでいた。

「へえ、北海道のサービスエリアって、変わっているね、まるで高級クラブみたいだ」

どやどやと、建物の中に入ってゆく。中は暗く、生のバンドがカントリーを演奏していた。

「ねえ、わたしたちおなかが空いちゃった。ここのステーキっておいしいのよ。ご馳走してよ、いいでしょう」いいとも、なんとも云っていないのに、女の子の一人がマッチを擦った。すると、頼みもしないのに、フルーツの盛り合わせまできた。ドンペリまで出て、コルクが抜かれた。

「おいおい、そんなの頼んでいないよ。それに、車の運転中で呑めないし」と、文武が云うと、

「あらっ、この高速道路は飲酒運転OKなのよ。知らなかったの？」

三人とも顔を見合わせた。北海道は酒豪が多いと聞かすが、ここまですごいとは思わなかったと、ひそひそと話していた。

「でも、北海道のステーキは美味しい。夕張メロンもさすがだね」みんな舌鼓を打って、満足していた。女の子たちは遠慮することなく、ばくばくと食べていた。

「でもさ、ここの支払いは高そうだよ」その話を聞いて、女の子の一人が、

「心配ないのよ、高速の通行券ですべてOKなのよ」その言葉で、三人ともてっきり、高速道路全線開通記念のサービスだと思っていた。確かに帰りがけにお勘定はなかった。高速を使ってもらおうという第三セクターの新しいサービスなのか。聞けば、女の子たちは道産子で、このあたりで暮らしているという。みんな満足して、また車に乗りこんだ。少しどころか、かなり酔っていた。運転は大丈夫だろうか。

女の子たちを乗せて、ふたたび車は先へと走った。若い女性がいるだけで、車内は華やかになる。いつのまにか、女の子たちはカラオケの携帯装置を持ち込んでいた。

「どうしたの、それ」広樹が面白そうに眺めていた。

「さっきのサービスエリアで借りてきたのよ。通信カラオケだから、こんなにコンパクトでいい

でしょ。さあ、デュエットで歌いましょうよ」

車内は急に賑やかになった。いろんなサービスがあるのだ。三人とも感心していた。今週のベストテンを歌いまくった。車の中がカラオケボックスになる。

車は、左側が広大な牧場のところにさしかかると、なにやら、また前方に賑やかなスポットが出現した。

「あそこで止めてね。いろいろ楽しいわよ」と、女の子が云う通り、車は高速なのに、路肩へ停車した。牧場の中央へステージがあって、ヌードダンサーが踊っている。

「すげえ、ここまで見せるなんてサービス過剰だな」

それだけではない。近くの農家のおばさんなどが、物売りのように、車に近寄ってきて、いろいろと地場産品を勧める。地ビールにワイン、焼とうもろこし、タラバ蟹と食べきれない。お土産までくれる。三人は感動して涙ぐんでいた。赤字の高速道路を黒字にするために、みんなでこんな苦勞して、ドライバーにサービスしてくれる。

いよいよ、高速の終点になった。

「ここで降りるのかい。もっとぼくたちと付き合わない」と、文武が一押しする。

「楽しそうだけど、わたしたちこれからまた仕事があるのよ、ごめんね。また来てね」と、料金所で美女三人は降りてしまった。ここからどこへ行くのだろう。料金所の周辺は家一軒もない原野だった。料金所にはパトカーも止まっている。警官が二人で警棒を手に仁王立ちしていた。

「おい、おまわりだぜ、いいのか、顔が赤いよ」

「いいんだろう。飲酒運転OKと云っていたよな。ヒック」

通行券を係りの人に渡す。料金がデジタル表示で出てきた。

「ええ？ ん十万円だって」文武は桁を間違えたかと、数えた。係りのおじさんは、同じ金額を云った。

「どうして、こんなベラボウな」と、文武は抗議した。

「明細が知りたいですか、いま出てきますから。すべてコンピュータ管理しているから間違いはないですよ。...女の子の指名料、フルーツにステーキ、テーブルチャージ、ドンペリだけであなた三万円ですよ。それに、ショータイムの特別料金から、とうもろこし、地ビール、タラバ蟹...」

「そんなもの、勝手に持ってきて、何がサービスだよ」浩太も噛み付いた。すると、奥の方からムキムキマンの人相の悪い男たちが出てくる。

「お兄さんたち、何か問題でも起こそうってわけですか」

警官まで出てくる。

「匂うな、ひょっとして飲酒運転をしているんじゃないだろうな」

三人蒼くなった。

「いいえ、お支払いいたしますので」文武は愛想笑いまでしていた。

「お支払いはクレジットカードでもOKですが、キャッシュになさいますか」

払うものを払うと、三人は逃げるように車を走らせた。

「ありがとうございました。いigo旅行を」

官民一体となって、赤字解消のために立ち上がった。

そして、今日も、カモが来るのを待っている。

第239話 産まれてこないですみません

大変な時代になった。教育の荒廃で、学校は荒れている。虐め、不登校、犯罪の低年齢化と学校は暗かった。その学校を卒業しても就職先がない。ようやく就職しても、リストラ、倒産、社会人になれば、税金も高く、これからの将来は、年金も払った分は戻らない。経済は低迷して、長引く不況。戦争の匂いもあって、巻き込まれる恐れもあった。これから産まれてくる子供たちは、お先真っ暗で、輝かしい未来などあるわけがない。

環境ホルモンで、不妊や精子の減少が増えたという。生命の世界でも、こんな危ない時代に生まれることを拒否するかのようだ。公害が進めば、動植物に異変が起こるように、人間にも異変が起こる。それは、ある一人の産婦から問題が発生した。

来生多香子は、初産で、三十になって待望の妊娠を確認した。結婚して五年目にしてようやく子宝が授かることになった。子供ができると、夫婦はさらに愛情を深くしていった。夫は二人きりのアパート生活なので、何かと妻の体を労わるように、家事を手伝うようになっていた。七ヶ月目から、名前も考え、あれこれと将来の話もするようになった。どのような子供に育てようかと、多香子は赤ちゃんのケープなんかを毛糸で編んだりして、楽しみにしていた。予定日は九月半ばだった。毎月の検診でも成長は順調で、母子共になんら問題はなかった。

臨月に入って、もう安全圏で、いつ生まれてもいい。夫婦は書店から買ってきた出産と子育ての本を読み、姓名判断の本で名前も決めていた。出産のための準備にとりかかり、用意するものを買揃えていた。田舎の両親からも初孫が産まれるというので、頻繁に電話がくる。みんな楽しみにしていた。

ところが、予定日を過ぎても一向に産まれる気配がない。病院では、まあ、一週間、二週間はざらにありますからと、夫婦もそれを聞いて悠長に構えていた。十月になった。一月も狂うことはない。不安になって、病院を訪れた。おなかはずんずんに張っていた。あまり赤ちゃんが大きくなると難産になるので、病院では薬で陣痛が起こるようにし、即刻入院となった。普通なら、すぐに陣痛が始まるのだが、何の変化もなかった。三日待っても反応がないので、産婦の了解を得て、帝王切開をすることとなった。いざ、手術となると、赤ん坊が腹の中で暴れて、産婦が苦しんだ。赤ん坊が異常な行動に出たのだった。まるで、産まれるのを拒むように、手術台上れば、腹の中から見えているように体を動かして、自由にさせない。

「困りました。まるで、胎児に意志があるように、われわれの動きが見えているのですね。信じられません。もう少し様子を見ましょう」と、一時退院させられた。常識では考えられない。自然と産まれるのを待つということにした。十一月になり、十二月になった。腹はますます大きくなっていく。予定日より三ヶ月も過ぎて、検診のエコーでは、かなり大きく成長しているということだった。多香子も参っていたが、長く産婦をやっていると、次第に慣れてきて、生活にも支障をきたさなくなった。

予定日から半年も経って、ようやく忘れていた病院側も、その異常さに戸惑い、多くの医者が、いまだかつてない状態に研究チームを作るほどとなった。胎児の成長過程を綿密に分析する。学会でも、それについての発表がなされた。

「胎児はすでに予定日を一年経過しておりまして、普通なら、体重も十キロ、歩いている赤ん坊です。胎児はやはり成長しておりまして、体重も平均並、脳の発育にも問題はありません。この写真を見てください。羊水の中で泳いで遊んでいるところです。なにやら、胎盤をいじくって、よく幼児が玩具で遊ぶように座っていますね。これは驚きです」

病院側も学会も貴重なサンプルだからと、どこまで産まないで、生育するか見守ることにした。胎教もいろいろと試みて、赤ん坊の教育班が専門に取り組んだ。言葉を教え、音楽を聞かせ、母と子のコミュニケーションをとれるよう、おなかを叩く合図を言葉にした。多香子が、腹を指でトントントンと三回叩くと、中から真似して三回叩いてくる。

多香子のような臨月を過ぎても産まれない産婦があちこちで急激に増え続けていた。これは世界的現象になりつつあった。多香子はとうとう、五年が経過して、おなかの子は四才になった。普通なら幼稚園に行っている頃だ。まったく産まれてこようとする意志がないばかりか、どの産婦の子も断固と拒絶するように暴れるのは同じだった。

おなかが大き過ぎて、歩行も困難になってくる。また、赤ん坊はただの量の栄養を摂るのではない。母親も頑張って二人分食べなければならない。多香子の子は七歳になった。誕生日にはちゃんとバースディケーキも買ってきて、お祝いをする。おなかの中で嬉しそうにはしゃいでいるのが判る。小学校の義務教育は人並みに受けさせたいから、多香子は入学式にも出席した。そして、大きい腹を出して、授業も受けた。胎児もちゃんと聞いているらしい。中で勉強しているのだった。

そうして、小学校を卒業して、中学になり高校になった。すでに体重は六十キロで身長もメートル七十とそんな少年を腹に入れて歩くのは至難の業だ。特別の乳母車が用意され、それで移動していた。エコーで見ると、ちゃんと髭も生えてきたし、顔つきも父親似でハンサムだった。いま流行りのロックが好きなみたいで、多香子はCDを買ってきて聞かせたりしていた。

そんな多香子のような妊婦が街にうじゃうじゃと歩いていた。また、電動乳母車で移動していた。まあ、教育費もそうかからない。女の子と問題を起こしたり、タバコや酒、オートバイと不良の仲間入りすることもない。腹の中が安全で、世間の風当たりもない。ものは考えようと、どの妊婦もそう思っていた。

いつまでも産まれない子は母の胎内で年をとる。こんな恥ずかしい世界、見ないで過ごすならそれがいい。

第240話 大きな古時計

高槻家のおじいさんは今年で百歳だ。この家におじいさんが生まれた朝に大きなのっぽの柱時計がお祝いでプレゼントされた。百年の間休まずチクタクと時計は動いてきた。代々、その家の

家長が朝になると、ゼンマイを巻くという慣わしがあった。すでに、おじいさんの息子も隠居し、孫の利彦がゼンマイを巻く日課を担っていた。

ある日、古時計が六時に八回鳴った。と、思うと、九時には三回より鳴らなかつたりした。みんな、この家で生まれたときからある時計なので、時計の音が生活の一部となり、その音でいま何時かと判るようになっていたので、時計が狂うと生活に支障をきたすようになった。

「とうとう壊れたのかな」と、利彦はいままで修理に出したことはないが、初めて柱時計を時計店に持ち込んだ。

「ほう、これは骨董品ですな。輸入品で、明治の中頃に製造されたものです。いままで動いているのが不思議なようなものだ。どれ、調べてみましょう」

時計の修理人も街には少なくなった。その時計職人は、柱時計を念入りに調べていたが、「どこも異常がないようですね。破損している個所はありません。たいしたものです。百年も動いていた分があります。丈夫ですね」

職人は感心していた。

「それでは、どうして時刻通りに打たないんでしょうね」

「多分、アルツハイマーでしょう」

「ええ？ 時計もボケるんですか」

「ええ、人間と同じで、忘れることもあるし、狂うこともあります。もう年ですからな。念のために、錆を落として、油をさしておきましょう。もっと長持ちさせるためには、心臓移植をすればいいんだが」

「心臓、ですか」

「ちょうど、古時計だが、若いのが入りました。部品が欠けて、もう再起不能なのがあるんですよ。そのゼンマイを入れ替えてみましょう。若返りますよ、きっと」

おじいさんの古時計がオーバーホールと移植のために入院することになって、来生家では、百年ぶりであるボンボンが一日中鳴らなかつた。

「あなた、やはりおかしいもので、あの音が聞えないと、妙に不安ですわね」

利彦の家内が云うと、

「そうだな、何か落ち着かない。あの時計の音が、おれたちの生活のリズムだったのだということがよく判った」と、利彦も頷いた。家族全員がそわそわして、何か乱れていた。

ようやく時計が退院してきた。もとの柱にかけると、一同ほっとしていた。いつもは気にならないのが、無意識のうちに家族の一員になつていたことを、いなくなつてからみんな気づいた。

ところが、変に心臓を入れ替えてから、ますます時計は狂うようになった。

「あれ、また十五分進んでいる。おかしいな、せっかちな時計のゼンマイを貰ったからかな」

「それとも、若返って嬉しいのかしら」

「はしゃぎすぎてやつか。もう寿命じゃないのか。こいつを捨てて、新しい時計を買おうか。ゼンマイを巻く仕事もしなくていいし。いま流行りのデジタルで、オルゴールが鳴り、仕掛けつきのやつをさ」

そう、時計の前で夫婦が話したあとに、どうしたわけか、時計はきっちりと時間通りに動き、鳴るようになった。

「あなた、時計が治ったわ」

「そのようだな、おれたちの会話を聞いていたようだ。よし、いいか、今度狂ったりしたら、本当に捨てるからな」

利彦はわざと時計を脅かすように云った。時計も百年生きると時計という単なる機械でなくなる。命をもった家族になるのだ。

その年の大晦日に、おじいさんが老衰のため、医者にもたないと云われた。百歳だから、いつ死んでも仕方がない。みんな覚悟はしていた。ただ、年越し、正月だけは避けてもらいたかった。

「おじいちゃんは、確か、年越しの除夜の鐘が打ち終わってから産まれたと聞いたわ。元旦産まれても、きっちりと秒読みで産まれるのも珍しいわね」

「そうだな、この時計のように、おじいさんの性格もきっちりとしていて、生活のリズムが正確な人だからな」

「体内時計とは云うけど、おじいちゃんほど、起きる時間も寝る時間も食事も判で押したような人はいないわね」

おじいさんが危篤ということで、近くの親戚も集まってきていた。年越しの仕度も正月の仕度もしてしまったので、いまさら、お供えもお飾りも取れない。みんな、おめでたいときに、おめでたくない、複雑な気持ちでおじいさんの容態を見守っていた。

テレビでは音を出さないように紅白歌合戦をやっていた。ひ孫ややしや児たちは、見たい番組は見たいのだ。広い家に大家族のほかには親戚となると五十人を超えた。

やがて、除夜の鐘が鳴る。と、同時に古時計もボンボンと鳴り始めた。

「おや、また狂ったかな。まだ十二時ではないのに、もう鳴っている」

「おかしいよ、あの時計。十四回も鳴って、まだ鳴っている」

ひ孫の一人が鳴る回数を数えていた。

「三十五、三十六…」

みんな、時計の前に集まってきた。

「おかしいな、いままでこんなことは一度もなかったのだが、とうとう壊れたか」

時計はボンボンと鳴り終わらなかった。

「百六、百七…」

と、突然、時計は心臓が破裂したように、ゼンマイが外れて、ガラスも割って出てきた。

「いままでで、百八回鳴ったよ」

すると、同時におじいさんも息を引き取った。

「ご臨終です」と、脈を診ていたお抱えの医者が云った。除夜の鐘が鳴り終わると、産まれたおじいさんは、同じ時刻に亡くなった。正確な人生だった。

全く客が来なくなった。店舗を構えて、待ちの商いほど辛いものはない。チラシの折込でセールをしても不発で終る。新聞広告を出しても同じだった。経費だけが無駄に増え続けるだけで、見返りが無い。それは、どの商売も同じだった。デパート、スーパーも客より従業員のほうが多い。効率を考えれば大きいか小さいかの違いでしかなかった。

春秋堂の骨董品店の親父も、最近の売上には愕然としている。あまり客足がないので、店の前を出てみた。商店街を歩く人の姿は遠くまで見えなかった。やはり、隣の床屋の親父も、文房具店の親父も外に出て、きょろきょろと退屈そうに眺めていた。

「どうですか、景気のほうは」と、床屋が訊く。訊くまでのこともない。見れば判るでしょうと云いたい。

「さっぱりですな」と、骨董屋は諦めの笑いを忍ばせて云う。

「これじゃ電気代も出ません」と、床屋。

「みんな、どこへ行っているんですかね」と、話に文房具屋が口を挟む。

「郊外の大型店にささっているんでしょうか」

「いや、大型店にも偵察に行ってきましたが、ガランとしていました」

「じゃ、一体全体、この街の人はどこへいっちゃったんだ」

「ひきこもりのヒッキーになっているんじゃないですか。出ればお金を使うから」
親父たち全員腕組みして立っている。

瀕死の商店街では、店を畳むにも畳めないでいた。いま、商売を辞めても、借金だけが残るからだ。どんな小さな商店でも、表向きは判らないが、累積した驚くべき借金だけが支払いもできないまま残っていたりする。土地を担保にして、景気のよかったときに借りた残だ。店を売っても、帳消しにはできない。地価の暴落で、すでにどこも債務超過。どんなに安く売っても、担保が抜けないほどの残高があった。商売を続けてもやりくりがつかない。辞めるに辞められず、二進も三進もゆかないところまで追いつめられていた。

人っこひとり通らない商店街に珍しく人が通った。中年の恰幅のいい紳士だった。骨董屋がみつけて、紳士の腕を掴んだ。

「お客さん、いい壺が入ったんですよ。見てゆくだけ只ですから、覗いて行ってください」
すると、隣の床屋が、もう一方の腕を掴んだ。

「お客さん、だいぶ髪が伸びましたね。どうですか、調髪してゆきませんか。今日は、大サービスしますよ」

すると、文房具屋も負けてはいられないと、紳士の足にしがみついて、

「お客さん、消しゴム安くしときます」

骨董屋が抗議した。

「これは、おれが先に見つけた客だ。邪魔をするな」

「なんだと、おれの方が先に手をつけていた」と、床屋も譲らない。紳士は三人に引っ張られて困っていた。

「あのう、わたしはですね、ただ、ここを通過して、銀行に行く途中なんですがね」

「銀行だって？」三人は声を揃えて驚いた。

「銀行にあなた、一体何しに行くんです」骨董屋が愚問する。

「何しにって、お金を預けに行くんですよ」

「ええ？ 銀行って、お金を預けたりもできるのか」床屋が後の二人に訊いた。三人とも、長く、借りたり返したりするだけで、預金したことがなく、預金という言葉すら忘れていた。最近はお金に困るから、できるだけ銀行の前を通らないようにしていた。融資係にでもみつかりたい。

紳士は三人を振り切って逃げ出した。

「待て、この野郎」と、床屋が追いかけたが銀行に入ってしまった。

「くそっ、すばしっこいやつだ」

そんな噂が広がってか、ますます商店街を通るものはいなくなった。どの店も売上ゼロが続いた。床屋がまた外で油を売っている。

「うちは、もう一週間も売上がゼロだぜ」

「なんの、うちなんか二週間もゼロだぜ、参ったか」と、文房具屋と変な自慢話をしていた。

「最近、骨董屋の顔を見ないな。生きているのか。様子を見に行ってみよう」と、二人は骨董屋に入っていった。当然、電気は止められて、点いていない。薄暗い店内が、ガラクタで埋まっている。骨董屋がレジの前で倒れていた。

「大丈夫か、息をしているのか」と、抱き起こすと、意識が戻った。

「何か、食い物をくれ」と、か細い声を出している。げっそりと痩せ細って、餓死寸前だった。みんなが、持ち寄った食糧で、骨董屋は生き返った。

「このままでは、おれたちは完全に干されてしまう。こうなったら、強硬手段に出るよりあるまい」

床屋の発案で、三人は示し合わせ、通行人の捕獲に乗り出した。

「こうなったら、何がなんでも買ってもらおう」と、たまたま歩いている女子供、老人でも手当たり次第に捕まえて、店へ閉じ込めた。みんな、何事かときよとんとしている。

「さあ、命が惜しかったらボールペンを買うんだ」

「カミソリで首を切られたくなかったら、大人しく散髪させろ」

それを拒否した客は、拉致して、家に電話までさせた。

「こちらは、商店街の骨董屋だ。いま、娘を預かっている。返してもらいたかったら、蒔絵の硯箱を買え、半額に負けてやる。いいな、絶対警察には連絡するなよ」

すっかり、ものが見えなくなっていた。あまりの不景気に、犯罪との区別もつかなくなるほどみんな必死だった。

商店街にまもなく、数十台のパトカーと機動隊が押しかけた。

リサイクル法が施行されてから、ゴミの分別に新たな項目が加わった。市役所に問い合わせがたびたび来るのが、十二項目以外のものを出すときにどこに入れればいいのかという質問だった。それと、ゴミ収集車が指定の日にゴミ置き場に行くと、とんでもないものが置いてあったりした。それは処分に困るというので、分別をさらに詳細に分けることとなった。

「あのう、国債を捨てるには、いつの日に出せばいいんですか」と、役所に電話が来る。国債もすでに地に落ちて、価値のない紙屑となっていた。

「それは、新聞紙などと同じ日に紙紐で縛って出してください」

「もしもし、核の廃棄物が大量にあるんですが」

「ええ？ お宅、そんなものどこから持ってきました」と、職員も慌てふためく。

「すみません、女房がいなくなったので、いつ出せばいいんでしょう」

この問い合わせが一番多かったので、役所では不要の妻の日を別に設けた。回収には、役所のバスで回る。まさか、ゴミの車というわけにはゆかない。

ゴミ置き場に、捨てられた女房が数人立っていた。回収バスが到着する。請負業者が、泣いたり、ふてくさっている女房たちをバスに乗せる。その中に婆さんがひとりいた。「誰だ、どさくさに紛れて婆さんを出したのは、これはもう使えないから置いてゆこう」哀れ、婆さんは持ってゆかない。老人を出す日は別にちゃんとあるのだ。

愛し合って結婚したのだが、性格の不一致とか、家柄に合わない嫁だとか、いろんな理由で女房を捨てる。その女房たちは、バスで下取り業者に回される。人妻リサイクルセンターでは、それをチェーン店で販売するのだ。多少おかちめんこでも、料理が得意とか、人間にはいろんな長所もあるから、それで利害関係が一致する人が買ってゆく。

最近の傾向で、家を出される旦那様が多い。そこで、市役所では、ご不要の亭主の日も回収日として定めた。やはり、回収日に、バスがゴミ置き場に到着する。ぽつんと、座り込んでタバコばかりスパスパやっている寂しそうなおじさんを乗せてゆく。おじさんたちは、市内のお父さんリサイクルセンターで交換もしくは売買される。稼ぎの悪い亭主、ギャンブル好き、遊び人、浮気性は引き取り手がなく、いつまでも売れ残っている。特にアル中で暴力を振るう亭主は売れ残るから、店では廃棄処分にするしかない。

そんな、使えない人間のゴミの最終処分場が山の中にあつた。哀れ、トラックに載せられた奥さんや旦那さんが、ダンプカーで山の中に捨てられて、そんな人たちがうじゃうじゃとたむろしていた。

いま、資源ゴミの中でも人間が一番余っていた。働く意欲のなくなった、再生のきかない人間たちが如何に多いことか。潰しのきかない人間は、加工にも回せない。多少なりとも見込みのある者は、再利用のために、人間加工工場に回された。そのままで使えるものも充分あるので、それらは引き取り手があり、また幸せな人生を歩むことになるのだが、潰すには勿体無いもの、さりとして、そのままで使用に耐えないものは、すべて、回収バスがリサイクルセンターから、加工工場に回した。

回収バスからどどんと、お父さんたちが降りてくる。工場の入口では、検品係がいて、品定めを行う。体格、健康、体力測定など行い、耐用年数を確認する。中には年式をごまかして若く年齢詐称するものもいるから、どれだけ働けるかを調べるのだ。その次の部屋では、意識調査と、心理分析がテストされる。そして、続きの部屋で、特技テストが行われていた。パソコン、料理、電話応対、決断力、協調性、独創力、手先の器量さ、いろんなテストを繰り返して、それらの結果はリアルタイムでコンピュータに集計される。この人間は何が問題で人生に欠陥を持ったのか、それは修復可能なのか、ありとあらゆる個人の可能性と能力、使用目的を分析して、答を導く。いまだかつて、個々の人間に人生の進路を機械を使って測定し、適所適材の指針を示した場所はなかった。ここの工場は、人間リサイクルの加工場として、人間の欠点を補うためのトレーニングや性格改造までするのだ。酒好きな者には、酒が体内に入ると少量でも酔うように加工する。下戸に改造してしまうのだ。短気で乱暴な者には、女性ホルモンを多くし、ロボットミイならぬ最新チップを脳に埋め込み、優しい人間に改造する。手の遅い者は、運動神経を刺激して、反射能力を高めるようにする。

すべて、トレーニングから手術まで、一貫したシステムが確立されていた。ぶ男で劣等感を持っている人間には、整形手術までしてやる。そして、戸籍上の名前まで変えて、全くの別人で過去の障害を引きづることのないよう、新たな人生のやり直しができるようにしてやる。

日吉昇も、会社をリストラされて、パチンコばかりやっている負け組だった。女房も愛想が尽きて、ゴミの日に出した。不甲斐ない人間的弱さに加え、失敗の連続で、卑屈になりがちな後ろ向きの性格が、どこへ行っても務まらない。

そして、加工工場へと運びこまれた。どうしようもない人間にも使える部分がある者は、こうして再生人間にされた。昇も、いいところがあった。きちんと整理しなければ気の済まない性格だった。工場では、それをうまく活用した仕事場を与えるよう、昇のデータを分析してみた。昇の適性が出た。職業は古本屋。多少、偏屈でも無愛想でもきちんと本を整理していさえすれば、なんとか務まる仕事だ。

暗い性格が少しは明るい男に改造された昇が、古本屋の林語堂に来たときは、その店の乱雑さに、猛烈にファイトが沸いてきていた。すべての本を作家別に揃える仕事を嫌な顔ひとつせず黙々とやっていた。それを見ていた林語堂店主の奥さんは感激して、昇を亭主に迎えるほうが商売繁盛間違いなしと踏んだ。

翌日、哀れ、代わりにゴミ捨て場に林語堂店主が出されていた。

第243話 追ってくるもの

夜中の廃墟の街を男が走っていた。後ろを振り返りながら息を切らし、蹴躓いて転びながらも、必死で逃げていた。

この街は、すでに死んでいた。大きな工場が閉鎖してからは、住民の半数が転出して行った。

企業城下町は灯の消えたようになっていた。工場の周辺の下請け零細企業も共倒れ、問屋、納入業者も討ち死に、商店やアパートも閉鎖、小判鮫の関わりある住民が多かったから、残った市民も枯渇していた。

そんな屍の街を男ひとり走っている。職業、インテリア施行、四十七才。彼はいつもびくびくして暮らしていた。借金が雪だるま式に増えて、銀行ではすでに貸さないのので、市中金融に手を出した。それも返済が滞り、延滞利息が高額になり、多重債務者に陥った。電話、督促状はまだよかったが、取り立てにひっきりなしに事務所に訪れるようになってから、すっかりとノイローゼになってしまった。家まで押し掛けるようになってからは、いつもどこかに隠れていた。ヤクザのような連中から、すごまれてから、身の危険さえ感ずるようになった。

この夜、こっそりと家に戻ろうとしたら、玄関先でパンと、ピストルのような発砲音がした。殺されると思ってインテリアは全速力で逃げた。逃げながら、後ろばかり振り返っていたので、電信柱にしこたま顔面を打った。額が切れて夥しい血が流れた。それでも、そんなことに構ってられないほど、恐怖感に囚われていた。真夜中の通りに人影がないほど、どこから誰かが出てくるのではないかという怖さで、無我夢中でインテリアを走らせた。

どこかの家にかくまってもらおうと、インテリアは見知らぬ家の玄関の戸を叩き続けた。騒々しさに驚いた住人が起きてきて、戸を開けた、そこに血だらけになった男が立っていたものだから、悲鳴を挙げて、逃げ出した。老夫婦だったが、スリッパを履いたまま勝手口から寝間着のまま飛び出した。てっきり、後ろから追いかけてくるものがあると思ったインテリアは、老夫婦の後をついて、土足で家の中を走り抜け、勝手口から老夫婦に続いて走った。

裏通りの飲み屋街に出ると、こんな深夜まで呑んでいた酔っぱらいが、立ち小便をしていたところ。叫びながら三人が走ってくるので、酔っぱらいは酔いが醒めた。何か一大事が起こったと慌てふためき、酔っぱらいも悲鳴を挙げながら、逃げた。スナックのママが、店を閉めて帰るところだったが、四人がこっちに向かって大声で叫びながら駆けてくるので、大変なことが起こったに違いないと、ママはキャーと顔を引きつらせて駆けだした。

街はしんと眠っていたが、唯一店を開けている二十四時間営業のコンビニがあった。その店長も、五人の集団が必死で逃げてくるので、店を開けたまま、訳が分からないまま逃げ出した。「うわー、大変だ。助けてくれ」と、六人が逃げてくるので、その騒がしさに目覚めた付近の住民が、あちこちの門口から次々に飛び出して、後に続いた。死んだように眠っていた街が、たったひとりの男によって、叩き起こされた。

六人が十二人になり、二十四人になり、四十八人が九十六人、百九十二人、えい、暗算ができない、とにかくものすごい狂奔する集団になって、どどどとと地鳴り響かせ夜中の街を揺り動かした。マンションから、アパートから、交番から、旅館から、みんなネグリジェや、中にはすっぱんぼんの格好で、飛び出してきては、逃げる列に加わった。

夜中じゅう走り周り、新聞配達が反対側からやってきた。

「何かあったんですか」と、新聞の束を抱えながら訊いた。

「北朝鮮が攻めてくるらしい」

それは大変だと、新聞配達も集団に入って逃げ出した。

犬の散歩に出てきた老人が、その異様な町内マラソンに驚いて訊いた。

「朝からマラソンですか」

「ばか、早く逃げろ、大地震が起こるらしい」

それは大変だとばかり、犬と一緒に老人も加わった。騒動を聞きつけて、警官がパトカーでやってきた。

「一体、何が起きているんだ」

「知らないんですか、小惑星が衝突するらしい」

警官もあたふたと列に加わり走りだした。「大変だ、大変だ」と、口々に叫んでいた。みんな血相変えて汗だくで走っているの、団地の主婦や、通学の学生たちも加わった。

「何かあるんですか」

「銀行が倒産するんです」「借金取りが追いかけてくるんだ」「殺人鬼が日本刀振り回して追ってくるらしい」

理由はまちまち、なかには烏合の衆もいて、ヒステリー状態になって、訳も分からず走っている連中が多かった。

すでに集団は数万人の規模に膨れあがっていた。ランドセルの小学生、幼稚園児から杖をついた老人まで、エプロン姿の主婦が鍋釜手に、パジャマで枕を抱いて逃げるもの、風呂上がりでバスタオルを体に巻いて走る新婚さん、どどどどどと、地響き立てて逃げ惑う。

その集団は、一向に街から出なかった。ぐるぐると回っているだけで、右往左往して、逃げるということに忙しい。

第244話 年 金

婆さんが倒れていた。蒲団から這い出て、寝間着のまま、俯せになっていた。朝方、様子を見に行った嫁の福子が発見した。

「おばあちゃん」と、駆け寄り、揺り動かしたが反応がない。口元に手を持っていったが、息をしていない。心臓の辺りに耳を付けたが、鼓動が聞こえない。体温もなくなって冷たかった。

「おばあちゃん」と、心臓の辺りをマッサージしたが、すでに手遅れだった。持病の狭心症の発作が夜中に起こったのだ。

「あなた、大変よ、おばあちゃんが、おばあちゃんが」

福子の大騒ぎで、亭主の俊平と就職浪人の息子と、自称家事手伝いの娘が走ってきた。息子の武市が慌てふためき、ケイタイを出した。

「救急車って、117だったか、114だったか」

一タダイマノ時刻ハ七時二十四分三十秒デス。

「いま、七時二十四分だって」

「バカ、おまえ、どこへ電話しているんだ」

「もう、死んでいるから、お寺さんじゃないの」

「死亡診断書がいるから医者だろうか」

「自動車修理工場は？」「おまえは、何を考えているんだ」

みんなかなり焦っている。

「とにかく、119番しましょう」と、福子が電話しようとする、

「待て、電話は待て、よく考えてみろ。婆さんが死ぬと、われわれはどうやって暮らしてゆくんだ。もう、年金が降りないんだぞ」

全員シーンとなった。亭主はリストラで一年も職がない。五十過ぎて、仕事があるわけがない。福子もパートタイマーを切られてから、仕事がなかった。景気がものすごく悪くなると、アルバイトの募集もない。息子、娘も就職試験で失敗してから、一年以上探していた。失業一家の唯一の収入源が婆さんの年金だった。その婆さんに死なれたら、一家は餓死するよりない。

「あなた、どうしましょう」

「そうだな、どうやっても生きていることにしなくては」

「それって、武田信玄の影武者みたいだね」

「そうだ、世間には生きているように装おうのだ」

「亡骸はどうするのよ」

「今夜密かに通夜をやり、夜中に庭に穴を掘って墓を作ろう。すべて親戚にも教えず密葬をするのだ」

「でも、年金を受け取りに行くのは...」

「寝たきりの老人もいるんだ、誰でもいいんだ。代わりに降ろしにゆけばいい。年に一回の現況届も、代理でいいんだ。そうすれば、これから何十年もふた月に五十万は入る」

「そうね、おばあちゃん、年金二つも長く掛けていたものね」

「いいか、おばあちゃんは寝たきりで、絶対安静、面会謝絶。誰にも逢わせないということにしよう」

それから、四人だけで通夜の準備がなされた。隣近所にみつからないように、こっそりと庭に亡骸を埋めると、婆さんを寝せていた蒲団の中に毛布をぐるぐる巻きにしたものに寝間着を着せて、婆さんのヘアピースを被せた。さも、蒲団の中で寝ているように見せかけた。これで、寝たきり老人を装おう。枕元にお盆に載せた水差しなどを置いて小細工もした。

「いいか、おばあちゃんは生きているんだ。何があっても本当のことを云ってはいけない。もし、バレそうになったら、惚けて、徘徊し、行方不明になったことにする」

一家で今後のことをあれこれと話し合った。すべては年金を貰うためだった。

それにしても仕事がない。木枯らしが吹く寒い戸外を不安そうにみんな窓辺で見ている。これからの日本はどうなるのだろうと。

第245話 往診

十月一日。某病院。

昨日まで、押すな押すなの繁盛ぶりだったこの病院も、一夜明けて一日は通院患者が一人もい

なかった。待合室はがらんとしていて、看護師たちも呆れていた。今日から老人医療費が値上げするから、昨日のうちに、薬も一月分貰い、寝溜め喰い溜め治療溜めをみんなしていた。その反動で、誰も患者がこない。

その現象はいまだけだと、病院側が高をくくっていると、一週間経っても、二週間経っても患者は戻ってこなかった。いままでの病院の老人たちの賑わいは何だったのだろうか。病院にかからなければかからなくてもいい、似非患者が多かったということだ。単なる病院は老人たちの社交場だった。医療費がただのときは、あれほど毎日通い詰めていたのに、一割から三割負担になった途端、現金なもので患者がガタ減りしたのだった。たまに来るのは、本当に悪い病人だけとなった。昔のように、漢方や売薬で我慢する老人が増えた。昔人の知恵で、風邪にはしょうが湯、葛湯、血圧には玉葱というふうに、食べ物で直すことが一般的となった。医療費負担が高くなったのでおいそれと病氣もしてられない。

病院の藪田先生は、青くなった。このままでは病院は倒産に追い込まれる。なんとかしなくてはならない。いままで、所得番付に載って、羽振りのよかった医者家業も、ここにきて、看護師たちの給与、医療器具のリース代の支払いにも事欠くようになった。

藪田先生は、じりじりと暇な病院で待ち続けたが、待てど暮らせど患者はこない。

「よし、向こうが来ないなら、こっちから押しかけてやる」と、その昔、先代の医者がやったように、一軒づつ往診をすることにした。患者のカルテを持たせ、診療鞆に器具を詰め、看護師二人を従えて、いざ、車で回診だ。

「藪田医院ですが、おばあちゃんの具合どうですか」

医者が来たというので、家人は大騒ぎとなった。

「おばあちゃん、どうしたの？」

てっきり本人が悪くなったと思って、部屋に入ると、婆さんはケロリとしている。

「わしゃ、医者なんか呼んでいないよ」

「だそうですが」と、玄関で断られるので診療もなにもできない。

次の家では、やり方を変えた。

「お宅のおじいさんですが、最近、病院にお見えにならないので、心配して来たんですが、ほおっておくと、大変なことになるんです。このままでは生きて五年の命です」

と、危機感を煽ることにした。嫁さんが対応していた。

「まあ、おじいちゃんは今年で九十ですから、五年もあと生きられるんでしたら」と、お話にならない。

こんな、弱気のセールスではどこも断られる。もっと強く出なければならぬ。次の家では、玄関に上りこんで、注射をちらつかせながら、

「奥さん、治療をさせませんか。おれは、昨日、刑務所を出てきたばかりなんだが」と、パンツのゴム紐を売る押し売りスタイルに切り替えた。

「はあ...」と、何のことかさっぱり判らない様子。

看護師たちは、あまりに古い手口に呆れていた。

「先生、いまだきそんなやり方では患者さん獲得は難しいですよ」

「だったら、どうすればいいのだ」

「いまは、患者さんが病院を選ぶ時代です。あちこちにできましたから、よそと違うことをしないとダメです」

「たとえば？」

「年中無休、二十四時間営業の病院とか」

「それはいいが、このわたしはいつ寝るのだ」

「先生には寝ないで頑張ってもらいます。病院再建のためです」

「そんな、患者より先に死ぬ」

「第一、名前がよくありません。ヤブだなんて。名前を変えましょう。『白衣の天使』というのはどうですか」

「どこかで聞いたことのある名前だぞ」

「それで、深夜営業のためにネオンをチカチカ、派手にゆきましよう」

「それは、あなた、風俗と間違えられないかい」

「ついで、わたしたちの白衣を超ミニにして、浣腸サービス付という謳い文句で...」

藪田先生は考えこんでしまった。医療の現場はそこまで落ちてしまったのか。わたしは医師なのだ、人々の命を救うために病院を開設したのだ。サド、マゾのためではない。

藪田先生は、給与も払えないので、看護師たちを解雇しなければならなかった。病院の借金のために、夜昼一人で働いた。寝る時間もない。ろくに御飯も食べていないので、すっかりと痩せてしまい、げっそりと人相も悪くなった。髭を剃るのも忘れ、無精髭だったし、肺炎に罹ったようで、熱と咳も出てきた。氷嚢を頭に縛りつけ、点滴を自分でやりながら、少ない患者の診察をしていた。

「喜多村さん、げほげほ、どうぞ、ここにお掛けください」

藪田先生は目が赤く、点滴をぶら下げながら、よろよろと這うように患者を診ていた。

「注射をしましょう」と、先生は患者の腕を取った。注射器の持つ手が震えている。患者の喜多村はこれではまともな診療ができないどころか、危ないので先生を助け起こしながら云った。

「先生、熱を測りましょう」先生は、患者に体温計をしてもらい、喉やリンパ腺などを調べられていた。

「レントゲンを撮って見ないとなんとも云えませんが、どうやら肺炎のようですから、病院に行きましょう」

医者が患者に診てもらおう。そんな時代がやってくる。

第246話 三男の帰郷

この春、横浜に就職で行った三男の拓人が始めて帰省した。空港に見送りに行ったときは、まだ残雪があった。お盆は仕事が忙しいので夏過ぎて単身ひょっこりと帰ってきた。甘ったれた電話の声で空港まで迎えに来てというから、家族で出迎えだ。

空港のロビーで待っていると、流行の帽子にサングラスをかけて、いきがったスタイルの息子が大きなスポーツバッグを手に出してきた。

「よう、久し振り」と、すっかり東京弁。「お昼はどこかで食べようか。おれの奢りで」と、給料を貰う身分になったら気が大きくなる。

「よし、初めておまえに奢ってもらうか」と、車でわたしは郊外の寿司屋に連れてゆく。「さあ、遠慮しないでどしどし注文しろよ」と、わたしは妻と娘に云う。

食べながら、拓人は前から云っていた、会社を辞めたい話を切り出していた。

「おれのしたいことは、別にあるような気がして。何をしたらいいのか判らない」と、社会に出てみると、幻滅したような云い方をしていた。

「そうそう、仕事ってのは面白可笑しいものじゃない。自分の本当にやりたいことが見つかるまでは、我慢していまの会社にいるんだな」

誰しもそうだが、田舎から上京すると、大都会の波にもまれて、自分というものに気付くのだ。そして、若者特有の自信のようなものが、自分の度量も知らず、高めることでもがくのだ。

「何かいい仕事がないかなあ」と、もっと、高度な仕事がしたいと騒ぐ。

「おまえより優秀なやつは世の中には沢山いる。おまえのその裏づけのない自信だが、口だけじゃ通用しないぞ。いまの仕事の続けながら、余暇でいろんな習いものをしたり、資格を取得したりして、少しずつ自分を高めてゆくんだな。それも、安定した収入と生活があってこそだ。早まるなよ」

どんな仕事も下積みは地味なもので、それに耐えられるものだけが残ってゆく。上司に怒鳴られたくらいで辞めていれば、いつも一から出れないのだ。それが判らないのが無謀な若さの浅はかさだ。

拓人は卒業してから逢っていない仲間逢うために五日間の休暇を使っていた。家に帰るのは、夜通し遊んで昼間寝るために帰ってくるような毎日だった。たまに帰ったのだから、我家の夕食をともにすればいいのに、カラオケだ、居酒屋だと、友人の家を泊り歩いていた。

友人の多くは県内でも市内就職希望者が多かった。ひとりっ子が多いから、将来ともに親の面倒を見なければならぬとか、親も傍に置いておきたいと思っているのが多いから、地元企業の募集を探していた。ところが、田舎だから大きな工場も会社もなく、有効求人倍率は全国最低で、五人求職があって、求人は一人という状況だったから、ろくな仕事がない。あっても狭き門で、全員が高校卒業しても仕事がない。とりあえず、バイトで糊塗していた。みんな、暗く、最低賃金も割っているような安い時給で仕方なく働いていた。勿論、社会保険や交通費などもない。身分保障がないから、いつ切られるか判らない不安定な仕事に甘んじていなければならなかった

。「拓人は、いくら貰っているんだ」と、専ら給与の話。聞けば、みんなの三倍も貰っている。社保も完備、寮に入っているからアパート代もかからない。ボーナスも出る。月の手取りは、大方貯金できるか、小遣いだ。

「いいなあ、羨ましい。おれも、東京へ出られたらなあ」

出たくても出られない事情を抱えて、無職でぶらぶらしているやつもいた。いつまでも社会に出られず、いまだに親の脛を齧り、小遣いを貰っているものもいる。ケイタイの支払いにも窮して、ゲームソフトを売り払って、なんとか生活しているものもいた。

かつては公務員になるのは、どこにも行き場のないものが仕方なく、安い賃金覚悟で行ったものが、この不景気で安定志向が大方で、いまやツテやコネがなければなかなか地方公務員にもなれない。学歴の高いものまで、みんな公務員の試験に殺到していたから、普通高校でもランクの下のものは試験で落ちる。

拓人はそんな友人たちに食事と酒を奢った。都会では自分は最低の仕事をしていると、劣等感にさい悩み、辞める相談で帰ってきたものが、変な優越感に浸れた。

酒の席で友人たちは拓人にぼやく。

「おれなんか、スーパーの裏方でこき使われて、残業もつかないんだぜ」

「ひと言文句を云うと、いつでも辞めていいからな、おまえの代わりなんか、掃いて捨てるほどいるんだと、高飛車に云われた」

「一日、七時間働いても労働保険も付けてくれない。辞めさせられても、雇用保険も付かないんだ」

「おれなんか、三十度以上の炎天下で、道路工事の旗振りだ。暑くて、危なくてたままないよ」

「それでも、ちゃんと貰うもの貰えるからいいじゃねえか。おれは、毎日、仕事もないから、時間を潰すのに大変で、図書館でDVDを見たり、本屋で立ち読みしたり、買いたいものも買えないから、いつも一人でうろうろしているよ」

そんなみんなの愚痴が一斉に出てきた。みんなの立場を考えれば、拓人はいまの仕事がまだましだと思うようになった。都会の憂鬱、田園の憂鬱、どこに居ても楽なものはない。まだ、都会の方が仕事はある。自分の悩みなんか贅沢なものだ。

五日間の休暇が終わり、拓人は帰ることになった。

「おやじ、おれ、いまの仕事、続けてみるよ。続けながら、考えてみる」

「そうか、それがいい。都会で自分を見失うなよ。自分を探すんだぞ。仕事は仕事と割り切って考えてな。無意識に生活していれば、流されて時間だけが過ぎてゆくが、意識的に物事を見ていけば、必ずそのうち見つかるから」

拓人にとって、古里は暗く重いものに見えたらう。みんな元気なく、活気がなく、商店はシャッターを下ろし、デパートは閉鎖したまま買い手がつかない。やたら、若い失業者ばかりうろついている街。

「おまえ、今度はいつ帰るのだ」

「正月は仕事が忙しいから、また一年後のいま頃だな」

長男も次男もみんな都会で就職していた。親は親で商売では四苦八苦している。息子たちが帰ってくる家だけは守らねば。

「送ってゆこうか」と、わたしが云うと、

「いいよ、恥ずかしい」

帰る息子の背中が少しは大きく見えた。

第247話 和子の帰郷

北海道を離れる、それが早乙女和子の夢だった。いつも、この町を離れようと雪降る駅に来ては引き返した。もう、こんな土地には住みたくない。常日頃からそう思っていて、しがらみのために三十四年も暮らしてしまった。どうしても肌が合わない土地というものがある。息をしてもどこか空気が違う。話をしても、還ってくる言葉が荒い。

長年住み慣れた家の戸締りをして、新聞も断り、郵便物も実家に届くよう、転送届も出した。荷物は、また成り行きで、送らせればいい。ともかくもこの土地を一刻も早く出るのが。和子はそう思い、列車の人となっていた。とりあえず、大きな荷物に貴重品、預金通帳、保険証など、亡き夫の位牌まで入れて出てきた。もう、なんの未練もない。

津軽海峡を渡っていったのは、連絡船でであった。昭和四十四年の晩秋だった。まだ二十四才の和子が両親と共に挙式のため北海道に渡った。あの頃よりも青函トンネルが出来て、内地は近くなった。結婚生活は大家だったので、辛いものもあったが、それなりに幸せだった。やさしい夫がいた。五人の子供も設けた。それまではよかった。夫が病で倒れ、四十四の若さで亡くなってからは、女手ひとつで子供を育てた。その子供たちもみんな社会に出て、東京へ出ると、広い家に未亡人としてひとりぽつんと暮らしている自分があるのだった。女ひとり住まいだから無用心で、表札はいつまでも夫の名前にしておいた。いろいろな人が訪ねてくるから、玄関にはいつも男ものの履物を並べておいた。

ひとりだから、食事もひとり分作るのも勿体無いし、広い食卓にぽつんとひとりで食べる食事もおいしくはない。てっとり早くあるもので済ませるから、冷蔵庫の中は空っぽ。冷凍庫だけは貰いものの食品で埋まっていた。姑さんも早くから亡くなり、一応、本家だから仏壇もあり、たまに法事とかあれば、親戚が集まってくる家なのだが、普段は訪れる客もなくひっそりと陰気くさかった。

和子は寂しさを紛らわそうと、仔犬を飼ったが、それも昨年死んだ。動物も死ねば、人間と同じで可哀想だったので、もう二度と生き物は飼うまいと心に決めた。

ひとり暮らしをいいことに、隣家が土地の境界のことで難癖をつけてきた。日頃つきあいのない他所から入ってきた一家だったので、弁護士まで立てて争うこととなった。まさか、隣り同士でいがみ合うことになるとは思いもしなかった。

子供たちの問題も起こった。長女が離婚騒動を起こし、向うの家まで出向いて調停もしなければならなかった。それが一段落すると、長男、次男と続いてリストラに遭い、失職中、次女も

アパートが火災になり、焼け出されていた。不幸は続くもので、三女も交通事故で入院することとなり、東京を往ったり来たりしなければならなかった。いままで、夫の生命保険でなんとか食べていったのに、貯金も底がついた。

心痛のあまり、和子本人も病に倒れた。心筋梗塞と診断されて入院したが、死ぬ寸前までいったことにショックを受けていた。ひとりで入院していても、誰も来てはくれない。子供たちもそれどころではないし、親戚も内地で頼るものなどいないのだ。病気をしてから、元来楽天家の和子は、気弱になった。このまま、広い家の中で誰にも看取られず心臓発作で死ぬのだろうか。死後だいぶ経ってから発見されるのだろうか、ひとり暮らしに初めて恐怖を感じるようになった。四十で未亡人になってから、子供のために頑張ってきたものの、みんな巣立ってゆくと、自分に残っているのは位牌とだだっ広い家だけだった。趣味事をして忘れようと、油絵や陶芸もやったが、芸術仲間は冷たいところがあった。親身に相談に乗ってくれる人はいなかった。老絵描きは、和子をものにしようと近づいて、しつこく家に押しかけてきたりした。怖いことが続いたので、和子は家を離れる決心をしたのだった。いま、自分を受け入れてくれるところは、古里よりない。老いた父母のいる北国の町だ。

和子が青森に着いたのは、夜の八時を回っていた。連絡を受けた老父母が駅に迎えにきていたのは驚いた。両親の顔を七年ぶりで見ると、いままでの辛いことなどが思い起こされて、どっと涙が出てきた。両親は、ただ、「よく来た、よく帰ってきた」と、肩を抱きながら共に泣いていた。

駅前の昔から変わらない食堂で、晚い夕食を摂った。辛抱して、外食もしたことがない和子に味噌汁と温かい御飯がありがたかった。

海辺の家は昔と変わらない。兄弟も他県に嫁いだりして、老父母だけが、つつましく生活していた。仕事を辞めてから二十年は経つので、いまは年金生活だった。八十を過ぎてても元気なのが何より嬉しかった。和子は帰ってくる理由を何も云わなかったが、両親は薄々勘付いていた。

「暫く、いるんだろう」と、父は訊いた。旅行で立ち寄ったふうでもないのを悟っていた。「お父さんさえ、構わなかったらそのつもり」と、和子はようやく安堵から笑顔を見せた。「向うにいてもひとりなんだから、好きなだけいればいいよ」と、母もしみじみと云う。

和子は、久々に帰省したので、旧友に逢ってみようと、翌日からあちこちへ電話した。和子の高校の同級生が三人、和子のために、席を設けることになった。一番仲のよかった友達だ。和子は指定された洋風居酒屋に出向いていった。安いので有名だ。店内は若い人でいっぱいだった。その中で、場違いな年輩のおばさんたちがいて、和子に手を振っていた。見ると、そのボックス席だけが何かくすんでいた。見窄らしい格好の三人の友人が暗い顔をして座っていた。

「久しぶりだね。みんな元気？」

和子だけがはしゃいでいた。

「いいわね、あんたはいつも変わらない。明るくていいね」と、看板屋の竹内さんが顔を歪めて云った。

「あなた、顔、どうしたの？」

「三叉神経痛の後遺症だ。痛くて大変だった」

あんなに綺麗な人が顔面麻痺でひどい顔になっていた。

「わたしなんか、癌の再発で、今度はみんなと逢えるか判らない」と、バレー部で活躍していた和田さん。すっかり痩せてしまって見る影もない。

みんな、閉経してからとみに更年期障害が強くなり、いろいろ病気もやった。こうしてたまに逢えば、孫と病気の話した。

「なんか仕合わせそうじゃないね、典子はいま何をしているの？」

和子は秀才で確か津田塾へ行った典子があまりいい身なりをしていないのに気遣って訊いた。

「うちは、連れ合いが事業で失敗して、借金取りに追われて離婚したの。いまは体壊して働けないから、生活保護貰ってなんとかね」

人の運命なんて判らないものだ。一番出世したと思っていた典子が最低の生活をしているとは。

「いまは、看板も仕事がないから、うちの人、出稼ぎに行ってる。わたしは内職で喰ってるわ。息子が事件起こして刑務所に入っているから、弁護士費用もばかにならない」

「わたしも、癌の手術代捻出のために家を売って、子供は大学を中退して働いているの。なにかわたしたちの世代の星回りってよくないわね」

「こうしてみると、和子が一番仕合わせそうね。昔からオポチュニストだったもの」

「悪く言えばノーテンキ」暗い会話に笑いが起こった。

みんな大変なんだ。和子はいままで、自分だけが世の中の不幸を背負っているんだと思っていたが、下には下があるもので、自分なんかまだましな方なのだと思います。

和子は友人たちに逢ってから、急に帰ると云いだした。

「まだ、ゆっくりとしていればいいのに」母としてはまだいて貰いたい。

「ううん、落ち込んでばかりいられない。心機一転、わたしも働き口をみつけるわ。いままで結婚してから仕事をしたことがないけど、気晴らしになるかもしれないし、生き甲斐をみつけられるかもしれない。前から手伝ってほしいと頼まれていた仕事があるんだ」

父は、深刻な顔をして駅で降りた和子が、何か溜飲が下りたような晴れやかな顔で玄関に立つのを見ていた。

「駅まで送ってゆくよ」と、老父母が支度をすると、

「いいのよ、また時々来るから」

和子はタクシーにひとりで乗り込んだ。

自分を無条件で受け入れてくれるところがあるということだけで嬉しくなる。見送られる和子の背中に両親は光のようなものを見たと思った。

第248話 旧幹線

2015年、北の最果てのA町にもようやく新幹線が開通することとなった。長かった。東京から東北新幹線が延びて、工事着工から半世紀ぶりに念願の開通となった。田舎の町は浮かれ騒いで毎日がお祭りだった。記念イベントが目白押しで、十一月の開通には、博覧会も行われる。開通

まであと何日と役場前には大きな日めくりが現れた。前夜祭には、近隣の村々から観光客へアピールするための伝統ある村の踊りや、祭が披露され、県内外からの招待客に、マスコミも総動員で、まさに世紀のメインイベントだった。

思えば、歴代の町長の涙ぐましい陳情の繰り返しと、議員団の働きかけ、町民の署名集めと、ここまで至るまでには、町民だけでなく、県民のたゆまない努力があったのだ。世の中、不況に陥ってから、公共事業はすべてストップして、再開の目途がつかなかったが、不況を脱却してからは、また予算が下りて、急ピッチで、新幹線の延長工事が進められていた。あと、百キロというところで、隣の県で止まっていた工事が再開されると、いよいよ実現に向けて大きく歩を進めることとなった。東海道新幹線が開通してから、やはり半世紀以上が経過していた。新幹線もスピードアップして、三百五十キロの営業運転が可能となり、東京まで二時間半という早さだ。首都がものすごく身近になる。日帰りも可能になったのだ。A町はガラリと変わるだろうと、物資、観光、人的交流でも都会を射程距離に入れたことで、経済効果も含めて、全町民が期待を大きくしていた。それに向けて、物産観光館を建てた。新幹線の終点の新駅の周辺にはホテルも建った。定期観光バスも、そこを始点としていくつかルートを決めた。タクシー会社もまた観光タクシーの需要を目論んだ。駅周辺にはみんな皮算用で、観光客の受け入れのために、飲食店やお土産販売店、工芸のアトリエなどが続々と建っていった。

さあ、いよいよ明日が新幹線の開通の日。町では前夜祭として、人気タレント、アイドル歌手なども呼んできて、駅前広場で一万人規模のコンサートも行われた。ただ、それを中継するのもローカルのテレビ局だけで、中央のマスコミは冷ややかで、報道もしてくれない。ここまで、企画して、盛り上げているのに、全国ニュースとはならないのかと、町長は不満気味で、なんとか注目されたかった。花火大会まで行い、このイベントや町の整備に町の三年分の予算を使い果たした。

県外から続々とカメラを手に手にこの町に入ってくる怪しげな若者たちがいた。彼らは、新駅の周辺に格好の場所を確保すると、三脚を立てて、カメラを据えていた。どうも観光客ではないらしい。彼らを除けば、騒いでいるのは地元の人たちばかりだった。どうも様子がおかしい。

いよいよ、開通当日。朝からの秋晴れで打ち上げ花火が上がった。小学校の鼓笛隊がマーチを演奏していた。沢山の風船が配られた。セレモニーのための来賓席にもものものしい偉いさんが並んでいた。町長が壇上で挨拶に立った。

「ようやく、ようやくです。わたくすたつの悲願の新幹線が、今日、この町さ到着いたすます。なんと感慨深いことでありましょうか。この開通を待たずして、昨年お亡くなりになられました、前町長の墓前に昨日、わたくすはご報告に参ります。この町の歴史に新たなページを加える喜ばすい日に、ご尽力いただきます功労者の方々に町から感謝状と記念品を持って、お礼とすたいとこう思う次第であります」

長い来賓の挨拶も終わり、感謝状の贈呈、鼓笛隊の演奏に続いて、町の伝統ある祝舞と太鼓が披露された。神事も済むと、知事と町長、会社の代表によるテープカットが行われ、樽酒が振る舞われた。

地元テレビ局のアナウンサーが中継していて、マイクを手にカメラに向かって話していた。

「ええ、全国から、この晴れやかな瞬間をカメラに収めようとするマニアたちが、これから来る新幹線の方向に向けて、砲列を構えています、インタビューしてみたいと思います。あ、どちらからお出ですか」

「鹿児島からです」

「それは遠いところから…。今日は一番乗りの新幹線を撮りに来たのですね」

「いやあ、新幹線なんて珍しいですからね。もう、廃止になったと思ったら、ここでは走っていると聞いたものですから。昔、SLってあったでしょう。それと同じです。せめて廃止になる前に写真で残しておこうと思ひましてね」

「はあ…？」

町の上空をコンピューターが飛んでゆく。空飛ぶ円盤だった。反重力装置が発明されてからは、離着陸が狭いスペースでもできる円盤を各地方都市間で飛ばしていた。東京からこの町までは二十分もかからない。垂直離着陸のために空港もいない。騒音もない。経済的で、安全な乗り物と、すでに交通は陸より空になってきていた。それで、鉄道は赤字になり、各地で廃止廃線されていた。半世紀もの間に世の中は全く変わってしまっていた。

「さあ、向こうから待望の新幹線が走ってきました」

みんなの視線がやってくる車両に注目していた。一番の新幹線は乗客もまばらで、がらがらだった。しかも、車体は古くポンコツで、それはすでに前世紀の遺物だった。

第249話 地獄のドア

地上二十五階のビル。その偉容を下から眩しげに見上げていた甘粕慧はこれから自分が働く本社の玄関の前に恍惚として立っていた。国富商事という一流企業に大学を卒業して入社する。真新しいスーツに靴も光っていた。

新入社員が社員研修を終えて現場に配属される。辞令を交付されて、総務課長より、本社ビル内の説明があり、全員がぞろぞろと案内されていた。社員食堂もホテルのレストラン並だ。社員専用のカフェバーからサウナ、ビリヤード場まである。

「我が社は社員の福利厚生のために手厚くするという創業者の方針を守り通している。軽井沢にはテニスコート付きの保養所もある」

最上階の二十五階に至ると、眼下に新宿御苑の杜が広がった。遠く、高層ビルの街が見えた。総務課長は、あるドアの前に辿り着くと、

「このドアは絶対に開けないように、ここは開かずのドアと云われて、いままで間違っこのドアを開けて中へ入ったもので、戻ったものはいない」と、みんなに注意を促していた。

「ふうん、こんなモダンなビルの中にも霊界スポットってあるのかしら」

女子社員たちがひそひそと話していた。総務課長はざわめく新入社員たちを尻目に、意味ありげな笑いを忍ばせていた。ドアは頑丈な鍵が二重に掛けられて、ドアの上の壁には南無妙法蓮華經

のお札が貼ってあり、何かあるなど、慧は気になりだした。

気になりだしたら夜も眠れなくなる慧の性格だ。どうも、すっきりしない、それがもやもやとなって一日どころか何日も引っかかっている。

慧が配属になったのはシステム設計室だ。パソコンがずらりと並んでいる。室長がみんなに紹介した。

「今度、学卒でこの部署に配属された甘粕くんだ」

「甘粕慧といいます。何も判りませんのでご指導ください。よろしく願いいたします」

「あら、いい男ね。歓迎コンパが楽しみだわ」

OLのお姉さんたちが、小声で話している。慧のデスクが与えられ、消耗品、事務用品の果てまで用意されていた。隣の胸の大きな美人に慧は挨拶していた。

「いろいろ教えてください」

「いいわよ、いろいろとね、ふふふ」

「ところで、二十五階の開かずのドアなんですけど…」と、慧が口に出した途端、OLは怒ったように、押し黙った。

「そのことは云わないで」「すみません」

慧は、そのことが社内のタブーになっているように、触れてはならないことと知った。いままで、二人が帰らぬ人になったということで、お祓いまでしてもらったと、後で聞いた。慧もそのことを忘れようと、新たな仕事の目まぐるしさの中で、気にもしなくなっていた。

そうして、ひと月はあっという間に過ぎていった。慧も社内の空気に溶け込んで、仕事の段取りにも慣れた。

ある日、室長から、最上階の機械室に仕舞ってあるOHPを持ってきてくれと頼まれた。重いから、台車を押して、エレベーターでひと月ぶりに二十五階に上がった。機械室と倉庫があるだけで、普段は誰もいないフロアだったから、鎮まり返って不気味だった。慧は台車を押しながら、例のドアの前を通り過ぎようとした。なるべく見まいとすればするほど、気になって立ち止まってしまう。すると、どうしたことだろう。風もないのに、はらりと祈祷されたお札が壁から剥がれて落ちたではないか。ドアの向こう側で何ものかがトントンと叩くような音がした。慧は背筋に冷たいものが走り、その場を一目散に走り抜けていた。

たまに新入社員同士で近場の炉端焼の暖簾を潜った。同期というものは仲がいいが、これからは出世の敵だ。それを抜きにして情報交換のために部署の違う男同士四人で呑んだ。

「どうだ、いい相手がみつかったか」

「おれ、先輩の女とホテルまで行った」

「ばかやろう、オフィス・ラブはご法度だぜ」

「そうなのか、大学とは違うのか」

呑むうちに上司の悪口も出てくる。

「ところでなあ、おれ、どうしても気になるんだ」と、静かに思い詰めたように呑んでいた慧が云った。「あの、二十五階の開かずのドアな」

「しっ、声が大きいぞ」と、仲間が慧の口を制した。「おまえ、それを気にしていたのか。危ね

えぞ、これは社内で聞いた話だけど、いままでも、二人、気にしていたやつがあのドアを開けて、翌日死体で発見されたって。絶対に気にしちゃいけないんだ。甘粕くん、いいか、この話はこれっきりにしようや」

慧は、なんだか、納得できない。いよいよ、しっくりしない気持ちで、あのドアのことばかり考えさせられる。まるで取り憑かれたように、酔うこともできないでいた。

翌日、慧は事務室で一日缶詰になっていた。どうしても企画書を明日までに上げなければならぬ。パソコンのエクセルで資料を表とグラフにし、それをOHPにプリントして、明日の会議でプレゼンする。新入りには重い仕事だった。みんな帰ってしまい、事務所の時計は十一時を示していた。完全に残業だった。十二時前には終わるだろう。なんとか終電には間に合いそうだ。ようやく、仕上げして、机をかたづけると、慧は缶コーヒーを呑みほし、タバコを一本喫った。すると、あのドアのことがたまらなく思い出されてきた。

一ようし、今日こそは、あのドアの向こうにどんな部屋があり、どんな秘密が隠されているか暴いてやる。

と、慧は立ちあがった。学生時代に遊びでピッキングの真似事をして、よく鍵を開けてみせた。真鍮の古いタイプの鍵なんかちよろいものだった。慧は、机の引き出しから、クリップを取り出すと、それを伸ばして、ある形に曲げた。

いま、会社にいるのは階下の守衛室のガードマンだけだ。あとは全社員帰ったはずだ。慧はそっと事務所を抜けると、エレベーターで二十五階まで上がって行った。廊下はすでに天井の電灯は消されて、非常灯の緑の電灯と、警報器の赤いランプだけが点いていた。何か、あのドアが自分を呼んでいるような気がした。自然と足がドアの方に引き寄せられるように向いていた。鉄製の一間巾の大きな両開きのドアの前に立つと、何かを感じてくる。ずっと以前から、自分はここに立つ宿命であったような、ディジャ・ヴを覚えるのだった。

慧はクリップをポケットから取り出すと、真鍮の鍵を二個とも、いとも簡単に開けてしまった。ドアは長く、開けていないのか、錆びがついているような音を立てた。

一よし、体当たりをしても開けてやる。

手で押しても少しより空かないドアに慧は体当たりをした。すると、ドアはぎりぎり音を立てて、開いたと思った。慧はドアから別の世界にダイブしたと思った。そこは、なんと、二十五階の外、空中だった。慧の体は宙にあった。遙か下をヘッドライトを付けたタクシーが走るのが見えた。

一しまった。部屋ではないんだ。だったら、あのドアは。確か、総務課長が、ちらりと云っていた。設計ミスでどうのと。それは、この不必要なドアのことだったのか。

慧は、物事のすべてを理解するのに、三秒とかからなかった。そして、自分の体が、地上めがけて落下してゆくのに、気付くまでにも。

八甲田山。標高千五百七十五メートル。たいして高い山ではない。十の峰が連なるようにして青森市を見下ろしている。この山は、シベリア寒気団をまともに受けるので、冬はスキヤーで賑わう樹氷が見られるゲレンデとなる。雪も深く、十数メートルの積雪を見る。

明治三十五年に、この山嶺で、青森の歩兵第五連隊が、シベリア出兵の雪山訓練のさなか、吹雪に遭い、二百名弱の凍死者を出した遭難事件があった。それを新田次郎の原作で映画化されて話題になったことも記憶に新しい。八甲田山の東側のルートを車で登ってゆけば、麓に雪中行軍兵士の墓地があり、そこから二十分もかからないで、八甲田の威容を目前にする峠にさしかかる。茶店があり、高台には後藤伍長の銅像が青森市を望むように立っている。連隊は、そこから先に進み、田代の元湯という温泉場まで急いで迷ったのだった。銅像の立っている辺り一面、そして、その下方の賽の河原に至る広い範囲で遭難者の死体が発見されていた。救出された数名の兵士たちも、凍傷が酷く、手足を切断するという憂き目に遭っている。

その銅像茶屋から銅像までのなだらかな登り道に兵士の幽霊が出るという噂は、昔からあった。つい、先日のテレビ番組でも全国の霊界スポットの中で一位を雪中行軍の亡霊にしたことで、一躍有名になってしまった。

実は、われわれ地元の若い人の間でも、出るという噂はだいぶ前から囁かれていた。真夜中に銅像茶屋の前の駐車場にある公衆便所に入ったアベックが、兵士の亡霊に取り囲まれて、若い男の方が彼女を便所に置き去りにしたまま、車で逃げ去ったが、その後、取り残された彼女は完全に狂った状態で発見されたというものだ。トイレに入っていると、ザックザックと、軍靴で行進してくる足音が聞こえてくる。それが、トイレを囲むようにして次第に中に入ってくるというものだった。

ぼくは、そんなものは信じない。この世に第一、幽霊などいるわけがない。神も仏もあの世もないと思っているから、そんな科学で解明できないものがすべて霊のせいになっていること自体がナンセンスだと思っていた。この噂話には、定まって、同じパターンがあった。名古屋から出た口裂け女の場合と似ているが、第一に、「ぼくの友達の友達が」と、云い出すことだった。さも、自分の身近で起こったような具体的な話をする。第二に、必ず、男の方が逃げて、取り残された女が狂うというのである。その話は誰に聞いてもストーリーは伝播したように同じだった。だから、尚更、ぼくはばからしいと思って信じないのだ。多少の尾鱗は付いても、大概、怖い話というのはどこか似ている。

ぼくが絶対に亡霊や祟りなんか信じないというので、仲間は肝試しにぼくを連れていった。十月の半ばで、すでに八甲田は紅葉が終わり、十和田湖が一番綺麗なときを迎えていた。同じ職場の仲間で、女の子が二人、男が三人の五人でRV車に乗って真夜中に出かけた。一応、何か心霊写真でも撮れないかと、おのおのビデオや集音マイク、デジカメなど持参していたのには呆れた。テレビ局と同じことをして、あの番組自体がやらせであることも判っていない。

テレビでは、銅像の前から、丘を降りてくるような兵士の隊列が赤外線ビデオカメラに影として映っているというものだった。その現場検証を仲間四人がしようとしているのに、ぼくは仕方なくつきあった。

夜中とはいえ、車が数台停まっている。若い連中が、遠方からでもやってきているのが、車の

ナンバーで判った。テレビの影響はすごいものがある。茶店は夕方で営業はやめて仕舞っていた。お土産や食堂がある、ここいらにはただ一軒の建物だ。問題の公衆便所は、駐車場を挟むようにして建っている。男女分かれているが、電灯は一応、ぽつりと点いているが、どうも入る気がしない。

仲間はカメラやビデオを坂道の途中で三脚で固定して、テレビ局まがいのことをしていた。他の県外から来た若者たちもキャーキャーと、男女でじゃれながら、銅像までの五分の坂道を登っていったりしていた。みんな、真っ暗だから手にそれぞれ懐中電灯を持っていた。その明かりがゆらゆらと遠くで揺れているのが見える。ぼくは急に腹が差し込み、便意を催した。何だろう。こんなときにと思いながら、公衆便所に駆け込んだ。中は汚い。蜘蛛の巣が張って、蛾の死体なんかぶら下がっていたりする。アンモニアの強い匂いが立ちこめる。急に外で女の悲鳴がした。何かあったのだろうか。そのうち、車が急発進するタイヤのきしむ音がした。数台の車が走り去る音がした。そして、辺りは静かになった。何かあったのか、気になって、ズボンを焦ってあげると、外をザックザックと、大勢の人間が革靴で歩く音がする。それは、まるで行進するように、足並みが揃っている音だった。便所の回りをぐるぐると回っているようにも聞こえる。きっと、怖いもの見たさの団体さんが来たのかもしれない。すっかり有名になって、夜中はちょっとした観光名所になっていた。

ぼくが、便所を出ると、駐車場に車が一台も見えない。暗いから見えないのかもしれない。みんな、どこへ行ったのだろうか。懐中電灯を持っていなかったのも、よく見えない。坂道の方へと歩いてゆくと、赤い豆ランプが見えた。ビデオカメラが三脚の上で撮影中だ。こんなところに立っていると、邪魔になるだろうと、ぼくは、脇の草むらに行くと、そこに、みんなが潜んでいるらしかった。

「なんだ、こんなところに隠れていたのか」

暗くて見えないが、大勢の人間が、草むらに隠れて、坂道の上の銅像の方を眺めているらしかった。誰も黙っていた。

「ごめん、煩くすると、出るものも出ないんだろう」

ぼくも静かに草むらに隠れていた。坂道の両側に沢山の人間が隠れているのが、夜目にも朧気に見えるようになった。いつのまにか何百人という観光客か、地元の肝試しか、みんなひっそりとしてしゃがんでいる。すごい人気だ、さすが全国一の霊界スポットだ。こんなに人が集まるなんて。

ぼくは、隣の男に声を掛けようとして、おやっ、と思った。みんな一様に同じ格好をしているではないか。耳あて付きの帽子を被り、背中に背嚢を背負い、手には歩兵銃、分厚いオーヴァーを着ていた…。

離婚したのに、いつまでもきっぱりと別れることなく、くっついたり離れたりしている男と女がいる。子供がいるから仕方ないとしても、それだけでなく、どちらともなく、未練があったり、態度がはっきりしなかったりで、周りから見ると情けない。

そんな元夫婦が最近の事件簿では、殺し合いまで発展したりしている。それではよくないと、ホテルでは、小子化で子供が減ってきたので、結婚式も年々減少傾向にあるのを、なんとか埋め合わせをする方法として、「離婚式」を提唱し始めた。テレビや新聞の広告で、離婚式を呼びかけた。

—あなたたちの気持ちをすっきりさせるために、離婚披露宴をしませんか

—ケジメをつけましょう。離婚式パック。お一人様一万円。離婚旅行にグアム島プレゼント。

離婚が増えて、四組に一組となると、その需要もかなり見込めるだろうと、ホテル業界は皮算用していた。

竹中圭太郎と亜紀は小学生の子供が二人いて、離婚調停したが、どうしてもふんぎりがつかないでいた。気持ちの整理をして、きっぱりと別れるために、ホテルに離婚式を申し込んだ。

離婚披露宴のご案内と、法事の案内のような蓮華の模様のついた封筒がみんなの家に届いた。何事かと見ると、

—このたび、悲しくも離婚することになりました。当日は喪服でお出でください。なお、手ぶらでおこしくださいますようお願い申し上げます。

離婚式当日。離婚式場には、両家の親戚一同が両側に並んでいた。教会の牧師さんが、聖書を片手にして、誓いの言葉を求めた。

「汝と汝は、この先、顔も合わせないことを誓いますか」

「生涯、ふたたび愛することがないと誓いますか」

「それでは、指輪の返還をしてください」

「憎しみのしるしとして、旧郎は旧婦の右の頬を、旧婦は旧郎の左の頬を叩いてください」

それから、厳かに、離婚届に署名捺印した。

これで、竹中夫婦はめでたく離婚が成立した。

同じホテルで離婚披露宴が行われた。招待者は、結婚式に呼んだ人だ。受付で、招待者にご祝儀を返す。金額は会費制でやったから、一律同じ金額の入った香典袋をいちいち返金するのだ。招待者も喪服を着てきていた。ただ、間違っただ数珠まで手にしてくるものがある。お金を受け取ると、入口でお迎えに立つ、別れた夫婦と、両家の親が深々と頭を下げて謝罪していた。招待者も言葉がない。

「このたびは、どうも」と、なんと云っていいものやら。

披露宴の形式は結婚のときと同じだった。テーブルの上の花が菊なだけだ。別れた二人が仲人に連れられて入場する。葬送行進曲がかかる。拍手の代わりに野次が飛ぶ。

「子供が可哀想じゃないのか」「親の身勝手」「最近の若い人は我慢を知らない」とか、ぐさぐさと突き刺さる。高砂の席に二人と仲人をやった夫婦が座った。仲人が二人を紹介する。

「お二人はめでたく、でなかった、悲しむべく、さきほど離婚届けにサインいたしました。寡夫

の竹中圭太郎くんは、仕事もろくにできない男でして、稼ぎが悪く、このままでは万年主任停まりというぐうたらです。それに愛想が尽きた寡婦の亜紀さんも、それに輪をかけたズボラな女で、炊事洗濯まるでダメ、家の中はゴミ箱同然、挙げ句の果てに浮気までして、圭太郎くんにみつかります。しかし、圭太郎くんとして外に愛人がいたのであります。まったくもって言語道断の夫婦であったと申しましょう」

と、こき下ろすだけこき下ろした。それから、祝辞ならぬ罵辞が来賓からくどくどと説教される。

「全く、何を考えているんだ。罪のない子供たちの将来をなんと思う」

司会者が興奮する来賓をなだめすかす。

「それでは、ウエディングケーキを皆様のテーブルに切り分けてお配りしておりますから、どうぞ、ご用意のできた方からお始めください」

招待者たちが、次々と、手にケーキを持って、二人の席へと向かってゆく。

「いい加減にせえ」と、怒鳴りながら、圭太郎の顔にケーキをぶつける。

「なによ、女のくせに、女らしいことのひとつでもしたら」と、亜紀の顔にぶつける。次々と投げつけるものだから、二人とも全身クリームだらけになった。

テーブルスピーチも辛辣な忠告から罵詈雑言、二人とも顔が上げられない。いよいよ、キャンドルサービスの時間になった。二人が、各テーブルを回って、火のついたキャンドルを消して歩くのだ。

そして、両親からの花束の返還。テーブルから、亜紀の涙声が流れる。

「お父さん、お母さん、ごめんなさい。亜紀は他の男の子供を墮ろしました。浮気も一度だけではありませんでした。一月に一度取り替えるダスキンでした。そればかりか、乱費の癖がついて、サラ金から借りまくり、追われています。本当に悪い娘でした。ごめんなさい...」

クライマックスとなった。両家を代表して、竹中老人が、土下座して謝る。

「謝って済むと思っているのか、借りた金はどうしてくれる」

「そんな、息子を育てた親も悪い」

「どろぼうの家柄だろうよ」

「なんだと、竹中家を愚弄するのか」と、両家の親戚の取っ組み合いの喧嘩が始まる。頭から酒をぶっかけるもの、ロブスターが会場を飛んでゆくと思えば、天ぷら、刺身までミサイルのように飛んでゆく。両家に荷担するように、その友人、会社の上司まで、殴り合いの掴み合い、会場の音楽は悲しい音楽から、オッフェンバックの天国と地獄に変わった。寡婦と寡夫も入り乱れ、乱闘騒ぎ。

ようやく、疲れ果て、ふらふらになって、お披露目となった。みんな、ソースや醤油を頭から被り、サラダ、ワインでどろどろになって、目の回りには青タン、着物の裾は破れ、折角、美容院に行ったおぐしは見るも無惨。

二人は入口でみなさんのお見送り。

「今日はとっても楽しかったわ。ああ、せいせいしたわ」

どなたも満足して帰ってゆくのだった。

第252話 杉沢村騒動記

青森市の郊外。八甲田山からなだらかに広がる裾野に川がいくつも流れ、谷を形作り、平野へと注いでいる。その小さな川を遡るところに、かつて杉沢村なるものがあったという。地元の人でさえ知らない部落だった。少し前にネットで大騒ぎしていた、村人虐殺のデマが単なる口避け女のような流言飛語で終わらなかった。確かに、全14巻にも及ぶ青森市史にはそんな事件の記載はなく、長老の生き証人をあたってみてもそんな記憶には行き当たらない。八つ墓村のモデルとなった三十人近い大量殺人はかつての日本にはあった。戦前の朝鮮人虐殺にしても、歴史に隠されている暗の部分はきっとあるのだ。記録として残してはならず、すでに半世紀以上も闇に葬られて、生き証人すら亡くなった忌まわしい事件は、きっと存在したに違いない。

それが、ひょんなことに地震などの地殻変動によって、隠し続けたものが露呈することだってあるのだ。つい先日の震度六の直下型地震で、青森市郊外の谷地に隆起した断層が走った。その長さはせいぜい数キロ、ズレは南北に一メートル、高さは一メートル六〇センチにも及ぶものであったことは記憶に新しい。田畑が若干被害を受けたが、民家もなく、人的被害もなかったことは幸いだった。

東北大学と弘前大学の合同調査隊が、地震の直後にその谷地へと入った。最近では火山活動も頻繁で、岩手山を初め、岩木山にも群発地震の測定計器が設置されたばかりだった。地震学者で有名な高橋教授をリーダーにする調査隊が青森市に入ったのは、九月の末だった。

彼らは大学で用意したランクル2台に分乗して、紅葉しはじめた谷地へと入った。農道も切れると、あとは山道に分け入るようにして細い未舗装の砂利道を走った。道の両側の畑もなくなると、行き止まりだった。あとは車を捨てて、獣道を徒歩で進むよりない。道案内は市役所の橋本があたった。

「この辺りは、なかなか地元の人でも入ってこねえだな。たまに茸狩りに入る人もいるが、最近では熊が里まで降りてくると、目撃されていっから、危なくて」

橋本は、熊除けの鈴を鳴らしながら、先頭を歩いた。

「あのう、橋本さん、この辺りって、前にインターネットで話題になった杉沢村があったところではないですか」

東北大の助手が怖々と訊いた。

「そだね、いつだったか、テレビ局も取材さ来て、案内しただが、なんにも見つからなかった」

かつて、道はあったのだろう、人工的に広げられている藪の中の道らしきところを歩いてゆくと、いきなり、目の前に古い鳥居が現れた。その先に石段もあり、山の上には祠もあるようだ。暫く進むと、廃墟らしい小屋も見えた。建物の感じからして、相当古いものだ。半壊して屋根は原

型もない。

「こんなところに人が暮らしてあったのだな。薄気味悪いな」

みんな、固まって歩いていた。周囲は高いブナやトドマツの林で、地形も定かには見えない。薄暗く、日も差さない。鳥や昆虫の姿もないのだ。風だけがさわさわと、小枝を揺らしている。またひとつ、建物の跡らしい建造物の礎石が見えた。どう見てもおかしい。こんな交通の不便な、しかも耕地もない山奥に人間が暮らすだろうか。ここには民俗学の先生はいないから、なんともコメントも聞けないが、隠れ部落であったような形跡は誰の目にも判った。

断層の端が見えてくる。それは飛行機で確認した通り、北から南へと走っていた。みんな位置を機械で確認する。その角度や方角も綿密に測った。断層を辿って藪を分け入ってゆくと、先頭を歩いていた橋本が、ギャーと脳天を裂くような悲鳴を上げた。

「は、は、白骨死体が、いっぱい、いっぱいある」

高橋教授が列の後ろから駆けてきた。全員が絶句した。断層の面から人間の骨が、夥しい数を数十メートルに渡って散乱させていたからだ。頭蓋骨から大腿骨もはっきりと見える。ざっと見ても十数体がある。露呈しているだけでもすごい数だから、掘ればもつと沢山の遺体が出てくるのだろうと思わせた。

「やはり、あの話は本当だったのだ。ここは、幻の杉沢村の跡だったのだ。埋めていた死体が、地震の隆起で地上に現れたんだ」

さっそく、研究員たちは、その現場写真をメールに添付して、青森県警にモバイルで送信した。位置は地図上でも正確だった。青森市内から車で二十分、さらに山道を歩いて三十分。一時間もかからないで、県警の刑事と警官隊が到着した。迷わないように、橋本が、道を引き返して、警官隊を誘導してきた。鑑識も同行してきたから、遺体の収容に当たり、スコップを手に手に断層の上から掘り返しはじめた。

「おや、おかしいな、上にかぶせてある土には掘り起こした跡がない。土はまるで自然に堆積したようだな」刑事のひとりが声を震わせて云った。

「バレないように、別の穴から横穴を掘って死体を隠したんじゃないですか」

ベテランの殺人課の刑事が辺りを探していた。

「そうかも知れない。これほどの大量殺人だから、うまく偽装したのだろう。遺留品もみつけるんだ。どんな小さなものでもいいから、見逃すなよ」

翌日の全国ニュースとして、大きく杉沢村の発見が伝えられていた。県警には「杉沢村大量殺人捜査本部」のものものしい看板が掲げられた。白骨死体は四十体を数えた。日本国内でもいまだかつて一箇所でのこれほどの虐殺の記録はない。死亡年代を測定するために白骨が弘前大学の法医学教室に運びこまれたのは翌日になってからだった。マスコミが一斉に辺鄙な山へと押しかけて、ちよつとした杉沢村ブームが巻き起こっていた。

「これほどの事件が起こっていることが、記録として残らなかったことが、巧妙に、しかも計画的に仕組まれていることは自明の理です。ただいま、死亡原因の調査も行われていますので、まもなく、この事件の全容が解明されるであります」

県警の本部長が記者会見でそう発表していたとき、弘前大学の鑑識結果が署員によって伝えられた。

「何、そうか、そうだったのか。困ったな、どうしようか。ここまで大騒ぎさせて...」

本部長は顔を赤らめて、しどろもどろになっていた。

「どうしたんですか、何か判ったんですか」朝日新聞社の記者が質問した。

「実は、大変な、なんというか、その、問題が起こりまして、今日で、捜査本部は解散しなければならなくなりました。申し訳ございません」

本部長は頭を下げた。何のことかさっぱり判らない記者たちは、ようやく、その真意が聞いて驚いた。

「何、縄文時代の遺跡が見つかったってか？」

実は、発見されたのは同じ青森市内にある三内丸山遺跡より大きな縄文末期の集落跡だった。近くには、そう云えば、環状列石で国の指定を受けている小牧野遺跡も発掘されていた。今度は、東北大学と弘前大学から考古学の先生たちが詰め掛けてきた。さっそく、近くにプレハブが建てられた。プレハブの前に大きな看板が掛けられた。

「杉沢村遺跡発掘調査合同本部」と。

第253話 子供から逃げろ

残業が増えていた。リストラで社員が減ったから、残った社員に負担がかかっているのかと思うと、そうでもなく、ただ、だらだらと時計を気にしながら、お父さんたちは、会社に残り続いていた。すでに九時を回っている。笹田と中里は申し合わせたように、

「そろそろ帰りますか」と、机の上を片づけた。

「どうです、またガード下で一杯」と、中里は手で呑む真似をした。「いいですね」

この二人、いつも帰りは晩酌コースで、屋台で一杯ひっかけてから電車で帰宅する。時間潰しも大変だった。最近のお父さんたちはみんな暗く、沈んでいた。仕事が不景気で落ち込んでいるのに加えて家庭の問題だ。ほろ酔いで、帰るとき、二人ともケイタイで奥さんに電話する。

「もう、寝たか、子供たち。そうか、寝たか、いまから帰る」

電話口の奥さんの声は心ここになしといった返事で大変な様子が見えるようだ。お父さんだけが、仕事と家を空けられるからいい。一日、家にいる奥さんは逃げ場所がない。

笹田は、こっそりと我が家の玄関から入る。十二時近い。玄関から廊下にかけて、割れたガラスや食器などの欠片が散乱していた。ダイニングルームへ入ると、台所にペタリと放心状態で座っている奥さんがいた。家中、まるで空き巣に入られたような散らかしようだ。お父さんの顔を見るなり、奥さんは泣いた。

「もう、いや、わたし、疲れちゃった」

また、恐ろしい朝がくる。朝はどうしても子供たちと顔を合わせなければならない。

「オス、くそ親父。夕べも残業だってな。てめえ、浮気してんじゃねえの」

小学六年の息子がお父さんと目を合わせるなり云った。

「そんなことは、やっておりません」お父さんは緊張で、体が強ばっている。

「小遣い十万円くれよ。学校帰りに豪遊してくっからよ」

息子はナイフをちらつかせながら、お父さんを脅迫する。

「そんな、急におっしゃられても持ち合わせがなくて...」

「ちえっ、しけた野郎だぜ。だったら、クレジットカード寄こせよ、暗証番号も教えろよ。キャッシングで借りるから」

「ええ？ 先月の請求が三十万きたというのに？」

「文句あるのかい」「いいえ、ありません」

中学二年の娘が起きてきた。びらびらと化粧して、茶髪にピアス、タトゥーまでしているヤンキーだ。

「ケイタイ、取り替えたいのよね。新発売の動画が送れるやつとね」

「だって、二ヶ月前に取り替えたばかりなのに」と、お母さんもおろおろ。

「うざってえな、がたがた云ってんじゃねえよ」「すみません」お母さんからカードを持ってゆく。クレジットの代金も目玉が飛び出るような請求が毎月くる。ケイタイの通信費だけで二人で六万もくる。

子供たちが学校へ行くと、二人ともへなへなと座りこんでしまった。

中里の奥さんが学校に呼び出された。クラスの子をナイフで刺したというのだ。小学校へ急いでいってみる。警察を呼ぶとあとで仕返しが怖いので、すべて内密に処理されていた。職員室へ行くと、息子はタバコを吸いながら、先生の机に足を上げていた。すべての先生が、顔にバンドエイド、頭に包帯、腕に添え木で首から吊っている。松葉杖を使っている先生もいて、無事なものも一人もいない。校長先生が出てきたが、見るも無惨で、全身傷だらけ。一年間にどれだけの先生が死んだらうか。

「ああ、気にすることではありませんから、たかが、刺しただけです。相手の親に賠償金を支払うだけでいいんですから。ナイフでよかったですよ。隣町では先月、銃の乱射で四人が亡くなりましたからな」と、平然と云う。もう、慣れっこで、そんな些細なことには驚かない。学校のガラスも滅茶苦茶、机は壊され、すでに廃墟に近い状態だった。

先生たちも無力になった。触らぬ神に祟りなしで、刺激して子供たちが切れると、もっと被害が拡がる。それは家庭でも同じで、金で済むなら金を渡したほうがいい。親も先生も子供を叱れない、叩けない。逆に叱られ叩かれ、泣いている。小学校でも、児童がカミソリ、チェーン、ヌンチャク、サバイバルナイフなどの凶器を持ち込んでいる。何をするか判らない。殺された親や先生の事件が新聞の片隅にずらりと並んでいる。頻繁に起こるので、もう誰も驚かなくなり、交通事故のような扱いだ。

笹田くんの小学校の教室で、みんなが集まって、なにやら相談していた。

「万引きも恐喝も親父狩りもホームレス殺しも飽きたしな。何かもっと強烈な刺激のある遊びがないかな」

「銀行強盗や要人誘拐ってのはどう？」

「そうだよな、もう十万、二十万くらいの端金盗ったからってみみっちいよね。やるなら十億、

二十億だよ」

「新聞も騒がないしつまんないよ。もっと世間がびっくりするようなことをやろうよ。一人二人殺してもニュースにもならないから、どうだい、いっそ百人単位で大量殺人なんか」

「街ごと放火して燃やすとか」「それもいいね」

子供たちがだんだんと過激になってきていた。このままでは殺されると、笹田さんの夫婦は、子供たちが学校へ行っているときに、家出した。学校の先生たちも、次々に街を出て、逃げ出した。みんな、「大人」をやめた。親たちで駅も空港もいっぱいだった。

「どこかに子供のいない国がないものか」顔が傷だらけの大人たちが、行く宛もなく、街を出る。この国が子供たちに支配されるのは時間の問題だった。

第254話 豆の中の虫

今日、教官室に呼ばれた。担任の黒崎が、ぼくの成績について、疑問を投げかけた。

「君は、極端が好きなのかね。前回の期末試験ではトップグループに属していたのに、今回の中間では五百人中、ビリから五番目。君の後ろには四人よりいいことになる。何か、悩みがあったら、話してくれないかね。君のような生徒は始めてだからね。大波賞をやりたいくらいだ」終始、ぼくは口を噤んだまま、項垂れていた。百点か然らずんば零点か、完全主義者のぼくは、完璧に事が進まないと投げ出してしまう性癖があった。

「まだ、大学受験までは一年以上はあるから、そう諦めないで頑張れ、やればできるんだから」ぐびりと冷めた茶を啜りながら担任は云った。

県内でも受験校として有名な高校に入ったことがそもそもの間違いであった。三年間はすべて、将来の犠牲に捧げられる。ぼくにとって、いまとは何なのだ。十七歳という年齢は、もう二度と返ることのない一番新鮮な感受性の年。

親父が仕事で、海外視察に行ってきた。

「面白いものを買ってきたぞ。ほら、お土産だ」

親父が乱暴に投げてきた、小箱には、脱脂綿にくるまったたった一粒の大豆のような豆があるだけだった。メキシコまで行って、お土産が豆ひとつかと、ぼくは笑う力もない。掌に載せていると、その豆はひとりでに転がった。まさか。じっと、眺めていると、またころりと動いた。ぼくは、薄気味悪くなって、豆を投げ出していた。豆は床に落ちたまま、動かなかった。

「なんなんだ、こいつは」じっと、床に這うようにして、豆を見守っていた。三分、五分、すると、また豆はころりころりと転がりながら移動するではないか。

「嘘だろう、こいつ、生きている」ぼくは、信じられないものを見たように、いつまでも生きている豆を注視していた。

「どうだ、気に入ったか、中に虫が入っているらしいが、不思議だろう」

親父は、実に安い子供騙しのものでお土産を終わらせようとしているのが見え見えだった。でも、そいつは誰に見せても不思議がる、当面のぼくの玩具になった。

ぼくは、机の上の筆箱の中で生きている豆を飼育することにした。どうして、硬い殻の中において、呼吸をしているのだろう。豆を引っくり返したりして、調べたが、穴が空いているところはない。それに、豆の中を食い尽くしたら、虫は出てくるのか、それとも硬い殻から出られずに死ぬのだろうか。それより先に、こいつはどうして豆の中に入ったのだ。高校の生物学、化学、物理の知識ではとても解明できない何か秘密がありそうだった。

ぼくは、友人たちに教室でそいつを見せて自慢していた。大概是驚き、虫がどこから侵入して、こうして一生を終えるのかと、いくつもの疑問を並べていた。

ぼくは、最近のノートは真っ白だった。授業中にも別のことを考えて、勉強を投げ出していた。教室が檻に思えた。いつも、ぼんやりと窓の方を見てばかりいた。雲が自由に流れてゆく。鳥が何にも縛られることなく飛んでいる。

「喜多村、サン=シモンとフリーエはなんと呼ばれていたか答えろ」

余所見していたぼくをいきなりいじわるな教師は当てた。

「は、はい」と、ぼくは慌てて立ち上がると、筆箱を落としてしまった。「そ、それは、サイモンとガーファンクルと...」

クラスの全員がゲタゲタと笑った。教師も苦笑いをしている。

「喜多村、顔を洗ってこい」

ぼくは、部活にしても、本を読んでも、何をしてもアパシーな状態に陥って、学校自体が息苦しく思えてきた。授業についてゆけない。一日の遅れが、十日になり、もうみんなは先に進んでいるとき、ぼくだけ取り残されていた。それに対する焦りはない。もう、どうでもいいことにすべてが思えた。

担任は、志望校を目標として書かせた。進路指導の面接が試験の後には必ずあった。

「北大か、頑張れば入れるだろう」一学期のときはそう云ったのが、二学期には、「早稲田か、まあ、もう少し頑張るんだな」と、まだ余裕があった。三学期になると、「おまえ、入れる大学はあるのか」と、担任は冷たく突き放す。そこまで落ちた。

ぼくは、家にも、マンガ本を見るでもなく、テレビを見るでもない。本の活字も追えないでいたし、机に向かって夜中まで、親父の週刊誌をこっそりと持ってきて、マスターベーションばかりしていたりした。そうかと思えば、ノートに詩らしきものや、小説の断章らしきものを書き殴っていたりした。それらのノートはすべて、後で散り散りにぼくの手でシュレッターされた。

ずっと、夜中のあいだ、ぼくは、例の豆虫を見つめていた。ころころ転がるのが、いつ見ても新鮮な驚きがあった。鉛筆削りのナイフで、そいつを開けてみようとは何度思って、できなかったことか。どんな虫が入っているのか、見たい気もあったが、不気味でとても開ける勇気はなかった。もしも、この世にない、姿形が歪な虫が出てきて、ぼくを目掛けて飛び掛ることもあるだろうし、毒虫だったら大変だ。その怖い気持ちの反面、一生を外の世界も見ることなく終えてしまう虫に憐憫の情も持って、外へ出してやりたい衝動にもかられた。

いつか、豆虫が動かなくなっていた。どんな虫であろうと、きっと幼虫のまま閉じ込められていたのだから、変身するに違いなかった。そいつは、蛹になり、脱皮して成虫になり、蛾のように空中を飛んでいたに違いないと思った。

ぼくは、ようやく迷った挙句、助け出そうと、豆の殻をナイフで割ってみた。

そこには、蛆虫のような幼虫の死骸が入っていた。こいつが、姿を見せなかった虫の正体なのだ。すでに救出は手遅れで、虫は外の空気を吸うことなく死んでしまった。

ぼくは、三年になり、みんなの流れに引きずられるようにして、受験戦争へと突入していった。全学連がデモを繰り返し、安田講堂が占拠されるニュースをテレビで見ているながら、自分も知らず、反体制の思考の海へと飛んでゆくを見ていた。

康一と隼人は、ゲーセンで学校をサボって朝からゲームに興じていた。コインを使わないで、店員の目を盗んで針金を使い、無料で遊んでいた。中学の義務教育の大事な時期に、勉強もしないでぶらぶらしている。落ち零れで、教室にいるだけで苦痛だった。訳の分からない数学の公式を眺めているよりは外でのびのびと遊んでいたほうがいい。学校に行かなくなってしばらくになる。遊ぶ金欲しさにカツアゲ、万引き、置き引きを繰り返していた。

ある日、二人が、公園のベンチで寝ている旅行者のバッグを盗もうとしたときだ。康一は隼人の体が透けて見えることに驚いた。

「おれ、おかしいな、目がどうにかなっちゃったよ。おまえが、シースルーに見える」
隼人も康一の体を見て驚いた。

「そういうおまえだって、下半身が消えているぜ」

互いに自分の体が消えてゆくのを眺めて、

「どうなっちゃったんだい」と、二人とも泣きべそをかいた。だんだんと薄くなってゆき、ついには二人とも姿を消してしまった。

高橋はパチンコに狂っていた。会社のライトバンでセールスに行くふりをして、実は、郊外の大型パチンコチェーンに朝から入りこんでいた。

「こんな不景気のときに、いくら歩いたって業績は下がるだけだ。無駄な時間を過ごすより、副収入を得たほうが利口だよ」仕事中に博打をやる。何も考えないでただ、一日中、パチンコ台に向かって玉を打ち込む。タバコばかり吸い、耳をつんざくような歌謡曲に、マイクの声。高橋の目は死んでいた。口は半開き、頭は空っぽ、何も考えることはない。すっかり中毒になったように、玉の行方だけをぼんやりと眺めている。すると、どうしたことだろう。自分の手が消えてゆく。

「手がない、おれの手がない」

慌てて、椅子の下なんか探している。外に出て、車のところまで行ってみた。

「おれの手、おれの手」

どこかへ落としたと思っていた。車の車体に映る自分の足も消えかけていた。

「おれの足もない、おれの足が...」

車のドアを掴もうと思ったが、手がないので開けられない。足も消えてゆくから、地面に体が沈む感覚だった。そして、とうとう、高橋はこの世から抹消されてしまった。

敦賀は、ぐうたらサラリーマンで、とりわけて趣味もなければ、仕事もできない。四十過ぎてまだ親元から通い、独身だ。せっかくだいいい大学を卒業して、いい会社へ就職した途端、これで受験からも試験からも論文からも解放されたと、本も読まない、勉強もしない、すっかり燃え尽き症候群で、社会に出てからは頭を使わなくなり、毎日テレビゲームとマンガ、週刊誌ばかり見ていた。社会に出てから本当の勉強と競争が始まろうとするのに、口先だけで行動しないサラリーマンになってゆく。夜は夜で麻雀やって酒呑んで、タバコばかりふかしているから、脳細胞が退化してきていた。学歴が無関係というのは本当だ。その後本人が何を努力したか。のんびんだらりと社会を過ごしてバカになる優等生が如何に多いことか。頭も錆びる。

敦賀が、友人の和田と呑んでいたとき、その症状が現れてきていた。

「おいおい、おれは酔ったのかな。おまえの体が透けて見える。だいぶ入ったかな、ウイ、おまえが消えてゆくぞ」

和田が目をごすっていた。敦賀自身も酔いが回ったぐらいにしか考えていなかったが、自分の指が消え、足が消えてゆくと、さすが青くなった。

「ひえ、助け…」それっきり見えなくなつた。

「あいつ、おれに飲み代払わせようと、忍術使いやがったか、ヒック」

和田も判っていない。

各地で人間が消えるという怪現象が多発した。原因は不明だが、あまり考えない人が消えてゆくというので、政府はテレビで注意を促した。

「みなさん、できるだけ頭を使うようにしてください。考えない人から消えてゆきます。できるだけ本を読むようにしてください。テレビをご覧の方は、民放のバラエティ番組を見るのをやめて、教育テレビにすぐ切り替えてください。こちらは政府の緊急広報です」

書店に夥しい人々が殺到して並んだ。哲学思想関係の難しい本が飛ぶように売れた。子供たちも勉強するようになったし、どんな仕事でも頭を使うよう工夫するようになった。

人間の器官が長い間、使われないと退化してゆく。足が歩くものでなくなり、次に脳が考えるためのものでなくなったとき、人は人としての存在理由を失った。

地球は巨大なパソコンだった。われわれのハードウェアの肉体を認識させるには、思考というドライバーが必要だ。未来、人間はデジタル化し、3Dの映像として映し出されるものにすぎない。それだから認識しないものは消えてゆくのだった。

第256話 死の夢

嫌がるわたしを強引に断頭台に引き回すのは誰だ。顔の見えない男が、身内であったような気がする。鉞で幼いわたしの首を撥ねようとするのに、抵抗して藻掻いているが、大人のものすごい力で押さえ込まれていた。キラリと振りかざした鉞が宙に光った。次の場面では、わたしは、線路に横たわっていた。家族は平然とわたしに話しかけてくる。列車が爆走してくる音が近づいてくる。空は眩しく光っている。雲ひとつない吸い込まれそうな青空だった。それを区切るように、電線が張り巡らされていた。またもわたしは藻掻いて、逃げようとしていたが、体が金縛りに遭ったように動かない。助けてという声も出ない。

そんな自分の死ぬ夢を、わたしは小さいときから繰り返し見ていた。同じ夢を何度も見ることも異常だったが、何かを暗示するように怖い夢ばかり見させるのはどうしたわけだろうか。その夢を見ている間、真夜中にきつとわたしは泣いて暴れて、家人を手こずらせたというが、当の本人は夢の中でそうしていることは知らない。

爾来、大人になってからはその夢を見ることはなくなったが、その夢を思い出すたびにぞっとする気持ちは変わらない。わたしは、自分が死ぬのを初夏と決めていた。そして、天気がいい日は今日は危ないな、気をつけようといまも思うのだ。雲ひとつない晴天の日には、今日こそ、その日が訪れるのかと覚悟したりしていた。電線の張り巡らされた下を通るときも気をつけていた。天気のいい日にスクランブル交差点を渡るとき、車に轢かれるのではないかと恐れしたりした。

何か、自分の死ぬ瞬間を予知していて、それを繰り返し教えているのだと、思いこんでいる自分も可笑しかったが、それが五十年近く経ったいまも意識の底にこびりついているのは否めない。元来、小心者で、なににつけても恐がりのわたしは、パニック症候群になり、常に死の恐怖と闘いながら、精神科の世話になったこともある。心理分析をしてもらったら、人一倍強迫観念が強いということで、思いこみが危険だとカウンセラーに指摘されたこともあった。

わたしは、いつも自分の行く手に高い、死という行き止まりの壁を意識しながら、それがいつ訪れるのかと戦きながら、安楽な生活は望めそうになかった。仕事は順調ではなかった。この不景気で、環境も悪くなったことが、余計わたしをその危うい夢の方角に誘うのだった。家庭もうまく行っていなかった。妻とはすでに家庭内別居状態にあり、子供たちも自由気儘に父親に反目しながら外で生きていた。不安定ないまが、わたしをどうにかしなければと焦らせる。

会社では業績が上がらない責任をとって、わたしは降格のうえ、北陸の小さな営業所に左遷となった。まあ、それもいだろうとすべてを諦めていたが、わたしは半ば自分が敗北のうちに人生を終わったと思いこんでいた。単身赴任で行くというときに、これみよがしに妻から三下り半を突きつけられた。女から離婚届を出されると、わたしは出遅れた感じがした。いつも、いつもだった。まあ、それでもいだろうという気持ちはどこかにあって、転落してゆくときは、徹底的に転落してゆくのだろうと、自分の行く末を悲惨な結末へと想像していた。きっと自分には相応しいプロットなのだ。悲惨ついでに家をも処分してゆこうと決心した。もう、二度とマイホームなど持てないだろう。それでもいい、ひとりになったことだし、財産を残す子供もいない。財産分与代わりに住宅ローンを差し引いた残りは妻にすべてやることにした。これで、さっぱりとした。もう、この世に未練などなかった。

北陸の鄙びた町を、わたしは挨拶回りに歩いていた。初夏のからりと乾燥した快晴の朝、わたしは鞆を手に、人気のない田圃道を無人駅の方へ向かって歩いていた。すると、後ろからバイクが数台走ってくる音がした。振り向くと蛇行しながら走ってくる暴走族の連中らしかった。わたしは道を開けようとして、脇へ退くと、バイクがわざとぶつかってきた。鞆のひったくりのようだった。鞆が道端へ飛んだ。それを取りに走り寄ると、光るものが上から振り下ろされた。それはまさしくあの悪夢だった。次の瞬間、わたしは首筋に激痛を感じた。と、同時に鮮血が吹き出すのを青空に見たと思った。空はどこまでも高い。雲ひとつない空だ。これだ、わたしが幼いときから何度も見た、恐怖の夢は。

「おい、やっちまったのか、やばいぜ。死んだのか。ここに置いてちゃ誰かにみつかる。そうだ、線路まで運ぼうぜ。カーブで電車からは見えないから、轢死体と思わせるんだ。そうすれば、

やったことなんか判りゃしねえさ」

わたしは、まだ幽かに生きている。目は大きく見開いたままになっているが、わたしはその一部始終を目撃していた。若者たちに抱き抱えられるようにして、わたしは近くの線路まで運ばれていた。なま暖かい血のようなものがどくどくと流れているようだ。意識が薄れ、視界がぼやけてくる。

「電車が来たぞ」若者たちはわたしを線路に仰向けになったまま放置すると、逃げ去った足音だけははっきりと聞いた。

電車が走ってくる音が大きく響いてきた。これだ、わたしが口も利けず、逃げだそうとして体が動かない、夢のままだ。すぐ、目の前に電車の車体が見えた。警笛が間断なく鳴らされていた。電線が張り巡らされた空は不気味なほど蒼かった。

第257話 書きながら死ぬ

もしも、あなたの命があと三月だと死の宣告をされたら、あなたはその三月を何に使いますか。

こういった質問はよくなされる。本当にそうになったら、美味しいものを腹いっぱい喰ったって味がしないだろう。ありったけの金で豪遊しても心底から楽しめないだろう。病院では死にたくない。家で残された時間を一分でも家族に囲まれて過ごしたい。そう云うものもいるだろう。わたしの親戚には、どうせ生きて数年と、海外旅行ばかりしていた老婆がいた。死ぬときは畳の上では死にたくはない。まして病院のベッドの上なんてまっぴらだ。旅の途上でのたれ死にたい。別役実の戯曲にもそんなのがあった。死に場所を求めて動物のように旅に出る。まさに死出の旅だ。

わたしの場合は書き続けて、死ぬ寸前まで克明に記録をつけて死にたいと思った。こうして、書いているいまも、実はあと何日生きられるか判らない。ただ、判っていることは、来年の今月今夜は確実にわたしはこの世にいないということだけだった。それは不思議なことだった。自分を除く、家族にしても友人にしても、家の庭の木にしても鉢の植物にしてもみんな来年もさ来年も生き続けるというのに、わたしだけが消えているのだから。

半年前のことになる。わたしは、ものすごく疲れるのと、血圧が不安定なのとで、病院にかかった。滅多に病院なんか行かないわたしが、どうもいつもと違う体調で、珍しく気弱になり精密検査を受けた。自営業だから、会社のように年に一度の定期健康診断をするわけではない。検査の結果、血尿が確認された。問診で医者に訊かれたが、そういえば尿の出もよくない。老人にはまだ早い、前立腺かとも思っていた。五十過ぎて、あちこちがガタがくるのはいた仕方ないと思っていた。大病院で再度検査を受けたが、膀胱炎と過労ということで、それなりの処方箋を書いてくれた。投薬で治るということだった。アリナミンの注射をしてくれたが、打つとすぐ薬臭い匂いが口からした。

それからだ、家族の態度がおかしい。特に家内のわたしに対する雰囲気が変わった。わたしをじっと見つめたりしているかと思うと、顔を背けて直視できなかつたり、妙に言葉遣いを躊躇ったり。それからわたしの入院が決まった。わたしは、家内を厳しく問いつめて自分の病名が判った。前立腺の癌で、あちこちに転移して、もう手の施しようがない。生きて三月と。医師も後にわたしに告知した。わたしはさほど絶望はしなかった。まだ信じられない、他人の話のようであった。

わたしは地方のペンクラブに所属していて、事務局もやっていたが、会員仲間の多くが老齢で、年に片手の仲間が癌で死んでいった。その臨終にも立ち会ったし、多くの同胞を見送った。死ぬということが日常的でさえあった。告知しないで、死ぬ寸前まで知らされないで自分の死ぬのさえ判らないということは、不本意なことだった。出産予定日があるように、死亡予定日があるといろいろとやることがあるものだ。この世で最後にしなければならぬ準備、始末ができて安心して旅に出られるのだ。

仲間は、死ぬひと月前に、病室でこう述懐した。

「もう、本も読む気がしないし、小説や日記も書けない。もの書きは自分を第三者的に冷静に受け止めて書くものだが、死を意識すると、自分と向き合ってしまう。もう、一行も書けない」と。

それでも、何かの形で残したいと、遺書のつもりでいままで発表した随筆や、未発表の創作を一冊の本にすると、気が抜けたように容態が悪化すると、まもなく亡くなった。わたしはその時間がなかった。本にするのであれば、残されたものが遺稿集で出せばいいし、出さなくてもいいと、自分の原稿、ノートの本を遺児のようにわたしは持てあまし、考えあぐねていた。とにかく、身辺整理をしなければならない。蔵書は友人たちに分け与えた。衣服は兄弟に分け、形見分けではなく、税金のかからない生前贈与をして、すっかりあの世への引っ越し準備ができていた。それで、再度、入院することとなった。手術をするわけでもなく、放射線治療はするが、それも医師にお願いして、やめさせた。わたしは治療のないまま病室で最後のときを静かに待った。まだ、地方都市にはホスピスがない。

病室は個室にしてもらった。本当はパソコンの使用は禁じられてあったが、特別に許可をもらって、わたしはベッドに起きあがれなくなっても、こうして、枕の脇にノートパソコンを置いて、指一本でキーを打っていた。わたしには、もの書きとしての実験があった。最後の最後まで書き続けること。今際の際まで果たして人間は冷静に自分を見つめていられるだろうか。本も疲れるが、ぎりぎりまで読んでいた。読む行為が虚しくも思えるのだが、わたしにとってはテレビを見るのとなんら変わらない。死を悶々として待つよりは、別のものに気分を逸らせるほうが精神安定剤になった。仲間の老人は明日出征するといふときまで、本を読んでいたという。その読みかけの本を戦後、復員してから続きを読んだというのである。読むのも書くのもやめろという方が酷である。よく、家内は、「あなたは、死ぬまでやめないでしょうよ」と、本好きを呆れていたが、まさしく、枕元に本がなければならなかつたし、本を抱いて死にたかつた。それが本望というべきか。

この最後の記録の他に、わたしは毎日、日記と短歌と小説もパソコンで打っていた。わたしは

、自分の体力が限界にきたのを知ると、もうそう長くないと自分でも判るのだ。一分間に百文字打てたのが、五十になり、十文字になった。一行を打つのに三分も四分もかかるのだ。時折、すっと意識が薄れるときがある。このまま、あの世に引き込まれるのではないかと、不安になる。今日か明日か。もう、上半身を起こすこともできないでいた。医師も家族もパソコンの使用をやめさせようとしたが、わたしは最後のお願いだと、譲らなかった。痛みは鎮痛剤を定期的に打っているからあまりないにしても、眠くて仕方がない。睡魔に襲われるのがこんなに怖いものだと思わなかった。眠ったらお終いだ、このまま死んでしまい、二度と目が覚めないような気がした。

友人たちが押し掛けて、ひと言づつ声を掛けてゆく。お別れの言葉だった。家内と子供たちも常に傍にいるか、廊下で待機しているようだった。周りが慌ただしくなってきた。それも自分のことと思っていない。この文字もそんな中で少しづつ打っている。体重が元気なときの半分近くなっていたので、骨皮だ。どこに力を出す筋肉が残っているのか。指先もようやく動かしている。それでも書かねばならないという迫力に、どうしてそうしてまでと家内は泣いている。

少し、薬で眠ったのだろう。目が覚めると、みんな看病に疲れて寝ているようだった。パソコンのメインスイッチを入れる。そして、エディタを立ち上げると、また続きを打っている。時間は明け方の四時半。人間が死ぬのは、潮の満ち干と関係がある。明け方が一番危ない。ここまで、書いて、何か具合が悪く、息が詰まる、声も出ない、いよいよおだぶつか、指を動かす力も出な

第258話 夢の憂き橋

秋日差す暖かな午後、悦子は飼っていた文鳥の世話をし、家の掃除も終わると、居間につれあいの尚治郎と座卓に座りお茶をすする。女が新聞を読むことにまだ抵抗があるのは古いのか。いまは、テレビのワイドショーより政治経済が面白い。どこの主婦も新聞はよく見るようになったと思う。それほど世の中が目まぐるしく回転しているのだ。

「あなた、お隣の青森の知事さんね、津軽海峡に大橋を造る構想を発表したんですって」

「ほう、莫大な金がかかるだろうな。瀬戸内も赤字だというときに、何を考えているんだか」
今年、七十三になる尚治郎は、まだ列島改造の幻覚を見ている政治家たちに批判的であった。

「そうよね、青函トンネルも充分に活用していないのに、玩具に飽きた子供と一緒にですよ。出来たものは赤字でも、公共事業で金が回るのはゼネコンばかり、わたしたち庶民には後で税金でやってくる」六十九の悦子にしても、昭和一桁、戦争の苦しみ、戦後の貧困を嫌というほど味わってきた。一円、十円のありがたさが身に染みて判っている世代だ。そんな、何千億、何兆という金を人間どもの欲のために使うのが許せない。

でも、橋ができると、青森に嫁いでいるひとり娘も近くなる。筆筒の上に双子の孫の中学入学の写真が飾ってあった。

「そうそう、尚子たちに秋味を送ってやりましょうか」

「今年も、もう出回っているのかい」秋味とは鮭のことだ。荒巻一匹毎年送っている。天気がいいから、たまに老夫婦で市場へ買い物に出ることにした。

函館の駅の脇にある市場に老夫婦は荷揚げしたばかりの海産物を見にいった。景気悪いと云っても、ここだけはいつも威勢がいいように見えた。それも掛け声だけのこともかもしれない。

「とうもろこしもメロンも終わったわね。余市のりんごに、タラバ蟹、湾内蟹も高いわねえ」結局、あれこれと見て歩いて、適当な店で秋味を青森の尚子たちに発送してもらうことにした。

青函連絡船の記念モニュメントで、大雪丸が函館駅横の岸壁に接岸されて、物産館として活用されていた。老夫婦はその上にある、カフェテラスに入った。よっこらしょと尚治郎は窓際の席に座った。

「その、よっこらしょと、声が出るようになったら老人だそうよ」

「何云っている、七十三にもなって、老人ではないと云えるか」

「あら、わたしはまだ観念しておりませんよ」

「そうだな、おまえは気持ちまでまだ若いからな」

悦子は嬉しくなると、ふんふんと鼻歌うたうは長渕剛。館内に有線でメリー・ジェーンが流れている。悦子の好きな歌だ。悦子は誰の目にも十は若く見える。若いときから綺麗だった。美貌が凜として枯れないでいた。尚治郎はおとなしく、優しいいい配偶者だった。さっき売店で買った好物の甘納豆を食べていれば静かだった。お酒はやらないので、甘党に走っていた。二人でケーキセットの紅茶を飲んでいて、デートも久しぶりのことだ。

船だから、丸い窓がついていた。そこから津軽海峡が見渡せた。大橋を造るのは、下北半島の大間崎から北海道の戸井までが、一番の最短距離だ。それでも二十数キロはある。深さも二百メートルの海底まで、どれほどの基礎を埋めて、柱を建てるのだろう。潮の速さもばかにならない。シロウトながら、悦子は途方もないことのように思っていた。

「あなた、いつか、大間までフェリーで渡って、車で青森まで行きましたね、あのときは、どれぐらいかかったかしら」

「そうだな、フェリーで一時間、大間から青森まで、かなりスピード出したが、四時間近くかかったかな」

「都合五時間でしたか。いくら橋がかかっても、それでは高速フェリーで二時間、青函トンネルでも二時間かかりませんから、そっちの方が俄然早いことになりますわね」

将来、橋が出来、高速道路が大間まで延びたとしても、どうも、列車より速い気がしない。排ガスの問題で、青函トンネルは車を走らせなかった。カートレイン構想も座礁した。確かに、北海道の人間にとって、内地に行くことは、命がけのときもあったし、少し天候が悪いと、フェリーも飛行機も発たない。洞爺丸台風の悲惨な歴史もある。橋をかけて、歩いても渡れる陸続きというのは、壮大な夢かもしれなかった。

「政治家の考えることだ。採算度外視で、金だけバラ撒けば、なんとかなると思っている。それをロマンだ、夢だと誇大妄想にぶちまけているだけさ」

老夫婦の不満は、そんなばかげたことに税金を使わないで、老人の医療費や年金、若い人の失業などを何とかしてもらいたいと、先のことではなく、もっと現実的ないまの問題を解決しろと、それに向けられていた。

急に雨が降り出した。からりと晴れていたと思ったら、いきなりだから通りを走る人の姿が散らばっていた。雨宿りにはちょうどいい。急に降る雨はすぐにやむ。秋の空だ。案の定、また嘘のように陽が差した。老夫婦は海沿いの公園を歩いていた。

「あら、あなた、虹ですよ」悦子が指さす先に、ちょうど戸井の方から海峡を跨ぐように虹がかかっていた。

「まさしく、あれが夢の大橋だな」

海で隔絶しているから旅愁がある。向いに棲む娘にもおいそれと逢いにゆけない。便利になりすぎるのもまたどんなものか。二人は娘一家が正月に帰ってくるのを楽しみにしていながら、たまに逢うから思いやるのだと思った。

「贅沢ついでに映画でも見ましょうよ」

悦子は尚治郎の腕をとった。

「おいおい、いちゃつくのはやめようや」と、尚治郎は辺りを気にしている。悦子はそれを楽しんでいるかのようだ。老いて振り返ればすべて夢の憂き橋。せめていまを楽しまねば。雨上がりに悦子の鼻歌が流れる。

第259話 檸檬爆弾

腹ぺこの感覚は、全身の力が抜けてゆくのに加えて、手足に血が通わないように冷たくなってゆくのだ。ふらふらと歩いて、ぼくは、聖橋に佇んでいた。眼下に神田川、中央線の黄色い電車がすれ違う。レモンをそれに投げる歌があった。夜間大学の二講時まではまだ時間がある。秋も十一月となれば、貧乏学生には風さえ冷たい。駅で拾ったアルバイトニュースに目を通していたが、辺りが心細いほどに昏くなってきたので、ぼくは橋の欄干によりかかつて、残照の僅かな赤い光でも文字を追えなくなっていた。とにかく二日、飯らしいものを口にしていなかった。黙秘権を行使したお陰でブタ箱入りで、ようやく釈放。多くの学生たちに混じって、ぼくはとても不安な夜を過ごしていた。すでに、大学の正門はバリケードが撤去されて、機動隊が嚴重に警備して入れそうになかった。大学側はロックアウトを決めた。行き場のなくなった、ぼくたちは、教科書を小脇に抱えたまま、どこへも行けないでいた。

ジーンズのポケットに手を突っ込むと、小銭がいくつか出てきた。情けない話が十円玉が三個だ。これじゃ、晩飯にありつけそうになかった。何か名案はないものかと、ぼくはしけた浮浪者のように、道端に落ちているかもしれない小銭を探しながら坂道を神保町の方へと降りていった。古本屋が軒を連ねている。ぼくは毎日、そこを覗いて歩くだけのひやかし客だった。今日は違った。ちゃんとした客として、手にしていた文庫本一冊を売りに行ったのだ。たった一冊だけというのにも驚いて、丸眼鏡のおやじは、

「これだけ？ あとはないんですな。ふむ、ヒルティねえ、しかも一卷目だけ、半端は安くなります。五円です」と、面倒くさい様子で云った。子供の駄賃でもあるまいし、ぼくは五円をしぶしぶ受け取った。百円で売られている文庫本も、売ればたったの五円だ。ここは、気取った丸善

ではないが、ぼくは檸檬爆弾をそっと本棚の上に仕掛けておきたい衝動にかられた。

ともかくも五円としまして三十五円となった。これでなんとか晩飯が喰えそうだ。隣の大学の地下にある学生食堂では、三十五円のでんぷらうどんがある。そいつは頗る美味かった。どこの学食より美味しく一番安い。アルバイトの時給が百七十円の時だ。

温かいうどんがつつつると胃の腑へ流しこまれると、手足に感覚が戻ってきた。ぼくは息を吹き返した。生きているという実感があった。食べるという行為は深刻でもあった。如何に今日を喰うかという課題は、どんな論文の課題よりも難しい。田舎からの仕送りは少ないので、土日のバイトに頼っていたが、収入の多くをぼくは、中古レコードと古書に使っていたから、腹ペこでも文句は云えない。

「よお」と、ぼくの肩を後ろから叩く者がいた。同じ二部の学生で、革マル崩れの友人だ。

「今夜は集会だろう、出ないのか」と、ぼくがやつに訊くと、

「いいんだ、もうおれはノンポリさ」力なく笑った。「それより、時間あるんだろう。バイト代入ったんだ、コーヒー奢るぜ」

と、やつは、マロニエ通りにある檸檬という喫茶店に連れて行った。画材店の奥が洒落た喫茶室になっていた。滅多に来ないのは、コーヒー一杯が二百円だからだ。それだけあればでんぷらうどんが六杯も喰えると勘定する。コーヒー呑むのにも勇気があるほど貧乏していた。奢りと聞いて、ぼくはいつか呑んでみようと思ったココアを頼んだ。熱いココアの上に冷たいホイップクリームが浮かんでいる。

「どうした？ 女の子みたいにココアだなんて」やつは意外な顔をした。

「最近、甘みに飢えているんだ。何かが足りないと思ったら、贅沢な時間と、無駄な消費、そして...」

「女か」と、やつは見ている。

「それもあるかな。ココアってやつはテロリストの味なんだろう」

ぼくは啄木を思いだして独白していた。七十年安保はゼネストまで高まらなかった。阻止することはできず、大衆は景気に浮かれている。世の中は何も変わることはなかった。ぼくらは傷つき、挫折感を味わっていた。それが、セクトを離反して、孤としてのアナーキーへと駆り立ててゆく。やつもそれは同じだった。危険な匂いがした。

「授業は当分ないし、バイトはできるな」

「夜昼バイトして、どうするのさ」

「中東へ行ってみようと思うんだ」「中東？」

やつは何を考えているのか判らない。この前はインドと云っていた。今度は砂漠の国ときた。

「この国は変わらんぜ。みんな満たされている。満たされんものは欲まみれだ。それより、求めるところへ行ってみるさ」

マルエン全集を十九歳にして読破して、三木清から西田哲学まで読んでいたやつは何か、ぼくなんかよりずっと兄貴に見えた。

やつと別れてから、ぼくは女坂のほうへと歩いていった。坂の上から神田の夜景が見渡せた。そのネオンの光が、解放区を敷いたあの火炎瓶闘争の夜を思い起こさせた。放水車と、催涙弾

の煙。ジュラルミンの楯の行進。

ぼくは、煌々と裸電球のついている果実屋の前を通るとき、檸檬を見た。若い女がそいつをネットで買っていた。いきなり、檸檬が爆発した。女の体は肉片となって散らばった。東京中の檸檬がすべて炸裂した。地下鉄の中でも、デパートの地下でも、冷蔵庫の中でも、同時多発テロだ。ぼくは、そんな空想をして笑った。

何がココアだ。ぼくはまだ敗北していない。砂糖抜きレモンティーにすればよかった。新鮮な酸味、それがぼくらの若さの武器なのだ。やつに負けてたまるか。ぼくは、より「知る」ために引き返した。何処へ。どこかへ。

第260話 忘れ物

わたしはいつも仕事と家庭に縛られて旅行というものをしたことがない。海外旅行でなくとも、近場の温泉でもいいから、ゆっくりと一週間くらい行ってみたいと思う。どっさり文庫本を抱え、小説を打つためのノートパットを持って、あとは家のことも仕事もすべて忘れて、のんびりと風呂に入る。煩わしいことのなにもない。ケイタイも一週間は切っている。誰からも邪魔をされずにだ。

その希いがわりと早くきた。というより、気が付いたらわたしは旅の出で立ちで、汽車に乗り込んでいた。いつのまに、車中の人になったのかよく覚えていなかった。よく、ぐでぐでぐでに酔っ払って、目が覚めるととんでもないところに寝ていたりするそれに似ていた。そんなにゆうべは呑んだのかな。記憶がまるでなかった。ゆうべの記憶がどこかで突然に切れているのだ。そして、気が付いたら汽車に乗っていた。これはどこ行きの汽車なのか。グリーン席のようだが、わたしの他に乗客は誰もいない。腕時計は夜中の三時だ。いつ買ったのか、切符がポケットに入っていた。見ると、京都までとなっている。誰かが、わたしのために仕組んだのだ。これは、驚かせるための罠なのかもしれない。子供たちだろうか。でも、何かが気がかりだった。しっくりしないものがあつた。とんでもない忘れものをしてきたようで、落ち着かなかつた。それにしてもシーズンオフとはいえ、こんな空の車両を走らせて、JRも赤字になるだろう。通路から、隣の車両を見たがそちらも空のようだ。まさか。わたしは、おかしいと思い、席を立って、隣の車両へと歩いていった。いない、誰も乗っていない。さらに、その隣の車両にも行ってみたが、人っこひとりいやしない。そんなはずはない。これは夢なんだろうか。夢にしてはリアルすぎる。車内の広告も、現代のしかも最近見た英会話スクールのものであつた。窓の外には国道だろうか、長距離トラックの走る姿が見えていた。家々の明かりも後ろへ後ろへと飛んでゆく。まぎれもなく、これは特急列車の車内なのだ。がらんと無人の列車は回送列車のようで不気味だつた。わたしは、自分の席に戻ると、気にしないように眠ろうとした。すると、耳の奥で、お父さんと、わたしを呼ぶ声がしたと思った。幻聴か。妻の声のようだつた。

知らず知らずうとうとしていると、外は朝になっていた。ホームに列車は入線する。駅のアナ

ونسもなければ車内放送もない。客がないからか。それにしても不親切だ。ホームの駅名で、そこが京都と知る。駅前のタワーも見えた。間違いなく京都だ。何年ぶりだろうか。二十年ぶりか。わたしは、手荷物もないのに首を傾げて辺りを探したりしていた。ホームにも人影がない。無人の列車は音もなく、ドアを閉めると、すーっと滑るように駅を出ていった。わたしひとりがホームに立っていた。

朝早いからだろうか。五時半だった。始発の電車くらいは走っているだろう。早い通勤客ならもう出てきていいはずだ。ホームから階段を下りて、改札口へ向かう。そこも人影がない。蛍光灯だけは点いている。駅員も誰もいないのだ。駅前に出ても、人も車も通っていない。まるで、核戦争でもあって、全市民が避難したように、そこに朝ぼらけの京都の町並みだけがあった。わたしはどこへ行こうとしているのだろうか。タクシーが一台だけ停まっていた。わたしは、そのタクシーに乗り込んだ。顔の見えない運転手は、無口で黙って発車した。わたしは、ようやく人間を発見した喜びで、嬉しそうに話しかけていた。

「どうして、町に人がいないんですか。何かあったんでしょうか」
運転手はどうやら変わり者らしく、受け答えもしない。わたしが行き先を告げもしないのに、勝手に走りだして、車を京都の北へと向かわせた。懐かしい京都の町並が過ぎてゆく。電車も車も人も通っていない不思議な光景だった。ここは、わたしが学生時代を過ごした町だ。この町でいまの妻と出会い結婚した。あれから三十年近くが経っている。

タクシーは大原の里の三千院で停車した。金を払おうとしたら、タクシーは黙って行ってしまった。寺門の前に立って、わたしは思い出していた。

「ここだ、忘れもしない」独身時代のわたしたちが、この寺院の庭で出逢ったのだ。時も同じ十二月のはじめ、雪の降り出しそうなこんな寒い日であった。すでに紅葉は終わり、赤い枯葉が池に浮かび、苔むす絨毯の上を埋めていた。観光客もまばらで、すくりと立つ高い木立と、池の淨んだ水と、静寂さが浮き世のものではない光景を留めていた。何千年もそのままに保存されてあったような幽玄の世界だった。池のほとりに建つ伽藍の回廊に若い女がひとり佇んでいた。その服装にも見覚えがある。わたしたちは見つめ合っていた。

「佳子か」と、わたしは妻の名を呼んだ。考えてみればありえないことだった。二十歳かそこいらの妻が目の前にいること自体が。女はこっくりと頷くと、急に涙を零して、泣き声で、わたしに、

「帰って」と、叫ぶのだ。「ここは、あなたの来るところじゃない。お願い、一刻も早く、帰って」

すると、わたしの後ろからも遠く「あなた、帰ってきて」と、声が聞こえたと思った。振り向いても、庭の草木より見えない。さっきから何か気がかりな忘れ物のことがまた引っかかりだした。若い女はもういなかった。あちこち探したがどこにも見えなかった。

「どうして、ここに来たのだろうか。思い出の場所だった。いつか、来てみたいと、いつも思っていたからだろうか」

ともかくも、忘れ物を取りに戻ったほうがよさそうだ。何か、焦りはじめた。きっと重大なことなのだ。三千院の前にまた呼びもしないのに、タクシーがすーっと停まった。その運転手も無口で、行き先を告げもしないのに、京都駅の方へと走った。来た道を引き返してみれば、忘れた

ものに行き当たるかもしれない。わたしは、よく落とし物をしたときは、自分が歩いてきた通りの道を引き返した。すると、その道すじにきつと落ちていた。

京都駅からまた無人の特急列車に乗った。時計は昼の十二時過ぎなのに、まだうっすらと明るいだけで、町は眠っているようだった。これは、きつと夢なのだと、わたしは、自分の頬を抓ってみた。不思議だ、痛くない。こんなことがあるか、神経がない。

列車が郷里の駅に着いたのは明け方だった。わたしは何を忘れたのか、思い出そうとして、ずっと考えていたが、その重要な何かがどうしても出てこなかった。銀行カードの暗証番号よりもっと大切な何かだった。駅前から歩いていると、次第に思い出されてきた。わたしは、来た道を引き返していた。その方角は自宅ではなかった。非常に急がねばならないことのように思えて、いつかわたしは走っていた。確か、コンビニの角を曲がった。その突き当たりの建物だ。

角を曲がり、大通りの突き当たりには大きな市民病院の建物が見えた。まだ、明け方だから、正門は閉まっていた。夜間入口から病院に入った。廊下には電灯が点いている。わたしは、エレベータで三階の外科病棟へと向かった。だんだんと思出した。わたしは、ここから駅へと向かったのだ。廊下に息子が座っていた。ある病室から、「あなた、帰ってきて」と、妻の泣く声がしている。わたしは、そのドアを開けた。頭に包帯、点滴をし、口に酸素吸入をしている痛々しい姿のわたしがベッドに横たわっていた。その傍らに妻の佳子が泣いてすがっている。医師と看護師も付き添っている。わたしはすべてを理解した。わたしの忘れてきたものは自分の肉体だったのだ。どおりで神経がないと思った。わたしは、ベッドの肉体の中にするりと入った。ようやく取り戻したが、全身が痛む。痛いということは生きている証拠だ。わたしは、つい、痛いさで呻った。

「おお、意識が戻った。血圧、脈拍も正常値に戻りつつある」医師が感嘆の声を上げた。

「あなた、助かるのよ」妻は号泣していた。わたしの手をいつまでも握っていたようだ。

「交通事故で、あれほどの怪我をして、一時は駄目かと思ったが、大丈夫ですよ、奥さん。ご主人は強靱な生命力を持っておられる」

「奥さんが一生懸命、呼んであげたからですよ」看護師さんもそう云って泣いていた。寝ずの番で二日もついていてくれたのか。わたしも涙が止まらなかった。妻の手を強く握り返していた。

第261話 冷や水

人生五十年といわれた昔から比べれば、いまは人生百年。いまの若い人が老衰で亡くなるまでには、平均寿命もそれくらい延びているだろう。と、すれば定年退職した人はあと四十年、ひょっとすれば、人生の半分は老後ということになる。余生と呼ぶには長すぎる。そのまま隠居しても飽きるほどの時間がある。

「おいおい、どこへ行くんだ。そんな身なりして」

庭の盆栽をいじっていた重治が、妻の悦子がプーマのトレーニングウェアに、スニーカーなんか履いて、どこへ行くのかと目を皿にして立っていた。

「これからスポーツジムへ通うのよ」

重治は呆れて笑った。

「やめときなさい、七十にもなって、足腰が痛いと後で騒ぐだけだろう」

「あら、だからやるんじゃないの。足腰を鍛えておかなければ、足から弱くなってしまうのよ。三浦敬三さんを見なさい、百までスキーヤーよ。人間、鍛え方で若さは維持できるものよ。あなたのように、ほら、すっかり老け込んで」

重治はむっとした。四つ年上なだけで、寝間着に下駄で庭に出ている重治は二十も上に見える。

テレビで、肉体年齢と精神年齢の話をしていて、肉体は精神に付随するものだという。

「そうか、自己改造か、よし、わしも若返りしてみるか」

重治はまず形から入ることにした。形に心が納まる。案外、成りきれものなのだ。さっそく、悦子に負けないう、買い物に出かけた。目指すは東友デパート。

日頃あまり用のないデパートに入って、重治はきょろきょろしていた。どうしても紳士服売場のシニアのコーナーを覗いてしまう。

「いかん、いかん。若者向きだ」と、思い直して、ヤングのテナントに向かった。茶髪の若い店員のお姉ちゃんに、

「わしの着るものをみつろってくれ」と、唐突に云うと、

「はあ？ おじいちゃんの着るものはないですよ。ここはヤングカジュアルの店で」

「判っておる。わしを若返らせない」

孫のような店員はくすくすと笑って、いろいろと重治にアドバイスしていた。ボトムはリーバイスのジーンズにした。トップはボタндаウンのデニムのシャツ、「足下が草履では可笑しいな」店員は笑いを堪えている。苦しそうだ。

「あ、あちらに、靴屋さんがありますが」

服を着換えつついで、靴もだと、店員らに選んでもらった。

「若者向きねえ、かなり無理があるかな」

「なんだと？」「いいえ、リーガルの靴なら丈夫で、いま流行のウエスタン調にもぴったりで」

「よく判らんが、そいつにしてくれ」

重治は姿見の前に立った。どうも、髪型が気に入らない。今度は、館内のヘアーサロンに入っ

ていった。

「いま、若い人で流行の髪型にしてくれ」

「はあ？ おじいさんがですか」
「何か文句あるのか」「いいえ、ございませんです。それでは、少し髪を染めますね。アッシュ系のベッカムヘアにいたしましょう。それから、あのですね、後で怒り出したりしませんよね。後悔しないでしょね」

「ない、武士に二言はない」

「なんか、変な香水だの」「フレグランスですか。男の香水もいまの流行りですから」「なんだと、化粧もするのか？」「ええ、最近では男性化粧品も女性に負けず劣らず、はい、大変な時代でございますね」

「ムカツク」と、つい重治は現代用語の基礎知識の一ページを開いていた。

鏡に映る重治はとても七十五になんとするじいさんには見えない。

「三十はお若くなりました」「ふむ」と、重治は満足げ。

「ところで、若者の必需品とはなんだ」重治は若い美容師に訊いた。

「ケイタイとパソコンでしょうか」

「よし、それだ」

館内のケイタイのショップへ行って、重治はパコパコケイタイを買い求めた。係員にメールの設定もして貰う。何がなんだか判らない。

「これで、あのな、出会い系なんとかというのが繋げるのかな」重治は、小声にして、係りの女子店員に訊いた。ぷっと吹き出して、

「失礼いたしました。ただし、若い子をゲットなさるのであれば、年齢はお伏せになられたほうが...」

「よしよし」気持ちまで若返る。急に春が訪れた気分で、なんとも嬉しくて仕方がない。ついで、館内のパソコンショップへ。

「一週間のビギナーコースとやらを受講したいのだが、それとパソコンの安いのでいいから、セットで買いたい」

やる時は徹底的にやる。それが重治の信条だ。みんな、道行く人が振り返る。当人は実に満足げだった。

家に帰ると、悦子は暫く声も出ない。目の前に立っている人を理解しようとして、思考回路は拒否していた。

「あなた...なんですね、大丈夫ですか。どこか、頭、打ちました？」

「さあ、これから若い子をナンパしにゆくぞ。青春よもう一度だ」

負けん気の悦子も発憤した。おじいさんが、あそこまでやるなら、わたしだって、負けてなるものですか。悦子は、ばたばたとショッピングセンターへと出かけて行った。

夕方になって、玄関にギャルらしきものが立っていたので、重治が対応していた。

「どちらさんですか」

「わたしよ、うん、判らないの？ 悦子です」

さすがの重治もその場に転倒するところだった。髪はドレット、化粧はあゆメイク、ウエスタブーツにヒップハンガーのジーンズ。

「どお、若くなったでしょ」と、その場で回れば、重治はおったまげる。

「おまえ、へそが見えとる。尻まで見えとる」

第262話 赤もんぺ

昭和三十年といったら、まだ青森市には焼け跡が残っていた。市内は復興が進んで、この町が空襲で全市が戦災で焼けたとは思えないほどだったが、町の少し裏に回れば、寺の隔地と呼んでいた鉄筋コンクリートの仕切だけが一角に残っていた。そこは、われわれガキどもの格好の遊び場だった。いくつも部屋があり、その壁だけが建っていた。天井はなく、床はいつのまにか雑草でいっぱいだった。子供心にもそれが戦災の跡だとは判らない。ずっと後になって、聞かされて判っただけのことだった。町は通りから復興していったので、見えないところは瓦礫が結構あった。まるで、映画のセットの町だった。表向きは立派でも、裏に回れば廃墟。遊んでいて、不発弾が見つかったということは、珍しくなかった。

そんな、終戦から十年経った町には、まだ乞食が多く、立ち上がった市民の多くもけっして裕福ではなく、生きるために一生懸命だった。

われわれの遊びは空き缶を蹴飛ばして、鬼をからかう缶踏みがよくやられた。だるまさんがころんだとか、石蹴り、ゴム跳ねもやった。いまはなかなか見られない、子供たちの遊びになってしまった。車が殆ど走っていなかったから、道路に座って、いろんな石で絵を描いたり、大きな円で世界を作り、小石をはじいて自分の国を広げてゆくといった遊びもよくなされた。

そんなとき、紙芝居と並んで子供たちの人気があったのは赤もんぺだった。大黒様の格好をしていたのだろうと、後で判ったが、何か、布の帽子を被り、赤いもんぺに派手な柄の衣装で、手には打ち出の小槌を持っていたような気がした。それで、各家庭を周り、商店を周り、門付けして歩く乞食だった。年は不明だが、五十は過ぎていたと思う婦人だった。家の前に来ると、不思議な踊りをして、なにやら怪しげな歌をうたい、口上を述べていた。それがなんの意味かは判らない。多分、家内安全、商売繁盛をうたっていたのだろう。頬に丸く紅をつけて、いつもにこにこ笑って町を明るくしていた。いつからか、子供たちの間でも、「あっ、赤もんぺ来た」と、後をついて行くようになり、ふつうの乞食は嫌われていたが、赤もんぺだけは親しみを持って見られていた。

大人たちは批判的で、後で誰に聞いても、同じ噂があったようで、立派な家を二軒も持っているとか、息子を大学へやっているとか、実はすごい金持ちだという一連の噂は事実なのかどうか未だに判らない。そんな噂のせいか、

「あんなやつに金なんかやらなくていい」と、大人たちの態度は冷たくなり、いつか赤もんぺの姿は町から消えていた。また、こんな噂も流れていた。赤もんぺが便所に落ちたというのである。自宅の汲み取り式の便所に落ちて、誰も助けにきてくれないのが、ようやく匂いが沁みた頃に助けあげられたという。本当かどうか判らないが、赤もんぺを愚弄するために面白可笑しく語られたものであったものか。真相はいずれも判らない。

戦前は堤川を越えて、合浦公園まで行く途中にジッケン町とかいう町があり、そこは乞食たちの住む町であった。みんないい家に住んでいたといわれる。朝、営業に各自がでかけ、夕方ぞろぞろと家に戻ってくるのを毎日見ていたという人の話だ。

昔はみんなが貧しかったが、まだ人情があったから、乞食も貰いが多く、逆に裕福だったのか。乞食を三日やればやめられないとする言葉もそこから生まれた。いまのように福祉国家ではなかったのに、みんなで助けてやらねば貧乏は困った。自然と互助会精神が行き渡っていたのだろう。

青森市民ならみんな知っていた赤もんペだが、本名も年齢も判っていない。その後の足取りも判っていなかった。ところが、ひよんなことから、ある人から居場所を聞いたので、東京へ出張のついでに訪ねてみることにした。大手町のオフィスビルの一角にあるという建物を探していった。あまり、立派なビルなので、この中に暮らしているはずがないと先ず疑った。ビルの名は大黒ビルといい、不動産会社だった。自社ビルをかなり持っていて、テナント料で喰っている会社だった。出入りの業者に聞くと、なんでも土地転がしで大きく成長した会社だとか。創業者は女性だったという。数年前に亡くなり、いまは息子さんが社長をしているという。

わたしは取材目的でその六十半ばの社長と面会した。広い社長室の壁に明らかに赤もんペと判るにこやかに笑う写真が飾られていた。

「そうですか、青森からおいでですか。母のことは隠しもしません。恥ずかしいと若いときは思いましたが、女手ひとつで戦前戦後のドサクサにわたしを育てるためになんでもやりました。父は満州で戦死しましてね、戦争未亡人でした。いつも、自分は頭が悪いから、道化で人を笑わせて、縁起もんで生きてゆくと云って、これからは大学は出ておかねばと、わたしを大学までやりました。人の上に立つ人間になれと云うのは、乞食のように町の底辺で暮らしてきた母の思いだったんですね。母はいつも楽しそうでした。笑うことで仕合わせがくるものと信じておりました。人を笑わせ、自分も笑い、そうすると不思議に病気にもならないと、一種の信仰のようなものでした。いろんな町を転々としました。そのたびに、家を売っていったので、値上がりして儲けたんですね。乞食にはみんな理由があります。好きこのんでしている人は誰もおりません」

社長は窓から見えるビルの森に何を見ていたのだろうか。わたしはいたたまれなくなって暇した。

この東京のどこかにも焼け跡はまだあったのだ。戦争は人の心の中では終わっていない。繁栄の裏には、きっと廃墟が隠されていた。

第263話 車線変更

普段気の小さな人が車を運転すると豹変して気が大きくなったりする。

吉川平和の場合は、普段のんびりしている性格が、車のハンドルを握った途端、短気になるのだ。職場でも、温厚で優しい人柄と評判がいい。

「いいわねえ、吉川さんの奥さんって幸せでしょうね。スマートで、優しく、包まれてしまいたいわ」と、女子社員には頗る人気が高い。

「いつもすまんね。お茶汲みも女性の仕事と決めたわけじゃない。今度はぼくが入れてあげよう

」

フェミニストで思いやりがあり、なんとも女心をくすぐる。

「吉川課長さん、お帰りですか。途中まで乗せて行ってくださいませんか」

平和が、愛車のランサーに乗ろうとしたら、社内随一の美女の紺野佐枝に声をかけられた。普段は人を絶対に乗せない平和が、彼女だけは断れない。助手席に乗っているというだけで、ぞくぞくしてくる。

「どうぞ。むさくるしい車だけど」

「いいえ、どうして、素敵な車です。前から課長さんの車に乗ってみたいというのが、うちの女子社員の願望でした」

そこまで云われると、平和も悪い気はしない。

「どうもね、女房以外の女性を乗せたことがないものだから」

「それですよ、課長さんの堅いところが好き」

佐枝は少し興奮してモーションをかけようとしている。危険なオフィスラブの匂いがした。平和は汗をかいた。エアコンを入れ、MDでアコースティックな音楽を流す。

道路は渋滞気味だった。別に急ぐ帰宅でもないが、平和の目がギラギラと異常に輝き出した。三車線の広い通りの中央を走っていた。少しの車間があればすぐに割り込む。そして、一台でも前に出たがる。まるでカーチェイスをしているようにせわしない運転だった。右の車線に入った。信号で右折する車で詰まる。

「ちくしょう。なんだって云うんだ」急に出てきた平和の言葉に佐枝はドキリとした。日頃、平和の口から聞いたことのない乱暴な言葉だった。

「最近、世の中も右よりになってきたからみんな右折したがる。だが、対向車が多いから、急に右には曲がれないんだな。おっと、タクシーの野郎、ウィンカーも上げないで割り込みやがって」ライトでチカチカと嫌がらせまでする。

平和は真ん中の車線がみんな入ってくるから逆に混むのを知っている。中道路線というのは、どっちつかずで、態度がはっきりしない日和見主義者たちの走る道なのだ。ただ、そこが居心地がいいから車線変更しないで、だらだらと走っているだけだった。何も考えなくとも、真っ直ぐに連れていってくれる。大方の車はそれを走っていた。それものろいから平和は苛々していた。

「何をちんたら走ってやがんでえ、ぶっ殺すぞ。なんだ、枯葉マークか。老人じゃねえか。年寄りにはこんな幹線道路を走るんじゃねえや」

佐枝はその平和の口調にびびっていた。こんな怖い人だとは知らなかった。

平和は今度は左車線に変更した。そこは、もっと悪い。バイクやバスが走るの、邪魔くさくて、バスの後ろにつこうものなら、やたら止められる。庶民優先の道路だから、さらに苛つく。まして、左折する車が並んでいるのは、横断歩道をゆっくり歩く年寄りたちがいるからだ。左を走るタクシーも、いつ停まるかしれない。やつらは急停車、急発進、さらにところ構わず客を乗せ、客を降ろす。忌々しいことばかりの車線だ。それに、宅配便のトラックが停まっていたり、そのたびに真ん中の車線に戻らねばならなかったり、煩わしいことばかりだ。平和はぶつぶつと独り言のように云っていた。それも佐枝には不気味だった。

「あんちくしょうめ、なまいきにも、おれの車を抜きやがった。軽のしかも女じゃねえか。女ご

ときになめられてたまるか」

あの優しい課長さんの口から出たお言葉とは思えず、佐枝は横でただ震えていた。

平和はこのカーレースに負けてなるかと、一番早く、一番先に出るために車線変更を繰り返した。右にくっつき、左にくっつき、自分で馬券を買ったつもりで、何枠が入るか、どこの車線が早いか。一種の賭のようだった。思惑が的中して、右が早いと、どんどんと抜いてゆけるし、外れて自然渋滞すれば、他の車線の車が嘲笑うかのように抜いてゆく。抜かれるのが悔しい性分だった。それも車に乗っているときだけのことだが。右へ左へと僅かな隙間で強引にすれすれに入るせわしい運転に、佐枝はひや汗をかいて、シートベルトにしがみついていた。これは富士急のジェットコースターどころではない。

左車線はマイペース。わが道を行くと焦らない。右車線もおれについてこいと大道をゆくがごとき、それについて走る商用車、ダンプにトレーラー。

平和の車はすべて宛が外れ、あっちへふらふらこっちへふらふらした挙げ句、気が付いたら、みんな先へ行ってしまい。自分の車が結局はビリになり、みんな笑っていた。

「くそっ、負けた。おれは駄目な男だ」平和は号泣した。

「あのう、わたし、ここで降りますから。課長さん、泣かないでください。それじゃ、どうも、ありがとうございます」

佐枝は逃げるように車を道路の真中で降りた。車は一台だけ信号で停まっていた。あとはみんな先へ走っていった。

第264話 交通禍

あなたはいまの幸福な家庭が、ある日突然、たった一個の小石で破壊されるということ信じますか。

これは実際にわたしの身の上の起こったことなのです。いま、思い返しても首を振りながら否定し続けるほど、嫌な気分になります。

わたしは当時、妻と二人で開業したばかりのクリーニング店を切り回していました。共稼ぎで大手のクリーニング店に勤めて十五年、そろそろ蓄えもできて三十五歳という節目に独立し、店を持つという夢が実現いたしました。高い機械設備だけはリースを組みましたが、顧客リストも長年溜めていたので、一からとはいえ、すぐに注文がきました。サラリーマンをしていたときよりは稼ぎはよく、夜遅く仕事をしていても苦痛でもなく、すべてが自分に返ってくるのがやり甲斐がありました。子供二人も小学校へ通うようになり、家族で旅行もするなど、順風満帆でありました。

その日は配達が多く、道路も混んでいたもので、わたしは軽のライトバンを走らせて、多少焦っていたかもしれません。本通りが渋滞しているので、路地を走ろうと、住宅街の中を近道をしておりました。わたしの車の横を老婆が歩いていました。車と老婆の距離は三メートルはあったと

思います。いきなり老婆は、「ぎゃっ」と、蛙を潰したような声を挙げて、その場に転倒してしまいました。その間、狭い道路ですが、数台の対向車がすれ違い、走り去ってゆきました。みんな、老婆の方をちらりと見るだけで、助け起こそうとしません。別に交通事故でもないのに、ただ、その時は老婆が何か持病の発作で起こして倒れたものと思って、わたしは、親切心を起こして、車を路肩に停めて、老婆のところに駆けよりました。

「お婆ちゃん、大丈夫ですか」老婆は卒倒したまま、動けないでいたようです。手で額を押さえていましたが、少し血が流れていました。

「ひ、人殺し...」確かに老婆は昏倒しながら、うわ言のようにそう云いました。わたしには何のことか判りません。ただ、このままにしてはいけないので、近くの家を叩いて、救急車を呼んでもらいました。その間、わたしは、なるべく動かさないように老婆をかばうようにしていました。まもなく救急車がやってきました。救急隊員は、老婆を乗せながら、てっきり車と接触したと思っていたようです。

「車と接触していない？ だったら、この額の傷はなんです。後ろに倒れたんですね。後頭部を打っているかもしれないから、大きい病院のほうがいいだろう」

わたしは、一応、看板をつけた車で走っていましたから、嘘はつけません。ちゃんと正直に名乗りました。近所の住人たちが、何事かと人だかりができていました。みんなの目は、わたしが交通事故を起こした当事者のような目つきで見えていました。へたに親切に人助けなんかするものではないと、かわりになったことで逆に疑われて損をした気持ちになりました。

それから、一週間が経ったときの事です。あの老婆が突然、店を訪ねてきたのです。わたしはあのときの老婆がお礼に訪れたものと思っていた。まだ、頭に包帯を巻いて痛々しい格好だが、ちゃんと歩いているので、安心して、笑顔で対応しました。

「あのときのお婆ちゃん、もう退院したんですか」

老婆は、わたしを睨むような怖い顔をしていました。そして、いきなり病院の請求書を突きつけて声高に云いました。

「入院治療費払ってもらおうじゃないの」

何のことか判らないでいると、老婆はこんなことを云い出しました。

「あんたの車のタイヤが小石をはじいて、わたしの額に当たったんだよ。そのまま帰るなんて、ひき逃げと同じじゃないか」

まさか、と思いました。あのときは、何台も車が通っていたはずだし、わたしの車のはじいた音はしなかった。ただ、嘘ではない証拠に額に確かに血が流れていた。わたしかもしれないし、別の車かもしれない。証拠はどこにもありませんでした。

「あんたの車から飛んでくるのを、わたしゃ確かに見たんだ」と、老婆は「見た」ことを譲らない。押し問答してもしかたがない。仮にわたしがやったことでも、任意保険があるからそれで全額払えるだろうと、わたしは安易に考えて、老婆を宥めるため、保険の話をしてしまいました。

「判りました。わたしがやったのかもしれませんが、ちゃんと保険で支払いしますから、心配しないでください」

店先でぎゃんぎゃん騒がれても営業妨害になる。この場を取り繕うため、わたしは治療費を支払う口約束をしてしまったのです。

老婆が帰ってから、損保の担当に電話を試してみた。

一事情は判りましたが、これは難しいですよ。確かに自宅のはじいた石が当たったという他の目撃証人もいないですし、第一、はじき石では保険適用外となっているんです。

わたしは青くなりました。後で、損保の係が、店に詳しい資料をコピーして持ってきて、説明を受けましたが、確かに道路を沢山の車が走っていて、そんなことがよくあるだろうとは思いました。それにいちいち保険会社が支払っていたら、損をしてしまいます。相手の車が確定できない事故というものは扱いが難しいのです。

仕方なく、わたしは高い入院治療費を貯金を降ろして支払いました。それで、終わることはなかったのです。店に老婆から日に何度も電話がきます。

「わたしだよ。あんた、人に怪我させといて、知らんぷりするんじゃないだろうね。わたしや、歩くのも年で大変だから、毎日病院通いもタクシーを使っているんだよ。そのタクシー代と、通院の治療代も保険は利かないと病院は云っているから、みんな現金で支払っておくれよ。」

大変なことになりました。毎日一万円近くの出費になります。店の利益の半分近くが持ってゆかれます。それは、大変だと、わたしは、毎朝、老婆の家に車で迎えにゆくことにしました。タクシー代を請求されるよりはマシです。老婆は独り暮らしで、身寄りがないということも判りました。わたしは、午前中、仕事ができない毎日を送りました。老婆を迎えに行き、病院に連れてゆく、そして散々待たされた挙句、また老婆を家まで送ってゆく日課が始まりました。

老婆は敵意を持っていましたが、次第にわたしを身内のように話し掛けて、独り暮らしの寂しさを紛らわせようとしているかのように見えました。

「この病院はヤブだという評判だ。なかなか治らないから、明日から県病に替えるからね」わたしは暗澹とした気持ちになりました。県病は遠く、さらに時間がかかるだけでなく、混んでいるので待たされると有名だったのです。

「お婆ちゃん、頭のほうはもう治ったんでしょう」と、わたしがきつい口調で云うと、

「あのとき腰も打ったんだよ。いまはその腰の治療に行っとるの」

老婆のあちこちの痛みは事故のせいだけでないかもしれません。年寄りならみなどこか痛いものです。それをすべて事故のせいにして、これから何年もつきあわされた日には、こっちは破産してしまいます。もう充分すぎるほどの誠意も見せましたし、弁証もしました。これ以上むしりとられると、どっちが犠牲者か判りません。

商売の方もおもわしくなく、借金が次第に増えてきました。わたしは、ローンで十万円を借りると、老婆のところに持参しました。

「お婆ちゃん、これでなんとか勘弁してよ。うちも楽じゃないし、子供二人にもかかるし、女房も内職までやって埋め合わせしているんだから」

すると、あれほどにこにこ話していた老婆が掌を返したように怒鳴った。

「なんだと、わたしを見捨てるというのか、見殺しにするというのかい。病院の治療代はあんたの名前で出しているから、いいとしても、誰が毎日病院の往復やってくれるんだい」わたしは土下座して謝りましたが、聞いてもらえません。いままでの成り行きを見ていて、家庭は地獄と

化していました。女房と口喧嘩をすることが多くなり、つい手を挙げてしまったのです。それで、子供を連れて出てゆきました。わたしは、店をひとりで切り回す限界も感じていました。老婆からは毎日何回も脅迫電話がかかってくる。もう、すべてが限界でした。

あれから、十五年が経ちました。老婆の消息は依然として掴めないまま、警察も動いていないようでした。わたしは、老婆の家に暮らしております。女房が出ていってから、身寄りのない老婆と和解の意味で、養子にはいったのはまもなくです。

そして、老婆が行方不明になったのもその後のことでした。警察には家出人捜索願だけ出しておりました。あれから十五年、時効は成立していました。

第265話 不純文学

乾物屋の店の中に、よろよろと一人の男が倒れそうになって入ってきた。髪は床屋にも行かず、手入れもしていないボサボサ、髭も剃り残しがあり、丸い黒縁のメガネの奥で目が潤んでいる。印刷屋で働いている溝辺だ。乾物屋のおやじの喜多村が、商売そっちのけでエロ本を眺めているときだった。

「おい、どうした。なんかあったのか。具合でも悪いのか」と、溝辺を抱き起こした。こんなところで倒れられたら、珍味を試食して当たったと思われたらいけない。喜多村は本人のことよりそっちの方を心配していた。

「死ぬんなら、よその軒先でな。うちは食べ物商売だから、こんなところで死なれちゃ困る」

「友達がいのないやつだな。ぼく、落ちたよ」

「落ちたって、ドブにか、便所にか」匂いを嗅いでみるがそう、匂わない。

「文学界の新人賞だ」

「なんだ、そんなことか。これで何度目だ。もうやめたらどうだい。五十過ぎて新人賞って年かよ。旧人賞を狙ったほうがいいぜ」

「君には、ぼくのこの苦しみが判らないのか。ぼくは、文学に人生を賭けているんだ。死にたいよ」

「そう、落ち込むなよ。たかが、おっと、宝くじ外れたと思えば」

「文学とくじを一緒にするのか」「たいして変わりなしねえよ。生きるの死ぬのってうるせえやつだ」

溝辺は、店の奥の部屋に座って、喜多村の注いだ焼酎をぐいと呑んだ。

「げえ、水じゃないのか」「あたりきよ、こんなときは酒に限る。印刷屋のほうは忙しいのかよ」

「それが、暇だから小説が書けるんだ。機械の稼働率が落ちている」

「こちとらも同じよ。いかさま食品の煽りで、客の不信感がなんでも疑う」

ふう、と溝辺は吐息してから、また思い出したようにさめざめと泣きながら、原稿用紙のコピー

を喜多村に手渡した。

「君なら判ってくれるかと思って、今回、落選した中編百枚を持ってきた。どこが悪かったか読んでくれたまえ」

喜多村はげんなりした顔で、ぺらぺらと原稿用紙をめくっていた。

「おまえは純文学路線だろう。おれはポルノ専門だ。いまどき、こんな純文学なんか読むやついるのかよ。ミステリーにファンタジー、官能小説に時代小説、ハーレークイーンにやおい小説よな、いま読まれているの。とくにおまえの書くような、私小説なんかははっきり云って退屈でう。心理小説しかり、身辺小説しかり、刺激がないんだよな」

店に珍しく買い物客。

「奥さん、あったらしいのに入ったよ。青森から七子八珍、そろそろお歳暮にどうかなって」
溝辺は、不思議に思っていた。どうして、こんな干物臭い店の中から文学が生まれるのだろうか。

「おまえなあ、また主人公を大学の教授にしたろう。どうして、いつもそんな発想なんだ」喜多村は原稿を読みながら文句を垂れていた。「どうして、魚屋のおっさんだとか、古本屋のおやじだとかが出てこないんだ。ハイソサエティで、インテリより書けないのかよ。それになんだ。ホテルへ連れ込んだのは感心したが、そのあとは、すぐに朝が来ただと、ざけんじゃねえや、どうして、セックスシーンが出てこないの。どうして、チョメチョメしたとか、アヘアヘとか書かないの」

「そんな、それは、君の得意のジャンルでしょう。これは人間の生き様を描いた...」

「おっと、裸同士で汗でぬるぬるするのは人間の生き様ではないの？ ちんぽことおまんこと悪戦苦闘するのがどうして汚いの。書くんだよもっと、あからさまに、やりまくるんだよ。なになに、『美智は昭彦の手を握ったまま、じっと見つめ合っていた。それで二人の愛は昇華していた』だと、そんなんで昇華されてたまるか、ここはこう書き直せ。『美智は股を開いた。昭彦は濡れた女陰に男根を突き立てた。そこ、そこと美智は悶えた。二人の愛は昇華に向かってよがり声をあげた』ってな」

「うう...、やはり、君に相談したぼくがバカでした。君はぼくの作品を陵辱した」

「それもいいだろう。原稿用紙をちんぽこで突き破る。文学が芸術まで高まるってな。どうしておまえは真面目なんだ。世の中、もっと面白可笑しく暮らそうぜ。こんなバカげた世の中、逆に笑い飛ばしてやるんだよ」

溝辺はますます落ち込んで、原稿用紙を抱いたまま、帰ろうとした。

「おい、帰るのか。すまん、慰めるつもりが、これ、持ってゆきな。貰った蟹だが。これを食べて元気出せよ」

溝辺は蟹を手にしよんぼりと帰っていった。

翌日、文学仲間から喜多村の店に電話が入った。

一聞いたか、溝辺が死んだそうだ。

「なんだと、昨日、うちに来たばかりだぜ。新人賞落ちたとしょげていたが」
一どうやら自殺らしい。

「なんと、やつらしい死に方だな、何もそこまで思い詰めなくともなあ」
—それが、珍しい自殺の仕方だな。死ぬ前に死にたい、死にたいと家族に洩らしていたらしいが、腐った蟹を食べて死んだんだ。

「何？ 腐った蟹だと。そう云えば、少し匂いしていたかな」

—何か心当たりがあるのか。

「いや、何でもねえ。危ねえな。もう少しでおれが喰うところだった」

—絶筆になった小説を抱いていたというんだ。そのラストで、主人公が毒を飲んで死ぬんだ。あいつはそれで自己完結したんだ。

喜多村は後悔していた。あいつの小説のラストシーンも書き直すべきであったと。せめて、腹上死ぐらいにしてやりたかった。

第266話 眠れない夜のために

新しいものに飛び付くのは、何も若者の特権ではない。真田雅弘も、四十になって、世の中に遅れてなるかと、部屋の中がハイテク製品で埋まっていた。会社に行っている間は、仕事だから、見たい番組はDVDに録画しておく。朝から夕方までの、衛星放送も含めての番組予約で、DVDは何枚あっても足りないくらいだ。その、録画したメディアが、だんだんと溜まってきていた。それだけではない。会社の帰りにビデオレンタルに寄って、去年、見外した洋画を借りてくる。二泊三日で五本も。ついでにJポップのアルバムをMDに録音するために、三枚借りた。六時に仕事が終わると、家へ直行。飯をばたばたと慌ただしく食べると、そのまま自室へと走り込む。女房どころか子供たちとの会話もあったものではない。これから、朝まで、やらねばならないことは山とあるのだ。

さあ、机の上のノートパソコンのスイッチを入れる。いない間にメーリングリストのメールがどっさり来ている。それを必ず読まなければならない。適当に返信もする。仲間うちからのメールにも返信。ケイタイがその間に鳴るので、そっちとも話しをしたり、メールで返事を打ったりして忙しい。インターネットで、最新情報も入れなければならない。毎日の習慣になっているから、ネットのニュースは欠かせない。サラリーマンにとって情報は一番の戦術だと心得ている。その画面を見ながら、横のテレビでは、借りてきたビデオで映画を見ていた。そして、後ろのMDコンポでは、CDを録音。と、思いきや、さっきコンビニから買って来たパソコン雑誌に、メンズノンノも目を通す。目が二つしかないのは不便だ。一ダースくらいあったっていい。耳も六つは欲しいところだ。

それが終わると、時計は夜中の三時。時間がない。上司から読めと云われた、ビジネス書がある。それも三十分の斜め読み。常に時代と流行に乗り遅れてはいけない。最先端に自分を置いておかねば、不安でならない。雅弘は思い出す。

「そうだ、DVDも見なければ」見なければならないのが、すでに時間にして二百時間分も溜ま

っていた。なんとしても見なければならない。その日その日では消化しきれないからどんどんと溜まってくる。情報の洪水だ。部屋の壁にはびっしりとCD、MD、DVD、ビデオにカセット、雑誌から単行本、文庫本と詰めるだけ詰めていた。整理がつかない状態だ。ぼやぼやしているとうっすらと明け方になってしまった。コーヒーをインスタントで入れる。眠気醒ました。トイレに駆け込む。出す時間も惜しいので、トイレの中にも本があり、テレビとラジオがある。テレビを点けて、ラジオのイヤホンは耳に、ちらちらと雑誌も見たりしている。一度に三人の話しを聞くことが出来るお釈迦様もいいところ。雅弘の目標はマルチ人間になること。それで得た情報量でその人間の価値が決まる。会社という馬場では、走り続けるよりないのだ。

みんな起きてくる。家族と話す時間ほど無駄なものはない。一秒も無駄にはできない。とにかく、情報だ。新聞も三紙をとっているから、隅から隅まで目を通すには一時間はかかる。その間、トーストをくわえ、ミルクを呑み、テレビでニュースと芸能界のくだらない話題でも見ておかなければそれも時代だ。頭に詰めるだけ詰めて、果たして分類整理されているのだろうか。消化不良も起こしそうだ。構うことはない。どんどんと耳と目から詰め込む。政治、経済、特に株価は大事だ。いろんな情報が株の売買には必要だ。女房とはもう一年も口を利いていないか。子供たちも完全無視。それでもいい。男は社会という戦場で戦っているのだから。女子供には判るまい。

出勤途上の電車の中も無駄にはできない。しっかりと耳にはヘッドホン。ザウルスでネット情報。特に、無料のメルマガが情報としてはいろいろ送ってもらうが、最新情報がかなりある。新商品から新刊案内。読書感想、物理化学の最新ニュースまで、不得意な理科系であっても仕事にはなんらかのヒントがあるかもしれない。駅ではスポーツ新聞も買って、巷の話題、裏情報も大事と思う。この世に不必要な情報はない。どんな小さなことにも耳を貸す。そこから思わぬヒントが生まれるかもしれない。

雅弘は会社でばたきと倒れた。もう一週間も眠っていない。眠る時間がない。救急車で運ばれている間にも手にはしっかりと週刊誌、耳にはイヤホン。

第267話 ならずもの国家

π国は南海の孤島だった。国連には加盟していないが、三年前に勝手に独立宣言をした。どこの国も独立を承認していなかった。何故なら、その国の大統領は、前科十三犯、しかも死刑囚であったものが、脱獄して、仲間と国をでっちあげた。その国は、人口三万人。人種も様々で、主に、日本のヤクザとアメリカのマフィアが建国した。国会議員もギャングから暴力団、殺人犯などが選ばれた。国民の多くが、世界各国から逃げてきた犯罪者の家族だったし、指名手配されているものがすべてこの国に逃げてきていた。他国と犯罪者の引き渡し条約を結んでいないので、どんな悪党でもここでは安泰だった。

この国ではなんでもありありで、憲法はあることにはあるが、

第一条 人を見たら警官と思え。

第二条 盗人にも三部の理。

第三条 盗みは人のためならず。

万事がこんな調子だから、法律なんかあるわけがない。当然、警察もない。学校はあるが、教えることは、国語、算数、理科、社会などではなく、強盗学、強迫学、殺人実技、放火などと、盗みのテクニックから逃亡の仕方まで専門に教える。大学には、さらにハッカーから金融詐欺、贈収賄、脱税など、ありとあらゆる犯罪を学び、博士課程になれば、秘密諜報員以上のプロに養成されている。

そんな国が何で喰っているのかというと、世界各国に派遣されているスパイもどきの犯罪コネクションが本国に送金するのだった。また、近海ではシージャックも堂々とやるし、ハイジャックで、乗員乗客と旅客機も丸ごと手に入れていた。それを第三国のならずもの国家に売却して利益を得ていた。

それほどの犯罪国家を国連が野放しにしているのは、戦略核をかなり保有しているから手が出せないのだ。厳重な島の防備に、FBIも侵入できないでいた。

大統領補佐官の熊坂が、大統領のカポネに進言していた。

「大統領、わが同盟国が、日本から拉致している事件は連日の報道でご存じでしょうが、わが国も負けずとやりましょう」

「なんだ、拉致したからといって、スパイに養成するだけではないのか」

カポネは葉巻をくわえたまま、机に脚を載せていた。

「いいえ、そうではありません。わたくしにいいアイデアがあるのです。実は...」

それからひと月の間に世界各国の海岸に住む一般市民が次々に姿を消した。作員が密かに海から侵入して、拉致してゆくのがあった。その後に、決まってπ国のIP電話で、その国の最高機関へ強迫電話が、映像と共に送られてくる。

一わしは大統領のカポネだ。あんたとこのマーガレットちゃんを預かっている。命と引き替えに三億ドル用意しろ。いいな、警察に連絡どころか、全国に放映したって構わんからな。ははははは。

とうとう、国を挙げての身代金目的の誘拐までやりだした。国連軍は島を取り巻いているが、手も足も出せない。人質がいるからだ。

「大統領、国連が攻めてこない方法があります。国家的財産を盗んで、わが国に持ち込むのです」

「それは途方もないが、どんな財宝なのだ」

「大英博物館、メトロポリタン、ルーブル美術館、正倉院などを狙うのです。普段は警備も手薄でやりやすいでしょう。秘密空軍に空から運ばせましょう。国宝クラスがあるとすると、質草としては保険の役目をいたします」

さっそく、各国の犯罪大使館が行動に移した。これは一斉にやらねばならない。世界同時に行われて、軍隊並の装備で攻撃をしかけて、あっというまに、垂直離陸ジェット機で大規模な強奪が行われた。

「大統領、世界各国の首脳がかんかんに怒っています」

「そうか、元々大英博物館など盗品博物館ではないのか。植民地から強奪したものばかりだ。拉

致だと、日本も怒ることはない。戦時中に朝鮮人を百五十万人も強制労働させて、奴隷のように殺したくせに。大義名分がある戦争というものはない。おれたちのように、堂々と犯罪と宣言していたほうが、良心的というものだ」と、完全に悪の枢軸を気取っていた。

「目指すは世界制覇だ。それに向けて、同盟国のサミットを行いたいから、フセインと金とラディン、KKK団、ネオナチなどに連絡しよう」

すっかり悪の巣窟となってしまった孤島に、鬼のような人間のくずが集まって、金銀財宝に囲まれていた。国連は、成敗したくともできないので、どうしたらいいか、各国の首脳が連日の会議で知恵を出し合っていた。

中国の代表が、国連事務総長に耳打ちした。

「この事態を救う唯一の人間が日本にいると聞きました」

「なんと、ジャパンに救世主がいると云うのか。して、その名前は」

「確か、モモタロウとか」

「……」

第268話 ここではないどこかへ

若者のロック・グループが歌っていた。「ここではないどこかへ」と。いまではないいまへ。サミュエル・バトラーの「エレホン」はnowhereのアルファベットを逆に読ませたユートピア物語だ。若者たちは、現代の政治にも経済にも、大人たちの作り上げた失敗の世界に幻滅を感じて、ひたすら、退廃的に、あるいはありもしない幻想を抱き、この世界から逃げ出したがっている。海外旅行へ逃避するのも一時的なユートピア探しかもしれない。

政治に無関心なのも、選挙の投票率が若者には低いのも、彼らにとってこの国とはどうでもいいことに近かった。勝手に汚職でも流用でもしてくれと、別に怒らない。将来とも日本国民でいたいとも思わない。税金の安い、堅実なしかも景気のいい仕事がいくらでもあり、やりがいのある国が近くにあれば、若者たちはすぐにでも移民としてゆくだらう。かつて、満州に、ブラジルにハワイにと流れていった日本人の血は、島国に固執したものではなかった。

西村早樹も女子大は出たけれど就職先がない。一年、就職浪人してしまった。アパートの部屋にはどっさりトリクルート情報誌が積まれてある。毎日のようにバイトの合間にハローワークのパソコン端末を叩いてみる。これもいい出物があれば、偶然の機会というものがある。求めよ、さらば開かれんの世界で、じっと待っていても棚ボタということはない。積極的に進んで探すのだ。みんなそうしている。早い者勝ちのとりもの勝ちといういい条件のものもいくらでもある。

ただ、黙って、早樹は仕事を探し、ファーストフード店でバイトしているのではない。その間に資格を取るために勉強もした。大学では教養程度だが、もっと実社会で役立つ資格だ。

大学でも嚙った、中国語をマスターしようと、駅前留学もした。授業料が高く、バイト代がふっとんでしまった。それで、やむなく夜も勤めに出ることにした。友人の世話で安全なクラブへ

臨時で週に三日だけホステスをするようになった。

「陳さん、この子、将来、中国で働きたいって、いまね、中国語勉強しているんですよ」
ママが商社の親分をしている陳さんに取り入れてくれた。何が幸いするかわからない。早樹は、まるで陳さんに面接を受けるかのように、中国語と英語の力を試された。そればかりか、世界経済の動向とかも、テストされた。毎日、流通新聞、経済記事には隅々まで目を通す。ゆくゆくは商社で世界的に羽ばたきたいというのが夢だった。日本のような小さな土俵で相撲なんかとりたくない。女の子でさえそう思っている。最近の若者たちも見捨てたものではない。それより、日本が不況のどん底でどうしようもないから、外国に目を向けるよりないのだ。

「早樹、オーケーよ。あなた、よかったら、明日、東京支社へ来なさい。香港に席、開いてるよ」

早樹は中国と日本の合弁会社に採用されることになった。さっそく、香港へと配属された。旅客機は、海の上の空港へ、高層ビルが林立する谷間を縫うように着陸態勢に入った。中国に戻ってからは、香港は上海などにお株を取られ、中国貿易の窓口としては、多少活気が落ちた。みんななどんと、中国の各都市へと直接取引に出かけられるように自由化が進んだからだ。

早樹の住むアパートは、九龍地区の安いアパートだった。かなり年季が入っている。三階建の三階、北向き、すぐに隣のアパートがくっついているから日当たりは悪い。覗かれそうだ。じめじめしている。四畳半ぐらいよりないところに小さい台所とトイレがついている。この独房のような部屋で月に五万は高い。香港は土地が狭いから家賃が高いと有名だ。我慢することにした。

香港支社に出社する。高層ビルの二十七階にオフィスがあって、いろんな国の人がパソコンを叩いたり電話をしたかりして、忙しく走り回っていた。早樹は緊張していた。デスクは一応与えられたが、上から簡単に紹介されただけで、みんなそれどころではない。

「早樹、着任早々で悪いが、これから敦煌まで飛んでもらう。農業技術者の団体を李さんと一緒に案内する世話役だな」

チーフの名刺を持っていた李さんというベテランの商社マンと二人で、空港へ出迎えることとなった。何か二日前に東京を発ってきたとは思えない目まぐるしさだ。

商社としては、広大な肥沃な土地と安い労働力があれば、先行投資もする。日本の技術を輸入して、作物を輸出する。敦煌と聞いてもピンとこないが、確か井上靖の小説に出てくる、シルクロードの国だ。中国の西の果ては遠いような気がした。香港経由で、中国入りした一行と、チャーター機で敦煌までひとつ飛びだ。資材、機械も積み替えた。若い女性がいるだけで場は華やぐ、ここでもホステスみたいなものだと早樹は思った。

敦煌に着いてから、手配していたトラック、ジープに分乗して、西へ西へと見渡すばかりの砂漠へと旅だった。大陸は広い。東京なんか、実に狭い範囲に沢山の人間たちがひしめいている。砂漠を見ると人生観が変わると、誰か云っていたが、その通りだった。一行は丸二日車で走り続け、もうここまでは日本人の商社マンであろうと、誰も来たことはないだろうと思われる秘境の村に入っていった。そこの商人宿のような、古くて汚らしい宿へ泊まることとなった。

宿屋の女将は流暢な日本語で話しかけてくる。

「こんなところまで日本人が来るんですか」と、早樹が訊くと、

「わたしは日系三世よ。ひいおばあさんが明治時代に日本からここまで売られてきたの。旅人相

手の遊郭があってね、明治の中頃になんとかという日本の探検家が、ここまで調査に入ったのね。みなさんと同じように、こんなところまで日本人、来ないでしょうと、思った云うたね。そこにうら若き女たちが悪い男に騙されて、こんな僻地に売り飛ばされてきたのよ。みんな驚いて云うたね、日本の女は凄ってね。早樹さんね、女は昔から逞しかった。あなたもがんばるの」か弱き女は返上だ。遠く、幾重にも畳みかけるような山並み、果てが見えない一直線の道路が西アジアへと続いている。不思議な赤い夕陽を眺めていて、早樹は勇気が湧いてくるのを感じていた。自分を試すのは、ここかもしれない。そうでないかもしれない。でも、きっとみつかる。都会にはなかった故郷が。

第269話 老人ホーム

「おじいちゃん、元気でいてね。わたしたち、月に一度は面会に来るからね」
滝谷家では、兄弟でたらい回しした挙げ句、家族会議で、じいさんを老人ホームへと預けることにした。多少ボケは入っているが、頑固なだけで、足腰はしっかりとしている。別に邪魔にすることも無いのだが、頑固で融通が利かないのが、若い夫婦と合わない。連れ合いに先立たれてからは、ますます依怙地になった。

滝谷のじいさんは、がっくりきていた。わしもついに余されたかい。家族と一緒に暮らしていたから寂しくもなかった。孫ともうまく行っていたのが、八十近くなるとお払い箱かい。とうとう、自分も人生の墓場、姥捨山の老人ホーム入りをするようになったのか、と、しょげ返っていた。見ると、車椅子で、テレビを見ている者、床を這い蹲う者、杖をついてもよろけながら歩く者、手すりに掴まり立ちをしている者など、ようやく生きている老いぼればかりだ。わしもあの仲間入りをするのか。見るほどに人間の廃墟という感じで哀れだった。ようやく歩いている。歩ける者はいい。部屋のベッドに寝たきりの老人も沢山いる。自分が誰か判らない徘徊老人も廊下をふらふらと歩いている。玄関の自動ドアは職員がスイッチで開けてやらなければ、開かないようにロックしてある。ここは監獄なのだ。もう、ここからは出られないのだ。滝谷老人は悲惨な気持ちになった。もう、孫とも遊べないのだ。

家族が帰って行ったのを数人の老人が、確認すると、
「おい、帰ったぞ」と、仲間に合図した。すると、カーテンが引かれ、ドラムが叩かれた。エレキギターがジャカジャカ鳴る。ベースは腹にズンとくる。隠れていた婆さんたちも出てきて、椅子に座って手拍子だ。ジャスのコンボで、スタンダードナンバーを演奏するのは、ホームの老人たちだ。

「さあ、ぼんやりっ立っていないで、あなたの歓迎演奏会なんだから」と、滝谷さんは前列の椅子に座らせられた。ピアノ、サクソと本格的だ。滝谷さんが啞然としていると、隣りに座っていたおばあさんが、滝谷さんの手をとって踊りだした。みんなもそれに続いた。いままで、よ

ろけていた哀れな老人はどこへ行ったのか、みんな演技してわざと老人の真似をしていたようだ。本当はみんな元気なのだ。滝谷さんも次第に若いときを思い出して踊りのステップが出てくる。

「そうそう、その調子ですよ。うまいじゃないの」と、おばあさんに誉められる。

「どうですか、みんな元気でしょう。彼らは往年のジャズメンばかりでした。グレンミラーの前座を務めたこともあるそうですよ。わたらの若い時は進駐軍の置き土産のジャズとダンスホール大流行りでしたな」

見知らぬじいさんも踊りながら話しかけてくる。職員や、園長がにこやかに眺めている。

滝谷さんは珍しく汗をかいた。そして、久々に笑った。演奏が終わると、ご馳走がみんなの手で運ばれた。職員に任せきりの病人でいてはいけない。できるだけ体を動かすことだと教わった。

「寝るから寝たきりになるの。歩こうとしないから歩けなくなるの。何事も日頃の訓練。生きるための訓練だわ」

元気のいいおばあさんがそう云ってくれた。本当は御法度なのだが、こっそりと隠していたワインや酒を出してきた。先生も見て見ぬふり。新入りの自己紹介があった。

「ここは、本当に老人ホームですね。入るところを間違えたかと思いました」

滝谷さんはいまだに信じられないといった顔をしている。

「カノジョはいるんですか」と、おばあさんたちから質問だ。

「はて？ カノジョとは…」おばあさんたち、まるでギャルのようにキャーキャーと騒ぎだてる。それをひやかすように、じいさんから指笛が鳴らされた。

「気をつけな、二股、三股かけられるぜ」誰かが茶々を入れる。

「また、あんたね、もう、いや」と、おばあさんがそのじいさんを追いかける。みんな爆笑した。

ここは、老人ホームなんだろうね。滝谷さんは呆然として言葉が出なかった。まるで、中学生の教室のような雰囲気があった。

「ねえ、あなた、ひとりなんでしょ」と、別のおばあさんが早くも云い寄ってくる。

「はい、つれあいを五年前に亡くしてからは」

「わたしも、五年前に未亡人。これは何かの巡り合わせかしら。あなた、何座？ 血液型は？」と、云ってくるから、そんなの訊かれたこともない。「はあ？」と、ピンとこない。

あちこちで、おばあさんたちがケイタイを出してメールを打ったり、インターネットを見ていたりする。いちいち、若い娘のようにキャーキャーとうるさい。

「ほら、みんなでプリクラで撮ったの」と、シールまで集めているコレクションを見せてくれた。

「あなた、歌手では誰が好き？」と、別のおばあさんが滝谷さんに訊いてくる。

「歌手さんですか。藤山一郎さんとか」

「いやだわ、そんな大昔の人、いまのトレンドイなどころだよ」

何、なんなのだ。ここの世界は。滝谷さんは自分だけが老人で、このホームの中は老人の仮面をつけた若者たちではないのかと疑った。

「わたしはねえ、あゆが好き」

「鮎ねえ、イワナも塩焼きが美味いがね」滝谷さんはまるで判っていない。モー娘のメンバーの名前をみんな云えなければ、ここのホームには入れないのだ。

ジャズがロックに変わった。バックストリートボーイズの新曲だった。酒も吞んでかなり酔った老人たちも、ビートのきいた曲に合わせて踊り狂う。驚くほどの元気だ。このエネルギーはどこからくるのか。滝谷さんはただおろおろするばかり。

「みんな、面会が来たぞ」

誰かが、外を見張っていて、全員に聞こえるような大声を出した。すると、いままで、踊っていた老人は車椅子に座ったり、杖をついたり、床を這ったりしはじめた。楽器はカーテンで隠した。テレビのチャンネルも教育テレビに切り替えた。急に、館内がしんと静かになった。

滅多に來ない面会人だが、たまに差し入れを持ってきたりする。それは、あとで、みんなでまた大騒ぎして、子供のように奪いあうことになるのだ。面会人が帰った。すると、また例の大騒ぎ。アンプのレベルは上げられ、キーボードからけたたましい音がした。

「イヤッホー」と、叫ぶもの、ドタバタと走り回るもの、ここは遊園地か幼稚園。年をとれば子供に還るというが、ここまで酷いとは思わなかった。滝谷さんが大人しくお行儀よく座っている周りは、老人力が爆発していた。

そこへ、突然、滝谷さんの家族が忘れ物を置きにやってきた。ドアががらりと開いた。その音で、一瞬音は止まった。みんなの動きも止まった。ギターを抱いたまま、マイクをくわえたまま、時間が止まったようだった。滝谷さんの家族も、そこに信じがたい光景を見ていた。

第270話 水 難

「ない、おれのケイタイがない！」

北野拓春は、朝からひとりで騒いでいた。ゆうべ、遅く帰ってきて、酔っていたから、ワイシャツはソファの上に置いていた。それが、起きて着ようとするときワイシャツがない。その胸ポケットにケイタイがいつも入っていた。クリーニングに出したばかりだから、二日三日は着るのだ。まさか、洗濯したわけでは、と、浴室に行くと、少し惚けてはいるが、北野家の洗濯係のじいさんが、

「なんか、洗濯機の中でカラカラと音がすると思ったら、これは何に使うものなのだ。洗濯しなければ綺麗にならん機械なのか」と、拓春に差し出した。

「あああ、やったー。やってくれたよ」拓春の「あ」には濁点が付いている「あ」だった。余計なことをしてくれた。まあ、その辺に投げておいたおれが悪かった。と、拓春は諦めた。娘が起きてきて、キャッキョと実に楽しそうに笑う。

「だって、ディスプレイの中に水がざぶんざぶんと波打っているんだもの」

その騒ぎを聞きつけて、最近面白いはなしのない家庭だったから、女房にばあさんまで駆けつけてくる。わざわざ笑うために集まってくる。

「その中で小さい熱帯魚かメダカでも飼えそうだな。そうよ、あなた、飼いなさいよ。みんな驚くわ」と、今日一日が愉快だといわんばかり。

しょうがないから、拓春は会社の帰りに、ショップへ寄って、新しい機種を買い求めた。まだ、二ヶ月より使っていないのを洗濯してしまった。高かったのが痛手だった。次は、新規契約でないから、機種選択も高がつく。番号は変わる。アドレスはまたすべて入力しなければならない。かなりの無駄な時間もかかった。

翌日は、会社の連中との呑み会があった。四十働き盛りの拓春は、酒でも仕事でも同じことに思えた。すべてが、やりがいがある。なににつけても燃えている。部下を連れて、スナックを梯子するのも毎度のことだった。

歓楽街の一角に占い師が座っていた。拓春の顔をじっと見つめていたが、

「あんた、水難の相が出とるぞ。気をつけなさい」と、頼みもしないのに、向こうから声を掛けてきた。余計なお世話だとばかりいきまいていたが、どうも気になる。

「水難ですか。まだ女難の方がよかったですね、係長」

部下が相当へべれけになって、拓春についてきていた。

「水難か。昨日、買ったばかりのケイタイを洗濯されちまってなあ。もう、水難はあったよ」思い出しても腹が立つ。

拓春は相当酔って、最終電車でご帰宅だ。少し飲み過ぎたようだと、吐きそうになり、自宅近くのドブ川によろよると寄っていった。黒く澱んでいる川面に向けて、何度も嘔吐した。その弾みで、胸ポケットからケイタイがスルリ、ポツチャーン。酔いは急激に醒めた。

「な、な、なんということを」

拓春はひどい自己嫌悪に陥っていた。家に帰るなり、ヤケ酒だ。もう、顔が白くなったのに、また迎え酒とばかり、ストレートでぐいぐいやる。起こされた女房が、酔っぱらいの泣き言を聞かねばならなかった。

「おれは駄目な男だ。落としものばかりする。いいか、覚えているか。おまえと新婚旅行に行ったときのこと、仲人さんから貰ったお祝いのカルチェのライターを、旅先に忘れてきたろう。それからだな、長男の百日のお参りのときにも、肝心の赤ん坊を神社に忘れてきたし、家では毎朝、メガネはどこだと騒ぐし、だらしがない、抜けている、駄目な亭主だ」

女房はやさしかった。少し眠いが、一緒にウイスキーをつきあった。

「ものは考えようよ。水難の相といたって、モノで済んだんじゃないの。あなたの身代わりと思えば、安いものよ。はい、これ、わたしのヘソクリよ。明日、またケイタイを買ったらいいでしょう。でも、今度は肌身離さず持っていてよ」

拓春は男泣きにないた。悔しさとばからしさが入り混じって、それに女房の思いやりもじーんときた。

さすが、ショップの販売員も笑いを堪えていた。立て続けに買い求める上客だ。世の中にこんなまぬけな客が多くいれば、ショップも儲かって仕方がないだろう。今度は、安い機種にした。ついで、長いストラップを買い、首から下げて、さらにクリップでしっかりと裾に止めた。

「これでいいだろう。でも、まだ心配だな」

瞬間接着剤で、体に直接くっつけてしまうと、あれこれとばかなことを考えていた。ショックからまだ立ち上がってはいなかったが、逆に妙に慎重になりすぎる。いつも、ケイタイがあるか、手で確認しなければならなくなった。なにかあると、胸ポケットに手を当てて、あることを確認すると、ほっとした。それが、癖のようになってしまった。二重三重に体にくくりつけて、絶対に離れないように工夫した。それでも、二度あることは三度あると、何か嫌な予感がしていたから、心配だった。

拓春は、会社の仕事で、ベイブリッジの金属疲労を調査に行った。橋の下を豪華客船が通るほどの高さがある。下を航行する船舶に、部品のひとつでも落ちたら大変だ。毎日、揺れ動き、潮風に晒される過酷な状況で、点検は怠れない。この日に限って、風が強かった。橋桁を伝って、作業員は命綱に体を縛って、橋の裏側まで念入りに調べていた。拓春はヘルメットと作業服を着ているが、現場監督のような立場だ。橋の上から、ケイタイを使って指示していた。

そのときだ。突風に煽られて、体が浮いた。うっかり手にしていたケイタイを手放してしまった。

「あっ、おれのケイタイが」と、拓春は長いストラップで体に繋がれているのも忘れて、身を乗り出して取ろうとした弾みで、真っ逆まにビルの屋上のような橋の上から海へ落ちていった。落ちながら、拓春は思い出した。

「しまった、体から離れないようにしていたんだ。忘れていた。おれは、駄目な男だ」

拓春は長い叫びを残して海へ消えていった。身代わりのケイタイが、しっかりと離れないようにしていたせいで、三度目の正直だった。

「あのう、ご趣味は」

から始まるのは型通りで面白くない。「男は何人目ですか、ぼくはカノジョ五人いました」そう切り出す見合いが現代的だと、内田隆治は想像してにんまりと笑っていた。

ホテルのレストランで、お見合いが行われていた。隆治の相手は大会社の部長のひとり娘で、女子大を出て、イギリス留学もしたことのある、良家の御手洗紀代美だった。晴れ着で気品ある面立ちが、色白で美形と、非の打ち所がない。隆治は理工系の大学から通信機器の会社へ就職、エンジニアとして五年やってきた。気が弱いほうで、それでいて手が早い。同席した、両家の両親と、兄弟も会食だけ出席していた。

隆治の弟の隆三が、端の席で、さっきから紀代美をじっと見ていた。

(兄貴には勿体ない上ものだぜ。おれもあんな良家の子女というものをもらってみたい) 密かに弟は羨ましく思い、もし、兄貴が駄目ならこのおれが貰いたいと、狙っていた。

「わたしたちは、食事をしたら、ラウンジでお茶でも飲みましょう。ここでは、若い人たちは話したいことも話せないでしょうからな」と、御手洗部長はかかかと笑った。何か緊張していて、気まずい雰囲気の流れていた。そこへ、フルコースのメインディッシュが運ばれてきた。銀食器の大皿に蓋がついたものが、テーブルの中央へ置かれた。

「お熱いですから、少し置いてからお分けいたします」と、ボーイは説明していた。誰も何も云わない。しらけた時間だけが流れていた。

すると、急に、ぷーんと臭い匂いが漂ってきた。一同、誰かが放屁したと思っていた。もじもじと互いに目で指さしていた。紀代美だけ俯いて、顔を真っ赤にしていた。本当は、屁をしたのが誰か判らないが、可笑しくて笑いを堪えて、顔が赤くなっていたのが、みんなに誤解された。隆三は、何かの本で、こんな見合いの席で、女性の方が屁をしたのをボーイが気付いて、機転を利かせて、「失礼いたしました」と、自分のせいにしたのを優しい人と、その女性が後でそのボーイにプロポーズしたという話を思い出した。それで、兄貴から横取りしたいという下心から、隆三は、

「失礼しました。ぼくが犯人です」と、そこまで白状したのはよかった。「みなさん、紀代美さんがしたと思っているようですが、絶対に屁なんかしていません」と、そこまで云ってしまった。すると、しおらしく、項垂れていた勝ち気な紀代美はむっとして、顔を上げた。

「何よ、みんなわたしが屁をしたと思っていたの？ そんな目で見ていたわ。自分がしたのに、ひどい」

「いやはや、下品ですな。まったく」と、御手洗部長が隆三を睨めるものだから、隆三も頭にきた。可愛い顔して、あの云い方はなんだ。人がかばってやっていたのに、とんでもない女だ。「本当は、おれはおならなんかしてないんだ。そこの人が困っている様子だから、嘘を云ってかばってやったんだ」隆三は本当のことをぶちまけた。

「なんですって、わたくしが、屁をしたとおっしゃるんですか」

良家の子女も怒った。

「嫁入り前のうちの娘に恥をかかせるつもりですか」と、部長も顔を真っ赤にしている。

「さようでございますわ。わたくしどもは、テーブルマナーそのものの生活を日頃からしておりますよ。こんなお食事のときに屁だなぞ、とんでもございせん」御手洗夫人は、横を向きながら、ハンカチで鼻をおおった。まだ、相当臭っている。

「なんですか、それでは手前共が屁をしたみたいじゃございせんか」内田夫人も参戦してきた。

「あら、わたくしどもの家系には代々そのような不作法な人間はひとりとしておりませんと申しただけですわ。それは、どこの馬の骨か判らない方も沢山いらっしゃいますけどね」と、御手洗夫人のいやみ攻撃は凄い。女同士の卑劣な闘いに発展しそうな目線の火花が散った。

「それはそれは、御手洗さんとおっしゃいましたから、ご先祖はご不浄と関係あって、それでついおならというご挨拶に出たのかと思いましたわ。ほほほほほ」

「な、なんですって。あなた…」わなわなと御手洗夫人は震えている。口では庶民出の内田家の勝ち。

「やはり、格が違ったようだ。わたくしどもは公家、そちらは平民。所詮、合いませんな。嫁は下から貰えとは云うが、逆は聞いたことがない」部長もなかなか、嫌みでは負けていない。いままで、黙っていた、内田家の主も出てきた。

「ほう、割と古い体質の家柄ですな。この二十一世紀の時代に戦前の話しですか。そのうち、藤原姓がどうのと云ってくるのが、よくある話でアナクロニズムも甚だしい。はははは」内田家側から拍手が湧き起こった。すると、紀代美は、きっと、隆治を睨んで詰問した。

「さっきから、ひとり、何も弁明しない方が一番怪しいと思いますわ」

「ぼ、ぼくですか。そんな、ぼくは、屁なんか、しますが、すかしっ屁はしたことはありません。堂々と大きく、いつも明るく高らかにいたします。まして、隠すことはいたしません」いままで、何も云わなかった隆治が胸を張って応えた。

「そうですよ、うちの家族には、こそこそしたものはおりません。ほら、まだ臭っている。どうも、肛門の締まりがよくない方みたいですよわね。正直におっしゃればよろしいのに」内田夫人は勝ち誇ったように、御手洗夫人に視線を送った。

「なんですって、さっきから、今度はわたくしがしたとでも、まあ、悔しい。濡れ衣を着せられるなんて、こんな侮辱初めてですわ」と、夫人ははらはらと泣き始めた。紀代美は、ついに頭にきて、ワインを隆治の顔にかけた。すると、

「なんてことするの」と、内田夫人がレモンパイを紀代美の顔にぶつけた。さあ、いよいよ戦争だ。

「まあ、ひどいことを」「侮辱には決闘だ」「前世紀のアンティークめ」「いい加減に下の栓を閉めろ」「いつまで毒ガスを撒き散らしているんだ」と、互いに罵りあい、オードブルから、サラダ、スープまで投げ合った。両家の全員が、全身食べ物まみれになった。

それを聞きつけて、ホテルのボーイが駆けつける。支配人が血相変えて飛んでくる。ボーイからことの子細を聞くと、まもなく、厨房からシェフまでコック帽をかぶって席へとやってきた。喧嘩のあいだに入って、止めた。みんな、ぶすっとした顔で横を向いていた。

「申し訳ございません。手前どものお出しした料理がどうやら、トラブルの原因になったそうで、本当に申し訳ございません」と、何故か、シェフが謝っていた。

「原因は、どうやらこれのようです」と、テーブルの真ん中の大皿から銀の蓋を取ると、あの臭いにおいが強烈に漂ってきた。

「すみません。これは、本場のオランダ産のチーズにゆで卵と、香辛料で風味をつけた一品ですが、食べればおいしいんですが、その、臭いがかなりあれに似ていると、どうも、とんだことになって...」

一同、身の置き場がない。

第272話 動物語翻訳機

ついに出了かという感じだった。玩具メーカーが開発したというから、最先端技術は案外遊びの世界から生まれるのではないかと思う。音声認識のコンピュータ技術は、様々なことに利用できるが、まさか、動物の泣き声を人間の言葉に翻訳するおもちゃが出るとは驚いた。ペットブームに便乗して、各社が追随した。動物ごとの翻訳ソフトが同一の機械で、使用できるようになった。さらに、犬が人間の言葉を犬語に変換するという、人犬辞典だけでなく、犬人辞典もできた。負けてなるものかと、各社しのぎを削った競争で、あれよあれよというまに、いろんなソフトが開発されることになった。猫人辞典、鼠人辞典、馬人辞典、豚人辞典、象人辞典、鯨人辞典などがぞろぞろ出てきた。

構造は簡単だった。いろんな種類の動物の要求する泣き声をパターン化して、日本語の簡単な会話に直す。逆に、人間の命令などを犬の鳴き声に変換して、辞書にする。それをマイクに向かって話すと、相手に変換して聞こえるというものだ。そのために、犬も飼い主も、互いにヘッドホンとマイクの一体型のものを装着して、携帯用の小型翻訳機を犬にも取り付けなければならない。それを取り付けたとき、人々は驚くべき動物の感情を知ることになった。

さっそく、機械を買ってきた貴子は、自分の可愛がっているハムスターに取り付けた。ハムスター用は、マイク付ヘッドホンも小さい。取り付けるのに四苦八苦しした。動物も嫌がるから、すぐに取りろうとする。取れないようにがつちりと装着するようになっていた。スイッチを入れると、すぐにハムスターの泣き声が日本語で聞こえてくる。

「なんだって、こんな邪魔なもの取り付けらんだ。愛玩動物だって、またおれという玩具にさらに玩具を取り付けて悦んでいやがる」

中学生の貴子は、その日頃溺愛していたハムスターの思わぬ言葉に動揺した。

「ええ？ 君とお話しがしたいと高いのに買って来たんじゃないの」

「おれは、おまえなんかと話したくないんだよ。それより、こんな狭い檻の中から早く出せよ。喉が渇いてもしらんぷり、腹が減っても餌もない。忘れて遊びに行ったりしやがって、それに、なんだ、この巣箱の臭いこと。少しは掃除をしたらどうだ」

貴子はショックを受けていた。あんなに可愛がっていたのに、実は、ハムスターは嫌がっていたなんて。

貴子は今度は庭にいる愛犬に犬用の翻訳機をとりつけてみた。貴子が小学生のときに貰ってきたラブラドルで、いまは五歳の雄だ。

「なんだ、なんだ、また変なもの買ってきて。おや？ おれの声が人間の声に変わるぞ。これは不思議だ。反対に、貴子の声が犬の言葉になっている。これがあれば、今度は、いろいろと口で要求できるぞ。云いたいことは山とあるんだ。おい、貴子」

「なによ、偉そうな口利いて。わたしがご主人なのよ」

「へえ、そうかい。欲しい、欲しいと泣いて頼んで、このおれを貰ってきたとき、おまえは何とパパに約束したか知っているのか。おまえはこう云ったんだ。『きっと毎日、散歩させたり、お風呂に入れたり、うんちのあとかたづけもするから』とな。それが、なんだ。三日ではないが、三月坊主ではないか。後はすべてパパにお任せ。おれ様のご主人はおまえではないわい。パパさんなのだ」

またまた貴子はショックを受けていた。

「でも、君の食べる餌はわたしが買ってきてあげているじゃない」

犬は思い出したようにうんざりした顔をした。

「毎日毎日同じドックフードばかりをな。おまえたち、人間だって、毎日同じものばかり食べさせられたらどう思う？ きっと三日で厭きるだろうよ。おれの父さんが云っていたよ。昔は人間の残り物ばかり食べさせられていたが、日替わりランチのように毎日いろんなものが食べられるからよかったって。少しは犬の気持ちも考えたらどうなんだ」

「じゃ、君は幸せではないの」

「そりゃそうよ。毎日、ロープで繋がれて、狭い範囲でしか動けない。ご主人もたまに散歩を忘れるから、二日続けて運動不足になっちまうときもある。夏はカンカン照りの玄関に寝ているし、冬はいくら毛皮を着ているからって、氷点下の戸外でおねんねだ。判るか、飼い犬の辛さを。おれたちは野生に帰りたいよ。自由に野山を走り回ってみたいよ。こんな、廃棄ガスが充満している都会の片隅でロープに繋がれて早死になんかしたかねえよ」

すると、隣の家の猫が、やはり翻訳機をつけて、のっそりとやってきた。

「ここでも議論しているの？ いまね、町内を一周してきたけど、どこの家庭でも、この翻訳機をつけたお陰で、飼い主たちがペットに文句云われているの。可笑しいったらありゃしない」その猫の変換した人間の言葉が、犬にも判るから、今度は犬と猫も会話ができる。

「いいよなあ、猫は。放し飼いだものな。自由に庭や公園に遊びにゆけるし、近所の猫と井戸端会議やデートもできる。鼠の狩りもできる。たまに泥棒もな。羨ましいよな」

猫は得意げに尻尾を立てて周りをうろついた。

「あんたたちは人間に恩を感じているから駄目なのよ。あたしたちは絶対に媚びないもの。家に付いても人には付かない主義だから、人間のいいようにはさせないわ」

「そうよな、おれたちと人間には長い侍従の歴史があるからな。馬もそうだった。人間たちの役に立つから利用されたんだ。その点、おまえは忙しいときでも手伝わない、何の役にも立たなくせに、のさばっている」

貴子はしゅんとなった。動物の本音を聞くと、不満たらたら。みんな、逃げたがっている。本当は、人間と一緒に暮らしたくはないのだ。

全国で急激にペットブームが醒めてきていた。毎日、愚痴を聞かされてはかなわない。動物愛護団体も動いた。国会で動物たちの代表として、犬と猫が実状報告の演説をぶった。

「われわれの仲間が毎日何千匹と保健所で殺されたり、捨てられたりしている。人間のエゴがペットまでも犠牲にしているのは許せない。われわれにも参政権を与えよ」

人間がこの世の支配者になったのは、言葉があったからだ。言葉は知恵を生む。いま、その武器が動物たちに委ねられた。国会周辺をアヒルや牛、やぎなどが取り囲んでいた。

第273話 孫

息子たちはみんな関東方面に就職して行ったので、年に一度、正月に里帰りするだけで、普段は、電話、メールでやりとりするが、それもたまにだ。便りのないのはいい便りと、逆にたまに電話がくると、何事かとドキリとする。

次男が結婚して、わたしにも初孫ができた。メール添付で、産まれてすぐの写真が送ってきた。色が浅黒く、鼻が長い。女の子だというのが、決して美人とは云えない。産まれてすぐは、みんなくしゃくしゃした顔をしているから、だんだんと肉がついてきて、はっきりすると判るのだが、息子には似ているわけがない。むしろ、嫁のほうに似ているだろう。我が家の遺伝子は薄いのだ。わたしの姉妹の子供、甥や姪を見れば、みんな相手方の顔だった。特徴がある家の顔というものがある。それに引っ張られるのだ。そうすれば、我が家の血は没個性ということになるのか。外形だけの話だが。

五十にして、わたしに孫ができたことが、嬉しくもあり、悲しくもあり、人に自慢できるものではないことに、写真は絶対に周囲の人間には見せなかった。その次男から、逐一成長記録のデジカメで撮った写真や、ビデオのデータを送信してくる。

「お父さん、パオは産まれて三日で立ったよ」

パオとは孫娘の名前だ。いまは、みんな横文字で、名前をつける。誰も尚美だとか秀子だとかそんな名前は付けない。あまり可愛い名前ではないが、若い者には考えがあって付けたことだ。別にいちいち孫の名前まで難癖をつける気はしないのだが、どうして普通でなかったのか。普通が一番だ。いまは普通では人生は面白くないらしい。科学の進歩はどこまで人間世界を複雑にするのか。

「お父さん、パオの一月目の写真。体重は六十キロで、身長は一メートル二十くらい。まだ、母親の乳を飲んでいるけど、キャベツを半分と、バナナが好きで一ダースは食べる。すごい食欲だね」

まあ、どうでもいいが、食費のことを計算に入れているのか、若い人はどうも無鉄砲で、後先のことを考えずに突っ走るから不安になる。いつまでも、子供と云っても大人だから、手綱を引く

わけには行かないが、どうしたものか。末恐ろしくなるのだ。これからの子供たちが成長してゆく過程で、家の問題、車の大きさ、果ては棺桶から墓まで心配になってくる。いくら食生活が進歩し、医学が発達したからといって、限度というものがある。

「お父さん、三ヶ月になったよ。もう、走っているんだ。あまり成長が早いんで、ちょっとびっくりしている。毎日、牛乳十リットル、牛肉七キロ、じゃがいもは蒸かしたのを十キロはぺろりと平らげるね。体重も二百キロになった。最近、ぼくに甘えてすりよってくるんだけど、とても重くて抱いてやることもできない」

ほら、そんな問題が起こるとわたしは予感していた。もし、孫娘が思春期になって、家庭内暴力でも振るうようになれば、それは家は壊れるだろうし、制止させるのに、自衛隊の協力でも依頼しなければならなくなるだろう。いまは、世の中変わったから、そんな巨大児のための学校もできたし、教育施設も、車も街の機能も対応できるようになったとはいえ、どうして、まだまだ人間中心の社会ではないか。すべてにサイズというものがある。デパートで着るもの、履くもの、バッグから下着の果てまでどうして注文するのだ。すべてがオーダーメイドで高くつくのは目に見えているのに。

「お父さん、パオは六ヶ月。体重は三百キロだ。玩具が欲しいとねだって泣くので、どうせまた乗かって壊すからダメと云うと、その泣き声で街中の人々が飛び起きたんだ。我が儘で、母親そっくりになってきた」

添付して送ってきた家族の写真をみると、ますますパオは母親そっくりになってきた。息子にどうして似て生まれてこなかったのだろうと、不思議だった。ただ、息子に半分、嫁に半分似るというのも不気味で、想像もできない。

「おまえたち夫婦は新婚も過ぎて、うまく行っているのかい」と、わたしはメールを送る。

「うん、子供ができるとますます愛が深まったというか、よろしくやっているよ。お父さんは来週、こっちへ孫と対面しに来るんだね。みんな楽しみにして待っているよ」

わたしは、次男の住む千葉へとあまり嬉しくない孫の顔を見にゆかねばならない。第一、次男の結婚からしてわたしは反対だった。相手が普通でよかったのに、普通は人生がつまらないとかなんとか云って。それでも息子は本当に相手が好きなのか、真剣に将来を考えて決めたことだ。わたしはそれ以上口出しはしなかった。

いよいよ、わたしが関東方面に仕事で出かけることとなったので、千葉の息子の住まいに顔を出すこととなった。お土産は何がいいのか判らない。女の子だからと、お人形さんにしたが、小さいのは抱けないだろうと、マネキン人形を一体抱えていった。それは重かった。

息子の住まいは天井が高く、特別にそういう家族のために市で用意した特設の市営住宅だった。玄関がまず広い。これなら、通ることは容易だろう。ドアもばかにかかった。ベルを押すと、ドアの向こうからドドドトと地鳴りが聞こえて、建物が揺れ動いた。すごい、地震かと思った。

「おじいちゃんだ」と、パオの声までしている。一年にもならないのに、もう喋っているのか。成長が早すぎる。

「パオ、おじいちゃんに抱きつくんじゃないよ。人間だからね、踏みつぶしたりするから」

ドアを開けると、息子が笑って立っていた。隣に嫁の巨体があった。孫娘のパオが長い鼻をわたしに伸ばしてきた。それが挨拶代わりか。わたしは、恐る恐る鼻を撫で、頭を撫でてやった。どう見ても母親そっくりのアフリカ象だ。息子がいきなり、アフリカ象と結婚すると云いだしたときは、反対もした。いまは、遺伝子操作で、人間とどんな動物の受精も可能になった。人間に厭きた人たちが、鯨や熊や犬と結婚して子供を作った。うちの次男は困ったもので、小さいときから象が好きで、「大きくなったら象さんと結婚するの」が、現実のものとなった。困ったものだ。普通でよかったのに。普通で。

第274話 秘密漏洩

大手建設会社の社長をしている熊谷宗太郎は、六十近くなる今日まで、人に云えないある悩みを持っていた。その秘密を知っているのは、とっくに亡くなった両親と兄弟だけだった。ただ、兄弟も幼少の頃の宗太郎を知っているだけで、その後の秘密がいまも持続しているとは、思っていないようだった。たまに、法事で兄弟が集まるときに、昔話の中で、笑いながら、そのことが出てくるぐらいだが、兄弟は、軽い冗談のつもりが、本人には実に深刻な問題だった。

「宗ちゃんは、小学校卒業のころまであれでねえ」と、六十近くなっても子供のときの呼び名がとれない。兄にそう云われて、宗太郎は下を向いた。もともと体格がよく、スポーツマンで、荒い社員を怒鳴りながら、会社を大きくしていった宗太郎とは思えない赤面までしていた。

「そうそう、お母さんが、松の根っこだっけ、毎日、土瓶で煎じて、宗ちゃんに飲ませていたでしょう。あれの薬だって」姉も調子に乗っている。宗太郎は、忘れもしない、あの漢方薬の味を。苦さと甘さと、松ヤニ臭さがミックスしたような嫌な味だった。それを毎日湯飲み茶碗一杯どうしても飲まなければならない苦痛を思い出した。

「宗ちゃんだけが、いつまでも蒲団に入っていて、学校に行こうとしないのね。寝た振りしてさ。あれって、寝坊した振りしていて、実は、体温で乾かしていたんだわ」妹の話でみんな一斉に笑った。

そうなのだ。宗太郎の秘密とは寝小便だった。兄弟は、小学生で終わったものと思っていた。ところが、それは大人まで続き、みんなに隠していたが、最近になって、ようやく終わろうとしていたのだ。三十年連れ添った妻もそのことは判らない。新婚当時から、我が家のしきたりだと、寝室は別にしていた。本人はパンパースを密かに隠し持っていて、誰にもみつからないように、処分していた。いろんな図書を掻き集めて読んだ。寝小便で論文を発表すれば博士号を貰えるほど、真剣に研究していた。結論は、ほおっておくべしだ。膀胱が人より測ってみると人並みだ。小さいと、溜めることができないで、洩らす人がいるという。あとは大概是精神的な部分が大いから、何かの転機で直ることがあるというが、宗太郎は異常だった。高校生あたりでも、数パーセントいるというから、百人にひとりふたりはいるのだ。大人でも悩んでいる人は世の中にかなりいる。人に絶対に云えない悩みだった。

宗太郎が励まされたのは、エジソンにしてもアインシュタインにしても寝小便がずっと続いた

という。寝小便イコール天才ということが、あちこちに書かれていた。ひょっとして自分も天才なのか。宗太郎はそう思うようにした。事業が創業してより成功を収めたのも、自分が人と違うことから出来たことなのだと、よく解釈していた。

その宗太郎にも実は、親子ほど年が違う若い愛人がいた。自分の会社が建てたマンションに住ませていた。週に二度は、愛人の部屋へ足しげく通っていた。いつもは、手料理に舌鼓を打ちながら、ワインなんか呑み、二人でシャワーを浴びてベッドイン。そして、午前様になる前にご帰宅というコースだった。

その夜に限って、宗太郎は仕事で疲れていた。ワインを飲むと急に眠気に襲われて、愛人より先にベッドに横になった。

「キャー、あなた、大変ー」と、夜更けて、宗太郎は愛人の悲鳴に起こされた。うっかり寝入ってしまったのだ。寝ぼけながら股間が冷たいことに気付いた。

(しまった。寝小便してしもうた)

「早く、着換えて、風邪を引きますから。気にすることありませんわ。あなたも、そろそろ始まってもおかしくないお年ですもの」

愛人はやさしく、ベッドのシーツをかたづけ、宗太郎の着換えを子供にするようにやっていた。

「そろそろとは、どういうことなのだ」ぼんやりと宗太郎は聞き返す。

「気を悪くなさったらごめんなさい。よくあることなんですから、老人の失禁ということは。初めてで、ショックを受けたでしょう」

愛人の云うことで、少しは救われた。寝小便を六十年近くしてきて、今度は失禁と云われる。テレビで宣伝までしている老人用のパンパースをしていても誰も怪しまない。今度は堂々とおしめができる。いままで、マイノリティの異常体質と、小さくなっていたのが、これからは多くの悩める老人たちの仲間入りができるのだ。考えようによっては気が楽になった。宗太郎は、逆にいたわってくれる愛人に介護老人の気持ちになっていた。

いままで、ひた隠しにしてそれが疲れる原因となっていた寝小便を失禁と入れ替えるために、少し格好悪いが、妻にもそれとなくそのことを話しておいた。これで、長年の秘密を隠す苦労は終わったと思った。

宗太郎の会社では秋に毎年、社員旅行に一泊で温泉へとゆく。いままで、社長は参加したことがなかった。思えば、小学校からの修学旅行もいつも不参加だった。恥ずかしい、悔しい思いをしてきた。みんなと楽しい思い出を作りたかった。それが、この年になってようやく、みんなと旅行に行ける。

社長が初参加すると聞いて、社内は緊張している反面、職場対抗の余興を披露するために盛り上がっていた。

バスをチャーターして、数台を連ねて、溪流沿いの貸切の温泉宿へと着いた。こんな団体旅行の雰囲気は宗太郎は嬉しくて仕方がなかった。ひとり妙に興奮して騒いでいる。仕事がらみでいままではホテルへ泊まることはたびたびあるし、外国旅行も頻繁だが、それは個室であり、バレることはなかった。今度は、役員同室で、わいわいがやがやと騒げる。

宴会の余興では、一位の職場に社長賞の金一封まで出して悦ばれた。社長の席に、女子社員たちまで次々に酒を注ぎにくる。宗太郎はご機嫌で、いつもより酒の量が入った。呑むと眠くなる

のは昔からだった。みんなまだ騒いでいる宴会場で、少し横になろうと、浴衣のままごろんと寝たのがいけなかった。

隣でまだ呑んでいる専務の座布団へ、水らしきものがひたひたと拡がってきていた。お膳をついていた箸をぼろりと落とした。

「大変だ、水が溢れている。洪水だ。誰か来てくれ」

専務が異常に騒ぎ立てるので、みんな社長の周りに集まってきた。

「なんか臭いませんか」

若い社員が鼻をつまんだ。

「そうよ、何か臭いわ」

寝ている社長を濡れているところから動かそうと、座布団ごと引いた途端、浴衣の裾が開いて、パンパースがゆるんでいるのが、しっかりと見えた。

第275話 唇寒い

唇が青くなっていた。がたがたと震えて長く冷たい海で泳いだときのようだ。それは、ひとりふたりではなかった。病院にそんな患者が並んでいた。

「ああ、これは新種のウイルスの秋風病ですな。いまのところ特效薬がみつかっていないんです。毎年、ウイルスの抗体がないものが出現するのでイタチごっこです」

別名不況感冒と呼ばれた。患者には遠赤外線のマスクが与えられ、温かい飲み物を飲むことを勧められる。

会社でも業績悪化を転換させるために何か提案がないかと云っても、みんな黙っている。何を云っても虚しいだけのような気がした。家庭でも、所得が減り、失業したりで、家庭内にも冷たい風が吹く。夫婦間もぎくしゃくして、無言の行に入る。商店のおやじも暗く、かつての威勢はどこへやら。やりくりで頭の中がいっぱいでもいつも寂しそうに店の中に座っていた。客足はぱったりと途絶えた。

今年の秋はことさら寒い。道行く人はみなマスクをしていた。職場でも学校でも家庭でも、食事をしているとき以外はみなマスクをしているので、会話がな。どこもここも静かだった。言葉が寒い。何を云っても虚しく嘘っぽく聞こえる。だから、黙っている。

会社でも仕事にならない。部長が、課長に仕事を頼む。

「……………」

課長が返答する。

「……………」

電話がかかってくる。相手が電話口で黙っている。

「……………」

こちら受話器に向かって、

「……………」

これでは用が足りない。そこで、手話が急激に広まった。電話は、IPのテレビ電話で手話で話す。

ケータイもメールだけになる。電車も次がどの駅かテープで流すよりない。何かと不自由なのだが、失語症のように言葉が枯れて行って、話そうとしても、みつからないのだ。焦れば焦るほど、言葉は迷子になる。かつて、バベルの塔を造った愚かな高邁な人間どもに神が天罰を下したときも、言葉が通じないように、全世界の人間の言語を分けた。それと同じことが起こったのだ。言語はすでに分けられたから、今度は、全人類を聾啞にってしまう天罰だった。

テレビは急速に衰退していった。セリフの云えないタレント、ニュースキャスターが手話だけで登場しても面白くない。そのかわり、また活字媒体に人々は飛び付いた。活字離れで深刻な出版不況を招いていた業界も息を吹き返した。電話が駄目だから、手紙が増えた。筆無精の現代人も手紙のやりとりが倍増した。手紙の書き方と辞書が売れに売れた。それによって、軽佻浮薄な文化からまた情緒のある生活へと戻りつつあったのはいい。ただ、風邪でもないのに、みんながマスクをするのはいただけない。なんとか特効薬がないものかと、学者は競って研究していた、。

恋人同士も会話がないが、目で話しをする。目は口ほどにものを云う。見つめあうだけで、すべてが解り合える。互いに寒い唇を唇で温め合うキスを繰り返していた。すると、恋人たちから言葉が出てくるようになった。あちこちで、恋をしている男女が病気が直ったという事例が報告されてきた。

「キスには病原菌を退治する不思議な効力があるようです。みなさん、この奇病をキスで治してください。キスの相手がない人は病院の看護師さんが相手をするそうです」

と、臨時ニュースで政府の公報が流れたら、どっと、病院に患者が殺到した。

「はい、次の方」

何故か、肥満の年増で唇が人の三倍くらい大きい看護師さんか、たらこ唇の年寄りの看護師さんが、待ちかまえていた。それを見て、恐れをなして逃げようとする若い男性はむんずと掴まえられ、強引にぶちゅーとされる。

「はい、次の方」ふらふらと患者たちが帰って行く。

家では、結婚して三十年、夜の方もご無沙汰というか、もう終わった夫婦が、照れていた。

「いまさら、キスだって、いやあ、やり方も忘れちゃったよ」と、でれでれしている。

「おじいさん、昔を思い出して接吻しましょうか」

「あいよ、入れ歯は外した方がよかないか」

幼稚園の子供たちまで、あちこちでキスが治療の一環として堂々で行われた。

離婚寸前の夫婦も、元通りになった。喧嘩別れの二人も元の鞘。殺伐とした世の中にどうやらビタミン愛が欠乏していたようだ。

世間には自分に似た人間が三人はいるという。誰かに間違われたことはないだろうか。

ぼくは、初めて赴任した街でその日、三人に声をかけられた。一番目は、昼飯を食べに行きずりの食堂へ入ったときだ。

「あら、営林署の真田さん、髪型変えたんですか。少し太ったのかしらね」と、食堂のおかみさんが覗きこむようにしてぼくの顔を見ていた。あまり親しそうに話しかけてくるので、

「ぼくは、営林署の者ではないですよ。真田でもありません。人違いです」

別に悪い気はしないが、驚いたのはおかみさんのほうで、奥からわざわざおやじさんまで連れてきて、二人で今度はまじまじと人の顔を覗き込んで、

「ほらね、似ているどころかそっくりだろう。真田さんと」

「ほんとうだ」二人は、ぼくの黒子まで調べるように至近距離で隅々まで調べるように眺めていた。

「ごめんなさいね、ほんと、よく似てるわ。お客さんと同じ人がうちの常連客でね。先月に転勤で四国へ行っちゃったんだけどね」

どうも、気になるようで、笑いながら人の顔を夫婦で代わるがわる見に来る。こっちが笑いたくなくなってくる。

ぼくは、この街に転勤してきたばかりで、明日から営業所に出社だった。今日はアパートを探しに不動産屋を歩かねばならない。荷物はそれから送らせる。とりあえず、旅行に行くような手荷物でこの街の駅に着いた。二度目に、人違いされたのは、その不動産屋の事務員にであった。

「あのう、部屋を探しているんですが。ワンルームでいいんです。バストイレ付で」と、表の貼り紙を見ながら、アパート、賃貸マンションなどの物件を見ながら、事務所の中に入ると、

「帰ってきたの、真田さん。彼女、探していたわよ。うん、悪い人なんだから」と、いきなり、そこも真田さんだ。別に評判が悪い男ではなかったようだ。

「さっき、近くの食堂でも間違われました。真田という人に。どんな人なんですか」

ぼくは、根ほり葉ほりその真田英輔という年まで同じ二十五歳の営林署の職員で、色男でもてたという話しか。実家が金持ちで、ゆくゆくは高知の木材会社の跡取りになるのだとか、大学は東京の農学部を終わったとか、知っている真田の情報を事務員から聞き出した。どうも気になるのだ。ぼくとうり二つのやつがどんなやつなのか。しかも、可笑しいことに、ぼくの出身は徳島だから同じ四国でもあり、ぼくは高知に親戚も多く、よく知っている土地だった。四国顔というのがあるなら、似ていてもおかしくはない。背の高さ、体型も似ているという。決定的に似ているのは、顔の右頬にある黒子だった。その位置まで同じだというのだ。

ぼくは、ふたたびアパートを探しに別の不動産屋に向かおうとしたら、三人目の女に声を掛けられた。というより、ぼくの行く手に二十歳過ぎくらいの髪の長い、細面の美人が立っていた。目に涙まで溜めて、震えているのが判る。あまり、ぼくをじっと凝視めるので、後ろに別の人間がいるのかと振り向いてみた。誰もいなかった。明らかにぼくを見ているのだ。女はいきなり、駆け寄ってくるなり、ぼくの胸に飛び込んできつく抱きしめながら泣くのだった。

「もう、どこへも行かないで...」

あまり、この年までなぜか転勤ばかりで女に縁のなかったぼくは、こんなに身近で女の髪の毛の臭いを嗅いだこともないくらいぶだった。街中のことでもあるし、人目をはばかって、女の肩を押しやると、

「ぼくは、君なんか知らないんだ。人違いだよ。今朝、この街に着いたばかりなんだ」

すると、女は悲しそうな笑みを浮かべて、

「判るわ。それほどあなたが、わたしを嫌うの。でも、どうしようもないのよ」

また、ぼくの胸で泣きじゃくる。通る人がぼくを睨んでいる。女を泣かす悪いやつがぼくなのだ。

「判った。とにかく、どこかへ行こう。ゆっくりと冷静に話すと判ってくれるから」

ぼくらは人通りのない川沿いの並木道を歩いていた。

「どうして、戻ってきてくれたの？ 少しはわたしのこと思ってくれたの？」

女は恨みがましい目でぼくを仰いだ。

「今日は、アパートを借りようと思って、もう夕方だから、困ったな」

「やはり、戻ってきてくれたんじゃないの。嬉しい。アパートはゆっくり探せばいいわ。その間、わたしの部屋にいて？ いいでしょう」女は急に、笑顔を見せて、半ば強引にぼくの手を引いて、そこから余り遠くない、自分のマンションに連れて行った。部屋の表札にローマ字で、三崎と読める。郵便受にDMが入っていた。三崎牧子様と宛名ラベルに印字してある。

牧子という女は、ドアを後手に閉めるなり、ぼくに抱きついて、ぼくの顔を引き寄せると、長いキスをした。その長さはきっと、女の男を待つ時間を象徴していた。ぼくも恥ずかしい話しが、この年になるまでキスの味も知らないでいるほどの晩生だったから、胸が高鳴っていた。ようやく、唇から解放されると、牧子はふっと笑った。

「おなか空いているでしょう。あなた、先にシャワー浴びたら？ その間に、わたし、夕食こしらえるから」

牧子に命じられるまま、ぼくは、シャワーを浴びると、男もののガウンを着せられた。かつて、真田という彼氏が、ここにたびたび来て、このガウンを着たりしていたのだろう。冷たく冷えたビールが注がれた。牧子は献身的な女のようにだった。それにしても、見れば見るほどの美貌で、こんないい女を捨てて行ってしまった真田は何を考えているんだと、腹が立ってきた。勿体ない女だった。料理が素早く並べられた。手早い。しかも味がいい。料理もうまく、本棚に並んでいる本の背表紙からは、知的なセンスも感じられた。

「待った甲斐があった。やはり、わたしはあなたがいないとダメみたい」

牧子もビールを注いで呑んだ。まるで二人の再会を祝するような乾杯だった。ぼくの顔をじっと見ている。それでも怪しむでもなく、気付かないのだ。こんな美人と同棲できるのなら、いっそぼくは真田英輔に成りすまそう、そう思った。どうせ、アパートのやもめ暮らしより、ここなら、毎日美人のキスを受け、美味しい料理に部屋もただときている。

そう、思うや、ぼくは真田英輔になっていた。真田のデータは女との会話の中からコピーすればいい。棚の上に真田と牧子のツーショットの写真が飾られていた。本当だ、ぼくとそっくりだ

った。酔うほどに、牧子は、懐かしい、いい思い出を喋りだした。二人で旅行へ行ったときの話。ぼくは適当に相槌を打っていたが、いつどこでボロが出るかわからない。

「ねえ、今日は、燃えたいの」と、牧子はぼくの膝の上に乗ってきた。酔っている女はまた可愛いものがあった。牧子はするりとワンピースを脱ぐと、キャミソールになって、ぼくの手を引くと隣の寝室のベッドへと二人で入った。牧子は執拗にぼくの唇を求めてくる。ぼくはガウンをとると、トランクスも脱いで、裸で蒲団の中に入った。牧子もブラジャーからショーツまで取ると、蒲団の中に入り、電灯を暗くした。まさに、いま、全裸の美人がぼくに密着している。ぞくぞくして、それだけで行きそうになる。牧子は、ぼくの勃起したペニスを掴んだ。すると、さっと、ベッドから立ち上がって下着で体を覆うと、部屋の隅に小さくなって、怯えながら叫んだ。「あなたは誰？」

第277話 海の砂漠

アイスランド北部の漁師町のパブでひとりの漁師が安物のスコッチを呑んでいた。他に客はいない。閑な店で、休業中の看板を無視して漁師は入ってきた。ドアの鍵は何ものかによって壊されていた。

「誰もいないのか。酒をくれ。酒だ」

すでに漁師は酔っばらっていたにもかかわらず、アル中で四六時中酒が入っていなければ、自分を見失ってしまう怖ろしさが先に立った。少し荒れた店内に埃もうっすらと積もっている。漁師はカウンターを乗り越えて、酒瓶を逆さに立てたサーバーからスコッチをグラスに注いだ。冷蔵庫はあるが、スイッチが入っていない。ドアがこびりついてなかなか開かなかったが、無理矢理こじあけると、異臭と共に、黴の生えた得体のしれないものが転がってきた。その中から瓶詰のピクルスを見つけた。まだ蓋を開けていないから、食べられるだろうと、そいつを開けて臭いを嗅いでみる。漁師は納得したように頷き、そいつをうまそうにぽりぽり音を立てて食べていた。棚の中も引っ掻き回して食糧らしきものを探した。ラベルの取れた、古い缶詰が出てくる。缶切りを探したが見つからないので、自分の腰に携帯しているサバイバルナイフを缶詰に突き立てた。そいつも腐っていないようで、アンチョビーのいい香りがした。酒は残りがかなりあるらしい。こんな、いい店にお目にかかったことはない。

漁師は酔わずにいられない。喉がたまらなく渴いていた。水道も錆びて水なんか出ない。とにかく夏でもないのに暑くてたまらない。黙っていても汗が流れてくる。この地方は夏で二十度を越えることはないのだが、これでは赤道直下の国と同じだ。漁師はかつて、北洋だけでなく、アフリカ沿岸へも漁に行ったことがある。あの、何もない砂漠の国々を思い出していた。露天市で、果物、魚が売られ、怪しげな酒瓶がごろごろとあった。密造酒でもかまいやしなかった。とにかく物価が安いから、二束三文で何でも買える。キャッチャーボートで鯨を追いかけた氷山の海も思い出した。あのときはよかった。一回、漁に出ると、ふつうの市民が一年間に稼ぐ以上の収

入があった。景気よかったときの回想だけで、これからひとり生きてゆくには、あまりにも寂しい余生ではないか。しかも漁師はまだ五十の坂を越えたばかり、老いぼれている年でもない。仕事があればまだまだ働ける。ただ、岡に上がった河童だから、何の役にもたたない。いまは、船があっても漁もできない。魚を捕ることより能がない男にとって、こんな惨めなことはない。

窓から見える光景はかつての故国ではない。立木は枯れ、草も生えない。車は停まったまま道の真ん中に放置されていたし、歩く人の姿さえない。死んだ町だ。「ちくしょう。みんな、一体どこへ行っちゃったんだい」

漁師は宛てなく町をうろつき、食糧と酒を探し回っていた。いつから、こんな野良犬のようにならなくなってしまったかと、情けない自分を窓ガラスに映していた。髭は顔を覆うくらいになったが、髭を剃るといってもなくなった。第一、シャワーを浴びたことがないから、体も臭くなっていた。気にすることはない。死にやしない。この町にも植物らしいものどころか、飛ぶ鳥も昆虫の姿さえない。生きているものの影がない。動いているのは、漁師ひとりだけのようだった。

漁師は、ここに辿りついた過酷な旅を思い出していた。船が難破して、北大西洋の北極に近い流水に閉じこめられた。エヌイトのように、氷の家に住み、ひとり救助を待った。魚ばかり食べて生き続けた。氷が解け始めてきたので、漁師はおかしいと思った。いまは秋なのに、春のように、流水が流れてゆく。気温が上昇していった。潮位が異常に下がっていった。明らかに海が蒸発していつている。

漁師は子供の頃に母親から読んで聞かされた、詩のフレーズを思い出した。

一海は、誰も見ていないとき、海でなくなる。

まさしく、子供だけでなく、海で生計を立てるものは、いくつになっても海を懼れる。いま、まさに海は海以外の別のものになって、消えていつているのだ。

何日が経ったろうか。暑い日が続いた。北極圏であっても気温は五十度を越える日もあった。雪と氷は解けて水になると蒸発していつた。どんどんと水分が天に吸い込まれてゆくようだ。洪水を予想していた漁師は、意外な展開に毎日、戦いて目を見張っていた。海は引いているのではない。消えているのだ。

漁師は岩と石だらけのごつごつした海底を歩いて南下していた。海草や魚が干上がっているのを喰いながら飢えを凌いでいた。水も氷山の解けた塊を探して口にした。そうして、何十日も歩いて、ようやく陸地へと辿り着く。

死臭に満ちていた干上がった海も、動物と魚の骨だけがごろごろと転がっている。死臭もしなくなると、すでに生きているものの影は見えなかった。

漁師は、港へと立っていた。アラブ人のように、直射日光を避けるように、全身を白い布で覆っていた。大陸棚が山裾のように遙か彼方までなだらかな斜面を伸ばしている。ところどころに船が横たわっている。海底の砂は乾いている。赤茶けた荒地が広がっている。海は砂漠と化していた。

漁師は考えた。この北極に近いところでさえ、とても人間の棲める環境ではない。赤道に近くなると、気温はどれほどになっているのか。青い地球が、赤い惑星に変わっていた。漁師は酔っぱらって怒りをぶちまけていた。

「誰が、こんな世界にしゃがったんだ、ヒック」

漁師は、水の代わりに酒を探しに別の家に入っていった。大地も赤く、空もかつてのように青くはなかった。地球は豊かさを踏みにじり、使い捨てられた第二の火星になっていった。

第278話 ドライブ・スルー

今日は、統一地方選がある日曜日だった。大概是学校や福祉館などの公共設備でやるのだが、この日は、少し変わっていた。ショッピングセンターの駐車場で選挙の投票が行われているという。

「あなた、急いで投票に行きましょうよ」

いつもなら、選挙など興味がなく、棄権ばかりしていた高科芳子は、夫の明義にチラシを手に珍しく選挙と騒いでいる。

「先着三百名様に砂糖プレゼントだそうよ」

「とうとう、そこまでやるか」明義も呆れた。選挙の投票率が年々落ちてきたので、苦肉の策で、あちこちで、有権者集めのために、卵やトイレットペーパーなどを上げていた。

「なんとなく、日本の政治も国民も嘆かわしい」

ともかくも行ってみることにした。選挙はサンダル履きで行くつもりが、少し遠いから車を出した。

駐車場は車が並んでいたが、ゆっくりと流れている。受付があった。ドライブ・スルー方式だった。投票用紙をもらい、書き込むと、車で進んで、投票箱に入れる。駐車のためのスペースもいらぬし、第一、車から降りないでスムーズに投票できるから面倒ではない。確か、春の青色申告のときも、税務署が同じことをやっていたのを明義は思いだしていた。役所もだんだんと考え方が柔らかくなってきた。というより、車社会だからやむをえない処置なのだ。

この前も明義は市役所に行ったら、役所もドライブ・スルーになっていて驚いた。入口のマイクに向かって、用件を云う。何階の何番までとスピーカーで応える。前の車の中は若いカップルで熱々だ。ハンバーガーを注文するように、「婚姻届を」と云うと、「はい、婚姻届一丁」と威勢がいい。後ろの車は別々の方角を向いたきり、口も利かない夫婦だ。「はい、離婚届一丁」と、やっていた。世はスピード時代。ズボラな車社会だ。

芳子は砂糖を貰ってご満悦だった。主婦を狙うときは、砂糖でいいのか。単純なものだと、明義は政治への無関心に腹を立てた。今度は、若者たちを棄権させないために、アイドルを各投票所に置けばいいと皮肉って考えた。

折角、車で出てきたから、買い物でもして行こうと、新しくできたドライブ・スルー・デパートに車ごとに入った。立体駐車場からそのまま、各階のフロアに車で入れた。通路は車がすれ違えるよう、広くとってある。手を伸ばせば取れるところにすべての商品が陳列してあり、それを所定の車のサイドに取り付ける買い物籠に入れてゆく。そして、車ごとレジに並ぶ。重い食品や、大きな家庭日用品をいちいち車まで運ばなくていいから楽だ。デパート側も、売場は広くて無駄だが、その分、駐車場を確保しなくてもいいから用地がそれほどいらなくて済む。

「お昼はどこで食べようか」

「そうね、新しくできたカフェテリアへ行きましょうよ」

そこは、だだっ広いだだの駐車場に思えたが、入口でドアに引っかけられるテーブル兼用のトレ

一を貰い、並んでいる料理を選んでゆく。最後にレジがあり、お勘定だ。ここもまた、車から降りなくていい。乗ったまま、ランチを自由に選んで会計まで流れるように運ぶから、待たされなくて済む。そうして思い思いの場所に駐車して食べるのだ。

「コーヒーのおかわりはいかがですか」と、ウエイトレスがポットを手に車を回っていた。明義はかぼちゃのコールドスープにヒレスステーキ、コールスローにらい麦パン、デザートにベイクドチーズと山盛だ。

「あなた、子供みたいにそんなに食べられるの？」と芳子は笑っている。

ここでも、客席がない分、店は小さくていい。地価が高いから、如何に店舗の建築費を安く抑えるか、それで爆発的にそういった形態が増えたのだ。

食事の後は、映画でもと、ドライブ・シアターへと向かった。ここも、車から降りないで、車ごと入口で映画の切符を買うと、ドームに入ってゆく。好きな駐車スペースに車を停めて、車のFMラジオの周波数を指定に合わせると、カーステレオから映画の音声が出てくる。車の前面にある巨大なスクリーンに映像が映し出されていた。ラブ・ロマンスなどを見ていて、近くのカップルは車の中で倒れこんでいた。

「いいわねえ、わたしたちにもあんな時期があったのにねえ」

芳子は羨ましそうに眺めていた。子供のいない夫婦だったが、もう空気のような夫婦仲だった。

車で家に帰るとき、急に明義が具合が悪くなった。慌てて、運転を芳子が代わった。

「あんなに食べたからよ」と、芳子は云うが、本人は意識がないようだった。これは大変と、救急病院に走った。病院もドライブ・スルーになっていた。日曜でもやっている大病院で、休日の受付をすると、車ごと病院の廊下を走り、看護師に誘導されて、診察室へ。すべて車で移動できる。医師が容態を見たが、すでに手遅れで、脳梗塞で即死状態だった。詰まった場所が悪かった。まだ五十前なのに。芳子はあまりに突然なので、涙も出ない。信じられないという顔で夫の亡骸を車の助手席に寝せたまま、自宅へと帰ってきた。自宅も車で玄関から入れるようになっていた。寝室に車のまま入ると、助手席の亡骸に蒲団をかけ、顔に白い布をかぶせた。

さっそく、近所や親戚が弔問にかけつけて手伝ってくれる。葬儀屋に連絡すると、葬祭用具一式を持ち込んで、車のフロントに線香立を置いて、祭壇をしつらえた。まわりが慌ただしくなってくると、ようやく事の次第を理解したように芳子は泣いた。

翌日、火葬場に車に明義を乗せたまま、芳子が傍について親戚の運転で向かった。これで、お別れなのだ。四半世紀連れ添ってきた夫が骨になってしまう。火葬場もドライブ・スルーになっていた。車がそのまま棺になるのだ。窯の入口は車が入るほど大きかった。車ごと明義の遺体は窯の中にするすと入っていった。

「あなた」と、芳子は泣きじゃくった。死んでも車から降りなくていいから、世の中便利になったものだ。

「確か、このアパートだったかしら」

住所と地図を書いた紙を手にした大きな荷物を持った中年女性が、商店街の裏通りの混み入っている小路をうろうろしていた。

「まったく、最近の人は電話でなくてケイタイを持っているのはいいが、親には番号を教えないんだよ。連絡がつかないじゃないか」

田舎から上京してきた下田匡子はぶつくさ文句を云いながら、ようやく娘の加代のアパートに辿り着いた。就職あぶれ組で、プーをしていた加代だが、最近バイトで食いつないでいると、風の知らせで耳にはしていたが、二十歳を過ぎて、東京へ出て二年、何をしているのか母親としても心配だ。どんな暮らしをしているか抜き打ち検査ということになった。

ドアの新聞入れにチラシやDMが束になって差し込んであり、古くなって湿っていた。ドアの上には蜘蛛の巣、もう何年も人が住んでいないようだった。チャイムを鳴らしても誰も出てこないから、匡子は不安になり、ドアを開けてみた。不用心にも鍵がかかっていない。錆びたようなドアはギーッと音をたてて開いた。玄関には靴が溢れている。玄関から一Kの部屋だから、奥まで丸見えだった。部屋の中は強盗が入ったように衣類が散乱して、タンスの引き出しも開いたまま。その奥の部屋で、蒲団の上に娘の加代が倒れていた。血のような赤い液体がその周りを汚していた。ドアを開けると、もの凄い異臭がした。腐ったような臭いだった。すわっ、殺人事件。匡子は悲鳴をあげた。その叫びで、両隣の部屋の奥さんたちが飛び出してきた。

「し、死んでいる」匡子は通路に腰を抜かしたように座りこんでしまった。

「け、警察に電話しなきゃ。何番だったっけ」と隣の奥さんも慌てている。

すると、加代も騒々しさに目が覚めて、玄関に出てくると、

「殺されたって、ケイタイでいま電話するから」と、部屋を探していた。

「ない、ないよ、ケイタイ、ケイタイ」一同、啞然として眺めていた。隣の奥さんは慚然として、ドアを閉めた。

「まったく、人騒がせな」

匡子はむらむらと腹が立ってきた。

「あんた、なんていうだらしのない生活しているの。その蒲団の上の血のようなものは何？」

「ああ、お母さん、来るなら来るって連絡してくれればいいのに。この赤いのはケチャップ零したの」

「それに、何、この臭いは。あらまあ、台所の食器、もう積めないくらい山積みで、残飯も黴だらけ、部屋の天井には蜘蛛の巣、モフモフしていて、埃だらけ。窓を開けなさい、窓を。それに何よ、いい若いものが、いままで寝ていて」

「うるさいなあ、ところで、いま何時なの」と、また加代は寝ようとする。

「もう、昼の十二時ですよ。あんた、仕事はしていないの？」

「夕方からバイトがあるけどね、あーあ」と大きな欠伸をすると、加代は鼻くそをほじくって、それを食べた。

「まあまあ、これじゃ入れないでしょう」足の踏み場がない。匡子は、あまり部屋が汚いので、とても靴を脱いで入る気がしない。土足で入っていった。そして、窓を開けようとしたが、これ

がしぶくて開かない。

「開かないかもしれない。もう一年以上、開けたことないもの」

腐った臭いの原因は、食べ残したカップラーメンやおにぎり、弁当などが、もう何ヶ月もそのままにしてある。うんちのついたパンティや、どろどろと垢で黒ずんでいるブラジャー、信じられないことに生理ナフキンの使用済みまでその辺に捨ててある。得体のしれない雑巾のような衣服がまるめて散らかってある。

「どれ、いつまで寝ているの、起きなさい。いまから大掃除をします。どうして、こんな娘に育てたのかね」と、匡子は後悔していた。加代は、面倒くさそうに起きた。

「それに、なによ、あんたの顔、化粧も落とさないで寝ているの？ 歯もまっ黄色じゃないの」

「顔を最後に洗ったのは、先月だったかな、歯なんか磨いたことはないよ。第一、歯ブラシないもの」

ボリボリと手入れもしない髪を掻きむしる。髪もねっとりとかっついていようだ。

「あんた、風呂に入っているの？ なんか強烈に臭うわよ」

くくんと嗅ぐと、口臭もするようだ。首から顔まで、日に焼けたようにガングロなのは、化粧で黒いのではない。その証拠に、匡子が、タオルを濡らして拭いてやると、そこだけ白く地肌が見えた。全身、コビがたかっているのだ。風呂に何ヶ月も入っていないからだ。匡子は無理矢理、窓をこじ開けると、空気の入れ換えをした。長く異臭の中で生活していると、臭いに麻痺してくるのだ。

洗濯機はあるが、使っていないようで、中に洗濯物がどろりと黒い液体に浮かんでいた。電気釜も蓋を開けたら、黴の培養実験か。冷蔵庫はそうなれば、とても開ける勇気はなくなる。匡子は、思い切って、「えいっ」と気合いを入れて冷蔵庫のドアを開けると、案の定、中で鼠が死んでいた。ごきぶりの死体もごろごろあった。いつのものか判らない干からびたパンや、膨れて爆発寸前の牛乳などなど。加代の部屋では、ごきぶりも死ぬのだ。耐久力のあるドブ鼠でさえ、この部屋では生き延びるのが難しい。

匡子は、押入の中も確認しようと、開けようとした。

「お母さん、開けないほうが...」

加代が注意するのが一秒遅かった。匡子は、どっと降ってきた洗濯物からまるめたシーツ、汚れ破けた蒲団の下敷きになっていた。

「あのね、どうして、洗濯しないの。新しいの次々に買ってきては、その辺にポイ。あんた、彼氏いないんでしょう。いるわけがないわ。彼氏、作りなさい。そうすれば、少しは色気づいて、綺麗にするでしょ。それと、服を着たまま寝るのやめなさい。起きると着換えしないでそのまま外に出てゆくつもりでしょ。その服だって、何ヶ月着ているんだか」

匡子は、わなわたと震えていた。怒りを抑えるのに必死だった。今度は、トイレの中だ。もう推して知るべしだ。トイレのドアを開けようとしたが、どうしても怖くて開けられない。もう、乞食より酷い生活をしている。

匡子は加代の手を掴んで、外へ連れ出した。

「ちょっと来なさい」「ど、どこへ行くのよ」匡子は逃げようとする加代の耳たぶを掴んで引っ張った。「いてててて」

「冗談じゃありませんよ」

匡子が行った先は駅前のサウナだった。強引に加代の服を脱がせると、その蚤やしらみのたかった服を気持ち悪そうに、ゴミ箱に捨てた。匡子も裸になると、まるで小さい子を風呂に入れるように、全身の垢をこすってやった。何度も何度も金たわしでこすった。ひりひりして、痛がって泣いたが、構うことはない。本当は鉋で削らねばならないほど、垢が溜まっていた。髪を洗うお湯もどろどろになった。

服を捨てたから、加代は逃げるに逃げられない。匡子は先に、サウナを出ると、近くのスーパーに加代の下着から洋服を買いに走った。ぷんぷん怒っていた。どうして、あんな子になったのだろう。

サウナに戻ると、何か大騒ぎしていた。加代が急に容態が悪くなって、倒れたのだ。すぐに救急車で運ばれた。医者は診断して、首をかしげる。いろいろと、匡子から、ことの成り行きを聞いて、初めて納得した。

「娘さんは、エイズと同じような病気なんですな。免疫を失っております。体の中が無防備だということは、いままで、体の外側のコビや垢が、ウイルスなどの侵入を防いでいたわけですな。それをお母さんが、綺麗に落としてしまわれた。毒には毒をもって制するということなんですな。娘さんは、もう、綺麗な世界には棲めない体になってしまったんです」

「それじゃ、娘は、これからも一生...」

「そうです。汚ギャルとしてしか生きてゆけないのです」

折角綺麗にした加代は目を白黒させて、高熱にうなされていた。

第280話 駆け込み寺

人里離れた山の中にひっそりと、今何寺はあった。その寺は有名な駆け込み寺で、その寺に逃げ隠れた者は、必ず、諸事難問を解決し、いま以上の幸福を得て娑婆に戻れるという。

村越さん一家も身の回りの荷物だけ手に、命からがら逃げてきた。ヤクザから多額の借金をして、店は倒産、夜逃げ同然で、この寺のことを聞きつけて妻と子の三人で、執拗な返済の取り立てからこの寺に駆け込んだ。

「ごめんください。どうか、ここにかくまってください」

すると、寺の住職が出てきて、追い払おうとする。

「ここは隠れ家ではない。帰れ。帰れ」

もう日も暮れてきて、いまさら麓の町まで戻るには暗すぎる。

「お願いします。助けてください。ヤクザから追われているんです」

妻も泣きながら訴えた。

「よし、それなら、次の問答を解いてみよ。兎と亀が相撲をとった。どっちが勝ったか」

「決まっているでしょう。兎です」と、村越さんはいとも簡単に答えてしまった。「この、たわけが、だから借金なぞ作るんじゃ。世の中を額面通りに捉えておる」

「ううん、それじゃ、亀さん」今度は妻が答えた。

「やはり、ダメじゃな。帰れ、帰れー」

夫婦は禅問答の難しさに項垂れてしまった。すると、小学二年の娘が、答えた。

「判った、たぬきさんが勝ったの」

住職は、ぎくりとした。子供は無心という恐ろしい境地にいる。誰も考えもしなかった、狸を出してくるとは、ふむ、できるな。

「よし、許す」

常識的な頭で、どうして、横から狸が出てきたんだろうと、夫婦は一生懸命考えていた。

その夜から寺に一家は泊まることになった。他に三組の家族がいるようだが、みんな暗い顔をしている。なにか幸福そうではない。若い修行僧たちもいて、部屋に案内した。薄い煎餅蒲団も与えられ、個人個人の箸とお椀も与えられた。

「テレビはないの？」と、娘が訊く。がらんとした粗末な部屋には、隙間風だけが入る。もう初冬だというのにストーブも炬燵もない。一家は蒲団に潜り込んで、互いに体を温めあっていた。

翌朝、とは云ってもまだ未明の四時頃か、寝ていると、突然若い坊主が、鐘を鳴らしながら廊下をバタバタと走り回る。何事かと目がさめて、起きてみると、他の一家ももぞもぞと起き出していた。外はまだ真っ暗だ。火災訓練かなぐらいにしか思っていなかった。それで、村越さんはまた寝ようとしたら、

「起きろ、何をしている。ここは旅館じゃないんだ。本堂へ来るんだ」と、ものすごい形相で、坊主が仁王立ちしている。一家は慌てて、本堂へ行くと、早朝のおつとめだ。経を手渡され声を揃えて読経する。正座している足が痺れた。

それが終わると、廊下から床、便所と掃除させられる。長い廊下を荒縄でこするようにして拭く。便所も荒縄で拭く。

「お湯がないのか、山の水だから冷たいぞ。あのう、すみません、お湯はどちらから...」と、云ったものだから、

「なんだと、お湯だと」坊主たちはゲタゲタ笑いはじめた。

「さあ、掃除が終わったら、座禅だ」

一同、座禅場に座らせられた。気温は零下近くになるだろう。ストーブもない。みんなガタガタ震えているから、すぐにケンサクが飛んでくる。村越さんは椅子の生活が長かったので結跏趺坐ができない。

「胡座もかけんのか」と、ケンサクが飛んでくる。一時間がものすごく長く感じられた。足は痺れてすでに感覚がなくなり、脂汗まで流れている。こんな苦痛を味わったことはなかった。

ようやく朝飯の時間だ。きのうから何も食べていないので、腹が減っていた。すると、出てきたのが、麦飯とたくあん、胡麻塩と味噌汁だけだった。

「目玉焼きはないのか」「サラダが欲しいわ」「味付け海苔が食べたい」みんなそれぞれ、我が家の朝食を懐かしく思っていた。不味い、酷い食事だった。

「これから水ごりをする。この白装束に着替える」

と、この寒空に、薄い襦袢のようなもの一枚だけ。裏の滝に全員を連れてゆき、指で印をつくり冷たい滝に打たれながら、南無阿弥陀仏を唱える。

「風邪を引いてしまうじゃないか。ただでも氷点下に近いのに、この水だ。もし、心臓発作で死んだらどうする」内心、村越さんは戦っていた。

「あなた、怖い」と、妻も抱きついてくる。他の家族は慣れているとみえ、進んで水に入る。

「邪念があるから冷たいのだ。雑念もなくせ、己を無にしろ」

唇も青くなった。ガタガタ震えも止まらない。体の感覚がなくなるほど、刺すような痛みが全身を襲った。

それが終わると、寺の境内に敷いた赤く燃えている炭の上を歩くのだ。

「どうして、こんなことしなけりゃいけないのよ」と、夫婦は泣き声になっていた。

「怖いよう」と、娘も泣く。

「足の裏が火傷したら誰が責任取ってくれるんだよ」その愚痴が住職にも聞こえた。

「心頭滅却すれば火もまた涼し。娑婆で甘ったれているからこの様だ。この寺の荒行を乗り越えられんで、世の中が渡れるか」

また、住職の喝が飛ぶ。若い僧たちも、暴力団より怖い。ここは、無間地獄の中か、こんな辛い思いをするのだったら、まだサラ金やヤクザに追われていた方がましだ。村越さんは、都会の生活のほうが楽だと思った。裸足で外を歩かねばならないし、第一寒くてかなわない。昼も夜も麦飯にたくあん、胡麻塩だ。タバコも酒も禁止されている。一切の娯楽がない。パソコンもケータイも取り上げられて、電気のない原始的生活を強いられる。これでは、借金に追われても文化的生活のほうがいいに決まっている。

その夜、村越さん一家は、こっそりと寺を脱走した。たった一泊だけだったが、いままでの生活が少しは幸せに思えてきた。

第281話 一億総破産

金崎弁護士事務所には、連日、破産をしたいと相談に訪れる人が列を作って並ぶほどだった。株価は五千円台まで下がった。倒産件数は月に十万件、失業率はついに三十パーセントの大台だ。政府の無策というより、逃げ腰が不信感を呼び、すでに日本は見放されていた。こうなれば、行き着くところまで行くよりない。銀行も、先に潰れるくらいならと、不良債権処理を強引に進めていった。大手企業がバタバタと潰れる。その煽りをくって、下請け零細企業も共倒れ、その従業員が失業すると、生活苦のためにサラ金から借金を繰り返し、返済不能に陥るという上から下まで破産状態になっていた。社員は不況の年末に失職して放り出される。社長は自己破産で、家も財産すべて没収。ホームレスまで転落だ。右を向いても左を向いても、暗い話ばかりの世の中になった。

「先生、破産すれば、病人の蒲団まではがして持ってゆかって本当ですか」

金崎弁護士は苦笑いをしながら、

「それは江戸時代の高利貸しの講談ではないんですか。いまは二十一世紀の近代社会ですよ。それに、使い古した蒲団や毛布を持っていったところで、誰が使うんですか。人の寝ていた蒲団ですよ」

一般市民はあまりに法律を知らなさすぎる。それで、破産するにも怖くてできない。

「それじゃ、入れ歯も仏壇もテレビも持ってゆかないんですか」

弁護士先生はうんざりしていた。

「あなた、入れ歯って、それをどうするんですか」

「わたしの入れ歯はプラチナですから」

「それに、いまどき、リサイクルセンターでテレビを売っても何百円になりますかな。家財道具で、あまり換金性のないものは、誰も差し押さえいたしません」「中には臓器を売って金にして返さなければならないとか」

「それも、例の金融機関の脅し文句でしょう。そういうことは一切ありません」 殆どの人々が無知からくる懼れで、破産をしたくてもできないでいた。そして、どんどん手遅れになり、破産費用もないままに最後の最後まで行ってしまふ。破産もできない人の夜逃げ、心中、放置が半分以上あるから、新聞に報道されている実数の倍以上はあるということだ。この県でも昨年で年間五千人の破産があった。その倍として一万。その家族もいれば年に四万近い人が破産の憂き目に遭っている。十年それが続けば、県の人口の三分の一が破産経験があるというくらいになる。それが、今年はその五倍以上のペースで推移しているから、異常というほかはない。石を投げれば破産者に当たるほど、多くの破産悲劇を生みだしていた。

破産しても、土地家屋は余りに余った。買う余力のあるものがないから、競売にかけても入札するものがない。貴金属類もしかり、有価証券もダブついていた。ゴルフの会員権など紙屑に近い。二束三文で売ったとしても、配当は微々たるもの、弁護士費用も出ない有様で、金崎弁護士も収入がどんと減った。

古本屋の木村が破産をしないと云ってきた。金崎弁護士の文学仲間だった。もう、本を読む人がいなくなったので、不況とは関係がなく、だんだんと売上が落ちてきていた。

「なんとか、先生からお願いして、本を差し押さえしてもらおうよう裁判所にかけあいしてくれませんか」

木村の頼みは世間とは逆だった。何故なら売れない本を店を閉めたあとに、処分するのに、経費もかかるからだった。無一文になって破産を申し立てたので、金崎弁護士は、可哀想に思い、特別に印紙代だけで口ハで破産処理をしてあげることにした。

それが、文学仲間に伝わると、われもわれもと続々と金崎弁護士事務所に押し掛けた。みんな、予納金もなく、破産もできないで困っていた。いくら仲間とはいえ、こんなに只の不景気な客が詰めかけると、さすがの金崎弁護士もお手上げだった。ボランティアに近くなり、持ち出しのほうが多くなり、事務所の家賃や事務員の給与も出せなくなった。

こうなれば早い者勝ちだった。トランプのばば抜きと同じで、不良債権のたらい回しで、最後

にばばを掴んだ人の負けになる。早めに破産してすっきりした顔をしているものが多かった。後々ほど、厄介だ。銀行が軒並み閉めるころになると、大手企業は殆ど姿を消した。商店街はがらんと空になる。

地裁の佐々木判事から、金崎弁護士に電話が入った。

「一相談があるんだが。」

と、声は深刻だ。

「一実は、わたしも君に相談があった。どうだ。これから一杯やりながら。」

二人は、灯の消えたようになっていく飲み屋街にぼつんと一軒やっているヤキトリ屋に入った。客は誰もいない。世間は呑み歩く金もないのだ。

「互いに忙しくて、自分のことを忘れていた」と、佐々木判事は事情を話し始める。「おれは、友人の保証人になってな、彼が破産したものだから、みんなおれに回ってきたのだ。億単位の金だから、とても自宅を売却したところで、間に合わない。それで、恥ずかしい話だが、破産したいのだ」

「ちょっと、待ってくれ、実は、わたしもなんだ。文学仲間を助けていたら、墓穴を掘ってしまってた。気が付いたら借金で首が回らない。もう、この街には、破産していないのは、君とわたしぐらいのものだ」

すると、その話を耳にしていたヤキトリ屋のおやじが、

「おっと待った、ここにもう一人残っている。判事さんに弁護士さん、お宅たちが破産する前に、あっしの破産をやってくれませんか。今日のお代はただにしますんで」

と、拝み倒した。

「随分と高いヤキトリだな」高崎弁護士はボヤいた。

「だけど、もう裁判所にはみんなやめてしまって誰も残っていないんだ。自分の破産を自分でやるのか」佐々木判事も、すべての行政司法がストップするほどの恐慌で、ただひとり残って貧乏籤を引いていた。

「いいか、三人で仲良く破産しようか」

ヤキトリ屋のおやじも交えて、その夜はとことん呑んで酔い潰れた。

その頃、金崎弁護士の家にも何度も電話が入っていた。佐々木判事の家にも同じ電話が入っていた。

「くそ、二人ともどこへ逃げやがったんだ。わしを一人残して、相談があるんだが、困ったものだ」

苛々して真夜中まで留守宅に電話をかけまくっていたのはこの街の市長だった。もう一人忘れていた。

ひと昔前は憧れの職業はホワイトカラー。大卒を採用すると、何をやりたいかと訊くと、こぞって企画と云ったものが、いまは子供たちに、

「大きくなったら何になるの？」と訊くと答えの筆頭が「大工さん」だ。ブルーカラーが格好いい。背広にネクタイはもうもてない。頭には手ぬぐい、作業服やツナギがファッションとしても若い人たちに受けている。何よりも、就職難のご時勢で、普通高校、普通の大学を終わったくらいではどこも雇ってくれない。それより、専門学校、資格を取って、手に職をつけることが就職に有利なのだ。

喜多村家では三人の息子がいた。親父は店を潰したが、もともとパン屋の親父で、いまは転職して本屋をやっていた。職人氣質のところはまだあって、息子たち三人にも何か職人になってもらいたいとかねてから思っていた。三人とも、こぞって頭が悪かったことが幸いした。これで、少し頭がよかったりして、

「おやじ、大学へ行くから」と、三流大学なんか行かれても、金ばかりかかって、卒業しても就職先がないときている。高卒で働くと云ってくれたときは、ほっとした。そればかりではない。三人が三人とも特技を持っていた。共通しているのは手先が器用だということだった。勉強の方はまるでダメだったが、長男は料理が好きで、調理師の免許を取ると、さっさと自分で上京し、ホテルの門を叩いた。庖丁一本サラシに巻いての世界に飛び込んでいった。きっかけは単純なもので、連載マンガで、流行ったグルメブームのシェフ物語に憧れて、その道に進んだ。勿論、高校の調理科くらいの腕では世間では通用しない。十年の下積みは覚悟しなければ一人前にならない。

長男が最初に就職したのは、コンチネンタルホテルの洋食部門だった。何事にも辛抱が第一だ。先輩を立てて、どんな簡単な仕事でも立派にやりこなせ。そして、仕事が終わったあとでも、先輩から盗んだ技術をノートしろ。そう、親父は息子に云って聞かせた。喜多村自身も、若いときは大手パン工場に丁稚奉公して、先輩に厳しく鍛えられたほうだった。職人は、手取り足取り教えてはくれない。毎日、鉄板拭きをしながら、仕事を目で盗んだものだ。

一年は長男は皿洗いと盛りつけだけをやらされた。仕込み三年、焼き三年と、部門を回されて一通り覚えるまでは十年はかかる。作業も材料もフランス語が飛び交う。仕方なく、ラジオでフランス語の基礎も勉強した。給料が安く、時間が長く、仕事が厳しいのも、やがては自分に返ってくると思えばやりがいがあった。

次男は、中学のときから絵がうまかった。高校のときはマンガ研究会に入って、同人誌など出していたが、アニメ・ブームに乗って、高校のときから才能が認められプロダクションの内職なども手がけていた。セル画一枚書けば五千円と、いい小遣い稼ぎになっていた。その次男が、高校を出ると、さっさと上京して、アニメ制作会社に入社し、個人的にもコミックを出して、漫画家としてデビューしてしまった。高校の卒業名簿には、みんなちゃんとした会社や進学した大学が書かれているのに、次男だけが漫画家となっていた。若干二十歳で、その業界に名を連ね、先生と呼ばれるまでになったとは、父親も驚いていた。インターネットで筆名で検索すると、すごい数のファンクラブのサイトが出てくるから、それでバカにできない世界なのだろう。喜多村には全く判らない世界だった。コミケで次男の本は一日で一万冊を完売するという。収入は父親よりいい。

亡くなった喜多村の妻は手先が器用で、パッチワークや小物を作るのが得意だった。喜多村もパンからケーキまで作る。美的センスと絵心がなければ務まらない仕事だ。その血を三人とも引き継いでいた。

三男は、これも変わり者で、まともな生き方を拒む。スポーツで国体まで行って、大学から特待生で来ないかとトレードされたのを拒否して、これもまた何の目的があるのか、さっさと上京してしまった。三男だけは就職なかったのも、とりあえずフリーターでもやって喰ってゆくと、まともな仕事のない田舎に見切りをつけて、都会へと飛び出していった。中学のときは、技術が好きで、自分でパソコンなど自作していたが、高校へ進学しても、理科系が得意だった。将来はエンジニアになるのが夢だと話していたが、これとって、希望の職業はないような曖昧な態度で、進路指導の先生に目標を持つようにと注意されるほどはっきりしなかった。

父親としては三人が三人とも別の道を歩んで、ちゃんと生計を立てているから安心していた。ただ、三男がバイトのようなことをして、ちゃんとした仕事に就かないのが気になる。若いものはフリーターが格好いいと思っているのか。そんな身分の保証のない不安定なものなのか、父親は理解ができなかった。それでも、手に職をつけたいと、上京していったのだから、なんらかのそんな仕事に就いて研鑽しているものと信じていた。

ある日、新聞の三面記事に東京で、ピッキング犯が捕まるニュースが出ていた。まだ十八で、田舎から上京してきて、その手先の器用さで二百件を越えるスリ、ピッキングによる空き巣、車上荒らしを自白したという。

「全く、これだけの技量を持っていたら、どんな職人にでもなれたらうに、親の育て方に問題があるんだろう。親の顔が見たいものだ」

喜多村はトイレで新聞を読んでいて、最近の若者の暴走を嘆いていた。すると、電話が朝早くからかかってきた。

「こちらは新宿警察署ですが。今朝の新聞、ご覧になりましたか。お宅の息子さんのことでお話があります。

三男が黙秘していたが、ようやく実家の電話番号を自白したという。喜多村は呆然として受話器を持ったまま、頭の中が混乱していた。

「それは、手職には変わらないが...」

「一ももし、お父さん、聞こえていますか。」

第283話 世界最終戦争

トーチカから見ると、見渡す限りの砂漠だった。時折、砂嵐で視界が途切れることはあるが、トーチカの中に一人の男が、双眼鏡を手に敵陣を見張っていた。砂漠の中にテレビ塔の先端らし

きものや、高層ビルの屋上らしきものが頭を出している。この陣地で生き残ったものは彼一人しかいなかった。みんな死んでしまった。戦死したのではない。飢えと病気と放射能でバタバタと死んでいった。ミサイル攻撃や、空爆、迫撃砲などの地上戦はすでに一年前に終わっていた。すべて弾薬、核は使い果たしたとみえて、トーチカにある重機関銃にしても、速射砲にしても、対戦車誘導ミサイルにしても、武器はあっても弾がない。コンピュータ、通信機器があっても電気がない。自家発電の燃料も切れてから一年も経っている。弾や電気のない科学兵器はただの鉄屑だ。

男はたまらなく喉が渴き、腹が減っていた。もう一週間、吞まず喰わずだ。川も池も放射能で汚染されて、その水を口にしたものは一月ともたない。ガイガーカウンターがないから測れないが、残留放射能はいまだ人間の棲める量ではないだろう。かろうじて男が生き残ったのも奇跡としか思えない。それでも、放射能防護服にガスマスクはしていても、長時間の使用には耐えられない。すでに、男の体には放射能による湿疹が広がっていたし、白血球の数も減っていつていくはずだった。男も生きてゆく時間はあまりない。それでも、いまのいまを生きるために、なんとしても敵を倒して、この戦争に勝たねばならない。

最前線にいた兵士は、敵の砲撃、銃撃が止んで久しいので、敵も弾薬が切れたことを知った。ただ、護身用に最後の一発は残してあるかもしれないから油断はできないと、まだ警戒心は解いていない。男も、ピストルやマシンガンは所持していても、弾は一発もない。あるのはナイフだけだった。それも、缶詰を開けたり、木を削ったりしているうち、刃がボロボロになって役に立たない。いまは、自分を守ってくれるのは素手よりないという心細さだ。

男はここまで敵前へと進んできたのは、食糧確保が自分の陣地で難しくなったためだった。川や海では魚は全滅していたし、飛ぶ鳥の影もない。蠢く昆虫から動物の姿も長く見たことはない。みんな、水爆と中性子爆弾、毒ガス攻撃で死滅していったのだ。生き物だけでなく、木や草、穀物などもすべて根絶やしにされていた。いまや、地上に生きて動くものの影がない。

男は、双眼鏡で、砂漠の真ん中に木箱が現れているのを発見した。それはよく見ると、横文字でオーツと書いてある。オートミールの缶詰が入っているに違いない。あの大きさだと、三号缶が一ダースはあるだろう。それだけあると、半年はなんとか生き延びることができる。男はそう計算していた。無性に腹が鳴っていた。

「よし、そいつを貰った」と、トーチカを出ようとしたら、遙か向こうの敵陣から人影が動くのが見えたと思った。

「おっと、敵兵の生き残りがいたぞ」男はまたも双眼鏡で、身を伏せながら敵陣地を伺っていた。すると、はっきりと敵兵の姿が確認できた。防護服にマスクをして、体を伏せながら同じく双眼鏡で、こちらを見ていた。その敵兵は匍匐前進で、例の箱を見つけたとみえ、少しずつ近づいているのだ。男は、横取りされてはたまらないから、同じく、匍匐前進しながら、箱の方へと近づいていった。

男と箱の距離は五十フィートぐらいだった。敵兵もまた同じくらいの距離まで近づいていた。じりじりと熱い日差しが照りつける。もう、季節感はなくなっていた。いつも夏のように暑かった。何千発という水爆の核爆発によって、成層圏もオゾン層も破壊されて、空の色まで薄いコバルトブルーに変わっていた。空気も完全に汚れて直接、息を吸うことはできない。喉が渴いて

いた。多分、オーツの缶詰があるくらいだから、その辺りを掘ると、他にジュースやフルーツの缶詰も出てくるかもしれない。男はそう読んでいた。いまや、安心して食べられるものは、地下に貯蔵された非常食よりないのだが、そんなものはこの三年で食いつくされてしまった。あるのは、食べると危ない汚染された缶詰だけだった。みんなそいつを食べて死んでいった。だが、もうここまで来ると、構うことはない。腹いっぱい喰えたら、呑めたら、いつ死んだっていい。男は、目にもものが見えていない。いつも想像するのは、コカコーラや、缶ビールのテレビのCFだった。多分、亡くなった親兄弟のことではない。頭の中はいつも食べ物がぐるぐると回っているのだった。敵兵もそれは同じだった。

箱との距離が二十フィートになったとき、敵兵が箱目がけて走った。負けてなるものかと、男も走った。タッチの差で敵兵が早かった。箱を抱きしめるようにして一人占めするから、男は抗議した。

「それは、おれが先に見つけたんだ」

「# b & * @ \ = & % \$ # " ! 」

敵兵は、ロシア語かアラビア語か判らない言葉で、逆に文句を云っているようだった。敵も丸腰のようで、ピストルもナイフも持っていないようだ。

「よし、やるか」

男は敵兵に襲いかかった。敵も身構えて、互いに取っ組み合いになった。この鬪いは、どちらかのマスクを取れば勝ちになる。外の空気をまともに吸うと、一時間以内に死ぬからだ。バイオを利用した特殊マスクは、放射能を除去してくれた。普段は、地下深いシェルターに隠れ棲んで、難を逃れていた。ひとたび地上に出るとそこは戦場だったのだ。

殴りかかるが、どうもパンチがきかない。互いに腹が減っていて、力が入らない。蹴りもいまいち迫力に欠ける。敵兵は鉄パイプを見つけて襲いかかろうとした。男は、その一撃を戦闘機の残骸のジュラルミンの破片で防いだ。そいつは先が鋭利に尖っていた。男は死闘を繰り広げるうち、その破片を敵兵の喉元に突き刺した。血が吹き出てきた。敵兵が倒れたので、馬乗りになって、マスクを取り去った。これで、男の勝ちだった。敵兵は出血多量で死ぬか、放射能で死ぬか。一時間の命だ。

男は食糧の箱を戦利品として抱えると、満足そうにシェルターのあるトーチカまで引き揚げていった。その缶詰を食べば、腹は満たされるだろうが、一月以内には必ず死ぬ。

男はこの世に生き残った最後の人間だった。

第284話 当節新婚事情

息子が結婚して、岡崎に新居を構えたというから、どんな生活をしているか、一度遊びに行ってみようと、岐阜の下呂温泉へ一泊した旅行の帰りに寄ってみた。わたしも若い頃は名古屋へ住んでいたことがある。ずっと来ていなかった。よほど用事がないとこんな中部地方へ来ることは

ないものだ。たまたまわたしの所属する業界の全国大会が岐阜であり、そこからなら、電車で近いだろうと、土地勘のあるわたしは、さっそく岡崎へ名鉄電車で向かった。

奇遇だが、実はわたしも新婚時代を名古屋で過ごした。もう二十七年前のことだ。岡崎には友人が暮らしていて、たびたび泊まりに行っていた。ひどく懐かしい匂いがした。安城など、通過する駅の名も懐かしく、ただ、あの当時は田圃ばかりだったが、いまは、街が広がって、大きなビルなども建ち並んでいた。

岡崎の駅前に立った。どこか別の街のようにモダンになっていた。何か、手土産をと、家康が生まれた城跡を望みながら、橋を渡り、賑やかな商店街の方へと歩いて行ってみた。その市場に入って、魚屋からハマチのイキのいいのを一匹買い求め、そいつを手土産代わりにしようと、タクシーを拾い、住所を告げた。連絡はしていたが、何時になるか判らなかったから、こっちから直接訪ねてゆくと云っておいた。息子は仕事だが、今日は早く帰ってくるという。

息子たちは、みな県外の会社に就職したから、国に残っているのは女房と二人だ。もう、みんな田舎へ帰ってこない積もりで、家を建てたりしていた。郊外の団地に息子の建てた家があった。二階建の3LDKと聞いていた。カラーコンクリートの外装に洒落た出窓がついた、若向きのデザインだ。

チャイムを押すと、嫁が出てきた。

「あら、お義父さん、いらっしやい。よく判りましたね」

いま流行りに茶髪にロン毛というのか、着ている服までテレビに出る、なんとかという歌手に似ている。まだ子供がないから、所帯じみるわけもないが、とても奥様とは思えないキャピキャピしたところがある嫁だった。

「はい、これは市場で買ってきたハマチだ。今夜の刺身にしたらいい」と、わたしが大きなハマチを差し出すと、一瞬、嫁は嫌な顔をした。普通なら大喜びするところだが、刺身が嫌いなのだろうかと思った。

「高志さんは、もうそろそろ帰ってくると思います」

台所は綺麗にしている。というより、あまりに綺麗すぎる。何も無い。アパートから引っ越しで二ヶ月は経つというのに、まだ新築そのままだ。居間も食堂もあるのに、テーブルらしきものがない。カウチというのがごろごろとテレビの前にあるだけだ。おかしい生活をしている。嫁は冷蔵庫からペットボトルのコカコーラを出して、どうぞと、床に置いた。

「テーブルはないのか」と、わたしは少し不機嫌に云った。すると、床に直に置いたのが失礼したと、嫁は勘づいたのか、

「アパート時代からテーブルって使わなかったから。お義父さん、すみません」と、嫁は床の真ん中に何を思ったか、新聞紙を広げて敷いた。いつもそうして食べているらしい。

「ふむ。これもキャンプ生活のようで楽しいがな」と、皮肉っても、若い嫁には通じないようで、ケタケタと笑っている。

「お茶の方がいいな。どれ、わしがお湯を沸かしてやろう」と、立とうとすると、嫁はそれを制するように、

「お義父さん、ほら、こんな形のお茶を入れるの無いの。それに、お茶のティーバックもないし

」

嫁の云いたいののは急須のことらしい。急須ということも知らないのか。

「なんだ、万事急須か」

冗談も通じない。お茶もティーバックで入れるものと思っているらしい。仕方なくコカコーラにした。すると、まもなく息子のご帰宅だ。車が車庫に入る音がした。

「お父さん、正月以来だね。どう、いい家だろう。ぼくが友人に頼んで設計プランを図面にさせた」

改めて見渡すと、天井が高くコンクリート剥き出しに太い木の梁が渡してある。天井でくるくるとレトロ調の扇風機がゆっくりと回っていた。

「熱効率が悪くはないか。暖房しても温かい空気は上に溜まるし、夏は冷房も無駄に使わさる。それより、ハマチを買ってきたから、今夜は刺身で一杯、どうだ」

わたしがそう云うと、嫁が何やら息子に囁いていた。

「お父さん、美智は魚を料理したことがないんだ」

息子が代わりに云ってくれた。

「ああ、そんなことか、それなら、わしがやってやるよ。魚をおろすぐらい簡単なことだ、どれ」と、台所に立ったが、まな板がない。

「まな板はないのか」「すみません、使わないから、ないんです」「使わないって、まな板がなくしてどうして料理しているの」わたしは呆れた。

「じゃ、仕方ないとして、包丁は？」と云うと、「はい」と、なんと果物ナイフを出してきた。

「これじゃ、魚はさばけない。包丁だよ、包丁」嫁は叱られたように項垂れて、

「これしかないんです。普段、使わないから」とのたもうた。わたしはいじわるな舅根性で、流しの下を開けたり、引き出しを開けたりしたが、鍋らしきものもない。ようやくフライパンがひとつ出てきた。

「あれ、これだけ？」と訊くと、ようやく嫁は晴れ晴れとした顔をして、

「はい、わたし、目玉焼きは得意なんです」ときた。それって料理でしたか。驚いたのは、そればかりでなかった。サラダ油も醤油もソースもダシも味噌も米も煮酒も味醂も酢も砂糖も塩も味の素も胡椒も片栗粉も天ぷら粉もお玉も菜箸もフライ返しもおろし金も茶碗もお椀も取り皿も何もない！

冷蔵庫を開けて二度びっくりした。コカコーラの他に入っているのはなにひとつないときている。卵がかろうじて三個だけ入っていた。当然、米がないから炊飯器もない。ということは、御飯を炊いていないということだ。わたしは、呆れてものも云えない心境からムラムラと怒りがこみ上げてきた。

「おまえたち、いつも晩ご飯はどうしているの」

わたしは怒りを抑えるように、顔を引きつらせながら、無理に笑おうとしていた。

「ああ、二人分で面倒だから、いつもコンビニ弁当だね。たまに外食。今日は、お父さんが来るから、この近くにおいしい釜揚げうどんの店があるんだ。そこで一杯ってのどうかなって」

「それは構わないが、朝ご飯はどうしているの？」

「朝はぎりぎりまで寝ているから、食べている時間はないんだ。自慢じゃないが、朝は食べたこ

とないよな」と、嫁も相槌を打っていた。

「ああ、そうか、だから食卓も座卓もないんだ」ようやく、わたしは納得した。食卓のない家、これがいまの若者文化なのだろうか。

わたしは舅根性丸出しで、今度は押入を開けようとした。

「お父さん、そこは開けない方が...」と、息子の声がしたが遅かった。

気が付いたら、わたしは、押入から降ってきた買い置きのカップラーメンの下敷きになっていた。

第285話 形見分け

金井曾太郎が死んだ。前立腺の癌であった。享年五十六はまだ早い。都会へ就職し、それぞれが世帯を持った曾太郎の三人の息子たちが、葬儀一切を終わってから、後始末をしなければならなかった。母親は早くに亡くなったから、曾太郎一人暮らしの家だったが、調べると、相当な借金が残っていた。すべて事業の投資によるものだった。家屋敷を売っても借金だけが残る。債務超過だった。

「おやじめ、子孫に美田を残すなといつも云っていたが、借金まで残せとは云わなかった」長男の弘隆が忌々しそうにそう云った。

「そうだよな、少しは遺産が相続できるかなと期待してきたのに、借金の相続じゃいけないよ」次男の文規が父親の死の悲しみより、遺産がないことを嘆いていた。

「確か、二ヶ月以内に限定承認しなければ、借金も相続することになるんだぞ。さっそく、届け出しようよ。すべて放棄するんだ」

三男の拓春が六法全書を開いてそう云った。

それでも、何か金目のものがないかと、三人は、曾太郎の書斎や、納屋などを掻き回していた。せめて、形見分けになるような、よしんば少しは換金できるものがあれば、そうみんな思っていた。さんざん苦労して男手で育てたのに、死ぬと現金なもので、割り切りすぎる現代の若者が出てくる。

家の中の整理をして、捨てるものは捨てる。家を明け渡すための準備も三人でしていた。

「おやじな、中学のときだったか、三人を呼んで、菜箸三本渡して、まとめて折ってみろというから、弘隆兄が馬鹿力で折ってしまったことがあったろう。それっきり、おやじは何も云わなかったが、あれはなんだったのだろう」

三人はそれでも父親に育てられた思い出を懐かしく話し合っていた。

あれこれと家捜ししてもろくなものが出てこない。蔵書が沢山あったが、三人とも本を読まないから、古本屋を呼んだ。本当はすごい値打ちものの本がどっさりあったのを興味がないから二束三文で売った。家財道具も古いものばかりだ。リサイクルセンターを呼んだが、殆ど置いてい

った。いくらにもならない。

「後はみんなゴミか」

曾太郎の手紙や、アルバムなども惜しげなく捨てた。故人の思い出の品々も息子たちにとってはゴミにしか見えない。その中には、曾太郎の日記も何冊もあった。息子たちの生い立ちの記録なのに、そして、母親のこともいろいろと書いてあるのに、すべて処分してしまった。原稿用紙に書いた創作も、生前、文学雑誌に発表した掲載号もただの雑誌と思って青いゴミ袋に入れた。人は死ねばゴミになる。残るものなどなにひとつとしてないのだ。

「あっ、いいものがある。おれはこれを貰ってゆこう」

弘隆はスキンをみつけた。箱は開けてあるが、まだどっさりと残っている。親父、こんなもの使う相手がいたのかな、と弘隆は疑っていた。

「こんなものが出てきた。伝家の宝刀だ。正宗だったらどうしよう」

次男が仏壇の下から見つけたのは、太刀だった。よく手入れがされてある古いものだ。

「ひょっとして、こいつを骨董品屋に売れば、かなり高く売れるかも知れない」

文規は見方は判らないが、何かとてつもなく高いもののように思えた。

三男の拓春は、別に金目のものなどいらない。父親の生きた印があればいいと、本当の意味での形見を探していた。いつも、曾太郎の枕元にあった、亡き母親と銀婚式の記念に撮影した記念写真が、写真立てに入っていた。拓春はそれを自分の枕元にいつも置いておこうと思った。

家は弁護士さんに任せて、すべて処分が終わると、三人はそれぞれの仕事場のある街へと戻っていった。

弘隆は、目下、二人の彼女と二股かけて付き合っていた。もう、三十過ぎていて、そろそろ所帯を持ってもいいのだが、プレイボーイを気取って、うまく女たちの間を立ち回っていた。さっそく、親父の家から持ってきたスキンを乱用していた。ところが、それから二ヶ月後、二人とも、できちゃった。

「そんなはずはない。おれはいままでも失敗したことはないんだ」

女遊びに関しても完璧を自認してただけにショックは隠せなかった。

「どうしてできたのだろう」と、スキンを何気なく手に取ってみると、小さな穴がいっぱい空いているのに気付いた。すると、弘隆は何もかも思い出していた。「しまった、これはおれが小さいときにいたずらして開けた穴だった。風船のように膨らませて遊んでいた記憶がある。そいつを針でつついて破裂させて悦んでいた。まだ未使用のものにまで穴を空けていたんだ」

弘隆は、二人の女に同時に結婚を迫られる羽目になった。遊びの代償は実に高くついた。

一方、文規の方は、家がかたづく、車で来ていたので、太刀などめぼしいものを車に積むと、東京へと戻った。東北自動車道の終点に来た頃にはすでに真夜中になっていた。

珍しく高速の出口で何か検問をしていた。事件があったらしい。

「お急ぎのところすみませんが、トランクの中を拝見したいのですが」

警官は防弾チョッキを来て、ものものしい警戒をしている。

「何かあったんですか？」文規が訊くと、

「日本刀を持った強盗が車で逃走しましてね」

文規がギクリとした。警官はトランクを懐中電灯で照らしていて、当然、太刀を見つける。

「ちょっと、車から降りてもらえませんか。許可証はお持ちでない。とすると、銃刀法違反容疑で同行願います」

哀れ、文規はパトカーに乗せられた。とんだとぼっちりだった。

三男の拓春は、自分の粗末なアパートに帰ると、急に父親を思いだして涙が出てきた。風樹の嘆というが、親孝行はしていなかった。散々迷惑ばかり掛け通しだった。母親と父親がにこにこ笑っている写真を蒲団に入れてじっと眺めていた。すると、カタリと写真入れの裏蓋が外れた。そして、ひらひらと何か紙切れが一枚出てきた。見ると数カ月前の宝くじだった。

「どうして、おやじはこんなところに外れた宝くじを大事に仕舞っていたんだろう」拓春は疑問に思っていた。それとも、忘れていたのか。だが、当たっているかどうか、判らない宝くじを大事にこんなところに隠すだろうか。どうもおかしいと、翌日、その一枚を宝くじ売場に持ってゆき、照合してもらった。

間違いなく、その宝くじは一億円が当たっていた。

第286話 老化現象

「はい、上から読めるところまで読んでください」

「き・た・む・ら・た・く・は・い・い・お・と・こ」

「その下は読めませんか。今度は左の眼で見てください」

最近、視力が怪しくなってきたので、五年ぶりにメガネを換えようと、北野洋一は眼鏡屋を訪れていた。

「だいぶ老眼が入っていますね。四十過ぎたらどなたでも出でくるんです。遠近両用メガネはまだ抵抗ありますでしょう」

洋一は四十九になったばかり。老眼と云われてむっとした。そういえば、最近、近眼なのだが、新聞や雑誌を読むときはメガネを外して裸眼でなければ活字が見えない。よく、年寄りがしているように、鼻メガネにして、新聞なんか読んでいると、端から見るとすっかりじいさんの仕事草だった。

結局、仕事用と車の運転用、読書用とメガネが三つになった。いちいち掛け直すのも面倒だが、遠近両用よりはましだ。

次に、歯がダメになる。歯茎が腫れてきていた。しゅしゅ歯医者へ行くと、歯槽膿漏が進んでいるという。調べてみなければ判らないが、がたがたの場合は全部抜歯して、総入れ歯になることもあるという。いまは、かろうじて差し歯と部分入れ歯で、自分の歯は半分もないのだが、それが、すべて入れ歯になるということは、がばっと外して、タワシでこすれるのだ。と、すれば手入れが簡単になることか。そんな問題ではない。それを聞いて洋一は愕然となった。歯医者は、なんとかもたせましようと、歯茎の治療から始めた。歯茎をレーザーで焼くのだ。そうして、締めてゆく。総入れ歯になっては適わないから、毎晩、洋一は懸命に塩で研いたり、歯間ブラシまで使ったりして、遅蒔きながら涙ぐましい努力をしていた。

確かに老化は眼と歯からくる。次にどこがガタがくるのか、洋一は心配になっていると、来るところに来た。

それは、尿の出が悪いことに気付いたときから気になり出した。友人や上司らと会社のトイレに同時に入ると、一番最後まで残って、絞り出しているのは洋一だった。残尿感がある。した後もズボンの中で洩らすことがある。図書館に行って、尿に関する本を借りてきた。「前立腺肥大症から前立腺癌まで」

読むと、症状が似ている。みんなは三十秒足らずで小便を終えるのに、時計で計ってみると一分はかかる。出方が細い。途切れる。「癌の場合は痛みなどの症状がなく、アメリカでは癌による死亡の第二位になり、日本でも急速に増えている」とある。ギクリとした。「それは、欧米の食事スタイルになってきたからだ」ともある。洋一は洋食が多い。高カロリーで酸性のものばかり食べたがる。その本を居間に置いていたら、女房が読んでいた。

「なにに、前立腺肥大の人は、性的に激しく、遊んでいる人が多い、だって」
女房はちらりと洋一の方を見ると、

「あなた、外に女の人がいったりしないでしょうね」と、洋一を直撃した。洋一は呑んでいたビールを吹き出した。

「明日、病院に行ってみるよ」神妙な顔つきで、洋一は項垂れていた。

翌日、洋一は仕事を抜けて、泌尿器科に行った。患者の多くは老人ばかりで、洋一が一番若い。

「夜中に三回ですか、トイレに起きるのが、レントゲンを撮ってみましょう」

医者他に綺麗な看護師が二人いる。その彼女らの目の前で、座っている椅子が寝たと思うと、両足ががっばりと開いた。すべて自動的に見えるようになっていく。もう、抵抗も何もできない。すべてが丸見えだ。尻の穴にカメラまでつっこまれ、ちんぽの先からも入れられた。もう、終わりだ。洋一は女房にも見せたことのない恥ずかしい格好で、男を捨てていた。

「あなたのような四十代で、前立腺肥大というのも珍しいですよ。五十くらいからぼちぼち出てきますが、まだ薬を出しますから、様子を見てみましょう。手術の必要はないようですから」

とうとう老人病にまでなってしまった。日頃、若さを売りにしていた洋一は、がっかりして、健康に自信がなくなってしまった。若い社員たちと、カラオケに行ったら、ラップを歌ったり、いま流行りの歌と一緒に歌って、ギリギリ、青春にしがみついていると信じていた。

そんなときに、またもショッキングなことが起こった。仙台に新婚家庭を築いていた息子から、吉報が届いたのだ。

「お父さん、子供が出来たよ。夏には産まれるって」

嬉しいのか悲しいのか、孫までできたので、洋一は名実ともにじいさんに昇格することとなった。

昔は人生五十年といったから、本当なら、洋一は隠居する年なのだ。ちょっと前までは定年は五十五だった。老化について、思い当たることはいくらかもあつた。もの忘れがひどい。いつもメガネがないと騒ぐ。漢字を忘れ、人の名前も忘れる。精力も減退してきていた。男が男まで終わるのは寂しい。それで、焦って、最近、洋一はオフィスラブをしはじめた。自分の男を試したかったこともある。前から洋一のことを素敵だと云っていた女子社員の売れ残りに手を出した。年上が好きな子で、不倫には燃えた。

それでもいざというときに役に立たないで恥をかかないために、成田医院の先生からバイアグラを処方してもらった。精力剤もいろいろと買い集めて試していた。青春は諦めるとして、男まで諦めるのはもう人間を放棄したことと同じだった。

会社の浮気相手と、洋一が食事のあと、軽い酒が入ったまま、彼女のマンションへと腕を組んで入っていった。それを偶然にも通りかかった女房に目撃されていたとは知らなかった。

「いつも、洋一さんって、激しいのね。体はまだ二十代のようなわ」

彼女にそう云われると、自信が湧いてくる。おれはまだ終わっていないのだ。いろんな体位で、彼女を責め立てていた。

そこへ、突然、ドアが開いて、洋一の女房が飛び込んできた。

「あなた、何よ、その女、その格好は」

女房は激怒してヒステリー状態だった。洋一は驚いたが、狼狽えることなく云ってのけた。

「あれ、ここは、おれのマンションとは違うな。この女は誰だ。女房と間違えたかな」

「あなた、惚けたってダメよ」

「いま、なんと云ったかな、最近、耳も遠くなってな。もの忘れも激しくなってな」

第287話 ヒート・アイランド

人を殺すには武器などいらなかった。ただ、日中の戸外へ放り出すだけでよかった。

「やめてくれ、助けてくれ。お願いだ、殺さないでくれ」

男は懇願していたが、暴力団風の男たちは、無言のまま、裏切った仲間を太陽のギラつく外へと突き飛ばした。男は一瞬悲鳴を上げたが、それも束の間、服が燃え始め、火だるまとなって、地面を転がった。

「熱い、助けてくれ」髪の毛も燃え、皮膚はブスブスと膨れて焼けただれていた。外は二百度はある。まるで、金星に暮らしているようなものだった。

街は耐火建築で造られ、外に燃えるものは置いていない。野山はすでに赤茶けた荒野になっていて、緑は目につかない。すべて地下に巨大な農場を造り、人口栽培された野菜を人々は食糧にしていた。魚も地下水で養殖されたもの、牧場も地下にあった。

人々は昼間寝て、夜中に起きて仕事をする。地上は夜は十度まで下がる。

大塚さんの家では中学と高校の息子と娘がいた。いつも寝坊で、親に起こされていた。

「何時だと思っているのよ。もう夜の七時半よ。学校に遅刻するわよ」

ばたばたと子供たちは起きて晩ご飯も食べないで家を出る。

「ちゃんとえんか服を着てゆくのよ」

大塚さんはテレビのインターネット新聞を見ながら、世相に嘆いていた。

「子供たちが晩ご飯を食べないのが半分以上だそうだ。それに、昼間、外で昼遊びする不良が増えたそうだ。うちの二人は大丈夫だろうな」

宇宙服のような服を着て、真昼間誰もいない街で悪さをする若者の暴走記事が目立つようになった。

この五十年で、人間の生活はがらりと変わってしまった。南極と北極の氷が解けて、海面が五十メートルも上がったから、日本の沿岸の殆どの都市が海底に没した。人々は、高い山へと移住した。そして、気温がぐんぐん上がり、水分が蒸発してしまうと、作物も何も採れない。日本は山国だから、平野が水没すると耕作地が減る。人々は競って山の上へ上へと移住を始めた。

大塚さんも出勤だ。外は真っ暗だが、みんなぞろぞろと駅へと向かう。耐熱自動車も渋滞している。

「こんばんわ。今日もいい星月夜ですな」

近所と挨拶をしていた。電車も夜だけ走っている。日中は、車も人も外には出ないのだ。日没とともに人々は動きだし、日の出前に家に帰らねばならなかった。ぐずぐずといつまでも外にいる

ことは死を意味する。

大塚さんはデパートの管理部で働いている。午後八時開店、午前五時閉店だ。冬時間でそうだと。夏時間ともなれば、営業時間はぐっと減る。九時開店の三時閉店となる。買い物客が真夜中に押し掛ける。真っ暗な時間にごわごわと通行人で街が混むのは異常だった。みんな、色白になり、目が弱くなって、夜行性になっていた。反対に、暗いと見えない人種がいる。明るくなれば仕事を始める泥棒たちだった。

「どうだい、早朝に一杯やらないか」と、大塚さんは同僚に朝酌を誘われた。

「いいですな。駅裏の炉端焼ですな」

その日は少しばかりボーナスが出たから、たまに吞んで帰るのも悪くない。予定が入ると、一日うきうきしてくる。それでも、日の出までだから何時間もない。

三人の仲間で、炉端焼へと入った。中はやはり懐が温かい社員たちで賑わっていた。

「今度、アクア・ポリスへ支店を出すそうだ」

「あんな、閉鎖的なマーケットで売れるかな。第一、流入人口がないだろう」

もっぱら出店計画の話で持ちきりだ。海底都市も暮らしにくいと評判だった。まだ、地底都市のほうが面白い。誰が転勤になるのか、そればかりが心配だった。

酔うほどに会社への不満も出てくる。三人は氣勢をあげて、

「次、行こう。次はカラオケだ。やはり地上の街はいいよな。広いし、空が見える。星もあんなにだ。ヒック」

三人はスナックへと繰り出した。夜風が気持ちよかったのが、だんだんと気温が上昇してきている。スナックでは暖簾まで歌いまくった。懐かしの二千年始めのJポップ・オンパレード。

スナックのママが、みんなを店から追い出した。

「もう、お終い。早く帰らなきゃ、お天道様が出るよ。わたしゃ、まだ死にたくないからね」と、ママはさっさと帰り支度。酔っぱらいは、いつまでもぐだぐだと繁華街にたむろしていた。

「よう、そろそろ終電じゃないのか。まずいよ。帰れなくなっちゃう」

「いいんじゃないの、地下に潜ってせこせこした生活よりは。こんなに広いんだぜ」

「おい、熱くなってきたぜ。東の空がしらじらと明けてきたぜ。ヤバイよ」

酔っぱらいたちは、ふらふらと三人抱き合うように、地下鉄の入口に向かっていった。そのときだ。東の空から太陽が顔を出した。三人は目を射られた。ぎゃっと悲鳴を上げると、その場に次々に倒れこんだ。人間はバンパイヤのように太陽を見てはならない体になっていた。気温は百度を越えた。ぶすぶすと三人の衣服から煙が立ちこめていた。

第288話 青い薔薇

外は雪だった。時折、視界が妨げられるほどの猛吹雪になったりしていた。それでも、この温室の気温は24度で、いろんな草花の匂いにむせかえるようだった。白衣を着た研究生の瀬川伊佐夫はひとり黙々と日夜、ある研究に没頭していた。

F市のグリーンバイオセンターでは、町興しの特産にしようと、各国が研究に凌ぎを削っている例の青い薔薇を誕生させるために、園芸科学の専門員である伊佐夫に場所と予算を与えていた。青い薔薇を成功させればノーベル賞ものと噂されているほど、過去数百年の間に人々の関心を寄せている難題だった。バラゲノムをコンピュータを駆使して、解読し、遺伝子組み替え技術で、なんとか不可能な青い色を出させるということに、ロマンを持っているような科学者たちがやっきとなっていた。かつて、近世のヨーロッパでも黒いチューリップの開発に死人まで出た歴史がある。何故、人々はそうまでして花の色に虜になるのか。不自然なことは神の領域を荒らすことにもなるのだが。

伊佐夫は、いろんな花で試していた。それは花だけで終わらず、動物まで及ぶ実験を繰り返していた。

「できた、やったぞ」伊佐夫は一人興奮して温室の一角にある研究室で叫んでいた。他に助手も誰もいない。みんな、最初はもの珍しく手伝っていたが、途方もない研究の難しさに一人また一人と離反していった。十年経つ頃には、陰で嘲笑う者も出てきていた。

「あいつは気違いだよ。まともじゃない。」

誰もがそう思い、伊佐夫に近づかなくなっていた。伊佐夫は四十になるが、家庭も顧みないせいで、妻は子供を連れて家を出ていった。家にも帰らず、一日中、研究室に寝泊りしては、青い色素の研究にのめりこんでいたからだ。

だが、伊佐夫は青い薔薇ではなく、動物実験の方で、思わぬ成果を得ることとなった。伊佐夫はわなわなと震えながら、飼育箱の中を覗いていた。そこには、産まれたばかりの青いウサギが数羽、母親の乳を飲んでいたので、よく、縁日で着色した哀れなウサギを見ることはある。何のためか、赤や黄色や青いウサギが伊佐夫の子供時分に不思議な生き物として目に止っていた。それが、白い毛の母親から紛れもなく青い毛色のウサギが産まれていた。

二十日鼠でもそれは実証できた。青だけでなく、緑色の毛並の鼠の子が誕生していた。伊佐夫の手にかかれば、どんな動物もどんな色にもできるある仕組みを構築したのだった。人間の欲望には際限がない。青い薔薇のことはすっかり忘れて、伊佐夫は有頂天になっていた。今度は、どんな動物で実験しようかと、思案していて、してはいけないことを考えていた。

伊佐夫の研究は、公表することなく、秘密裡に行われるようになった。この動物だけでも、新種として、大手ペットショップから金を積んで引き合いがくるだろうが、伊佐夫は地方公務員という立場もあるが、そんな金のためにやっているのではなかった。そんな動物実験の成果など、過程にしか過ぎないものだ。伊佐夫の究極の目的は別のものに摩り替わっていた。伊佐夫の脳裏には薔薇のことはもうない。

女にまるで興味がなかった伊佐夫は、夜の街に頻繁に出てはナンパしていた。妻とは離婚したので、バツイチの東大卒の科学者はちょっと変わり者としてもてていた。手当たり次第に女を捜している伊佐夫が研究仲間に見つされると、

「いよいよ、おかしくなったか。ひとりでよほど寂しいとみえる」と、陰でみんな笑っていた。伊佐夫はそんな噂は気にもせず、女をくどいて、とうとう、再婚に漕ぎつけた。相手は初婚で、三十過ぎのOLだった。

二度目の妻は、一緒に生活してから妙なことに気づき始めた。夜の夫婦生活がまるでないのだ。

「いいかい、ぼくらの子供は体外受精で作るからね」

妻は気味悪そうに、

「あのう、わたし、子供を産める体だと思うんですけど」と、伊佐夫に話した。そんなことはお構いなしで、伊佐夫は妻の基礎体温や生理をグラフに記録して、排卵日を割り出していった。

「さあ、いよいよ、今日は君と結ばれるからね」と、云う伊佐夫は、ベッドの前で裸になるわけでもなく、何故か白衣を着ていた。すっかり解剖の時間だ。開脚している妻の子宮から卵子を採取すると、伊佐夫は自宅の一室を研究室にして、そこである計画に移った。それは朝方まで続いていた。妻は完全に性的欲求不満に陥っていた。

伊佐夫は、妻だけで終わらず、こっそりと夜の街に出ていっては、また愛人を作るよう、ナンパに励んでいた。女はひとりふたりでも足りなかった。

それから十カ月が経過した。妊娠した妻が臨月になり、陣痛が始まった。それは、伊佐夫が学会で留守のときだった。かかりつけの病院の分娩室から大きな悲鳴が病院中に聞えた。

「あ、青い赤ちゃんが、う、産まれた」

それは、まもなく、市内のあちこちの病院でも、同じ悲鳴が聞こえた。

「み、緑の赤ん坊だ。みどり児というけれど、これは一体なんなのだ」

「真っ赤な赤ん坊だ。赤ん坊というから、赤でもいいが、こんな真紅の色のは見たことがない」
それらはすべて私生児で、相手の男性がみんな同一の人間だった。医学倫理会や宗教団体が動いた。警察も捜査に入った。伊佐夫は出張先のホテルで任意同行の上、取り調べられていた。全世界のマスコミが連日のニュースで流していた。

「どうして、こんなバカなことをしたんだね。産まれてきた子供が可哀想だとは思わないのか」
刑事や、政府の特別調査委員会のメンバーが伊佐夫に詰め寄っていた。

「だって、カラフルでいいでしょう」

「な、なんだと、そんな問題か。きさまはカラープリンタか」

みんな興奮してこの狂人と対峙していた。

「いまは、白、黒、黄色しか地上にいないから、人種差別や紛争が起こるのです。それが、二十四色揃ってごらんささい。綺麗ですよ。青い人と赤い人が結婚すると、紫色の子供が産まれるし、愛の結晶という気がしませんか。色が世界に満ちれば、みんな戦争もしなくなります」

伊佐夫はごそごとポケットから何かを取り出して、テーブルの上に置いた。みんな一斉に身を引いた。見たこともない、黄金色の美しい昆虫が、光り耀いてテーブルの上を歩いていた。

「これはゴギブリです。こんな色なら、みんな嫌わないでしょう。この世はすべて色だけの世界なんですね」

一同、立ち尽くして言葉も忘れて見惚れていた。

銀行の融資の窓口で、一人の三十半ばのサラリーマン風の男が、融資担当の銀行員と押し問答していた。

「頼む、もう一回きりでいい。あとは貸してくれとは頼まないから」

男は涙ながらに懇願していた。端から見ていても哀れだった。

「ダメなものはダメ」と、銀行員も冷たく突き放す。

「おれと君の仲じゃないか。担保にうちのを出すから」

「いらないよ。担保価値があるのか、あんなの」

「酷い、あんなのとは」

「失礼、だけど、友人として忠告しておく、もう二度とここへは来ないでくれ」

男は目を潤ませていた。隣りで黙って聞いていた八百屋の親父がついに頭にきた。

「ようよう、何だ、その態度は、そりゃ、いまはみんな苦しいよ。お互いさまだ。景気のいいときは、逆に借りてくださいって、おれんところにも頭下げて来たよな。いいか、これまでも、どれほどの定期を組んだり、高い利息払ってやっていたと思うんだ。この街の商工者たちが汗水流して働いた金で、おまえたちはこんな立派な建物建てたんじゃねえのかよ。それなのに、不景気になれば掌返したように貸し渋りたあ、態度がでけえよ」

八百屋の親父は口角に泡を飛ばして抗議していた。

「あなたは、何も知らないんですから、横から口を出さないでください」と、銀行員も仏頂面して横柄に応えた。

「それだ、それだよ。あんたらは、優良企業にはぺこぺこ頭下げるけどよ、われわれ零細企業には態度が悪い。この下町に支店を出したのは、おれたちの面倒みる覚悟で出したのじゃないのかい。そりゃ、われわれ中小企業の殆どがいまは赤字だろうよ。親会社も赤字だ。従業員をリストラするように、親会社も子会社のリストラだ。果てはその下請けまで切り捨てだ。この町と心中する気がなければ、支店の意味があるかい。それは、あんたたちも、貸して返せないと泥棒だろうが、利息だけでもきちきちと納めていればお客さんだよ。元金くらい棚上げしてくれてもいいんじゃないの。あんたらは元金で飯喰っている分けじゃねえんだろう。利息で喰っているんだ。延滞利息でサラ金並に高く取りやがってよ。国のほうからは不良債権処理しろと云われ、それもできない。上からの命令で締めるが、窓口業務は冷酷にはできねえ、そこんところはあんたたちも大変なのはよおく判るってなもんだ。おたくらも立場は辛い。けどよ、慎重になりすぎて、融資条件を厳しくすると、金を貸せる相手はいなくなるよ。金を貸して喰っている銀行がだよ、貸せる相手がいないと、どうしてどこで利息取れんだよ。どうやって飯喰うんだよ。財テクもいまはダメだろうし、個人融資も焦げ付く。ここは、ひとつ長い目で見なければいけないんじゃないか。ところでよ、そこの兄さん、あんたの友達というが、支払いが遅れたことあんのかよ」

サラリーマン氏は首を横に振った。

「きちきちと返しています。給与天引きみたいなものだから」

「それじゃ、限度額いっぱい借りているのかよ」

「いいや、まだ余裕があります。そんなことじゃないんです」

「そんなことって、だったら保証人か。うちでも、保証人三人立てろと云われたが、最近はその

保証人もブラックが多い。以前なら無担保無保証で貸した時代もあったんだ。それが、同居以外の三人も出せというのは、どういうことだ。さっき、担保価値がどうのと云っていたが、いまじゃ、不動産もおいそれたあ売れねえ。根抵当も七割は付けたもんだが、破産されて競売にかけりゃ、半分以下だ。それでも出物が多いからなかなか動かねえ。いまどき、土地建物は担保にはならねえってなよく判る。女房でも担保にしてえところだが、うちの古女房は耐用年数すぎて資産価値はゼロだわな」

すると、いままでむかついて、黙って聞いていた銀行員が口を開いた。

「その女房ですよ。問題は」

「何？ やはりこの人は女房を担保にして金を借りようとしていたのか。それは、あんたのかあちゃんなら、まだ三十くらいか、使用に耐えられる年だろうが、そいつはいけねえ、かあちゃんを抵当に入れるたあ、非情もいいとこだ」

「門外漢が口を挟まないでください。これはプライベートな問題なんですから」

「プライベートかオブラートか判らねえけどよ、所詮あんたらは格好つけているが、金貸しよ。サラ金となんにも変わらねえ。高い給与貰って、庶民から血を搾り取るシャイロックよな」

すると、銀行員はかっとなって叫んだ。

「いちいち、うるさい。いまは、銀行の貸し出しのことで、こいつと話していたんじゃない。前にこいつの奥さんもいれてスワッピングしたんだ。それに味をしめて、こいつときたら、うちの女房を貸せとしつこいから、断っているところだ。判ったか」

八百屋驚き、

「銀行は、女房まで貸すのか、恐れいりやした」

第290話 教育勅語復活

朕惟フニ我が皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我が国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス。爾臣民、父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ、学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ、進デ公益ヲ広メ世務ヲ開キ、常ニ国憲ヲ重ジ国法ニ遵ヒ、一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ。是ノ如キハ独リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン。

斯ノ道ハ実ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ。朕、爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ、咸其ノ徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。

御名御璽

教育勅語が復活した。さっそく、新しい教科書で、小学一年生からこれが原文のまま載った。

ところが大変なことになった。昭和五十年生まれの先生たちが、これを読めない。意味もさっぱりと判らない。まして、鼻垂れ、口をあぐり開けた可愛らしい一年生には、テニオハしか読めないときている。先生も指導の虎の巻を見ながら、汗をかきつつ授業していた。

「はい、それではみなさん口を揃えて先生のあとに続けてください。チンオモフニワガコウソコウソウクニヲ...」

可愛らしい声が呪文のような意味不明の言葉を復誦した。先生も「ウ」と発音すべきところを旧仮名遣いを知らないで、「フ」と発音したから、子供たちますます判らない。

「先生、チンってなんですか」

早速、児童から質問の手が上がる。

「恐れおおくも天皇陛下が、ご自分のことをおっしゃるときにそう、おっしゃられます」

「なんだ、ちんちんのことかと思った」

「わたしは、犬のちんかと思いました」みんな大笑いした。すると、先生は壁に耳をつけて、みんなの声を制止した。

「しっ、声が大きい。そんなことを云うと、不敬罪で、おまわりさんがやってきますよ」

先生も冷や汗ものだった。

「フケイザイって、うちのママがいつもおかずを食べ残したときに云います」

「ふむ、それは意味が違います。ムダだということですね。いま、先生が云ったことは、恐れおおくも天皇陛下の名を汚したりすることの罪を云います」

「先生、天皇陛下って、名前何と云うんですか」

先生は、ギクリとした。はて、さて、名前を知らない。なんとか人というのを思い出そうとして、狼狽えていた。そこへ、校長先生が通りかかった。

「ヒロヒトでもないし、アカヒトでもないし、なんだったかな...」

それが校長先生の耳に入ったから大変だ。すぐに、警察へ通報された。

まもなく、刑事が三人、小学校へ黒塗りの車でかけつけた。怖い顔をした刑事は、校長に案内されるまま、階段を上がり、二階の一年二組の教室のドアを開けた。

「おたくですな、恐れおおくも天皇陛下の御名を知らない先生というのは。逮捕します」

「ええ！」

哀れ先生は、刑事たちに引き立てられて黒塗りの車に乗せられて、署まで連行された。

国語力が低下しているのは、生徒だけでなく、先生たちもだった。あちこちの学校から、教育勅語は難しすぎるから、子供たちも理解しない。そこで、なんとか現代語訳して欲しいと、嘆願書が文部科学省へと出されていた。

「先生、忠ってなんですか、孝ってなんですか」

中学でもその質問だ。すでに、子供たちから若者の間には、忠誠とか孝行という言葉は死語になっていた。教える以前の問題で、先生や親をはなっから馬鹿にする子供たちに、とても理解できる言葉ではなかった。現代の言葉にはそんなものはなくなっていた。

高校生にも街頭でテレビ局が質問していた。

「孝行って知っていますか」

「おれたちの行っている高校かよ」

「うちのばあちゃんが、漬け物のことをこうこうと云っていたわ」

ついでにその親にも聞いていた。

「夫婦相和して知っていますか」

「夫婦愛は死？ そうかもしれない。うちの女房め、黙って株に手出しやがって、家も抵当に取られてしまうんだ。もっと早く離婚していればよかった」

国民の多くが戦後生まれ、戦前の思想をもう一度といっても、がらりと変わってしまった世の中には無理がある。だが、世の中は着々と右旋回の準備がなされていた。教育基本法から変わり、子供たちの洗脳から始めようとしていた。

「さあ、今日から、学校の正面玄関に畏れおおくも天皇陛下の御真影と国旗を掲げますので、登校したときは、必ず深く一礼するように。それと、今日から、日の丸と陛下のお顔のついたありがたいバッチを皆さんに渡しますから、必ず胸につけるように」

あれあれ、どこかの国のようになってきた。海の向こうの国を馬鹿にできない。だんだん、日本も右習え。戦争のきなくさい匂いが漂ってきていた。

第291話 ネグレクト

流子は自分が両親に似ていないと、友達に云われて、気にし出した。中学三年の流子にとっては、丁度そんなことで悩む年頃なのだ。いろいろと、思い返してみれば、小さなときから、母親に繰り返し云われたことを思い出していた。

「おまえは、川から流されてきたんだよ。箱に乗せられてね。それをお母さんが拾ってきて育てたんだ。」

流されてきたからそんな名前をつけたと云うのも、信じていた。貧乏の子沢山の家の長女として流子が育ったから、両親は子育てに忙しく、とても長女のことなどかまっていられない。下に手がかかるから、流子がどうしても粗末になる。それで、自分は拾われた子だから、両親の愛を感じたことはない、自分はどこの誰なのか、自分でも判らない。そう、思いこむうち、流子は冷血な少女に育ってゆく自分を離れた場所から見ていた。自分を第三者的に捉えることができるほど、大人びて、それでいてどこか病的なほど繊細なところがあって、いつも、学校の図書室からホラー小説を借りてきては、ひとりぼつんと家の物干しに座って読書をするという孤独な思春期を送っていた。友達も少なく、みんなから変わり者扱いを受けていた。三つ子の魂は少女期に潜伏期間を経て、その精神的傷口から感染した欠乏症が疼くように目を開いてくる。

流子は、狭い家が嫌いだった。いつもおつかいやら、食事の支度、後かたづけをさせられて、女中のようにこき使われていた。両親の愛情は弟、妹ばかりに注がれて、なんでも買って与えていたし、甘やかせていた。自分だけが、他人の子のように、無視され、酷い言葉で罵られていたと思っていた。

流子は、そうした家に自分の居場所がないことを知って、近くの公園の古い電車の遊び場に、自分の居場所をみついていた。それは、国電の使われぬ車両を児童公園の遊び場に設置したもののだが、みんな厭きて遊ばなくなったのを、隠れ家として、流子の秘密の場所としていた。その

座席に座り、テーブルの上にノートを開いて、こっそりと日記を付けていた。また、本を持ってきて読んでいたり、密かな楽しみで、押し花のように、ノートに昆虫を生きたまま、挟みこみ、押し虫を作るのを誰にも見せられない、自分だけのコレクションとしていた。公園や川原で捕ってきた、蛾や、蝶やトンボ、蜘蛛などをノートに挟んでその上から座り潰してしまう。何ヶ月かすると、それは干からびて薄い標本となる。それを開くときのドキドキした感じがたまらない。流子はそんな残酷な趣味に命の儚さと、死体の美しさを同時に感じていた。生きているものに興味はなかった。死んでいるものほど美しい。その美しい絶頂で死ぬときほど、逆に命は永遠に保存されるのだ。年老いて、醜くなり、あるいは花が枯れて見窄らしくなってきたからでは、すべてが滅んでゆく哀れしかない。それより、花なら、一番美しく咲き誇るときに押し花にしてしまうのが、花の尤も美しい死ではないか。枯れ落ちるまで見ていたくはない。流子は、それは動物にも人間にも云えることとして、自分も醜く長く生きていたくはないと日記にそうしたためた。

中学にしては、かなり大人びた考えを持って、勉強もできた。成績もクラスのトップだったが、じっと何かを考えていたり、空ばかり眺めていたりして、教室ではいつも先生に注意を受けていた。内申書は必ずしもよくはない。授業態度と、先生に対する反抗的態度、友達との協調性がチェックされていた。

「わたしは、きっと、身分の高い人の私生児なのだ。墮胎されずに産まれてすぐに川に流された。わたしを捨てた母親もわたしが死ぬという未必の故意を持っていた。父親はわたしが産まれてこなければいいと拒否していた。わたしは呪われこそすれ、誰にも祝福されずに、この世に誕生したのだ。わたしの誕生日は、育ての母親が勝手につけた単なる日付にしかすぎない。わたしは何歳何ヶ月か、自分でも判らないのだ。出生の場所も、本当の生家も何も判らないのだ。」

流子の文章はとても十四歳の少女の書くものではなかった。自分を悲劇の主人公にしながら、きっと自分の生まれは、高貴なものに違いないと、空想することで、自分を慰めていた。少女期にありがちな「小公女病」だった。人は、自分と向き合って生きる時間が長いほど精神的に成長するものだ。周りに振り回される人ほど主体性がなく、自分を見失っている。流子のように、孤独で、内面的な生活をしているものほど、逆に外が見えてくる。

クラスメイトや担任の先生は、流子を危険人物視しているところがある。何を考えているか判らない、冷たい知性も感じられ、いつか恐ろしいことをしでかすのではないかと、密かに警戒していた。暗い影のある少女、いつも何かを考えていて、時折悲しげな表情を見せる少女。きりつとした眉と利発そうな目が、人を睨むとき、誰しもぞっとした。それでもだんだんと年頃になると流子は綺麗になってくる。

「おまえは、当然、進学高のA高が志望だな」

三者面談に両親は来ない。担任と二人きりだった。ここいらではレベルの高い高校へも合格間違いない。

「おまえは、将来何になるんだ」

流子は、前にもそんな質問を訊かれたことがあった。

「判りません」、そう応えるよりない。自分に将来があるのだろうか。自分は、十八か十九か、娘盛りで、巨大な本に挟まれて押し人間になるのだ。そう、長生きしてもいいこともなさそうだ

。将来に対する夢も何もありませんでした。

家に帰ると、母親が隠していた日記を盗み見たようで、からからと笑った。

「流子、おまえはとうちゃんとかあちゃんの子だよ。川から拾ったのは嘘だよ。まったく、そんなことをずっと信じていたのかい。馬鹿だねおまえは。それより、赤ん坊のおしめ取り替えておくれ。それから洗濯は五回はあるからね、それが終わったら、買い物だ。駅前のスーパーで野菜半額の特売あるから。うちは、おまえを入れて子供が十一人だ。おセンチになってんじゃないよ。そんな暇あったら家の手伝いしとくれよ」

赤ん坊が泣く、チビがものをひっくり返す。部屋はちらかす。狭い中が保育園のようだ。ネグレクトは幻想だった。本当はこの地方で云う「投げ童子（わらし）」だった。上から下まで年子でずらりと揃っているから構ってもらえるはずがない。

「泣くな、このくそガキ。あつ、うんこ垂れた。待て、そこのガキ、ゴミはくずかごだろう」
流子は、いつもの姉に戻っていた。これが現実、せめて乙女チックな空想の世界に逃げたいと、思っていた。本当は投げ童子は遅いのだ。

第292話 里子募集

奇妙な広告が出ていた。

「里子募集」

子供のいない夫婦が、孤児院から子供を引き取ることの逆で、年寄りのいない夫婦が養老院から元気な年寄りを引き取ることが、若い夫婦の間で流行りはじめた。身寄りのない孤独な老人たちが、次々に若夫婦の家庭に入籍し、家族として暮らし始めているのだ。

敦賀さん夫婦は赤ん坊と保育園の幼児のいる家庭だった。夫婦で家を空けることがなかなかできない。ベビーシッターが田舎だからまだないのだ。夫婦共稼ぎで、赤ん坊まで高い託児所に預けていた。妻の萌は公務員で、いいポジションにいるから、給与もよく専業主婦になるには勿体ない。ただ、母親でなくてもいいが、常に傍にいて愛情を注ぐ人がいなくてはならない赤ん坊まで預けていることに憂慮していた。そこに、この里子募集の公告を目にした。

「あなた、うちもおばあちゃんが欲しいわね」

両方の両親は共に田舎で遠い。もともと親孝行の娘息子が結婚したが、二人とも末っ子で、将来とも両親の面倒は見なくてもよい。年寄りの好きな若い人もいるのだ。

さっそく、二人は日曜日に市内の老人ホームに同居希望の老人を訪ねて行った。お見合いのようなものだった。あまり、体の悪い老人は引き取れないが、まだまだ元気で動ける老人が引き取られてゆく。

園長から紹介されたのは、トシさんという七十三歳のおばあさんだ。明るくてにこにこ笑っている第一印象がよかった。

「うちには赤ん坊と保育園児がいますが、おばあちゃんは子供が好きですか」

萌が一番肝心なところを訊いた。

「好きもなにも、わたしゃ子供三人育てましたが、二人は事故で亡くなったの、ひとり残った息子は孫二人連れてアメリカへ移住してしまった。科学者だから仕方ないがの。アメリカと一緒にと云うが、じいさんの墓もあるし、わたしゃ、この町から離れられないよ。だから、子供が傍にいれば慰めにもなろうし...」

老人ホームに入所する人には様々な事情がある。やむをえないことが絡み合っている。両方の利害関係が一致したところで、敦賀さん夫婦はトシばあさんを引き取ることとなった。外国の息子にも連絡しており、息子も遠い海の向こうで、安心して研究に励めるだろうということとなった。

敦賀さんの家におばあさんがやってきた。座布団にちょこなんと座り、にこにこ笑っている。若い夫婦は、何か、新しいパソコンかプラズマテレビでも購入したように嬉しさがこみ上げてくる。

「あっ、おばあちゃんだ」と、幼稚園児が騒いでいる。

「触ってごらん。本物のおばあちゃんよ」「ほんとだ」

トシばあさんは、さっそくかっぱう着を着て、

「さあ、まずお掃除から始めましょうかね」と、腕まくりしながら云うから、

「いいから、おばあちゃんは、黙って座ってお茶でも飲んでいてください。そうそう、孫の未央でもあやしてくれれば助かります」と、夫婦はベビーシッターだけをやらせてもらうつもりで引き取ったのに、よく働く元気なおばあさんに驚いていた。

「おや、可愛いこと、おいくちゅでしゅか。そう、八ヶ月でしゅか。みおちゃんというの」本当に子供が好きなので、二人は安心した。それでもお茶を飲むと、じっとしていないおばあさんで、ひょいと赤ん坊をおんぶすると、台所をかたづけはじめた。それが終わると洗濯だ。要領を得ていて、どこに何があるかすぐ判る。勝手知ったる他人の家だ。まるで、家政婦さんが来たようだ。その辺の若い、何もしない嫁なんかお呼びもつかないくらい稼ぐ。手早いし、赤ん坊をあやしなから、掃除して、それでテレビまでしっかりと見ていて笑う。トシばあさんが来てから、急に家が賑やかに和むようになった。若い夫婦の家に何か欠けているといったら、頼る一本がない。いるといないではかなり違うということが判った。

伊達に年をとっていない。なんでも知っている。字引にもなる。ちょっとした百科事典の代わりにもなる。一家に一台あれば重宝。

「すごいなあ、部屋が綺麗になるし、雰囲気も変わるものだな。普通の田舎の家みたいだ」

「そうね、わたしが気がつかないところまでやってくれるのよ」

夕方になると、トシばあさんは嫁と近くのスーパーへ買い物に行った。

「おばあちゃん、何でも好きなの買ってね」と、嫁はトシばあさんに任せることにした。どんな買い物するのか楽しみだった。トシばあさんは、いちいち、嫁にあればあるか、これはあるかと訊きながら、ないものを籠に入れていった。糶、たかのつめ、蕪大根、里芋など、いままであまり嫁の買ったことのない食材を買っていた。嫁はどちらかというと、サラダにする洋風野菜に肉料理が多い。

晩ご飯は酒粕を使った鮭のアラとじゃがいもの粕汁と、芋の煮ころがし、蕪の漬け物も漬けていた。若い二人は感激していた。

「うん、この味だ。田舎のばあちゃんの味だ」

食後にお茶なんか飲んだこともないのに、みんなでお茶をいれて飲むと、しみじみとしてくる。いままで、忘れていた生活が戻って、ぬくもりがある。何かが欠けている生活は年寄りのいない生活だった。

若い夫婦で映画にも行ける。結婚式やパーティーにも、おばあさんに任せてゆけるから、なにかと生活にゆとりと潤いが出てきた。子供二人もトシばあさんにすっかりなついているようだ。血の繋がりがあから、逆に憎みあい、甘えから我が儘になる。他人だから少しの距離をおいて寄り合いうまくゆく。

そうして、十年、子供たちも中学、高校と進むまで成長した。その間に喧嘩もしたが、本当の親子以上に仲がいいと、近所でも羨ましがられていた。休みには近郊の温泉に家族で出かけ、ばあさんと旅行にも行った。トシばあさんは、口癖のように、「ありがとうよ、こんな幸せはないよ」と、いつも云うくらい、満たされている老後を送っていた。

そのトシばあさんも年には勝てない。病気で患って、八十二歳の生涯を閉じることになった。嫁は、寝ずの看病をしていた。トシばあさんは、敦賀さん夫婦に手を握られて、にっこり笑って息を引き取った。

連絡はしてもアメリカから息子さんは来なかった。親戚の人が数人、葬式に顔を出しただけで、多くの参列者は敦賀さんの親戚友人だった。もう、親戚より親戚付き合いをしていて、みんなから慕われていた。

葬儀一切が終わると、敦賀さんの家に弁護士がひょっこりと現れた。

「生前に、トシさんから遺言状を預かりまして、年金をこつこつと貯めていましたし、広大な土地があります。それを息子さんに半分と、あなた方に半分遺産相続するということです。時価で五億円はありましょか」

二人は声も出なかった。そんなつもりで入籍したのではなかった。

昭和四十七年二月六日夕刻、雪の日だった。積雪は六十センチと例年よりは少ない。その日も、静かにぼたん雪が降っていた。

北村雄一は、ゴム長をはいて家を出た。ちょっと出かけてくるからと、どうやら近くらしく、アノラックも着ていない。厚手の茶色のセーターにジーンズだった。家人には、夕食には戻るようなことを云い、近所の同窓生のところへ用事でもあったのかと、母親は後ほど述懐していた。

北村雄一の家は青森市内の中央郵便局の向いを入ったところにあった。国道四号線から近い、街中だった。辺りは、個人病院や冠婚葬祭場があるだけで、古い住宅街だった。市内を分割して流れる堤川まで歩いて五分とかからない。

北村雄一は四時頃に家を出た。すでに雪のせいで、暗くなり始めていた。真新しい雪の上に雄一の足跡だけが、点々と残っていたが、それもまもなく、次から次へと降る雪が掻き消していった。母親は居間で、古書店を営む父親は店で、次男の雄一の後ろ姿を見たのは、それが最後だった。北村雄一の消息はそれっきり判らなくなった。

北村家は、兄弟が東大を出るなど、全員が秀才だった。青森では、年に東大に合格するものは一人か二人と珍しい。地元の進学校でもトップクラスの成績だった雄一も大学にはストレートで入ったものの、中退して横浜の会社へ勤めていた。その経緯が両親はよく判らない。

七十年安保が過ぎると、全共闘はベトナム戦争反対から大学側のロックアウト阻止という身近な目標まで掲げて闘争を続けていた。ヨド号から浅間山荘、テルアビブ空港乱射事件まで、一連の赤軍の陰惨な活動も学生運動の行き詰まりの影を落としていた。内ゲバで、キャンパスで死人も多く出ていた。そんな時期に東京へ出ていた雄一には、都会という生き物が恐ろしく思えたりするか。学生運動に直接関わったという友人らの証言もなかった。何故、突然、大学をやめたのか。そして、不可解はまだ続いていた。東京へ出て四年、二十二歳の雄一は、また突然に会社をやめて、青森の実家へと戻ってくる。何か怯えていたという話もある。いつも、何ものかに追われているかのように、後ろを振り返っていたというのだ。かなり精神的に弱っていたし、被害妄想気味になっていたようだ、当時の友人らは話してくれた。雄一が都会で何を見、何に怯えているのか、それが判らないまま、両親は、次男に家業の古本屋を継がせるべく、その心積もりをしていた。

雄一は、のんびりと本を読んでいるか、テレビを見たりしていて、両親の目には、話をしても普通の息子に思えた。どこかおかしいというと、若いうちの不安定な精神状態はつきもので、これといって異常な行動をするわけでもない。

二月六日は、いただきもののケーキがあって、それを半分だけ食べると、「後で食べるから取っておいて」と、母親に念を押している。甘いものが好きな雄一が、そこまで云うのは珍しくないことだ。それと、父親が、雄一の部屋を探したときに、机の上に読みかけの店の本があった。安部公房の「砂の女」だった。半分まで読んで伏せている。机の引き出しに、雄一の日記も仕舞っていたが、日常的なことが書き連ねているに過ぎない。自分のワイシャツを母親に頼んでクリーニングに出していた。そして、決定的なのは、友人らと寺山修司の演劇を市内の小劇場でやるということで、その切符を買っていることだ。その公演は二月十日になっていた。

ここまで調べると、とても自殺したり、当時流行っていた人間蒸発という失踪するような精神状態ではなかったこと、雄一には少なくとも十日の公演を心待ちにしていた節があると、友人も証言していた。ということは、十日までは、この青森にいななければならない理由がある。食べ残しのケーキにしても、読みかけの小説にしても、ぷつぷつといきなり途切れるには不自然だった。少なくとも、鬱病ではないし、死ぬ動機が見えてこなかった。あるとすれば、何かに怯えている見えない影が気になる。

不思議なことに狭い街で、その後の雄一の足取りが判らないということだ。見たという目撃情報もない。それこそ、田舎にはよくある「神隠し」に遭ったように忽然と消えたのだ。

両親は、あちこち、友人宅や学校や親戚、前の会社などにも電話を入れて、雄一を捜したが、どこにもいなかった。三日経って、ようやく警察に両親は、家出人捜索願を出している。七日、八日はものすごい吹雪で、真冬日、昼間でもマイナス五度という寒さだ。そんな厳寒のときにセーター一枚で外にいるはずがない。川や海も探してみた。ひょっと

して、事故に遭い、川か海に落ちたかもしれない。ただ、真冬の雪の積もった川縁や岸壁にはあまり人は近づかない。行く用事がない。雪捨て場になっていて、時折、ダンプカーが海に除雪した雪を捨てにくる場所だった。

両親は地元紙の東奥日報に「雄一連絡待つ」と、何度も一行広告を出してみたが、連絡はなかった。写真入りの尋ね人の簡単なチラシを作り、街頭に貼り出して手がかりを探したが、情報は一件も寄せられなかった。

雄一の父親は、横浜の会社を訪ねて、直属の上司から、息子の辞めた理由や、何か悩んでいたことなど訊き出そうとしたが、会社の人間は何ひとつとして雄一に関するトラブルはなかったと云いきる。ただ、ひとり、社員通用口の警備員が、雄一の退社を待ち伏せしているようなサングラスの女を目撃していた。雄一は元来、女性関係には疎いほうで、そんな交際しているような女性は同僚も見ることがないと云う。

結局、横浜の雄一の行きつけのところを当たってみたが、手がかりは何ひとつとして見つからなかった。

雄一が消えてから一週間後の東奥日報の朝刊三面にこんな記事が載っていた。

「西海岸の七里長浜に、不審なゴムボートが漂着しているのを通りかかった漁師が発見し、最寄りの駐在所に通報した。警察がゴムボートの中を捜索したところ、無線機と思われる機材と、ハングル文字で書かれた食糧の一部を発見した。近年、市浦村から岩崎村にかけての日本海側の海岸で、こうした不審な漂着物が後を絶たないので、地元の警察は海岸の警備を厳重にするとともに、押収した機材の分析を急いでいる」

第294話 垂れ流し

水に流すという日本語はわれわれの生活に定着してしまっている。川と雨の多い、海に四方を囲まれている日本は、自然の浄化能力が高く、すべて水に流れて綺麗になるのだ。昔からのそうした生活スタイルが、琵琶湖では違った。湖沼では生活排水の垂れ流しでは自浄能力はないのだ。

海に異変が起こっている。それは突然起こるのではなく、知らず知らずのうちに汚染されていって、生態系も狂ってきていた。わたしが子供のときは、青森港の岸壁で潜れば鮑や蟹が捕れた。野内辺りでも、磯にびっしりとむらさき海胆が岩に敷き詰められて、足をよく刺したものだ。海胆など見向きもしないほど、その辺にいくらでもあった。それが、どうだろう、いまは、海胆の姿も赤血と呼ばれる貝の姿も殆ど見られなくなってしまった。海草も疎らにしか見えなくなった。海底も砂漠化していつている。それが、海の底のことで、目につかないから、普段はなんとも思わないだけなのだ。

出口さんの家は、平均的な核家族で、サラリーマンの主人と、専業主婦の妻、それに中学と小学生の娘息子がいる四人家族だった。三年前に新築の住宅を郊外の団地買った。

日曜日の午前中は大掃除の日だった。家族で手分けして普段、掃除のしていないところを綺麗にする。テレビのコーナーを通り、何故か風呂掃除は主人がする。

「こすらなくていいんだそうさ」と、さっそくCMにある泡を吹きかける洗剤を吹き付けた。ついでに、洗濯も、糸洗いには、専用の洗剤を、汚れ落としにハイターをと、何回も洗濯しなければならない。

妻は妻で、台所の徹底的掃除。普段、ただ洗っている茶碗などのしぼを取るために、漂白剤に浸けた。その「混ぜるな危険」の劇薬をシンクの排水口にどっと捨てた。捨てた排水がどこへ行くのかは知らない。捨ててしまえば、ゴミだって、もう、うちには関係のない話だ。その処理されている先が、一般市民にはブラックボックスになっている。家が綺麗になれば、あとは野となれ山となれ。

中学の娘には庭の除草剤散布を頼んだ。青い液体で、希釈して如雨露で撒くのだが、それが暫くはすごい化学薬品臭い匂いがする。雑草だけでなく、これでは匂いを吸った人間まで死ぬような猛毒の匂いだ。吐き気がしてくるから、娘はマスクまでしてやっていた。その薬品もきつと雨が降れば一緒に排水溝へと流れて「どこか」へ行ってしまふのだ。

部屋が匂いするからファブリーダ。一度使えばやめられない。人間は習慣化すると、それをしないと気持ち悪くなるようだ。空気中に消えてなくなるのも、実は消えるのではない。質量保存の法則では、姿形を変えて、消えるということはない。われわれの口や鼻から入って、液体に溶けこんだりしているのだ。空中を漂うのに、蚊取りマット、液体殺

虫剤がある。トイレには芳香剤、虫除けの猛毒も天井から吊している。虫だけ殺し、人間には害がない。その害が微量だから、大丈夫ということだ。どこのメーカーも太鼓判を押す。その微量同士が、部屋のあちこちで匂いを放ち、「混ぜるな危険」とは表示していないが、部屋の中で、確かに混ざり合っていた。いままで、それを空中で混合させるとどうなるかという実験を誰もやっていなかった。特に夏場が大変だった。暑いから窓は閉め切り、最近の家は断熱効果で気密性に優れているから換気が悪い。エアコンも普及したが、それもダニ除去の薬品を部屋中に散布している。

娘がエアコンを切って、締め切ったままの自分の部屋に夕方帰ってきたときに、それは起こった。部屋に入るなり、息ができない。急に眩暈がしたと思うと、その場に意識を失って倒れ込んだ。母親が物音に気付いて、二階の娘の部屋に行くと、自分も眩暈がした。ガス中毒かと、窓を開けた。そして、救急車を呼んだ。

その事故は、あちこちで同時多発的に起こった。保健所で調べても判らない。原因不明として処理されようとしていたが、どうも光化学スモッグに似ているということで、政府が調査に乗り出した。ある一定の温度と湿度、そして、七種類の薬品をそれぞれ部屋の中に適量散布したところに、モルモットになどを閉じこめておくと、インコは死んだ。ハツカネズミも暫くして死んだ。モルモットは弱っていった。

みんな、少しだから、少しだからと、使う必要もないものをあちこちで使わせて、工場で生産された劇薬を薄めたものをどんどん消費していた。オゾン層を破壊するフロンガスなども一般家庭から出されるのだ。一般家庭という地上のごく小さな単位も集まれば巨大になる。小さなスプレーがどんな自然災害を起こすか。それは、スプレーだけでなく、化粧品にしても、車の薬剤にしても、体に吸収されずに排泄される薬品もみな、「どこか」へ行くのだ。

最近、野鳥や昆虫の姿をとんと見かけなくなってきた。そればかりではない。急激に魚が捕れなくなってきたのだ。貝は死滅し、海草も後退した。海はどろどろした死の海になっていた。それと同時に進行して、野山の植物や樹木も原因不明の病気で枯れてきていた。作物も不作が続いた。この過酷な環境下でかろうじて生きているのはいまやゴキブリと並んで環境適応力のある人間だけだった。

科学者たちは、この非常事態が、化学薬品を使いすぎた転換点だと警告した。国連の対策本部では、各国の公害の専門家を呼んで、日々討議がなされていた。

「わたくしにいい提案があります」と、アメリカの学者が発言した。「いまや、地球は腎不全に陥っている状態です。それこそ、巨大な人工透析をしなければなりません。そこで、わたくしの開発したこの薬品を散布すれば、空中のすべての化学薬品を中和いたします」

それを聞いていた政府の代表はうんざりして、

「また、薬品か」

第295話 交通事故撲滅国家

世界でただひとつ、交通事故のない国があるという。それは、始めから車のない島国の話ではない。人口二千万、自動車保有台数も五百万台というから、国民の四人に一人は車を持っている、近代国家のF国での話なのだ。それで、この一年間に交通事故はゼロを誇っている。どうしてそんなことができるのかと、各国から視察団の申し込みがあとを絶たないが、クーデターで、軍が国政を掌握してからは、各国ともに国交を断絶したままだったので、なかなかF国に入ることは難しい。難しいとなると、どんな政策を講じて交通事故を撲滅したのか、いよいよ知りたいところだった。

親F国の作家として名高い無国籍のハミルトン氏は、なんとか単身、取材のために隣国の国境を越えられた。元陸軍大将で、いまは大統領になっているカスタネダ将軍が、ハミルトンのファンだったことで、入国許可が即日降りた。

国境の町から空軍のヘリでハミルトン氏は大統領官邸までひとつ飛びでやってきた。かつての王制国家だったころの宮殿が大統領官邸になっていて、広い庭園に噴水のある池と、白い御殿が空の上から眩しく見えた。ヘリは、官邸の庭のヘリポートに降り立った。大統領の親衛隊が一行にささげ銃をして、歓迎の意を表した。ヘリから官邸までの歩道には赤い絨毯まで敷かれていた。国賓としての最高の扱いを受けるしるしだった。

大統領はハミルトン氏を抱きしめるようにして歓待した。

「さっそくですが、あなたの著書にサインをお願いしたい」と、大統領は新刊を差し出した。

「結末が、早く読みたくて、閣議が二時間遅れましたよ」と、笑った。顎鬚に長身で優しそうな目をしている。ハミルトン氏のほうが五十後半で、大統領よりは少し年下だが、風貌は逆だった。ハミルトン氏の方が地味な感じがした。

「大統領閣下、一小説家にこんな歓待は、国家予算の無駄だと思いますが...」

ハミルトン氏は恐縮して云った。

「わしは軍人でありながら、どうも政治家や軍人が好きになれんで、あなたのような文人が好きなんですな」

歓迎レセプションから、昼食会まで催され、外交宣伝に使うつもりか、派手な歓迎ぶりを見せ付けていた。

「ところで、今回お伺いしたのは、交通事故ゼロの国として、どんな政策をなさっているのか、ぜひとも拝見したいと思ひまして」

「それはお安い御用です。のちほど、交通大臣からシステムを説明させましょう。わが国は、十年前まで、交通事故が人口比からして多すぎました。年間の交通禍による死者が三万人を数えておりました。これは、実に日本の二十倍にあたる数字ですな。この国では、癌で死ぬより車に跳ねられる確率のほうが高かったのです。まあ、詳しい話は大臣からさせましょう。どうぞ、ごゆっくりと滞在されてください」

ハミルトン氏は、食事の後に、交通大臣と黒塗りのロールスロイスで首都を見回ることになった。

「道路が広いというわけでもないんですね」ハミルトン氏は以前、来たときとなんら変わらない街を見渡していた。車も少なくない。渋滞こそしていないが、三車線の道路は前も後ろも車でいっぱいだ。

「さすが、みなさん安全運転ですね。時速四十キロですか。ゆっくりと走っていますね」

「そうです」と、大臣は道路交通法の説明をし出した。

「わが国では、交通違反は一発で免許取り消しですからな。どこかの国のように五年間の失効とかいう生ぬるいものではなく、違反者はもう二度と免許を取ることはできなくなります。そして、問題になっている飲酒運転ですが、それが見つかったら、逮捕どころではありません。わが国では死刑なのです」ハミルトン氏は目を見張った。

「それは、厳しいですね」

そうしてみると、きちんとマナーを心得ているドライバーが多く、割り込みもしないし、ちゃんと譲り合いもしている。何か、みんな緊張して運転しているような顔に見えた。

「気の弱い人は運転はできません。みんな命がけで運転していますからな。はははは」

ちょっとのミスも許されない。ゆったりと車間距離をとっている。余裕の運転をして、苛々は禁物だった。

「歩行者の飛び出しとかもないのですか」

「ありませんな。歩行者も決められた部分しか歩けないことになっております。そのルールを破って、横断してはいけないところを横切ろうとする勇気のある者は、この国にはいないでしょう」

見ると、歩道を歩行者も緊張して歩いている様子が伺える。みんな整列して、決められた歩道より歩いていない。そして、車道と歩道の間には鉄条網が張り巡らされていた。

「あの、鉄条網は、車除けですか、それとも子供たちが飛び出さないためですか」

「ああ、どちらにも警戒してもらうために設けております。触れるな危険と書かれているでしょう。あの鉄条網には二万ボルトの電流が流してあります。触れると即死ですな」

ハミルトン氏はあぐりと口を開けたまま、言葉が続かない。

「それだけではありません。決められた歩道以外の場所にはすべて地雷が埋めてあります。車も人も、ルール無視した人はドッカーン。一卷の終わりですな」

ハミルトン氏は車に乗っていて、ひどい恐怖を感じていた。

「そこまでやらねば交通事故はなくなるんですな」ハミルトン氏の声は震えていた。「でも、それだけでも無謀な運転をする者もおります。そこで、わが国では、さらに、すべての車の周りにプラスチック爆弾を内臓しています。接触事故くらいと思うでしょうが、もし、この車が前の車と追突事故でも起こしてごらん下さい。半径五メートルは吹き飛びます。あなたも、わたしも運転手も、勿論この車もバラバラに飛び散るでしょうな」

どうりで車間距離をかなりとってみんな運転していると思った。

「違反して逃走した車両は、街角に設置してあるコンピュータ監視の対戦車ミサイルが追撃することになっております。わが国に暴走族はおりません。それでも車に乗りたいたいのがいるのが不思議ですな。はははは」

ここまでして交通事故がゼロになるのなら、いや、とんでもないことだ。ハミルトン氏は首を横に振り続けた。これじゃ、車でぶつかって死んだほうがまだ、と。

第296話 神前離婚

成田離婚という言葉が流行語になったのはだいぶ前のことになる。いまや、十組に一組が二組になり、離婚率も高くなって、子供たちのクラスでも突然姓の変わる子供が多くなってきた。近所に子供のいる若いお母さんが、急に住むことになって、そこの娘だと知り、随分長い里帰りだなと思うと、出戻りだったりする。友人知人親戚を見回しても、実に離婚が多くなってきたのに驚かされる。

高村弘幸と南沙智子は、見合いして、結婚まで漕ぎ着けることとなった。それも、周りがはしゃぎすぎて、家同士にも問題がなく、両家が本人同士より仲良くなり過ぎて、両方の親が乗り気になってしまった。取り持った会社の上役の奥さんの顔も立てねばならないと、本人同士そっちのけで、ゴールインに向けてすでに走りだしていた。どちらかという、弘幸も沙智子も周囲に流されやすい主体性のない性格で、はっきりとものを云えない煮え切らない態度をとるので、その分、周囲がリードしてやらねばならなかった。見合いだつて、本人がいいともなんとも云っていないのに、「いい人じゃないの、ね、決めちゃいなさいよ。こんな相手は滅多にいないわよ」

「そうよ、これを逃すともうチャンスはないわ。あんたも三十五だしね」
返事は当人より、親同士の快諾となった。うんともすんとも云わないで、ただ、二人ともぐずぐずしているから、あれよあれよというまにそういうことになっていった。

ところが、二人とも似た性格というのはうまくゆかない。互いにはっきりしないから、最初から「こいつ、何を考えているんだ」と、信頼関係は生まれぬ。式の日取りまで決まり、楽しいはずの準備の期間も、二人は距離を置いて交際していた。初めから、合わない相手はいるもので、結婚前は両眼を開いてよく見るとはいうが、見れば見るほど嫌になる。たとえば、弘幸の食べ方が沙智子は気になって仕方ない。ぺちゃぺちゃ音を立てて食べる下品な食べ方。どうしても許せないというのがある。弘幸も、沙智子の首を振りながら喋る癖が気になって仕方ない。最初の躓きが、一生曳いて回るものだ。それぐらい結婚したら片目瞑ってと思えども、嫌いな癖はどうしても相容れない。

二人はよく口論するようになった。
「わたしは文金高島田なんて嫌なの。あっさりとうエディングドレスでしたいの」
「そうは云っても、うちじゃ代々紋付き羽織袴と決まっているんだ。ぼくに合わせてもらわねば」
から始まって、
「新婚旅行がどうして中国なの。わたしは中華料理食べたくないの。もっとロマンチックにヨーロッパに行くべきよ」
「猫も杓子もヨーロッパだ。中国四千年の歴史をシルクロードの彼方まで探しにゆくことこそロマンではないか」
とか、

「将来、子供ができれば、仕事をやめろですって、古いわね、女が育児をする時代は終わったのよ」
「なんだと、それじゃ、ぼくが育児休暇を会社に出せっていつのか」
というように、すべてが平行線の二人だった。ただ、本人たちは云い合いしても、破談までは周囲には云えない。周りが騒ぎすぎ、喜びすぎていたから、なおさら云い出せないでいた。婚姻届まで周囲が世話をやいて出してきた。すべて、周りだけが動いていた。

そうこうするうちに、いよいよ結婚式の当日となった。そのときにはすでに二人は口も利かない、冷戦状態に突入していた。こんなめでたい佳き日ににこにこ笑っている親戚家族の中で、二人だけがぶすっとむくれていた。最悪の状態ですべてで式に出向くこととなった。

式場に附属するチャペルに親族が参列していた。司祭さんが別々の方向を向いているご両名に聖書を掲げながら誓いの言葉を求めた。

「あなた方は、これからも愛し合い、助け合うことを誓いますか」

二人とも口を揃えてきっぱりと云った。

「誓いません！」

礼拝堂はざわざわと澁んだ。司祭さんも困り果てて、その後が続かない。

「わたしたち、いまここで離婚することを誓います」

「そ、それでは、今後、愛することもなく、二度と逢わないことを誓いますか」

「はい、誓います」

結婚式が離婚式になってしまった。

世は高速ブロードバンド時代だ。なんでも早ければいいものじゃないが、いまや神前離婚も古くなりつつあった。なんといっても一番早いのは市役所離婚だ。

腕組んで、熱々の二人が、婚姻届を出すために市役所の市民課を訪れていた。周りがちらちら見るほどべたべたしたカップルだ。

「ねえ、本籍って何？」

可愛いだけで何も知らない花嫁は云った。それがよくて結婚しようとした花婿は、ギクリとした。

「君は本籍も知らないのかい」

「いま、住んでいる住所は知っているけど...」

「仕方ないなあ、ケイタイでお母さんに聞いてみるよ」

「あれ、お父さんの名前、どう書くんだっけ」

「き、君は、父親の名前も知らないのか」

いまや、あまりの無知に花婿は笑いも醒めて怒りで震えていた。

「あんたの名前、タカシってそういう字書くの」

「何？ 結婚相手の名前も知らないで一緒になろうとしたのか」

ともかくも、恥ずかしいので、花婿は躊躇っていたが、婚姻届を出した。

「君は、高校くらいは出ているんだろう。どうして、自分の住所を漢字で書けないの。平仮名で書いて恥をかいたじゃないか」

花婿は花嫁を詰った。すると、プライドは高い花嫁は、わっと泣いて、

「ひどいわ、タカシったら、わたしがバカだっていたいんでしょう」

「そうは云っていないが、いままで気が付かなかったよ。あまりにもひどいから」

「だったら、別の女子大を出た人と結婚したらいいでしょ。わたし、漢字も英語も知らないし、不良してたから、勉強してなかったもん」

「そんなこと、どうしてもっと早く云ってくれなかったんだ」

「わたしたち、うまく行かないみたい。別れましょう」

そうして、ものの五分としないうちに、離婚届を二人は出した。

「あれ？ たったいま婚姻届を出された人じゃありませんか」

窓口の職員も呆れていた。五分で離婚はギネスブックものかもしれないが...

第297話 恍惚と不安

太宰治は書いた。「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」と。大地主の家に生まれ、戦後、農地解放で斜陽族となったことと、戦争の背景もあり、そんな精神的不安定を書いた。

太宰治は嫌いな作家のひとりで、女の腐ったのというと、女性蔑視と云われるかもしれないが、人間の弱さを売り物にするなぞ、ナルシストも鼻につく。わたしの姉は大学の卒論で太宰を取り上げ、津軽の舞台を検証しながら歩いてゆく旅をもち、桜桃忌にも三鷹の寺に参列するほどのファンだったが、嫁に行つて、いろんな苦しい現実を舐めてからは

、太宰の批判をするようになった。

一あんな作家の本は読むものじゃない。なんのためにもならない。貧乏して、子供三人片親で育てているおまえのほうが余程偉いよ。

と、逆に罵るのだった。

生活感のない母親、父親が多くなった。生活を恥部とみる作家もいて、絶対に私生活を書かない作家もいる。ダンディと云われるほど、その傾向が強い。女性も結婚して大きい子供がいるのに、額に菜っぱを付けているわけでもなく、とても家事をしている格好が想像できないおしゃれな人もいる。そういう人種は、絶対に市場でサンマを値切ったりしないのだ。まして、売り出しで先着何名様に並んだりする屈辱的なことはしない。太宰もそんなところがある割りにだらしなく芥川賞をねだったりしていた。その作品の時代背景では、何百万という人が戦死し、飢えで苦しみ、あるいは病気で死んでいったことが微塵も感じられない。特権階級がどう道化をしても結果、墮落に逃げたとしか云えない。

姉は、太宰の親戚から卒論で取材していたとき、たまたま太宰の青森中学時代の英語のノートを譲り受けた。それを嫁に行くとき、宝物として持って行ったが、わたしが家業の破産で、無一物から古本屋を開業するまでになったとき、その開店記念として送ってきた。「おまえの好きなように使ったらいい」と。それには古い大学ノートの表紙に津島修治と筆で書かれていた。

蔵書売って、なんとか喰っていつていたが、日銭が入るのはいいとしても楽ではなかった。そのうち、夜の勤めに出ていた妻が帰らなくなってしまった。子供三人と、古本屋と、猫だけが残されていた。

商売はようやく軌道に乗り、蓄えもできたので思い切って家を建てることにした。わたしも四十を過ぎて後がない。そして、東京の姉のところに住むところもなく、行っていた老父母を呼び戻すことにした。狭い賃貸マンションの生活から、一軒家に住むことになって、親父は、これで安心して死ぬると喜んでくれた。

それから、わたしに家のローンと老父母の面倒と、子供三人を育て、家事もしながら古本屋に通う生活が重くのしかかることとなった。心臓の持病のある母は、いつも寝たり起きたりで、料理一切ができなかった。台所はわたしの仕事だった。朝、起きると朝ご飯と晩ご飯を一緒に作った。店は通いで、夜十時までである。家に帰ると十一時だ。朝のうちにこしらえて、冷蔵庫へ入れておいた。中学の長男の弁当を作り、小学生の弟たちを送り出し、それから掃除洗濯してから仕事にでかける毎日が続いた。慣れてしまえばそれも日常だ。

それから十年。子供三人はみんな社会人になって、関東方面に就職した。すべて月日が解決してくれるように、成るように成るものと少し人生を悔っていた。ところが、ひとつ終わるとまたひとつと、そうそう、人間苦は終わらせてくれない。この不況で、商売がおもわしくない。うちだけではなく、どこもここも悲鳴が聞こえる。また、以前のように切りつめた生活を強いられる。

それと、親父が八十五になって、惚けてきていた。もともと、我が家は惚ける家系で、代々そうだった。親父は惚けて、お心くる寝たきり。そして、その面倒は誰がみる。子育てが終わったと思ったら、今度は老人の介護問題が持ち上がってきた。毎日、老父母を車で病院に連れてゆく。帰りまでは面倒見れないから、バスかタクシーで帰ってもらった。

ちょうどそんな折りに、店に額装して飾ってあった太宰の帳面を、金木町の教育委員会の太宰会の代表が目をつけて、是非売ってもらいたいと申し出ている。

「それは、売り物ではないから」と、断っていたが、たまたま、太宰の生家の斜陽館が、町営で管理することとなり、修復して、一般開放することになり、その展示品がすべてコピーで本物が一点もないので、なんとか譲ってほしいと云うのだ。それを売れば、少しは生活の足しにはなるだろう。苦しいときに、太宰のノートが目の前にあった。だが、わたしは嫌いな太宰で飯を喰うことになると、批判ができない。随分格好つけたものだが、あっさりと町に寄贈してしまった。猫に小判だし、こんな古本屋の壁にかけてあっても誰も気付かない。

斜陽館リフレッシュオープンときは、来賓として招待まで受けた。町長からお礼と記念品を戴き、太宰の娘の園子女史とお心くるの仲間だったこともあり、話す機会も得た。その席で、いろんな人の話を聞いて驚いたが、つい昨日までは、太宰治は、町の恥さらしだったのだ。いまは市民権を得たが、津軽弁で云うところの「業晒し（ごじゃらし）」だったというのだ。兄貴、親父は立派な人だが、と比較されて、いまでもよく思っていない町の老人が多いのだ。

それ見ると、わたしは勝ち誇ったように自分の考えを思い直した。昼からの酒で、わたしは少し酔って金木町の芦野公園を歩いていた。まだ桜には早かった。池にかかる橋のたもとに太宰の文学碑が建っている。わたしは、その文字が嫌いだったから、敢えて見ることもしないで、橋の上に立っていた。いまのわたしなら、こう書きたい。

一両親の恍惚と借金不安と二つわれにあり。

第298話 鎖国

アメリカとイラクの戦争がまた始まった。自衛隊を出すことで国会でまたもめたが、派遣することとなった。ところが、以前のような湾岸戦争では済まなかった。今度はアルカイダのテロの報復付きだった。アメリカに荷担した国では、どこもテロの報復が始まった。東京でもロンドンでも、都心部で大爆発が起こり、数百名の生命が犠牲になった。そればかりではなかった。派遣された自衛隊の艦船がミサイル攻撃で沈没されると、いよいよ戦死者が多数出ることとなった。小島内閣は苦境に立たされていた。国民、マスコミからも批判が出はじめた。これは、単に対岸の火ではなく、わが国も宣戦布告をされて、実際の戦争に巻き込まれていた事実をまざまざと見せつけられたことだ。

その戦争は、イスラム諸国を巻き込んで、一月で終わるというアメリカのシナリオ通りには行かなかった。全イスラムを敵に回しての第三次世界大戦まで発展するような様相を呈してきていた。

アラブ諸国からの石油の供給はストップした。その戦争が長引いたので、第二次石油ショックが起こり、経済の受ける打撃は多大なものがあつた。すでに石油備蓄も使い果たし、日本は脱石油のクリーンで安全なエネルギーへの転換が急激に行われていった。誰かが尻に火を付けなければ走り出さないこともある。太陽エネルギーと風力、波力、地熱と、わが国の自然の利点を得たエネルギーと、水素、電気自動車の急速な切り替えで、石油依存率が極端に落ちた。

世界を巻き込んだ戦争は、為替にも影響を与え、円は弱くなりすぎた。貿易が不安定なので、どこの輸出入業者も大きく数字が狂って倒産が続出した。日本経済ががたがたなときに、アメリカからは尚も戦費を支払うよう、圧力はかけられる、物資援助の代わりに農産物を押しつけてくる。農業団体からゼネストに近い反対も受けた。貿易の自由化で、農業はがたがたにされて、その上、すっかり潰そうとしている。食糧自給率が下がったところに、戦争によるしわ寄せで、食材に不足を生じることとなった。国内の蓄えでも全国民の腹を満たすことはできなくなった。しかも、倒産破産、失業の増大で、内憂外患の状態にありながら、内閣は無策に等しい。怒った国民は、取付騒ぎ、打ち壊しと一揆まがいの行動に出た。アメリカを始め各国からは外圧も酷く、もう二進も三進もゆかなくなつたところで、小島首相は爆発した。

「うるさい、わが国はこうなつたら、江戸時代に戻る。鎖国する」

首相閣僚はみんなすねて各国に宣言した。

すべての国際空港と港が閉鎖された。国外にいる大使館も引き揚げ、仕事や留学で海外へ行っているものの帰国ラッシュとなった。対外資産の引き揚げも始まった。それに至るまで、実は政府のほうでも鎖国の準備を進めていた。倒産したゴルフ場が多かつたので、それを芋畑にしたり、家庭菜園を促進したり、休耕地を耕すために、失業者を農業従事者に向けたりして、食糧自給率を百パーセント近くにした。洋風の食事が一挙に和風に戻つた。肉食はめっきりと減つた。昔の食事は健康にいい。成人病の予防にもなる。

内需だけで経済を動かすから、いままで輸入していたものはすべて国内で生産しなければならない。いままで、東南アジアや中国に作らせ、輸入していたものが、また昔のように下町の工場で製造することになり、内需景気に中小企業は湧いた。いままで、国内の下請けをやめて、アジアに部品を作らせていた大手企業もまた国産に切り替えた。一挙に失業率も改善して、逆に人手不足となった。鉄鋼も繊維も、火の消えたようになっていた不況の街にまた活気が戻り、閉鎖していた工場も煙を上げてフル操業するようになった。リサイクルも徹底されると、いまあるものを活用して、新しいものに作り替える技術が定着すると、新たな原料を輸入しなくとも、国内の物資ですべて賄えるようになった。それほどモノが溢れて処分困っていたのが、廃物利用にもなり、悩みの種の産業廃棄物問題も解決した。いままでは、壊して作る、スクラップアンドビルドの無駄の繰り返しが、これからはできない。みんな長く使うよう、工夫し持たせることを考えた。

日本は少子化で、人口も減りつつあり、いままでの規模の生活基盤も必要がなくなつていた。外国の情報だけはインターネットで入ってくるから、情報の鎖国はできないが、どうしても海外との窓口はひとつは必要だということで、また長崎に出島を儲けることとなった。その港だけは唯一の入国できる玄関となったが、物資はやはりすべて輸入禁止は変わりはない。

日本は国連も離脱し、安保も解消した。もう、放っておいてくれと、国を挙げての引きこもりをしたのだ。小島首

相は、ぶんぶん怒りながら、

「こんな現代を、吉田松陰と勝海舟が見たら、やはり鎖国政策を採つただろうな。いままでが、あまりに酷すぎた。このままでは東南アジアと中国にわが国の経済はやられてしまう。そして、それに乗じてアメリカに乗っ取られておしまいだ。貿易は国を滅ぼすとはこのことだ。今度は、黒船が来ても門戸は開けんぞ」

経済摩擦から国際紛争、果ては戦争への負担と、国際化社会は金と危険がいっぱいだ。江戸時代の永い平和を取り戻そうと、小鼠は国会で登壇した。一同啞然とその首相の姿を見て息を呑んだ。なんと、小鼠、かみしもに袴、髪はちょんまげ。

第299話 全自動役場

A市は税金が極端に安い。何から何までハイテクが行き届いた未来型の都市を完成させたのだ。快適な環境で、低コストの都市機能を実現させた。何故そのようなことができるのか。取材のために、A市に週刊木曜日の社会部から取材班が車で訪れていた。

道路の造りからして違う。緑も多く、高層住宅も未来を予感させる形で建っていた。コンパクトシティを設計図通りに街全体を改造して十年。郊外へと延びていた都市が、半径五百メートルの円の中に入ってしまうほどに中心部へと集約させた。それによって、ドーナツ化現象はなくなる。都市の広がり管理する範囲が広がって整備費用もかかったのが、極端に少なくて済む。少子化で、教室ががら空きになったのが、集中することで、学校を整理統合することができる。そうすると、ショッピングセンターも商店も、公民館も病院もすべてが、生活者の身近に常にあることになる。歩いてゆける範囲にすべてがあるから、車での移動は必要がない。足の悪い年寄り、肢体不自由な人のためには動く歩道、エレベーターが整備されており、バリアフリーも行き届いていた。人口二十万の都市を三十階建の高層ビル二十に納めてしまった。すると、熱効率も、電気代などのランニングコストも、分散型より非常によくする。

週刊木曜日の記者たちが、車で街に侵入したとたん、カーナビに進路を指示する命令が入った。一ようこそ、A市へ。そのまま直進してください。二本目の信号を左に折れると、駐車場のサインが見えます。そこからは、矢印のサインに従ってお進みください。

記者がつい、赤信号で、交差点を過ぎようとする時、突然ライトが追いかけてきた。一停車してください。あなたは信号無視の交通違反です。ライトの方角に免許証を掲げてください。よろしい。すべて証拠の写真とともにあなたのもとに違反切符が送られます。

どうやら、警察官はいないようだ。すべてコンピュータが監視して、データ処理して、完全に逃げられないようになっている。

車は指定の駐車場に停められた。そこは市役所の地下になっているらしい。中央のビルが行政、司法、学校とすべての中枢機能を持っているようだ。記者たちは、ぞろぞろと、そのビルに入ってゆく。建物の中とは思えないグリーンが多く、外気と外光を感ずる。閉塞感がないようビルの中にも公園がある。

一行は小学校に入ってゆく。二時間目の授業中だった。学校には事務員も先生もいないのだ。管理人が数名いるだけだ。教室を覗くと、三年生の算数をやっていた。黒板がない。大きなモニターがある。その中に先生の映像が算数の問題をモニターに出していた。児童の名前が入力されているから当てることができる。答えの音声はすべて記録保存され、授業態度や正解率も個々にデータベース化されている。机もそのままモニターになっていて、ノートも教科書もない。児童はモニターに向かってペン入力するだけ。そのデータがすべてPDAに無線ランで繋がれていて、ノートと教科書代わりに家に持って帰り、復習、予習ができる。ランドセルはいらない。ポケットに入るPDAの中に全教科のノートと教科書、辞書が入っている。コンピュータの先生が個々の質問にも答えられるような音声認識の授業ソフトが開発されていた。

次に、市民病院に記者たちが入った。看護師が数名いるだけで、医師がいない。医療事務、薬剤調合もすべて自動化されて無人だ。検査、治療の自動化も進んでいる。患者はベルトコンベアに乗るだけで、いろんな機械の中を通過して

、最後に薬が処方される。血液、尿、心電図、レントゲン、血圧すべてが全自動。

市役所に入ると、市民の姿は目につくが、職員がみあたらない。銀行のATMがずらりと並んでいるような窓口だ。案内嬢もモニターに美人が映って、機械相手に話すようになっている。却って、何も知らない新人よりは詳しいし、親切だ。機械アレルギーで、ボタン操作やタッチパネルが好きではない年寄りのためには、言葉で命令できる。印鑑証明一通と云い、磁気カードを入れれば、あとはすべて機械がやってくれる。暗誦番号の代わりに指紋照合して本人の確認もする。

「すごいなあ、最先端のすべての機械が揃っている。みんな支払いはすべて顔を認識するカードで済むんだ。これでは偽造も盗難もできないし、小銭も持って歩く必要もない」

記者たちは驚いていた。ビルの内部が年中、花が咲いている春のような陽気だし、外に出る必要もなく、すべてのビルが連結している。雨も雪も関係なく、天候に左右されることなく、スポーツもできるし、観戦もできる。

「残るは市議会だな。最上階に議事堂があるから覗いてみよう」

折しも議会開催中で、市民も傍聴できるように開かれている。ところが、広い議事堂には議員の姿は見えない。あるのは、ロボットのような、小型コンピュータ内蔵の端末だけだった。それが、ずらりと席についている。市民の声は、そのまま地区別の端末ロボットが代弁することになっている。それを中央の巨大なホストコンピュータが集計して、利害関係を調整し、折衷案をはじき出して、端末ロボットに返している。

「市長は一体どこにいるんだ。是非インタビューしたいんだが」と、記者のひとりが、案内ロボットに訊くと、

「市長ハ、アスコニオリマス。アノ巨大ナホストコンピュータガ市長ナノデス」

議員も市長もロボットだった。それなら、賄賂を貰うこともしないだろうし、党派を超えて、本当に必要な要望を短時間で計算することもできる。人間の感情も入らないから、一番みんなのいい政策を試算することが可能だ。

取材が終わり、帰ろうとして、駐車場までの経路を探していると、天井のモニター嬢が微笑みながら、

「お帰りは右のエレベーターでございます。地下三階のR7までお進みください」

映像に映し出されている美人はCGで動いているリアルなアニメだ。本物の人間ではない。声も機械が出している。記者たちは思った。われわれはロボットに命じられるままに動いているだけなのだ。この街は完全にコンピュータに支配されている。

第300話 一発逆転

そろそろ年末ジャンボの話題が巷を賑わせる頃となった。この不況下で、ボーナスが出せない社長さんが、従業員たちに宝くじを支給したり、年末の大きな手形の山を越えるのに、資金繰りができずに、案外、宝くじを買っている経営者が多かったりする。そうして、みんなオーラス役萬を狙ったり、九回裏サヨナラ満塁ホームで一発逆転を考えたりしていた。そこまで、追いつめられ、もう本当のところ、それしかないところまで来ていた。これは笑えない。切実であり、深刻な年の瀬だった。藁をも縋りたい気持ちで、宝くじ売場に並んでいる人々は、いまや単なる夢を買うのではなく、現実問題が人々に重くのしかかっていた。

失業中の親父さんがいた。このままでは、家のローンも払えず、マイホームを手放さなければならなくなる。ボーナスの出ないサラリーマン氏がいた。それで、子供たちにクリスマスとお年玉と思っていたのが、当てが外れた。みんな一挙に解決しようと、宝くじに望みを繋いでいた。いままでは、宝くじが当たったら、世界一周とか、外車を買うとか、途方もない夢を持っていたが、当節は死活問題を抱えての乾坤一擲、後がない。

その列の中に仲のいい女三人組がいた。咲子と深雪と美土里だった。三人は同じ商事会社に勤めるOLなのだが、それぞれが深刻な問題を抱えていた。年長の咲子は、来春、大学に行く息子を持っていたが、入学金などの蓄えはない。亭主がリストラで目下失職中で、生活費も苦しい現状だった。少し年下の深雪は、まだ子供は中学だったが、友人の保証人になったおかげでサラ金から多額の借金をして、多重債務者、そのことは亭主にも云えないでいた。まだ、独身の美土里は、来春結婚する相手がいるが、結婚資金がなかった。いい話ばかり相手に云ってきたツケが貯まって、いまさら

貧乏だとは話せない。ともかくも三人、連番でジャンボ宝くじを買ったが、いままでも当たったことはない。

その宝くじ売場の隣りに、貧しい身なりの老婆が、小さなテーブルを出して、宝くじらしきものを並べて売っていた。

「あれ、何かしら、新しい宝くじでもあるのかな」と、咲子が気付いて、老婆の前に立った。一枚千円とある。

「高いわね、怪しいんじゃないの」と、深雪が咲子の袖を引っばる。

「買ってゆきなさい。外れがないからの」と、老婆がちょこんと椅子に腰掛けて、寒そうに云った。

「空くじなしてのも胡散臭いわね」美土里も、相手にしないように、咲子の手を引いた。咲子だけは、その老婆が気になり、その場から動かなかった。

「ねえ、騙されたと思って一枚ずつ買ってみたい？」

咲子だけ乗り気だった。よく見ると、その宝くじには番号が印刷していない。ますます怪しい。

「おばあちゃん、これって、番号がないんだけど」とも咲子が訊くと、

「番号はいらないんだよ。みんな当たるんだから」と、老婆は不思議なことを云う。

「だって、いくら当たるか金額も書いていないじゃない」咲子は首を傾げる。

「何が当たるか楽しみな宝くじなんですよ。でも、必ず当たりますよ」

まるで、判じ物みたいだが、試しに買ってみようと、咲子に勧められ、三人が一枚ずつ購入した。通行人は誰も相手にしていない様子だった。

クリスマスイブの夜だった。美土里はフィアンセと二人きりで、クリスマスをやろうと、自分のマンションにスーパーから材料を買い込んできた。手料理を振る舞い、シャンパンで乾杯、ついでケーキも自家製と、朝から仕込みに忙しい。高級なハムを買ってきて、つまみ食いしながら、オードブルをこしらえていると、突然、美土里は吐き出した。具合が悪くなって、近くの病院に走った。食中毒という診断で、胃の洗浄まですることになった。かなり古いものを食べたことにされた。思い当たるものはハムよりない。そう云えば、賞味期間が新しい割りに妙な味がしたのを思い出した。彼氏も心配して、病院まで見舞いにきた。結局、楽しいはずのイブがすっかり台無しになってしまった。頭にきた美土里は、翌日、退院するや、大手ハムのメーカーにクレームの電話を入れた。ハム会社の部長がすっ飛んできた。冷蔵庫から、美土里は現物を出して、

「保健所に提出しようと思いましたが」と、怒って云うと、会社側は、

「どうか、ご勘弁ください。これは私共の見舞金として受け取ってください」と、分厚い封筒を差し出した。美土里はピンときた。いま、よく食品メーカーが叩かれている。この年末の量販期に、マスコミにでも出たら、かなりのダメージをくうことになる。ここは、口止めが一番だ。金で揉み消すつもりなのだ。封筒の中身は百万の束が三つも入っていた。「判りました。なかったことにしましょう」美土里は内心、これで結婚資金が出来たと喜んでいた。

その美土里が「当たった」話はあとの二人にも伝わった。やはり、あの宝くじは当たるのか。

深雪が、会社の帰りに、自宅の近くの団地を暗くなって歩いていると、突然、走ってきた男とぶつかった。深雪ははずみで歩道に倒れた。何かバッグのようなものを男は押し付けて、謝りもしないで走り去っていった。その後、もの凄いスピードで車が二台男の逃げた暗闇の方角へと走ってゆくのが見えた。

「何よ、ぶつかったのに、謝りもしないで。当たるって、このことだったの」

深雪は男の落としていったバッグを交番に届けようとしたが、まず、家に帰って晩ご飯も用意しなければならないから、それからしよう、家に持って帰った。

そのバッグには名前も何もないから、中を改めて見ることにした。なんと、中身は札束。五千万はありそうだ。震えがきた。咄嗟に、押入に隠した。あれは、落としたのではない、わたしに押しつけたようだった。何か訳のある金なのだ。暗がりでお互いの顔が見えないのだから、わたしだって判るわけがない。深雪はそう踏んだ。もし、犯罪絡みのヤバイ金だったらどうしようか。あれこれと考え回して、少し様子を見ることにした。

数日経ち、一月経っても五千万に関係した事件は新聞には出てこなかった。脱税か、横領か、麻薬の資金か、いずれにしても世間に出せない金なのだ。しめしめと、深雪はこれでサラ金に全額返済しても余りある。

咲子は、当たるなら、食中毒やチンピラに当たるなどご免だと、心待ちにしていた。一番の貪欲が咲子だった。当たるなら、一億円だ。それだけあれば、家のローンを全額払い、中古のアパートでも買って、アパート経営もいいかな、と胸算用していた。

クリスマスの夜、亭主と喧嘩した。働く意欲もなくぶらぶらしている亭主が酒びたりになって、家をふらりと出ると

、そのまま帰らぬ人となった。警察からの通報で、警察署に駆けつけると、霊安室に亭主の遺体が安置されていた。「どうして？」と、咲子は現実を否定し続けた。

「車に跳ねられて即死でした。かなり酩酊している様子だということです」

（おれが死ぬときは車に跳ねられてやる。そうしたらおまえたちに保険金が下りるだろう。いま、一番いい死に方は交通事故だろうな）

そう云っていた亭主の言葉が脳裏をよぎった。

—自殺？ それも考えたくない話だった。お金なんていない。もう、宝くじも買わない。だから、主人を返して。咲子はいつまでも泣きやまなかった。

数日して保険会社から人が来た。一億二千万が提示されていた。命の値段としては安かった。

第301話 パンの笛

人間の体はどこからどこまで精神に支配されて、どこからどこまで精神から解放されているのだろう。わたしは時折そんなことを考える。普段、われわれは呼吸を無意識にしている。それが、水泳やマラソンとなると、意識的に呼吸を調整している。実は、わたしの場合、この呼吸をスポーツに関係なく、普段から意識しすぎるのだった。呼吸だけではない。舌や頬の内側の粘膜も、義歯などを意識するのだ。そして炎症を引き起こす。腕時計を意識すると、腕の周りの皮膚が赤く爛れたりした。内臓も意識すれば、まるで自分の敏感な舌先みたいにくしくと病んだりした。そんな、異常とも取られる過敏な体だから、あの忌まわしい病気になったのだ。

そいつは突然にやってきた。それまでは、わたしは風邪も引かない、強健を自慢していたのだが、学生時代に鍛え上げた肉体は社会に出てからは少し衰えた。仕事は企画だったが、大きなイベントを前にして、いくつもの催事を抱えて、頭が混乱するほど毎日が企画書や手配、会議に業者との打ち合わせと、多忙を極めていた。丁度、六月の誕生日がくると、二十七になる年の蒸し暑い夜だった。わたしは疲れがどっと出て、少し眩暈を感じていた。みんなが、

「北村、顔が青いぞ、帰ったほうがいい」と、云うので、急に具合が悪くなり、それじゃ、お言葉に甘えて、と背広をとったときだった。つい、倒れそうになった。同僚が支えて、エレベーターで階下まで連れて行った。

「タクシーを呼ぼうか」

わたしはとても立ってられず、歩道にしゃがみこんで吐いた。こんな症状に始めてなった。生まれてこの方、眩暈もしたこともなく、具合が悪くなったことは一度もない。心臓が停止するのではないかと思うほど、心臓の鼓動が気になり始めた。しかも、弱く打っているような気がする。耳の奥で金属の笛が鳴っているようだ。手足が冷たくなって、血の気がないのか。すると、急に死の予感がぐんぐんと迫ってきた。嫌だ、死にたくない。おふくろは狭心症だった。祖母も心臓の持病がある。体質遺伝があってもおかしくない。わたしは、同僚に縋り付きながら、

「救急車...」と、弱い声を吐き出していた。

その夜から三日間、わたしは市内の病院に検査入院した。同僚が見舞いに文庫本を持ってきた。それが推理小説で、夢中で読んでいるときは例の症状が出ないのだ。

検査が終わると、医師が怒ったような顔で、わたしの病床へくると、

「あんた、恥ずかしくないのかね。みんな仕事仲間が働いているというときに」と、怒鳴り散らすのだ。わたしは何のことかさっぱり判らないまま、きょとんとしていると、

「どこも悪くないのに、他にベッドを待っている患者さんがいるんだ」

「それじゃ、何処も異常がなかったんですか」

わたしは叩き出されるようにして即刻退院させられた。気分が悪かった。どこも悪くないなら、そう云ってくればいいものを、まるで仮病で、サボタージュしているように思われては心外だ。

それからだ。わたしは得体の知れない病気といつも隣合わせをするようになった。いままでは

、一度もなかった症状が、それからは発作のように週に二・三回は起こるようになった。お風呂から貰った心臓の薬のニトログリセリンの舌下錠を常備薬として持ち歩くことになった。あるときは、具合が悪くなったとき、またタクシーで別の病院に行ったが、血圧が上が九十以下に下がっていた。下は四十。血圧も下がるということが判った。

会社でややこしい仕事をして、頭を使っているとよくその症状が出た。同僚が、気付けに呑んだらと、ウイスキーをコップに注いでくれた。それをストレートでぐいと呑むと不思議に症状が和らぐのが判った。それで、会社の引き出しにいつもポケット瓶を忍ばせておくようになった。それは二十五年経った今も常用している最良の薬だった。

そんなときに、ある大きな事故がテレビで中継されていた。羽田空港で旅客機が海に突っ込んだ。機長が心身症ということだった。そのとき、始めて心身症という病気のあることが世間に広まった。わたしは、医者にどこも悪くないと云われれば、医者不信に陥って、ドクターショッピングを繰り返していた。あちこちの病院を回り、とうとう、精神神経科の窓口に立った。その女医は精神病院の医師で、わたしにこうアドバイスした。

「何か、趣味はありませんか。五時には仕事を終えてください。週に一度は休みなさい」
その頃は、わたしは年中無休で、九時過ぎまで仕事だった。それを早めに切り上げることにした。麻雀とゴルフを覚えたのもその頃だった。いろんな本を買ってきて読んだ。自律神経失調症、心臓神経…。読書も忘我の薬だった。体調や心臓のことを考えないように、いつも鞆に三冊は文庫を持ち歩き、暇さえあれば本に逃げた。一日に十冊づつ読んでいた。休みの日にはその倍は読んだ。活字の世界に没頭しなければ、また死と向き合うことになる。一時も自分にそんな余裕を与えないようにすることだ。自室が本で埋まってゆく。のちに、それが古本屋の在庫になろうとは思ひもしなかった。

精神的な病気への理解はまだ日本では遅れているようで、検査結果がすべてだった。心理カウンセラーというのでも近年になって登場した。それまでは、どこも悪くないと叱られて追い返された。わたしは、病名を貰うために病院を趣味のように転々と回っていたが、ようやく、自分を理解してくれる医院に辿り着いた。心理クリニックの看板の前に立っていた。医師は、わたしのような患者を相手にしているので、わたしに質問のテストを書かせ、採点すると、強迫観念が強いと云い、完全主義を直して、少しズボラにすることを勧めた。そして、運動法や暗示法、イメージ法などを試みて、その症状が出たときの対処法を一時間やるのだ。薬や注射ではない。

「病気を嫌いと思わないことです。病気と仲良くなりなさい」と、ずっと長くつきあってゆく方法を教えてくれる。車の運転中に具合が悪くなったら、路肩に停めて、ビニールの袋で呼吸しなさい。軽い酸欠で頭の中をぼうっとさせる。そして、わたしに病名が与えられた。「パニック障害」―それは、あれから四半世紀経ったいまでも、わたしを苦しめるが、あのパンの笛が鳴ると、わたしは酒と本と創作に逃げる。酔うこと、読むこと、書くことがわたしの薬となっていた。

それが、後のわたしの人生設計を変えることにもなった。どこの医師も、同じことを云った。「大丈夫ですよ。死ぬことはありません。長生きしますから」
病院にかかったことのない人のほうが恐ろしい。わたしのよう、いつも病院に駆け込み、しょ

ちゅう検査を受けている者のほうが、自分の体調をいつも気にして健康管理に気配りしているから、長生きできるらしい。そう考えると気は楽になるが、それでも例の発作が起こると、地震のように体が震えて、一瞬、蛍光灯が揺れていないかを見たりする。地震ではなく、わたしの体が震えているのだ。

今日は来るなと思うときは、血圧が下がっている。具合が悪い。自分で発作の予兆が判るようになる。案の定、夕方になると、震えと眩暈、手足が冷たくなり、汗も出てくる。心臓が止まりそうな死の恐怖がつきまとう。わたしは、仕事を中断して、近くの医院に駆け込むのだが、またどこも悪くない、長生きしますと云われるのは判っているから、すごすごと戻ってくる。そして、デスクの下に隠しているブランデーを仕事中に気付けとしてぐいと呑む。すると、気分が一時的にでも直るのだ。医師は云う。酒に逃げたらアルコール依存症になりますよ。恐怖感を捨てる暗示をやりなさい。でなければ、外に出るのも怖くなる自閉症になる場合もあります。

わたしは自問自答していた。死ぬことがそんなに怖いのか、自分は人一倍気弱なのか。だらしがない。こんな弱い精神を引きずって一生、見えない病と同居して行かなければならないのか。どこか、精神と肉体のコントロール機能が破壊されている。不定愁訴はその叫びだった。

ある日、また、あのパンの笛が三半規管の奥から聞こえてきた。地震のように体全体が揺れている。つい、天井の蛍光灯を凝視めていた。揺れている。いや、とわたしは現実を否定する。わたしの体が心臓の動悸で揺れているのだ。激しく上下に揺れている。とうとう、わたしは上下に眩暈をするようになったか。電気が切れた。パソコンも消え、棚のものが降ってくる。書棚は倒れ、ガラス窓は割れ、天井が落ちてきた。女の悲鳴が聞こえた。それでもわたしは首を横に振り続けていた。

一いや、もう何もかも信じないぞ。とうとう幻覚まで見るようになったか。

ふらふらとよろめきながら、わたしは外へ出た。車があちこちへぶつかって炎上していた。ビルが傾き、何カ所かで火災が発生している。人々が陥没した道路の上を逃げまどう。

一これはすごいぞ、スペクタクルだ。こんな幻覚は初めてだ。とうとう、おれは狂ったか。

わたしはすでに自分自身の感じたもの、見るものの一切を病気のせいにして信じない。

やがて、街を呑みこむように、巨大な波の壁が押し寄せてきていた。

第302話 とりつく島

あなたって人はいつもこうなのよ。走ってから気がつくのよ。いままでもそうだったわ。結婚してこの方、いつも「しまった、しまった、しまった」のリフレイン。ああ、もう、聞き飽きたわ。どうして、走る前に考えないのかしら。うるさいわね。弁解無用よ。黙って人の話、聞きなさい。今日という今日は云わせてもらいますからね。本当にとんでもない人、こんな人と一緒になったわたしがバカだったけど、もう何もかも手遅れね。あなたは、いつも航海という後悔をしていたわ。それに付いてきたわたしは、あなたを信頼していればこそ。ところが、どう？ この先が見えないだの、判らないだの、ナビゲーターがしっかりしないから、とんでもないところに

連れてゆかれて、その先はどうなるのよ。あなたの人生って、いつも猪突猛進はいいけれど、突き当たりから引き返せないのよね。迷路を入ったら、もういつも行き詰まり、壁に当たってそれで終わり。振り返ったってもう遅いわよ。去年もおととしもそうだった。覚えている？ いいえ、覚えているわけがない。あなたにとって、そのときは見えていないのよ。いま、自分がどんな状況に立たされているか、よく理解していないで、夢みたいに前ばかりみてきた。因果応報よ。あなたは自分で蒔いた失敗の種を蒔いて歩いて、それを後で刈り取らねばならない運命にあるのよ。判っている？ 去年のスペインに旅行に行ったときも、バカンスの時期によ、予約もしないで日帰りのように出かけて、そう簡単なものじゃないってよおく判ったでしょうよ。わたしたちどこへ泊ったのよ。どこのホテルもモーテルも満室で断られて、公園のベンチで乞食のように寝たのよね。雨が降ってきて散々だった。おととしはどう？ 行き先を間違っ、列車に飛び乗って、わたしが違うようよと云ったのも聞かずに、さっさと飛び乗ってしまったのよね、そうしたらどう、エクスプレスで、次の停車する駅ったら、隣の国だったわ。一事が万事その調子で振り回されて、わたしは命がいくらあっても足りないようよ。寿命が縮まって長生きもできそうにない。なにをやらせてもドジばかりで、危ないったらありゃしない。慌てものだと知っていたけど、ここまで酷いとは思っていなかったわ。慌てもの結構よ。少しなら愛嬌もあるってものだけど、あなたのはビョウキよ、殆どビョーキ。首ごと挿げ替えてもらわねば直らないほどの重傷ね。乗り物大好きな性格が徒になることだってあるわ。あなたの車の運転のせわしいこと。後ろからついてくる車は危なくてみんな嫌がるのよね。ブレーキはしょっちゅう踏むし、ハンドルはせこせこと動かすし、ギアチェンジも細かくて、助手席で見ていると苛々してくるのよ。よく、歩行者を轢いたり、車とぶつかったり事故を起こさなかったわよね。いつもひやりひやりの連続で、しがみついて生きている心地がしなかったわよ。車の次は、クルーザーでしょう。船舶の免許まで取って、キャビン付き外洋クルーザーまで買って、あ、金持ちだからそんな出費もお小遣いのようなものだったんでしょが、その船の操縦も何よ。陸が海に代わっただけじゃない。危なっかしいのは同じ。ただ、信号と対向車、歩行者がいないだけ。どうして、船でも操縦は蛇行運転なのよ。右と思うと左で、わたし、すっかり酔ってしまって、もう二度と乗りたくないと思ったわ。しかも、転覆しそうになったこと数知れず。あなたは、乗り物の運転の適性がないのよ。あなた自身が事故を起こさなくても、あなたを避けようとして、何台の車が事故ったと思うの。振り落とされて海に投げ出された友達も何人いたのよ。船の次には飛行機？ 止めてちょうだいよ。飛行機の免許まで取りにゆくって、本気だとは思わなかったわよ。まさか、セスナを買うなんてね。空の上だって、信号があるわけじゃないし、歩行者も飛んでいるわけじゃないわ。でもね、何よ、あなたの操縦は。アクロバット飛行を意識してやっているわけでもないんでしょが、どうしてあんなに乱暴でへたくそなの。どうして真っ直ぐに飛べないの。どうして宙返りするのよ。さっきもひっくり返って飛行していたわね。どうして、海が上にあるのよ。上も下も判らないバカなの。まったく、あなたの妻になって、いつもこんな恐怖感を味わえて、ただで遊園地で遊んでいるような気分とは違いますからね。しかも、何よ、わたしを騙して乗せて、今日が初飛行だとして教えてくれなかったの。車なら停まって降りれば済むことよ。船だって、泳いでも戻れるわよ。でも、空の上じゃ、降ろしてと叫んでも下は海よ。しかも三千メートルの上空ときている。そのうち、プロペラが停まる。エンジンが動かない。そんなときでも、あな

たという人は実に冷静に、あれ、燃料切れだって。ふざけないでよ。どうして、そう落ち着いて云えるのよ。海の上に不時着したときも、あなた何て云った？ 大丈夫、ライフジャケットを付けているからですって。飛行機は海に沈む。わたしたちは大洋のど真ん中に浮かんでいる。ここはどこ？ いつまで浮かんでいたらいいの？ そのうち鮫がきたらどうするのよ。あなたから先に喰われてくれる？ こんな陸地も見えない海の上だわ。泣いても叫んでも誰も助けに来てくれないのよ。ガス欠だなんて、空の上にガソリンスタンドでもあると思ったの。ふざけないでよ。どうしてくれるのよ。あなたのようなへぼ亭主と心中なんてまっぴらよ。どうしてくれるのよ、とりつく島もないじゃない。

第303話 症候群症候群

病名がどんどん増殖している。風邪とひとくくりにするにはあまりにも症状が多岐に渡るのだから、いろんな薬を試してみても利かない。くしゃみ、鼻水、悪寒、高熱、頭痛、筋肉痛、咳、たん、疲労感…。

「ああ、風邪でしょう」と云われるのが一番安心する人もあれば、逆に不安になる向きもある。風邪でかたづけられて、本当はもっと大変な病気かもしれない。誤診だったらどうすると、患者がいつまでもぐずぐずと長引く症状に不信感を抱くのだ。

「どうしても悪寒がとれない。それでは薬を換えてみましょう」と、あれこれと処方を変えて、ますます悪化する。単なる風邪ではないのではないかと、患者は医師に詰め寄る。困った医師は、新しい病名を告げる。

「悪寒症候群と申しましょうか。現代の医学では直す薬がない難病ですな」
その患者が薬ではダメだからと、家に帰って、熱燗で卵酒なんか作って呑んだらぴたりと治った。

「先生、熱燗で悪寒が治りました」
医師はカルテを訂正しなければならなかった。「お燗症候群」と。

原因不明の病気がどんどんと増えている。それだけ、世の中は複雑に化学薬品や、環境ホルモン、精神的障害が絡み合っ、病気もオリジナルの個性化の時代だ。六十億人にひとりの奇病と云われると、嬉しいような悲しいような。医者もそれぞれに対応した処方が判らない。個人差があり、珍しい症状を示す患者が続々とやってくる。

「先生、首が一回転回るんですよ。ほら」
普通なら考えられない。その少女は、真後ろを向くことができる。

「ふむ、便利なことは便利ですな。いちいち体ごと後ろを向かなくていいから。道路の安全確認にはいいが」

少女は不気味に笑って、首をくるくると回して見せた。医師は診断したが、首の部分が人形のように取り外し可能になっている。医師はカルテに書いた。「エクソシスト症候群」と。

「先生、おなかが頭痛するんです」

これも奇妙な患者だった。

「おなかは腹痛と普通云いませんか。おなかはどうすれば頭痛するんですか」

逆に医師が訊いた。

「だって、わたしは頭が腹痛するときもあるんですよ」

そう云われるとますます混乱してくる。

「判りました。ともかくレントゲンを撮って精密検査をしてみましょう」

頭のおかしい患者かなと思って相手にしたくないが、レントゲン一枚いくらの請求ができるから、やたらレントゲンで儲けようとしていた。

「先生、大変です」レントゲンを撮ってそれを確認した看護師がバタバタと診察室に駆け込んできた。写真を視ると、なんと、頭の中に胃腸があり、腹部に脳味噌があるではないか。

「これは珍しい奇形だ。あなたは、空腹になれば、頭が減ると云うんですか。腹で考えるわけですな。ううん、これは病気ではないが、何か新しい名前を付けなければならないぞ。困った、いいアイデアが出てこない。なんとか症候群と付けたいが。ううん、ううん」

医師は考えている間にも熱を出してきた。いろんな患者に病名を付けるために頭を悩ませていた。舌が二枚に分かれる奇病に罹った患者には二枚舌症候群、若い女性を見ると涎が出てくる患者にはパブロフの犬症候群。医師はとうとう、考える力が衰えてしまった。そして、ぼんやりとしているか、頭の中が混乱して、考えがまとまらないで発狂しそうになる。病名のことを考えると、そんな症状が出てくる。

医師は自分の専門外の病気に罹ったかと思い、仲間の精神神経科の医院を訪ねた。

「ふむ、病名を考えようとすれば頭がおかしくなるんですな。最近、そんな医者が多くなりまして、学会でも話題になっておりました。やたら、皆さん、症候群と付けたがるから、だんだん付ける名前がなくなってきたことが原因のようです。最近では症候群辞典も発刊されましたが、それほど新しい病気が増えたんですな。医者も大変です。ネーミングに忙しい。はて、わたしも困った。もう、付ける病名がないぞ。症候群の名前をつけたがる病気ですからな。そうですな...」

精神科医はカルテに新たな病名を書いた。

一症候群症候群。

第304話 本を読む女

最近の書店も変わってきていた。如何に売上を増やすかということで、活字離れに歯止めをかけることをあれこれと企画するようになってきた。異業種との組みあわせで、来店客数を増やそうということは、以前から行われていた。ステーションナリーだけでなく、書齋や持ち運びに使う知的グッズなども販売するし、コーヒーショップなども併設する溜り場作りにも工夫していた。

北村書店でもなんとか客数を増やそうと、今年からエスプレッソ専門店を店内に設けた。本場イタリアから指導を受けて、高い機械も置いた。コーヒーの表面にクリームで文字や絵を描いたりするので人気があった。書店の奥にその椅子席を用意して、買った本をゆったりとした気分で

読むことができる。

その椅子席にひとりの若い女が座って、本を読んでいた。この田舎町では珍しく、そこに座っているだけでなにか普通の人ではないというのが、みんなの目には映った。存在そのものが磨きぬかれたセンスで女優かモデルをしている人ではないかと、多くの客はそう思っていた。すらりとした背に、短めのスカートから伸びている細い足も黒いストッキングに包まれて、わざとらしく組まれているのも実にセクシーだった。着ている服のセンスもいい。ファッション雑誌からそのまま飛び出してきたようないま流行の柄と色。ストレートヘアも触ってみたくなるほど綺麗だ。そして、なにより大きな目と唇が素敵だった。カプチーノを飲みながら、熱心に朝から本を読んでいる。女が本を読むことは珍しい光景ではないが、こんな美人と本は似つかわしくなく、意外な取りあわせのような気がした。年はいくつぐらいか、二十代前半だろうか。若い女性には珍しい読書家なのか。天は二物を与えずとは言いが、美人と知性は相容れないような気が多くの男性はしているものだ。読んでいる本のタイトルがまたいい。その辺のギャルが読むようなタレント本やベストセラーものではない。「ブローティガン詩集」とみんなに表紙が見えるようにして読んでいるのが気になった。

すると、本を読みそうもない若い男がちらりとさっきから女を意識して、書棚の陰から伺っているのが判る。本を選んでいる振りをしているが、もう本の背表紙の文字など追えないでいた。耳にはMDプレイヤーのヘッドホーンをつけて、髪は茶色、革のジャンパーが決まっているやつだ。そいつは、棚に平積みになっている同じ詩集をレジに持ってゆくと、ブローティガンが何者かも知らないで、購入してしまった。そうして、その本をわざとらしくちらつかせ、彼女の側の席に座ると、エスプレッソを頼んだ。

後でやってきた別の若い男もその詩集を買うと、同じふうには彼女の側に座ると難しそうな顔をして詩集を読んでいる振りをしだした。気がつくやうに、彼女の周りにはそんなにかれた連中が六人も集まっていた。誰も声をかけないのは、敵が多すぎるから互いに牽制するような視線を送りあっていて、彼女を中心にして男たちの引力が均衡している状態にあったからだ。

そんなナンパしようとする男たちには目もくれず、首を傾げたり、指を噛んでみたりするセクシーなポーズで、周りの男たちに香水とサインを送り続けていた。髪をかき分ける仕草にもたまらない色気が満ちていた。この町では見かけたことのない女だった。みんな、素性を知りたがっていたが、敵が多くて近づけないでいた。

ひとり勇敢にも立ちあがって、彼女の方へと近づいてゆく、抜け掛けをされてなるものかと、全員が触発されて立ちあがった。すると、彼女はまったく男たちには無関心を装って、立ちあがると、するりと抜けるように本を小脇に抱え、奥のドアから出て行ってしまった。拍子抜けした男たちは買った本を抱えながら、またこの書店に来てみよう、と、出直すことにした。

午後になると、また、あの彼女が店内に現れた。書店にいただけで目立つ存在だから、みんなを振り向かせた。店内の本を見渡しながらか、彼女はやはり平積みしている哲学の名著ベルグソンの「形而上学入門」を一冊取ると、レジに持って行って購入した。その一部始終を固唾を飲んで見守っていた中年のおじさんたちが、その売れそうもない哲学書の平積みの本を手にとって不思議そうに眺めていたが、彼女がコーヒーショップの中央の席について、今度はコロンビアをストレートで飲みながら、難しそうなベルグソンをひもといているのを見ると、我先に、同じ本を

レジに持っていった。専門書だから定価は高い。その場で七冊が売れた。そして、中年の客は彼女を包囲するようにそれぞれが座り、やはりコーヒーを飲みながら、同じ本をめくっているのだった。読んでも、意味不明の言葉の羅列だ。みんな読む振りをしながら、ちらちらといやらしい視線を彼女の方へと向けていた。形のいい細い足が交互に組まれるたびに、男たちの視線を下半身に集めた。親子ほど年の違うおじさんたちだが、中には同じような娘を持つ親父もいるはずなのに、何を考えているのか、みんな、話掛けたがってうずうずしていた。

そのうち、彼女は哲学書を読みながら、クスクス笑いだした。その笑い顔も素敵だった。みんなは、何かおかしいことが書いてあるのかと、本をめくりながら焦ってそんな箇所を探したが、別に笑うようなことが書かれていない。すると、ひとりのおじさんがフッフフと笑ったので、この本のおかしさを理解しない者は、彼女と話をする権利も資格もないのだというふうに、みんなが同時に思ったのか、それぞれが急に、ヒヒヒヒ、ホホホホ、へへへへと笑うのだった。

その場違いな女は、近づき難いほどの美貌と容姿をしていたので、同じ本を読み、空間を共有できるだけで、おじさんたちは幸せな時を過ごせるのだった。よしんば、こんな若い女と知り合いになり、愛人にでもなってくれたら、おじさんは家庭を捨ててもいいと、そんな想像をしながら活字なんか追えないでいた。

彼女はまた立ちあがると、奥のドアから出ていった。すると、みんなは総立ちになって、彼女の後を追うように出ていった。でも、彼女の姿は書店の外にはすでに見えないのだった。全員が、心の中で思っていた。—また明日も来てみよう。きっといつかチャンスがあるだろう、と。

実は、彼女は書店の裏口から事務所に入っていったのだ。事務所には書店の店長が机に座っていて、アルバイト代を計算していた。

「ごくろうさん、また明日も来てくれるね。はい、今日の日当だよ」

彼女はバイト代を受け取ると、にっこりと笑って云った。

「いいんですか、ただ座って、指定された本を読む振りをして、コーヒーも飲めて、それでこんなにお給料が貰えるなんて、なんだか悪いみたい」

北村書店の売上は確実に上がってきていた。

第305話 歳末商戦

いよいよ十二月だ。一年で一番の量販期を迎えて、各デパートは戦々恐々としていた。どこのデパートも売上が毎年下がって、前年をクリアすることも難しい。かといって、売り場ごとの売上目標を前年割れした数字で上げると、社長からしこたま怒られる。

地元の老舗、オオツカデパートでも、中央から進出してきている大手チェーンストアの強豪を叩くべくチラシ、スポット、目玉商品を用意しての歳末バーゲンへと突入するところだが、売り場の予算は消極的。

「君らには、努力目標というものがいいのか。やる気はあるのか。なんだ、こんな数字は、去年

より悪い売上なら猿でも達成できる。なんとしても前年を超えるんだ。毎年毎年下がってゆくから、今年は二十年前と同じ売上だぞ。君らの給料は、二十年前と同じか。ボーナスは欲しくないのか」

社長が、全社員を集めての朝礼で檄を飛ばしていた。すると、みんなざわざわと騒ぎだした。

「おい、ボーナスって何だ？ 知っているか」「さあ、知らねえなあ」と、社員同士話している。

ひとりの若い漢を垂れた社員が手を上げて質問した。

「社長、ボーナスってなんですか」

社長はドキリとした。

(そうか、わしも忘れるくらいボーナスというものを払っていなかったわい。もう、二十年も赤字で払っていないからな、いまの若いものはボーナスという言葉も知らないのだな)

「いやいや、ナスの漬物をだな、売上達成した部門にやろうと思ってな」

若い社員たちは、「そんなもの、いらぬよな」と、囁きあっていた。可哀想な若者たちだった。世間からボーナスという言葉が消えて久しい。

「とにかくだ、この商戦を勝ち抜くためにだ、なんとしてもナノカ堂や東友を叩かねばならない。叩いて、叩いて、叩き潰すんだ」

社長ひとりが興奮している。もう、世の中は超デフレで、もの余り。何をやっても売れない。笛吹けど踊るアホもいない。みんな辛抱してものを買わない時代になってきていた。

社長がセール初日のレジ情報を集計しながら見ているときに、事務所に警察から電話がはいった。

「ああ、お宅の社員ですかね、ナノカ堂に乗りこんで、なんですか、社長の命令で、叩きにきたと、暴れまして、お宅では暴力団まがいの殴り込みを指導しているんですか。」

社長は青くなった。なんという阿ほうな。長い間に社員の質も低下していた。総務部長が謝りに走った。

「あんな漢垂れ社員をどいつが教育したんだ。いいか、叩けとは、相手の客を連れてこいということだ。周知徹底させるように」

直属の上司を呼んで、社長はこんこんと説教して、ふたたび外へピラ配りに若手社員を走らせた。

すると、まもなく、また警察から電話だった。

「今度は、お宅の社員による、客引きならまだいいんだが、もう誘拐も同じ、東友デパート行の市営バスを刃物をちらつかせ乗っ取ると、お宅のデパートに行き先を変えるよう、バスに立てこもり、要求をつきつけていますが、それも社長さんの経営方針ですかね。なんとか説得していただけませんか。」

社長は激怒した。

「うちには、そんな阿ほうな社員よりいないのか、そろいもそろって、日本語も知らんのか」

社長は氷嚢を額に当てて、販促課長を呼んだ。

「次の売り出しの目玉は決まったか？」

「はい、社長、ブランドものインナーを大特価で、たとえばポロのももひきとか、バーバリのバ

バシャツとかをなんと千円均一で、と思ったら、ナノカ堂に情報が漏れたようで、敵のチラシでは五百円均一と打つそうです」

まるで、スパイ合戦のように情報はお互い筒抜けだった。社長は販促課長に喝を入れた。

「どうして、いつも先を読まれるのだ。いいか、今度の歳末売り出しは、我が社の命運がかかっている。絶対に負けられないんだ。何がなんでも敵に勝て、いいか、目玉商品では負けるなよ」

「アイアイサー」と、販促課長は飛び出していった。

十二月第二週の日曜日は、一年で一番デパートの売れる日だ。クリスマスとお歳暮、正月と続く行事に向けて、財布の紐が緩くなるときだ。問屋、メーカーからも応援社員が駆けつける。アルバイトも総動員だ。店頭販売から先着サービス、タイムサービスと、企画は盛りだくさん。社長はうかつにも第二弾のチラシを見ていなかった。どうせ、ブランドものの衣料の価格訴求だろうと思っていた。

ところが、朝早くから、オオツカデパートの前には長蛇の列ができていた。昨日からの徹夜組もできるほどの賑わいで、ナノカ堂の店頭はガラガラ、東友デパートも客足はさっぱり。販促課長はその長い、果ての見えない行列を見て、やったと、内心興奮していた。テレビ局から、新聞社、取材のヘリコプターまで上空を旋回するほどの賑わいに、交通整理の警官も出てきた。これは大変と、警備保障会社にも応援を頼んだ。

あまり、宛にしていない社長がいつものように出社して、すごい人ばかりができていてのを不思議に思い、運転手に尋ねた。

「何か事件か事故でもあったのかね」

「いいえ、あれは、わがオオツカデパートのお客様です」

数えられないほどの客の列だ。テレビ局のアナウンサーが中継していた。社長は、渋滞している車の中でテレビをつけてみた。

一すごい人です。未確認情報ですが、五万人以上は並んでいると思われまます。実に行列の長さは三キロに及びます。これは、いまだかつて、デパートのバーゲン史上なかった記録かもしれません。それにしてもオオツカデパートは思い切った広告を出しました。敵方のデパートが、ブランドのももひきを二百円まで下げたのに対抗して、なんと十円に下げました。すると、敵方のデパートも負けてなるものかと、一円の投げ売りに出ました。怒ったオオツカデパートは、な、なんと、ももひきを只にするばかりか、一枚につき、逆に千円返金という愚拳といいますか、なんとといいますか、年末の大盤振る舞いに出ました。ただで、貰えるどころか千円もくれるというので、遠く他県からも客が詰めかけています。どんどん膨れてきています。

それを聞いて社長、泡を吹いて車のシートに倒れた。

第306話 過剰反応

こう不景気になると、市民の話題は、どこどここのデパートが危ない、あそこの銀行も潰れそうだ、次に倒産するところはどこどこだと、根も葉もない単なる噂から、根も葉も幹も枝もある

、どこからか漏れた情報など、街中を飛び交っていた。寄れば集まればその話で持ちきりだった。いい話は何ひとつとしてない。暗い話題ばかりが、面白おかしく語り継がれてゆく。「あな嬉し隣の蔵が売れてゆく」という川柳にあるように、人の不幸というのは楽しいものだ。まして、いまの世は、自分だけが苦しいのではないと、人の苦しみも引き合いに出して喜ぶ。

北村銀行も危ない銀行と噂に出る銀行だった。預金保護策も先送りとなり、なにやら危ない予感がみんなに見えてきていた。

そんなある日、頭取室で、北村頭取が、電話で話していた。

「何、父さんが…。うちもついにそこまできてしまったか、そうか、なんとか手を打たなければ、みんなに迷惑をかける前にな」

それは、家からの電話だった。老人性痴呆症の頭取の八十になる父親が、徘徊して行方不明になり、家人が探してようやく連れ戻したというのだ。それを暗い声で、周りには聞かれては不味いことのように、声をひそめて話したのを、秘書がしっかりと聞いていた。血相変えて、同じ本店営業部の仲のいい友達のところに行って、何もかも話していた。

「聞いたわよ、わたし。頭取が青い顔して云っていたのを。確かにこう云ったわ。『何、倒産か。うちもついにそこまできてしまったか』ってね。いまのうちにわたし、預金解約しておくから、手続き頼むわね」

その噂は、女子行員から、支店まで飛び火して広まった。支店の女子が、急いで、自分の定期を解約すると、向かいの敵方の銀行に走っていった。そこにも同窓生の友達が行員をしていた。

「何よ、あんた、自分のとこの預金降ろして、商売敵のうちに移すなんて、怪しいぞ」

その噂が敵方の銀行から一挙に広まった。

翌日、朝から北村銀行の前にはものすごい人だかりができていた。預金者が預金引き出しのために詰めかけていた。取付騒ぎで、マスコミも取材にきていた。その騒ぎを出行した北村頭取が見て、

「ものすごい客だな。さすがわが銀行の人気だ。みんなボーナスを預金しに詰めかけているんだな。それとも、くじ付きの定期が目当てかな」

「いいえ、頭取、あれは、うちが倒産するからと、預金引き出しの群衆です」

秘書に云われて、頭取も青くなった。

「大変だ、倒産するとは思っていなかった。わしも預金を引き出そう」

頭取まで、預金引き出しの列に並んでいるので、マスコミはこれは本物だと、書き立てた。

すると、銀行が倒産する前に、不良債権の取り立てをするだろうという噂が流れた。いままで、元金どころか利息も滞納していた中小企業、大企業は慌てふためいた。社長が、財産を隠して夜逃げした。幹部社員もどさくさで会社の備品なんかを持ち逃げ。それを見ていた社員も、遅れている給与の代わりと資材などを奪い合う。問屋、取引先にもその会社解体の知らせが聞こえると、我先にと、トラックで会社へと押し掛けた。納入品の引き下げと、債権確保のために、ありったけの備品をトラックに積んだ。

受取手形はすぐさま割り引かれた。町のヤバイ先で割り引いたので、すぐさま下請けの零細企業などにチンピラが顔を出す。上が潰れると、下までドミノ倒しだった。町工場のとうちゃんは

かあちゃんと子供の手を引いて、荷物まとめてできるだけ遠くへ逃げた。従業員も、経営者にまるめこまれて、保証人になったり、労金から金を借りて、会社のためと注ぎ込んでいたりするから、社長だけが逃げて、残されたものがババを掴むことになる。社員も逃げなければならない。そんなゴタゴタがあちこちの会社で見られ、街全体がパニックになっていた。

夜中の国道はそんな夜逃げの車で大渋滞を引き起こしていた。電車はすでに満員状態。どんどん街から人がいなくなる。街は空っぽになってゆく。街のすべての人間がなんらかの形で、関わり合って生きていた。ひとつの銀行の破綻が引き起こす連鎖反応は核爆発のように、街全体を呑み込んだ。

街に居残った連中は、コンビニのガラスを割り、商品を手当たり次第に運んだ。デパートもシャッターを降ろして、中には誰もいないが、裏口から侵入して、荒らすだけ荒らす若い者たちがいた。車はひっくり返す。商店には放火する。無人の街はすでに無法地帯となっていた。

われわれが積み上げてきた積み木は、誰かが一個でも外すとバラバラになって崩れ落ちる。北村頭取だけが、この街に最後まで残っていた。隠し持っていた金のインゴットを車に積んで、家族と逃げようとした矢先に、金の重みでパンクして身動きがとれなくなっていた。すると、しゅしゅ乗っていたボケた爺さんが、

「何で逃げるんじゃ。わしはここがいい、この街で生まれ育った」と、ぶつくさと云うから、北村頭取、はたと気付いた。

「そうか、そうだった。何で逃げる必要があるんだ。わたしは債務者でもなんでもない。第一、うちの銀行はまだ倒産していないんだからな」後ろを見ても誰も追ってくるわけがない。

「みんな逃げてしまって、誰が追いかけてくるというのか。ははははは」北村頭取は腹を抱えて笑った。最後に笑うのはやはり銀行だった。

第307話 未確認非行物体

お行儀がいい、気品ある面立ち、仕草、いつも清楚でぴしっと決まっているスタイル、男前だし、家は資産家、性格温厚、学歴も悪くない。それでどうして四十になるまで独身なのか。独り息子で母ひとり、ひょっとしてマザコンかもしれないと、社内ではいつも女子社員たちの話題の的だ。

湊川貴之は、真面目で通っている人柄が買われ、リース会社の総務課長をしていた。律儀な性格だから、信用がおける、スキャンダラスな話のひとつも聞こえてこない。見るからに品行方正を地でいくサラリーマンだった。会社に定刻に出社して、定刻には帰る。みんな寄り道してゆくの、酒もタバコもギャンブルもしない貴之は、つきあいが悪い。会社の同僚と麻雀もしない、上司とゴルフもしない、呑みに行くこともない。真っ直ぐに会社に来て、真っ直ぐに帰宅するといった堅物でもある。面白味のない人だから、女性が寄りつかないということもある。

「あれで、羽目をはずすと、少しニヒルなところでもあれば素敵なのにね」と、みんな残念そうに眺めていた。社内では人畜無害と悪口も云われていた。

「ママ、いま帰ったよ」

貴之が帰ると、すでに風呂と夕食が用意してある。母子二人の寂しい家庭だ。酒がまるでダメな貴之は晩酌はしない。その代わりに、食後に冷蔵庫に入っているアイスクリームやヨーグルトを食べる。

今日一日の会社のことを貴之はまるで小学生が母親ことが、その人への社会的信用が欠如すると人事考課では査定していた。それと、転勤拒否をしてきたこともマイナス査定になっていた。

「ママ、ぼくも結婚しようかな」

唐突に貴之が云ったものだから、母親はどぎまぎした。

「あら、どうしたの貴之ちゃん、いきなりそんなことを言い出して。ママが何不自由なくやってあげてるじゃない」

「でも、ぼくがいつまでも自立しないから、まわりがどんどん昇格しているんだ。このままでは、部下にも追い抜かれて、そのうちあごでこき使われることになると思うんだ」

すると、急に母親は悲しい顔をして、

「そう、ママを捨てるのね」

「捨てるって、どういうことさ」

「あなたが、嫁を貰えば嫁と姑の問題が起こります。ママがこの家をいつか出てゆくのは見えています」

「じゃ、ぼくは一生独身で、湊川家はぼくで潰えてしまうんだ」

憮然として貴之は珍しく母親に反抗していたから、母親はおいおいと泣き始めた。

「ちょっと出かけてくる」と、貴之はふて腐って家を出ようとした。

「どこへ行くの」母親が後ろから声で追う。

「コンビニだよ」

貴之はコンビニで、買ったことのないタバコとウイスキーを買った。何を買っていいか判らないから、強いピースを買っていた。それで、自分の部屋に戻ると、生まれて初めてのタバコに火をつけた。火を付けただけでは火がつかない。吸うということも知らない。ようやく火がつくと、そのまま深呼吸するように吸ったものだから、ゲホゲホむせて眩暈して倒れた。こんなおいしいものをよくみんな吸っているものだ、と貴之は揉み消した。次に、ウイスキーをそのままストレートでぐいっと呑んだ。こっちもむせた。水を呑むようにぐいっと呑んだから、急激に酔いが回った。その匂いに気が付いて、母親が駆けつけてきた。

「貴之ちゃん、何しているの」

「ほっておいてくれよ、おれはグレているんだ。タバコだって吸ってやるし、酒だって、ほら、呑んでやる。不良になってやる」

「まあまあ、おれだなんて、タバコとお酒の匂いが...」

貴之は四十過ぎてグレた。もう、どうでもいい。不良中年になって、いままでの真面目なときの憂さを一気に晴らしてやる。若いときにグレるのは適当だ。中年になってからグレるのは非常に危険だった。

湊川貴之は、退社後にピンサロに入った。それを同僚が目撃していた。

「あれれ、湊川課長によく似ていたよな。まさかな、あんなところに入るなんて。人違いだろう」

貴之はボディコンで、貴之の膝の上に乗ってくるホステスを持って余していた。

「ああら、こちら素敵な方。初めてね、うんとサービスしちゃうから」

しゃきっと固まっていたが、タバコを吸うとくらくらきた。ビールをぐいと呑んだら、急に気が大きくなってきた。

「お、おれはな、これからうんと遊ぶんだ」と、札をばらまきズボンまで脱いでいた。

酔った勢いで、貴之はソープランドにもに入った。それをやはり、女子社員たちに目撃されていた。

「ねえ、ねえ、いまソープに入っていったの湊川課長じゃないの」

「まさか、あんな堅物が行くもんですか」

「そうかなあ、似ていたけどなあ」

翌日の社内はその噂で持ちきりだった。

「未確認情報だけど、湊川課長にそっくりな人が、ピンサロに入ったのを見たんですって」

「隣の課では、ソープにも出没したというじゃない」

噂の主の貴之はデスクに座り、徐ろにタバコを取り出した。

「ええ？ 課長がタバコ吸っている。信じらんない」

「本当は、隠れて遊んでいたりして、いいわねえ、何か見直しちゃった」

貴之は、女も酒もギャンブルもすべての遊びにやみつきになった。四十にして男になる。それは墮落の始まりだった。あとあとほど怖いものはない。

第308話 病気の母が

病人のいる家というものは、玄関を入ると判るものである。なんとなく陰気くさく、静かで、重苦しい空気が流れている。どこからか、咳が聞こえてくる。何かすすり泣くような悲しい声がある。消毒薬の匂いが漂い、テレビの音声も聞こえない。と、思うのは間違いであった。北村家では、朝からギャンギャンと騒がしい。

「わたしゃ、病気なんだよ、病気！ 胃に沁みるんで食べられないのを知っていて、こんな食事がいい。揚げ物ダメだよ。油を使ったものは一切ダメ。酢の物もダメ、胃にしくしく来るんだよ。カレーライスなんか食べられますか。肉もダメだって医者が云っているからね」

今年八十の婆さんがひとり食事のことで騒いでいる。嫁の晴子は困っていた。お姑さんのために、別におかずを作るほど暇ではない。有職婦人だから、仕事が終わって帰るのが五時、それから夕食の支度にとりかかるから時間がない。婆さんのために、出来合のお総菜を買ってくるよりない。それも、塩っ辛いものでなく、揚げ物でなく、酢の物でなく、肉などの酸性のものでなく、胃に刺激のないおかずというと、殆ど食べるものはない。サラダか豆腐ぐらいのものだ。病人は我が儘だが、婆さんのは、本当の病気ではないところが困りものである。すべて神経なのだ。

「わたしゃ、今朝もまた心臓の発作が起こったの」と、四十年近くもそう云ってきた。すでに発作は本人の自己申告を集計すると、四千回は数えるかもしれない。心臓発作がそんなに来たら、命がいくつあっても足りないだろう。心臓神経という病気にかかって、周りが同じことをくぐらされたと聞かされる。

「血圧が上がっての、眩暈もしての」と、一日中、病気の話を聞かなければならない。

「指が曲がらないし、腰は痛いし、リウマチではないか。ヘルニアでないか。腰のできものもヘルペスではないか」

年とってくると、あちこちガタがくる。あっち悪いこっち悪いと朝から夜までその話ばかりだから、聞いている方が悪くなる。八十五のつれあいは運よく耳が遠くなって、聞こえなくなっていた。息子は本を読みながら、耳にはヘッドホンで音楽に逃げていた。孫二人はその話が始めるとさっと逃げる。いつも掴まるのは嫁だった。同じ話を何千回と聞かされる。壊れた蓄音機、いや、傷あるCDで同じフレーズを繰り返し聞かされる拷問だ。嫁はノイローゼになる。なるべく、姑と顔を合わせないようにして暮らすことがひとつ屋根の下では難しい。

誰も聞いてくれなくなると、年寄りの僻みが出てきて、

「みんな、冷たいんだよ。親身に思いやる気持ちがない。わたしのこと粗末にする。この家で判ってくれるのは、もうおまえよりいないんだよ。わたしの痛みは今日も酷くてね...」と、誰もいない居間で、今度は金魚やペットの兎に向けて話している。

病院も毎日、外科だ内科だ耳鼻科だと、買い物みたいに通うのに、息子が車で連れてゆく。薬もやたらじゃらじゃらと貰うから、何がどの薬か判らない。十種類以上の薬を呑むだけで腹の足しになるぐらいだ。そして、家では血圧計で毎日測り、病気の本ばかり読んでいる。婆さんの趣味は「病気」なのである。しかも、口達者な元気な病人は、機関銃のごとく立て続けに喋りま

くり、相手に話もさせないほどの勢いだ。

いつも死ぬ死ぬと云いながら、なかなか死にそうにない。嫁と口論して、気分を害した婆さんは、むしゃくしゃすると不眠症になり、夜中に起きて、居間でひとり酒をかつくらっていた。元来酒には強いほうで、顔色も変えずに一升瓶の半分は空ける。

「冗談じゃないよ。こっちは心筋梗塞なんだ。いつ発作でころりと死ぬか判らないというのに、この家のものときたら、どいつもこいつもあてにならん。このままでは殺されるわい」と、云いながらぐいぐいと呑むあたり、本当の病気ではない。心臓神経は困ったもので、症状が似ているので、本人はそう確信しているのに、検査ではどこも悪くない。それで、医者に「どこも悪くありません」と云われるものなら、その医者に刃向かって抗議する。

「わたしゃ、病気なんだ。こんなに弱っているのに、誤診じゃないのかえ」
どこが弱っているんだ？ と医者の首を傾げるほど元気すぎるのに、婆さんは医者を非難する。根負けした医者は、何らかの病名を付けないわけには行かなくなる。あちこちで、あの病院はヤブだと、この調子で噂されては困る。

「判りました。判りました。それでは、あなたは、無意識的心臓発作不整脈症候群という病名をお与えしましょう」

「はは」と、うやうやしく承る婆さん、とうとう、わたしにも病名ができたとまるで資格でも取ったように喜んでいる。

家に帰ると、ものすごく機嫌がいい。

「今晚はちらし寿司でも作っておくれ」と、嫁に云っていた。

「でも、お姑さん、寿司はお酢を使いますわよ」

「いいんじゃ、今日はめでたいんじゃ、とうとう、あの医者が白状しおった。患者に告知する義務があるというもんだ。わたしもな、実は、ムイシキテキシンキンでなかった、なんとかと云うたな、その病気だったんじゃ」

と、頗る嬉しそうだった。その病気診断祝いをしようとするらしい。全快祝いではなく、病気祝い。本人はルンルンと鼻歌まで出ている。

息子と嫁はうんざりして云った。

「まあ、いいか、これで少しは静かになるか」

第309話 夜行列車

「なんとか、引き去りの分を戻してくれませんか。その分は月末まで必ず支払いますから」
吉川工業の吉川宗太郎はメインバンクの融資窓口で土下座して頼んでいた。

「社長さん、立ってくださいよ。先月もそうやって実行してくれませんでした。今日が手形の決済日ということですが、うちの手形貸付も手形ではないんですか。それを口座から落とすのは当

たり前のことでしょう。しかも、この手形は二度も書き換えしてあるものですし」

三時はとっくに過ぎていた。銀行のシャッターは降りて、吉川工業は二千万の不足で不渡り確実だった。このままでは五日後の手形も落とせず、倒産は確実だった。宗太郎の脳裏には、家族のことより、六十人の従業員の顔と、取引先の顔、そして連帯保証人になった面々が浮かんでいた。大変なことになる。つい、さっきまで、あちこち手形のジャンプや緊急融資で走り回っていたが、万策は尽きた。そう、なんの手だてもない。支店長に直談判をしても埒があかない。

夕方、宗太郎はひとり銀行の裏口から出された。すでに暗くなっていて、街はクリスマス一色のイルミネーションで輝いていた。

三十年、独立してここまで頑張ってきた。がむしゃらに働いてきた。それもこれも終わりだった。宗太郎はふらふらと、暖簾を出したばかりの赤ちょうちんに入った。酒を冷やでもらい、立て続けにぐいぐいと呑んだ。客がだんだんと入ってくる。

「スーパー金武が倒産したってよ」「へえ、あの老舗がねえ」サラリーマンたちがそんな話をしているのも最近は聞き厭きた。宗太郎は無理矢理、酒を呑んですっかり酩酊状態になっていた。独り言のように愚痴を云い、周りから顰蹙もかっていた。

「もう少し時間をくれ、もう一度だけチャンスをくれ、この人生をやり直しさせてくれ、これで終わらせたくはない、これで...」

「お客さん、もう暖簾ですよ」と、揺り起こされて、宗太郎はとまり木で目が覚めた。もう客は誰もいない。腕時計は一時を回っていた。

宗太郎はよろめきながら小雪のちらつく冷えた街に出された。目の前にJRの駅があった。北国の駅は、新幹線が通るようになってからは、夜行列車がすべて廃止されたから、十二時を過ぎると電灯が消えて誰もいない。まだ相当酔っていた宗太郎はどこへも帰りたくなかった。急にまた悲しい現実が締め付けてくる。

「帰りたい、帰れない」と、歌も出た。どこかへ帰りたかった。人間には必ず返るべき場所がある。それは、長い旅の終わりに回遊して戻るべきところだった。

宗太郎は、無人になった駅の改札口を乗り越えると、雪がうっすらと積もったプラットフォームへ立った。コートも着てこなかった宗太郎はあまりの寒さに我が身を抱きしめていた。来るはずのない列車を待っていた。始発まではまだ五時間以上はあるだろう。こんな真夜中に来る列車があるはずはない。判っていても、すぐにでもこの街を逃げ出したい衝動にかられていた。

すると、音もなく、すーっと列車がホームに入線してきた。乗客の誰もいない古びた普通列車だったが、車内には電灯が点いて、温かそうだった。行き先を表示するプレートがない。いま頃、到着するのは回送列車だろうと、宗太郎は思っていたが、なんでもいい、自分をどこかに連れてゆけ、と、その列車に乗り込んだ。暖房がきいて温かだった。座席も壁も天井も木が張ってある。黒光りしている木が懐かしい。それにタールのような車内の匂いが昔の列車そのままだった。

一いまだにこんな古い車両が走っているんだな。宗太郎は急に眠くなって、座席に横になった。すると、列車はがたりと動き始めた。レールの振動が伝わってくる。それは遠い羊水の中で聴いた心音の子守歌のように心地よく、宗太郎は深い眠りの中で安らかな世界に入っていった。

どれだけ眠ったのだろう。腕時計を覗くと二時を示していた。一時間より経っていないのか。

宗太郎はぐっすりと眠ったようだ。すでに酔いは醒めていた。醒めぐあいからして、一時間ではないだろう。外はまだ暗く真夜中のようにあり、列車は走っていた。時折、汽笛を鳴らし、無人踏切を過ぎ、橋を渡り、かなりのスピードで爆走しているようだった。腕時計は止まっていた。急に、宗太郎は不安になる。この列車はどこへ行くのだろうか。隣の車両にも誰もいないようだ。列車は電灯の消えた家々の見えるある村に到着した。ホームに停車したので、そこがどこか、息で曇った冷たい窓ガラスを指で拭いて、顔をくっつけるようにして覗いた。「聖浪」という聞いたこともない駅名が見えた。ホームには誰もいない。死んだような村が厳寒の中にぼんやりと影を留めていた。列車はふたたび動き出した。

やがて、うっすらと空が白んできた。周りの風景が青く見えてくる。どこまでも続く原野と、なだらかな山が遠くに見えていた。家屋など見えない。とても人の棲めそうもない荒れた土地だった。白々と夜が明けてきて、ぼやけた風景の中にひしゃげた家が見えたりしていたが、何か日本の家とは違った。雪原が広がっている中に馬車がゆっくりと走っていた。ようやく人間の姿が目についた。部落が点在する中に戦車や軍隊のトラックなどが見えた。

列車は終点の「黒河」という駅に着いた。黒河、宗太郎は口にして呟いていた。

「嘘だろう。そんなバカなことがあるか」

宗太郎は、急いで列車から降りた。氷点下三十度の寒気が襲った。ホームには数人の荷担ぎたちがたむろしていて、宗太郎を不思議そうに眺めていた。身なりからして、戦前の満人たちだ。黒河は宗太郎の生まれ故郷だった。

改札口で切符の提示を求められたが、宗太郎は持っていない。すると、駅員が通報して、憲兵隊の腕章をした数人の分厚いオーバー姿の猛者が宗太郎に銃をつきつけて云った。

「きさまは日本人か。どこから来た。見慣れないやつだ。服装も日本のものではないな。名前はなんという」

宗太郎はとんでもないところに入ってきたように、すべてを了解するのに時間がかかっていた。

「ここは、満州なのか。今日は、何年の何月なのだ」

みんな笑った。

「ともかく、怪しいやつだ。取り調べのために連行する」

懐かしく古い町が駅前に出現していた。昭和十六年十二月に宗太郎は、満蒙開拓団の両親のもと、この地で生まれた。終戦後、命からがら引き揚げたのは二十一年だった。黒河はソ連との国境の町だった。

宗太郎が連れてこられた憲兵隊の取調室で、所持品を机の上に全部並べられた。憲兵は、百円硬貨を珍しそうに手に取っていた。免許証やキャッシュカードも怪しい所持品として宗太郎を問いつめようとしていた。

「名前と住所、生年月日を云ってみろ」

「吉川宗太郎だ。青森県三沢市…。昭和十六年十二月六日生まれ」

すると、憲兵は椅子を蹴って激怒した。

「バカにするな。それは今日ではないか、きさま、でたらめを云うな」

驚いた宗太郎は部屋の壁にかかっている日めくりを見た。昭和十六年十二月六日とある。

「おれは、おれの生まれた日に戻ってきたのか」

だが、と、宗太郎はさらに暗くなった。人生をやり直すには時間だけ戻しても駄目だった。おれは年を取りすぎている。すぐに戦争が始まるというときに、この満州で何ができるというのだ、何が。

第310話 金太郎飴

村おこし、町おこしのために、町会議員、町長、青年団、商工会と、みんな集まって、連日協議していた。新幹線が我が町に通ることになったので、観光客にアピールするにはどうしたらいいかと。

「新幹線が通ると、おらほの町に、東京から二時間半で来る。これは日帰りもできるつうことだな。どしどし都会から観光客が押し寄せてくるのはいいが、どうやって金を落としてもらうかだ、問題は」

町長はいいアイデアを町の有志を集めて、出し合うことにしたのはいいが、どうも、顔ぶれを見ても、いいアイデアが出そうにない。

「おらさ、いい考えあるだ」と、製材所の社長が挙手した。「町の特産のヒバの大木を駅前さ据え付けで、それにイルミネーションの電球付けでだ、日本一大きいクリスマスツリーっていうのはどんだべ」

うんうんと、町の長老は頷いていたが、

「そのお、いるみねーちゃんとはどんな女なんだ」と、よく判らない。

みんな、それには賛成した。

「なかなかいいアイデアだ。さすが、社長だ」みんな感心していた。ない知恵を絞ってもないのだが、三人集まっても文殊ではない。三十人集まっても烏合の衆。

「おらにもいいアイデアあるがら」と、青年団長が発言。

「来月オープンする道の駅だけんど、町の農協婦人部に協力してもらってよ、野菜果物さ自分の名前つけるのよ。いまは、誰が生産したか安心して食べられるものが受けているべさ。これは山田花子ばあさんが作ったかぼちゃと表示するべえ」

みんな拍手した。

「やはり、若いもんは先見の明がある。勉強しているな」と、みんなで誉めちぎる。青年団長はいい気分です少し鼻が高い。

「あどはねえが、なかなかみんないい考えで、白熱してると」

町長が煽る。すると、また挙手だ。今度は商工会の二代目。

「道の駅では、町の特産の納豆のソフトクリームを出したらどんだべ」

「ゲゲ、ネバネバと糸引くソフトクリームがい？」

みんな腕組んで首を傾げる。

「いまはよ、意外性が受けるんだ。どんな味がするがってな。もの珍しさだな」

「それよりだったら、まだ特産の食用菊のソフトクリームが綺麗だべな」と、同じ商工会の娘が提案した。

「それはいい。クリームの中さ、花びらが入って色目もいいべ」

「んだ、んだ」と、全員一致で決まる。さっそく、試作品をこしらえてみることにした。

「でも、何かお土産がねえべが」「そんだな、せっかく観光客が来てもソフトクリームは持って帰れねえがらな」

そこへ、菊を栽培している農家の長男が発言した。

「菊入りのラーメンはどんだべ。ご当地ラーメンは売れるど。麺さ菊を練り混んでよ、干し菊もスープの上で花開くと綺麗だしな、いい香りするべ。町でもあちこちで食べさせ、お土産に生麺と菊をパックして出すだ」

「ついでに菊入りのドーナツも出すべ」

どんどん連鎖反応でアイデアが飛び出す。それらはすべて試作してみて、次回の協議会で試食し、ネーミングとパッケージは専門家に頼むことにした。

「おらの町さも、頭いいもんがおる。まだまだ見捨てたもんでねえな」と、町長はご機嫌だった。

出されたアイデアはすべて実行された。そうして、いよいよ新幹線の開業の日。東京から一番の新幹線に乗って、観光客がどっとみちのくへやってきた。奥の細道ツアーの団体も来た。駅前の街路樹はすべて数万個という電球のイルミネーションで瞬いていた。大きなクリスマスツリーも設置されていた。駅前の食堂では看板やポスターをつけて、

「さあ、名物の菊ラーメンはいかが。お持ち帰りの土産もあるよ」と、呼び込みしていた。でも、観光客の誰も食堂に入らないし、土産も見ようとしめない。観光バスに乗り換えして、さっさとどこかへ行ってしまふ。イルミネーションも見ないし、クリスマスツリーも一瞥するだけで、ふんと鼻であしらったくらいでさっさと移動する。その様子を見守っていた町長は憤慨していた。

「なんで、都会もんは、この美しさが判らないんだべ。金もかけているというのに、チカチカとほれ、ちれいだべさ。どうして、われわれが何日もかけて知恵を出しあつた菊ラーメンを食べてみようとしなんだ」

道の駅に観光バスが停まっても、同じだった。菊ドーナツも売れない。菊入りソフトクリームも売れない。観光客は実に冷ややかな視線を送っていた。当然、生産者の顔が見える野菜も売れない。それほど景気が悪いのか。観光客の財布の紐は堅いと、みんな嘆いていた。

町の観光名所をひと通り見た団体がまた次の予定地まで行くのに、新幹線に乗るため、駅に戻ってきた。売上はさっぱり、新幹線効果はなし。頭にきた町長は、観光客のひとりを掴まえて、どこがどう不満なのか聞き出そうとした。

「あのう、失礼ですが、このクリスマスツリーは日本一なんです、感激しませんか。それに、このイルミネーションも綺麗です。菊ラーメンも食べてみましたか。菊ソフトクリームやドーナツはいかがでした」

観光客はうんざりしたような顔をして云った。

「もう、勘弁してくださいよ。行く先々で、ご当地のいか墨ラーメンだ、菜の花ラーメンだ、にんにくラーメンだと食べさせられて、食後になれば、黒すぐりソフトだ、メロンソフトだ、リンゴのソフトだドーナツだでしょう。商店街に行くとどこの町でもイルミネーションだクリスマスツリーだでしょう。どうして独創性がないのかしら。ステロタイプの日本人、物真似うまい日本人と悪口云われるの判りますわ。日本中、どこへ旅行しても同じなんですから。どこを切っても同じ顔の金太郎飴なんですから、もう結構よ。げっぷが出ますわ」

旅行者はみんな不機嫌だ。観光客が減るのも判る。

第311話 駅前留学

輝かしい21世紀のはずが、夢と希望がない現実の中で、大学生たちがコーヒーショップにたむろしていた。会社訪問もすでに諦めて、希望就職先を落ちるだけ落としても、いい口は定員オーバーの狭き門、みんな暗い顔をしてリクルート情報誌を開いていた。すでにこのこの就職難の日本に見切りをつけて、とりあえず、若者たちの夢は、この腐敗した日本を脱出することだった。

「どうだい、おまえんとは」

「うちの学部では半分が決っていない」「厳しいよな、経営学部でもこのざまだ。文学部や、教育学部じゃもっと大変だろう」

場香陀大学の学生たちは、時間稼ぎのために大学院に進むものもいたが、留学という手もあった。国際社会だから語学の堪能なものは、親の細い脛をさらに齧ってモラトリアムしようと考えていた。

「ただ、親が公務員だから、なかなか我家の家計では無理だろうな。渡航費用だけでも大変なのに、入学金、生活費の仕送りとなるとなあ」

「うちも、親父の事業が大変でな、心苦しい」

四年の中畑と村井は、それでもなんとかして海外逃亡をもくろんでいた。

「あなたたち、留学したいのよね、いえね、ちょっと小耳にはさんだから」

凄い美人のお姉さんが、彼らの席に寄ってきて云った。二人は警戒して構えた。

「無料で駅前留学したくない？」そらきたと思い、二人とも手で払うような格好をした。「違うのよ、英会話のキャッチセールスとは違います。駅前留学と云ってもね、英会話スクールじゃないのよ。駅前であって、本当の外国なのよ」

二人はきょとんとしていた。云っている意味が飲み込めないでいた。

「どこの駅前なんです。米軍基地とか大使館でやるということ？」

「そんなんじゃないの、すぐその駅の地下にあるのよ。でね、留学費用はすべて相手国でもつことになっているから、あなたたちには一切の負担がないのよ」

二人とも顔を見合わせて、そんなうまい話には必ず何かあるなど、疑いが先に立った。

「それって、ひょっとして高い教材を買わされるとかでしょう。よくある手口ですよ」女は笑って否定していた。

「そんな、一円だって頂けません。ちゃんと三食と宿泊施設も教材も支給されるわ。疑うんなら、いまから体験留学してみませんか。わたしについてきて」

二人は疑心暗鬼だったが、ともかくも美人について行くことにした。何か新しい発見でもあればいい。閉塞した時代に、頭を抱えている学生にとっては、何かチャンスを掴みたい気持ちでいっぱいだった。

私鉄の駅が地下鉄の駅とエスカレーターで繋がっている。女は地下鉄の駅の方へと降りてゆくと、通路の工事中的シートがかぶっている壁の前に立っていた。ちらちらと周りを気にしていた。するとシートの内側に入る。二人を手招きしているから、つられて二人も中に入る。壁と思われていたところが、開いた。いつも通る地下通路だったが、こんな入口があるとは思ってもしなかった。暗い穴倉のようなところに地下へ降りてゆく階段がずっと続いていた。いくつものドアを開けて入り組んだ迷路を歩いてゆく。すると、いきなり、天井の高い広い場所へと出た。照明が戸外のように明るい。多くの人間たちが往ったり来たりしていた。

「こんな広い場所が都心の地下にあったなんて...」と、二人とも驚愕して立ち尽くしていた。

「ここはね、戦前からあったのよ。日本帝国が朝鮮人を強制労働させて作った、シェルターの跡なのよ」

「どうして、こんなものが、いままで知らされていなかったんだ」

「時の首相は、原爆開発でアメリカに遅れているのを知っていたのね、それでいずれは東京にも原爆投下はあるだろうと、それで十万人を収容できるシェルターを地下百メートルに急遽造ったのね。それは、終戦と同時に朝鮮人労働者をこの場で虐殺したから、すべてが闇に葬られたってわけ、歴史にも残らないし、秘密裏に造られていたので、GHQもこの存在を確認できなかったのよ」

最初のゲートがあった。カーキ色の軍服を着た衛兵が、身分証の提示を求めた。認識標らしいカードを機械に翳すと、ランプが消えて、ゲートが開いた。嚴重に人手と機械と二重にチェック体制がとられていた。

「ここから、もう外国なのよ。あなたたちはパスポートもビザも持っていないけど、特別措置で入国できたの」

内部は近代的というより未来都市のように創造もつかない地底国家になっている。東京の地下にこんな都市が存在すること自体が信じられない。みんな、スターウォーズに出てくるような制服を着ていた。いろんな国の人間がいるようだが、多くは日本人のような顔をしていた。ただ、会話は英語とハングル語だった。中には床屋も書店も飲食店もある。ちょっとした商店街で、なんでも売っているようだった。コンビニや映画館まである。この地下帝国ではなんでも揃うようだった。移動のときの乗り物は電気自動車だ。

二人は入国管理事務所連れてゆかれた。何を研究しているのか、白衣姿の科学者や兵士の姿ばかりで、民間の人間の姿が目につかないのもおかしい。

「×◁○◇±≠□(二名を連れてきました)」女は直立不動の格好で、敬礼すると、正面の机に座っている上官に報告していた。

「×◎△□(ごくろうであった)」何語を使っているのか、二人には聞き取れなかった。

「おい、何かヤバイ雰囲気だぜ。戻ったほうがいいんじゃないのか」

畑中は村井に囁いた。

「そうだな、映画のセットみたいだが、どうも大変なところらしい」

女は振り向いて、二人に用紙を手渡すと、すべて記入するよう求めた。英語で書いてあるから判るが、どうやら履歴書のようなものだった。

「あのう、ぼくたち、帰りたいんですが、もう遅いし、バイトがあるもんで」と、村井が女に話すと、そのことをまた上官になにやら話していた。すると、いきなり、小銃を持った兵士が六名、二人の両側に立った。

「残念だけど、もう入国手続は終わったのよ。留学の準備が進められているから、いまさら撤回はできないのよ」そう女はちからなく笑った。

「だって、ここは、なんという国なのか、まだ国名も聞いていないし...」

畑中が抗議すると、村井が横から肘でどついた。

「おい、あれを見ろ」

上官の座っている机の後ろの壁に、北朝鮮の国旗と、金正日の大きな写真が飾られてあった。

第312話 笑う門

暗い年末だった。株価は下がる、イラクとの戦争は着々と準備されている。その影響で世界経済がまた打撃を受けるのは目に見えていた。北朝鮮との問題もこじれていた。長引く不況で大型倒産が相次ぐ。失業率が上がり、新卒の就職率もますます落ちた。いい話のひとつとしてない。来年は今年よりもっと悪くなるだろうと、予測されて将来に希望がない。公務員の給与賞与も減額されて、消費低迷に拍車をかけた。ストレスを感じる人がかなり増えた。それによって成人病や癌も増えた。犯罪も増えて、世の中物騒になってきた。あちこちで、スリ万引き、強盗、殺人、誘拐、汚職が激増していた。

新聞を見ても、テレビをつけても暗いニュースばかりで、気が滅入ってくる。こんな時代に何をしたらいいのか、人々はおろおろするばかり。

ただ、一軒だけ、粗末な家に住んでいる北村さん一家だけは、いつも笑いが絶えない。近所の人も、覗きにきて、首を傾げ、「借金だらけで一家揃って頭がおかしくなったんでないの」と、噂するほど、外まで笑い声が聞えていた。父ちゃんは去年、リストラに遭ってから仕事がない。母ちゃんは内職とパートでなんとか家計を支えていた。息子は就職あぶれ組。高校卒業してから二年ぶらぶらしている。娘は自閉症で不登校。ばあさんは寝たきり。借金が溜まり、国保税も滞納して、差し押さえときていたし、電話はとっくに止められて、電気もつい昨日停められた。真っ暗な家から笑い声だけが聞こえてくるのは不気味だった。誰しもとうとう発狂したかと思わ

さる。

真っ暗な顔も見えない部屋に一家がただじっとしていて、本も読めない、テレビも点かない、家事もできない。そんなところにいると、急に可笑しくなって笑いたくなった。貧乏の挙げ句の果ての笑いあい、だ。

母ちゃんがトイレに行くのに、手探りだ。水道まで止められたらどうしよう。誰かが云った。水洗便所も流せないから大変だ。また笑う。貧乏のどん底がこんなにばからしく楽しいこととは思ひもしなかった。あまりのばからしさに寝たきりのばあさんも起きてきた。

「あれ、ばあちゃん、体はいいのかい」と、父ちゃんが訊くと、

「こんな、ろうそくもない家で寝ていられますかい」

また笑う。

「わたし、明日から学校へ行くわ」と、急に不登校の娘が云いだした。

「なんでまた急に」と、みんなきよとん。「だって、暗くてつまらないし、学校でトイレに行けば、紙と水の節約になる」「そりゃ、違えねえ」また笑う。

家族の会話が戻ってきていた。

隣近所が、その話を聞いて、ゲタゲタ笑った。

「なんと、笑ったら寝たきりのばあさん起き出して、ひきこもりの娘が学校へ行ったと」下町には久々の可笑しい話だったので、何度も同じ話しては笑いあった。すると、隣の隣のまた隣の癌であと三ヶ月と宣告された主人が、顔色がよくなってきた。日頃、死ぬことばかり考えて、青白く痩せていたのが、近所のばか話が聞こえてきて、笑うこと。

「何かい、向こう端の家から電気を止められて、だんだんうちに近づいた。みんな電気代滞納しててな。それでね、中学の娘が、灯りがいいから、我が家まで来て玄関にしゃがんで宿題してると」

「そうそう、NHKが集金に来て、隣の奥さん、NHKの電波だけ停めてくれとさ」

貧乏の話は面白い。昔から落語のテーマだ。熊さん八つつあんの長屋から、庶民の笑いは絶えない。みんなが一挙に貧乏に叩き落とされて、逆に落ちるところまで落ちると忘れていた笑いが沸き起こった。

「あんた、向こう隣のご主人ね、癌で宣告されていたでしょ、顔色いいから病院へ行ったら、すっかり病根が消えていたんですってよ」

癌は笑うことで退治できる。

それを聞いて、昔の「笑う宗教」が復活した。大通りをわははは、きゃっきゃっ、ほほほほほと大声で笑いながら、行進する信者たちがいた。それを見て、商店の親父も笑った。破産して、首吊りしようと、鴨居にロープをまさにつけようとしていた一家が、笑った。みんな、笑いながら行列についてゆく。

病院でも患者に笑うことを勧めた。注射や薬より、笑う治療と、医者も患者の前で、「ええ、毎度ばかばかしいお笑いを」。それでも笑わない患者には、看護婦さんが無理矢理小脇をくすぐる。「や、やめてください。くすぐったい。ケケケケケ」

どんなことをしても笑わない人には、笑い草を処方する。街中、いつも笑いに包まれていた。

政府も笑うことを奨励し、テレビ番組はすべてお笑い一色にさせた。シリアスなドラマでも落

ちがあり、最後は大笑い。逆に笑い過ぎて死ぬものが後を絶たない。病院に笑い病の患者が運びこまれる。

「先生、ふふふ、どうしても、ははは、笑いがとれなくて、くくく、疲れるんですよ」

そうかと思うと、お寺からは通夜の席で笑い声が漏れてくる。

「ほほほほ、このたびはご愁傷さまでした。ふふふふ」

「くくく、遠いところありがとう、はははは、ございました。父のために、ははは」

年末で、七福神が各家庭を回っていた。どこの家庭からも笑いが聞こえてきていた。

「なんだ、みんな幸せそうじゃないか。なあ、大黒さん」

「そうじゃな、福祿寿さん。わしらの出番はないようじゃな。もっと悲惨な国へ行こうとするかい」

そうして、七福神たちは日本を離れた。笑う門に福は来なかった。

第313話 体臭小説

若い男性の香水が流行っている。男の香水といっても昔からあるもので、目新しいものではない。以前はオードトアレが流行ったときもあった。袖口や襟元に振りかけて会社へ出かけるのは、男のおしゃれでもあり、エチケットでもある。最近は何かに敏感な人間が増えた。先祖は犬ではなかったのかと疑いたくなるような嗅覚が鋭い人間が増えて困ることもある。そんな人間が朝のラッシュの電車に乗ったら大変なことになる。中年女性はやたらふんぷんと香水をつけて、強い匂いに具合が悪くなるほどだ。中年男性の整髪料の匂いも、古典的なきつい匂いで漂う。加えて、いまの若い男性の独特なフレグランスも自分では好きな匂いと思っけていても、他人はとても耐えられない匂いだったりする。年寄りには香水はつけなくとも、人間の腐ったような匂いがする。多分、風呂に長期間入っていないとか、着換えをしないせいで、そんな腐敗臭が染みついているのだ。そんな、様々な人間の匂いが結集し、凝縮したのが満員電車だ。洋服の樟腦の匂い、黴臭い匂いも混ざって、それはそれは複雑で、耐え難い匂いのハーモニーを醸し出す。

口臭や体臭で悩んでいる人がどれほど多いか。新聞の広告を見ても判る。ドラッグストアで売られている商品群を見ても判る。神経質なほど気にする人が多いので、いろんな商売が繁盛するのだ。

デパートのテナントで「フローラ」という香水とアロマセラピーの専門店があった。その専門セラピストでアドバイザーの最上亜也子は、店長として、その店を切り回していた。いろんな、心の病んでいる人も来る。癒し系の筆頭なので、人気はあった。いろんなアロマの効能に則り、ブレンドして可愛い瓶に詰めて売るのである。各国の様々な香水も売っている。

「あのう、わたし、職場で差別されているんです」地味な服装だが、二十歳過ぎか、綺麗な女の人が相談にきた。どこかユン・ソナに似ている。

「わたし、匂いしませんか」亜也子が、女の人に鼻を近づけても、そう匂うようなことはない。「さあ、全然匂わないけど、気のせいじゃないかしら」すると、その女の方は急に泣き出した。「どうしたんですか」

「わたし、朝鮮人なんです。みんなからキムチのにんにく臭いってバカにされて...」

「ひ、ひどい。そんなことを。許せない差別だわ。拉致問題でここまで虐めがあるなんて。気にしないでね、日本人だって納豆くさいかも知れないし、ヨーロッパの人は味噌汁の匂いが嫌いな人が多いのよ。チーズを食べるから臭いだの、白人にもそう云うのを聞いたことがある。偏見と文化の理解がないのね。悲しいわ。でも、そんなに気になるのだったら、フローラル系のラベンダーなら無難だけどね。気分も変わるわ」

以前、わきがの匂いが強烈で、彼氏に嫌われ、失恋自殺まで考えたうら若き女性が相談に来たこともあった。どうしても体臭のきつい人もいる。そんな人には、シャワーのあとに、腋の下や臍の周り大腿部の内側など、隠れる部分でべたつくところを化粧水で拭いて、ジュスペールを匂わせる。亜也子はそう指導する。店では制汗用化粧品も売っている。もともと体臭というのは、アポクリン腺から皮脂のねっとりとした汗といっしょに分泌されるものが原因となっている。その臭うところを脱毛クリームなどで腋毛を除去してから制汗用のローションやスプレーで抑えるといい。

午後には店に若い男性客が来た。むっとする臭いはタバコ臭だ。もう、服や髪にも染みついでとれない。

「彼女に嫌われて」「そりゃそうよ。一日何本吸うんですか」「五つかな」「五本くらいならそうでもないわね」「いいや、五箱」「ヘビースモーカーね。いまは、吸わない人が多いから、嫌われるでしょう。臭いのしない軽いタバコに替えて、フレグランスで人気のあるサムライを使ってみて。髪はとくにまめにシャンプーなさいな」

臭いの原因は嗜好にもある。職業柄にもある。乾物屋さんではそれなりに、廃品回収から、薬品工場など、それぞれの臭いが染みついでしまう。それは仕方のないことだ。体臭は、コンプレックスも引き起こす。口臭などは、会話もできなくなり、自信喪失から性格まで変えてしまうことになる。いい香りと自信を売るのが亜也子の仕事だ。

「仕事がきつくて、ストレスが溜まるもんで、何かいいアロマがないかと...」

サラリーマンにはリラクゼーションを求めるために利用する人が多い。

「そうですね、柑橘系よりグリーン系がいいでしょうね。ほら、ひばの香りです。森林浴みたいでしょう。トライアルセットもありますから、いろいろお試しになったらいいですよ。お風呂に入れてもいいんです。すべて、ピュアでナチュラルなものばかりですから、安心して使えます」

「ううん、何か田舎を思い出しますね。夏休みの、神社の蝉の鳴き声だ...」

臭いはまた、遠い記憶を引き出すパスワードにもなる。ずっと忘れていた臭いに突然出会うと、その場面がフラッシュバックするのだ。

夕方、恰幅のよさそうなダブルのスーツを着た紳士が店にやつてきた。あまり、立ち寄らないタイプの人種だ。

「わしの臭いを消すアロマか香水がないかのう」

「どうされました？」

「なんとも、臭う臭うとみんなが煩くて。この臭いを取る香水じゃがのう」
亜也子が顔を近づけてみても、何の臭いもしない。みんながそう云うからには、亜也子には臭わない、特別の体臭なのかもしれない。それで、エッセンシャルオイルをブレンドして、あれこれと試してみた。翌日、また、その紳士がやってきて、どうも、何をつけても効果がないようだと言う。怪しい臭いがすると云うのだ。どんな香水も紳士の放つ臭いには負けてしまうようで、とても太刀打ちができない。こんな客も珍しい。

「あのう、失礼ですが、お仕事は？」
あまりに特異体質なので不審に思った亜也子は紳士に訊いた。

「わしか、わしは政治家じゃよ」

第314話 ないものはない

国連の査察で、戦略核の保有を否定したイラクは、とうとう問答無用でアメリカと同盟国によって、宣戦布告された。

核を保有していないと云い切るイラクに対して、アメリカは諜報員や、亡命者、元イラクの科学者の証言により、確乎たる核の存在を認めていた。イラクの申告書は嘘であると確信しての戦争だった。今度は、前回のような中途半端では終わらせない。きっとフセインとアルカイダの組織を根こそぎ壊滅してやると、いきまっていた。

艦砲射撃とミサイル攻撃から始まった湾岸戦争は、地上部隊も投入して、イラクの三方向からの進撃が始まった。軍事拠点、通信設備、首都の建物はことごとく破壊された。空港も港も鉄道、国道も使用不能に陥り、フセイン政権は包囲された。包囲網がじわじわと縮小してゆき、ついに、政府が立て籠もる村に連合軍が侵攻して、あえなくフセインは降伏した。イラク全土が連合軍によつて掌握されると、今度は本格的な戦略核の捜査が始まった。捕虜にされた士官クラスの証言により、確かに原爆はあったという場所も資料もみつかった。

アメリカは隠されている核を探すに必死だった。広い国土の中を虱潰しに探すのは至難の業だ。いろんなハイテクの探索機械を使っても、なかなか見つかるものではない。きっと、想像もできないところに隠しているに違いないと、捜査隊は絶対にこんなところには隠さないだろうというところばかり探していた。家庭の冷蔵庫の中や、便所の中、デパートのショーウィンドウに飾られているかもしれない。幼稚園の遊び道具箱の中とか、地中に埋葬した棺桶の中まで探した。砂漠の砂を掘り起こして、これでは何千年かかるか判らない。

どこへ隠したか、知っているのは幹部だけである。大臣クラスは自殺したり、戦死したりして、大統領とその側近だけが捕虜となっていたが、これがなかなか口が堅く白状しない。催眠剤を注射して、自白させようとしたが、自ら暗示を強くかけているようで、

「さあ、核をどこに隠したか云えばすごく楽になるがね」

「ううん、ステーキにして食べてしまった。うまかった」とか、

「ないものはない。あるものはあるが、ないものがあるとはこれいかに」とか、心理的にもガー

ドが堅い。

逮捕されたフセインはアメリカの高官と対話していた。

「どうですか、隅から隅まで探しても、わたしの云った通り、原爆なんかなかったでしょう。あの膨大な申告書は真実だったのですな。わたしはアッラーの名に誓って嘘は云いません。さあ、これであなた方の戦争は、大義名分を無くしました。ただの侵略戦争ということになりました。この責任は国際世論で問われるでしょうな」

フセインは開き直って、余裕のある態度で望んでいた。アメリカの高官は焦っていた。デパートで掴まえた万引きが商品を隠し持っていなかったときと同じだった。さあ、一体、どうしてくれる。

「それでも、事実、この国には確かに原爆が存在した形跡がある。それは揺るぎない証拠もある。持っていたものが、いまはない。隠したのでないとすれば、国外に持ち運んだと考えるしかない」

フセインは不敵に笑って、

「ふんふん、あなた方はシュワルツネッガーのアクション映画がお好きですからな。スパイ小説、探偵小説もおおいに受けている。わたしも、探偵のスペンサーは好きですがね。あなたはお読みですか？」

完全にフセインのペースに嵌っていた。

「これは、国際的冤罪ですな。いいがかりです。かつて、あなたがたはそうして黒人を罪に陥れました。いまは、ムスリムですか」

フセインの皮肉も真を突いている。

とうとう、根負けしたアメリカはフセインに交換条件を提示した。

「もし、核の在処を白状したら、あなたがたを国土の四分の一ですが、独立国家として残すことを約束しましょう。そして、あなたがたの身の安全も保証しましょう」

フセインの髭がぴくりと動いた。そして、しきりに腕時計を気にしていた。ようやく、フセインは自白しはじめた。

「よろしいでしょう。原爆は五つ持っていました。いまは、この国のどこにもありません。捨てました」

高官たちのどよめきが聞こえた。

「捨てたってどこへ？」

「確か、アメリカの日付で今日が粗大ゴミの回収の日でしたな。あれも粗大ゴミですから、ニューヨークとシガコとロサンゼルス、ワシントン、そうそうロンドンのそれぞれのゴミの回収場所にね」

すると突然、取調室のドアがけたたましく開いて、情報員が飛び込んできた。

「大変です。閣下、ワシントンと連絡が突然途絶えました」

またひとりの通信員が飛び込んできた。

「閣下、ニューヨークと通信が途絶えました」

「何かあったようです。シカゴとも連絡がつかません」「閣下、ロンドンにも...」

第315話 大雪

首都圏に雪が降った。不意打ちの雪で、交通麻痺を起こしていた。車は当然、夏タイヤだからスリップして追突事故。あちこちで立ち往生して、大渋滞を引き起こしていた。電車も不通になっている線が多い。走れる線は徐行運転をしていたので、ダイヤは大幅に狂って都民の足を奪うことになった。

北村拓春は、この春に青森から上京して就職したばかり。大雪の意味が呑み込めないでいた。会社の上司に雪掻きをするようにと命じられて、本社ビルの前を見たが、せいぜい2センチの積雪。青森では、そんなものは積雪とは云わない。

「あのう、雪って、どこにあるんですか」と、雪ベラを手にして事務所に戻ると、上司に怒鳴られた。

「おまえは目も悪いのか。雪がこんなに積っているのに、見えんのか」

「はあ...」と、仕方なく歩道にうっすらと積った雪を箒で掃いていた。みんな大騒ぎして、駐車場にも社員総出で雪掻きをしていた。

「何だ、北村、やる気あるのか。箒で掃くとはなんの真似だ」と、また叱られる。女子社員たちが次々に滑って転ぶ。頭でも打ったら危ない。雪を知らない南から来た社員もいるから、拓春は歩き方を教えてやった。

「こうして、ガニ股で歩くんだ」

と、歩き方講習会。みんな恥ずかしそうに笑って、

「いやだあ、そんな格好して歩くの」

雪はやむこともなく降り続いていた。

昼休みに社員食堂で、拓春が青森から来たということで、みんなが、いろいろと訊いていた。

「あっちは豪雪なんだって、凄いんだろうね」

「それはもう、凄いつてもものじゃねえな。冬用に家の二階に玄関が別についているくらいだ」

「ふうん、凄いね、それは」みんな感心して聞いている。

元来、大風呂敷で話の大きい拓春は調子に乗って喋りだした。

「2メートルから3メートルは積るから、通学するときにはみんなスコップを手にしてトンネルを掘って進むんだ」

「じゃ、車はどうするのさ」

「ああ、みんな特製のキャタピラを履いて、ラッセル車にしてしまうのよ」

「毎日、外でスキーができるね」

「できるってものじゃない、買物に行くのはスキーで行くし、バスの代わりに馬糞だね」

「すっごく寒いんでしょう?」

「寒いってものじゃない、ケイタイで電話していると途切れるんだ。電波が時々凍って落ちるらしい」

「青森って、北海道の向こうなのよね」と、聞く方もまるで地理感覚がないときている。ものすごい田舎といった認識だ。

「冬になれば、山から白熊が降りてくるし、ペンギンも町をうろつくし」と、ここまで云うと、みんなデスクに向かい、

「さあ、仕事、仕事」と、拓春を相手にしなくなる。

今年は無常気象が一年続いた。エルニーニョ現象もあるが、どこか自然が狂いはじめていた。朝からの雪は止む気配もなく、ずっと一日降り続いていた。都心で三十センチくらいの積雪は過去もあった。今度もそんな勢いで降っていた。

ただでも暇な商店は、全く客が来ない。車で買物に来る郊外の店は全滅だった。売れて売れて嬉しい悲鳴を上げているのは、ホームセンターなどで、雪ベラやスコップが品切れするほどだったくらい。それと、靴屋さん。ブーツなど雪靴が売れていた。

除雪が間に合わないので、他県にも要請を出して、自衛隊まで出動するほどの雪になった。雪は湿ったぼたん雪になった。北国では、こんな雪はのつつのつつと積るのだ。風もなく、音もしない。静かに降る雪は積ると云う。

拓春の会社では、すべての業務が変更になった。来客の打ち合わせも中止、納品も遅れ、宅配便も来ない。郵便物も遅配されていた。一日、電話とパソコンのメールだけで連絡を取り合うこととなった。すべての会社がそうだった。もともと豪雪の対策のない都心では、記録的な大雪というものに太刀打ちできない。

その日は結局、仕事にならないので、拓春の会社は早めに業務を切り上げて、明日に備えることにした。いつもは残業で九時過ぎに帰っていた拓春も六時前に帰れる。何か、大雪で学校が午前授業になったときのように嬉しい。

「おい、たまに、雪見酒と洒落ようか」と、上司が酒に誘うから、数人がついて行った。駅前の居酒屋チェーンはそんなサラリーマンたちで満員だった。食べるものを注文しても、あれもないこれもないだ。食材もその日その日のものが入らないから、冷凍食品や定まりきったものしか出てこない。

酔って帰ろうとしたが、タクシーは走らない。電車もストップだから、仕方ない、遠回りして、のろのろ運転していても、動いている線を乗り継いでアパートまで帰らねばならない。あとは歩きだ。みんな、暗い道路をぞろぞろと電車のストのときのように歩いていた。夜更けても雪は止むことはなかった。

翌朝、拓春はケイタイの着信で起こされた。

「誰」と、寝ぼけていた。

「わだ」「和田さん?」「何ほんじねごと云ってるんだ。我だ」「ああ、おやじか」電話は青森のおやじだった。珍しい。余程のことがなければ電話などかけてこないものを。

「どれぐらい雪が積っているだ。いま、臨時ニュースで騒いでいるだども」

「はあ、何を云っているの、雪なんか三十センチぐらいで、みんな大騒ぎしているんだ。バカみたいだ」「そんでね、よぐ外ば見でみろ」

拓春はアパートの一階に住んでいたが、カーテンを開けると、何も見えない。白一色だ。

「何なんだ、これは」と、窓を開けたものだから大変だ。どっと雪が入ってきた。蒲団の上も机の上も雪でいっぱいになった。慌てて、玄関のドアを開けようとしたが、なかなか開かない。ようやく開けると、雪の壁が一メートル以上ドアに押されて型がついた。すでに通りは見えない。急いでテレビを点けてみたが、電気がつかない。停電だった。携帯ラジオをつけてみた。ニュースが入っていた。

一気象台開設以来の首都圏の豪雪は東京で午前六時、積雪一メートル二十センチ、横浜一メートル五センチ…。停電も含めて、すべての都市の機能が停滞しており、政府は非常事態宣言を発令、自衛隊などの救援が雪に埋もれたり、重みで潰された家で救助を待つ人の捜索に向けられています。

雪は非情にも止むことなくどしどしと降り続いていた。まるで、東京を白く塗った墓にでもするのように……。人間たちへの復讐のように……。

第316話 迷えるメール

いつものように、出戸幸久は会社から帰ると、パソコンにメールが入っていないか、チェックするのが習慣になっていた。郵便受を見るように受信ボックスを開けてみる。仕事の件では入らない。あくまでも自宅のパソコンはプライベートで使っているから、友人やメーリングリストの仲間だけから送られてくる。最近は、添付ファイル付のウイルスメールや、どこで調べるのか、未承認広告の業者のメールが多く、いつも二十通は届いていた。今日は、その中に見ず知らずの女性からのメールが入っていた。アダルトサイトへの勧誘のいやらしい女性名で来るメールとは違う。いつも来る、さも友達のように装い、タメ口の若者言葉で送りつけてくる怪しいメールとは少し違っていた。間違いで送ってくるメールのようだった。

一夕起久、ごめんね。こんな結末になって、怒らないでね。わたし、たったいま、手首を切りました。あなたに怨みなどない、愛している気持ちはこれからもずっと続くと思う。だんだん離れられなくなってゆくのに、わたしはあなたからとても遠いところに行こうとしている。血が止りません。さようなら

幸久はメールの文面を見て驚いた。受信した時間はつい五分前だ。いま、自殺しようとしている女の子がいる。どうすればいい。悪戯とは思えない内容だから焦った。ともかく、そのまま宛先間違いですと、タイトルを入れて返信してみた。ところが、何回も送信してもエラーが出て送れない。いまなら、まだその女の子を助けることができるかもしれない。幸久は、自分が間違っても受け取った何かの重大な責任を感じていた。手首を切ると人間は何分で出血多量で死ぬのか判らない。ただ、一刻を争うことは事実だ。時計は夜の九時を七分過ぎていた。むこうから来たメールはアドレス帳に保存すると、登録されるのに、そのメールにはアドレスがなかった。

「そんな、バカな」

返信メールも戻ってきているから、何か向こうで操作しているのか。それでは、相手の夕起久という男性になんとか連絡を取りたい。どうすればいい。幸久は考えた。多分、間違いで送信したのだから、女の子はまだパソコン歴が短いビギナーなのだ。普通なら、それほど親しい人なら、アドレス帳に入れておくものだ。そこから相手先を選んで送信すれば、間違いがない。それなのに、こうして、アドレスを間違えるよういちいち打っていたとすれば、アドレス帳の使い方も知らないのだろう。幸久はそう推理していた。

ひょっとして、同じユキヒサだから、アドレスは自分のと似ているかもしれない。幸久のアドレスはyukihisa007@hotmail.ne.jpだ。スペルは間違いがないから自分に届いたのだ。問題は007のところは怪しいということになる。数字キーで押し間違えるとすれば、隣りの数字だろう。ゼロは間違えにくい。ということは、7の周辺に指が触れたということかもしれない。相手は004か005か008のいずれかだろう。幸久はそう推測すると、急いでその数字だけを入れ替えて、間違いメールを相手に転送するようにした。いきなり転送しても驚くだろうから、コメントもつけた。一間違ってメールが届きました。相手の人に心当たりがあれば、急いでください。自殺しようとしています。似たアドレスにお送りします。もしも、違っていたらごめんなさい。

出戸幸久

その三通のメールのうち、二通は宛先人不明で戻ってきていた。008の相手から、すぐに返事がきた。

—はじめまして。楠田夕起久と申します。メールを転送していただきありがとうございます。そのメールですが、本当に今日、受信されたのでしょうか。ご返事お待ちしております。

幸久は、文面からして、相手の男性に間違いはないとしても、実に悠長に構えているのが気に入らなかった。こっちは赤の他人なのに焦っているというのに、当の本人が余裕のある文で返事してくる。

—一刻の猶予もありません。急いで駆けつけないと間に合わなくなるかもしれません。向こうから送信されてきたのは九時二分です。もう三十分も経過しています。出血多量で死んだら大変です。救急車を向わせてください。

幸久はそう、返事を出した。すると、向こうからまたメールが来る。

—そうですか。日付も今日だったのですね。あなたはどちらにお住まいですか。逢えるのなら、いまからお逢いしたいのですが。

そのメールを開いて幸久は驚いた。きっと、この男には相手の女性に対する愛情はこれっぽっちもないんだ。むしろ、死んでくれたほうが助かるのか。だから、時間稼ぎをしてのりくりりとやっているんだ。これじゃ、まるで自殺幫助罪じゃないか。幸久は憤慨していた。

何かの関わりでこうしたことになったので、幸久は同じ名前の男に逢ってみたくなった。相手の住所は、横浜の菊名、幸久は反町。同じ東横線の沿線で近い。相手の男は反町の駅前の喫茶店にこれから行くという。十時に待ち合わせをすることになった。幸久は証拠のメールをプリントアウトして持参した。どうした経緯でそうなったのか、聞きたい気持ちもあった。それにしても、自分の推理が正しく、この広い日本の中から探し出すとはと、幸久はすっかり探偵になった気分でした。

反町の駅前の喫茶店に若い男性はひとりだけ待っていた。あとは、女性客だけだ。幸久は、そのコートを着たまま、コーヒーを混ぜていた男に近づいた。

「あのう、楠田さんですか」男は暗い顔をして、幸久を仰いだ。

「ああ、出戸さんですね。はじめまして」

何か男の目に涙のようなものが光っていた。幸久は座ると、そっとメールを差し出した。

「確かに、これは久美の打ったメールでしょう。ぼくは、始め悪戯かと思いましたが。でも、君の真剣なメールを見て、本当のことだと思うようになりました。でも、信じたくありません」
幸久は苛々して云った。

「ところで、久美さんとやらは助けたんでしょうね」

楠田は首を横に振った。

「手遅れだったんですか」幸久は怒りに似た感情で震えていた。

すると、楠田夕起久は、静かに話した。

「久美は去年の今日、九時二分に自殺したんです。今日が、命日でした。ぼくがバカだったんです。そのメールを受け取ってれば、助けたかもしれない...」

幸久はぞっとした。あの世にもパソコンはあるのか。それとも、本人が打った最後のメールがネットのウエイヴの中をさまよっていたのか。

あなたも、アドレスのないメールを受け取ったときは、気を付けたほうがいい。

第317話　ただ、なんとなく

藍子は大学の図書室より、キャンパスを見下ろしていた。女子大に入って、何をしたということもなく、四年が過ぎようとしていた。四年間で学んだことは何だろうか。得たものがあつたのだろうか。本は何冊読んで、映画は何回観て、デートに誘われて何回断ったか。一番大事な時間をただ、足踏みしていたような気がする。バイトしたり、遊んだりしていたことより思い出に残っていない。就職もまだ決まっていない。リクルート情報をチェックしながら、会社訪問もしてきた。面接試験も両手に余るくらいしてきたが、みんな不採用。

「君は、どうして我が社を選んだのかね」

会社の人事部長がそう質問した。面接の常套句だ。

「ええ、ただなんとなく……」藍子の答えはいつもそうだった。

面接の幹部たちがざわめいた。

「君は趣味覧に映画鑑賞とありますが、どんな映画が好きなのかね」

「その、ただ、なんとなく……」

当節の若者の語尾上げにもある、自信のなさ、煮え切らない態度。藍子が特異な存在ではない。

そんな曖昧な対応で面接で落ちた。はっきりとした答えを持っていない典型的な若者だった。そんな藍子にとって、大学というところも、ただなんとなくいたにすぎない。学歴という花嫁道具か、教養という化粧品か、はたまた時間稼ぎか、いずれにしても専攻で突き詰めたものもなく、知識も浅薄で役立たず。花がつくだけの女子大生で終わるのか。

藍子はただ、なんとなく卒業した。感慨はまるでなかった。どこでもいいと、三流の商事会社の事務員として就職してしまった。これといって将来への希望も夢もなく、ただ、なんとなく仕事をしていれば、無意識のうちに一日が終わる。家に年頃の娘が仕事もしないでいることは世間体も悪いから、何か社会に出ていけばなんとかなりそうな、そんな安易な考えもあつたが、自分でも自分の気持ちが掴めないでいた。時代へのアンニュイな気分と、フジイな感覚だけで答えを出せないでいた。

そんな藍子にも恋人がいた。好きだけど、それほど愛して愛してたまらないといったものでもない。そばにいれば便利かなといった程度だ。いつも、逢いたいとケイタイしてくるのは男の方だ。藍子は清楚な感じのするひと昔前の美人かもしれない。相手の青年は合コンで知り合った、産業コンサルのエリート社員でスマートなスポーツマンタイプの裕樹だ。二個上になるが、がたいが大きいから、ずっと年上に感じる。

「君って、何か支えてやらなければ倒れそうで、見てられないよ。ぼくはいつも心配して、どうしているかなって、ときたま、親が子供を思いやる気持ちってこんなかなって思うときがある

」

裕樹は危うい藍子を放っておけないのだった。一見か弱そうに見えるからだが、藍子は優柔不断なだけなのだ。

「どうして、君は自分の意見を持たないんだ。好きとか嫌いとか、いいとか悪いとか、可笑しいとか悲しいとか、喜怒哀楽にも欠けるところがあるね。まあ、そんな、はっきりしない曇天の君が好きなのだけだね」

裕樹は、ズケズケとものを云う現代の女は嫌いだった。藍子のように、ぼんやりしていて、何を考えているのか判らない無口な女の子のほうが居心地がいいのだ。

藍子は、ただ、なんとなく仕事ならぬ雑用を会社でしていた。お茶汲みでもコピー係でもよかった。パソコンで伝票を入力していても、それだって、単純作業の繰り返しだ。それより、メッセージを頼まれて、書類を届けに他社へ行ったり、外をほっつき歩いていほうがいい。ぶらぶらと目的もなく歩いている藍子がよく目撃されていた。よく、車に轢かれないものだともみんな心配する。

「君は、いつも何を考えているの」と、裕樹に聞かれるが、答えはいつも、

「さあ、ただ、なんとなく」だった。

裕樹は、このままではいつまでも埒があかない交際になるので、一方的に求婚して、どうせ、相手からは返事も何も貰えないんだからと、主体性のない藍子を強引に結婚するよう勝手に決めていた。決断力がないし、意見を持たない藍子は、積極的な裕樹に引きずられるように、ゴールインした。式場も日取りも、新婚旅行もすべてが、裕樹によつてお膳立てされていた。

そうして、二人だけの新婚生活が2DKから始まった。子供ができるまでと、藍子はいままで通り仕事はしていた。新婚の輝きも初々しさもない。セックスだって、感激も快感もないときている。そんな藍子に、裕樹はだんだんと嫌気がさしてきた。メリハリのない生活、相手は木偶の坊だ。ただのお人形さんと話しているようなものだ。これでは、ダッチワイフと生活していてもなんら変わらないだろう。裕樹は次第に外で遊ぶようになる。それが隠れてする必要もない。藍子が怒らないのは判っている。それで、酔っぱらって、彼女を堂々とマンションに連れてくるようになった。

「いいんだよ、こいつはうちのただのメイドなんだから」

「遠慮するな、ここはおまえの別荘だと思えば、なあ、藍子、おまえも賛成だろう」

「気にするな、奥さんの前でいちゃついて何処が悪い。こいつには人並みの感情ってものがないんだよ。離人症って知ってるか。こいつのことだ」

裕樹は愛人を藍子の前で平然と抱くようになった。それでも藍子は嫉妬するわけでもない。黙って見ている。

「ほらな、置物みたいだろう。怒らない、妬かない、泣かないときたもんだ」

実際、藍子は自分が何を考え、何をしてもらいたいのか考えあぐねていた。悲しくもなんともなかった。映画のスクリーンのようにすべてがただ流れていっている。夫が愛人と目の前で全裸で抱擁しあっている。それも日常的な一場面に過ぎない。藍子は、台所へ立ってゆくと、出刃包丁を取り出した。別に二人とも憎んではない。藍子は無表情のまま、裕樹の背中を刺した。肩胛骨の左下を刺したので、心臓へと達していた。ものすごい血が噴き出しても、藍子は顔色ひとつ変

えなかった。

藍子は通報で駆けつけた警察官に身柄を拘束されると、殺人の現行犯で警察署に連行された。血のついた手と顔をそのままにして、たったいま人を殺したとは思えない平気な態度をしていた。刑事は尋問していた。

「どうして、あんたは平然としてられるんだ。亭主を殺そうと計画していたのか。どうして殺した」

すると、藍子は数学の答えを云うようにぼつりと話した。

「ええ、ただ、なんとなく……」

第318話 女子で小人はさらに養い難し

中学三年、受験生の娘を抱える高橋宗男は、娘を毎日、腫れものにでも触るように扱っていた。娘の真裕美は思春期で、受験生、しかも反抗期も遅れて参加して、いまが一番難しい年頃だった。まして、真裕美は、人一倍自尊心があり、繊細で、すぐ泣く、すぐむくれる、すぐ放棄すると三拍子が揃っていた。上の息子たちは育てやすかった。多少、乱暴に扱っても、体でかかってきて、体でとっちめて教えられた。娘はそうはゆかない。何か態度が悪くて、こづくと、すぐに、

「わあ、H。いま、触ったでしょう」と、来る。これでは叩くこともできない。

真裕美が突然、学校に行きたくないと不登校になった。事情を母親の裕美子が聞いて、虐めがあったと判断した。

「あなた、なんとか云ってよ。クラスの子、五人くらいに虐められているらしいの」
どのような虐めを受けていたか、いろいろ訊いて、宗男は中学校に出向いた。こと、娘のことになると宗男は可愛いのか、表に出るのだった。

「お宅の生徒たちに虐められて、転校したいと泣くんですよ」
事情をもっと詳しく知っている先生たちは、うんざりした顔をして聞いていた。

「高橋さん、虐めではないんです。よくあることで……」と、担任が云うと、
「よくあるとはなんですか、学校側としては虐めがないと蓋をするわけですか」
と、宗男は噛みついた。

「そうじゃないんです。生徒たちの話を聞いて総合して考えると、そのう、ほんのちょっとしたことでして、本人の受取方もあるので、誤解とか。例えば、先週も、学級委員を選ぶときも、他薦があって、真裕美さんがいいと数人の生徒から推薦されたんですね、それが悪意があって推薦したと思って、その場で教室から本人は出て行ったんですね。それからこんなこともありました。男子生徒がちょっと肩に誤って触れたんですね、それぐらいで本人は痴漢と叫んだもので、男子生徒は慌てて真裕美さんの口を手で塞いだんです。本人は、それを強姦するものと勘違いして

、泣いて職員室に飛び込んできました。その男子生徒は真面目な生徒で、そんなことをする生徒ではないというのは、みんな先生方は知っておりました。真裕美さんの自意識過剰なところがいつも招くトラブルです。そんな生徒は他にもおまして、先生たちも指導に手を焼いているようです。この年頃の娘さんは、気難しいので、実際、大変です」

そこまで云われると、宗男は思い当たる節が沢山あり、なるほどと納得していた。家でもそうだから、学校は推して知るべしだ。

家に携帯電話の請求書が来たのを宗男がみつけた。裕美子は、しまったという顔をしていた。「これは、どうしたんだ。真裕美の名前になっている。しかも、二万円の請求だ。あいつ、ケイタイを持っているのか」

裕美子は叱られると思って目を瞑って謝った。

「あなた、ごめんなさい。真裕美にせがまれて、あまりしつこいから押し切れちゃったのよ。友達の半分以上が持っているから、友達ができなくなると脅かすのよ」

「そうか、でもな、中学生で二万は遊びとしては高すぎるぞ」

「ええ、わたしからも注意しておきますから。きつく叱らないでくださいな。受験生だから、成績が下がると心配でしょう。いまは、好きにさせてやりたいの。お願い」

受験生という免罪符でなんでも許される世の中が甘い。こと、教育に関して親は弱いのだ。

その真裕美が夜遊びして、門限を過ぎて、こっそりと十二時頃に帰ってきたところを宗男とばったり逢った。宗男は驚いた。髪はアップにして、顔はばっちり化粧していた。お水系のギャルが来たと思った。

「な、な、な、な、な、な……」と、宗男が言葉が出ないうちに、けろりとした真裕美は、「おやすみなさい、また明日」と、二階に上がってしまった。

翌朝、普通の顔で起きてきた真裕美に宗男は夢でも見たのかと思っていた。子供たちが学校へ行ったあと、裕美子に昨日のことを訊いてみた。

「真裕美が、化粧しているのを知っているか」

すると、なんだそんなこと、と裕美子は笑う。

「いまはね、あなた、中学生の化粧品も売っているのよ。古いわねって、若い人に笑われますよ」

どうも解せない。

「そうかな、化粧なんて、若く見せるためのものだろう。元々若いし、肌だってはりがあるし、いまが一番健康的で綺麗な時分なのに、それをどうして化粧しなくてはならないんだ。いまから化粧すると、大人になると、早く肌がいかれるとそう云っておけ」

宗男には、流行がすべて正しいものとは思えない。間違っていることを信奉するのが現代の妄信なのだ。常識がそうなら、常識は真理ではない。非常識と云われようが、正しいときもある。

宗男は会社帰りに、同僚に誘われて一杯つきあった。繁華街を飲み歩き、路地へ酔って入ると、いきなり、若い女の子が横から、馴れ馴れしく宗男の腕を取って、甘えるような声を出した。

「ねえ、おじさん、援交しない」

どこかで聞いたことのある声だ。髪をアップにして、香水をつけて、顔をちらりと見ると、口紅まで塗っているが、どう見ても大人ではない。

「エンコウって、あの援助交際のことか。君は、いくつなんだい」

と、まともに向き合うと、

「あっ、真裕美」「いけねえ、パパ」

第319話 現代嫁姑物語

「お義母さん、わたしのセーター縮んじやったじゃないの。どうして、洗濯機で一緒に洗ったんですか。毛糸用洗剤で手洗いって、あれほど云ったでしょう」

今日も、朝から気合いが入っている。朝倉家のいつもの嫁姑の逆転ドラマが始まる。

「お義母さん、お味噌汁、少し塩辛いと思いますけど。我が家は健康一番、減塩でゆくんですからね。昔ながらの味付けでは駄目ですよ。それでなくても北国は、高血圧と脳卒中が多いんですから」

いちいち、嫁の多香子は煩く、小言の連発だ。

「そうかい、わたしゃ、そう塩辛いとは感じないけどね」

トメばあさんも、どうしていか判らない。若い夫婦の生活についてゆくのがやっとだ。息子の慎一は母親を可哀想だと思いながら、女房にも頭が上がらない。見て見ぬ振りをして、関わりにならないようにしていた。多香子は姑を女中のようにこき使う。自分でも病院に看護師で働きに行っているから、家事一切は姑にお任せだ。幼稚園の息子ひとりいるが、その面倒まで押しつけていた。

「真之介が二時に戻りますから、幼稚園バスのお迎え、忘れないでくださいよ。たまに忘れて、真之介がひとりで帰ってくるときがあったでしょう。この辺の通行量も増えて危ないですから、いいこと」

「はいはい、判っておりますよ」

「いつもそう云って忘れるんだから」

と、多香子は仕事に出かける。

それから、トメさんは、部屋の掃除だ。食器も洗い、台所も研く。少しでも汚すと嫁が煩い。怒鳴られる。チリひとつ落ちていても神経質で、大騒ぎする多香子だ。そのくせ、水仕事は手が荒れるからと一切しない。炊事、洗濯、掃除まるで駄目な嫁をよくも慎一は連れてきたものだ。しかも、鬼のような嫁だなんて、死んでも死にきれない。トメばあさんは、いつもそれを考えると溜息しか出ない。世の中変わったんだと、そんなものだと言っていた。いつから嫁が姑より偉くなったんだろう。

慎一が、多香子と結婚すると連れてきたとき、随分と礼儀の知らない女だと、トメは思った。挨拶の仕方も知らない。ただ、突っ立って、頭を下げるわけでもない。慎一の話では、多香子は料理はやったことがないから、デリカを買ってきて食べるという。掃除もいまは、家ごとクリーニングしてくれる業者に頼む。下着の果てまで洗濯屋に出すようなことを云っていたから、大丈

夫かなと心配になっていた。いまどきの嫁は、独身時代の延長で、普段から掃除も炊事もしないからできないのだ。家の手伝いもしないで大きくなった。まして、女は女らしくする必要もない。どうして、女だからと掃除や炊事をしなくてはならないの、それはジェンダーフリーの現代では古い固定観念なのよと、戦前生まれのトメには考えられないことを平然と多香子は云う。すべて、金さえあれば確かに用は足りる世の中だ。女性も社会進出で地位や重責を与えられるポストにつくと、そんな誰でもできる家事などで時間を潰すのが、才能と時間の浪費ということになる。そのことで、母親が可哀想だと、一言でも慎一が多香子に云うと、

「あら、あなた、わたしより給料少ないくせに、わたしに仕事やめて、専業主婦になれというの？ 誰が、この家のローン払って、真之介の教育費を払うのよ。冗談じゃないわ。あなたの方が仕事やめて、ハウスハズバンドになればいいんだわ。わたしはね、主婦が嫌いなものよ。毎日、おんなじことの繰り返しでしょ。何の見返りもないし、進歩もないし、自分のためにならない家の犠牲は沢山よ。それより、わたしは、もっと広い外の仕事で羽ばたいてみたいの。やりたいことは仕事だけではなくて、もっとあるのよ」

と、確かに多香子はNPOだ、カルチャーだ、エアロビだといろんなサークルに入って、仕事帰りに夜遅くまで出歩く。夜中まで帰らないときもある。かつての男性がしてきたことを女性がしているだけのことで、世の中変わったから、おかしいことはひとつもない。

日曜日でも、多香子は家にサークル仲間を呼んできて、お茶だケーキだと、賑やかだ。トメばあさんが、何か手伝うことはと、うろうろしていると、

「何よ、目障りだから、こんなところにいないで、自分の部屋に引っ込んでいてよ」
多香子は押し殺したような声で、トメに命令した。多香子にとって、この家の中には年寄りとは相応しくないのだ。トメは、仏壇のある、狭い部屋でテレビもないから古い週刊誌なんか読んでいた。

華やかな奥様方の笑い声やお喋りが家中に響いていた。慎一と真之介も出されて、二人で川原にボール投げに行った。

「本当に仏壇っていやあね、こんな新築の家にはインテリアとしても似合わないじゃない。どうして、あんな陰気くさい作り方をするのかしら。もっとカラフルにしてほしいわ。いっそ、わたしの代で、クリスチャンに改宗しようかしら。まだ、そのほうが格好いいものね」

「そうそう、いまなんて、墓石もモダンになったし、世の中変わったのにねえ」

「うちなんか、もう何年も墓参りなんかしたことないわ」

「うちもよ」と、何が可笑しいのか笑うこと。

あとはみんな亭主の悪口ばかりだ。トメばあさんはその話を聞いていて、この先、自分が死んだら、じいさんのお位牌も守る人もいない、仏壇はいらないと捨てられる。いや、捨てないまでもピンクに塗装されたりしたら。墓だって、いま流行りと、カラフルにされたら。いやいや、モダンにされてもいい。それより、墓参りもしないで、無縁仏にされたら。死んだ後々のことを考えると、ぞっとしてくる。とんでもない世の中だ。だんだんと悪く変わってくる。こんな家にいたら殺されて、供養もされず、墓は草の中。

トメばあさんは、みんないない昼間に、貯め込んでいた年金を降ろして菩提寺へとかけた。

風呂敷包みにはじいさんのお位牌と過去帳。お寺に永代供養をしてもらう。そうして、自分は以前働いた事務所へと顔を出した。

「おや、珍しい。トメさんでないの。どうしたの」

入口に家政婦紹介所の看板。未亡人になってから十年近くここで働いた。

「年齢制限過ぎてているがの、どこかで住み込みで働き口ないかって思っただの」

「働くって、トメさん、息子さん夫婦と一緒になんでなかった？ ははん、さては、何かあったな。まあ、トメさんぐらい働く人なら、年齢はパス。この近くで募集しているんだけどね。行ってみる？ ええと、旦那さんが財務省のお役人で、奥様が看護師で、子供さんがひとり...」

「また、看護師かいな」「何か云った？」「いいや、そこで決めるよ」

トメばあさんは、塀の高いお屋敷の前に風呂敷包みを手に立っていた。

「わたしだって、世のため人のためになる女の仕事をしているわい」

どうせ働くなら、喜ばれるところがいい。みんなそのために働いているんだから。

第320話 パンドラの玉手箱

最近では、北国の田舎町でも外人女性の姿は珍しくなくなった。国際化社会を象徴しているが、昔は田舎だったら、珍しがられて、みんなの視線を集めた。いまは、出稼ぎで、ホステスとして、フィリピン、ロシア、アルゼンチン、チリなどから若い女性たちが出稼ぎに来ていた。こんな田舎町までと驚くほどだ。それ以上に彼女たちの国は貧しいのだ。白人女性が、日本の男性にかしづく。戦前なら考えられなかったことだ。

チリからやはり、違法滞在で出稼ぎに来ていた、セニョリータ・タートルは、年末の忘年会で賑わっている不夜城の裏通りで、勤めに出るため歩いているところを暴漢に襲われた。不用心な年の瀬で、ボーナスを狙ったひったくりが後をたたない。セニョリータは、ハンドバッグを抱きしめたまま、二人組の男たちに踏んだり蹴ったりされていた。そこへたまたま通りかかった、県庁の職員の浦島が助けにはいった。空手二段の腕前で、二人組をあっさりと撃退した。セニョリータは恐怖から泣いていたが、未遂で終わったので、浦島が立ち去ろうとすると、抱きついて、お礼にと、自分の働いている、クラブ・キャッスル・ドラゴンに連れていった。

ママの乙姫は、

「うちの子を助けたお礼にどうぞ、お好きなだけ楽しんでいってくださいな」と、浦島の両側にはセニョリータはじめ、金髪、ブロンドがサービスでついた。すっかり殿様気分でご機嫌だった。日頃、堅い仕事に就いている浦島はこんなクラブなど高級なところに足を踏み入れたことはなかった。田舎町の裏側にこうした世界があるとは、浦島はやみつきになりそうだった。

「こちら、公務員の方ですよ」

「あら、お堅いこと、あっちのほうもお堅いかしら」など、片言の日本語で話しているが、多く

は英語も片言、日本語は話せない。彼女たちは、基本給は少ない。殆どが客からのチップや指名料で稼いでいるのだ。だから、

「ねえ、ドリンクいいでしょう」は、一杯二千円がつく。「ねえ、おなか空いたわ」と、オードブルが一皿五千円。表の看板には三千円ぽっきりと書いているが、ブロンドで長い足を絡ませてこられると、つい、鼻の下を長くして、「いいよ、いいよ」で、お帰りはお一人様三万円となってしまう世界なのだ。

浦島は元来ケチな性格で、経理を担当していたから、金銭感覚にはかなりシビアだ。酔ううちに、仕事の憂さも忘れ、対外的な軋轢や人間関係のプレッシャーも忘れ、すっかりと別世界の楽しさに時の経つのも忘れるほどだった。セニョリータは浦島に抱きついて、濃厚なキスをプレゼントした。浦島は恐る恐るミニスカートの裾から手も入れた。震えているほどうぶだった。浦島は三十五になるまで独身で、女も知らない。キスなんかしたこともない。一挙に男に目覚めた。

帰るときに、乙姫は、小箱を浦島にプレゼントした。

「はい、これは玉手箱よ。大丈夫よ、煙が出てきて、おじいさんになったりしないから。パンドラの玉手箱っていうのよ。暗い世の中が明るく見える、楽しいことがいっぱい詰まっているの。なんでも、そんな気分になるアロマが入っているのよ」

浦島は何だという顔をしたが、乙姫は、意味ありげに笑いながら、

「できれば、開けないほうがいいかも。あなたは真面目な方ですから、ちょっと心配ね」
考えてみれば、何のために玉手箱なんかくれるのか、本当の昔話でも判らない。矛盾しているところがある。

プロメテウスが天の火を盗んだ罰がパンドラという愚かな女に手渡された。昔から女は愚かとなっている。いまは、男が愚かなのだ。開けてはいけないと云われると、開けたくなるのが人情だ。開けたい、やめようか、と浦島は机の上に置いた小箱を毎日ただ眺めているだけだった。ただ、どうしてもセニョリータ・タートルのことが忘れられない。毎日、金の勘定と帳簿をパソコンで記帳している仕事は無機的なもので、その正反対にあるセニョリータの肌が恋しくなってきた。公務員の安月給では、あんな高級クラブへ通うわけにはゆかない。でも、たまらなく逢いたい。とうとう、あの小箱に手を延べてしまった。震える手で浦島は小箱を開けた。すると、小箱の中は底に何か袋があったが空っぽで、いい香りが部屋中に飛散した。快楽、色情、金銭欲、物欲、名誉欲、そうした人間の持つあらゆる欲望の臭いが浦島の自室に溢れていった。その不思議なアロマは、ヘロインのような覚醒作用を持った、アフリカ産の神木の樹液から抽出されたものだった。原住民は、ご神体として崇めていたが、古代から人間を狂わせる悪魔の木とも伝えられてきていた。その臭いを吸って、浦島はがらりと性格が変わった。

翌日から、役所で、浦島は経理の操作で不正をするようになった。どうせ、監査も甘い。浦島がひとりですべてを握っている仕事だった。上司はみんな経理に暗いボンクラばかり。なんともなる。通帳なら証拠は残るが、現金は誰も数えないから、あるように見せかけることはできる。それに手をつけた。

さっそく、その大金を握って、浦島はクラブ・キャッスル・ドラゴンに出かけた。

「あらあ、ウーさん、久しぶりね。今日もうんとサービスしちゃうわよ。ご指名はタートルでし

よう」

「ダーリン、逢いたかったわ」と、セニョリータが抱きついてきた。顔中にキスの機関銃だ。

「今日は、ボーナスがいっぱい出たから、みんなに奢るよ」と、浦島は景気よく大枚をチップでブラジャーに差し込んだ。

「まあ、ウーさん、素敵」と、みんな、浦島の膝に乗ったり、肩を揉んだり。

「今度、外で逢ってくれないか」と、浦島は人が変わったように、セニョリータを誘っていた。

女は金で狂う。男は女で狂う。いつも犯罪の陰に女ありだ。愛なんか金でいくらでも売っている。浦島はセニョリータにすっかりのめり込んでいた。

「君にプレゼントがある」

「何かしら」セニョリータが開けてみると、小さな箱だが、中には五カラットもあるダイヤの指輪が入っていた。

「これは？」

「君へ婚約指輪と思って」

浦島はダイヤで亀を釣ろうとしていた。あの臭いを嗅いでからは、世の中がすべて薔薇色に見える。悪と正義の区別もつかない。この世がみんな欲の品評会に見えてくる。

二人は結婚式をチリで挙げることにした。新婚旅行はセニョリータの故郷のチリだった。結納金は一億円。セニョリータはそのままチリに残った。そろそろ不正経理が危なくなると察知した浦島は、海外高飛びの準備もしなくてはならない。このチリなら犯罪人の引き渡し条約を日本とは結んでいないから、隠した金で一生、美しい妻と豪邸で暮らせるだろう。

「モナムール、待っていてくれるかい。ぼくは、向こうの仕事をやり遂げてから、すぐに戻ってくるからね。二人でレストランや病院、ホテルの経営をしよう」

そう云って、浦島は単身帰国した。すると、監査が入り、穴を空けていたのが発覚していた。急いで高飛びをしなくてはならない。金はすでにチリに送金していたから、あとは成田までだ。と、あの小箱が気になって玉手箱にまだ効力があるかと、ポケットに入れた。

悪事は千里も走れない。浦島は東京であっさりと逮捕されてしまった。田舎の警察署に護送されてくると、尋問が続いた。

「どうして、あんなことをしたのだ。金はどこへ隠した」と、刑事に詰問されて、浦島はふと、玉手箱のことを思い出していた。そうだ、まだ底に何か袋が残っていた。あれは何だったのだろうか。ポケットから取り出すと、刑事たちも不審そうに眺めていた。英語で、袋に「罪の償い」と書いてある。その袋を破ると、嫌な臭いが立ちこめた。

「なんだ、この臭いは、たまらんな」

刑事達もむせて窓を開けた。そうして、浦島の顔を見て驚いた。顔は皺だらけ、髪は真っ白、すっかり老人になっていた。

受験生を持つ家族はどこか病的である。受験まであと三ヶ月もない。最後の追い込みに入って、受験生たちはカリカリしていた。学校でも補習が放課後にある。塾も遅くまでやっていて、家に帰ると九時だ。それから晩御飯。母親も受験生の献立という本を買ってきて、栄養のあるもの、頭がよくなる魚など、歌につられて用意する。栄養剤もあれこれと、特にストレスが溜まりやすいからカルシウムだ。それを取り入れやすくするためにビタミンDも必要だ。夜中の二時まで予習復習しているから、夜食も用意している。頭寒足熱がいいと、足元ポカポカの暖房にして、暖気が上に行かないように、温度管理までやっている。いろいろと気を遣う。

齋藤家では息子の高校受験だった。一人息子の健一は齋藤家の本家を将来背負って立つ立場にあるから、是が非でも名門高校へ合格してもらいたいと、家族だけでなく親族一同そう思っていた。本人は名門でなくてもいい、将来何をしたいのか全く先が見えない。大人たちも、この不景気で先がまるで読めない時代なのに、子供に判るわけがない。将来、何になるか。それを十四歳で決めさせるのも酷なことだ。

父親の隆之は出版社をやっていたが、出版不況で、いつ潰れるか判らない会社を切り回していた。景気のいいときは、長男に後を継いでもらいたいと思ったのだが、息子が社会に出るまで、会社があるかどうか怪しい。まして、借金だらけでバトンタッチしても息子が可哀想だ。息子は息子で、親の四苦八苦を見ているから、中小企業の社長なんかやりたいとも思わない。公務員も狭き門で、ツテ、コネがなくては入れない時代だ。それに、公務員も減給されている。年々所得が減る仕事など、将来が悲観的だ。大手企業に就職しても倒産、リストラと安泰はない。銀行もダメ、保険会社も危ない。そんなところへも入れるかどうか判らない。高校出ても、いまは就職率が半分以下。大卒はもっと大変だろう。普通高校で大学進学のために頑張るか、工業・商業高校で、いまのうちに資格を取っておくか。それとも、名門私立の附属高校でエスカレータ式で上に上がるか、もっと専門的な勉強をやるか。福祉科もあるし、調理科、情報科学科、インテリア科もある、農業高校でバイオの勉強、それとも部活でがんばって、スポーツで将来食えるものかどうか。選択肢がありすぎて、迷うのだが、そのどれも将来に望みがなさそうだ。これからの二十一世紀に必要とされる新しい分野はみんな狙っているから、倍率が高くなる。

その進路如何によって、入る高校を決定しなければならない。中学生ながら、近所や親戚、先輩の就職、進学の情報を知っているから、ますます先行き不安で、将来に希望も持てないでいた。

学校から進路について、親も交えての三者面談の通知がきた。これは、齋藤家の将来を決める大事な日であると、家族はみんな心待ちにしていた。

さあ、いよいよ三者面談の日、別に本人はケロリとしているのに、家族がそわそわしていた。母親はパーマにまで行って、めかしこんでいる。父親も会社を抜けてきた。みんな、鏡に向かって、結婚式のように、「おかしくないか」と、胸ポケットにハンカチまで入れていた。何か勘違いしている。車二台に分乗して中学校へ出かけた。じいさん、ばあさん、両親に伯父叔母、に加えて、会社の古くからいる専務に家庭教師の先生までがぞろぞろと廊下を歩いてくる。何事かと

、先生方は窓から顔を出していた。時間になり、健一の番となった。廊下で待っていた一族郎党は、ぞろぞろと教室へ入っていった。健一は驚いて、恥ずかしそうに下を向いたまま、小さくなっていた。先生は一瞬、身構えて、後退りするほどの迫力があつた。

「あのう、みなさん、お揃いで、何か、ありましたでしょうか」と、担任の先生は慌てていた。みんなにここを笑っているから、なお不気味だ。

「あら、今日は健一の三者面談と聞いたものですから」

「ええ、それは、お母さん一人でもよろしかったんですが……」

「そんな、我家の重大な決定をする日ですから、関係者がみんな集まったのですぞ。何か問題はありますか」

じいさんは、髭を撫でながら咳払いをした。

「いいえ、問題などと、そんな……」先生は汗を拭いて、身の置き所がない。椅子を並べた。三者が十者面談になった。

「健一君のいまの学力では、都立のA高校ぐらいですが、本人の志望は書かれていなかったものですから」

と、先生が成績表とランキングに目を通して話すと、

「なんと、都立高校だと、うちの健一は私立に入れます」と、父親が大声を出したもので、先生は椅子から落ちそうになった。

「私立だと、そんな、遊び人の集まりに健一を入れて、不良になったらどうする。ここは、わしの母校の都立加大学附属高校じゃよ」と、じいさんがしゃしゃり出る。

「あんな地味な学校へ入れてどうするんですか。もつと知名度の高い高校でなければ。近所に顔向けもできませんわ。やはりうちの健ちゃんには、私立の華麗学園がお上品でよろしいんじゃないかしら、ほほほほ」と、母親が畳み返す。

「あのうですね、家庭教師といたしましては、目指せ東大一直線。すべてはそのためにあります。目標は高く、少年よ大志を抱け。なんとしてもラサールです」

「いやあ、南の街出版社の番頭として一言云わせていただきますとですな、ご息には、是が非でも文科系に進んでもらいたいのですな。そのためには、早稲田、目指すは早稲田の文学部。そこに一番合格する高校にですな」

「何をおっしゃいます。もう、これからは本は読まれなくなります。これからは世界に羽ばたいて、こんな狭い不況の日本にいても仕方ありません。留学させるべきです。大学もあちらで、仕事も国際的に大きく広くです。男の子ですもの。ねえ、おとうさん」

叔母はお節介で有名だ。子供がいないから、健一を小さいときから可愛がつてきた。

先生は、じっと我慢して聴いていたが、

「あのう、わたしにも喋らせてください……」

「ああ、先生、いたんですか」と、すっかり無視されている。

「みなさんの気持ちも判りますが、本人のキャパシティということもありますので、その、ランクに合った学校をですな……」

「あら、そんな正攻法は古いんじゃないですか。いまは、コネと金です。裏口という手もあるでしょう」

叔母がそこまで云う。

「なんだと、そこまでして、入れてなんになる」「あなたには、学歴社会が判らないのよ」「プライドがないのか」「なによ、その云い方」

家族で取っ組み合いの喧嘩になった。生徒も先生もみんな野次馬で集まってきていた。

すると、いままで、俯いていた健一が立ち上がって叫んだ。

「みんな、うるさい」

一同しーんとなった。

「これは、ぼくの進路だ。口出ししないでよ。三者面談なんていらぬよ。親も子供の進路にとやかく云うことないよ。みんな自分が受験するわけでなし。ぼくが自分で決めることでしょ」

「偉い！ その通りです」先生も立ち上がった。

「どうやら、進路指導をしなければならないのは、あなた方の方ですね」

先生は家族を睨みつけた。親の夢を子供に託す。子供の夢はどこにある。それにしても見えない明日、いまは夢も希望も過去にしかないようだ。

第322話 正月異変

二〇××年元旦。

村井家の元旦は、ケである。ハレではない。母親は、デパートのテナントの店員だから、元旦も仕事だった。初売りでいつもは十時開店が、九時開店と早いから、朝御飯も食べないで出勤した。父親は、そのデパートに降ろしている問屋に勤めているから、問屋ばかり休めない。商店街も、郊外の専門店も軒並み元旦から営業している。普段の日曜よりも忙しいので、商品の補充できる体勢でなければ機会ロスが出る。問屋が休めないと、工場も休まず操業している。正月が休めるのは、役所と子供だけだ。

元旦に一応、めでたいからと、刺身とすき焼きがごちそうであったが、家族揃っての食事は無い。家にいるのは、幼稚園と小学校の息子二人と、おじいさんだけだ。その孫二人がおじいさんに訊いていた。

「ねえ、お正月って、ちっとも嬉しくないし、めでたくないよ。どこが面白いのさ」

「困ったな。それはな、昔の話だ。お年玉を子供たちが貰えた」

「なあに、その、お年玉って」

「年に一度、お小遣いがどっさり出るんだね」「ふうん」

子供たちがお年玉を知らないのは無理もない。すでに、十年以上前に、お年玉禁止法案が可決してからは、子供にお年玉をあげてはいけないことになっていた。世の中が長引く不況で、お年玉の貰える子と貰えない子が出てきて、政府はその可哀想な子供たちの差を埋めるために、お年玉という風習をこの世からなくすることにした。

「それにな、凧揚げしたり、独楽を回したり」

「蛸をどうやって揚げるの」

「凧に糸をつけて、風に向かって走れば揚がる」

「ふうん、蛸がねえ」と、子供たちには想像もつかない。

「家族揃って、元旦はね、上から下まで新調した服を着て、お屠蘇を吞んで、お節料理をいただく」

「そのオトソって何さ」

「お屠蘇は薬みたいなものが入ったお酒でね、元旦に吞むと病気をしないんだ。お節料理というのものな、いまはどこも作らないし、売ってもいないが、煮しめやなます、黒豆、かずのことお膳に綺麗に並べられてな。いまじゃ、それが松坂のステーキだ、オードブルだ、鴨料理だと、すっかり洋風になっちゃった」

「みんな揃ってって、仕事はないの？」

「正月の三が日はどこも休みだったさ。いまのように、二十四時間営業で、年中無休の店なんかもなかった。デパートも初売りは四日からだった。おじいちゃんが若い頃は、大阪で働いていたんだ。まだ独身で、アパートに独り住まい。どこも食堂、商店みんな閉まっていたね、三日間、何も喰えずに餓死するところだった思い出があるくらいだ」

「ぼくも、これから塾があるの」

小学生の孫が云った。

「なんだ、元旦も休みなく、塾通いかい。それは可哀想だな。やれやれ」

何のための正月なんだか、一年に一度だけでも全員休んで、ゆっくりと家族でくつろぐ時間があったっていいではないか。おじいさんは世の中が変わったことに嘆いていた。ただ、慌ただしく、世知辛く、煩い世の中になってきた。静かな情緒ある正月はもう来ないのか。

お供えをちらりと見ると、上に載っているのは蜜柑ではない。リンゴだった。その土地のものを使うよう、県でも奨励してしっかりと定着していた。みんながお供えにリンゴを使うと、リンゴが百万個は消費できる。かの紀伊国屋文左衛門が聞いたら驚く話だ。それが全国的に広がった。柿の産地では柿を、トマトの産地ではトマトを、西瓜の産地ではハウスもののスイカをお供えの上に載せた。あまりに大き過ぎるから、下の餅も直径が一メートルはなければならない。すると、餅米の消費も増える。消費拡大に一役かっていた。

年越し蕎麦もいつのまにか年越しスパゲッティに代わっていたし、年賀状もメールで来るようになってからは、郵便受はいつも空っぽ。手紙の来る楽しみもなくなった。新年の分厚い新聞もなくなって久しい。すべてがパソコンで、新聞が送信されてくる。

「明けましておめでとうございます。チビちゃんおりますか」

隣の奥さんだ。幼稚園の孫がばたばたと玄関に出ていった。珍しく年始の挨拶に来客かと思ったら、下の孫が退屈するので、隣の奥さんが、デパートに福袋を買いにゆくのに連れて行くというのだ。

「あら、おじいちゃんも一緒に行きませんか？」

「いやいや、わしは人混みは苦手な。孫をよろしく頼みます」

とうとう、おじいさん一人になってしまった。

何を思ったか、おじいさん、昼前だというのに、蒲団を敷き始めた。
「面白くもなんともない正月だわい。ふて寝でもするかい」
寝正月が一番静かだいい。

第323話 年末風景

師走の声を聞くと、何か急に慌しくなってくる。宝くじだ、クリスマスだ正月だと、帰省客も移動する。道路はだんだんと混んでくる。雪もちらちらと降ってきて、デパートはお歳暮の客で賑わっている。

玄関のベルが鳴ったから、お歳暮の宅配便かと思い、夜、ドアをおばあさんが開けると、包丁を手にした覆面姿の男が入ってきた。

「か、金を出せ」と、声が震えている。
おばあさんは落ち着いて、
「どちらさんですか」と、訊いている。

「ご、強盗だ」「はい、強盗様、少々お待ちください」と、立派なお屋敷で、老夫婦二人暮しと聞いて、強盗に入ったものの、応対があまりにも上品で、言葉遣いも丁寧で、さすがの強盗も恐縮していた。おばあさんは奥へ引っ込むと、おじいさんが出てきた。

「これはこれは、強盗さんだそうで、まあ、上がってください」と、ご機嫌だ。
「はあ……」と、強盗氏は靴をきちんと外向きに揃えて上がりこんだ。
「お邪魔いたします」と、強盗氏も育ちがいい。

「むさくるしいところですが」と、暖炉のある応接間に通される。強盗氏は、きょろきょろと室内をソファにお行儀よく座ったまま、見渡して驚いていた。油絵一枚にしても、壺にしても、きつとかなりの値打ちものなのだろう。

「おばあさん、お茶とお菓子だ」と、おじいさんが云うまでもなく、おばあさんは紅茶とケーキを出した。

「年末とはいえ、我家には来客は珍しいんです。二人きりで退屈してますし、寂しいのですな。まあ、遠慮なさらずに、お召しあがりください」
不意に強盗氏は涙を流していた。

「あっしは、人様にこんなに親切にされたことは初めてで……」
二人は貰い泣きしていた。

「ご苦労されたんでしょう」「ううううう」

「おばあさん、あれを持ってきなさい」

おばあさんは、うやうやしく、紫の風呂敷に包んだ札束を強盗氏に差し出した。

「どうぞ、これを持って行って、お家に帰れば、おなかを空かせたお子様がいらっしゃるんでしょう。少ないでしょうが、これでクリスマスのプレゼントでも買ってあげてください」と、風呂

敷包みから顔を出した札束は三千万はある。強盗氏は、驚いて手を振った。

「とんでもないです。こんなに沢山貰うわけにはゆきません。少しでいいんです」

「遠慮なさらずに、どうぞ、どうぞ、なんだったら、奥の金庫ごとお持ちになってもいいんですよ。ただ、持てるかどうか。三億は現金で入っていますが。わたしどもは、子供もなく、老い先短いので、こんなにお金を持っていましても使い道がないんです。棺桶の中まで持ってゆくわけにもゆきませんし、もう欲しいものもないのです。あなたのような貧しい方に使ってもらえれば本望です」

「いやあ、わたしなんか、とんでもございませぬ。そのお気持ちだけでも充分にありがたく、これにて失礼いたします」

と、強盗氏は現金も何も持たずに退散した。

ダメだ、おれはいい人すぎる。心を鬼にしてかからねば、商売にはならない。今度は、夜道のひとり歩きを狙うことにした。できるだけ身なりのいい紳士をつける。人通りの少ない。公園の中に強盗氏は隠れていた。向こうから公園の中の道をひとり歩いてくる紳士がいた。

「おい、静かにしろ」「静かにしろって？ わしがいつ騒いでいた。ずっと静かだったぞ」

「そうか……、つべこべぬかさず金を出せ、金を、これが見えねえか」

「視力はいいほうだから、ちゃんと見えている」

「だったら、これが何か判るだろう」

「バカにするな。幼稚園児でもそれが庖丁くらい判る」

なかなか一筋縄ではゆかない相手だ。

「きさま、命が惜しくねえか、殺されたいか」強盗氏は庖丁を突きつけた。その先端をじっと紳士が見ていて、げらげらと笑い出した。

「あなた、その庖丁、百円ショップで買いましたな。それは切れません。すぐに曲がります。そんなんで、人が刺せますか。こういう立派なものを持っていないと」と、いつのまにか、紳士も鋭いナイフを手にしていた。強盗氏はビビった。

「わしはこんな裕福そうな格好はしているが、中小企業の社長でな、破産したばかりなんだ。見ろ、この財布の中を。見事に空っぽだ。このナイフで、今夜、うちの妻と心中しようと思っていた。家屋敷は差し押さえ、連帯保証人の友人は今朝方自殺した。娘は高校をやめさせて働かせる。暴力団には追われる。明日の米代もないんだよ」

それを聞いて、強盗氏は衝撃を受けていた。世の中には自分より貧しく、不幸な人がいるんだ。強盗氏はそっと自分の財布を出した。それを紳士がちらりと見た。

「なんだ、わしより金持ちじゃないか。どれ、いくら持っている？ なんと三千円もあるじゃないか。おい、それをよこせ。命が惜しくはないのか」

紳士は何を思ったか、強盗氏にナイフを突きつけていた。

「い、命だけは助けてください。この財布ごと差し上げますから」

紳士は強盗氏から財布を奪うと、その場から立ち去った。

「ふう、世の中、物騒になったものだ」強盗氏は汗を拭いて退散した。どこにでもある年末の風景だ。

第324話 ホワイト・クリスマス

東京に働きに出て、すでに十年。丹野秀明は出稼ぎに来ていて、すっかり定住してしまった。手紙の一本も書くわけではない、電話もしたことがない。音信不通になってから、古里に帰りたいと思ったことはなかった。好きな酒を呑み歩き、ギャンブルに興じ、適当に女の子と遊んでみると、野良仕事なんかもうする気が起こらない。年寄り二人いる農家に嫁と中学の娘二人残してきた。四十二のときに家を出て、そのまま出稼ぎに行ったまま帰らない行方不明者になった。家族は家出人捜索願は出していたが、仕送りすることもなく、秀明は家族も古里も捨てて、減反と価格据置で、生活に喘ぐ農業から逃げてきた。

そんな秀明も五十二になっていた。ギャンブルに狂い、いつもすってしまっていたし、株に手を出して、下落で大損したり、女に騙されてごっそりと持ち逃げされたりで、この十年間、はめられたり、いいようにされたりで、自分に残ったものは何もなかった。一体、おれは、何をしてきたのだろうか。ただ、都会の愉楽の海の中で浮かんでいただけだった。秀明はようやく気付いた。

すると、ふと、古里の山や家族の顔が浮かんできた。あれから十年だ。娘の恭子は二十四歳に、明日香は二十二歳になっていたか。貧困のうちに飛び出してきたから、一家の主のいない家はもっと悲惨だったかもしれない。女房もどんなにおれを憎み、貧乏のどん底で喘いでいたか。いまさら合わせる顔もない。もう、帰る家はないのだ。この東京の裏町で、のたれ死ぬか、いい死に方はしないだろう。秀明はそんなふうに自責の念に囚われ始めていた。

里はもう雪だろうな。冬でも短靴で歩ける街、コートもいらない、雪も降らない。街路樹がクリスマスのイルミネーションで瞬いて、光のページェントでごまかしているが、汚れたきたならしい街だった。野山を白く埋めてゆく、雪の田舎のほうがどんなに綺麗かshれない。秀明は初めて郷愁を感じていた。

「おじさん、遊んでゆかない」

裏通りをほっつき歩いていると、若い女に声をかけられた。派手な化粧をしているが、どこかで見たことがある、懐かしい感じがした。髪は今流行りに染めて、顔もテレビによく出る歌手を真似ていた。そこいらにいくらでもいる女の子だった。ピンサロの客引きかと思ったら、そうではない。

「ショートで一万でいいからさ」と、誘う辺りは街娼なのだ。とみに景気が悪くなると、こうした得体のしれないコールガールたちが街のあちこちに立つようになった。

「一万か」ポケットに手を入れると、その札一枚より出てこない。今夜の呑み代もなければ、山谷の木賃宿に泊まる金もなくなる。それでも、無性に人恋しくなっている秀明は、たまらなく女の肌を求めたくなっていた。

その女の子について路地裏の長屋のような部屋に入った。そこが、彼女たちの仕事場だった。

「おじさん、訛があるね。東北？」と、娘は訊いてくる。

「判るか」「うん、わたしも青森だ。なんかおんなじ匂いを感じもの」

同郷のよしみで急に親しみが湧いてきた。娘はさっさと下着姿になると、腕に彫り物が見えた。「おじさんも、さあ、脱いで」と、急がせると、娘は先に蒲団に入った。秀明は、こんなところにはしょっちゅう出入りして慣れていたが、この娘には躊躇いがあった。

「電気、点ける？ それとも消す？」と、娘が訊いた。秀明の返答を待つこともなく、「そうだ、今日はクリスマス・イブじゃん。キャンドルを買ってきたんだ。それを点けたほうがムードがあるよね」と、娘は星形のカラフルなキャンドルに百円ライターで火をつけた。娘の長い髪が、部屋の壁に影絵のように揺れていた。秀明はたった三十分だったが、娘を抱きながら、久々に燃えていた。

「ダメ、おじさん、延長するの？」「金はない、それっきりだ」「いいわ、今日はサービスしちゃう。イブだもんね」親子ほど年の違う娘の体は張りがあって、ひどくいとおしいものに見えた。果てたあとに、タバコを吸いながら、蒲団の中で、娘と話した。

「青森はどこだ」「うん、佐井だよ。海より山んなかだ」秀明はどきりとした。その人口の少ない下北の佐井村は自分の古里だった。名前を聞けば、どこの誰かとすぐ判る。まして、山側にはそう部落はない。

「おじさんは？」「おれか、おれは野辺地だ」咄嗟に秀明はでたらめを云った。「懐かしいな。もう、四年、帰っていないし」「おれも、十年は帰っていない」「おじさん、うちの父っちゃんに似ている。出稼ぎに行ったまま行方不明だよ。生きているんだか死んでいるんだか」

秀明はぎくりとして狼狽えた。

「で、おまえの名前はなんて云うの」秀明は恐る恐る訊いた。「丹野だよ。どうして？」秀明は顔が紅潮していた。なんてことをしたんだ。おれは、実の娘を抱いてしまったのか。

「な、なんでもねえ。知り合いが近くにいたもんだから」秀明は慌ててズボンを履いていた。「おまえは、いつもここにいるのか。国には帰らないのか。おふくろさんが心配しているだろう」

娘は蒲団に入ったまま、タバコを吸って、

「ううん、かあちゃんは男と出ていったし、家に帰っても年寄りしかいねえもの」「そうか。また来るかもしれねえ。今度は何か手土産を持ってきてやる」

そう云い残して、悲しげな視線を振りかえさせて秀明は外に出た。急に気温が下がったようで、白いものがちらついてきた。東京に雪がふる。みんな酔客がコートの衿を立てて、家路を急ぐ。サンタクロースの格好の客引きが、サービス券を配っていた。

秀明は、今日の罫を探していた。駅のコンコースか。待合室か。明日の仕事のあてもない。秀明はインセストタブーを犯した罪にさい悩んでいた。エディプス王のように、この目が潰れろとまで、心の中で叫んでいた。おれは、なんてことをしたんだ。世の中の欲望がすべてなくなればいいと思っていた。

秀明は、いつか駅の地下道でホームレスたちに混じって寝ていた。雪で真っ白になってゆく東京の街の夢をみながら。

翌朝、秀明は朝の通勤ラッシュの騒々しさに目が覚めた。クリスマスだった。目が覚めてもぼんやりと座っていた。何かがおかしい。一切が白く見える。色彩がなくなっていた。歩く人の髪も目も肌も服もみんな真っ白だった。地下道の天井といい、壁といいすべてが白だった。照明の光によって、陰影ができるから形が見えるが、白い背景に白いものが動いているのが確認できるだけだった。秀明は目をこすった。おかしい。どうなっちゃったんだ。ふらりと立ち上がると、秀明は、階段を上り、外に出た。空も白い。太陽も白い。走る車もビルも街路樹も白い。

「色が無い。どうしたんだ。色盲になったのか」目をこすり、頭を叩いた。秀明にはすっかりホワイトクリスマスになっていた。

第325話 屋根の上を誰かが歩く

オカルトブームから、心霊写真など、テレビ番組ではやたら、非科学的な番組が横行している。だが、時として、科学では解明できない超常現象が起こるのも不思議なこととして、誰しも体験しているはずだ。

長尾慎吾も、どちらかという幽霊や霊魂の存在を信じないひとりで、陰陽師などの番組は見るが、あれはやらせだと思って、娯楽として笑って見ている方だった。ただ、人一倍怖がり、暗いところは嫌いで、いつも枕もとに電灯を点けて寝ていた。信じないわりに想像してしまうのはどうしたことだろう。

年末で、仕事は遅くまでかかった。まだ新人なので、デパートの外商部にいて、十時を過ぎることはたびたびだ。疲れて帰ってくると、小学生の弟と妹はすでに寝ていた。下と歳が離れているのは、母親が再婚したからだが、種違いの兄弟ということになる。そのことが、成人してからひどく神経質な性格になってきた原因を作った。歳があまりに離れている兄弟というのは意志の疎通がない。何か中途半端なものがひとつ屋根の下で同居するといった複雑な心理を生み出した。母親と父親はよくしてくれるが、専ら下の子に対していろいろと世話を焼くから、自然、慎吾は大人扱いという差別を受けることになる。

その日も遅いから、食卓には飯はない。みんな寝ていた。食べかけのケーキの残骸だけがあった。別にケーキは食べたいとは思わない。冷蔵庫から缶ビールとラップをかけたおかずを出して、ひとり晩い夕食をとる。あまり疲れていると、食欲もなくなる。新聞にも目を通す気力がない。テレビも見る時間がない。シャワーを浴びて寝てしまおう。妙に、今日は神経が高ぶっている。それほどハードな仕事をこなしていた。この年末年始の緊張感松の内まで続くのだ。もう、三週間は休んでいない。アリナミンを呑み、ふらふらになって二階の自室へと入る。MDコンポにタイマーをかけてアコースティックな音楽を聴き、パソコンのメールを開ける。返信は明日だ。なにもかもが面倒になって、ベッドに倒れ込んだ。

しばらく浅い眠りにはいっていたら、天井裏からがさごそと音がする。鼠が走ることはあるが、鼠にしては大きいものを感じていた。猫だろうか。近所の猫が昼間、入ってきたとか。慎吾は

、あれこれと想像していたが、小動物のものではない。しかも、どうやら、天井裏ではなく、屋根の上らしい。鼠なら、駆除したはずだ。猫が天井裏にどうして入ることができるんだ。もう、慎吾はすっかりと目が覚めていた。コンポに青く点いているデジタル時計は夜中の二時を少し過ぎていた。昔から丑三つ時という今頃で、百鬼夜行する時刻だ。そんなことは信じないが、頭の中で否定はしても、どこかで信じている別の自分がいたりする。

慎吾はさらに耳を澄ます。どこか、遠いところの音かもしれないし、雨だれか風の音か、聞き間違っていることもある。ミシミシと、重さのあるものが屋根を確かに歩き回っている音だ。怖くなって、慎吾は電灯を点けると、カーテンを開けて、窓を開いた。別に雨は降っていないし、風もない。外の物音は何もしない。ここいらは住宅街で、車も真夜中はあまり通らない。どこの家の灯りも消えていて、街は眠っているようだった。じっと、外に耳を傾けても、何も聞こえない。やはり気のせいだろうと、窓を閉め、電灯を消した。

また暫く蒲団の中で目を閉じていると、今度は、ドカドカと、はっきりと人間の歩く音がした。

一いる。この家の屋根に誰がいる。

慎吾は急に怖くなって、蒲団を頭まで被った。幻聴なんかじゃない。確かに人間の足音だ。この家は総二階だから、足場がない。どうして、屋根に登ることができる。慎吾はそう考えるとぞっとした。BSのアンテナでさえ、業者が長い梯子をかけて登った。家族で屋根に登ったものはいない。四方は民家だが、みんな離れて建っているから、屋根から屋根へと飛び移ることは不可能だ。泥棒にしたところで、人の家の屋根に登っても、忍び込むことはできない。ならば、一体、何者が、なんの目的で、屋根に登ったりしているのだ。慎吾は、悪夢を見ているようで、とても一人ではいられない。ドアから飛び出ると、バタバタと階下に降りていった。何事かと、母親が起きてくる。

「どうしたのよ、慎吾、こんな夜中に騒々しい」

「母さん、屋根に誰かがいるんだ。歩き回っている」

「また、夢でも見たんでしょ。何を寝ぼけているの」と、母親は笑っている。

「違うんだ。疲れているけど、確かに聞こえるんだ。ちょっと、来て」

母親は仕方なく、二階に上がった。慎吾の部屋に行き、暫くじっと耳を澄ましていると、ミシ、ミシと、確かに誰かが歩いている。

「ほら、聞こえるだろう。いるんだよ、誰かが」

母親もぞっとして、青くなった。

「お、お父さんを起こしてくる」

「警察に電話したほうがいいんじゃないか」

二人とも震えている。寒さもあるが、声も尋常ではない。

「あんた、起きて、変な人が屋根にいるらしいの」

「なんだとー」お父さんも起こされて、二階の慎吾の部屋に入った。父親の耳にも人の歩く足音が聞こえた。三人に聞こえたということは、幻聴でもない、現実の物音なのだ。そう確信すると、急に三人ともに怖くなって震えだした。

「お父さん、警察……」

「いや、待て、おれが確かめてやる」

父親は勇気を出して、懐中電灯を出すと、窓を開け、大声を出した。

「誰だ、こんな夜中に」

すると、屋根の上の人間は、ひょいと、窓の上の方に顔を覗かせると、父親と目が合った。ドキリとする。本物の人間がいるではないか。しかも、懐中電灯に照らし出されたのは、白い髭と、赤い服、大きな袋を手をしている老人だ。老人は困ったように父親に訊いた。

「あのう、この家も煙突が無いんですなあ」

第326話 マッチ売りの少女

クリスマスの夜、少女は雪が降る中、薄着のまま、街頭に立って、マッチを売っていた。全部売らなければ家には入れてもらえない。昼も食べさせてもらっていないから、おなかが空いていた。夕食もこのままだと与えられない。家には鬼のような継母が遅い遅いと待っているのだ。クリスマスという一年で特別な日にも、他の姉たちはちゃんと、プレゼントを貰い、おいしいご馳走を食べているのに、少女だけがいつも虐められ、こき使われていた。父親が愛人に産ませた子を引き取った。というより、相手の女に押しつけられた。それが連れ合いには面白くない。亭主へのあてつけのように虐めては鬱憤を晴らしていた。

街はあちこちから笑い声が聞こえていた。家々の明かりも暖かそうだった。酔っぱらいはご機嫌で、肩を組んで歌いながら歩いていた。

「おじさん、マッチを買ってください」

「なんだと、汚い娘だな。いらん、いらん。こんなめでたい夜にあっちへ行け」

汚れて穴の空いた薄いシュミーズのようなワンピースに裸足に木靴を履いて、手も足もかじかんでいた。頬は真っ赤にひびがきれていた。

「買ってください。マッチを」寒さと空腹でふらふらになって、少女は道行く人に籠に入れたマッチを勧めたが、一個も売れない。困り果てていた。このままでは、帰ると叱られるだけではない。ぶたれるだろうし、冷たい納屋へ閉じこめられるのは判っていた。

「寒い、とっても寒い」

雪は無情にも降り続け、冷たい風が少女の生足を容赦なく冷やす。ときおり、馬車が走り去る。どこかのパーティーか、舞踏会の帰りなのだろうか。着飾った貴婦人と貴族がちらりと貧しい少女を眺めてゆく。

「どうか、買って、マッチを買って。お願い……」

とうとう、少女は泣き出してしまった。そして、途方に暮れて街角を曲がったそのときだ。いきなり、通行人とぶつかってしまった。マッチは歩道に散乱した。

「ごめんなさい。怪我がなかったかい」親切そうなおじさんが、倒れた少女を助け起こした。少

女はあれっと首を傾げた。街角を曲がった途端、街の風景ががらりと変わっていたからだ。ぶつかったおじさんの服装もおかしかった。石畳の道路がいつか、道幅が広くなり、奇妙な車が走っていた。暗い街が急に明るくなっていた。色とりどりの街灯とネオンサインが、いままで少女の見たことのない幻想的な美しさで輝いていた。おじさんは、マッチを拾い集めて、驚いていた。

「君、君は、これほど沢山のマッチをどこでみつけたんだね」

「これは、売っているんです。ひとつ一銭です。買ってください」

おじさんは、なおも不思議そうにマッチを眺めていた。

「君、これはね、非常に貴重なものだよ。マッチなど、いまの世の中にはないんだから。あれは二千年初頭に製造中止になってから、マニアの間では高値を呼んでいる。しかも、こんな未使用の新品同様となると、超レアものだ。君、これを全部売ってくれないか。全部で二十万でどうだい」

少女は一円以上の金額が想像できない。いままで、一円銀貨以上の金を聞いたこともなかった。一銭でも、うどんが食べられるし、一円あればお菓子もいくらでも食べられた。

「ちょっと、すぐその銀行までつきあってくれないか、まだATMはやっている時間だ」

少女は、ここはどこだろうと、きょろきょろしながら、おじさんについて行った。高いビルばかりある。見たこともない乗り物がたくさん走っているのが怖い。馬も馬車も人力車もないのだ。

面白い機械だった。薄いカードを入れて、ボタンを押すだけで、札が出てきた。少女は機械の横に回って見たり、裏に人が隠れていないか、一生懸命に確認しようとしていた。手品だった。どんなカラクリがあるのか判らない。

「君は、いくつなんだい」

「わたし、十歳です」

「そんな小さい子にこれを売ってこいとお母さんが云ったのか」

「うん、わたし、毎晩、これを売らなければ晩ご飯貰えないんです」

少女はしくしくと泣き始めた。

「酷い母親だ。児童虐待に就労させるなんて、法律違反も甚だしい。それに、この格好一」

少女はお礼を述べると、代金を受取り、逃げるように立ち去った。見知らぬ街だった。見たこともないものがショーウィンドウに展示してある。玩具屋の店頭には金属でできた四角い人形や、鉄でできているのに喋る犬などがあって、じっと見ていた。

少女はたまらなく寒かったので、一個だけポケットに残ってあった。マッチを建物の陰に隠れて擦っていた。凍える指だけでも温めたい。何度も何度もマッチを擦った。すると、そこへ、警笛を鳴らして、警官が二人、駆けつけてきた。

「こら、おまえか、最近、この辺りで放火をしていたのは」

少女は両側を抱えられるようにパトカーに乗せられた。

「ええ、ただいま、放火魔と思われる少女を現行犯で補導しました。これから署に連行します」

警官はケイタイで連絡していた。

哀れ、少女は警察署の取調室で、持っていた二十万という大金の出所を詰問されていた。

「おとなしく白状したらどうだ。この金はどこから盗んだ」

何を聞いてもちんぷんかんぷん、話すことも訳が判らない。生年月日も本籍も現住所も判らないまま、少女は児童相談所預けになった。婦警さんに付き添われて、車で見知らぬ街を連れて行かれる。少女は涙をいっぱい溜めながら、車の窓に向かって呟いた。

「どうして、こうなるの？」

第327話 鬼が笑う

新しい年を迎えると、何故か、気分まで変わる。単に暦の区切りに過ぎないのに、一月一日からは、世の中までがらりとよくなると信じていたい、そんな願望がある。

北国商事の社長をしている桜田高志は、いまがどん底だと思っていた。景気も底入れして、来年は輝かしいだけの未来に開けてゆく。これからは上昇気流に乗って、わが社の業績も上向くだろう。希望的観測ということがある。安易に樂觀視して、いいように考えるのは勝手だが、どん底の下もあるということを忘れてはいけない。

「社長、来年度の事業計画ですが」と、企画部長が予算策定の資料作りにやっきとなっていた。「もう、これほど落ちることはないだろう。落ちるところまで落ちたからな。これからは上向くはずだ。前年比の五パーセント上乘せで計算してくれ。いままで、我慢に我慢を重ねたのだ。これからは飛躍的に発展するだけだ」

「ひひひひひ」

誰かが笑った。

「おい、君、いま笑ったか」「いいえ、社長」「おかしいな、笑い声が聞こえたが」社長は気のせいだと思っていた。

「それで、関東方面への進出で、営業所開設、S商事への資本参加、上海駐在員の派遣、予定通り進めますか」

「そうだな、来年は正念場だ。発展の橋頭堡は是が非でも作らねばならん」

「はははははは」

「なんだ、さっきから失敬な、誰だ、笑っているのは」

企画部長には何も聞こえない。首を傾げて社長室を出てゆく。すると、天井からするりと赤鬼が舞い降りてきた。

「な、何だおまえは」社長は狼狽えた。

「見ればお判りの通り、鬼でさあ」

「そ、それはそうだが、おまえか、さっきから笑っていたのは」

「だって、なんにも先が読めないから可笑しくて」

社長は侮辱されたと思い、赤鬼のように顔を赤くした。

「だったら、来年はどんな年になるんだ。おまえには判るのか」

「判るってものじゃない。おれたちが地球の運命を操舵しているのよ。あんたら、人間の浅はかさには呆れるぜ、まったく」

「じゃ、来年はどういう年になるか教えてくれ」

鬼は仕方のないような顔をして、空中に出現したドアを開いた。それは来年に通じるドアなのだ。

「さあ、来年をお見せしましょう。おいらについてきな」

社長は鬼の後をついて、ドアから入った。中に一步踏み入れると、そこはこの街の郊外だった。十二月から一挙に真夏になっていた。

「なんだ、来年の夏に来たのか」

きょろきょろ周りを見渡してみたが、いつもの街と変わりがない。ただ、人通りがない。静かな街は不気味な感じがした。振り向けば赤鬼はいつのまにか消えていた。

「おい、どこへ行ったんだ」

ジェット戦闘機が上空を編隊飛行していた。見たこともない機体だ。空を見上げていると、一台のジープが走ってきた。カーキ色の軍服を着た兵隊がカービン銃を手にして、ばらばらと社長を取り巻いた。何か話している。言葉が通じない。朝鮮語のようだ。腕に赤い腕章。北朝鮮の国旗だ。銃で脅かして、ジープに乗れと命じているようだ。社長は仕方なくジープに乗った。ジープが国道を走る。道の両側に車の燃えた残骸があちこちに転がっていた。むっとするような死臭も漂っていた。見ると、粗大ゴミのように見えたものは、膨れた人間の死体だった。手がなかったり、足がなかったりしていたが、それが何十体も無惨に転がって異臭を放っている。デパートも上半分が破壊されてない。中心部に近づくと、どのビルも爆撃でやられたように瓦礫となっていた。ジープはやがて、北朝鮮の国旗たなびく県庁へと入っていった。社長は銃の先でこづかれながら、県庁の中へと引き立てられた。中は哀れな格好をして、げっそりと痩せた日本人の職員もいたが、兵隊たちでいっぱいだ。とある部屋へ入れられた。そこには通訳らしい女性と、かつての副知事、そして将校らしい軍服の男が中央の机にでんと座っていた。周りは銃を構えた兵隊がずらりと並んでいた。

「副知事ではないですか。どうしたんです、一体」

顔見知りの副知事は目を伏せていた。日本人と見えるものはみんな痩せこけ、無精髭だ。服もボロボロで風呂にも入っていないようだった。かつての副知事とは思えない。

将校が何かを話した。意味が判らない。すると、通訳が伝える。

「あなたは、いままでどこに隠れていましたか」

「隠れてなんかいない。鬼が連れて来たのだ。来年を見たいと云ったら」

兵隊たちはゲラゲラと笑った。将校も笑ったが、また睨み返すようにして云った。

「おまえは手も綺麗だし、服装もいい。どこかにアジトがあるのかと、訊いています」通訳が伝える。社長は副知事に向き直って、

「一体、何があったんだ。日本はどうしたんだ」と、震えながら訊いた。

「知らないのか。どこかへ隠れていたのか。日本は占領されたんだ。みんな、アメリカの傘の下で安保もあるからと安心していたんだ。北朝鮮の軍事力も甘く見ていた。三十八度線を越えたら、一週間で韓国を併合し、破竹の勢いで、日本海を渡ってきた。大都市は連日のミサイル攻撃で焦土と化し、原発もやられた。ゲリラとテロが多数潜伏していたのだ。一ヶ月で、日本は敢えな

く陥落した。代議士やVIPはすべて国外へ待避した。そして、残された民間人は抵抗するものは虐殺され、生き残ったものたちは強制労働だ」

「なんだって、米軍は何をしていた」

「さっさと逃げた。その前に株の暴落があって、経済は壊滅的打撃を受け、東海大地震がさらに恐慌の引き金を引いたのだ。すでに、日本は破産状態だった。国を守るどころではなかった。そこへ、北朝鮮が攻めてきたというわけだ。赤子の手をひねるようなものだったろう」

「そんな、ばかな。わたしの会社はどうなった。家族は、家は」

社長は呆然自失となって、立ちつくしていたが、すべてを否定するように首を横に振り続けた。

「こんなことがあって、許されるものか」

次の瞬間、社長はドアの方へと駆けていた。後ろから、社長の背中目がけて、ショットガンが乱射された。背中や足を銃弾が貫通した。顔半分が吹き飛んだ。社長はゆっくりと倒れてゆく。ドアの外に転がるように。

「はははははは」

と、笑い声が聞こえたと思った。気がつくと、桜田高志は社長室に倒れていた。背中も足もどこも撃たれていない。顔を触ってみると、ちゃんとしている。笑ったと思った赤鬼の姿はどこにもない。

「ふう、夢だったのか。夢にしてはリアルだったな」

椅子に腰掛けると、地震が起こった。かなり酷く揺れているようだ。震度四かなと、社長は揺れが治まると同時にテレビを点けた。東海大地震が起こったと臨時ニュースで報道していた。新幹線はじめ、かなりの被害が出ていると。

第328話 嘆きのサタン

人間は弱いもので、心と魔が差すことがある。それは、心の隙間に入りこむサタンのせいなのだ。

クリスマスが過ぎて、赤い服を着た髭の老人が見かけなくなったが、黒い服を着て、黒い帽子に黒い髭、いじわるそうな顔をしたのが、うろうろと街を歩いている。人間たちの目には見えないサタンクロスは、トナカイの橇ではなく、狼の引く橇でやってくる。背負っている黒い袋の中身は、横領、置き引き、掏摸、強盗、殺人、強姦、痴漢に泥棒、不倫、虐め、暴力、喧噪、戦争、放火、詐欺など、人間の持つありとあらゆる悪と欲望の魔が入っていた。サタンクロスは、それを心の隙に差して歩く。とくに、年の瀬ともなると、毎年、引っ張りだこで忙しい。妙な気を起こしそうになると、サタンクロスのケイタイが鳴る。注文が入るのだ。瞬時に、その人の傍に降りてゆく。

いつかも玩具屋で、じっと物欲しそうにアイボを眺めていた子供が、周りをちらちらと気にし

て見ていたときに、ケイタイに連絡が入る。サタンクロースは、袋の中から、万引きと書かれた魔を取りだして、子供の心の隙に差した。そして、言葉巧みに唆す。

「さあ、誰も見ていやしないよ。防犯ビデオもミラーからもそこは死角だ。販売員はまぬけなやつだ。さあ、いまだ、やっちまえ。欲しいんだろう。ジャンパーの中に隠して持ってゆけばバレないさ。」

忘年会でしこたま酒を呑んだ学校の先生が、ふらふらと自分の車を置いている駐車場まで歩いてきていた。どうしようかと先生は迷っていた。サタンクロースのケイタイが鳴った。すぐさま先生の後ろに降りてくると、

「今日は、検問はやっていないぜ。呑んだら乗れ、乗るなら呑めという標語もあるぜ。いままでだってバレなかったんだ。今夜もうまくゆくさ。無事故無違反で、免許証はゴールドだろう。大丈夫だって、タクシー代が勿体ないだろう。さあ、乗っちゃいな。」

そうして、罪をばらまき、不幸や悲劇を製造するのがサタンクロースの仕事なのだ。世の中が景気よかったときは、いくらでも仕事はあった。幸福な家庭を滅茶苦茶にしてしまうのは、お得意だった。たった、一突きのナイフや、背中を押して突き落とすことや、ハンドル操作を誤らせることなど、お手の物だ。ちょっとした指一本のミスが大惨事を引き起こしたり、犯罪に走らせたりする。幸不幸は背中合わせで、いつでもひっくり返るトランプなのだ。

ところが、今年になってから、サタンクロースのケイタイは鳴らなかった。暇を持てあましていた。他の仲間とも連絡をとって見たが、どこのサタンクロースも出番がない。みんな一様に暇でぐったりとしていた。

「おい、おまえんとも近頃、お呼びがかからないのかい」

「そうだ、何か、世の中不景気になったら異変が起こったようだな」

サタンクロースたちが井戸端会議をしていた。

「どれ、地上では何が起きているのか、おれが調べてくらあ」

そうして、一匹のサタンクロースが暮れの街へと降り立った。

お正月用品で賑わっているスーパーの中に入って見て、サタンクロースは驚いた。客の半分が万引きをしていた。しかも、公然と、堂々としたものだ。罪の意識なんかこれっぽっちもない。レジでは、袋に入れた食品の数を平気でごまかす。レジを打っているチェッカーさんも、万札をレジに入れなくて、懐へ入れていた。試食を出していないのに、適当な高級ハムのパッケージを破ってつまみ食いをしている主婦もいた。実に浅ましい風景だ。恥というものがあるまい。

電車にも乗って見たら、さすがのサタンも顔が赤くなる。痴漢し放題で、他の乗客は見て見ぬふり。禁煙なのにタバコは吸うし、譲り合いの席にごろんと横になって寝ているやつもいる。ケイタイで大声で話している高校生。通路に足をでんと伸ばしている若者。酔っぱらいのコートから財布を盗むやつ。誰も、何も気にしていない。ごく当たり前の光景なのだ。

適当なオフィスに入ってみると、そこもまた凄まじい。真面目に仕事をしている者はいない。パソコンでアダルトサイトを昼間から見ているやつ。ケイタイでお喋りばかりしている女子社員、経理では二重帳簿の脱税操作。営業マンは集金してきた金を着服するわ、経費の水増し請求するわ、サボタージュで一日パチンコばかりして帰る。社長は秘書とオフィスラブの真っ最中。上から下まで御輿に乗っているから、担ぐ者がいない。

明らかに中学生と判る子供たちが、カツアゲの最中だ。タバコ、覚醒剤は常用するし、女子中学生たちは中年の客をとっての売春だ。化粧もすごいが、タトゥーも、手にしているのはルイ・ヴィトンのバッグ。ばからしくってよ、ベンキョーなんかしてられね一つの。

政治家は無論のこと、宗教から一流会社、先生まで、すべて悪に走っている。国や会社や信者を食い物にしていた。サタンクロスは一部始終を市場調査して、地獄へと帰ってきた。

「大変なことになっている。地上はすでに悪の巣窟だ。おれたちの入り込む隙はないぜ。みんな汚染され、どいつもこいつも悪いことを平気でしている。正直者がバカを見る世の中になってしまっているんだ。これじゃ、おれたちは失業だ」

仕事のないサタンたちが、アルバイト情報誌なんか眺めながら、街を歩いていると、募集広告のポスターが目についた。教会の裏側で、求む天使、社保完備、時間相談とある。

「おい、社会保険もつくらしいぜ。でもなあ、がらりと転職するのなあ」

「ともかく、面接、行ってみようよ」

サタンたちは教会の裏から入った。

「あら、あんたたち、仕事がないのね、こっちは忙しくて、忙しくて、悪魔の手も借りたいところよ。さあ、ぐずぐずしていないで、この白い服に着替えて、背中に羽根も付けるのよ。いいこと、ちょっとでも善行しようと思ったら、このケイタイが鳴るから、そしたら、あんたたちの逆をやればいいのよ。善を吹き込むのよ、判ったわね」

天使の人事担当は、サタンたちを臨時で雇って出動させた。天使のケイタイが鳴るうちは、世の中まんざら見捨てたものでもない。

第329話 金 運

クリスマスのプレゼントだと、家族から腹巻を貰った。

「よせよ、腹巻なんて、生まれてこのかたしたことはないし、おれに似合うはずがない。ももひきも真冬でも履いたことがないんだ。おれのキャラクターには合わないんだ」と、ダンディズムを気取っていたが、

「ついでにチョビ髭を前みたいにはやして、ねじり鉢巻したら天才なんとかという漫画のパパと同じじゃない」と、女房は笑うのだ。おれもすっかりバカにされたものだ。五十過ぎて、いつまでも若さを引きずっていることもできない。それは、文学仲間では若い方だが、世間では腹巻してもおかしくないおじさんなのだ。文学の会に入れば、自分が若者という錯覚をおぼえるのだ。周りが年輩の人ばかりだから、五十でも洩垂れなのだ。

その腹巻もしてみれば快適だ。癖になって、取れなくなるというが、もう彼女がどうのということもないし、愛人でもできて、ホテルへ行ったら、腹巻ももひきなら愛も醒めようというものだが、もうそんなことは卒業したから、健康第一と腹巻をすることになった。

その初日から異変が起こった。仕事のこと、大きな注文が舞い込んだ。立て続けに二件もあ

って、ほくほくだった。二日目も思わぬ拾いものをして、しづしづ買った商品を別の同業者にそのままやると、意外な高値がついた。三日目には、忘れていた保険の払い戻しで振込があり、年末だからか、注文が殺到した。

あまり、ジンクスだとか、運勢など信じないおれだが、三日も続けば、ひょっとして、幸運の腹巻かと思ってくる。おれは、胴巻に札束をねじりこむおれのスタイルを想像してにんまりと笑った。占いで金運絶好調とおれの星座で云っていた。よし、年末にひと儲けとばかり、宝くじ売場にまで走っていった。ロトを買ったら、これがなんと百万当たり。そこまでくれば目が見えなくなる。何をやってもついているときというのは怖いほどついてくる。かつて、麻雀をやっていたときは、つき以外の何ものでもなかった。配牌から違うのだ。そして、どんどんツモってくる。ぴたぴたと入ってくる。向かうところに敵なしといった勢いというものがついているときはあるものだ。負け癖もあるが、勝ち癖もある。こういうときは、黙ってはいけぬ。どんどん積極的に買いた。

ということで、おれは少し調子に乗り過ぎたろうが、うって出ることにした。恒例年末の競馬も場外で、二・六で当たり。元金が二十倍になった。もう、何をやっても当たり、当たり、ここまでくると逆に不安になる。ひょっとして、当たりついでに車に当たるとか、脳卒中で中るとか、何かよからぬことが起こりはしまいか。あまりにも順調すぎると、次に落とし穴がありそうで人間、警戒感を持つものだ。これもすべてお腹巻様のお陰なのだ。おれは、風呂に入るとき以外は腹巻を取らなかつた。すっかり、腹巻信仰の信者になって、崇め奉っていたのだ。

金が溜まると、人間、太っ腹になる。元々おれは太っていて、ウエストは九十いくらかもあるから、太っ腹なのだが、あぶく銭は身につかないことを知らないでいた。限りなく増殖するものと思っていた。それで、夜の街に繰り出した。たまに行くサパークラブの純子が目当てだった。別に、彼女とどうということもないが、互いに気性が合うのだろう。たまに仕事場に電話なんかもきて、相談を受ける仲ではあつた。

その彼女を今日こそ射止めようと、おれは、ブランドもののシャネルのバッグなんかポンとクリスマスプレゼントだといって買って持っていった。

「どうしたの？ こんな高いもの。宝くじでも当たったの？」

と、純子は嬉しそうだ。そんな彼女の笑顔を見ているだけでいい。本当は親子ほど年が違ふのだが、多分、向こうも父親がいないから、おれに甘えてくるのだ。

「まさにその通りだ。当たりも当たり、競馬でも仕事でも常勝軍でな、おれの人生でも最高の年末だ。笑いが止まらない」

おれは、まさしく腹巻に札束をねじこんで、今日は徹底的に遊ぶとクラブに乗り込んだのだ。

「いつもダンディで素敵ですわね」ママもそう云ってお酌する。他のホステスたちはむくれていた。

「ママ、ダメなのよ、こちら、純子にぞっこんなんですから」

純子はおれに抱きつくようにして、独り占めだ。金が入ると女にもてる。悪い気はしない。

クラブが閉店になると、おれは純子と寿司屋で二人きりで呑みなおした。

「クリスマスって、恋人同士でホテルはいっぱいなんですってね」

と、暗に示唆するから、

「どうだい、これから二人で行って見ないか、恋人同士みたいになって」

「あら、みたいにですか？」

純子は酔って、ふらふらになって、おけに抱き抱えられるようにして、近くのモテルに入った。おれも家庭はあるが、不倫しようとしたのは初めてだった。ついているときは、何につけてもついているものだ。

純子はベッドの上に倒れ込んだ。おれは、ハイヒールをぬがせ、ワンピースをぬがせた。まだ二十代の若い肌がある。おれは徐々に興奮していた。最近、女房ともご無沙汰だったが、相手が変われば立つものは立つかもしれない。

と、そのとき、おれは腹巻のことを思い出していた。そんな格好を純子に見せるわけにはゆかない。おれは、そっとトイレに行って、腹巻だけをとって、背広のポケットに隠した。ダンディは下着までダンディに徹しなければならない。人形のように横になっている純子の下着も脱がせにかかった。純子はクラブのナンバーワンだった。いつか落としてやろうと決めていたが、こんなにも早くくるとは思わなかった。純子は恥ずかしそうに、

「電気消して」と、甘えたような声を出した。おれたちは、全裸でベッドに入った。いつも巫山戯ては触っていた純子の髪も、細い腕も、いまはおれのものになろうとしている。長いキスを交わしたあと、おれは前戯に入った。そうして、いよいよ純子の中に入ろうとしたそのとき、おれの息子は全く役に立たなくなっていた。どうしたんだろう、焦れば焦るほど使えない。純子も待たず、おれの息子を握ったが、なんだという顔をして、急に醒めてきた。

「どうしたの？」と、純子は不満そうに訊いた。

「うん、どうも、金運が落ちたようなんだ」

第330話 おおつごもり

大晦日というと、東京では年越し蕎麦を食べるだけで、簡単に済ませ、お節料理は元旦にいただく。東北の年越しはその逆で、年越しが豪華絢爛なご馳走をいただくのだ。たらふく喰って、呑んだあとに除夜の鐘を聞きながら、夜食に年越し蕎麦を無理して食べる。元旦は、逆に年越しの残りもので、お雑煮などいただくので、来客がなければあるものでとなる。

北村家でも毎年の年越しの料理に頭を抱えることになる。一応、本家だから、親戚も集まってくるから、賑やかな年越しになる。昔なら津軽塗のお膳がかなりあった。お節をお膳に綺麗に並べて口取りの和菓子も折りでつけた。その和菓子がねりきりの鯛や雲平という餅米の粉と砂糖を練って蒸したものに食紅など塗って、海老などにしたもので、年越しでなければなかなか食べられないので、子供時分には喜んだものだが、最近の若い人はもっとおいしいものを食べているから、口取りも不要になった。

嫁の春代は、年越しに何を作るか、家族にアンケートを採っていた。年寄りがないから、お節料理は食べない。以前は作っていたが、無駄に食べ残すから、次第に作らなくなっていた。日本の伝統的正月料理もだんだんと減んでゆくのか。子供たちが洋風化してから、料理も変わった

。和食が洋食に負けている。

「ねえ、孝弘、年越しに何が食べたい？」と高校生の息子に訊いてみるが、

「別に、なんだっていいよ」と、特別食べたいものはないらしい。

「美咲は何が食べたいの？」と中学の娘に訊いてみると、

「ううん、あっさりとしたものがいいな。わたし、いまダイエット中だからさ、あんまし甘いものや揚げ物はパスするからね」

飽食の時代だった。正月だからと特別に食べたいものはないのだ。

夫の貴文に訊いてみる。

「あなた、スキヤキなんかどうかしら」

「スキヤキって、いつも食べているじゃないか。年越しなんだからさ、普段食べないものを食べようよ」

「じゃ、ステーキはどう。前沢か米沢の分厚いのを奮発してね」

「ステーキも先週食べたし、月に二度は食べている。うんざりするなあ」

「ううん、それじゃね、お刺身の盛り合わせをスーパーで買ってこようか」

「刺身か、何かあればうちでは刺身だ。もっと別のものがないのか。特別の、年に一度のご馳走だよな」

「えーと、えーと、ご馳走ねえ、ご馳走か……」

春代も考えこんでしまう。普段食べない珍しいものにでもしなければ喜ばれないようだ。なにせ、みんな生活が裕福になったし、グルメ・ブームで、散々おいしいものを食べに行ったりして、子供たちでも口がこえている時代だ。毎日が云ってみればお正月。連日ご馳走の連発だ。昔ならステーキ、スキヤキと云えば、ボーナスが出たときとか、お祝いするときでなければ食べなかったが、牛肉は輸入されてから極端に安くなってきた。逆に魚のほうが高かったりする。肉はもう贅沢品ではなくなったのだ。刺身も日常化していて、高級品ではなくなった。

「いくらでチラシ寿司はどうか、それも誕生日に作ったしなあ。タラバ蟹を焼いてカボスを絞っていただくのは、月並みだろうなあ。伊勢エビに、雛鶏の丸焼きも結婚式でついてきたからなあ」

春代はあれこれと考えるうちに、判らなくなってきた。

北村家の昨日の食事はビーフシチューに大正えびのフライだったし、おとといは蒸しウニとネギマの丼に鮑のお吸い物だった。日常が豪華というより、それだけ日本人の食生活が豊かになり、世界各国から安い食材が輸入されてくるようになって、かずのこも松茸も珍しいものでもなくなった。

明日が大晦日というとき、春代は今日から仕込みがあるものもあるので、材料の買いだしに息子と娘を連れていった。食べたいものを直接、スーパーで見て、選んでもらったほうがいい。机上であれこれと悩むよりは、若い人に食べたいものを籠に入れてもらったら、簡単かもしれない。春代は、実際、そうたいしておいしいもの、珍しいものは期待していなかった。いまは、世界中の食材がなんでも手に入る時代で、食べたことがないものを探すのが難しい。貧乏だったときは、暮れとなると、牛肉や海老、蟹といった高級品のコーナーが賑わったものだが、いまは、

見向きもしない。食べ飽きているのだ。

「お母さん、わたし、これ食べたい。おいしそうよ」

娘が籠に入れたのは、天然にがりで作った、本物の寄せ豆腐だった。

「ただのお豆腐じゃないの」

「ただのって、袋に入っているオートメーションで作ったものじゃないのよ、きっと。国産大豆使用って書いてあるし、ほら、手作りだって。ねえ、これで湯豆腐やろうよ」

すると、息子も籠にあるものを入れた。見ると、それがただのめざしだ。

「何よ、めざしじゃない」と、春代は呆れる。

「めざしって何さ。食べたことないよ。目に差しているからそう云うの？　なんだか田舎の囲炉裏端で焼いて食べたいよ。いい感じだろう」

娘も負けずと、何かを選んでいた。

「お母さん、わたし、年越しのメインはこれに決めたわ」

見るとお茶漬けではないか。

「なんで年越しにお茶漬けなわけ？」

春代は呆れてものも云えない。

「だって、我が家では買ってくれたことがないもの、テレビで宣伝しているの見て、いつも食べたって思っていた。これ、ご馳走よ」

今度は息子が籠にどっさり入れたものは、なんと納豆だった。

「あんたも何よ、年越しに納豆ですか」

「ただの納豆じゃないよ。ほら、藁に入っている。こんなの食べたことないじゃん」

「昔の納豆はつとと云ってね、こうした藁の中で納豆にしたのよ」

「ふうん、これはおいしいかもしれないぞ。これはご馳走だ」

春代は眩暈がしてきた。でも、考えてみれば、これこそ普段食べたことのないものばかりだった。口が贅沢になったら、庶民の味を子供たちから忘れていった。それが却って新鮮で珍しいものになる。

さあ、いよいよ今年も今日で終わりのおおつごもりだ。親戚の叔父たちが一家でやってきた。いまの家は広い部屋がない。昔は襖を外すと、続き部屋とともに大広間ができた。テーブルも増やして、ご馳走が並べられていた。

「やあ、みんな元気で。はい、お年玉だ」

「あら、これは、すごいご馳走ね」

一同驚いて立ちつくしていた。テーブルの上には湯豆腐、めざし、納豆にお茶漬け……。

歳末で混んでいる閉店間近の銀行に白昼、銀行強盗が駆け込んだ。

「全員、外に出ろ。シャッターを降ろせ」

目出し帽にライフルを手に、全身黒づくめのトレパンを着た強盗が、カウンターの上に飛び乗って大声で叫んだ。客の大半はパニックになり、我先にと逃げ出した。まもなく、シャッターが降ろされた。

「手を挙げていろ。動くなよ。殺されたいか」

強盗はライフルを両手を挙げている行員たちに向けられていた。

「この袋に一万円札だけを詰めろ。新券ではなく、古い札だけを詰めろ」

女子行員に袋を投げつけた。すると、生真面目な融資係の男子行員が、強盗の前に進んでいった。

「如何ほどご用意すればよろしいですか。ご希望金額ですが」

「何？ ご希望だと、この袋いっぱいだ」

「いいえ、そうはゆきません。手前どもといたしましても、ちゃんと手続きを踏んでですね、審査をしてから実行したいと思います」

「なんだとお？」

「ですから、この融資申込書にお書きいただきます。年収と、保証人さんの予定者もお二人分書いておいてください」

「なんだと、保証人、二人もとるのか」

「ことによっては三人様からいただくことになっております。同居の方は該当いたしませんので、その点はよろしくお願いいたします」

「ばかにするな、なんで三人も取る必要があるんだ」

「いまは、不動産の担保価値が下がり、いざというときもなかなか売れません。土地建物より保証人ですね。保証人さんによっては、こちらでお断りすることもございます。ブラックに載っている方もございますから」

「なんで、そうがちりしているんだ。以前はそうではなかっただろう。そっちから借りてくれと頭を下げてきたこともあった」

「そうでございますが、ご存じのように不良債権が増えております。手前どもといたしましても、お上からの通達、法定基準というものがありますのは新聞等でお判りの通りでございます。上からは締め付け、お客様からは皮肉、手前どもには大変辛い立場であることをご理解いただきたいと思います」

「何がご理解だよ。おまえらは決算でちゃんと利益を出しているじゃねえか。おれたち民間は七割が赤字だ。従業員の給与も払えない。賞与なんて何年も出したことがないんだ。それに引き替え、おまえらは、民間より給与は高い、ボーナスは出る。全然待遇は違うんだよ」

いつも銀行は悪役でやり玉に挙げられる。銀行は景気のいいときは世間の味方で福の神、景気の悪いときは世間の敵で貧乏神だ。

「お宅の会社でも今年は賞与が出なかったんですか」

「おう、そうよ。かあちゃんは内職して、息子は新聞配達だ。一汁一菜の貧しい食事してよ、爪に灯をともしてぎりぎりの生活してんだよ」

「それは、大変なご苦労されていたんですね」

強盗は泣いていた。あまりに悲惨な話しに行員ももらい泣きしていた。

「みなさんで、こちらの強盗さんに義捐金を送りたいと思いますが、いかがでしょうか」

融資係が発案すると、行員たちから大きな拍手が沸き起こった。女子行員が袋を手みんなのところを回った。みんな財布から札や小銭を出して袋に入れた。

「これは些少ですが、みんなの気持ちです。是非、受け取ってください」

強盗は感動していた。くくくくと泣き声を抑えながら、

「みんなの気持ちはありがたく頂戴しますが、おれの会社が倒産寸前なんだ。明日の手形で二度目の不渡り、五十人の従業員は年の瀬に路頭に迷う。中には自殺する者も出るかもしれないんだ。こんな金額では救うことはできない。年末を乗り越えるには三千万は必要なんだ」

みんなしんみりしていたが、特にこんな強盗までしなければならなくいほど追いつめられた中小企業の社長とおぼしき強盗に一番同情したのはかの生真面目融資担当だった。いままでも冷酷に窓口規制して、貸し渋りをしてきたが、客よりもっと傷ついたのは彼だった。いちいち同情していれば、融資なんか務まらない。営業から回されて日が浅いから、慣れていないせいもある。

「事情は判ったろう。みんな、三千万くらい出してやろうよ」

融資担当は強盗の横に並んで頼んだ。

「何をバカなことを云ってるんだ。おまえは首だぞ」

支店長が睨みつけるように奥から声を挙げた。融資担当は頭にきた。

「上からの基準で審査すれば、貸す相手なんてないじゃないですか。われわれはどこからお給料を貰うんですか。利息からでしょう。貸す相手がいなくてどうして飯が喰えるんですか。こちらの強盗さんも、いまを乗り切れれば、会社は立ち直り、長い目で見れば、うちのお得意さんになることもあるわけでしょう」

「おまえは何を云っているんだ、強盗に金を貸す銀行がどこにある。明日から来なくていい」

支店長にそこまで云われて、融資担当はかっとな頭に血が上った。何を思ったか、強盗からライフルを奪うと、天井に向けて一発ぶっぱなした。そして、強盗の後ろに回ると、強盗に銃口を向けながら、云った。

「三千万出せ。でなければこの男の命はない」

だんだんと判らなくなってきた。今度は、融資担当が強盗になって、強盗を人質にして、銀行から金を奪い、人質の強盗に融資しようとしていた。驚いた支店長は、日頃、真面目で一直線の融資の性格を知っていて、何をするか判らないと判断、女子行員に三千万を用意させた。

「よし、この袋に入れろ」融資は、現金の袋を強盗に渡すと、融資申込書に記入させた。

「事後処理にしたが、あとで必ず、印鑑証明と保証人一人でいいからつけて、融資契約書を持ってくるんだぞ」

強盗は目を白黒させて、おどおどと引き揚げた。

「ありがとうございました」

後ろから行員たちの声がした。

第332話 現代世間胸算用

大晦日だった。

「今日という今日は約束の借金の返済日だ、きっちりと取り立ててこいよ」

「へえ、全額回収してきやす。親分」

「ばか、その親分はやめろ。社長と云え」

表向きは手形割引と商工ローンの看板上げている町金だが、裏では暴力団の高利貸し。法定利息ぎりぎりだが、いくらでも法の抜け道は知っている。この年末に、多くの個人、法人がこの商工ローンから借りていた。返済をみんな延ばしに延ばして、とうとう期限いっぱいの大晦日。もう、言い訳ができない、後がない。

チンピラで、取り立て専門のヤスとサブは派手なシャツにサングラス、腹巻つけて、外車で客周りだ。

「おい、親父さんいるかい」

と、一軒の倒れかかった古い家を最初に訪ねた。ここは、株で大損した学校の先生の家。担保価値のない家に住んでいた。玄関を開けると、ちょこなんと婆さんがひとり座っている。

「なんか、押し売りならいらぬよ」

「婆さん、ここの旦那はいるかい」

「だから、パンツのゴム紐とかはいらんの。とっとと帰っておくれでないかい」

「あのなあ、押し売りでないの。いいかい、耳が遠いのかい、あのなあ、婆さんよ、お父さんいるかい」

チンピラは大声を出した。婆さんは耳を傾けて、ようやく聞こえたようだ。

「ああ、紅白歌合戦はどっちの応援だって？ そりゃ、わたしゃさぶちゃんの昔からのファンですじゃ。ケミストリィも好きだけど」

「なんだと、聞こえているのー」もう、どたまにきたヤスは耳元で叫んだ。

「はいはい、孫は五人です。お年玉は三千円」

「ダメだこりゃ、婆さん、また来るからね。ボケ老人を相手にしていたら、時間の無駄だわ」二人は引き揚げて行った。それを奥の部屋で夫婦で見っていた。

「なあ、うちの婆さんも使えるだろう」

次に集金に向かったのはやはり個人宅。ここの親父はギャンブル狂で多額の借金をしてしたが、みんなすってしまった。

「おう、いるか大将」と、ドアを開けようとしたら、玄関に喪中の貼り紙。ぷーんと線香の匂いがする。

「はい、どちらさまでしょうか」

喪服を着た女房が出てきた。目が真っ赤で泣きはらしたあとだ。

「なんでえ、誰か死んだのかい」

「はい、うちの主人が、自殺したんです」

「な、なんと」見ると、奥の部屋に棺桶、遺影まで飾られてある。

「して、旦那の生命保険は？」

「そんな、保険をかける金もなく、みんなやめてしまって、葬式代にも事欠く始末」

「奥さん、大変でしたね。お線香でも上げさせてください」

そうして、チンピラ仲良く合掌。

「これ、少しですが、線香代にしてください」と、金を置いてゆく。

「ありがとうございます。うううう」

二人とも車に乗り込んで、世の中の不景気を思った。

「どこも大変だな」

車が走り去ったあと、棺桶の蓋が開いて、経帷子を着了亭主が起き上がった。

「帰ったか。バカだねあいつら、香典まで置いていったのか」

笑いが止まらない。

次に回収に訪問したのは会社だ。ビルの一室を借りている訪問販売の会社。ところが、ビルの袖看板には違う会社の看板がかかっている。

「おっかしいな、確か、おととい、この辺りを走ったときは、まだ看板があったのだがな」
ともかくも行ってみようと、ビルの四階まで上がった。ドアにも違う会社のサインが見える。ドアを開けると、事務所のレイアウトも机もすべてが一緒だった。女子事務員の顔だけが違う。

「あのう、ここに健康食品の訪問販売の事務所が入っていたんですがねえ」

サブが訊くと、奥から全く見たことのない社長が出てきて、

「何か、御用ですか。わたしらはここに入居したばかりで、前の方は存じ上げませんが」

二人はすすぐと階段を下りて引き揚げた。

「やられたかな、逃げられたか」

「会社ごと夜逃げですか、兄貴」

チンピラたちが車で帰るところを窓から見下ろしていた社長は、あるところに電話していた。

「おう、たったいま帰ったよ。そっちはどうだい、やはり、借金取りが帰った。不思議な顔してなあ。はははは。まさか、一日だけ、おたくとうちと社員と看板だけ入れ替わったとはあいつらも知るまい。これからも協力してやりましょう」

やはり、借金に追われている会社の社長と相談していたのだった。

二人が次に訪れたのは、事業で失敗して、銀行には家屋敷を取られ、破産する金もないまま、アパートに移り住んでいる家族のところだ。

「兄貴、大丈夫っすかね。ここは、畳をひっくり返しても埃も出ない、いままでで一番見込みないっすよ」

「ここの女房はまだ若いから、風俗に売って金に替えるか。亭主はタコ部屋送りだ」

風呂もないボロアパートのドアを叩く。

「いるかい、商工ローンだ。今日こそは耳を揃えて返して貰うよ。隠れたってダメだよ。居留守の手もくわないからな」

「兄貴、ドアには鍵がかかってねえぜ」

ドアはぎいっと不気味な音を立てて開いた。部屋の中を覗いて、二人は悲鳴をあげた。一家四人が天井からぶらさがっている。足下には椅子が転がっているではないか。

「し、死んでる」「あ、兄貴、一家心中っす」二人は這うようにして逃げ帰った。

天井から目をむいてぶらさがっている死体が、口をきいた。

「おい、帰ったようだ。大成功だ。まさか、ベルトから吊っているとは思わない。おい、洋一、もういいんだぞ」と、父親は息子に云った。

「もう、終わり？ つまんない。ぶらさがっていると宇宙飛行士みたいで面白かったのにな」

「でも、この手は一回しか使えないでしょう。あなた」

「そりゃそうよ、人間死ぬのは一度だ」

二人のチンピラは回収率ゼロで引き上げるとどんなことになるか判っていた。指一本詰めるだけでは足りない。首も詰めなければならないかもしれない。

「どうしよう、兄貴、このままでは組事務所には帰れないっすよ」

「部屋に隠れていたって、押し掛けてくるからなあ……。そうだ、こんなときは死んだふり、死んだふり」

帰りの遅い二人を親分は怪しんだ。

「あいつら、集金してきた金を持ち逃げしたんじゃないかあるめえな。おい、あいつらのアパートの様子を見に行っていこい」

若いものが四人、ライトバンでアパートに乗り込んだ。

「おい、サブ、ヤス、いるか。いるのは判っているんだ」

部屋の中からぷーんと線香の匂いがしてくる。ドアを開けると、なんと棺桶が二つ、仲良く並んでいるではないか。

「何で死んだのか判らんが、話がややっこしくならないうちに、仏さんを始末しようぜ」

「どうするんで」

「近くの山に埋めるのよ。葬儀代もばかにならねえからな」

車に棺桶乗せられて、寂しい山へと運ばれる。遠くから除夜の鐘。煩惱なんか百八つでは足りないようだ。江戸の昔からの年越しの人間風景。

第333話 一年の計

北村家の元旦は、ゆうべの夜更かしから、ひとりひとりと昼近くに起きてくる。夜通し起きて、朝までテレビで映画を見ていたものも、酒瓶を抱いたまま、徹夜で呑んだものも、恋人と初詣だと、晴れ着でかけた娘も、みんなぐうぐう寝ていた。春の海の琴の音色で静かな元旦が始まったと思った。

でも、いつ年始回りのお客が来るかもしれないので、寝正月というわけにもゆかない。それぞれが起きてくる。娘は晴れ着のまま寝ていた。今日もちゃらちゃらと見せびらかしに街を歩きた

いのだ。せっかく着付けしてもらったのだが、自分でもう一度着ることができない。トイレも洗顔も大変だ。

家族でお雑煮を食べているとき、じいさんが苦しみ出した。

「おじいちゃん」嫁が声をかけたが、じいさんは目を白黒。

「大変だ、餅を喉に詰まらせたようだ」

「あなた、早く、なんとかして」「救急車だ。一一七だ」「ただいまの時報は……」「何をやっている」「今日の天気は……」「これも違う」

みんな焦っていた。

「この前、テレビでやっていたけど、掃除機で吸えばいいんだって」

と、息子が云うから、それだとばかり、掃除機をじいさんの尻に突っ込む。

「ばか、浣腸じゃないんだから、下から吸引してどうなる」

上や下への大騒ぎ。慌てて、掃除機のホースを逆にセットしたから大変だ。じいさんの口の中に塵が逆流。餅どころの騒ぎではない。

「ばか、反対だ。殺すのか」

すっぽん、とようやく餅が取れた。ところが、あちこちへ電話したものだから、北村家にはパトカーと消防自動車、救急車、水道屋、自衛隊のトラックまで駆けつけた。

「誰だ、慌てて、自衛隊まで呼んだやつは。戦争じゃないんだから」

近所は元旦の静寂が破られて、野次馬も集まり大変な騒ぎになった。マスコミも噂を聞きつけて、車で取材に急行した。上空にはヘリコプターまで旋回している。

北村家の主人はただ、平身低頭謝った。

「元旦早々人騒がせな。火事と強盗殺人と戦争が同時に起こったと思ったじゃないか」懇々と説教されて、みんな引き揚げた。

全員、外に出て謝っていたから、家の中はからっぽだった。それに乗じて火事場泥棒専門が駆けつけていたとはつゆ知らず。みんな、家の中に入ったら、なんと、タンスは開けられ、土足の靴跡が廊下に点々。引き出しの財布と、ドレッサーの中の貴金属がやられた。

「泥棒なあ」

と、叫んだが、近所は呆れて、

「また、お隣よ。いい加減にしてもらいたいわ」

警察に電話したら、同じことを云われた。

「また、お宅ですか。寝坊けていませんか。本当に泥棒なんですか」

渋々、パトカーがやってくる。捜査員が、靴の型と指紋採取。事情を刑事が主人に訊いていた。今度は本物だと、近所が野次馬で集まってくる。

「うん、何か臭うな」

刑事のひとりが得意の鼻を利かせていた。

「犯人の心当たりがありますか。手口で一緒だとか」

別の刑事が名刑事に訊いた。

「いや、これは臭う。何かものが焦げる臭いだぞ」

すると、台所で火を付けっぱなしであることを思い出して、外に出ていた嫁が騒いだ。すでに、

火は台所の天井まで上がっていた、もくもくと煙が立ちこめる。

「火事だあ」

煙が辺りに充満して、捜査員たちも捜査どころではない。全員待避した。ケイタイから消防署に電話をすると、

「北村さん？ またお宅ですか」と、信用しない。刑事が代わりに出て、ようやく出動。火は瞬く間に、乾燥注意報が出ていたので、燃え広がった。家財道具を出すために中に入っていた息子が火傷した。

「救急車だあ」

ケイタイで電話をすると、

「またお宅ですか」と、ここも信じない。

「本当だってば、泥棒が入って、火事になり、火傷して」と、支離滅裂な話だから、ますます怪しむ。ようやく信用して、救急車が駆けつける。

「どこですか、患者は」

息子が火傷して泣いていた。

「どこが火傷したんですか」

よく見ると指先が少し赤くなっている。

「元旦からおちょくっているんですか。われわれも忙しいんです。まったく」

もう当分、何があっても一一九には電話ができない。すっかり北村家はマークされていた。

家財道具と金目のものは大方運び出して、家だけが燃えた。

「あなた、これからどうしましょう」新年早々焼け出された。

「大丈夫だ、火災保険ががっぽりと入る」

焼け太りということもある。

「一年分、みんな一日で来たから、当分は静かだろう」

いいこともあれば悪いこともある。さて、今年はどんな年になることやら。

第334話

初 夢

わたしは、一旦眠ったらどんなことでも起きない。ぐっすりと眠る。しかも、特技で一、二の三でもう眠ることができるという早業を持っている。なかなか寝付けない人にとっては羨ましい話かもしれない。

何故か、初夢は二日の朝方に見るのがそれだという。除夜の鐘を聴いてから寝て見る夢が初夢と思うのだが、そうではないらしい。夢占いはあまり信じていないが、フロイトの夢判断というのは科学的だ。初夢でこの一年の吉兆を占うということとはできないが、何か暗示することはある

わたしが、家を十年前に建てたときは、何故か将来、海面が上がるだろうということを予測して、少し高台に建てていた。以前は、科学者の予測では、このまま地球温暖化が進めば、南極と北極の氷が解けて、海面が五十メートルくらい上がるだろうと予測していたのだ。それは百年後の話だ。すると、二年で一メートルは上がるのだ。十年後には五メートル上がるという計算になるが、そうはならなかった。海拔からいうと、三十メートルくらいは高い、海沿いの山懐に家を建てた。津波は、湾内だから、余程のことがないと来襲しないだろうが、外海なら、過去のいろんな地震を見ても、三十メートルくらいの津波はざらにある。それで、その高さの土地を探した。

元旦は親戚が十六人も集まって、呑んだり喰ったりと目まぐるしかった。みんな帰ったあとのかたづけも大変だったが、急にいなくなると、また寂しい正月となる。わたしは、酔ったまま床に就いたのが十二時前だった。いつものように三秒で眠った。

わたしは夢の中をさまよい歩いていた。いつも、見る夢は旅の夢が多かった。駅の構内をうろついたり、見知らぬ街を歩いたり。その夢には不思議と人間が出てこなかった。昼の明るい光景も見ることはない。いつも、無人の未明の街や駅で、誰かを捜していたり、いつまでも来ない列車を待っていたり、そして、乗り遅れる夢だとか、探している人とすれ違っていたりする夢が多かった。この日の初夢はいつもと違って、実に生々しい情景が出てきた。わたしのいつも寝ている寝室のそのまが出た。やはりわたしは蒲団に入っていて、天井を見ていた。あまり、家の中は夢に出てこないものだ。夢のシナリオライターは、既視感覚や過去の映像をコラージュして、どこかで見たような、それでいて奇怪な舞台を作り上げる。家族もだからあまり登場しなかった。あくまでも非現実的で、東京の中にある札幌の街であったり、二十歳のわたしが二十歳の息子と会っていたり、支離滅裂な脚本が多いのに、この初夢はリアルすぎた。

わたしは、夢の中で地震を感じていた。かなり酷く揺れて、それは横揺れだけでなく、縦揺れも加わり、ものすごい強大な力が家ごと動かしていた。いままで経験したことのない激しい揺れだった。タンスが倒れてきたが、わたしの蒲団の手前で止まった。電灯は左右上下にかなり揺れているらしい。真っ暗で見えないが、外から火の手が上がり、その光りが投影されていた。家人の悲鳴が聞こえていた。それでも金縛りに遭ったように、わたしの体は動かない。どこかで夢だと思っているのんびりした自分がある反面、逃げなければと焦っている自分がいた。そのうち、どっと家全体が落下した。それはエレベーターで急激に降りる感覚より、ジェットコースターで降りる感覚に似ていた。家ごと落下する。わたしは夢の中で考えていた。家が一体、どこへ落ちるのだ。穴が空いて、その穴の中へすっぽりと落ちたのか。だが、一秒後には家は崩壊することなく、地の底へと無事着陸したように、落下による衝撃は感じなかった。軟着陸したわけでもあるまい。あれこれと考えを巡らせていて、これは、ひょっとすると地面ごと陥没したのだと自分なりの結論が出た。と思うまもなく、窓を破って、水がどっと寝室に入ってきた。あっという間にわたしは水の中に眠っている。水を呑んだ。塩っ辛いから、これは海水に違いない。入ってきた海水は家の一部を剥ぎ取るような音を立てて引いていったから、一瞬であったが、わたしは海中に蒲団を敷いて寝ていたことになる。それでも起きない無神経さを夢の中でわたしは驚愕していた。とんでもないやつだ。世の中が転倒しても目が覚めないで寝ていられるとは。夢にしてはぐっしょりと濡れた枕や掛け布団の感覚が実に生々しい。そして、急激に寒くなってきた。水

分を含んで重い蒲団に加えて、窓がなくなったから、一月の冷気が窓から入ってくる。わたしはそれでも起きようとしなない。自分に腹が立ってきていた。起きろ、逃げるんだ。部屋の中はぐっしょりと濡れているばかりか、置物や襖が倒れて、さんざんなことになっているのに、起きることもしないで、寝ている自分が情けないし信じられない。寒いから、体温で温めようと、丸くぢちこまっている自分がかたがたと震えている。このままでは体温が奪われて、わたしは確実に死に向かって進んでいるのだ。わたしは、もうひとりの怠惰な自分を奮い起こさせるように心の中で叫んでいた。バカ、起きろ、死にたいのか、起きて家族の安否を確認しろ、大変なことになっているぞ、大地震で、津波が押し寄せたか、いや、きっと、日本沈没の小説を読んだが、かなりの範囲で地盤が沈降したのだ。最近、実に日本列島は地震が多かった。毎日のように各地で地震がある。いまだかつて、こんなに地震のあった時代は経験したことがないではないか。一部の学者は、活動期に入ったと云っている。そうかもしれない。われわれが、有史以来、経験したことのない隆起陥没という現象もありえてあたりまえのことだ。そうして、大地というのは、海の底になったり、山ができたりしてきたのだ。なんら不思議なこともない。

わたしは、そう冷静に夢の中でも考えるということをしていた。それにしても寒い。かたがたと震えがきて仕方がない。起きろ、起きろと無意識の自分の体に意識が声をかけていた。それは、死んでゆく肉体に精神が分離して話しかけるようなものだった。

わたしはようやく呪縛が解けたように目が覚めた。

「はあ、厭な初夢だった」と、明るくなりかけてきた部屋を見回して、わたしは驚いて飛び起きた。全身がずっぴりと濡れている。しかも、夢で見た通りに部屋は荒れていた。タンスや襖が倒れ、窓がない。天井の一部が落ちていた。部屋は畳もなにも水びたしだった。わたしは、窓から外を見た。二階の自分の部屋からは、いつもなら、遠く、湾内に浮かぶ島影が見え、温泉街と、ヨットハーバーなどが眼下に見えていた。ところが、薄明かりの中にぼんやりと浮かび上がったのは、すぐに真下に海がきていること。我が家の玄関が波打ち際になっていること。十階建のホテルの最上階がかるうじて海面に顔を出しているだけで、あとはすべてが海の底に沈んでいた。わたしは、まだ夢の続きを見ているものと錯覚していた。海面には夥しい死体や屋根、木片が浮かんでいた。

「た、大変だ」わたしは急に家族のことが心配になり、階下へと崩れた階段を駆け下りて行った。

第335話 書き初め

正月二日は書き初めだったが、いまはペンもなければ、万年筆や鉛筆というものが、昔の人の筆記用具であったと、博物館に展示してあるくらいで、二千△△年の子供たちは、見たことも触れたこともない。歴史や社会のソフトで写真入りで習う程度だった。当然、文字の勉強は、いまはすべてパソコンだから、マウスがペン代わりなのだ。書道もモニターに向かって、先生の手本が映し出されるから、その通りに筆書体のフォントを選んでなぞるだけだ。赤で採点と直しは、先生のパソコンから送信されてくる。美術の時間も、モニターに向かって、コンピュータ・グ

ラフィックソフトを使っただけのデッサンなり、油絵の実習になるから、筆というものを持ったことがない。

だから、正月は初めてこの年にキーボードとマウスに触るので、書くのではなく打ち初めということになる。辞典でも、書くという言葉が現代には不適切なので、すべて「打つ」という言葉に置換されていた。

「ねえ、年賀状、打ったかい」「まだ、作文の宿題も打っていないのに」というふうに、書く行為そのものがなくなっただけで、それも死語に近くなる。

子供たちは幼稚園からパソコンに向かっていくから、書くという勉強を教わることはなくなった。大学生になっても、筆順も判らないし、定型文書が一発で出てくるから、自分で考えて作る文書は不得意だ。すべて機械が画一的な文章表現で代筆してくれるようなものだから、ただ、呼び出しして、そこから選択していればいい。

社会に出てからも、手帳代わりにPDA、銀行、役所もすべてATMで、書くという場がない。サインを求められる場面でも、サインの代わりに暗証番号や指紋照合だから、やはり書くという場がない。郵便局も会社でもみんな機械がやってくれる。次第に、現代人は書くという作業をしなくなったことに加え、以前から読むという作業もしなくなったから、読み書きがでんでダメになっていた。

そんなときに、電磁波の影響が人体に及ぼす害として、大変なことが学者チームの研究を通して発表された。癌細胞が形成されるのは、電磁波や、パソコンなどの機器から来る線量によるものが多であるという研究成果が公表されるや、マスコミも大きく取り上げ、一斉にその使用を禁止する国も出始めた。

政府も癌が急速に増え続けていたことに懸念し、国民の不安を払拭するために交通体系、銀行、役所などを除き、すべてのコンピュータ、ケイタイの使用を禁止する暫定法案を通した。

さあ、大変なことになった。小学校では、がらりと教育方法を変えなければならない。急遽、製造されたノートと鉛筆が児童に支給されたが、児童たちは使い方を知らない。

「先生、これって、どうやって打つんですか？」とくる。あちこち、押してみたが、ボタンらしいものがない。

「鉛筆は削るんですよ。周りの木を削って、中に黒い芯がありますね。それで書くんです」

「先生、カクって何ですか？」

先生はギクリとした。児童に「書く」という意味から説明しなければならない。考えてみれば、概念的なもので、説明に窮する。どうやって、書いたことのない子供たちに書くという行為の説明をしたらよいものか。

「どうして、カクということをするんですか？」「このノートはDVDのように保存されるんですか？」「カクのを間違えたときはどこで取り消しのキーを押すんですか？」いちいち大変だった。

先生はまず、子供たちに鉛筆の削り方から教えた。そして、鉛筆の持ち方まで指導しなければならなかった。みんな、ペンも持ったことがないので、あちこちでぽろぽろと落とした。それからがまた大変だ。みんな、文字というものを形では認識していても、筆順が判らない。下から上

に書いている子もいる。先生まで、何十年も書いたことがないから怪しい。中学でも高校でもあいうえおから書かせるから、授業にならない。消しゴムの使い方、定規からコンパスの使い方と、一から十までだ。いままでは、すべてパソコンがやってくれたものを手作業だ。処理が早かったのが遅くなる。

それは、学校だけでなかった。会社でも大変なことが起こっていた。

「この複写式の領収書と請求書の書き方ですが……」

「あのお、ボールペンの持ち方を教えてくださいませんか、部長」

「入出金の伝票を仕訳帳に記帳しろとはどういう意味でしょうか。ボールペンを購入したものはどの項目にすればよろしいでしょうか」

いままで、自動的に機械が仕訳していたのが、手作業になると簿記を知らない事務員が続出した。経理も総務もすべての機能が停滞していた。

「社長、A社に出す文書ですが、背景の後に何と書けばいいのでしょうか」

秘書がまるで幼稚園児が書くような字で書いてきた。手紙の書き方も知らない。

「この背景は、拝啓と書くんだ。陽春の候、貴社益々ご隆盛のこととお慶び申し上げます。だ」

「はい、判りました」と、書いてきた文書は、

「拝啓、用紙の請い喜捨益々ご流星の琴とおよろ子び母子あげ鱒」と、辞書を引き引き汗だくになって書いたわりには意味不明。

いろいろと新種の言葉も生まれ定着して、ただでも乱れている日本語は滅茶苦茶になってしまった。本も読まない、字も書けない、無学文盲が増えて、パソコンのない人間はすでに腑抜けになっていた。機械に頼りすぎた結果がここまで酷くなっているとは思わなかった。

政府はテレビも時間帯で禁止することにした。代わりに本を読むことを奨励した。ようやく低能化に歯止めをかけようと動き出した。出版社も書店も古本屋もすべて倒産していたが、ようやく本を復活させる動きが出てきていた。活字ルネッサンス、第二次の文芸復興はそうして全世界で行われようとしていた。

ということにならんかなあ。古本屋の主人の北村は、今日も、そんな想像しながら、客の入らない暇な店にハタキをかけていた。

第336話 飢餓新年

わしが二十二の年だった。大学を卒業した春に東京から大阪へと就職のために向かった。昭和四十九年に社会人一年生として、大手スーパーマーケットに修業のために勤めたのだった。住吉大社の社の社が遠くに見える南海線沿に下宿を探した。四畳半一間の小さな台所だけが付いている新しいわしの生活の場だった。

大学時代は学生運動で揺れて、暗い日々だけがあったが、大阪はわしの半生の中で眩しいくらいに光輝いた時期だといまも懐かしく振りかえる。あの大阪の三年間は、多くの友人が出来、恋

に酒に仕事に、閉じこもっていた性格が一挙に発散したわしの中の太陽の季節だった。

半年はあっという間に過ぎた。青森の親から、年末は帰るのかと手紙が来ていた。十二月になって、帰省のために汽車の切符を取るために早朝から並ばねばならないと聞いた。しかも、寝台が取れなかったら、東京乗り換えで、デッキや通路に立って行くよりないとも聞いた。そうまでして僅か三日の正月休みを費やすと、古里には一日よりいられないことになる。大晦日まで仕事があるから、夜中の列車に乗っても、一日がかりだ。わしは、帰省を諦めた。みんなは、四国、九州から働きに出てきている人が殆どで、東北から来るのは珍しがられた。彼女たちは、そう遠くないからみんな帰るといふ。

大阪の風習で、新年は下着まで新品の服を着て迎えるというので、わしの働くスーパーの衣料部門は年末まで売れに売れた。先輩が話していたが、大晦日は自然閉店であったという。そのときは九時閉店だったが、以前は最後の客が帰るまで店を開けていたというのだ。真夜中の三時に閉めたこともあったという。九時に店を閉めると、店長が社員食堂で酒を居残った社員たちに振る舞っていた。みんな紅白をテレビで見ている。女子社員たちは、いそいそとお土産を手に駅に直行する。夜行で行くと明け方には古里だ。除夜の鐘は汽車の中で聴くことになる。

「北村はどうするんや」と、店長が訊く。

「ぼくは、寝正月で、ぶらぶらと」予定はなかった。まだ彼女もいない。

「社員食堂がないから、餓死するんやないぞ」と、先輩が笑う。さも、独身のわしが、飯を喰うためだけに会社しているような云い方をしていた。その意味が判らないでいた。

昭和五十年元旦。

わしは、テレビもない下宿で昼まで寝ていた。ぼちぼちと起きてくると、腹が減ったから、何か食べようと、小さな冷蔵庫を開けたが、ものの見事に空っぽだった。カップラーメンの買い置きもなかった。

「なんや、しけとるのお」と、覚えてたの関西弁で独り言。仕方なく外に出た。どこか食堂へでも入ろうと気軽に考えていた。ところがあちこち歩いてもどこも三が日はお休み。喫茶店もやっていない。それじゃ、パンでもいいかと、いつも行く汚い食品店に行ったが、そこも閉まっている。いまのように年中無休のコンビニなんかまだなかった。ぐるぐると歩いていたら、ついに開いている店はなかった。電車を出ようかと、難波まで出ることにした。晴れ着で初詣に行く客で賑わっていたが、地下街もデパートも売店もすべてシャッターが降りていた。

「嘘やろー」わしは、食べる場所がないと思うと余計腹が鳴った。人が沢山出ているのに、どこも閉まっている。まあ、仕方がないと、わしは下宿へと引き揚げた。

一日くらい飯を喰わなくても死なないと思って、元旦は絶食したのだ。ただ、空腹を満たすために水ばかり呑んでいた。テレビがないから、ラジオでクラシック番組を聞きながら、今頃、みんなお節料理に餅などご馳走を食べているんだろうと、想像して腹がますます減ってくるのを我慢していた。

二日目。起きていると腹が減るので、できるだけカロリーを消費しないよう寝ていることにした。それでも、どうしても何か食べたいので、台所の下扉の中を隈無く探す。片栗粉の袋が空だったが、少しは入っているだろうと、逆さにしたり袋を破ったりして、少しだけ茶碗にとると、それにお湯を注いで、砂糖を入れて、薄い葛湯を作って啜った。惨めだった。それがちょ

んがの正月に口にする一杯なのだ。あとは、何もない。米のひと粒もない。

三日目。さすが、丸二日半も何も食べていないと、手足が冷たくなり、ふらふらになってくる。人が餓死するというのは、こんなことから弱ってゆくんだろうかと、蒲団の中でぼんやりと考えていた。まだ、大阪へ出て九ヶ月。彼女でもできていれば、今頃は二人で手作りのお節を食べながら、甘い正月を送っているんだろう。昼過ぎまでいろんな空想をしながら寝ていたが、このままでは耐えられないと、起き出すと、明石の親戚を思いだして電話した。ここから明石までは一時間かからない。そうだ、どうしてそんなことに気が付かなかったのか。わしは、近くの他人より遠い親戚と、叔母に飯を喰わせてくれと願い出た。

明石は人丸神社の近くの海岸に叔母の家はあった。わしは同じ関西に来ていても、あまり訪ねたことはない。今度は死ぬか、生きるかの瀬戸際だ。

「叔母さん、腹へって、もう三日、何も食べていないんです」と、倒れこむように家に入ると、たまたまみんな出かけて、叔母がひとりいた。

「あらあら、可哀想に、さあ、たん食べなはれ」と、叔母は涙ぐみながら、すでにわしのために正月のご馳走を炬燵の上に並べておいて待っていた。黒豆、かずのこ、うま煮を口にして、熱燗をぐびりとやると、空の胃の腑に沁みた。体が温まってきて、わしもあまりの嬉しさに涙が出てきた。そのうち、年始回りに行っていた、従姉妹たちも帰ってきて、賑やかな正月となる。

まあ、そんなことがあった。いまは元旦からデパートもやっているし、コンビニ、自動販売機もあちこちにある。いい時代になったというか。それでもな、この寒風のもとで、家もなく、金もない貧しい失業者もいるんだ。わしのと違って、食べたくとも食べられない不況の犠牲者たちが、どんな思いで新年を迎えていることか。あまり、浮かれ騒ぐ年でもない。青ざめてゆく深刻な年になるとわしは思う。いつも、食べられるうちに食べておこうとわしは思う。いまにきっと食べられないときがくる。きっと来る。

第337話 二十歳になったら

いまどきの若い者と呼ばれる若者たちは、別に特異な世代でもない。よくよく考えてみると、その親の若いときとやっていることは、スタイルは違うがよく似たもので、そうそう非難できるものではなかった。

わたしが高校生ときは、祖父の部屋からこっそりとタバコをかすめ盗って、自分の部屋で隠れて喫煙していたものだ。その頃、祖父が吸っていたのは「しんせい」だから、考えてみればニコチン、タールのきつい、フィルターもない強いタバコを喫っていたことになる。たまたま、真冬で、夜中、受験勉強の最中に、そっと喫煙していたら、親父が二階に上がってくる足音がするではないか。わたしは慌てて、部屋の窓を開けて、煙を外に追い出した。外は吹雪で、窓から雪が入ってくる。がらりと部屋のドアを開けて、親父は云った。

「おまえ、机の上に雪が積もっているぞ」

また、こんなこともあった。グループサウンズ全盛期が終わっても、長髪が流行っていた。背中まで長い髪でジーンズのカップルが歩いていると、どっちが男だか女だか判らない格好に見えた。わたしも少し遅れて長髪にすると、髪にパーマまでかけた。ユニセックスという言葉が流行ったが、ファッションでは性別の区別がつかない。やはり、あの頃の親に、頭がおかしいくらいの悪口を云われたものだ。どうも、ついてゆけないのはいつの時代も同じようだ。

わたしは、当時の写真を見ると、女のように写っていた。その格好で旅行していたら、見知らぬ男から云い寄られたこともあった。その当時は男のくせに腰骨もなく、ひょろりとして足が異常に長く見えるラッパのジーンズにハイヒールの靴というのが男のファッションの定番だった。間違われても仕方がない。

チャールズ・ブロンソンが化粧品の宣伝に出て、男性化粧品が当たり前になってきた。男のくせに化粧してと現代の若者を詰ることはできない。いまから三十年以上も前にブームがあった。男の香水大流行りだが、その頃もオード・トアレは男の身だしなみと、毎日、袖口と襟元に振ってかけたものだ。いまの若者たちがぷんぷんと匂わせて歩くのを嫌な顔している中年も、若い頃は同じことをしていた。

中学の息子の部屋を何気なく掃除していたら、アダルト雑誌だけでなく、女性の下着が出てきたと、心配する親も、子供の異常さを疑う前に、子供の順調な発育をめでのべきだ。すでに忘れた自分の若い頃を思い出してみたらいい。自分の子供はいつまでも子供のように思うから、親が育っていない。息子もいつのまにか陰毛は生え、夢精もするのだ。当然、セックスに興味を持ち、悪いことと分かって隠れて見るようになる。わたしの隠し場所はベッドのマットの下だった。ちゃんとヌード雑誌が隠してあった。

高校生でパチンコ、飲酒するのはあたりまえ、しない方が異常と云われた。高校生にもなって、女を知らないのもまたおかしいと云われる。いまの若者たちが乱れているのではない。われわれの若いときは、隠れてしていたことを、堂々と人前でするだけなのだ。

北村家でも長男の和宏が十九だが、ヘビースモーカーだった。部屋の中は黄色く変色するような酷さ。歯はまっ黄色、服まで臭いが染みつくほどだ。父親の和夫も喫煙はするが一日十本くらいだ。和宏は二箱以上は吸う。たまに、和夫がタバコを切らすと、息子の部屋に行って、「タバコあるか」と、貰いにゆく。

「なんだ、おまえ、学生のくせにお父さんより高いタバコを吸っているのか」と、頭にくる。堂々としたもので、高校のときから、親の前でタバコを吸っていた。親が昔そうだったから、注意をするどころか黙認している。和宏は酒も強い。毎晩、バーボンをストレートでやっている。和夫が家計のことを考えて、安い焼酎を薄めてチビリチビリとやっているのに、息子のほうが贅沢だ。

和宏は、またパチンコに狂っていた。二日に一度は通う。麻雀も、学生仲間でやっているようだ。レートが低いといっても、賭は賭だ。バイト代を注ぎ込んでも足りない、親に手を出してくる。

親から見ても、体力もなく、不健康で、いい若い者が部屋に閉じこもってゲームをしたり、テレビばかり見ていたり、喫煙、飲酒で、運動不足、しかも真夜中まで起きていて、朝は遅い。朝ご飯は食べないし、生活不規則で、顔色も悪い。このままで行けば、肺癌か肝硬変か、いまが一

番肉体を鍛えなければならないときに、ひ弱で病人のようだった。

「ねえ、あなたから、云ってあげてよ。若いときにあれじゃ、脳細胞が萎縮するって。最近、和宏の様子がおかしいでしょう。ぼおっとしているし、言動がどうも若者らしくないし」

「そうだな、今月、そう云えば、あいつも成人式だったな。市役所から通知が来ていた。よし、おれから和宏に忠告しておこう」

そうして、父親は和宏の部屋へと出向いた。

「和宏、いるか」

「なんだよ、親父、またタバコ切らしたのか。パチンコで取ってきたから、ワンカートンやるぜ」

和宏は灰皿に吸い殻を山のようにして、飯も食べないで缶ビールを呑んでいた。部屋の中は煙が充満していた。ごろごろとウイスキーの空き瓶が転がっている。

「そうじゃないんだ、いいか、和宏、おまえももう二十歳だ。成人だ。二十歳になったら、タバコと酒とパチンコはやめてくれ。頼む。お父さんからのお願いだ」

二十歳になったら、成人病も解禁だ。

第338話 カラスの正月

カラスの正月は何故か一週間遅れてやってくる。

「お父ちゃん、明日はお正月だね」と、カラスの子が訊いた。

「そうだな、きっと景気が悪そうだから、あまりおいしいものは期待できないかもしれないが」

「ケーキが美味しくないの」

「いや、違うんだ。その、人間どもの浅ましい欲望の風船が割れてから、みんな少しづつ貧乏になってだな、うん、おまえが大きくなったら判るだろう。人間というのは、おれたちカラスよりも貪欲で醜いものだ。上から観察していれば実に莫迦げたことが大過ぎる。だから、おれたちはいつも人間を莫迦にして鳴いているんだ。アホーとかバカーとかな」

カラスの一家に親戚のカラス一家が遊びにきた。一族でお正月を迎えようというのだ。

「寒くしていないかい」叔父さんが訊いた。

「うん、大丈夫だよ。羽毛布団を着ているようなもんだもの。ねえ、どうして人間は風邪をひいたら咳をしたり熱が出たりするのに、ぼくたちは病院にも行かないで平気なんだろうね」

息子が叔父に訊いた。

「それはだね、自然に対応している生活だからさ。人間たちも大昔はもっと野生に近く丈夫だった。裸足と薄着で走り回っていた。いまのように、ひ弱でなかったさ。でもね、人間たちは自動車に乗ってから足が弱くなったし、冷暖房の家において、外気との適合性がなくなったんだね。それにダイオキシンやら化学物質やらで空気も悪くなった。われわれカラス国でも問題になっているだろう。あまり、ゴミ焼却場の近くに行くなと、学校でも習わなかったかい。人間どもを狂

わせたのは自分たちの排泄したものからの復讐なんだね」

「ふーん、復習はぼくたちもしているけど、予習はあんまりしないけど」

カラスたちは山の峙で賑やかに一週間遅れの年越しをやっていた。テレビはないからお喋りだ。だ、家族の絆も対話もある。体を寄せ合って、暖を取る愛情もあった。

「おなか空いたね」カラスの子たちが話していた。

「可哀想にな。どうしても冬になれば虫も少ない。みんな木や土の中に隠れてしまうからなあ。でも、明日はうんと食べられるぞ。一年に一度のご馳走だ」

「ほんと？ わーいわーい」と、子カラスたちが嬉しそうに鳴いている。

いよいよカラスの元旦。朝早くからカラス一族はゴミの収集場所に集まっていた。人間たちは、いつもの何倍ものゴミを運んでくる。手では持ってこれずに車でやってくる者もいる。もの凄い量だ。

「凄いや、みんな網の中に入るのかな」

「いや、黙って見ていてご覧。いまに溢れて入りきらなくなるから。それがチャンスなのだ」

「でも、いつものようにゴミのトラックがすぐ来るんじゃないの？」

「今日は回収が遅れるんだ。どこの収集場所もゴミが溢れているからね。回収のトラックが回りきれないんだ。夕方頃に来たりする。だから、今日は、ゆっくりとお節料理が食べられるんだ」親カラスが云った通り、ゴミはすぐに溢れ、遅れて出しにきた奥さんは、仕方なく網の外に袋を置いた。それとばかりカラス一家は袋に群がる。ビニールの中が見えるように透明にしてくれたお陰で、中身が判るから嬉しい。食べ物がすぐにどこにあるか、袋の中に入らなくてもいいのだ。人間たちはいいことをしてくれた。

「それ、わたしがみつけたのよ」「ぼくが最初にくわえたの」

「これこれ、喧嘩しないで。まだまだ沢山あるから」と、カラスの母は笑う。

「ほら、また持ってきたわ」「すごいや、いくら食べてもいいの？」

「そりゃ、食べ放題だけれど、食べ過ぎに気をつけるのよ。お父さんもよ。コレステロールが溜まるし、成人病も怖いから。最近、人間どもと同じ食事をしているから、カラス界でも贅沢病が問題になっているでしょ」

口煩い母カラスが注意していたが、みんな聞く耳持たない、食べるのに夢中だった。少しだけ黴が生えたからって捨てられた蜜柑。黴のところだけ取ればあとは食べられるのに。折りの中に堅くなった羊羹がある。羊羹も子供たちが食べなくなったらしい。冷凍しておけばいいものを、どんどんと捨てている。勿体ないということを知らない。刺身からステーキの食べ残しから、蟹、海老、黒豆……。まだまだ食べられるものを平気で捨てる人間どものため、カラスは大喜びだ。なんでも四割は捨てているとか。

「これはぼくの」「わたしにも頂戴」と、また子カラスたちが喧嘩している。

「なによ、仲良く遊んでね」

玩具も燃えないゴミなのに、いまだ分別しないで混ぜて出していた。さっそく子カラスたちが見つけて奪い合い。人間の子も飽きやすくなってきた。一日も遊ばないですぐにポイだ。

「これは何？」「これは、独楽というんだ。糸で回して遊ぶんだが、やり方を知らないから捨て

たんだろうね。こっちは凧、これもいまじゃ誰もやっていない。どれ、凧でも揚げようか」カラスが糸をくわえて空高く飛んでいった、子カラスたちが後に続いた。凧は一回も飛ぶこともなく焼却されるところが、カラスによって空を飛べた。親カラスたちがまだ食べ続けながら、話していた。

「この国はまだまだ贅沢だわね。これじゃ税金も上げられるし、思うままだわ」

「どこが不景気なんだろうね。ゴミの量で暮らしぶりが判るといふもんだ」

カラスのほうが人間より人間をちゃんと見ていた。

第339話 時間売ります

そこは奇妙な店だった。店内はがらんとしていて、やたら柱時計や目覚時計などが、チクタクと動いていて、煩いほどの協奏だ。ただ、時計屋ではない。時計を売るのではなく、時間を売るので。

時間がないせわしい現代人にとって、何よりも時間が欲しい人が多いのだ。まして、最近は一歩アップもないときているから、どうせ、いくら働いても給与が上がらないから、せめて休暇で欲しい。ところが、会社も人件費を抑えようとするから、やり繰りがつかない。労働時間短縮どころか、サービス残業までさせる違法行為が罷り通っている。休日返上で働いているサラリーマンも実に多い。一日ゆっくりと休みたい。一週間くらいのんびりと旅行にでも出てみたい。そう思っている人が沢山いた。

「ざ・タイム」と、看板のかかっている店にふらりと憔悴しきっている中年男性が入ってきた。

「時間が欲しいのだが」

「はい、かしこまりました」店員が、モヤモヤしたピンク色の気体が入ったカプセルとトラベル用の目覚時計を出してきた。

「どのような時間をお求めでしょうか」

店員はカタログも広げて見せた。一時間の基本料金は千円となっている。一日だと多少割引になり、二万円。それが、一週間であれば、十万円というサービスになる。お試し料金は三時間で二千円と安い。

「過去がよろしいですか、それとも未来でしょうか。現在もございます」

料金表によれば、過去が五割増で一番高い。ついで未来が二割増、現在が基本料金でゆけるのだ。

「どうして、過去が高いのかね」と、重役タイプの紳士は訊いた。

「現時点から想像いたしますと、みなさん、どうしても未来は絶望的で、たぶん、悲惨なことになるだろうと予測しておいでです。現在は、それこそ現在そのままですから、ただ、お客様の時間を止めて、好きなだけそこに留まることはできますが、一切の行動はできません。眠ったまま

とか、冥想したままとか、体はそのまま停止していますが、思考だけは寝ていようと、空想していようと自由ですから、お安いのです。過去は、ご自分の一番いい時代に戻ることができるので、需要が多いんですね。これも商品ですから、需要と供給のバランスで価格設定されておりますです。はい」

一通りの説明を受けて、中年は納得した。

「それじゃ、たとえばだね、わたしが三十年前の青春時代に戻ったとして、若い女の子たちと遊んだりもできるのかね」

中年はごくりと生唾を飲んだ。

「いいえ、それはできません。お客様の意識だけが、過去を浮遊いたしますので、見たり、聴いたりすることはできましても、触ったり食べたりすることはできません。実体は現在に置いての時間旅行になりますから」

なるほど、中年は頷いた。すなわち、歴史を変えることはできないのだった。歴史に関わるような行為そのものがない。

「判った。そうすると、お試し料金の過去をもらおうか」

「はい、ありがとうございます。高額の場合のお支払いはクレジットでもできます。どうぞ、こちらにおいでください」

奥の部屋にすでに、旅行中の客が、数人、簡易ベッドに横になっていた。中年は、支払いを済ませると、ピンク色の気体を口にした。そうして、過去時間で三時間後に正確に鳴る目覚時計をセットされて、ベッドに横になると、戻る時間を指定し、意識がなくなってきた。

中年が意識を戻したのは、昭和四十七年の一月十一日だった。懐かしい感じの東京のどこかに立っていた。すでに夕暮れで、車も人も忙しく動いている。若い女性はミニスカートををはいていたし、どこかファッションが古くさい。走るクルマもいまではレトロ調のクラシックカーだ。ケンメリのスカイラインが現役で走っている。すごい、あんなのがあれば、いくらで売れるだろうと、中年はバカなことを考えていた。書店の店頭にはガロのコミック雑誌も陳列されていた。すごい、あれもいまでは一冊いくらのレアものだ。しかも、新品ときている。レコード店ではアングラフィックを流していた。ポスターに出ている歌手の顔も懐かしい。中年は、まだ二十歳の学生だった。アルバイト募集、時給二百円か、安いなあ。コーヒーショップでは、ブレンドが百五十円か。

中年は、ふらふらと歩いているというより、浮かんだまま移動していた。地下鉄の駅に渋谷と書いている。何か薄汚れた感じが、当時のそのままだ。階段を降りてゆく。切符を買おうと、ポケットを探そうとして、はたと気がついた。手も足もないのだ。まして、服を着ているのではない。ということは、改札口は自由にすり抜けることができる。誰も自分には気がつかない。幽霊と同じなのだから。銀座線の古い車両に乗り込んだ。どこへ行こうか。どこへでも行けるのだ。

乗り換えして、中年は御茶ノ水駅から地上へと出ていた。中年の通った大学のあった神田にいつか来ていた。神田川の橋の上に、佇んでいる若者がいた。どこかで見たことがあるやつだと思ったら、中年の若いときの姿だった。

「おれだ。二十歳のおれがいる」随分と若い自分の新鮮な横顔を、こうして離れた位置から眺め

たことはない。まるで、自分の過去の映画を鑑賞しているようだった。

すると、中年はこれから起こることのすべてを思い出していた。若者は、時間を潰していたが、坂を降りてゆく。中年の浮遊する意識は自分自身についてゆく。自分の背中を眺めているのは不思議な感覚だった。

橋の側にある、プティヤックという小さな喫茶店に若者は入ってゆく。フランス語で小さなヨット。室内はヨットのキャビンのように作られていた。若者は海が好きでよくそこを利用した。階段を不安そうに上がってくる女子学生がいた。髪をセシルカットにして、目の大きな人。中年は思わず目を細めた。いま、まさに初恋の人がドアを開けた。小さく胸元で手を振った。青年も手を振って立ちあがった。中年の人生で一番眩しかったときだ。

すると、いきなり目覚時計が鳴った。驚いて飛び起きると、そこはかの「ざ・タイム」の時間旅行安息室のベッドの上だった。

「お帰りなさい。いかがでしたか」さっきの店員が覗き込んでいた。

「なんだ、もう三時間経ったのか。これからがいいところだったのに」と、中年が腕時計を覗くと、ベッドに寝てからまだ五分と経っていない。

「君、三時間と云ってインチキじゃないのかね」

中年が店員に抗議すると、

「いいえ、お客様、時間はすべて圧縮してございます。でなければ、中には何年も時間旅行している方もおります。戻られましたら体のほうはすっかりと年老いて、浦島太郎のようになってしまいます。ですから、現在時間の百分の一とか千分の一に圧縮した時間の中を普通の長さのように体験してもらえるので、忙しいサラリーマンの方にも、仕事を休むことなく、一週間でも意識を休ませることができるのです」

中年の先に安息室に入っていた若者が旅行から戻ってきたとみえ、ベッドから起き出した。

「よっころしょ」と、仕草がどこか老人くさい。

「ああ、生きた生きた、わしの未来はよかった。仕事をせんでも孫たちが面倒をみてくれるのう」

まだ二十代の若者が使う言葉は老人のそれだった。中年は奇怪なものを見たように眺めていた。

「ああ、あれですか。あの方は五十年もの間、未来旅行をしていました。実際の眠っていた時間は二日くらいでしたが、意識は五十年も生きたのです。あの方の精神年齢は七十五歳になりました」

「何だって、意識も年をとるといのか」

「そうです、ここに注意書きがございます。時間旅行をした分、肉体は現在のままでも確実に精神年齢は年老います。なかには痴呆になられて戻る方もおります」

中年はようやく理解した。そうなのだ。人生の蠟燭は同じ長さなのだ。肉体が減るか、精神が惚けるか、人間の耐用年数は決まっている。われわれは時間の檻からはどうやっても逃げることはできないのだ、ということ。

第340話 癒し系

田中さんがノーベル賞を貰ってからは、どこのチャンネルを回しても、田中さん、田中さん、とそればかり、もう一人、ノーベル賞を貰った人がいるんですが、さあ、名前は何でしょうと、インタビューしても名前が出てこないくらい影が薄れて可哀想なくらい。どうして、田中さんがもてはやされるのかというと、それは一言「癒し系」なのである。いわゆる、大学の博士様で、一般庶民とは縁もない偉い先生が受賞する。これはあたりまえで面白くもなんともない。普通の人を取るから面白い。アメリカの丸太小屋伝説のように、現在も下積み生活で苦労している人にも励みとなる。

ただ、どんなにコツコツと研究している人でも、常識人はなかなか偉大な発見はできない。変人でなければならない。人のやらないことを悪口を云われながらもやる者が世間をあっと云わせる。

政府はこの不況で、次の国民栄誉賞を与えるのは普通の人にしようという決議を採択した。国民に夢と希望を与えるために癒しとなる人物に与えると世間はまたあっと驚き、小鼠首相の支持率もまた上がるかもしれないという目算があった。すべて、そういったことは人気取りに利用される場合が多い。そこで、何人か候補者をノミネートすることとなった。

堅寺晴生は、ケチで有名なリサイクルセンターの社長だった。それが、リサイクル法の制定で、全国に回収したリサイクル資源の処理加工の工場を設けてから、一躍大企業にまで成長した。もともとアイデアマンで、人の考えつかなかったことをやる人だった。粗大ゴミが出る、産業廃棄物が出る。それらはただ処分に困るというだけで、再利用を考えるものはあまりいなかった。バタ屋出身の晴生は、そこが目のつけどころで、元来の吝嗇な性格と合わさって、逆転の発想をすることになる。

建築資材の切れ端というのはどうしても出る。それが、工事現場や、建設現場では山のように出るのだ。その処分は業者を呼んで、ダンプ一台いくらかで金がかかる。そこに目をつけた社長は、使えるものだけただで引き取ると、現場に走る。少しでもゴミを減らしたいから、あちこちの建設会社から電話が殺到した。晴生は、その現場でゴミとされているタイルや鉄パイプや、クロスなどのまだ十分に使えるものを拾ってくる。そして、大きな郊外の倉庫に展示、格安で販売を始めた。資材はすべてロットで購入するので、どうしても無駄が出るのだ。建設会社が逆に晴生のリサイクルセンターの倉庫に行くと、似たような資材がごろごろしている。設計担当、現場監督、左官屋、いろんな人が連日やってきて、ただで回収した半端ものを買ってゆく。

粗大ゴミとして出された自転車でも電化製品でもまだまだ使えるものは沢山ある。それらも回収してきて、再生工場に持ち込む。その各技術者たちがチェック、再生して、それは東南アジア、中国向けに輸出することになる。中古車もそうだ。十年以上経った車は、まだ十万キロも走っていない、どこも壊れていない車でも、型が古くて恥ずかしくて乗れないというだけの理由だから、いまや廃車にも金がかかる世の中で、みんな喜んでただでくれる。

そんな車もどんどん海外に輸出した。無から有を作る。それがいらなくなった日本人の贅沢な

廃物利用からできると目をつけた。洋服でも流行があるから、一度期にどっと流行ったものほど、大量にゴミとして出る。アフガニスタンでは薪一束が四百円なのだ。一日働いてもそれほど稼げない。そして、寒さでばたばたと子供たちが死んでゆく現状がある。毛布が足りない、防寒具が足りない。マイナス十度の厳寒に、家も暖もない。

その記事を目にして、社長は全国の支店営業所に呼びかけて、チャリティを始めた。どうせ、流行遅れで、何回も着ていない衣服でも捨てる時代だ。ただで引き取り、それをアフガニスタン政府に寄贈した。リサイクルセンターでもなかなか流行遅れの衣服は売れないし、第一引き取らない。贅沢日本だけが、どんどんと使わせ、厭きさせ、捨てさせる。

堅寺晴生は、そんな人の捨てた服を平気で重ね着していた。ストーブもつけさせない。

「寒ければ着ればいい、暑ければ脱げばいい。昔の人はみんなそうしてきた」

会社の事務所は寒いのだが、全社員がそうしている。電灯もできるだけ無駄に点けない。階段は歩く、健康第一。車はなるべく使わせない。社員食堂でも割り箸は繰り返し洗って使わせる。食べ残したものは罰則で倍を支払う。食べ物を粗末にするのが一番許せないと、社長は貧しい子供時代に田舎の祖母から教わった躰を生涯実践していた。ときには、社長でありながら、厨房の生ゴミを漁って、まだ十分に食べられる食材や、人の食べ残しを持ち帰り、今夜の食事にさせる。妻は化粧もせずに、それらを料理するものと長年思っていたから、スーパーに買い物に行ったこともない。社長の報酬は殆どが預金に回る。金を使うことをしらなかった。

街を歩いている社長は、下ばかり見ている。下を見て歩けば、金も落ちているし、吸い殻も落ちていく。吸い殻は、こまめに集めた。まだ三分の一くらいはタバコが残っているのをせっせと集めてはほぐし、インディアンペーパーの辞書で巻いてまた吸えるのだ。

そんな社長も街の人にいつも笑われながらも、自分の意志を貫いていた。名物社長になっていた。小鼠の耳にその話が伝わった。

「堅寺社長さんを今度の国民栄誉賞にしたらどうかな」

時代に逆行しているとはいえ、やっていることは善行で、極、普通の人、いや、変わっているのでは普通でないかもしれないが、エコロジーの実践者でもある。そこで、マスコミを呼んでの突然の受賞発表とした。世間はあっと驚いた。

「首相、田中さんの次を狙っての癒し系で選ぶといたのに、どうして堅寺社長が選ばれたんですか」

記者たちはそう質問した。小鼠は平然として云った。

「これからのマイナス社会では、時代に逆行する人が求められます。これからの日本に必要なのは卑しい系です。お判りですか」

人はそれぞれ自分の体の中で一番気に入っているところがある。その反対に気に入らないところもある。そんなことを考えるのは女性が多いのだが、書店の店長をしている北村拓也も馴染みの女性客から店でそんなことを質問された。

「北村さんは、自分の体でどこが好き？」

五十を過ぎて衰えてゆくばかりの肉体に好きなところもないと云おうとしたが、昔から気に入っているのは腹だった。

「どうだろう。そんなことは考えたこともないけど、強いて云えば、腹、かな」

「あら、珍しい。おなかが素敵な人ってなかなかいないですよ」と、相手の女性客は思いっきり笑った。むっときた拓也は、人前だから見せたくともできないが、自分でも惚れ惚れする腹なのだ。

第一、臍の形がいい。拓也は自分を取り上げてくれた産婆さんに感謝していた。丸く、綺麗に窪んでいる臍は実は貯金箱か小銭入れにもなるのだ。若いときは酔っぱらうと、余興で臍に百円玉を十枚入れて拍手喝采を浴びたことがある。

また、拓也の肌は男には珍しい餅肌で、体毛もなく皺や黒子もなく、色白で滑らかだった。それは腹に顕著だった。痩せていたり筋肉質の男性的な腹とは違い、つきたての餅をお供えにしたような出っ腹なのだが、それがまたなんとも云えず触ってみたくなると、歴代の女は云っていた。拓也の特技はまた腹鼓にもあった。腹の叩く位置で音が変わるから、ドラムセットを腹に収納しているようなものだ。暇なときはそれを叩いて遊んでいた。また、いい音がした。

ただ、ダンディを自認している拓也にとっては、とてもそんなことを人には自慢できない。披露するなぞとんでもない。若いときの脱線とはいまは違う。家庭もあり、一応店長という役職にも就いている。妙な噂がたったらいけない。

だが、その女性客がお喋り女だったとは拓也も知らなかった。その腹の如何に素晴らしいとか、若いときからの特技などを、そっと秘密を教えるように話してしまった。

何日かして、店にカメラを首から下げた、若い男が店長を訪ねてきた。

「北村店長さんですか。実は、××さんから聞いて来たのですが。わたしはこういうものです」と、男の差し出した名刺には有名広告代理店のディレクターと書いてある。××さんとは、例の女性客だった。

「はあ、××さんが何か云っていましたか」

と、拓也が聞くと、

「ええ、あの方とはフリーライターとしてのおつきあいがあるんですが」

「ええ？ 彼女はライターだったんですか」

「知らなかったんですか。尤もペンネームで書いていましたから。コピーライターでもあるんです。いろんな商標も付けました。業界では有名ですよ」

普段、何気なく話している女性も意外な面があったりする。

「で、ご用件は？」

「単刀直入に云いまして、北村さんにモデルをお願いしたいと存じまして。勿論、謝礼はお支払いいたします。その前にちょっとだけ、おなかを見せていただけませんか」

「な、なんと、わたしの腹と。あんちくしょう、喋りまくったか」

「何か？」

「いいえ、こんな腹ですが……」と、シャツをめくると、

「失礼します」と、ディレクターは拓也の腹を撫でた。変な気になってくる。

「ふむ、これは素晴らしい。一点の曇りもない、完璧な腹だ。あのう、写真を撮らせてください。これは使えます」

ディレクターは非常に感激し、興奮している様子だった。

「ところで、モデルって、なんのモデルですか」

「ああ、肝心なことを忘れていました。今度、ホーキンスで遠赤外線のブランドものの腹巻を新発売することになりまして、××さんがキャッチコピーを担当してくれまして、そのモデルの話になったとき、北村さんのことが出てきたんですよ」

「腹巻ねえ」

ダンディを自認する拓也にとって腹巻は敵だった。いまだかつてしたことはない。それが、敢えて付けなければならない屈辱は耐えられないものがあった。

「いいえ、大丈夫ですよ。足タレさんは足より撮りませんので、顔が出ることはないのです。どんなブス、いや失礼、顔に自信のない方でも、足が魅力的であれば足のタレントさんになれるんです。手タレ、尻タレさんもおります」

「じゃ、漬垂れは」「それは鼻タレではないんですか。おります、おります、なんでもいる時代なんです。北村さんには腹タレをお願いしたいんです。ぼくが、いままで何千、何万という腹を求めてどれほどサウナを渡り歩いたことでしょうか。ようやく、ようやくこの理想の腹に辿り着きました」

尚も、腹を撫で撫でしていた。薄気味悪い。

結局、押し切られ、拝み倒されて拓也は出演を了解した。どうせ顔は出ないから誰も拓也だとは思わない。

いよいよ本番のCM撮影で拓也はスタジオ入りした。ブリーフのゴムの型が付かないように、二、三日前から緩い下着にしていたし、ベルトもやめて吊りズボンにしていた。

拓也の臍に百円玉が十枚入れられた。それが力むと臍からポンポンと飛び出す。それだけでも面白い。カメラは回り続ける。硬貨がすべて飛び出すと、今度は腹巻姿の拓也が登場する。勿論、腹がアップで出ている。

一お金の次には健康。健康はお金では買えません。遠赤外線で暖ったか。男の腹巻、ホーキンス。

第342話 三日坊主

元旦から日記を記け始める人が多い。何も律儀に一月一日から書かなくてもいいのだが、何年度と日付の入った日記が年末に書店で売れている。それを使う人が買うから日記は元旦からな

のだ。中には三日より書くところがない日記まで売られているのは可笑しい。十年日記というのものもある。それまでぼろぼろになってしまうだろう。わたしも日記は一番古いので高校生のときのをもとっている。途中中断したが、二十五年分はあるだろう。日記など女の書くものといった古い考えがどこかにある。男もすなる日記を書き始めたことは、誰のためでもない。自分のためだった。読み返して面白いのは自分だけだ。第一、悪筆で自分でも自分の字が読めないのに、人が読めるわけがない。それを息子たちは笑う。「お父さんが死んだら、誰も解読できないものをせっせと書き貯めてどうするのさ」そうなのだ。

いままでは、いつも使うのは普通の大学ノートだ。それが年に二冊として五十冊はある。衣装ケースにいろいろと四つもあるから、どうしたものか。処分したくとも分身のようできない。棺桶にも入らない量だ。

それでパソコンにした。もう三年前からノートは使わない。三年分のいろんな書いたものがフロッピーディスク一枚に入ってしまう。これなら、棺桶には何枚でも入る。

いまは根気があるほうだと思うが、若いときは移り気、尻軽であれやこれやとやってみたくなるほうだった。楽器もいろいろやってひとつもものにならなかった。ギター、ピアノ、フルート、トランペット、リコーダー、チェロ、そして、手元にいまも残っているのはハモニカだった。

玩具も子供には与え過ぎないほうがいい。厭きっぽい子供になる。プラモデルもやたら作っては壊し、組み立てるより分解するほうを好んだ。ラジオが音が出るのは、中に音の素が入っているからだ壊して調べるがとうとう発見できなかった。

三日より続かなかったことは沢山ある。ペン習字の通信講座も、フランス語の学校も、禁煙も、ダイエットのための黒酢だとかヨガだとか。気が多いから、いろいろと目移りする。禁煙は簡単だ、何千回もやったという名言通り、三日以上は続かなかった。誘惑に弱い。

誘惑というと女性の誘惑には手放しで乗ってしまう。後先も考えない。

A子は極普通のOLだった。美人なのに四十近くなるまでミスであるということは何か理由がありそうで、中身がどうなっているのか覗いてみたい興味で交際を申し込んだ。出会いはいつも駅前通りの工芸喫茶で、夜になればスナックのようにアルコールも出した。そこに入れ替わり立ち替わり、少し変わった女性たちが出入りしていた。マスターが変わっているし、趣味のいい工芸を展示販売もしているので、そんなセンスを持った女性たちが集まってくる。

A子は更紗を手縫いしたような長いスカートをはいて、やたら装身具が工芸品で固まっている、ちょっと目には風変わりな女性に見えた。マスターは無口だが、たまに客同士を引き合わせる。

「Aちゃん、こちら北村さん。小説を書いているんです」

「あら、小説家さんなんて初めて」

と、A子は目が輝いた。

「小説家だなんて、趣味で書いているだけで、飯の種は別にあります」

わたしたちは本の話で盛り上がったが、A子の話に出てくる小説家の名前はひとりも知らなかった。なんでも読んできたつもりが、逆にA子に負けていた。

「あら、あんな有名な作家も知らないんですか」

「いやあ、勉強不足でした」

だいたい、ミーハーの読むやおい小説作家など、掃いて捨てるほどいるのだが、文壇とは無縁である。後で知ったのだが、若い女性向けに書かれたホモ小説が流行っているのだとか。日本版ハーレークイーンもあって、内容もないどうでもいい小説なのだが、わたしは自分の知らないことでうち負かしたA子を少し離れて見ていた。シニカルな会話にもこっちが構えなければならないほど、わたしの男性をかき立てた。プライドが牙となって、この女を落としてやろうとどこかで様子を伺っている自分がいた。

「明日の日曜いかがですか。君を取材させてくれませんか。食事をご馳走したい。いま、いろんな女性を主人公にした小説をシリーズで書いているんです。是非、ネタの提供に協力してくださいよ」

自分のことが小説になる。悪い気はしない。それがわたしの手だった。そして、行き着くところまで行くと、ポルノ小説を書いているから、是非ご協力をと、ホテルまで連れ込む。

A子も乗ってきた。交渉成立、出会って翌日デートという速攻だ。

A子は、街角に立っていても目立つ存在だった。ファッションがみんなと違う。流行は追わない。個性があるから服装で大概の男は警戒心を持つのだろう。だが、そうではなかった。外観と中身は反比例したのだ。

わたしは、昼からやっている料亭の懐石料理へとA子を連れて行った。レストランやホテルでなかったことが意外だったようで喜んでくれた。

「君はいわゆる結婚をしない女なんだろうか」

と、いきなり切り出した。

「そうじゃないわよ。いい男がいないだけ」と、焦っているふうもないが、結婚願望はあるらしい。

「趣味はなんかあるの」と、訊いてもこれといってない。何か芸術か工芸に携わっているようにも見受けられたが、それは思い過ぎだった。仕事はOL。訊くと、キャリアでもないらしい。何か退廃的であり、訊けば訊くほど中身は空っぽ。プライベートな過去のことも聞き出したが、とても小説になりそうな波がない。のんびんだらりと人生を送っているような女だった。わたしは、急に興味がなくなってきた。どんな人でも、何かを持っている人に惹かれた。それが女の生き方としてのテーマになる。誘惑の手口ではあるが、実際、彼女らをモデルにした小説は書いていた。

A子に対する熱意もないまま、わたしたちは夕方、約束もないまま別れた。時間と経費の無駄だった。

翌日、A子から会社で電話がかかってきた。もう一度逢いたいという。夜にカフェバーで待ち合わせた。向こうが食いついてきたのか。

待ち合わせの場所に行くと、A子は実にしおらしい態度で、前日までの女ではなかった。

「何か、用事？」と、わざとわたしは突き放した云い方をした。

「ていうか、あなたのケイタイの番号を訊いていなかったから。これから連絡したくても会社じゃご迷惑だと思って」

A子はカクテル越しにちらちらと上目使いでわたしを見ていた。

「もう、取材は終わったし、次の取材があるからなあ……」

A子は悲しげな目を向けてきた。

「わたしって、小説にならない？」「そうだな、平凡な小説だな」

女をその気にさせて踵を返す。そうして、わたしはまるで面接するように三日で女を取っ替え引っ替えしてきた。なかなかいいモデルには行き当たらない。わたしの書き始めた「獵女日記」も三日で終わっていた。

第343話 冬のポプラ

わたしは古本屋の客と老詩人のSさんの話をしていたところだった。年輩客が多い店だから、ある日突然に来なくなると、大概は入院しているか、新聞の死亡広告覧に載っていたりする。Sさんもふつりと姿を見せなくなった。古本屋は本読みたちの溜まり場で、そこに行くとな話ができる、毎日のように年寄りたちが別に本を買うわけではないのだが、油を売りにくるのだ。

Sさんはわたしの詩の先生でもあり、かつての同人仲間でもあった。二十年のつきあいになる。どこかわたしの祖父に似ていて、頑固で情張りなところまで似ていた。それで親しみを感じて、よく呑み歩いた。本もせっせと店に持ってきては、代金を受け取らない。本が好きで、絵も嗜んだ。山歩きもよくした。単眼鏡を見せてくれて、野鳥の観察もしているという。そう云えば、Sさんの家によくお邪魔したが、庭はよく手入れされており、いつも小鳥が来る餌台があった。

若いときから自然の中を歩いてきたので、浅黒い色をして細い目で笑ったが、眼光の鋭さには怖いものがあった。七十を過ぎてからは何か激しさが錆びてきたように、言葉に怒りも感じられなくなった。すべてをどこかで諦め、ダダイストのような云い方もしてきた。若いときから左派の闘士で、いまもそのほむらは消えることはないが、年とともに次第に投げやりな云い方をするようになった。

「北村くんよ、世の中はそれほど笑い転げるほど面白いものではなし」

とか、

「詩を書くというのは、パチンコをしたり釣りをしたりするのとなんら変わらない。たかが言葉遊びだ」

と口癖のように云った。そして、あるとき、同人のみんなに同じ質問をした。

「書くことに命を懸けていると思うか」

大概是真剣に書いている仲間が多く、そうだと答えると、笑い飛ばした。

Sさんは若いときにたった一冊の処女詩集を出したきり、それから五十年の間、一冊も上梓していない。わたしは、Sさんに、

「そろそろ、書いたものがまとまったでしょう。詩集を出してみませんか」と、執拗に勧めたものだが、首を横に振り続けた。古本屋を回っていて、本自体が売れない。まして、詩集というのは全く売れないのを知っている。誰も読まない。ホテルで豪華な出版記念パーティーまでするのは恥ずべきことだと、そんな華やかなものではないと、自らの無名であることを誇るように、

風に消えてなくなる詩ばかり書いてきた。決して表舞台には出ない。どうせ残るものなどないのだと。

今年の正月、賀状がSさんより三日遅れて返事のようにきた。賀状というものは存在証明のようなもので、一年に一度生死を確かめ合うのだ。その賀状に一言、「入院しています」と、書かれてあった。やはり、いつも来る人が来ないからそうではないかと思った。早速、自宅に電話を入れてみた。息子さんが出て、病院を訊き出した。見舞いに行くというと、何か都合の悪いような言い方をしたので、面会謝絶なんですか、と訊いた。そうでもないらしい。あまり判然としない対応だった。

後で、店にSさんの奥さんから電話があった。

一賀状に入院と書いたのはわたしです。北村さんにだけは知らせておこうと思って。ほかの誰にも教えていないんです。お見舞いはありがたいのですが、多分、行かれても誰が来たか判らないでしょう。

—一体、何の病気なんですか。

—蜘蛛膜下で、一月前に入院しました。年末までは返事をしていたんですが、年明けてからは、意識がなくなり、脳が萎縮してきているというんです。

わたしはすすり泣く奥さんの声に衝撃を受けていた。行っても無駄だからと云われても、どうすることもできず、わたしはその夜、車を郊外の病院へと走らせていた。前に前立腺で入院したときは、店の本をどっさりと持っていった。いまは、花も見ることができないし、匂いすら判らないのだろう。食べるものも駄目だとすれば、何を持っていったら喜ぶだろう。

新しく郊外にできた大きな総合病院の五階に、脳外科はあった。わたしは夜の人気のない寂しい廊下を歩いて、エレベーターで五階に上がった。ナース・ステーションでSさんの病室を訊くと、すぐに教えてくれた。広いフロアの病室がかなりあるのに、看護師は意外に少ない。廊下にも誰もいない。八時というのに静まりかえって無人の病院のようだった。普通なら付き添いや、家族がいたりするのだが、まるで真夜中の病院のように人っこひとりいないのだ。機械の音だけが規則的に聞こえてくる。わたしは、何かの工場に足を踏み入れたような錯覚を覚えていた。

病室の入口はドアが開放されたままで、室内が廊下からでも見えた。入口にSさんの名前が貼ってある。四人部屋で、それぞれのベッドには老人ばかりが、みな機械を装着して横たわっていた。さっきから廊下に聞こえていた音はそれだった。わたしは、この病室に入って、人の気配のしないことに気付いた。Sさんの名前のあるベッドには、ひどく別人になったようなSさんと思われる塊があった。口に太い管を通して、人工呼吸の機械に繋がっていた。点滴と排尿の管、そして、すべて中央のコンピュータにデータが送られている心電図、脈拍、体温計と、まるで修理されているロボットのように線で繋がれているSさんの肉体だけがかった。

「Sさん……」と、呼んでみたが、反応はない。寝ているようでもあり、虚ろな目を少しだけ開いて、笑っているようでもあった。それは、もう詩をうたうことのないSさんの抜け殻だった。機械という生命維持装置でただ生かされているだけの。すでに、わたしからものすごく遠いところにいるような淋しさを覚えた。

機械の電源を切ると、Sさんの抜け殻も死ぬのだろうか。痩せていた骨ばったSさんがますます

す細く見えた。頭の包帯も痛々しい。付き添いの必要もないのだった。すべて機械が面倒を見てくれる。みんなこんな患者ばかりのようだった。だから、無人に近い病院だったのだ……。

わたしは、別世界から脱出してきたように、病院を駆けて出てきた。煌々と電灯が各階に点いていた、近代的なビルの中では何十人という患者の生命をコンピュータが管理している。わたしは、雪の降る中、息を切らして車に乗り込んだ。首を横に振り続け、すべてを否定していた。

車は狂ったように急発進した。ヘッドライトを上向きにして、住宅街の広い雪道を走った。突き当たりに街路樹がまるで恐ろしい化け物のように高く連なって見えた。それはまたSさんの茫洋と立つ姿にも似ていた。信号で止まった。ヘッドライトに浮かんだのは、太い幹と細い枝が真っ直ぐに冬の天を突くようにして立つポプラだった。老木は枯れてもすくりと真っ直ぐに立っていた。

第344話 混血

全世界で戦争の火種が絶えない。国連では、何千年にも渡り、国際紛争の武力による解決をやめさせるにはどうしたらいいかと話しあっていた。

宗教の壁はどうすることもできないが、ひとつの地区に固まった宗教があるとマイノリティの宗教が迫害される。そうした地区へ異教徒の混在を考えた。一対一だから諍いが絶えない。日本のように八百万の神が入り乱れると、何がなんだか判らなくなる。

そして、人種の壁がある。端から見ると旧ユーゴスラヴィアなんか、肌の色、髪の色、どこが違うのと云いたくなるほど同じ民族に見えるのだが、彼らには分別がつくのだろう。欧米人には日本人と中国人と朝鮮人の区別がつかないが、われわれには判るのと同じなのだ。その民族の紛争を止めさせるにはどうするか。ごちゃごちゃとあちこちで煩いくらい議論百出したが、みんな自分たちを擁護することの主張ばかり。これでは全く解決にならない。短気な事務総長がついに爆発した。

「ええい、面倒だ。ユーロが通貨を統一したように世界言語の統一から始めよう。そして、これから結婚する若い人に国際結婚を奨励する。国連から金一封を出そうじゃないか。こうなったら、みんな混ぜてしまえ」

かつて、エスペラント語が提唱されたが普及しなかった。今度はそれを改良した世界統一言語を作った。全世界の小学校、中学では必修教科として国語と同列で教えられる。学校では、その他に宗教学も必修として習うようになった。理解がないから反目するのだ。キリスト教だろうがイスラム教だろうが、仏教にユダヤ教、と世界各国の宗教を小さいときから教えておく。それを学問として教えないから、壁ができるのだ。お互いに宗派も含めて理解しあうようになれば互いの宗教を認めるようになるのではないか。

国際結婚で揺れたのは、実は日本だった。いままで単一民族国家として、なかなか異民族の帰化を認めなかった経緯がある。それが、結婚ということでどんどんと入ってきた。隣の息子さんはサウジアラビアから嫁を貰い、向かいの家の娘はアルゼンチンに嫁に行き、その隣の家はケニ

アから嫁が来たのと、どんな田舎の小さな町でも賑やかになった。互いの国の文化や言語を紹介しあうから、子供たちには国際交流になり、異文化を知るいい勉強になる。

初めは年寄りたちが違和感を持って見ていたが、次第に慣れてくると反対もしなくなる。

「何、アフリカから嫁を貰うだと。ご先祖様になんと報告したらいいか。いやいや、わしの目の黒いうちはケトウの血なぞ混ぜさせはせんぞ」と、頑張っていたじいさんも、グラマーなセム系の美女から挨拶のキスをされると、

「仕方がない、目が黒いうちと云ったが、目は白黒になったわい」

と、まんざらでもない様子。

航空運賃も安くなり、九州へ行くよりハワイのほうが安い時代だ。身内が国際結婚すると、やれ冠婚葬祭だと、みんな親戚で外国へ出向く。海外へ出たこともないおばあちゃんも、すっかり外国かぶれしている。大正生まれのじいさんも世界言語の会話CDで簡単な挨拶を独学していた。

二十年も経ったら、日本の半分が外人で占められた。しかも、人種様々、その二世たちがようやく成人を迎えるまでになった。

そうして、百年が経った。全世界が、白と黒と黄色が混ざり、黄色になった。この世から白人と黒人はいなくなった。ただ、一部では種の保存ということもあり、頑固に人種交配を拒んでいる地域は残存していた。言語も統一が完了して、言葉の壁はすっかりと消えていた。

かつて、財政難のために市町村の合併が行われたように、国もやりくりがつかなくなり、合併が促進された。次第に国境が撤廃されるようになった。一部にはまだ合併を拒否して、国粹主義者たちが頑張っていたが、それも時間の問題だった。世代交代されると古い固定観念が薄れてゆく。部落意識もなくなってゆく。

通貨の統一も果たされた。言語、通貨、人種、そして宗教の自由で、じいさんは仏教徒、ばあさんはクリスチャン、息子はムスリム、嫁は天理教、子供たちは無宗教と、一家でバラバラだが、楽しく暮らしている。何故か、クリスマスにはケーキを食べて、初詣にはみんなで神社へ行く。だんだんとかつての日本のようになってきた。

民族紛争も宗教戦争もイデオロギー闘争もなくなった。地上から戦争が消滅したと思った。

ある日、突然にA国からB国へとミサイルが飛んでいった。B国も負けずとミサイルの応酬。「そう簡単に平和が来てたまるか。人間に欲望がある限り、わしらの出番はまだまだあるぞ」と、死の商人たちがにんまりと笑っていた。

第345話 丸投げ

もう、どうしようもない。何かいい手だてはないものか。

大泉純一は、追いつめられていた。悪いことには悪いものが重なるもので、すべてのことが悪循環で繋がってゆくと、不幸が不幸を呼ぶように裏目裏目と出る。

大泉は小さいが不動産会社を経営していた。自社ビルも老朽化して、建て替えしなければならないが、資金がない。テナントはすべて出て、新しいビルへと移っていった。所有するアパート

も古くなると、みんなもっと条件のいい、新しいマンションへと引っ越したので、がら空きだった。デパートでもスーパーでも商店でもそうだが、常に新しく大きなものが主導権を握ってゆくのだ。その増改築戦争についてゆけないものが敗れてゆく。

最近は、不動産も動きが少なく、なかなか引き合いもない。その手数料収入も減益となっていた。借金だけがだんだんと溜まっていったが、もう、銀行は金を貸さないどころか、不動産の価値が落ちたから、売却しても借金は残る。とうとう、銀行への返済にも滞るようになった。このままでは破産までまっしぐらだった。社長としても頭が痛いのに、家の中はそれ以上に大変だった。

「あなた、わたしね、お友達とちょっと旅行に行ってくるわ」

と、こんな大変なときでも女房が一泊で温泉に行ってくるというのが、それは明らかに浮気旅行だった。純一は薄々勘づいていたが、女房に小遣いも渡していないのに加え、すでに愛情も冷めて、どうでもいい同居人になりつつあった。その女房が最近、いやにめかしこんで綺麗になってきた。不審な行動、電話が多い。夜の方は何年もない。それでも嫉妬もしないし、隙あらば別れ話をと、日頃から思っていたので、女房が浮気しようがなんとも思わない。

それより、寝たきり婆さんのほうが大変だ。介護保険でも間に合わない。女房が面倒も見なくて遊び惚けているから、ホームヘルパーさんを頼んだ。それにかかる費用もばかにならない。じいさんはさらに追い打ちをかけるように痴呆になって、徘徊する。家から出さないようにいつも暗誦番号で開ける鍵をドアに付けていた。老父母がその様なら、子供たちも手がつけられない。家庭内暴力と自閉症の極端な娘息子がいる。息子は外でも警察沙汰になり、学校には呼び出しを受けて、いつも純一はいろんな怪我をさせた家を謝りに回り、損害賠償までしていた。ひと言、息子に注意すると、暴れて、親を殴る、食器は飛ぶ。ガラス戸は割れる。

娘は、もう一年も中学に行っていない。部屋にひきこもったままだ。精神的病気ではないかと疑いがある。説得してもなだめても何をしてても娘は口を閉ざした貝になっていた。

会社では銀行から支払いの催促の電話、家には学校や警察から電話。女房はさっさとそんな家庭に見切りをつけて遊び回っていた。荒れに荒れて、どこかの国の縮図のようだった。家庭内はてんでバラバラで、教育も福祉も財政もみんな問題だらけだった。抜本的に改革をしなければ、このままでは家庭崩壊、会社は倒産、一家は路頭に迷うことになる。これ以上、資金を導入するあてはない。導入したところで立ち直る確約はない。実際のところ売り物件ばかりで買がない。賃貸だけの斡旋手数料はたかが知れている。大きな土地でもどんと売ればいいが、そんな計画も話も聞こえてこない。

そんなときに、隣県の温泉場で旅館をやっている級友から通報が入った。

「あなたの奥さんに似た人が男の人と二人で隣の旅館へ入ってゆくの見ましたよ。余計なことと思いましたが、一応、念のため教えておきます。」

純一は電話でお礼は云ったものの、どうでもいいことだった。浮気しようが何をしようが……。

「いや、待てよ、これは使えるかもしれない」

純一はある考えがひらめいて、急遽、その温泉場まで電車で向かった。私立探偵を一人同行させた。そして、探偵には浮気の現場写真や録音テープなどの証拠を集めさせ、自分はゆつくりと

友人の旅館でくつろいでいた。何年ぶりだろうか、温泉につかってのんびりできたのは。

翌朝、隣の旅館へ逢い引きの二人を訪ねていった。勿論、探偵も一緒だった。二人とも顔面蒼白で、おろおろしていた。証拠の写真やビデオテープをテーブルに出して、純一はにこやかに云った。

「まあ、慰謝料は高いですぞ。探偵さん、いまの相場はいくらかな」と、いろんな事例を報告させる。

「知り合いの弁護士先生とも相談しようと思っていたが。まあ、そうむごいことはしたくありません。二人の恋の邪魔はしようとは思いません。慰謝料の代わりに、わたしの頼みを聞いてもらいます」

いろいろと書類を取りだしてテーブルに置いた。離婚届もある。法人の変更登記、不動産の名義変更届……。すべて手はずよく純一は揃えてきていた。

「わたしの頼みとは、妻にはわたしと離婚してもらいたいこと、この人と半年後には再婚してもらいたいこと、ここに誓約書も用意してきました。それは愛し合っている二人には願ったり適ったりでしょう。そして、わたしの会社の代表を二人にしてもらいたい。自宅も不動産いっさいを二人の名義にして、みんな差し上げたい。わたしはもう一度ひとりになって人生をゼロから始めてみたいと思っている」

慰謝料を取るところか逆に家も会社もくれるというので、二人は驚いて顔を見合わせていた。会社の実状は女房は何もしらない。従業員は三人しかいないが、小さいながらも不動産会社の社長で、古いビルも所有している。相手の男は若いつばめだが、どうやらただのサラリーマンらしく、会社の経営など疎いやつだった。まあ、寝たきりの年寄りもいたり、ぐれた子供がいても、家と会社があって、愛する人と暮らせるならと、二人とも合意した。印鑑証明と実印は帰ってから預かることとした。すべて司法書士がやってくれる。連帯保証人までおまけがつくとは二人は知らない。すでに債務超過で、破産寸前の状態だった。

数日後、大泉純一はロサンゼルス行きの旅客機に乗っていた。すべて放棄してせいせいした顔だった。自分の再出発のための資金だけはドルに替えて海外へ送金していた。アメリカの友人の仕事の手伝いをするのがすでに決まっていた。そこで、第二の人生を送るのだ。まだ四十代、これからが働き盛りだ。

第346話 オプション

格安の海外旅行が多くなっている。観光も食事もない旅費とホテル代だけでも安い。ただ、ツアーに参加して、現地でのオプションツアーが高かったりする。なんとかのショーだ、オペラだ、観劇だ、日帰りツアーだと参加していると、倍以上支払って、結局、全行程観光食事ガイド付より高がついてしまうときがある。それも商法なのだ。とにかく安く連れて行って旅行で気分が大きくなったところにつけこむ。

それと同じことが、電化製品などにも云える。パソコンやプリンタなどの本体だけを安く販売

する。安いと買ったが、インクなどの消耗品や周辺機器を買うとき、本体以上するのに驚く。パソコンの接続ケーブルで何万円もしたり、ボードやカードで一万近くしたり、あれだこれだと思い揃えると、本体より高つくようにできている。巫山戯るなといたい。これだから、商売は発展しないのだ。消費者を完全にバカにしているやり方だ。しかも、原価数十円でできるものをきつと必要になるものは百倍以上もかけている。本体は原価で売って、消耗品、オプションで儲ける。いまだにそんなせこい考えが罷り通っているのだ。

北村明人は四十近くなってまだ独身。父親の事業を継承して、従業員百人の食品メーカーの社長をしている。邸宅も広い、池もある庭付きだ。車も外車が二台もある。長身で、いい大学を出て、マスクも甘くていい。もてないほうがおかしいのに縁がなかった。七十過ぎた老父母と一緒に暮らしていた。

仕事が忙しく、走り回っているうち、時間だけが過ぎていた。とくに、食品はいろんな問題点で、クレームが来たり、回収騒ぎがあったりして、去年からやり玉に上げられ、売上も落ちこんでいた。会社は二十年前の半分の業績に落ちて、巨額の累積赤字を抱えるようになっていた。抵当はすでにオーバーになり、銀行は返済を迫るが、融資は断ってきた。車も担保にして金を借りていた。従業員の給与も遅れ遅れでようやく払っている現状で、とても結婚どころではなかった。愛人のようにつきあっているクラブのホステスはいたが、最近はタバコ代にも窮するほどで、貢ぐ金も底をついていた。女は金と引き替えのなぐさみものだった。

それが、最近、一人で悩み、酒で紛らし、こんなとき誰かそばにいてくれたらと明人は思うようになっていた。折しもそんなぽつと独りを思うときに、明人に見合いの話が持ち上がった。世話焼きおばさんは明人の叔母だった。

「相手のお嬢さんは三十で、高校の音楽の先生をしているのね、仕事は続けたいというのが向こうの希望だから、とてもおじいちゃん、おばあちゃんが同居だって云えなかったの。あなたからうまく云っておいて。ねえ、とってもやさしそうで綺麗な人でしょう」

と、写真を見せられていた。スタイルもいい、学歴もある、家柄もいい、何の欠点もなさそうだ。ただ、あるのは明人の家のほうで、そろそろ寝たきり痴呆になる親を二人抱え、借金だらけの会社、それを知ったら誰が嫁にくるものか。それでも一応見合いだけはしてみようと思った。

ホテルの和室に凝った料理が運ばれていた。見合いの席は叔母がセッティングしていた。加納舞子という写真より実物が遙かにいい女性で、明人はどぎまぎしていた。スーツを着て、笑顔がまた素敵な女性だった。一度で明人はぞっこんになってしまった。話は、家族のことや仕事のことになると、明人は話を逸らした。

「舞子さんは、ピアノをやられるんですか」

「音大ではピアノは必修です。弦ではビオラをやっております」

明人には音楽の趣味はない。カラオケで歌うのはいつもど演歌だ。そっちのほうの話にはついてゆけない。ただ、自分の知らない世界で、高尚な趣味に思えた。仕事で疲れて帰ってきたとき、居間でブランデーを呑みながら、新妻のピアノで慰められたい。いままでは考えもしなかった生活だ。

なんとか、この人と結ばれたい。とても年寄りが同居しているとは最後まで云えなかった。

数日して、向こうから婚約を了承する返事をもらえた。明人は心躍った。さっそく、明人は叔

母と共に相手の両親のもとに挨拶に行った。

「なんでも広いお家にお一人で暮らしておいでだとか」と、すっかり一人暮らしになっていた。いまさら、一人でなかったとは云いませなかった。相手が勝手にそう切り出し、そう思いこんだのだから、明人が嘘を云ったのではない。

「うちの娘も仕事は続けたいと我が儘云うので、いろいろと家庭のことに専念できませんで申し訳ございませんが、何卒よろしく願います」

相手の両親も公務員をしていた方で、堅い家柄が舞子の育った環境を想像できた。

近いうちにと、向こうの両親と舞子が明人の家に挨拶に来ることとなった。困った、どうしたらいいか。なんとしても舞子と結婚したい。もう、二度とこんな素晴らしい女性と出会うチャンスはないだろう。

日曜日、いよいよ向こうがやってくる。家の中はすでに大掃除は済ませていた。老父母には、とりあえず隠れてもらうことにした。

「あら、すごい豪邸ですね。家付きカー付きとは云いますが、一人では勿体ないですねえ」
つつましい生活をしている加納家に比べれば、会社の社長宅というのは夢の世界だった。

「どうぞ、ようこそおいでくださいました」

明人が玄関に出迎える。

「こんな広いお家を、お一人で掃除もお食事も？」と、訊くと、父親の方が、

「まさか、女中さんの一人や二人いるだろう」と、また勝手に想像していた。

「お家の中を拝見してよろしいですか」

舞子は楽しそうだった。家の中から年寄りが住んでいる形跡はすべて押入に隠した。

「どうぞ、広いだけの家ですが」と、二階から案内した。

「すごい、お部屋がいくつもあるのね」

舞子は、押入を開けてしまった。明人はあっという声を出した。すると、ころりんと押入からおじいさんとおばあさんが転がって落ちてきた。びっくりして声も出ない舞子に、明人は咄嗟に弁明する。

「ああ、この家にオプションで年寄り二人が付いているんだ。云うの忘れていたけど」

玄関で大声がする。

「社長、いるか。出てこい」

みんな、何かとばたばたと玄関へ出ると、サングラスのやくざらしき風采の二人組がすごんで立っていた。

「おう、この家は差し押さえすることになったからな。それが嫌なら、明日まできっちりと返済するんだな」

明人はなんとか宥めすかせて、お引き取り願ったが、舞子たちは呆然としていた。

「ああ、借金もオプションで付いているんです」と、明人はわざと笑ってみせた。

不幸は続くもので、なんと、派手な服装な女性も入れ替わり入ってくると、

「明人、何よ、その女、最近、マンションに顔も見せないと思ったら、女ができたのね」

舞子と両親は、その剣幕にすくんでいた。

「ああ、云うの忘れていたけど、愛人もオプションで付いてくるんです」

第347話 北帰行

田舎でも仕事がないから若い人は喰えない。都会でもそれは同じだった。人は見渡すことができないほどのビルと雑踏を見ると、何かいくらでも職があると錯覚する。その都会でもあぶれた組はホームレスになったり日雇いでその日暮らしを強いられることを知らないで、都会へ出るとなるとかなると、安易に上京してくる。

高田正幸は北海道出身だ。オホーツクに面した貧しい漁村で生まれた。中学を出てから村を飛び出して、札幌に出たが、不良の仲間入りをして、逮捕拘留されたこともある。盗みを働いて、少年院送り。更正して、東京へ就職を世話された。

貧しかったから、修学旅行にも行ったことがない。十八になるまで内地に足を踏み入れたことはなかった。昭和の終わり、正幸は生まれて初めて函館から青函連絡船で津軽海峡を渡った。不安だった。途方もなく遠いところにひとりで来てしまったように、日頃のつっぱりの正幸の態度は微塵もない。青森に着いたら、今度は夜行の寝台列車だ。すっかりと田舎者のように、きょろきょろと長いプラットホームを歩いて列車に乗り換えた。

東京。憧れの都会にとうとうやってきた。冬というのに寒くはなかった。みんな薄いコートと短靴だ。分厚い防寒具はここではいらぬのだ。正幸は不思議な開放感を感じていた。

それからの五年間は下町の町工場で旋盤工として働いた。そんなはみ出し者の少年たちを世話してくれる保護司の社長は、正幸を定時制高校まで入れてくれた。これからの若いものは高校ぐらい出ておかないと、と学費も援助してくれた。

正幸が卒業すると二十五になっていた。ところが不況が下町を襲い、下請工場は足切りで受注もなく取えなく倒産した。正幸は求職難の寒空に他の職人たちと共に出された。社長は泣いて見送った。ただ、もう子供ではない。男一匹、どんなことをしても喰えると甘く考えていた。

この東京に身寄りのない正幸は身元保証人がいない。いままで工場の二階に住んでいたのが、住まいもないので、住所不定となった。それではいい仕事は無理だった。どこの職場でも怪しんで履歴書を返してよこした。昔はパチンコ屋でもいいと潜り込んだが、いまはパチンコ屋も大卒を採る時代だ。すっかり企業化して、チェーンストア理論を徹底させ、システムもしっかりしたものだ。そこも採用試験で落ちた。

仕方なくピンサロの立ちんぼをすることになった。社長は暴力団の幹部で、そこに使われているのもチンピラが多い。ホステスには優しいが、男子には軍隊口調で怒鳴りちらす。客引きだからノルマもある。

「お兄さん、一時間三千円ポッキリ、前金制で安心よ」

と、派手な半被を着て新宿歌舞伎町の夜に立つ正幸の姿があった。

「あんた、住むところがないんなら、あたいんとこへおいでよ」

少し年下のホステスが同じ北海道出身ということで話が合い、それから正幸は女と同棲することになる。

東京では何でもやった。ビルの清掃、道路工事、宅配のバイト、皿洗い、どれも過酷で賃金は

安い。しかもすべてバイトだった。いつか女のアパートも出て、ひとりガード下の薄暗いひと間を借りた。喰うことと寝ること遊ぶことの他に何の目的もなかった。いつの間にか十年が経ち、正幸は三十五になっていた。気が付いたら、都会はただ慌ただしく人生を貪り、時間だけを食い尽くしていた。

—おれは、いつまでこんなことをしているんだ。

正幸は初めて立ち止まり、自問した。十六の年に家出をしてから、二十年近くになるというのに、いつも社会の底辺で蠢いている。仕事を次々に辞めるから、いつまでたっても一からだ。なにひとつとして正幸の履歴書に誇れるものはなかった。

バイトでは年下の正社員に怒鳴られる。顎でこき使われる。ぐっと我慢して下積みをしてきたが、積むものがないからいつまでも下積みだ。

賽の河原の石積みは誰のためでもない。都会の鬼が壊しにやってくるだけだった。

ある日、バイト先のラーメン店のテレビに故郷の海が放映された。オホーツク海に流氷がやってきたニュースだった。そのとき、初めて、正幸は古里の親姉弟の顔を想った。手紙も書いたことはない。電話一本しない。居所が判らないまま、生きているのか死んでいるのか。雪のない東京から見ると、なにもないひしゃげた漁村だが、ひどく新鮮なものに映った。

—帰ろう。

正幸の口から初めて「帰る」という言葉が出た。まだ帰るところがあった。

金はなかった。すべて遊ぶ金に使い果たし、いつも財布は空っぽだった。アパートの荷物といっても、ボストンバッグひとつで足りる。冷たい煎餅蒲団などおいてゆこう。家賃も溜まっていた。今月いっぱいどうせ出てゆかねばならない。

正幸は深夜の国道に立っていた。ヒッチハイクをするつもりだった。なかなか止まってはくれない。ようやく長距離トラックが止まった。

「兄さん、どこまでだい」

「北海道まで行くんだ」

「なんだと？ ばかやろう。方向が違うんだよ。こっちは東海道だ。おととい来やがれ」

正幸はどっちが北か南か方向がまるで判らない。折角、親切に停まった運転手も怒っていた。男ひとりのヒッチハイクは無理だった。それならと、線路の上を歩き始めた。列車に乗って来たから、きっと線路の上を歩いて帰れると思っていた。歩くうちに見知らぬ駅の構内に入った。疲れていた。腹も空いてきた。とにかく眠たかった。

ホームにはどこに行くか判らない列車が停まっていた。正幸は、頭が悪かった。常識的なことも判らない。行き当たりばつたりの人生を歩いてきていた。それがどこか抜けていて可笑しかった。すべての列車は古里へ通ずると思っていたようだ。確かに線路は繋がってはいるが。

無賃乗車だが、座席で昏々と眠る正幸は切符の検札を免れた。何年分もまとめて寝たような気がするほど寝た。起きてみると外は雪景色になっていた。

—ここは、どこだろう。

まだ、ぼんやりしていて夢現だったが、列車は確実に北へと向かっていることは確からしい。やがて、列車は終点の青森に到着した。実に十六年ぶりでこの駅に戻ってきていた。正幸は記憶の

札を照合していたが、ぼんやりとしか思い出せなかった。あのときは十代の若造、いまは三十半ばだ。自分自身をすっかりと浪費しての帰郷になった。

青森駅の長いプラットホームを歩いてゆくと、青函連絡船の棧橋に繋がる。正幸は遠い記憶を確かめるように、海の方へと歩いてゆく。乗客はみんな反対側へと歩いていった。ひとりとして正幸の方へと歩いてくるものがない。おかしいと思ひもした。雪が降り続いていた。線路際の積雪はホームの高さに近い。ホームの端にある階段を上がってゆく。鳩が巣を作っているようで、糞とゴミ、蜘蛛の巣で汚れるだけ汚れていた。そして、かつて連絡船の棧橋までの連絡橋はふつりと途中で切れていた。どうしたというのだろうか。外には連絡船が停泊しているのが見えるが、ホームからは行くことはできない。

正幸は雪を搔いて、柵を乗り越え、繋留されている八甲田丸へと入っていった。そこも人っこひとりいない。入場券と書かれた自動券売機や受付にも職員はいなかった。よほど客が来ないと見え、無人に近かった。正幸はまた無賃乗船のいいチャンスと思ひ、男子トイレの中に急いで入ると、そこは怪しむ者もない格好の隠れ場所となった。暖房も利いて暖かい。腹だけはやけに鳴る。ここ二日、水以外なにも口にしていなかった。

—それにしても暇な連絡船だ。乗客が誰もいないなんて。まだ出航まで早かったのかな。

トイレの中で半日は経ったか。痺れをきらして、正幸はそっとトイレを出ると、船底へと降りてゆく階段を歩いていた。何か食糧でもあれば盗んででも食べようと決めていた。と、突然、船内の電灯がすべて消されて真っ暗になった。何かアナウンスが入ったようだが、正幸には聞こえない。暗闇の中に蹲って、正幸はいつまでも出航することのない船に隠れていた。

「名前と、出身を云え。生年月日もだ」

家宅侵入で正幸は逮捕され、青森警察署で取調を受けていた。

「所持品は着換えだけのようです。持金はゼロ。東京から寝台特急のグリーン車に無賃乗車してきたそうです」

別の刑事が上司に報告していた。

「なんの目的で、八甲田丸に忍び込んだ？」

「おれは、おれは、帰りたいんだよ。ただ、帰りたいだけなんだよう」

刑事たちは大笑いした。

「きさま、あの船は観光客用に展示館として、繋留しているのを知らなかったのか。あれは動かないんだ」

正幸は何がなんだか判らない。頭が混乱してきていた。おろおろして、涙まで溜めていた。

「お、おれは、村へ帰りたいんだよう。おれの生まれた村だよ」

頭がおかしいかのように、頷きあって、刑事たちはまた大声で笑った。

じがする。佐喜子は真夜中に目が覚めて、耳栓を取った。すると、隣の部屋から猛獣の雄叫びのような凄まじい鼾が聞こえてきた。初めて夫の禎一の鼾を聞いた人は、決まって飛び起きると地震と思い逃げ出すのだった。なにか、とてつもない巨大な化け物が寝ているようにも思える。とてもこの世のものと思えない酷い鼾だった。

佐喜子はこうして、家庭内別居して久しい。隣の部屋に寝ていても、耳栓をしなくてはいけない。それでも家の振動で目が覚める。どんな寝付きのいい人でも禎一の傍では寝られない。夜中に鼾で起こされるともうそれで朝までだ。

結婚して十年。最初はそうでもなかったが、だんだんと酷くなってきた。それは、結婚当初はスマートだった夫も、幸せ太りで、毎年確実に体重を増やし続けていった。いまは見る影もなく、別人だ。佐喜子は詐欺に引っかかったようなものだった。あれほど素敵な夫も、醜くぶくぶくと太り、安眠妨害までするとは。鼾は立派な離婚の成因になる。

「どうして、あなたはそうなのよ。わざとやっているんじゃないの。わたしを寝せないために」と、佐喜子は毎日夫を叱るが、当の本人は全く覚えていない。自分の鼾で目が覚める人もいるが、大概は自分が鼾をかいているかも判らない。

「太っているから鼾をかくのよ。少しは痩せようと努力しなさい」
禎一はデスクワークの多い仕事だから、尚更体を動かさない。ストレスも溜まるから、よく喰って呑む。精神性過食症気味だ。いまや、首がどこか判らない。肩に頭がめりこんでいるように、超肥満になった。

最初は、夫婦で鼾対策のために、あれやこれやと市販の器具などを使ってみた。鼻穴に装着するクリップだとか、鼻孔を広げるテープだとか、腕に取付け、鼾で電流を流して本人に条件反射をつける機械だとか、可能な限りのすべての鼾防止グッズを試してみたが、すべて効果なし。

「お願いだから、あなた、病院に行ってきて」
と、佐喜子は寝不足で、目の回りを黒くして必死に頼んだ。禎一はしぶしぶ耳鼻咽喉科に行ってみたが、これといって特効薬はない。口に含む矯正器具もあったが、まだ実験段階だという。やはり痩せることが一番いいということになった。

禎一はカロリー計算しながら、低カロリー食品を買ってきて、まるで糖尿病患者のように、一日いくらかと常人の半分以下の食事をするようになった。そして、運動不足のため、毎朝、近くの公園までジョギングをすることとなった。家の中では、室内で簡単にトレーニングができるマシンを購入して、足腰を揺らしたり、腹筋を鍛えたりと、涙ぐましい努力を続けた。効果はめきめきと現れて百キロを切った。それでも鼾のほうはなかなか直らない。

このままでは、家庭が破壊されるばかりか、夫婦の仲も危うい。新居の建物も建て付けが狂うかもしれない。たった鼾ひとつで、すべてが崩壊へと向かっているようだった。

子供が二人いたが、上の小学生の娘は苛々が募り、癩癩持ちになり、精神的にどこか不安定な子に育っていた。下の幼稚園の息子も眠れない日が続いて、幼稚園でもうつらうつらとうたた寝していると先生に云われていた。まさか、原因が夫の鼾とは恥ずかしくてとても云えない。

禎一の鼾の凄まじさは、会社の中でも評判だった。社員旅行でも、禎一だけは特別にひとり部屋だ。知らないで最初のうちは同室にして犠牲者が多数出た。鼾をかく人だけで、同じ部屋割りにしたが、社内でも一、二を誇る鼾の猛者も、禎一には負けて、枕を抱えて逃げ出したものだ

った。そんな伝説まで生まれた。

禎一が足を骨折して入院したときも、六人部屋だったが、患者たちから苦情が殺到して、ついに隔離病棟に移されたという話もあるくらいだ。

夫婦なら普通、毎日の鼾に慣れてもいいはずなのだが、神経質な性格の佐喜子は逆に神経症が出てきて、ノイローゼから情緒不安定、心身症の症状を示すようになってきた。禎一は自分は何も悪いことをしていないからケロリとしている。そして、よく寝たと毎日が爽快だった。それが家族には気に入らない。頭にくる。夫の部屋を完全防音するために、工務店の人を呼んだ。ピアノの練習や、リスニングルームにするためや、病人の部屋のためにとよく防音を頼まれるそう。夫の寝室の壁面に特殊なパネルを張り込んだ。ドアも密閉されるようなものに取り替え、二重にした。そこまで家の改装をしなくてはならないなど、情けない。禎一は悪びれた様子もなく、

「だったら、飛行場の傍に住んでいる人や、線路の傍に住んでいる人はどうするんだい」と、自分の鼾のすごさを知らないからそんなことを引き合いに出したりして弁明している。佐喜子はかっとなった。

「何よ、その云い方、飛行機や電車が一秒おきに出るかしら。あなたのは間断なくずっと何時間も続くの！」

悪意でやっていない加害者と、長期間に渡って苦しめられる被害者が家族であるという悲劇。防音壁は完成して、禎一の鼾は聞こえないが、振動は低周波のように伝わってくる。それが人間を狂わせる。

禎一の田舎の母親が上京してくるようになった。たまに孫の顔を見にくるのだ。

その朝も連絡はしていたが、夜行の列車で着いて、姑はまっすぐに家にやってきた。佐喜子はぐっすりと寝ていた。こんなに熟睡したのは何年ぶりだろうか。夜中に起こされることもない。あまり心地よいので、姑がやってくるのも知らなかった。玄関のチャイムで起こされた。土曜日で子供たちは休み。禎一は会社だが、まだ起きてこなかった。

「あら、義母さん、ごめんなさいね、お迎えにもあがらないで」

「いいんですよ。それより、あなた、禎一の鼾には手こずっているんでしょう」

佐喜子ははたと気がついた。

「そうだ、お父さん、起きてこないわ。会社があるのに」

「珍しいよね、しかも鼾が聞こえない」姑も首を傾げる。

佐喜子は大変なことを思い出した。

「そうだわ、忘れていた。ゆうべ、お父さんの鼻を洗濯鉈でつまんで、口をガムテープで塞いだまま、すっかり忘れていたわ」

第349話 真夜中のデパート

街の中心商店街が没落しているのは、どこの街でも同じだった。郊外型の店舗が急増し、団地

と道路が整備されると、街は郊外へと発展する。そこへ大型ショッピングセンターが進出する。車社会で、車の停めにくい狭い街中を嫌って、無料駐車場のある郊外へと消費者は買い物に出る。街中を歩いているのは、車のない年寄りと子供だけだった。

工藤さんも街中のデパートなどもう何年も行っていない。

「たまにデパートへでも行ってみるかい。これからどうだい」

新聞を見ながら、奥さんにそう話していた。

「これからって、もう十二時、寝る時間ですよ」

「いいじゃないか、明日は日曜だし、新聞には真夜中二時からのタイムサービスもやっている。オープンレンジが半額だ。うちのは壊れて買いたいと云っていたじゃないか」

いまや、デパートも二十四時間営業だ。工藤さん夫婦は、真夜中のデパートというところに入ったことがない。興味もあって、出かけてみることにした。

商店街は全滅で、軒並み売店舗の看板、それも取れ、建物が老朽化して崩壊しているところもあった。その中央に、王家の墓のように巨大な建造物が不気味に建っていた。ネオンサインも消え、外回りは真っ暗だ。正面玄関にかろうじて照明が点っている。

「あなた、やっているのかしら。暗くて、あまりお客さんもいないようだし、薄気味悪いわ、帰りましょうよ」奥さんが工藤さんの袖を引く。

「いいじゃないか、ここまで来て、入ってみようよ」

館内も天井の照明は消され、ショーケースや商品にだけスポットが当てられている。節電のために蛍光灯が消され、それで暗いのだ。デパートは長年の赤字で有利子負債が年間売上高を越えた。借金棒引きのために、経営改善を銀行から迫られて、思い切った営業形態への転向を果たした。それがこの二十四時間営業、省エネ、省力化のデパートだった。

若者たちがぱらぱらといるだけで、販売員の姿が見えない。エントランスホールにインフォメーションがある。そこには大きなモニターに美人の案内嬢が映し出されていた。

「いらっしゃいませ。お求めの品がございましたら、こちらのマイクに向かってお話しください」

「オープンレンジが欲しいんだが」

工藤さんがマイクに向かって云うと、コンピュータが音声認識して、それに対する回答を検索する。

「オープンレンジは四階の家電売場の通路側でございます。二時からタイムサービスで半額の超特価となっております。ありがとうございます」

エスカレーターで四階まで行く。どのフロアも販売員がいない。

「なんだ、無人店舗なのか。これじゃ、万引きし放題じゃないか」

すると、ピピピピヒと、警報が鳴った。

「アナタハ万引ヲシマシタ。イマ、紙袋ニ入レタモノヲ、元ノ棚ニ返シテクダサイ」

スピーカーから機械の音声がする。そして、ひとりの若者を追うようにライトが追いかける。

「ちえっ」と、若者は盗もうとしたMDプレーヤーを棚に返した。販売員がいない分、四方八方に監視カメラがあり、挙動不審な者をコンピュータが行動パターン別に類型認識、万引きの若者をマークした。証拠のビデオ画像もあるから、このデパートでは絶対に万引きはできないようになっている。

通路をお掃除ロボットが巡回している。一台で、掃いて、拭いて、ワックス掛けまでするというすぐれもの。しかも、全自動だ。掃除のルートを記憶させてあるから、上から下まで勝手に掃除してくれる。

買いたいものの説明を聞きたければ、やはりショーケースの上にあるモニターに映し出された販売員に向かって、訊けばよい。ありとあらゆる答えが用意されており、何も知らない新米店員よりずっとプロだ。

「どれ、夜食でも食べるとするか。レストランはどうなっているのかな」

夫婦で、やはり薄暗いレストランに入った。ここは、暗いほうがムードがある。すべてカフェテリア形式になっていて、自分のお好みのメニューを棚から選んで、レジでお勘定を済ませる。それも一通になっていて、すべてがセルフだ。ここもウエイトレスなど人間がひとりもないのだ。料理もセントラルキッチンで皿に載せられたまま、冷凍されて各店に納品されているらしい。

工藤さん夫婦は、リゾットを食べながら、何か落ち着かない様子。

「何か変だよな。人間の声がしない。デパートというのは対面販売で、人間対人間の触れあう場だったろう。それが、いくら景気が悪いからといって、全自動にすることはない。洗濯機じゃないんだから」

「そうね、何か機械的だわね。そうだよ、何かが足りないと思ったら、このデパートには血が流れていないのよ」

すると、レストランの壁やガラス窓に突然、赤い液体が流れ落ちてきた。

「な、何よ、これは、なんなのよ」

夫婦で椅子から立ち上がった。明らかにそれは血だった。みるみるうちに床にも拡がっていった。他の客もキャーキャーと騒いでいる。店内の放送が入った。

「当デパートニオ越シクダサイマシテ、アリガトウゴザイマシタ。オ客様ノゴ要望ニハスベテオ応エスルノガモットーデアリマス……」

第350話 命という玩具

ごっそ、がさがさと、この家では夜中になると騒ぎ出す目があちこちにあった。夜行性の動物たちだった。まるで、動物園のように廊下から子供部屋まで、小さな飼育檻やハウスが並んで、少し獣臭い匂いが漂っていた。

亮は中学二年生。暗い性格に育った。一時、不登校になり、虐めにも遭い、学校に相談に親が呼ばれることは頻繁だった。亮の小さいときに両親が二人で借金返済のために出稼ぎに行って、その間、親戚の家に幼児は預けられた。親を一番欲していたときに親がいない。ひとりぽつんと遊んでいる亮は、やがて、昆虫を捕まえては殺して遊ぶ残虐な子供に育っていた。

一人息子ということもあり、欲しいものは何でも買って与えていたし、何でも自由に我が儘に育ててきた。両親は共稼ぎで、帰ってくるのが遅いから、その淋しさの穴埋めを金で与えていた。晩ご飯も家族で一緒に食べることは滅多にない。いつも出来合のおかずが冷蔵庫に入っている

のを、電子レンジで温めてひとりで食べるのが常だった。

その亮が、ある日、ハムスターを買ってきた。インコも買ってきた。モルモットにシマリスなど小動物を次々に買ってきた。二階に両親はあまり上がらないが、二階の子供部屋から廊下に何者かがいる気配がしていた。亮が内向的で、あまり口を利かないので、最近は何を考えているのか判らない。親子の間は完全に隔絶していた。母親があまり騒々しいので、夜中にそっと二階に上がって、動物を飼っていたのが判明したほど、子供の生活に対しても無関心だった。

「あんた、亮がいろいろと動物を飼育しているんだよ」

母親がつれあいに話した。

「いいじゃねえか、好きにさせとけば、気難しいやつだから、放っておこうじゃねえか」

小さいときから亮は両親に甘えたことはない。親子の会話もなく、無口な同居人は冷血に育てていた。

亮は部活もしていないから真っ直ぐに家に帰ってくる帰宅部だった。友達もいないし、習いものや塾にも行っていない。動物たちがいつか亮の友達だった。部屋の中では動物たちにきつい口調で命令している王様の亮がいた。独り言が多いと思ったら、ぶつくさと不気味な亮の話し声をしているのを両親は何度か聞いた。

「喰え、喰わないと絶食だ。また、紐で縛るぞ」「おまえはいいやつだぞ。よしよし、今日は学校に連れてやってやるから大人しくしろよ」

たまに鞆に入れて、ハムスターを持ってゆく。話し相手がいないからだ。インコをポケットに入れて持って歩いたり、ハムスターを筆箱に入れていたりしていた。すっかりと玩具にしていた。小さい箱にぎゅうぎゅうに押し込んだり、爪切りで耳を切り取ったり、可愛がっているより虐待しているのだった。本人は虐めているという感覚はない。普通に遊んでいるのだ。

母親が夜遅く、パートから戻ってくると、台所の残飯入に鼠が死んでいるのを発見して悲鳴を上げた。よく見ると、それはハムスターの死骸だった。首をロープで縛って首吊りさせたようだ。母親は激昂して亮を呼んだ。

「あんた、何考えているの。動物は玩具じゃないんだよ。どうして、こんな残酷なことして殺すんだよ」

亮は、もぞもぞとポケットからあるものを取りだして母親の前に差し出した。母親は、叫びを上げて退いた。亮の掌には首が潰されたインコが横たわっていた。

亮は、幼い子供のように手加減を知らない。小動物をまともに相手にして、ぐっしやりと潰してしまう。それは、動かなくなるとただの壊れたプラモデルと同じに屑籠へ捨てられた。憎くて殺すのではなく、愛撫しすぎて殺す場合が多かった。ときには可愛すぎて、口に入れたまま引き裂いた。愛するものを食べるというカニバリズムにも似た原始的行為を平然と行う。

母親は我が子ながら、気持ち悪くなって、父親に相談した。

「ねえ、あんた、わたしは具合が悪くなるよ。亮のことだけど、あいつ、異常だよ。将来、何をしでかすか判ったものじゃない。いまのところは大きな問題は起こしていないけどさ。そのうち、あの子は何かやらかすよ。そんな気がしてさ」

「中学を出たら、働きに出すか。いまでも学校は休んだりしてんだろ。そんな問題を起こす前に

、家を出すのよ」

夫婦も子供に対する愛情は微塵もなかった。

亮は、動物が死ぬと、またペットショップへ寄って、うさぎやプレーリードッグを買ってきた。そして、その度にまた飼育箱を買ってくる。死んだ動物の檻は忌まわしいものとして、いつも不燃ゴミの日に出していた。は虫類にも興味を持ち、蛇なども買ってきて、生きた虫を捕まえてきては喰わせていた。

中学三年になっても、高校受験の希望もなく、勉強もしていない。ふつうは、ケイタイを欲しがり、パソコンに熱中し、テレビゲームも友達を集めてやる年代だが、亮は友達がいないので、全くそんなものには興味を示さなかった。

亮は、鉄パイプを組み合わせて作る、犬用の檻のようなものをこしらえていた。鎖に首輪、いろんなものを用意していた。今度は何を飼うつもりなのか。

四、五日すると、亮の部屋で夜中、ばたばたと何かが暴れる音がした。

「亮、うるさいよ、何をやってんだい」

母親が二階に向かって注意すると、

「なんでもない」と、亮の押し殺した声がした。動物も夜行性が多いが、亮も真夜中になれば起き出して、何かしているようだった。朝、起きると台所が散らかっている。何か、インスタントラーメンを作ったような跡がある。そして、御飯がいつもは余るのに、最近では電気釜が空になる。

「おかしいね、亮のやつ、友達でも泊まらせているのかね。あいつにそんなやつ、いたかね」母親は首を傾げていた。缶詰や、ジュースなどもちよくちよくなっている。普段はあまり食べない亮が、倍は食べている勘定になる。

そして、夜通し、低く遠く、どこかで唸り声が断続的に聞こえていた。犬の遠吠えにしては、おかしい声だった。さかりのついた猫の声とも違う。あまり、何日も続くので、ついに母親は頭にきて、夜中に二階に上がっていった。

「亮、おまえ、今度は何を飼ったんだい」

いきなり不意をつく形で部屋のドアを開けたものだから、亮は身構えていた。何かを隠すように母親を睨んでいた。

「助けて……お願い……」小さな女の子の声が押し入れの中から漏れるように聞こえてきていた。子犬が夜中に長くいつまでも鳴いているように聞こえた、あの声だった。

第351話 現代猿蟹合戦

一月の選挙は、運動員たちが、雪の降り積もる田舎を車で走った。

反核の立場で知事選に立候補した平田さんを応援しているのは、文学仲間の前川後援会会長と鹿野県議、そして金浜弁護士だった。今回は現職の森村との一騎打ちで、保守王国の北国に革新の風穴を開けることは難しい状況ではあったが、どれだけ反知事の得票を突きつけられるかが目下の狙いでもあった。みんな、勝てるとは思っていなかったが、戦いが肉薄でもして、県政に対

する批判が多いことを認識して貰えれば、次の戦いにはかなり有利に引っ張ることができる。そういった計算もあった。

北国は資源も資産も乏しい全国最下位の県で、財政難に陥っていた。県の年間予算より多い借金がある。それは明らかに政策ミスの結果だった。森村知事は大言壮語を憚ることなく、恥ずかしいくらい田舎者にありがちなホラ吹きだった。田舎の人は「モツケ」と呼ばれる乗せれば乗る常軌を逸した性格の人がいる。なんでもお祭り大好きで、大きいことが大好きだ。そして、金といってもわれわれの税金なのだが、それを拡大再生産という古い体質の経済の悪循環に投資して、より多くの赤字を雪だるま式に増やしてゆく政策を採り続けていた。土建屋やゼネコンに予算をバラ撒き、それで景気が回復すると信じている前近代的な政治能力よりない。その取り巻きもそうなら、すべてが政治と金権、利害関係で結ばれている日本的構図にズバリと浸かっていた。

やたら、器を建設する。道路を造る。アジア大会だ、北国祭りだと、あちこちでイベントを開催して、一時的な集客にやっきとなった。それは目立つ政策で、点数採りにはなるが、結果はどうか。後に残るのはまた膨大な借金だ。森村知事は海峡大橋を造る構想をぶちまけていた。海底トンネルも県民の悲願で完成したときは喜び、活用もしないうちに、今度は橋だ。子供が玩具に厭きて投げ出すのと似ている。その構想の陰にはまたおいしい餌をちらつかせて、知事としての座を守るための票集めと癒着のカラクリが隠されている。

いわば、森村の政策は今日、腹が減っているから、明日に必要な柿の種とおにぎりを交換するのと似ている。不景気だから、空腹の企業にとりあえずおにぎりを配給する。県民にもおいしいおにぎりを配る。

一方、平田陣営では、そんなおにぎりはいらぬ。米百俵という比喩は使いたくないが、われわれの子孫に自然と安全という財産を残す義務がわれわれにはあると、そのための柿の種を植えることが、いまの政策でなければならぬと、大計を見据えながらの真の県民の生活を考えている。ただ、多くの県民は、いまの空腹を満たすことばかり考えて、おいしい餌に飛び付くのだ。だが、それがどれだけ虚しい結果になったか、だんだんと騙されていたことに気が付き始めてはいる。

平田陣営の参謀をしている鹿野県議は、一貫して反核の立場を採ってきた。核の処理施設から他県のゴミの処分場まで、いまや、わが県は貧しさゆえに県民をゴミ溜めに住まそうとしていた。松本清張が「風の視線」の小説の中で、資産ゼロの地方として、この県を舞台に書いていた。中央から見ると、わが県は広大なゴミ捨て場にしか見えない。そのうち、全世界から核の廃棄物が集まってくる。最終処分場になることで、国から予算を貰い、危険の上に立っての繁栄を将来に渡って県民に強いるつもりなのだ。

鹿野県議は、平田候補に随行して、選挙カーから得意の街頭演説で応援していた。りんご園が雪野原になっている。いまは、出稼ぎの先も少ない。農家の人たちは、ただ、減反と農産物の価格下落にじっと耐えているのだった。かつては、農家は保守側だったが、農業切り捨て政策から、反体制に回りつつあった。

選挙カーは町の中も走った。人が歩いていない死んだ町が多かった。商店街も閉めているところが多い。街角で挨拶していると、店主たちが浮かない顔で見て云った。

「誰がやっても同じでないの」

すでに諦めが先行して、政治に対する不信感から諦観に変わりつつあった。

「どうして、みんな怒らないんだ。どうして、諦めてそっぽを向いてしまうんだ」

鹿野県議は震えていた。これではいつまでもいい地域社会が来るわけがない。若い人の無関心ぶりはそれ以前の問題で、第一、選挙すら棄権する。選挙を棄権する者には社会や政治に対する不満を云う権利はない。

いよいよ、明日が投票だ。すべての選挙活動は終わり、選挙事務所に続々と関係者が集まってきた。

「やるだけのことはやった。みなさん、よくぞここまで一緒にやってきてありがとう」

平野候補は、戦い終わり日が暮れて、みんなの働きだけで満足だった。難しい戦いだったが、どれだけ県民が良識を持って現状に対して決をとるか。

「春になれば、福祉切り捨て、増税ラッシュと、いままでの失策のツケが弱いところに押しつけられる。江戸時代なら、一揆、強訴だ。それが最近はみんな大人しすぎる。いいようにされてむしり取られてか」前川会長は怒りを感じていた。その怒りをぶつけるのは選挙よりないのだ。

「戦後、高度成長という夢を長く見すぎた、夢から醒めない人が多いのだね。あの夢よもう一度と、くじを買い続ける庶民こそ犠牲者だというのに」

金浜弁護士も疲れから椅子に座りこんでコップ酒を飲み干した。

「どれ、明日は晴れかな？」と、前川会長が選挙事務所のテレビを付けた。すると、地元のニュースをやっていた。

一本日、夕方、贈収賄の容疑で、県警は〇〇建設を家宅捜査いたしました。これは地元紙の調べでようやく重い腰を上げたもので、重要な証拠書類を多数押収しました。その中には、明日の投票で立候補している現職知事の名前も出ているということです。

風向きは完全に変わっていた。

第352話 人間の総意

世界は人間の意志の総意で作られる。

戦争の機運が高まっていた。元々、戦争は宗教や民族にしても根底にはきっと貧困と欲望が渦巻いていた。戦争を好機として操っている陰の連中こそが憎むべき存在だった。

天候異変が世界的に起こり、凶作が地球規模で広がった。ヨーロッパでは度重なる大洪水で、いくつかの観光都市が完全に水没していた。大河の氾濫は、もともと海面より低いところが多かった平野を呑み込んでいった。逆に、アメリカ大陸では水不足が続き、小麦に大打撃を与えていた。世界の農業倉庫を誇るアメリカも食糧の輸入に頼らねばならなくなった。

加えて、突然の油田の枯渇が相次いだ。地形の変動、火山活動も頻繁になり、大地震も各地で

起こることと関係がありそうだった。当然、原油価格は上がる。生産量が極端に減ったから、石油の絶対量が不足した。各国で、石油の高騰による、インフレが経済を襲った。ただでも、高額
の税金と、所得の減少に喘いでいる国民は、値上げラッシュに生活を根底から脅かされること
となった。

あちこちで、戦争の緊張感が高まり、火種がくすぶり続けていた。小競り合いなどの紛争は日
常的に起こっていて、国境はいつも国軍の戦闘態勢で一触即発の状態にあった。

日本も失業率が二十パーセントを越えると、誰かの話ではなくなった。家族の誰かが失業して
いた。身近な問題となっていた。倒産件数も増加の一途で、株価の下落は歯止めがきかない。経
済は政府の無策のためがたがたになっていた。喰えないから、追い込まれて犯罪が急激に増えた
。世の中、夜中はひとりでは歩けなくなっていた。強盗殺人は集団で襲ってくるから、住民たち
の自衛組織までできていた。みんなが武装するようになって、死人が山となった。

二千余年、ここにきて、国家は破綻状態、戦争は第三次大戦のように各地で勃発していた。毒
ガス、細菌戦争、核まで使用するなんでもありの卑劣な戦になっていた。

北村一家もその恐慌のまっただ中に浮遊していた。年寄りたちは年金を二割支給と、生活がで
きないほどまで減額されていたし、公務員をしていた北村慎一は、第三セクターに回されて、そ
の赤字企業に移籍したまま、共に清算された。やり方が汚かった。いまや、天下りではなかった
。公社というお取り潰しの厄介者に、余計者を縛り付けて、心中させるというものだった。公務
員は不況に強いという神話は崩れていた。いつのまにか失業者となっていたのだ。妻の真希子も
また、長年勤めていた銀行が破綻した。まさか、銀行が潰れる時代が来るとは思いもしなかった
。夫は上級公務員、妻は銀行員と、安定した将来が約束されていたと思っていたのに、とんでも
ないことになった。二人とも、次の仕事を探したが、掃除婦か、スーパーのレジ打ちのアルバイ
トしかない。それも時給が安く、最低賃金だ。いままで、要職に就いていた二人が、いまさらア
ルバイトもできない。かといって、五十過ぎて、求人があるわけがない。

息子たちも大変だった。二人の息子も大学まで出たはいいが、就職試験は狭き門で、悉く落ち
ていた。就職浪人を決め込んで、ぶらぶらしていた。一家は、いままでの貯金も使い果たし、保
険も解約した。年寄りたちの少ない年金に縋って生きてゆくには、あまりにも足りない。家のロ
ーンも払えなくなっていた。そればかりか、電話代、電気代、国保なども滞納するようになり、
そんな状況で、つい町の金融に手を出した。苦し紛れに掴んだものが、命取りになる。車も売
った。着物から貴金属など二束三文だが、売れるものはみんな売った。

北村家だけではなかった。町内を見渡すと、軒並みそうだった。近所で一家心中した家があっ
たり、火災保険目当てか、火事で丸焼けになったり、不自然な事故死も相次いだ。みんなの噂で
は生命保険が目当てだったとか。世の中はだんだんと悲惨になってきた。どんな凄絶な事件でも
新聞にも載らなくなっていた。殺人事件など、三面の片隅にも載らない。東京だけでも一日に百
人以上が殺されるから、記事にならないのだ。

ノイローゼから発狂する者、鬱病で自殺する者など収集がつかないほどいくらでもあった。病
院も満員なら、その病院も経営難で倒産した。治療費を払えない患者が後を絶たない。国民の大
半がなんらかのストレスによる精神的苦痛から病気を持つことになった。

そんな状況でも政治家たちはやりたい放題で、甘い汁を吸い続け、政府は容赦なく税金を取り

立てた。食うや食わずの生活からついに日本でも餓死する者が増えた。福祉国家も地に落ちていた。

北村慎一は、毎日、することもなく公園を歩きながら、世界を呪っていた。

「こんな、地球なんかいない。みんな壊れてしまえばいいんだ」

妻の真希子も、食事の材料も買えずに、付近の野草を摘んできては鍋にしていた。

「どうして、こんなひもじい思いをしなけりゃならないの？ こんな世界なんか壊れてしまえばいいのよ」

ばあさんも、仏壇に手を合わせて、現世を呪っていた。

「ご先祖様に申し訳がない。こんなバカげた世の中にしてしまいおって、世の中ぶっ壊れたらいいんじゃない」

息子たちも、遊ぶ金もなく、居場所もない。ケイタイもパソコンも止めざるをえないし、金のかかるもの一切ができない。友達の多くは、金欲しさに犯罪を犯して、逃亡したり、収監されたりしていた。そこまでは落ちぶれたくない。

「くそっ、なんか面白いことがないかな。思い切って、こんな国なんか裂けてしまえばいいんだ」

どこでも、みんなが多少なりとも、同じことを考えていた。すると、ビシッ、ピシッと、いままで聞いたこともない音が響いた。と、思うと、地球はゆで卵にひびが入るように、一面にひびがはいり出した。衛星から見た地表はまさに細かいガラスのひびのようだが、地上では巨大なクレバスが走るように、縦横に大地が割れていった。ビルも車も地割れの中に落ちてゆく。地割れからの凄惨な勢いで黒い水が吹き出した。そして、続いてマグマも溶岩もろとも天高く噴射した。

地球は人間たちの念力で粉々に割れて、宇宙の塵になってしまった。

第353話 テレビ様が来た日

我が家にテレビ様がやってきたのは、確か昭和三十一年の春だった。わたしが五歳の年の頃、明治二年生まれの白髭の曾祖父に、父がテレビなるものを見せてあげたいと、当時十万もするテレビ様を思いきって買ったのだった。その頃の田舎の会社の初任給が四千円とか五千円とかだから、月給の二十倍もするものを買ったのだった。

テレビ様は足が四本もあった。顔がやたら大きく、口が二つもあり、いろんなボタンが付いていて、何か、ラジオとは違うようだった。初めからでかい顔をして、堂々と我が家に入ってきたのだ。それからは、ラジオは哀れ、スイッチを入れることはなくなった。タンスの上で、いつも鳴っていたAMの真空管ラジオは、可哀想に、それからはのど自慢の鐘の音も、夕方のドラマも聞かせることはなくなった。いままでの主役は交代したのだ。テレビ様は我が家の中心に位置した。一番の上座に、ふかふかの座布団を与えられ、でんと大威張りで座っていた。家の人のす

べての注目の的だった。

曾祖父は、テレビ様を注文してからまもなく春を待たずに亡くなったから、ついにテレビなるものを目にする事なくこの世を去った。

わたしは、そのテレビ様がおいでになる一年前に、実はテレビを見てきたのだった。幼稚園の頃だった。夏休みに祖父に連れられて、東京、関西と一ヶ月の旅行へ行った折、渋谷のNHKを見学したのをいまもはっきりと覚えている。スタジオでわたしもカメラで映され、その映像を後でテレビなるもので見たときの驚き、魂が盗まれたほどのショックだった。どうして、つい先刻の自分が画面の中にいるのか判らなかった。それはやがて日本人全体に催眠をかける魔法の箱になった。

まだ、青森にはテレビ局が開設されていなかったのだから、テレビを持っている家は、屋根の上に相当高いアンテナを延ばして立てて、函館山からの中継を引いた。当時は民放もまだ普及せず、NHKオンリーだった。

近所でもテレビを入れたのは早かったようで、珍しがられた。夕方に外国のアニメで「ベティちゃん」をやっていた。みんな子供たちが我が家のテレビの間に集まってきて、お行儀よく座って毎日見ていた。親たちも来ていたから、六畳の間に二十人くらいがひしめきあっていた。勿論、白黒テレビで、日中はテストパターンで休憩が入る。夕方から放送が再開される。

祖母はオペラが好きで、本場イタリアのプッチーニなどを見ていた。わたしが丁度寝る時間で、八時頃だったと思う。テレビの間というが、部屋は三つしかないから、わたしたち一家は六畳の間にテレビに押されながら、狭い思いをしながら、六人が寝ていた。その寝しなの夢現のときにソプラノの鶏を絞めたような歌とも悲鳴ともつかない声がするので、わたしはすっかり怯えて、夜驚症になってしまった。目が覚めると、テレビの中で、相撲取りのような巨体の女が、不格好な着物を着て、蝶々夫人になっているのは、ホラー映画と同じほどの恐怖だったに違いない。いまでも、オペラや歌曲は大嫌いだった。

そのうち、近所でもぼちぼちとテレビ様を買う家が出始めた。自家用車もあちこちで買い始めていた。経済は上昇気流に乗り、毎年、二桁成長。所得倍増。次第に馬車の姿も消えてゆく。

主婦たちは、家事もそっこのけでテレビドラマを見ていたし、子供たちは勉強や宿題も忘れてテレビに釘付けになっていた。商店でも食堂でも床屋でも、街角でもテレビの前に多勢の人だかりができていた。大宅壮一はその新しい社会現象を称して「一億総白痴」と名言を残した。テレビはひとつの文化でもあるが、功罪相半ばし、後生に取り返しのつかない痴人たちを生み出すことになった。

町に紙芝居のおじさんが太鼓を叩いて、町内を回り子供たちを集めにかかる。ドンガ、ドンガラガッタ、ドンガラガッタ、ドンドン。五円あれば、水飴を割り箸に付けて、紙芝居を見ることができた。おじさんは、役者でもあり、弁士でもあり、講談調のしわがれ声でチャンバラものを太鼓の調子を加えて語るのだった。子供ながらにどきどきして見ていたり、ときには感動もした。それほどうまかった。

あるときから、夕方、いつもの太鼓の音がしたが、子供たちはテレビのマンガ映画の前から離れない。それで、紙芝居の自転車の前には子供たちがひとりも来なかった。わたしは、寂しそう

に帰ってゆくおじさんの引く自転車を見送っていたのを覚えている。それっきり、この町には紙芝居のおじさんは来ることはなかった。

第354話 リカバリー

「何がなんでも道路は造るんだ。ここでやめてどうするんだ、君。赤字でもどうでも、道路というのは目的地まで延ばさねば意味がないんだ」

政治家は、頑固で融通が利かないほど、道路に拘泥していた。その裏に何があるのかと勘ぐりたくなるほど、道路に固執する。世の中がマイナス成長に変わったのに、政治家の頭の中は金権で埋まっていた。誰がなんと進言しようが云うことを聞かない。昔からそうだからと疑いもない。

。いろいろな悪知恵が脳裏のあちこちへこびりついて離れないでいた。秘書も後援会も困っていた。

「先生、今度の選挙でも、もうそのことは云わないでください。いまや逆風で、人々は道路なんか求めています。その予算があったら税金を安くしてくれとみんな云っている時代ですから」と、選挙の争点を変えてくれるように頼んだが、がちがちの固定観念はフリーズしたように動かない。

「先生、先生」と、何を云っても押し黙ったまま、口をへの字に曲げていた。

「これは、そろそろリカバリーしなけりゃならんな」

後援会会長が、病院に先生を連れてゆくことを秘書に相談していた。

デパートの社長が店内を回る。いまだに現場を部門長でもないのに、見回りをして、いちいち細かいところまで店員に指示している。たたき上げの社長だから、現場第一主義。部下を通り越しての業務命令は、命令系統を壊す。店員は戸惑っていた。社長自ら、「ここはこうしたほうがいい」と、勝手に専務とショーケースまで動かして、レイアウトを変えていた。部門長は苦笑していた。

「なんだ、この商品の陳列在庫は、ちょぼちょぼではないか。売る気があるのか。もっとどっと山積みにしろ」と、叱咤する。

「でも、お言葉ですが、社長、これがわが店の定量在庫で、昔の売れた時代のように特価台に山積みでも、売れる時代ではないんですが……」

社長は額の端に交差点マークが出来ていた。

「なんだとお、おまえらが売れなくしたんだ。モノがないから売れないんだ」

モノがないから売れない。売れないからモノが少なくなる。卵が先か鶏が先かの問題だが、やはりモノ余りの時代なのだ。社長の頭の中はまだ高度成長時代のままで止まっていた。

専務も困り果てていた。社長業も六十歳定年制を設けたいところだ。老害という言葉があるが、それは一般家庭ならまだしも、大会社ともなると、影響力が大きい。なんとしてもそろそろ引退して貰わねばならないのに、多少のボケと頑固はなんのそのとトップに留まり動かない。

「そろそろ、リカバリーしましょうか」

「なんだ、そのリカバリーとは？」専務が店長に訊いた。

「ええ、そんな病院ができたんです。社長を人間ドックに入れると嘘をついて、連れてゆきましようよ」

市役所の課長が、厳めしい顔をして、机の上で文書に目を通して、課内の部下の仕事ぶりをたまに見渡していた。来客と電話、そして、会議などを除けば一日、机の上でハンコを押し続ける。パソコンなどITはまるで駄目だから、若い人の話にはついてゆけなくなっていた。定年まではまだ四年もある。いままで見通しのよかった業務も課長にはブラックボックス化していた。何かなんだか判らなくなってきた。すべて、コンピュータから資料が出てくるが、かつて自分がやってきた業務ががらりと変わっていた。判っている振りをするのも辛いものがあった。だから、尚更の如く苦虫を潰したような顔で周囲を威嚇していなければならなかった。

「課長、リニューアルのプロジェクトのプレゼンですが、シンボリックなイメージをアイデンティティに則ってガイドンスを作るのに、他課とコラボレートしたいんですが」

と、やたら横文字が会話に出てくる。課長は、ただ、ふむふむと判ったような判らないような。

「いい、それは君に一任する。報告だけは随時出すように」と、課長は汗を拭いた。

最近、課長は孤独だった。部下と気持ちが通じ合わない。家に帰っても、息子たちと話が合わない。何を考えているのか、何を喋っているのか判らない。次第に取り残されたような感じがしてきた。昔のような馬力が出ないし、積極的に決断することもしなくなった。大過なく定年まで過ごせればいいと、あまり波風を立てることを嫌った。

「いいだろう、そこまでしなくとも」とか、「それは保留にしておこう。検討の余地ありだ」と、すべてを実行に移さない。課内ではいろんなことが停滞して、支障をきたすことになった。

「最近の課長は、なんでも反対だ。これじゃ、なんにも前に進まない。一体、どうなってしまったんだ」

「ついてゆけなくなったんじゃないのか、ブロードバンド時代に。そろそろ、リカバリーしますか」

主任たちが、周りで話していた。

その病院は、時代についてゆくことができなくなった老人や、頑固で無理なことばかり云う中年などを洗脳する病院だった。洗脳と云っても、なにも汚れやゴミの溜まった脳味噌を取りだして、洗濯機にかけるというものではない。すべて、機械で行う。

例のデパートの社長と、政治家と、市役所の課長が待合室にいた。名前を呼ばれて、ひとりづつ、診察室に入ってゆく。そこにはコンピュータがずらりと並んでいる。

「一応、頑固度を検査してみましょう。どれだけ固定観念が強いかもテストいたします」

医者は、脳波を測定するように頭にテスターを装着すると、いろいろとモニターで画像を見せて、質問していた。

「兎と亀が競争しました。どっちが勝ったのでしょうか」と、医者が質問すると、

「バカなことを訊くんじゃない。兎が早いに決まっている」

患者は怒り出す者もいる。

「空はどうして青いんでしょうか」

「なんだと、青いから青いんじゃない。昔からそう決まっとる。バカな質問をするんじゃない」

医者は結果をグラフにして、平均値と比較してみる。

「ううん、かなりの重症ですね。これはリカバリーしないと、不要なファイルが頭の中に残って、デフラグもしないと、データがばらばらに入っています。リカバリーするとすべてのデータが消去されてしまいますが、構いませんか。大事なデータは保存しておいて、後でまた入れることも可能です」

部下たちは、いろいろと話し合った。

「社長の古い考えはもういらないだろう。削除してもらおう。それで、今度は最新のOS二〇〇三がインストールされるんですね」

「そうです、今度はフリーズも起こしませんし、物わかりがよくなります」

とうとう人間の頭の中までマイクロソフトに独占されつつあった。

第355話 電車の乗客

終電を気にして酒を呑むほど、落ち着かないことはない。すっかり酔うことはできない。どこかで時計を気にしている。終電に乗り遅れたら、女房には疑われるし、カプセルホテルでも泊まるしかないが、翌朝が大変だ。着換えも何もないし、費用もかかる。タクシーで行けるくらい近いところならいざ知らず、隣の県ともなると、とてもタクシーなど使えない。

工藤隆信は、新年会で夕方からホテルで宴会だった。組合の仲間だから気心が知れている。来賓など偉い人が帰ったあとは、仲間うちで二次会へとスナックに繰り出した。

この一月は、あちこちの新年会に役柄もあって顔を出さねばならないから、連日の酒になった。隆信は酒と女には強い。ただ、この日だけは違っていた。どうも気分がよくない。二日酔いかもしれなかった。頭がずきずきする。呑みすぎだった。いつもなら、カラオケのマイクも放さないで、真っ先に歌う隆信だったが、今夜は疲れているせいか、妙に大人しい。

「工藤さん、珍しいすっね。がんがんとゆきましようや。いつものやつ、ミスチルのメドレー入れて。さあ、一緒に歌いませよ……」

隆信は、肩を仲間揺すられているのまでは覚えていた。急に眠気が襲ってきて、すうっと寝てしまった。みんなの声も歌も聞こえない。気持ちがよかった。疲れている極限で寝てしまうのは何か幸せな感じに包まれていた。

どれだけ寝たのだろうか。隆信は終電を思い出して飛び起きた。スナックには電灯は点いているが、誰もいなかった。長椅子で寝てしまったようだ。カラオケの機械が青いランプを灯していた。テーブルの上には飲み残しのグラスがそのまま置いてある。腕時計を見ると、十二時を回っている。

一大変だ、あと二十分で終電だ。それにしても、ママもいないし、みんなおれをひとり置いて帰っちゃうとは酷いなあ。

隆信はふらふらと立ち上がった。妙に体が軽かった。ともかくも急がねばならない。今日の支払い、明日、事務所で渡せばいい。隆信はおもてに出るとタクシーを拾おうとしたが、みんな無視して走り去る。

一そうか、ここから駅まではそう遠くないから、みんな乗車拒否するんだな。

思い直して、少し小走りに駅までのアーケード街を歩いていった。十分あれば着くだろう。途中、酔っぱらったチンピラに少し肩が触れるくらいぶつかった。

「すみません」隆信は怖々と先に謝ったが、相手は相当酔っているのか、ぶつかったことも気にしていない様子だ。相手が気が付いて追いかけてきはしまいかと、後ろを振り返り振り返り、駅の方角へと走った。

ようやく駅に着いた。ところが、時計は一時を過ぎていた。おかしいなと、隆信は腕時計を覗きこんだ。やはり一時を過ぎている。たった十分走ってきたのに、時間は三倍かかったというのか。それとも、酔っていて、自分の見間違えか。隆信は首を傾げていた。終電にまた乗り遅れてしまった。道理で駅には誰もいないと思った。

一くそっ、みんなも薄情なやつばかりだ。起こしてくれてもよさそうなものを。

ところが、よく見ると、誰もいないはずのホームに電車がまだ停まっていた。乗客も乗り込んでいるのが見えた。

一しめた、臨時便か、ダイヤ改正したのかな。まあ、いいや、電車が出るならなんだっていい。

隆信は無人の改札口にも定期券を見せて、走ってホームへと向かった。隆信が電車に乗り込むと、ドアがすっと閉まった。ベルも鳴らないし、車内アナウンスも入らないで、電車は音もなく走り出した。電車の中は薄暗かった。立っている人はいないが、窓際に長く延びたシート席はすべて満席で、ようやくひとり分の座る場所があった。隆信はそこに座った。みんな、寝ているように眼を閉じて俯いていた。女子大生もいる。サラリーマン風もいる。年寄りが多いが、なかには赤ん坊から小学生みたいなものもいる。こんな真夜中の電車に乗せる事情もあるのだろうが、少し非常識ではないかと、親の姿を探したが、どうも、隣に座っているのは親らしくはなかった。ひとりで子供が乗っているのもおかしい。隆信はあれこれと、乗客の顔を見ながら、おかしなことばかりに気が付いた。

いつもの終電は若い人たちが圧倒的に多いのに、この電車は年寄りが多い。みんな一様にじっと床を見据えたまま、顔を上げようとしない。電車の中では話をするカップルもいないのだ。ケイタイで、ゲームをしたり、メールを打つ者もいない。本や新聞を読む者もいない。疲れ切っている乗客ばかりだった。あるいは眠っているのか。こんな真夜中だから無理もない。

あれこれと周囲を詮索して腕時計を見ると、三時を回っていた。

一あれ、まだ数分しか経っていないのに、どうしたんだ。時計が故障したかな。じっと長い針を見つめていると、少しずつ動いているのが確認できるほど狂っていた。

一買ったばかりの時計が、おかしいな。隣の主婦の腕時計を垣間見ると、同じだった。三時を過ぎていた。時間の感覚もおかしいが、さっきから何十分と乗っているのに、電車は駅に停まらず、ノンストップで走り続けていたことに気付いた。

隆信は急に不安になって、隣のサラリーマン風の男性に訊いた。

「すみません。この電車は快速なんですか。それにしても、大きな駅にも停まらないんですか」

サラリーマンはじっと床の一点を見つめているふうで、隆信の存在そのものに気付かないようだった。眠っている様子もないが、眼は細めて、力のない顔をしている。今度は向かいに座っている中年男性に訊いてみた。作業服にジャンパーを引っかけて、建設関係の人か。

「あのう、この電車は次はどこへ停まるんですか」

中年も同じく眼を細めて寂しそうな顔で、床を見ていた。そして、隆信の言葉が聞こえないかのようにじっとしていた。

一どうなっているんだ。この電車は。みんなどこがおかしい。

ようやく、車内の異常に気が付いた。時計は六時だ。早い速度で時間だけが過ぎていく。白々と夜が明けてくる。もう、一時間は乗っているだろう。それなのに、どこの駅にも停車しないなんて。

隆信は、女子大生にも主婦にも子供にまで、行き先を尋ねて回った。みんな何も応えない。

「いい加減にしろ。みんな、何なのだ。この車内は気違いばかりか」

とうとう、隆信は爆発した。酔いはすっかりと醒めたようだ。隣の車両も同じ無口で生気のない乗客ばかりだった。その隣の車両も、そのまた隣の車両も同じだった。一番、先頭の車両まで行き着いた。

—そうだ、運転手なら教えてくれるかもしれない。

隆信が運転席を見たとき、驚きの声を上げた。

「嘘だろう。運転手がない。この電車は無人で走っているのか」

運転席のランプや計器は確かに動いていたが、そこはぽっかりと空席だった。不安が恐怖に変わっていた。隆信が、明るくなった外を見て、さらに驚いた。そこはいつも見慣れた日本の風景ではなかった。荒涼とした赤い砂漠が続いていた。ところどころに巨大なクレーターが火星の写真で見たようにそそり立っていた。空の色は緑色だった。どこにも建物も街もない。道路も樹木も畑もない。

「ここはどこなんだ」

隆信は閉じこめられた鼠のように、通路を走っていた。

「おれを降ろしてくれ。電車を停めてくれ。ここはどこなんだ。おまえらは誰なんだ」

隆信は泣き声に変わって、夢なら醒めろと、自分の頬を抓っていた。なんにも感じないことに気が付いた。痛みがない。おれは、どうしてしまったんだ。隆信が乗客のひとりひとりを揺り起こすように肩を掴むと、乗客の顔が次第に白骨化してゆくのがあった。どの乗客の顔もだんだんと痩せ細って骸骨になってゆく。隆信は、信じられない光景を見ていた。そして、自分の顔にも異変が出てきているのを知った。鼻がなくなり、穴が空いていた。顔も手も骨になりつつあった。ふらふらと力が抜けたように隆信は座席に倒れ込んだ。そして、他の乗客と同じように無気力にただ、床を見つめているのがあった。電車は冥府の原野をノンストップで走り続けていた。

第356話 行先のない切符

—死出の旅

動物も死に場所を探しにうろつくことがある。山で動物の死体を見ないのは、どこかに隠れる場所を求めてひっそりと死ぬからだろう。人間もやはり動物の本能を忘れてはいない。

康一は靖枝とこの世で出会うのが遅かった。互いに不幸な結婚をしていて、その愛の枯渇した日常の荒野で一生に一度の巡り会いを果たした。康一は四十五のエンジニア、靖枝は三十九の康一の勤務する研究所に出入りする保険のセールスレディだった。互いに感ずるものがあり、初対面から惹かれる出会いというものはあまりないものだ。

康一は洒落た会話で周囲を笑わせる研究者肌ではない無頼なところもあった。靖枝は来年二十歳になるひとり娘がいようとは思えない若さがまだ光っていた。小柄でよく働く生き生きとした明るさが、やはり周囲を湧かせていた。その二人が運命的な出会いをしたあと、急に笑わなくな

った。

互いがどちらからともなく電話をするようになり、外で逢うようになり、肉体関係を持つに至った。ところが不倫が発覚し、両方の配偶者が慰謝料を巡って前面に出てきた。会社や親戚、隣近所にまで知れ渡り、二人は社会的にも追いつめられてきていた。

飛行機は女満別空港に着陸した。一面の雪と氷の世界だった。本当に何も無い。乗客も少なく、このシーズンオフの道東を訪れる者はいないようだった。空港からタクシーで網走へと向かった。康一と靖枝はタクシーの中でも神妙で口数も少ない。行き先は決めていたわけではなく、どこでもよかった。できるだけ東京から遠いところへ、誰にも知られず、二人を夫婦としても疑わない片道の旅に出ることで、とりあえず現実から逃げたい。それから死に場所を求めてきつとうろつくのだ。

自殺する者が北国を選ぶのは珍しくなかった。人気のないところ、寂しい場所を選んだ。発作的に死ぬものもあるだろうが、死に場所を求めて旅に出るものは、その軌跡を辿れば、まるで躊躇い傷のように、死にきれず、各地を転々とするものが多いという。海で死ぬか、山で死ぬか。いずれにしても、誰もいないところであれば発見されることもない。静かに眠ることができる。しかも、綺麗なところがいい。足は自然と、遺伝子が生まれた海か、原始の森へと向かっていた。知床か阿寒かと思ったが、思わぬ豪雪で道は封鎖されていた。それで、網走へと向かっていた。夕闇が早く訪れていた。広い平野にちろちろと灯がいくつも揺れていた。テントが張られ、人が動いているのが車窓から見えた。

「あれは？」と、康一が指差すと、運転手が、

「あれはわかさぎ釣です。ここは網走湖で、氷に穴を空けて釣っているんです」

そう、ガイドしてくれた。それは実に不思議な光景だった。雪原と思っていたところに車まで乗り入れていたから、まさか全面凍結した湖だとは思えない。靖枝は、アイヌ神話のコロボックルたちが秘密集会を開いているようなそんな気がしていた。

すっかり帳が降りてから網走の市に到着した。そこの小さなホテルに投宿した。二人は宿帳に夫婦である姓名を書いた。こんなところでしか一緒に成れないかなしさがあった。

「お客さん、いまごろ観光ですか」と、ホテルのフロントが怪しんだ。

「流氷を見に来たんですが」と、康一は咄嗟に嘘を云った。

フロントは俄に笑い、

「流氷はまだ接岸していません。二月に入らないと。夏なら原生花園もあるし、見どころもありますが、この季節、商店も閉まっているところもあって、観光地はどこも閑です。何も無いときですから……」

二人は顔を見合わせた。何も無いとき、そのときを狙ってきたような感じがして、いいときに来たという思いがまた死に繋がって、互いの指がきつく絡み合っていた。

ホテルのレストランでの食事もう味がしなかった。地元のワインでも酔えなかった。恒に「死」という終着の言葉に緊張していた。零下二十度の厳寒が、窓ガラスに花を描いていた。ホテルの部屋で、二人は全裸で互いを見つめ合っていた。ようやく二人きりになれた。たった一夜の夫婦でもいい。この世で結ばれるなら。

二人は燃えていた。いままで、こんな熱い思いをしたことがないほど、強く抱きしめあっていた。明日になれば、この体に熱を感じることもないのだと思えば。

翌日、バスは原野の真ん中で停車した。田舎の年寄りたちが数人乗っているだけで、こんな家も建っていない荒涼とした原野で降りるものなどいない。風が強く、雪がうっすらと積もっている。看板に網走国定公園「能取湖」とある。山の中で雪に埋もれて眠ったように死ぬのが簡単なようにも思えた。一応、睡眠薬は持ってきていたが、もしも、誰かに見つかって助けられたら、凍傷のため手足を切断して惨めに生き残ることも考えていた。それなら、海にしよう。二人は別にそう話し合ったわけではなく、本当にどこでもよかった。綺麗なままで死にたい。あの世で結ばれるために、赤い紐を用意してきていた。もし、死ぬ間際に勇気がなくなったらと、ポケット瓶のウイスキーも持ってきていた。

康一が、少し高いところから白と黒のゼブラ模様の灯台の見える能取岬に降りてゆく道に立ったとき、歓喜の声を上げた。靖枝は気が触れたものと康一にしがみついた。

「ここだ、ここだよ。まさにこの風景だ。なんだ、そうだったのか」

康一は笑っていた。

「どうしたのよ」

「実は、ぼくが子供のときから、ここの風景のポスターを自分の部屋に貼っていたんだ。何年もこの風景を見ながら暮らしてきた。いつも、この景色の中に自分を立たせ、嫌なことがあると自分を写真の中に逃がしていた。どこの風景か判らなかった。いつも憧れて、一度は行ってみたいと思っていた場所なんだ。それが、死に場所だったなんて」

岬まではなだらかな牧場の草原を歩いて降りて行く。その先に断崖があり、青黒いオホーツクの海が広がっていた。北の海は暗いイメージがあったが、空は明るく快晴だった。雪を踏みしめながら、二人は断崖絶壁の方へと歩いて行った。夏の観光シーズンなら小さな売店も開いているのだろう。いまは、訪れる人もいない。灯台も無人らしかった。康一は、自分のサンクチュアリにようやく辿りつけた喜びで死ぬことも怖くなくなっていた。

断崖の前には柵がしてあった。その柵を乗り越えると、二人は持ってきた赤い紐で互いの足と手を縛りあった。死んでも離れない。あの世で結ばれる決意がきつく縛った紐にこめられていた。康一は靖枝の目を見た。いいね、と頷いた。そして、断崖の下を見た。見てはいけなかった。高さは三十メートルはあろうか。荒いオホーツクの波が打ち寄せ、砕き、奇岩が点在している。そこに奇妙なものが沢山見えた。二人とも、多くの目に見つめられていた。みんな見上げて、二人の姿を追っているのだった。康一は驚いて靖枝を見た。靖枝は死ぬのも忘れて、子供のように笑って、指差してはしゃぐように云った。

「すごいわ、こんなに野生のあざらしがいるなんて、日本にもいるのね」

「ほら、みんな見ている」「何頭いるのかしら」靖枝は数え始めていた。いつしか、二人はただの観光客になっていた。

「いいか、受験まであとひと月もない。われわれの任務は敵を徹底的に殲滅することだ。情容赦なく、手段を選ばず、この受験戦争を勝利に導くのだ」

A予備校の先生が檄を飛ばす。ライバルと目の敵にするのがB予備校だ。どちらが頭狂大学への合格者を多く出すかに卑劣な戦いが日夜行われていた。

「インフルエンザが流行っているようだが、みんなは絶対にこの大事な時期に罹ってはならない。防毒マスクはちゃんと装備しているか」

先生が教室を見渡すと、全員、防毒マスクを着用している。頭には日の丸のついた鉢巻。教室のあちこちに、檄が貼られている。

『欲しがりません勝つまでは』『撃ちてしやまん』『一校一心』

休憩時間には軍艦マーチがかかる。先生の制服はナチスの戦闘服だ。予備校の中はすっかりと軍国主義一色に染まっていた。

ひとりの受験生が教室で咳こんでいた。先生がその生徒のところにつかつかと歩いていった。

「きさま、風邪を引いたな。すぐに医務室へ行くように。他の生徒に移してはいかん」

生徒は医務室へ行った。検温、問診、内診と行われ、その生徒はインフルエンザであることが確定した。他に、三人の生徒がビニールで覆われた隔離部屋に入れられていた。

校長と教頭が医務室を訪れていた。

「校長、これはひょっとして使えますぞ」

「ふむ、新兵器の細菌爆弾にするか」

インフルエンザの疑いのある生徒四人が整列された。先生が四人を前に作戦命令を下した。

「きさまら四人は、これからB校へ突撃する。爆弾を抱えての肉弾攻撃だ。いいか、B校へ入ったら、遠慮なく咳をしろ、くしゃみをしろ、インフルエンザの菌をばらまいて戻ってくるんだ」

とうとう、国連でも禁止されている細菌戦争に突入した。そこまでしても合格率を高めたい。

B校ではそれから確かにインフルエンザが流行し、多くの受験生が倒れた。それがA校のスパイの仕業であると判明したら、今度はB校の反撃が始まった。予備校が終わる夜になると、校門の辺りに、怪しげな若い女たちがたむろするようになった。そして、真面目な受験生が帰宅しようとする、

「ねえ、わたしたちと少し遊ばない。勉強ばかりしていても効率悪いっていうかあ、たまに息抜きもしなきゃ集中力が高まらないっていうしい」とかなんとか、受験にかこつけてひとり、ふたりと強引にカラオケボックスやカフェに誘い出す。女の子とデートもしたことの無い真面目な生徒はすっかりとのぼせ上がっていた。

怪しげな女の子たちに生徒が拉致されるのを見て、先生は何かあるなと勘ぐっていた。連れ去られた生徒は翌日から勉強も手につかない。眼の形がハートになっている。ぼんやりしていたり、突然にやにやと笑いだしたり、成績はガタ落ちだった。受験戦争から落伍者が出始めた。

A校では緊急職員会議が開かれていた。

「ということでありまして、敵は卑劣にも色仕掛けで、本校の生徒を誘惑するという汚い手を使

い始めたのです。この一番大事な、脇見をしてはならないときに、いきなり目前でスカートをたくしあげてですな、挑発するという、誠に下品なくのいち作戦を採ってきたのであります」
がやがやと先生たちは騒然となっていた。

「お静かに、われわれはこの揺動作戦に対して、ただちに報復をしなければならない。学校のマイクロバスを装甲車に仕立て、バスの屋根にはスピーカーを四基、バスの中には二百ワットの大型アンプを積んで、ど演歌をボリュームいっぱい上げて、B校の授業中に勉強の邪魔をするという新たな戦術に出たいと思う」

全員から大きな拍手が沸き起こった。

さあ、いよいよ交戦が始まる。バスの周りに古タイヤをぶら下げて、スピーカーを積んだ装甲車が、B校の周りをぐるぐると巡回し始めた。マイクのボリュームはいっぱいに上げていた。敵が応戦に来るといけないので、装甲車の後方には鍋をかぶり、座布団を背中と胸に当てている先生方がバットを手に歩兵のようについてゆく。

突然、正面玄関から、手に箒やちりとりを持ったB校の先生や生徒たちが、校門めがけて押し寄せてきた。前庭で激突した。多勢に無勢だったが、A校から応援隊が駆けつけてきた。我が子の一大事と父兄までが話を聞きつけて集まって、乱闘に加わった。

ひとりでも多くの敵を倒さねばならない。社会はより狭き門になり、生き残る定員が減った。よりいい大学へ。よりいい会社、官庁へと目指す道は険しい。生き残りのゼロサムゲームは、紙の上での戦いは終わりつつあった。暴力による勝利を。相手を蹴散らしても自分が登り詰めるために。

この話には「落ち」がない。これから本番、「落ち」という言葉は禁句だった。

第358話 忘れていた歌

忘れていた歌を思い出して、みんなが喫茶店に集まってきていた。

往年のシンガーソングライター、我らの粉川隆生が四半世紀ぶりに歌うというのだ。三上寛、泉谷しげるらと同世代で、地方を拠点にして郷土主義をあくまでも貫いた。泥臭さが、方言詩の高木恭造、福士幸次郎と繋がり、方言のアクセント、語彙の面白さを歌に生かした。それは渋谷のジャンジャンでコンサートをやっても成功はしなかったが、外国語のような津軽弁の歌だから、地元ではうけるのだ。

隆生はかつて東芝からLPレコードも出していた。それは一枚きりで終わった。天性の音楽的才能はあったが、ギターコードも知らない。すべて純粋な音源だけで探るという原始的な方法で曲を書いた。五線譜が書けない彼の譜面にはおたまじゃくしはない。あるのは歌詞と我々には判らない記号だけだった。音楽の基本は知らなくても、作詞作曲した歌が五百を超える。天性のものでもない。

隆生は戯曲も書いた。それが放送局で認められて何本かドラマにもなった。いまは音楽をやめて、それで喰うつもりだった。というのも、いままで勤めていた大手の会社が倒産して、五十近くなって失職したのだ。もう、その年では再就職は難しかった。奥さんは嘱託社員で働いて、

隆生の稼ぎの穴埋めをしていた。子供はまだ小学生二人、これから金もかかる。何かしなければと、彼は職業訓練校で、新たな造園の資格を取るべく二年を勉強のために費やした。なんでもやりこなす器用な面があったが、それが器用貧乏に繋がっていた。

隆生はバツイチだった。あまり人に過去は語らないが、自分が書いた脚本でひとり芝居を演じた女優と再婚した。それがいまの奥さんだった。初めての子を亡くしたり、隆生はよくよく呪われた人生を歩いていた。曲も作り、詩も書き、ドラマも書き、溢れるばかりの才能を持ちながら、なかなか芽が出ないでいた。不運の星の下を歩いている、本を出しても売れない。コンサートも不発。結局、二十五過ぎて歌とは別れた。ギターとハモニカは錆び付いたまま、彼の部屋の片隅に眠ったままだった。

隆生を買っている脚本家で、実験劇団の主宰者の笹原は、隆生と喫茶店で逢っていた。隆生も笹原を師と仰いでいる。たまにコーヒーを飲みながら演劇について話し合うのが好きだった。

たまたま、その喫茶店に古いギターが壁掛けにしてあった。何気なく隆生はギターを懐かしそうに手に取っていた。その感触はいまの荒れている隆生の手にしっくりと納まった。二十数年、弦をはじいたこともない。弾けるだろうか。遊び心でつま弾いていると、彼に忘れていた歌が突然蘇ってきていた。歌い終わると、後ろから拍手がしていた。

「すごいわ。あなた、プロだったんだって？ もう一度、ここをステージにして復活コンサートをしてみない？ わたし、何か、ずっと前に聞いたような懐かしさで、涙が出たわよ」

そう、話してくれたのは、喫茶店のママだった。やはり隆生と同世代のママは、二十代の頃は東京で苦労していた。田舎から上京しての下積みの時代が、みんな懐かしい。そのときの若者の叫びを代弁していた歌だった。

隆生はママの熱意に負けて、この喫茶店を貸し切ってコンサートをすることとなった。指は動くだろうか。声は出るだろうか。

斎藤は隆生の親友だった。隆生が新聞社に勤めていたときからの同僚だった。互いに津軽で生まれ、同じ血の匂いを感じていた。文学仲間として、同人誌を年に数回出している。隆生は詩を書き、斎藤は私小説を書いた。斎藤もまたうだつの上がない人生を歩いていた。いい家庭には恵まれていたが、出版不況で、独立して切り回していた小さな出版社は荒海の笹船だった。明日はどうなるか見えない長い冬を歩いていた。苦しかった。ただ、それを微塵にも顔には出さない。矜持だけは捨てないで、酒と歌でごまかしていた。

北村は、隆生と似た半生を送ってきた。倒産と離婚という痛みは同じだった。そして、それを言葉に換えながら叫びを文字にする作業を日々続けていた。似た者同士が集まって、同人雑誌をやろうということになって、また三人は繋がった。

戦後生まれ、貧困から立ち上がってきた親の背中で育った同じ年回りの三人が、一度は上京して、学生運動で血を流したり、就職に失敗したり、喰えない青春を過ごし、ふたたび古里に戻ってきていた。云ってみれば、この田舎町は喰えない連中の吹き溜まりだった。

他に、顔では笑っている由紀子も、無口な里村も、明るい振りをする橋本も、みんな時代の枷に手足を取られ、同人誌という痰壺に血を吐きながら、同年代の痛みを共有しあっていたのだ。年回りが不幸だったとは云いきれないにしても、時代が閉塞してきたいま、一番追いつめられて

いる年代が彼らだった。何をしてもうまく行かない。重責を背負って明日がどうなることか。

隆生はステージに立っていた。年季の入った傷だらけのフォークギターを抱え、錆びたハモニカをくわえ、マイクに向かって泣き叫んだ。声は衰えていない。あの二十代の、建物が破壊されるような音ではなかったが、ギターも弦が切れるほどよく鳴った。かつて、歌声喫茶が戦後の暗い世代にうけたように、いままたここに隆生は復活していた。

隆生は歌う。雪国の地吹雪といたこの口寄せ、死者の蘇りを。隆生は怒鳴る。貧しさゆえの殺人を。出稼ぎの悲劇を。隆生は歌う。岩木の荘厳さを。砂山の虚しさを。隆生は叫ぶ。喰えない時代を。

みんな、まんじりともせず聞き惚れていた。それは、ひとりひとりの思い当たる歌だった。

笹原は云った。

「みんな、そうしてここに帰ってくるんだよお」

第359話 訴訟

悪いことはすべて社会のせいにするという甘ったれた訴訟社会が日本にも来た。社会という大きな器を訴えて、巨額の金をせしめてやれという欲の塊たちが、あちこちで蠢いているのだ。

石部家では、クレジットの支払いやリストラで大黒柱が失職したりで、家計がピンチに追い込まれていた。もう、八方塞がり借金で申し込む先はなかった。

「あんた、この先、どうすればいいのよ。子供たちもこれから高校、大学と金がかかるし、家のローンも溜めているし、サラ金も返済を迫ってくるし」

石部金三はだいぶ前の新聞で、アメリカのハンバーガーの会社が肥満の若者たちに訴えられた記事を思い出していた。

「うん、それだ。それは金になるかもしれないぞ」

金三は膝を叩いた。頭は悪いが、妙なところに知恵が回る。

「この団地の上にゴミ焼却場があるだろう。あそこから、大量のダイオキシンが飛散しているんだ。おまえ、どうでもいいから具合が悪くなれ。おれが市を相手に訴えてやる。知り合いの弁護士に相談してくる」

「だって、そんなのうちだけじゃないでしょう。この団地に住む人はみんなどうすんのよ。それに弁護士費用だってかかるし……」

「いいんだよ、訴えた者勝ちなんだ。請求した者には払うが、しない者には払わない世の中なんだから。弁護士には成功報酬でまとめてくる」

金三は、後日、各マスコミを呼んで、マスクをして具合の悪そうな女房と、弁護士と三人で大々的に記者会見をした。こんなことは、大袈裟に花火を上げた方が世論を引き込むこととちゃんと計算していた。

「わたしたち一家だけではありません。でも、誰も何も云わないので、敢えて、わたしたち一家は立ち上がりました。わたしたちには生存権があります。憲法で保証されているものであります

。わたしは、ゴミの焼却場に調査に行ってきました。いまはゴミの分別回収が進められているはずですが、わたしはこの目で見たのです。ビニール袋の束を一緒に燃やしているのを。ここに証拠の写真があります。それがために、うちの妻は可哀想に、体調を崩して……」と、泣くことも、台本に書かれてあった。事前に家で夫婦はリハーサルまでしていた。

訴訟は一審で敗訴した。団地ができる前に焼却場があったこと。その環境の悪さは団地造成の不動産屋から住民に了解を得ていたこと、そのために不動産価格が安かったなど、不利な書類が逆に突きつけられていた。医師の診断書も曖昧であった。因果関係が明らかでないというのが理由のひとつだった。

「くそっ、取り損なったわい。今度はうまくやろう」

と、懲りない金三は騒音公害を訴えることにした。家の前を国道が走っている。深夜まで暴走族が走り回って、煩くて眠れない。

「これは、明らかに警察が取締を放棄して、見て見ぬ振りをしている業務怠慢に当たる」と、県警と県を相手取り、訴訟を起こした。無理が通れば道理が引っ込む。そんなことが通れば、全国の何百万という住民が該当するだろう。勝算のない戦いを挑むところが少し考えが足りなかった。とにかく、どうしても金が欲しい。どこからでも引き出したいと必死だった。

それも簡単に却下された。金三は意地になった。

「こうなったら、何がなんでも訴えてやる」

と、日常の中の瑕疵のあら探しをし始めた。デパートで値札の間違があると、二重価格だ、詐欺だ、訴えてやるといきまいて、デパートから金を巻き上げる。子供が風邪をひいたのは、学校側の風邪の対策が不十分だったから、治療費を支払えだとか、歩いていて、犬の糞を踏んで滑って転んだと、近くの飼い主を訴えたり、夫婦でごうつくで、手当たり次第に何かあれば「訴えてやる」と、脅迫して、近所でも訴訟一家と懼れられ有名になっていた。

「いいかい、あそこの家には近づくんじゃないよ」

「あの家の子供と遊んじゃいけないよ。ちょっと巫山戯て押しただけでも、虐めだと訴えられるからね」

「あの家の奥さんと話もできないわ。何か気に障ることでも云おうものから、侮辱罪で訴えるでしょう。目も合わせられないわね」

近所の人にはできるだけ、その家の前を離れて歩いていた。関わりになりたくない。車もすべて、その家の前では徐行した。

「水道の水が不味いのは、市側の浄水場の管理責任だ」とか、「空気が悪いのは、道路の清掃を怠ったからだ」とか、まだやっていた。もう、呆れて、弁護士も裁判所も相手にしていなかった。誰も真顔で話も聞かない。水も呑めない、空気も吸えないでは、生活をどうしているのだろう。

「うちでは、できるだけ空気を吸わないようにしています。みんな家族は吸いたくても我慢して、一分間に一回吸うようにしています」

「水道ももう一度煮沸して、それを更に浄化装置を通して、自主的に水質検査までして、合格したものだけ子供に吞ませているんです。その費用一切を市に請求いたします」

始めは面白がって取材に来ていたマスコミも、またかという顔でどこも行かなくなった。ただ

、全国の名物になったことは確かで、観光バスが石部家の前で停まる。観光客が、記念写真を撮ってゆく。石部家の人たちもテレビに出演したり、とうとう「金儲けの歌」というのもCDで出したりして、芸能界入りを果たした。黙っていても収入が増えた。金三は講演会で講師に引っ張りだこ。石部家のキャラクターグッズまで金が入ると縁起物のお守りとして売りに売れた。

「なあ、おれの目論見は当たったろう。この世は騒ぎ勝ちなんだ。黙っていればいいようにされる。どれだけ大きな声で騒げるか、頭は死ぬまで使わねば」

石部家の玄関には鳥居が立てられ、賽銭箱まで置かれていた。

第360話 コンピュータが死んだ日

情報化社会はすべてのコンピュータが繋がるという危険性を含んでいた。機械に頼りすぎて、気が付いたら情報に縛られて身動きがとれない。

それはある日突然やってきた。全世界に史上最強のサイバーテロが強力なウイルスを送りつけてきた。メールを見たりやネットに繋いだけで感染する。そいつはOSまで使えないように破壊してしまう。コンピュータの中のすべてのデータが使えなくなった。

会社の業務がすべて停止していた。常時接続の普及が拍車をかけた。ウイルスは勝手に接続して、侵入してくる。すべての会社の経理データが破壊された。バックアップをとっていても、毎日まめにとっていない会社が多いから、数日間の空白ができることとなった。

銀行業務も停滞した。ATMはどれも使用不能に陥った。それは郵便局も同じだった。預金の出し入れが窓口でもできなくなり、混乱を防ぐために銀行と郵便局はシャッターを降ろして臨時休業とした。

テレビもラジオも点かない。放送局も番組が突然途切れたままとになっていた。電気の供給も停止した。全世帯が停電状態になったままだ。ビルやデパートではエレベータに閉じこめられた人々がパニックになっていた。ケイタイで救出を求めようとしたが、ケイタイも電話も繋がらない。うんともすんとも云わない。急にみんなは不安になった。パソコンも電話もテレビもつかないという情報断絶が引き起こした恐怖は、それに頼る人、会社ほどもすごい被害を受けた。安穩として、ろうそくに火をつけていて、慌てていないのは幼児と年寄りだけだった。

街ではさらに大変なことが起こっていた。街中の信号が停まったから、交差点では追突、衝突事故で、大渋滞を巻き起こしていた。警官が交通整理に当たったが、人手が足りない。信号のない交差点というのは怖いものだ。

電車も地下鉄も停まっていた。新幹線も停まったきり動かないで、半日も経っていたから、乗客は痺れをきらして車掌に降ろせと詰め寄っていた。復旧の目処がついていないので、急用の人たちが車内で騒いだ。やむなく、非常口を開けて、線路から田圃まで降りてゆく。停まったところは何もない田舎だった。

空の便もすべて欠航になった。着陸する飛行機は誘導がないから、手動に切り替えて空港に緊急着陸していた。

交通網はすべて停止していた。新聞もない。テレビもラジオもすべての情報網も遮断したままだった。そうすると、みんな各家に孤立してしまい。誰にも連絡もつかないので、不安は頂点に達した。

人々は、いつものことで、半日くらいで復旧するものと軽く考えていた。ところがそう甘くはない。かつて、大手銀行が合併して、新たにスタートしたときのコンピュータの誤作動で、大変なパニックになったのは記憶に新しい。復旧まで数日乃至一週間はかかった。それが全国規模で起こったのだから、一日、二日と経つに従って、人々は焦り始めた。冷蔵庫の中が腐る。コンビニもスーパーも飲食店もすべて店を閉めていた。レジが使えない。冷蔵庫はダメ。店内は真っ暗。車が使えないから、商品の補充も配達もできない。

一般家庭にそんな食糧の備蓄があるわけがない。米はあっても炊くことができない。キャンプのように、鍋を外に持ち出して、ゴミや古新聞紙を燃やして御飯を焚いている家があちこちで見受けられた。

学校、会社は全部休み、工場も操業を止めた。病院では多くの患者が死んでいった。透析をしている者、手術をしなければ助からない者、人口呼吸で生きている患者たちも、機械で生かされていた。非常用の発電器にも限界があった。第一、バッテリーが切れる、燃料の補給ができない。ガソリンスタンドも閉鎖していた。道路には動かなくなった車が放置され、その後ろで身動きとれなくなつた車も乗り捨てられたので、道路は完全に無人の車で埋まっていた。

政府は緊急に、保存食を自衛隊のヘリを使って空から降下させた。医薬品などもヘリで運んだが、一億二千万の腹を満たすにはヘリの数はいくらあっても足りない。

そんなとき、人々が並んで買っている店があった。いままで、大手のスーパーに押されて見向きもされなかった町の魚屋さんや八百屋さんだ。彼らは、もともとレジなど使わないでやってきていた。冷暖房完備の店でもない。店は電気もいらぬようなものだった。店頭で戸板並べて商品を陳列している昔ながらのやり方だ。電気が止まろうが、なんの苦もない。

「さあさ、安いよ、少しいきは下がったが、まだまだ食べられる。いらはい、いらはい」

釣り銭も売上もすべて井に入れる。生ものはその日その日に店頭で売りきってしまう。巨大なスーパーはコンピュータで管理しているから、レジのポスが作動しなければ、販売ができない。たちまち生鮮食品は腐り始める。そこに目をつけた町の魚屋、果物屋。デパート、スーパーから生ものを二束三文で卸してもらい、それを特価で叩き売る。デパートも最近では気取った売り方をして、店頭販売なんかしたことがない。いまさらそこまで頭が回らない。小回りの利かない大手に見切りをつけて、問屋、中卸たちが、町の小売店にリヤカーで納品にくる。

一週間しても、復旧しないから、人々は家に閉じこもって、餓死するよりはと、各自、自転車で買い物にやってくる。荷物はリヤカーや台車を押して徒歩で運ぶ。商店の親父たちも、このままじっとしていても商いができないと、先代がやったように、てんぴん棒ならぬ物干し竿を担いで、両側に商品を吊して、町を練り歩くようになった。昔ながらの行商スタイル。

豆腐や納豆も、小回りの利かない大工場ものは出荷ストップしていたが、町工場のとうちゃん、かあちゃんやっている豆腐屋はそんなだいそれた機械なんか使っていない。手作りで充分だ

。できた豆腐は、死んだじいさんのラッパを出してきて、自転車で町内を売り歩く。

「トーフ、トーフ」とラッパは鳴った。

家から子供が丼持って駆けてくる。テレビが見られないから、子供たちは古本屋へ走る。古本屋のおじさんは、マンガの貸本も始めた。

コンピュータが使いなくなると、われわれは実に不思議な過去の町へと迷いこんでいた。

第361話 政治家は夜つくられる

『あなたも政治家になれる！』というポスターを口をあぐりと開けて見ていた男がいた。笹田良一、五十歳。しがない古本屋の親父を二十年くらいしていた。ただ、最近は本も売れないので、何か転職したいと考え始めていたところだ。

「政治家かあ……」

良一は小さいときから、母親に『人の上に立つ人間になるんだよ』と、いつも口癖のように云われて育った。それで、大学を卒業してから、人の上に立つ仕事を探したが、なかなかない。サーカスや、マスゲームの人間ピラミッドなどでは人の上に立つこともあるが、それを日々の職業にしているのは見たことがない。良一は人の頭の上に立って、紅白の旗を振っている晴れやかな自分の勇姿を想像していた。いつか、人の上に立つ仕事は何かと、訊いたら、みんな、それは政治家だと答えた。政治家になれば、秘書に肩車したり、国会で騎馬戦をしたりするのだろうと、どうしてもその想像から離れられないでいた。

「よし、おれは、政治家に転身するぞ」

良一は、意を決して街のとあるビルの上にある、「政治家養成大学」の門を叩いた。

「あのう、おれみたいなのも政治家になれますかね」と、事務室の受付で、知的なメガネをかけた胸の大きい受付嬢に訊いた。

「はい、どなたでも成れるように当校では政治家としての資質を研くのです」

「でも、おれは、政治学とかは苦手で……」

受付嬢は声高に笑い、

「とんでもございませんわ。当校では政治学だなんて教えておりません」

と、きっぱりと云った。

「でも、政治のせの字も知らないで、成れるもんですか」

「あら、いまの世の中、政治家をしてらっしゃる方で政治学を知っている方はどれほどおられますか。政治は学問ではありません。意欲です。あなたは金儲けがしたいですか」

「ええ、勿論、金なんかいくらあってもいい。欲しくて欲しくてたまりません」

「それです、それが政治家への第一歩。目的なくして前進はありません。権力とは手段に過ぎません。すべては金、金、金です。あなたは、合格です。さっそく、当校に入学手続きなさいませ」

良一は入学案内を渡された。この大学は定時制だけだった。昼間はみんな定職があり、夜間、

勉強しているのだ。衆議院コースは四年制、参議院コースは三年制、他に知事コースや市長コースがあり、比較的簡単なのが、一年で取得できる市町村議員コースだ。入学資格の覧に、不適格者として、「反骨精神のある者」「左翼思想のある者」が挙げられている。この大学は理事長始め、多くの講師が保守政党支持者、もしくは議員があたっていた。

事務長が、良一にシステムを説明していた。

「そもそも、どこかの党のように、土壇場になって立候補者を擁立したり、行き当たりばったりに入選するようなことはいたしません。わたしどもの大学では、すべて長期計画に則り、養成して四年後に備えます。すべては選挙のために準備がなされます。ご覧ください。わが校の卒業生の当確率を。参議院に七名、衆議院に二十名を送り出しております。市長も五十名、知事は六名、現在も現職です。この実績は、すべて本校の教育の成果であります」

良一はカリキュラムを見て驚いた。収賄学、暴力団関係学、愛人学、脱税学、資金獲得学、リベート学……。いままで、学問として確立していなかった政治家のノウハウを体系化し、巧妙にバレないように世の中をうまく泳ぎきり、どれだけ資産を増やせるかというマネーゲームもロールプレイングでやらせる。

この大学はそれだけではなかった。いきなり、卒業と同時に立候補しても、知名度がないといけなないので、四年間の中に、将来就職する党のバックアップで、いろんな要職に就かせられる。良一は、入学と同時に、政治家の後押しで、商工会の理事に選挙で挙げられた。役職が付けば行くほどいい。学校のPTAの会長にも推された。すべて根回しがあった。県や市の審議会、協議会の役員にも推薦された。いままで、そんなところにはお呼びもかからなかった、一介の古本屋の親父が、急に箔が付いた。いつもジャンバーをひっかけ、サンダル履きの親父もダブルのスーツにブランドものの靴だ。自転車であちこち行くのは禁じられた。すべてハイヤーを頼む。

大学では、政治家としてのふてぶてしい態度から学ぶ。歩き方、話し方、手振り身振りから睨み方まで、いろんな表情、威嚇、応酬話法まで教える。形から入ると、中身も後でついてくる。さらに、性格改造、小さなことをくよくよしたりしない。厚顔無恥にさせるため、面の皮を厚くするエステも設備されている。心臓に毛が生えるように毛生え薬も吞ませられる。

賄賂の受け取り方、絶対にみつからない方法など、かつて成功した先輩の代議士たちが、そのカラクリを披露する。そのための隠語まであり、政治家用の隠語辞典まで秘密出版されていた。政治献金の集め方、マスコミの扱い方、選挙演説の仕方など、事細かに習熟しなければ一人前の代議士にはなれない。

「ところで、肝心の公約とか政策というのは課目にはないんですが」

と、良一が講師に訊くと、

「君はまだまだ勉強が足りないぞ。公約、政策というものはだね、嘘でいいんだ。そんなもの、実行した政治家がいままでありましたか。有権者の喜びそうなことを並べておけばいいんです」

学生たちは、要職に就くだけでなく、日頃からやれ結婚式だ、葬式だ、記念式典だとあちこちに顔を出さなければならない。どれだけ自分を売り込むか、そのための授業料は出し惜しみさせない。

「政治家はいつも胸を張っていなさい。ぺこぺこ頭を下げるのはポーズとしては見苦しい。握手

です。すべて握手でゆきましょう」

いつもは古本屋でハタキをぱたぱたかけている良一も、一旦外へ出ると別人だ。堂々とした歩き方から、自信満々の笑顔を見せて、ゆったりと余裕のある話し方に変わる。外では先生と呼ばれるようになり、後援会もぼちぼちと出来てきた。

四年経って、良一は見違えたようにふてぶてしくなっていた。いよいよ、卒業試験の選挙だった。笹田良一のポスターが貼られる。新聞にも大きく載った。そのスマイルもご婦人方に一番気に入られるような笑顔が演技指導されていた。演説も堂に入ったもので、メリハリのある抑揚と強弱を持って、ジェスチャーも交えて、人間の心理に訴える教えられた通りのセオリーで話した。すべては計算されていた。

政治家は金で動く傀儡だ。中身はなくてもいい。すべてポーズでいい。あとは官僚がうまくやる。

「あのう、表の看板を見て来たのですが。あっしは務所から出たばかりの元こそどろで、なかなか仕事がないんで、足を洗って働きたいんですがね、あっしのようなものでも政治家に成れるもんですかい」

受付嬢は微笑んで云った。

「足を洗う必要はないですよ。政治家はみんな泥棒みたいなものですから、あなたはその素養をお持ちなんですから、地で行けますことよ」

またひとり訳の分からない政治家志望が入ってきた。

第362話 行先のない切符

一どんづまり

車は袋小路へと迷いこんだ。山間の寂れた町だった。

「ここはどこだろうか」

がむしゃらにただ走ってきた風晴俊彦は行き止まりの町に入りこんで、車を降りて立ちつくしていた。まるでタイムスリップして戦前の町にいるような錯覚に囚われた。戦前の古い商店が並んでいる。看板の文字が右から左へと書かれている。車も人も通らない、無人の町のような感じがした。

俊彦は札幌で青年実業家をしてのぼせ上がっていた。ベンチャービジネスの旗手として、ネットを活用した通販会社を経営して行き詰まった。最初は起業家と持てはやされて、政府も支援してきたが、脱サラして新しい事業を興した者の大半が借金を抱えて脱落していった。インターネットとは騒いでいるが、それで年商何千万ですら売る業者は少ないのだ。殆どが、SOHOと称して、スモールオフィス・ホームオフィスで、夫婦でちまちまと家でやる仕事なのだ。メールで注文が来るか来ないかと待ちの商売で一喜一憂しながら小さな金額を動かしているに過ぎない。成功する者の方が少ないのだ。脱サラして、これからはネット時代だと飛び付いた者も、次第に

後悔しはじめて、サラリーマンをしていたほうがましだと思えるようになってきていた。

俊彦は機械設備と商品在庫を抱えて、代金支払いにも窮するようになり、借金取り立てにも追われ、逃げ回っていた。マンションはすでに差し押さえに遭い、女房子供は実家へ逃げ帰った。俊彦はマンションに張り込んでいる暴力団に捕まるので、車で逃げ回っていた。

そうして、夕方になって無意識に運転してきて辿り着いたのが夕張市だった。車の中には着換えや毛布まで積んでいた。夜逃げと同じだった。とりあえず生活ができる身の回りのものはみんな持ってきていた。一月の末だったから、日中でも零下の真冬日だ。道路は雪と氷でアイスバーンになっていた。すべてを放棄して、これからどこへ行けばいいのか。親戚、友人知人にも借金があるから、みんな噂で離れて近づかない。頼る宛はどこにもなかった。

夕張は炭坑が閉鎖されてから、人口も減って、灯の消えたような寂れた町になっていた。空き家や、貸店舗がかなりあった。今夜はどうするか宛はなかった。金もないから、とりあえず車の中で毛布にくるまって寝ることにした。そのうち、何か仕事でも探さねばならないと思っていた。もう札幌には帰ることはできない。いつどこで取り立て屋にみつかるか知れない。車だって、いつまでガソリンがもつか判らない。

翌朝から仕事を探した。どんな仕事でもやるつもりだった。いまとなつては、人の嫌がる仕事でもなんだっていい。新しい第二の人生をひっそりと過ごすためには寂しすぎる市ではあったが。

市のハローワークに行ってみた。求職の係は大声で驚いた。

「ええ？ 札幌からわざわざ仕事を探しに？」

職員だけではなく、利用者も一斉に振り向いた。

「すみません。驚かせて。この市から出てゆく人は後を絶たないんですが、入ってくる人は珍しいんです。まして、仕事を探しにくるなんて、信じられませんでした。大概の若い人は札幌に就職で出るんです」

係からいろいろと出された仕事は農業だった。自然と触れあう。もう、二度とハイテクやベンチャービジネスといった最先端の海のものとも山のものともつかないものの仕事はしたくない。俊彦はすっかりと失望し、街自体を嫌っていた。急に晴れやかな顔になり、農業の二字を新しい生き方として考え始めていた。

「でも、仕事はきついですよ。その割りに賃金は安いですし」

「構いません。働かせてもらえるなら、何だってやります」

いまは、農業と云っても、ちゃんとした法人で、募集しているところも株式会社だ。保険もつくし、有給休暇まである。社員寮があるというのも気に入った。

さっそく、俊彦は紹介状を持って農園を訪ねて行った。驚くほど若い人たちも働いている。地熱を利用したメロンのはハウス栽培をしている。規模が大きいのに圧倒された。

同じ年くらいの社長という人と面接した。やる気さえあれば、即決だった。寮に案内された。昔の文化住宅だった。三軒長屋とも云った。それはかなり古いが、以前は炭坑の社宅だったという。今は住む人もなく、ずらりと同じような建物が並んでいるが、殆どが空き家だった。

「少し、古くて狭いですが、一人だったら広いっしょ。蒲団も用意していますから。部屋の掃除はしておきました。ストーブにも灯油は入っていますし、すぐにでも生活はできます。この社宅

は庭もついて、土地建物でたったの五十万でした。なかなか買い手がつかないんですね」

総務担当は寮に案内しながら、市が見晴らせる高台の建つ社宅の前に立って、市の様子も説明していた。

「この市はご存知のように、炭坑だけの市でした。炭坑が閉山されてからは、市として生き延びてゆく道を真剣に模索しましてね、炭坑の跡は歴史資料館として、体験もできる施設に変えました。その前の広大な土地は遊園地にしまして、地熱を利用したメロン栽培も全国有数の産地までのし上がりました」

かつて、斜陽と云われた市が必死に生きようという市民の努力で蘇りつつあった。市で出会った人はみな、どこか明るい感じがしたのはそのせいだった。俊彦はひどく感動していた。この山峡のどんづまりの市が、まるで、自分のように追いつめられて、行き場がなくなった者でも暖かく迎えてくれ、生活の場を提供してくれる。この市そのものが、自分の生き様でもあるようにダブらせていた。

荷物を車から出して、寮に入った。確かに綺麗に掃除してあった。ストーブをつけるとじわりと暖かい熱気が冷え切った俊彦の体をあたためた。つららの下がった窓からは夕張市が見下ろせた。

「新しく入った人ね、わたし、近くの社宅に住む、須藤という者です。これからもよろしく。これ、うちで作った炊き込み御飯とおかずだけど、口に合いますかどうか、食べてね」

と、近所から差し入れもあった。五十過ぎくらいの奥さんだった。明日から出勤だ。このどこにも逃げられない人々との生活が始まる。デパートもない田舎市だ。もう、パソコンに触れることもない。土とともに生きるのだ。俊彦は荷物の中にあつた何気なく持ってきた本を一冊開いていた。本なんかも暫く読んだこともない。これからはじっくりと自分と向き合って生きてゆこうと思う。

ヤカンのお湯がしゅんしゅんと鳴っていた。

第363話 ヤンキー

ヤンママとヤンパパ、ヤンキーの夫婦、やんちゃなパパ、ヤングママ、そういった意味があるのか。

以前、孫を見に市民病院へ行ったら、そんな若い夫婦が新生児をアヤしているのがガラス窓越しに見えた。若い奥さんは若すぎる。まだ十七か十六か、つい昨日までセーラー服を着ていたのではないかと思うほどあどけない顔をしている。その旦那もまだ少年の顔をしている。二人ともつい昨日まで高校生でなかったかと思うほど若過ぎる。そして、二人共に茶髪というより金髪に近い。耳にはピアス、顔にはメイク。それでも、おっぱいを飲ませていて、少年の父親はにっこりと笑いながら、赤ちゃんを見ているのは微笑ましい。わたしも、ついにこにこと見ていたら、何をガンつけてんだよといった顔で睨んで、急に不良の顔になったので、おかしかった。

誰でも子供を持つと母になり、父になる。それがまるでママゴトのようにぎこちないが、だんだんと生活臭ができて板に付いてくる。ただ、最近のできちゃった結婚で早すぎる結婚は端から見ていて少し危うい感じがしてならない。遊びたい盛りだろうに、間違っただけで、所帯を持って、子育てが終わったら、何か怖い。二人とも若い頃の鬱積を中年になつて晴らすだろう。離婚も多くなる。それが心配だ。遊びたい盛りには遊ばばいい。そう焦って一緒になっても後できっと後悔することになる。

わたしの従姉妹から相談を持ちかけられた。従姉妹は十年前に離婚して、働きながらひとり息子を育てた。秀夫といった。わたしも、片親だから不憫に思って、よく遊びに行つては、うちの子供たちと遊びに連れて出したものだ。ところが、秀夫は中学からグレた。髪を茶色にして、恐喝、万引きで、何度も補導されては親が呼び出されていた。従姉妹はほとんど手に負えないとみると、わたしを父親代わりに、叱ってやってくださいと頼みにくる。男親がいるとないでは違うのか。最近の父親はいてもいなくてもいいような弱い存在になってきていたが。

秀夫は柄の悪い高校に入ったが、二年もいないで退学させられた。いろんな問題を起こす。根はいいやつだと思うのだが、こと、仲間のこととなると肩入れをして、血の気も多いからすぐ喧嘩になる。

それで、いつのまにか家を出て、少女と同棲しはじめ、わたしも何度か連れ戻そうとしたがとも云うことを聞くものではなかった。相手の子はやはり、親が見放しているほどの不良で、中学を出てから家出を繰り返していた。高校には進学せず、ぶらぶらとプーをしていたが、秀夫とつきあうようになってから、少しは女の子らしくなった。

その二人に子供ができた。十八と十六だった。すでに五ヶ月で墮ろすわけにはゆかず、どうするかと、親族会議も開いた。相手の家は知らんふりだ。秀夫は、道路工事に出たり、建設現場の雑用をバイトでしていたりして、一応、定職はないが、稼ぎはあった。二人とも金髪で、眉毛も剃っていたから、とてもまともなところでは採用してくれない。

仕方なく、二人を交えて話し合い、一緒にさせることにした。まだ、結婚ということもどんなことなのか知らない。まして、子を産み育てるということもどんなことになるのかと、考えもな

い二人だった。式も挙げない、犬猫のように一緒になった。そして、翌年の春、予定日より少し早かったが、元気な女の子が産まれた。名前は阿由とした。人気アイドル歌手からとったのだという。

二人は、風呂もない二間のアパートに住んでいた。大丈夫かなと様子を見に行ってきた。日曜は二人とも休みだろうと、七ヶ月になった赤ん坊の玩具や、食糧などを手土産に汚いアパートを訪ねる。昼過ぎに行ったが、ベルを押しても暫く出てこない。そのうち、寝ぼけたような嫁が、パンティにキャミソールだけで、玄関のドアを開けた。誰が訪ねてくるか判らないのに、その格好はと注意したが、まだ二人とも寝ていたようだ。時計は昼の一時を過ぎていた。赤ん坊は腹を空かせて泣いて泣いて、声が掠れていた。

「なんだ、まだ寝ていたのか」

わたしは、散らかって足の踏み場もないだらしのない部屋に入ったが、どこにも座る場所がない。秀夫もようよう起きてきた。カップラーメンの殻から、フライドチキン、ハンバーガーの食い残し、コーラの空き瓶などが、散乱していた。

「おじさん、もう少し寝させろよ。夕べつうか、朝までダチが来て、騒いでいたからよ」

「まあ、土曜日だったからな。でも、阿由はうるさくて眠れないだろう」

「ううん、いつも朝まで起きてるよ」

わたしは赤ん坊が夜昼間違えて、夜泣きするのを教えてゆかねばならないのに、教えなければならぬのはこの若い両親ではないのか。赤ん坊がいるというのに非常識だ。台所も残飯で盛り上がっている。食器棚はあっても食器がない。きっと料理を作るといふことをしないのだ。みんなファーストフードを買ってきたり、インスタント食品だ。

わたしは、赤ん坊があまりぐずるので、おしめをみてやった。昨日から取り替えていないとみえて、うんちなどがこびりついている。そして、可哀想に赤ん坊の股は赤く爛れていた。きっと拭いてやることもしないのだろう。

「ちゃんと、面倒みないと可哀想だろう。赤ん坊のおむつかぶれの軟膏はないか、シッカロールは？」と、訊いても、軟膏も天花粉も意味が判らない。きっとそんなものも用意しておかないのだ。誰も教えてくれる人が傍にいないからだ。従姉妹も仕事が忙しく、たまに来るだけだと聞いている。

「おっじさん、たまに来ると煩せえな。うちのババアよりババアだぜ」

口の利き方には慣れていた。

「どれ、みんな起きるんだ。今日は、天気もいいから、おじさんが大掃除をしてやる」

ところが、ゴミ袋がない。洗濯ものは、コインランドリーに行くからと、洗い物が溜まるだけ溜まって、高さ一メートルはあろうか。ここの家は赤ん坊がいてもいなくてもだらしないのだ。買って来たディニッシュで朝飯ならぬ昼食を三人で食べた。生活も不規則なら、こんな不健康な部屋に赤ん坊を寝せておいて、タバコくさいから、かなりこの子も吸っているだろうと思うとぞっとする。

窓を開けると二月とは思えない陽気で、いい風が入ってきていた。親子三人、仲良く万年蒲団の上に座り、赤ん坊の髪をなにやら染めている。赤ん坊まで金髪にするらしい。その光景を眺め

っていると、いつしか、猿の親子が蚤を捕っている格好に見えてきた。どんな不良でも暴走族でも、いつか親になる。まあ、遊んでいる連中よりはましだろう。

第364話 明るいニュース

最近はずいぶん暗いニュースよりなかった。東東新聞の社会部では、デスクが、記者に命じていた。「ちょっと、街へ出て、何か明るいニュースをスクープしてこい。紙面が暗くていけない。どんな小さなニュースでもいいから、心温まるやつを、夕刊の一面トップで取り上げようじゃないか」

取材に走らせられたのは春に新聞社に入社したばかりの一年生の風晴沙智子だった。追い立てられるように、カメラとボイスメモを手に社を出た。さて、困った。

スクープだなんて、そこいらにゴロゴロ転がっているわけもない。沙智子は、デパートの前で焼き芋を買って、ベンチに座って食べようとした。焼き芋屋のおじさんに訊いてみた。

「ねえ、おじさん、何か明るいニュースないかしら」

「明るいニュースねえ……。そうだなあ、うちの舞子が六子を産んだよ」

「ええ！ 六子ですか」沙智子は興奮して、さっそくケイタイでデスクに電話していた。一六子が産まれたそうです。焼き芋屋のおじさんの家で。

「なんだと？ よく確かめろ。猫じゃねえのか。」

沙智子は慌てていた。

「ねえ、おじさん、その舞子さんておじさんとこの……」

「うん、うちの猫だ」

(やっぱし) がっかりして、沙智子はまたぶらぶらと街を物欲しそうな目で歩いていた。

古本屋の前を通りかかった。たまに資料なんかないと寄る店だった。店主が店頭で埃だらけの本をはたいていた。

「おじさん、何か明るいニュースないかなあ」

「おやおや、取材かい。いまどき明るいニュースなんてないよな。あつ、これなんかどうだい。売上が悪くて、おじさんの頭が円形脱毛症になっちゃって、ほら、うちのかあちゃんに直径を測ってもらったら、四・五センチもある。これが、まただんだんと大きくなるんだな。面白いからと、かあちゃんのやつな、禿の成長記録を毎日付けている」

(あああ、これじゃだめだ) 面白い話なんてその程度でしかない。

世の中はどうひっくり返してもいい話なんかこれっぽつちもない。不況で、倒産、失業、それに増税、湾岸戦争で石油ショック、あちこちで戦争の準備がなされ、いつ何があるか判らない。暗いニュースはいくらでもあるが、世間があまりに暗すぎるから、逆に飽き飽きしてニュースにならない。だからデスクは明るいニュースを探してこいと号令をかけたのだ。

沙智子は、街中がもろに不景気風を受けているから、田舎の方が探しやすいかもしれないと、電車に乗って村々を回ることにした。都会はホームレスが溢れ、犯罪も多く、悲惨な事件ばかり

があるから、のんびりした農村のほうが、いい話がありそうである。沙智子は久々に田舎道を歩いていた。二月とはいっても立春も過ぎ、梅も咲き、春はもう来ていた。ぽかぽかした陽気に眠くなってくる。縁側でおばあちゃんがひとり犬の毛を梳いている。

「おばあちゃん、東東新聞のものですが、何か明るいニュースがありませんか」

おばあちゃんは眼鏡越しに沙智子を見ると、待っていたとばかりに立ち上がった。

「おおありだよ。まあ、こちらへ来てごらんなさい」

と、沙智子を裏庭に案内する。庭のまんなかに入った沙智子はすっかりお伽の国に迷いこんだようだった。庭木の桜やつつじが満開だった。いくら陽気だとは云っても早すぎる。狂い咲きなら判るが、この辺りの花という花がいまを盛りに咲いている。早速、沙智子はカメラを向けた。

「すごい、これは明るいニュースになるわ」

すると、おばあちゃんは首を傾げて云った。

「そうかね、わたしは何か悪い予兆でないかと思うよ。花が急いで咲くというのはあまりよくない」

何気なくおばあちゃんは空を仰いで、空高く飛んでゆく光るものを指さしていた。

「あれま、飛行機にしてはおかしいぞ」

沙智子も見上げて、もの凄い速さで、東京の方角へと飛び去る謎の飛行物体を追っていた。すると、まもなく、東京の方角でこの世のものと思えない光が膨らんでゆくのが見えた。眩しかった。世界が急に明るくなったようだ。沙智子は花のことは忘れ、夢中で不思議な光をカメラで撮った。

「これは、綺麗だわ。デジカメで撮った画像を早速、モバイルで送信しようとした。ケイタイで、本社のデスクに連絡しようとした。不思議な発光体を目撃したこと。それは、いままで見たこともない美しい光だったことなどの報告だった。

ところが、何度電話を入れてもケイタイは繋がらなかった。

「おかしいな、さっきまで繋がっていたのに」

と、沙智子の体を突風が襲った。春一番にしては生ぬるい感じがした。

第365話 骨肉

親を殺したいと思ったことはありますか。わたしはあるのです。尊属殺人はいまも江戸の昔も重罪です。親殺しを安楽死と重ね合わせた鴟外の高瀬舟という小説があります。安楽死ならともかくも、親であるがゆえ許せない感情というものが、人間は誰しも持ち合わせているのではないのでしょうか。ひとつ屋根の下に共に暮らすということは、毎日、否が応でも顔をつきあわせなければなりません。太古の昔から、親が子を子が親を殺すということが如何に多かったことでしょうか。それを戒め厳禁するために重罰としたのではないのでしょうか。夫婦でも、憎みあい、喧嘩が絶えないのに、血が繋がった親子というものはもっと残酷で熾烈な憎悪が渦巻いているのです。勿論、孝行という情もその反面あるのですが、すべてが孝といういい息子娘を演じるわけには

ゆきません。

わたしの父親は米寿を来年迎えます。保守派の地方の政治家を長くやって引退してから久しく党にも顔を出しておりませんでした。高等小学校を卒業してから、上京して働き、一攫千金を狙って満州へと渡っていった山付けが昔からありました。母親は八十を過ぎて、豊饒として、良家の子女よろしく、いつも毅然として家の中を姑として取り仕切っておりました。何かあると、わが家系は南部藩の家老の士族として、明治天皇の女官も勤めた家柄ですと時代錯誤なことを平気で云います。両親ともに家の中では存在感というより、威圧感さえあり、老いてなおも壮健で、多少の惚けがありますが、その人間の持っている嫌な面だけが、次第に突出してくるものであります。

父は頑固一徹の人でありましたが、その性格が融通の利かない独裁者の面を見せます。母はなんにでも気が付き、口うるさく一日小言です。ですから、嫁は耐えられず逃げ出しました。わたしは五十をとうに過ぎましたが、商売は思わしくなく、親に借金を作った経緯もあり弱みを握られて、親には口ごたえができませんでした。いつも、重苦しい空気がこの家の中には流れておりました。

わたしはずっとお手伝いさんのいた家なので、ばついちになってからは、何かと仕事と家事も大変なので、縁あって再婚することとなりましたが、この家の空気に触れて、二度目の嫁も萎縮しておりました。自分の部屋にいつも閉じこもって、両親とはあまり顔を合わせないという毎日が続きます。わたしも親子でありながら、あまり口を利きたくありません。顔を合わせると、こいつは何を考えているんだというような睨みつける視線がいつも送られてきます。父親と息子はライバルにもなり、いつか敵対するのはあまりにも似ている面があったからでしょうが、わたしは親が偉大な分、いつもどこかで遠慮して生きてきました。どこへ行っても、お宅のお父様はと紋切り型に云われます。親の七光りということもあって、わたしの人生は父に引きずられて実に主体性のないものでした。ただ、両親の誤算は、不況というものが戦後、経験したことのない泥沼になったことでした。それで、我が家は次第に借金まみれで没落してゆきました。

母は嫁と合わないのです。それは、前妻も同じでしたが、わたしは、母のような女女したねちくちと人の情に絡んでくると思うと、がらりと冷たくあしらう性格が嫌いでもありませんでした。世の中には、母と同じ像を結婚相手に求めるものだと云いますが、わたしの場合は全くの逆で、じゃじゃ馬で気取ったところがなく、からりとした男のような性格の人が好きでしたから、いつも連れてくる女は母の嫌いなタイプでした。

「あなたの連れてくる人はみんな同じではないですか。どうしてもっと上品でつつましい方を選ばないの」と、母は当てつけがましく嫁に聞こえるように云います。人には傷つくことを平気で云うくせに、自分が云われればいつまでも恨んでいました。

我が家の家計が苦しいので、嫁もパートで働きに出ていました。かつての代議士の家ではありませんから、食費も生活のレベルに合わせて質素儉約しなければならないのに、母はいまだ代議士夫人を気取り、嫁の作る料理に、こんなものという云い方をします。そして、自分たちだけで食べる高価な食べ物を買ってきて、二人で食べているのです。いまは、年金もたんまり貰っていましたから、わたしたち夫婦より収入もよく、貯め込んでいるようでした。わたしは、ちよくち

よく生活費まで親に出してもらい、すっかり養われているようなものでした。家族でまだ年老いた親の脛を嚙っている。だから余計に頭が上がりません。

ある日、家に帰ると明かりが点いていませんでした。不審に思い、ドアを開けようとする、玄関にも鍵がかかっているのです。みんな外出したのかなと、いつもはそんなことがないので、鍵を開けて入りますと、居間に誰がいるではありませんか。部屋は電灯も点けないままでした。スイッチを入れて、わたしは驚きました。血まみれの嫁がべたりと座っていたからです。それだけではありません。居間に父と母が庖丁で胸を刺されて倒れていたのです。やったと思いました。この家はいつ爆発するかと、緊張状態が続いていたからです。子供のこと、家事のこと、いろいろと嫁姑はぶつかります。父までが、あれこれと口うるさく命令するのに、嫁が耐えられなかったのだと思います。とうとう、惨劇は起こるべくして起こったのです。

呆然と座り込んでいる嫁をわたしは立たせました。すると、気が付いたように震えながら号泣するのです。わたしはいつも両親を殺す幻想を見ていたのは、実はわたしではなく、嫁が手を下す予感だったのです。わたしは、冷静になろうと回る頭の中を整理しようと務めていました。ともかく、なんとかしなければなりません。咄嗟に、証拠隠滅という言葉が出てきました。云ってみれば嫁も被害者みたいなものでした。

わたしは、風呂場に死体を引きずってゆきました。居間の血糊の後は綺麗に掃除もしました。嫁は寝室で、ブランデーを飲ませて眠らせました。あとは始末はわたしがひとりでやりました。

両親のいない家というのは、また何か抜けたものがあり、子供たちはみな家を出ていましたから、夫婦二人きりになって、言葉を交わすこともなく、食卓についていました。三日くらいして、嫁はようやく食べ物が口に入るようになりました。それまでは覓されて寝込んでおりました。わたしは嫁のために食事の支度までしなければなりません。嫁は、両親の死体のことについてはひと言も触れません。思い出したくもないのでしょうか。

夫婦、向かい合って肉鍋を食べました。わたしは酒を無理矢理呷りました。それでも酔えない辛さが先に立ちます。嫁は云いました。

「あなた、このお肉、なんだか堅いわ。お出汁はおいしいけど。なんの出汁なの？」

わたしは終始無言で、ひたすら噛みしめながら、食べていました。時折、涙ぐんだりして。おかしい食事でした。

両親は死んでも、わたしたちを食べさせておりました。

第366話 笑う病院

末期癌の患者のためにホスピスが各地に造られつつあるが、好本病院はちょっと違った。

日土井男は血圧が上がって入院していた。ストレスから来るのか、原因不明だった。腎臓も検査したが異常はない。精神的なものであれば、一般の病院では治療の施しようがない。そこで、西洋医学でも東洋医学でも手に負えない難病奇病、末期癌患者など、どこの病院からも見放された患者が、この好本病院へと搬送されてくる。

日土井男は仕事が忙しく、かりかりした根を詰めたハードな年末年始についにダウンした。もともと責任感があって、ワーカホリックなところがあるから、いつまでも若いと思っていた自分に無理が祟る。

紹介状を持って、井男はふらふらと好本病院に来た。玄関から入るなり、大爆笑が起こった。何事かと思う。福笑いのように、鼻が曲がり、眉毛がへんてこな看護婦が廊下を歩いてくる。その後ろから、禿のかつらをして、ももひきにらくだのシャツの腹巻をした医者がひょこひょこ歩いてくる。井男もあまりにばかっているからつい誘われて笑っていた。笑うということもここ何ヶ月もなかった。大笑いして、何かさっぱりした。ここの病院は、みんな巫山戯ていた。天井からいろんな干物やら、バナナやらが吊り下げていたり、マンガが大きく天井に描かれていたりする。待合室にいる間、みんなくすくすと笑っている。四コママンガでもいがらしみきおなどの吹き出すものが置いてある。それを見て笑っている。

幼稚園児のような格好で、顔に落書きしたアホ丸出しの看護婦が、井男の名前を呼んだ。どこもここもすっかりマンガだ。みんな次に何が起こるかとわくわくしている目をしていて。とても、ひと月で死ぬような患者には見えない。みんなどこか明るくて、血色もいい。

井男が、診察室に入ると、ダブダブの白衣を着た小さな子供が椅子に座っていた。口に付け髭をしているから医者のもりなのだ。

「どこが悪いんですか」

「どこが悪いかわからないから来たんです。ところで、本当のお医者さんはいないんですか」

「そうですね、ここではお医者がいらない人ばかりだから、ぼくが当番で出ているんです」

「そうですか、ぼくは何年生ですか」

「はい、小学校の二年生です」

井男は溜息をついた。とてもまともに話もできない。

その病院には、医薬品というものが一切なかった。注射も薬も検査のための医療機器がまるでない。見たところ病院らしくない。随所にテレビが置いてあるが、それはテレビ番組を放送しているのではなかった。落語が漫才、お笑い番組のビデオを見せていた。廊下の壁には、ひと口噺や、外国のコントがそこかしこ張り出されていて、廊下を歩く患者が見て笑っていた。演芸場もあり、日替わりで、落語、漫才が行われていた。あちこちで絶えず笑い声がする。みんなにこにこ歩いている。苦しそうな顔や、青白いままにも死にそうな顔の患者はひとりもない。

井男は入院することになった。病室を案内された。みんなにやにや笑っている。

歓迎のクラッカーが鳴った。天井から折り紙のガーランド、万国旗。ここは幼稚園か。

治療は全くしない。一日何度も笑うだけでいい。それでも笑わぬしぶとい患者、真面目な深刻な患者には、仕方がないから治療を施す。治療室から、「やめて、やめてくれ、いひひひひ、苦しい、あはははは」と、患者の笑い声が漏れてくる。

「何をしていますんですか、治療というのは」

井男は看護婦に訊いた。

「あら、ご覧になりますか」と、治療室に入れてくれた。そこでは、ベッドに縛られた患者が、寄ってたかって、看護婦と医師にねこじゃらしでくすぐられたり、全身のこそばゆいところをくすぐられているのだ。無理矢理笑わせられる。拷問に近い。そうまでしてどうして笑わせるんだ

ろう。井男は疑問に思って、看護婦に訊いた。

「うちの医療は笑うということで、医学では解明できなかった病気を治しているんですよ。もう、助からないと医者に見放された末期癌の患者さんが、すでに九割方完治して、退院されています。病気の大方は精神的なものから来るという思想ですね。笑いは最良の治療薬なんです」と、話をしているうちに死亡した患者が担架で運び出される。

「やはり、亡くなる方もいるんですね」井男がしんみりと云うと、

「あの方は、笑い過ぎて亡くなったんです。いままで、かなりの方が笑い過ぎて……。笑いが止まらなくなったら、注意してください。とくに、床を転がって笑うときは、おなかによくありませんし。でも、死に顔は皆さん笑って死んでいますから、幸せの絶頂で逝かれたという感じでね……」

この病院には規則もあった。仕事は一切持ち込んではならない。考えてもならない。人の苦、家族の苦、金の苦、そんな娑婆の煩悩を考えてもいけない。気難しいことはしないさせない。本を読んでもいけない。頭の中を空っぽにしてひたすらばかげたことに笑うだけだ。笑うことで病根は収縮していった。どんな難病も、笑うことで快方に向かっていった。

一ただいまから、病院長の特出しショーがあります。演芸場へお集まりください。

院内のアナウンスが流れた。

「日土さんも行かれたほうがいいですよ。院長以下、いい年の先生方の腹踊りが見れますから」暗い不況の街中で、ここだけは明るかった。いつも笑いが絶えなかった。

第367話 アニメ系

若い人たちに、どんな仕事がしたいかと訊くと、大概はゲーム・クリエイターか、声優かアニメ制作だ。どれもマンガの世界なのだが、あまりに酷い世の中になったから、若い人たちはより虚構の世界に入りたがっているのか。

伊藤はるなさんの家では、仲間うちでは有名なアニメ一家だった。ただ、世間にはとても恥ずかしくて云えないから、あまり家の中に客を上げることはない。外観は普通の家なのだが、一步ドアを開けて玄関から入ると、そこは別世界だった。いきなり壁に巨大なアニメのポスター、天井からはタペストリー、どっかーんと等身大のビニール人形が置いてある。居間も階段もトイレの中まで、アニメキャラのポスター、グッズで埋め尽くされている。

娘の遥香は普通高校二年生。学校の帰りには必ずアニメ亭というアニメ専門店で寄ってくる。そこはアニメファンの溜まり場になっていた。いまは、だんだんと浸透して、アニメ系も市民権を得たが、以前は、アニメ系と気持ち悪がられ、差別までされていた。それで、みんなこそこそと集まっていた。いまはそれが普通の若者のスタイル、文化に定着するようになって、誰も白い眼では見ない。

アニメ亭は、コミックの同人誌を扱い、ビデオ、DVD、CDもすべてアニメものばかり売っている。他に、ポスターからトレカ、ちょっと前のLD、レアもののテレカ、ぬいぐるみからペプシコーラの栓、ガシャポンの景品まで、ごちゃごちゃと売っている。無縁な人が入ると、「こ、ここは、一体な、何なのだ」と、眩暈がしてくるほどの華やかなガラクタに見えるだろう。

遥香も別に買うお金がないのだけど、コミックや雑誌を立ち読みしたり、店に置いている落書き帳のノートに、マンガを描いたりして、なんとなく浸っている。そこに集まる若い人だけが、自分と同化できると仲間意識を持っていた。高校生でも、部活でスポーツに励んでいる体育会系がいるし、受験でガリ勉の進学組がいる。アニメ系は非現実的で、どちらかというとも夢見る少年少女の現実逃避型なのだ。遥香も学校や家にいるより、このアニメ亭にいるほうが気が安らぐ。ケイタイのアドレスを教えあったり、ここでいろんな友達ができた。

遥香の将来の夢はマンガ家になること。いまも、同じ高校の仲間四人で同人誌を作っている。遥香の描く女の子は、いつも目が極端に大きい。目だけで顔全体の三割は取っている。しかも鼻がない。鼻穴もないから、呼吸は苦しいだろう。口を開けても歯がない。食べる時困るだろう。いつか、つきあっていたサッカー一部の彼に見せたら、そんなことを云った。デフォルメしているのに、判らないやつには判らないのだ。その彼とも不理解が祟り、別れた。やはりアニメ系は同じ者同志の方がいい。

遥香が家に帰ると、母親のはるなが玄関まで出てきた。

「じゃーん、どうだ、素敵だろう」と、遥香の知らないキャラクターのコスプレをしていた。はるなは自分でコスチュームを作るのが得意だった。

「なあに、お母さん、その格好は」

遥香が呆れて云った。

「あらら、知らないの手塚治虫のりぼんの騎士の格好じゃないの」

「それって、戦前のマンガ？ いい年してばっかじゃないの」

はるなもマンガ大好き人間で、昔読んだマンガはみんな集めて持っていた。ベルバラも、アタック№1も、サリーちゃんも。

「ただいま」と、続けて父親の圭太郎が帰ってきた。普段は国家公務員だが、家に帰るとアニメ系に変身する。

「また、あなた、自分だけマンガ本を買ってきて」

圭太郎の手には書店の袋がぶら下がっている。

「マンガラケからとうとう買ったぞ。ぼくら、日の丸、少年の美本、付録付だ。昭和三十二年のものが欲しかった。おれが幼稚園のときに読んだものが売っていた。高かったんだぞ」

圭太郎は嬉しそうに、幼児にタイムスリップしようとしていた。

「見ろ、鉄腕アトムに鉄人28号だ。プロマイドに、メガネまでおまけについている」

圭太郎はかなり興奮していた。四十数年ぶりに、自分が愛読していたマンガの月刊雑誌が、そっくりそのまま売られていたからだ。圭太郎の書斎には、ずらりと当時の古本から、復刻本まで昔懐かしいマンガが並んでいる。圭太郎の時代からすでにマンガブームで、童話よりマンガを見て育った。ものごころついたときからマンガだから、すりこみがなされて、本を読む習慣という

ものがない。

奥の部屋からじいさんが出てきた。

「なんだ、なんだ、騒がしいのう」

みんなじいさんの格好を見て笑った。

「何よ、その腰につけた南国の原住民スタイルは一」

「知らんのか、冒険ダン吉だ」

じいさんまですっかりアニメ系だった。じいさんの部屋にもマンガの貴重なコレクションがずらりと並んでいる。のらくろシリーズはすべて揃っている。それも、神保町の古書街を探し回ったり、古書目録で戦前の古いマンガを集めたから、これは貴重なものだった。

一家揃っての夕食の時間も、テレビでは借りてきたアニメのビデオを見ていた。居間には、各自が毎月毎週とっているマンガ雑誌が山になっている。日曜ともなると朝から晩までマンガ、マンガだ。活字離れどころか、これでは本を読む習慣も時間もあるわけがない。伊藤家だけの特殊な現象ではなかった。町内すべてが、ほぼ、アニメ中毒に罹っているらしかった。あちこちから、あはははは、ほほほほ、ふふふふと不気味な笑い声が聞こえる。

その町内を、ガリガリに痩せ衰えた男がふらふらと歩いていた。身なりは粗末なものだった。手には辞書をしっかりと携えていたが、無精ヒゲに髪はボウボウ。もう、何日も飯を喰っていない様子だった。

その男がぼったりと行き倒れた。通報で救急車が走ってきた。みんな窓から顔を出して外を見ていた。はるなさんも何事かと野次馬根性で聴いてきた。

「また、小説家が行き倒れだって。何でも昔、芥川賞をとった人だったらしいわ。小説家先生も喰えないから大変ね。これで何人餓死したのかしら」

世のアニメブームは当分続きそうである。

第368話 ばなし

どうしてこんな娘ができたのだろう。だらしのないのは誰に似たのだろうか。父親は、可愛いわが娘ながら唯一の欠点が許せない。漱石の猫も夫人が後ろをついて歩き、いちいち襖を閉めて歩く。しまり屋の母親も娘の後ろをついて歩き、いちいち、ドアを閉め、電灯を消し、水道の蛇口を閉めて歩く。中学の娘が学校へ行った後は必ず点検することにしていた。ストーブは大丈夫か、忘れ物はないか。後で、きまって忘れ物の電話がかかってくる。トレパン忘れた、弁当忘れたは日常茶飯事。これで嫁に行ったらどうなるのだろう。きっちりした綺麗好きの男性と結婚すれば割れ鍋に綴じ蓋。

なんでもやりっぱなしなので、我が家では陰で娘のことを「ばなし」と呼んでいた。ばなしの原因はいろいろある。性格が一番だ。注意力散漫、あれこれと手をつけるが前のやりかけのことを忘れてしまうから「ばなし」になる。娘を観察していれば、あれもしたい、これもしたいと欲

が多すぎる。流行やブランドものにはすぐ飛び付くが、飽きっぽい。小さいときからそうだから、三つ子の魂で、これは生涯直らないかもしれない。

だが、娘を非難することはできないほど、父親のわたしも「ぱなし」であった。それは遺伝なのだ。

この前も会社でこんなことがあった。わたしは輸入ブランド品の総輸入代理店に勤めていたが、営業だから毎日商談をしている。アポをとって時間指定で商談を進めるのが普通なのだが、たまに飛び込み来社があったりする。会社には、商談ルームがサロンのようにいくつかあった。他に、ビルの地階にテナントで入っている喫茶店もあった。

某デパートの仕入部と商談中に、電話が入り、婦人服チェーン店のバイヤーが来ているということで、玄関まで迎えに出た。新作のショールームを案内しているところに、ケイタイが鳴り、外国からデザイナーがもうじきに会社に着くということで、また玄関に迎えに出た。連絡のあったのは空港まで迎えに出た部下からだった。イタリアのデザイナーを本社のラウンジで接待しているところに、また来客。それが某ビッグストアの社長だったから、粗相のないようにと、デザイナーのことはすっかり忘れて、本社内を案内していた。たまたま、その日はうちの重役たちは海外出張で不在だったから、わたしが接待係になった。突然来社したのは、近くまで来たということで、お構いなくとはいうが、うちの大口取引先だからそうはいかない。ショールームを案内しているときに、また電話だ。不良品が大量に発生して、クレームと返品が来ているという。わざわざ、銀座のアパレル専門店から会社に苦情のため乗り込んできた。大変だ。トップがいないときに限ってこれだ。わたしは、客をほったらかしにしたまま、玄関に出て、平身低頭謝罪して、いままでの客のことはどこかへふっ飛んでいた。

すると、あちこちの部所から内線電話がかかってくる。

「先ほどから、ずっとお客様がお待ちですが、どうなされますか」

「部長、どうしたんですか、お客様がお怒りになっています。もう一時間も待たせたって」

わたしは、すべてを思い出していた。大変だ。おたおたして、各フロアを走り回っていたが、すでに收拾がつかなくなっていた。

「また始まったわ。部長の『ぱなし』」と、女子社員の陰口まであちこちから聞こえていた。

またやってしまった。わたしが酷い自己嫌悪に陥っているところへ、愛人から電話が入った。一ねえ、今夜、待っているから。最近、忙しいって顔も出さないから。

こんなときは、女だ。慰めてもらいたい。わたしは、たまにレストランで食事しようと、愛人をレストラン・スクランブルで待ち合わせた。電話を切るとまた電話がかかってくる。いつも行くクラブのホステスからだ。

一部長さん、お願い、今日だけ付き合ってくれないこと。同伴出勤のノルマがあるのよ。いつものレストランで待っているから。

ホステスも不況で客足がさっぱりだから大変だ。クラブのナンバーワンだから、たまに食事くらい奢って点を取っておいても悪くはない。

さて、退社しようとする、内線電話だ。予算達成したら、金曜日にはレストランで食事を奢ってくれるって、部長が云ったんですよ、と、部下の女子社員三人が待っているという。これは

逃げられない。裏口からと思ったが、これは先月からの約束だ。破るわけにはいかない。まあ、軽くセットメニューでごまかすか。わたしは、玄関で待つように云った。

そうして、ようやく事務室から出ようとしたら、ケイタイに電話だ。金曜日は何かと忙しい。妻からだった。

「なんだ。今夜はちと商談があって遅くなるぞ。」

「何ですって？ あなた、忘れていたわけじゃないでしょう。今日は何の日だと思っているの？」

「先週からあなたが云っていたことですからね。結婚記念日よ。今日で何年だと思っているの。」

「ええと、数えたことないな。」

「ほらね、そんな大事なことじゃないのよね、あなたにとっては。今日で二十年になるの。あなたの云っていたレストランで待っていますからね。すぐにいらっしゃいよ。」

すっかりと忘れていた。急いで玄関に出ると、女子社員たちが待ちかまえていた。

「部長さん、どこへ逃げるつもりかしら。さあ、両側を抑えて、レストランまで連行しましょう」

若い社員たちに腕を組まれると悪い気はしない。

「よし、行こう」わたしは妻のことも忘れていた。

タクシーで、レストラン・スクランブルに入ったとき、わたしは大変なことを一時に思い出していた。わたしが、レストランの中央に立ったとき、わたしをみつめて、これまた一斉に女たちが立ち上がったのだ。

第369話 魔の店

二〇××年。新種のウイルスが発生した。強い感染力を持ち、罹患すると、百パーセントの人間が一週間以内に死亡するというもので、対抗する抗生物質の開発が間に合わないほど、急激に全世界に蔓延していった。脳細胞だけを破壊するといういままでにないウイルスで、高熱にうなされて、日本脳炎に似た症状で、死んでゆくという恐ろしい病気だった。

遺伝子組み替え技術を悪用してのテロの仕業ではないかとか、宇宙から飛んできた地上には存在しない微生物ではないか、地球侵略の目的で異星人がバラ撒いたのではないかとか、諸説紛々としてデマも飛んだ。またアフリカから旅行者が持ち込んでいるとか、その原因も感染ルートも定かではないのに、いろんな学者がいい加減な推測をするから、蚊に刺されないような全身を覆う宇宙服のような服装が流行したり、水道からも感染するという噂が流れて、ミネラルウォーターがやたら売れたりした。

いつの時代にも伝染病は猛威を振るうときがあり、それが人口調節の役目を果たしていた。如何に医学が進歩しても、また新たなウイルスが見つかるなど、自然界は人間との生存競争にまでなっていた。結核菌も昔よりより強力なやつが、最近また増えつつあるという。相手も生物だから、抗体に対抗して、また形を変えて、生きる道を探っているのだ。

ただ、いままでの大概のウイルスは、その特効薬がみつかり、封じ込めることができていた。

今度の新種は全く解明されていない。それがために、その死に至る伝染病は、あっというまに全世界を呑み込んでいった。アメリカでもヨーロッパでも人口の半数がその正体不明の病気で死んだ。村や町ごと全滅するのは珍しくなかった。一家絶滅して、空き家が続出した。葬式も出せない。墓も満員、あまりに死ぬ人が多いので、火葬場は向こう三カ月は予約でいっぱいだ。それでも、仏さんをそのままにしておく、また病原菌の巣になってしまう。早く焼却しなければならないので、みんな浜や野に薪を積んで火葬した。

勿論のこと、病院はどこも満杯で、廊下まで直に蒲団を敷いているほどだ。まるで、戦時中のような様相を呈してきていた。人々は、家のドアや窓に目張りをして、ウイルスの侵入を防いだりしていた。外になるべく出ないようにしていた。隣の一家がみんな死に絶えたというと、家ごと燃やした。

各国の政府や国連では、医師や学者による研究チームを作り、競い合って、発生のメカニズムとウイルスの弱点を探そうと日夜、研究に励んでいたが、現代に生息するあらゆる微生物ともつかない、全く異質なものであった。

すべての商業活動、学校、交通、通信、そういった日常の活動は停止したままだった。人々は怖がって外出しなくなった。外は人も歩いていない。車も走っていない。

研究チームは、罹患した患者たちの類型と分析を急いだ。食生活、体質、生活パターン、習慣、環境……。あらゆる共通点を見つけ出そうとしたが、共通項目は抽出できないでいた。ただ、イギリスはロンドンのあるチームの報告に、面白いデータが報告されていた。新種のウイルスに絶対に罹らない人々が存在するというデータがあった。それは、読書家という共通点が挙げられていた。しかも、みな一様にある店に出入りしているというのだ。各国の病気に罹患しない人々の行動パターンを見ても類似していた。その店というのは古本屋だった。調べてゆくうちに、ウイルスは過去からやってきたものと判明した。そして、人間の無知に寄生するのだ。そのウイルスが嫌うのは古本屋に漂う、黴くさい一種独特の匂いの成分であることが判明したのだ。

生き残った人々は、北村古本店に集まっていた。本の好きな常連客ばかりだが、家に帰るのが怖いので、みんな、店に住みついていて。定年退職した老人ばかりだったが、自分の家ですでに患者が出始めていた。いま、家に戻ると自分も感染して、一週間以内に死ぬのだ。みんな、古本屋にいと、安全だということが、本能的に判っていた。銘々蒲団まで持ってきて、本棚の間の通路に寝ていた。

「あれは、狂牛病の人間版と同じだ。頭の中がスポンジ状態になるそうさ」

「嫌だねえ、心臓病で死ぬのならともかく、自分の思考が犯されて、理性から先に死ぬというのは耐え難いものだ」

老人たちは口々に病気の怖さを語っていた。確かに、体が壊れてゆくのはいままでの病気だから判るが、新種の伝染病は、知性から破壊されてゆく。自分がなくなる怖さというのは計り知れないものがある。

食糧と水は数ヶ月分は確保して、本屋の奥の倉庫に積んであった。店主の北村は、やはり家族を病気で失って、たまたま、自分だけが病気に罹らなかったのを不思議に思っていた。

「どうしてだろうねえ、ここにいると病気の心配がないというのは」

「わしらは、みんな本が好きだから、本さえあれば、ここにじっとしていてもいいし、外に出

なかったっていい。どうじゃろ、暇潰しに、みんなでデカメロンでもやろうかい」

「なんだね、そのデカメロン」

「ひとりひとりが、思い出話でもいいし、作り話でもいい。下界の怖さを忘れるために、何か物語を聞かせてもらおうということだな」

「それはいいアイデアだ。北村さんからいかがですか」

店主の北村は別のことを考えていた。ここにいる連中と家族のように一緒に暮らして、これから一生を店から出られないのだろうか。まるで、本の檻の中の囚人だ。そうまでして生きていたか。家族と一緒に死にたかった。北村は、何故、自分だけが助かったのか運命を呪っていた。一この放送をお聞きのみなさん、いますぐに近くの古本屋に行ってください。その匂いを嗅ぐことで助かります。

ラジオで臨時ニュースをやっていた。

「なんだって、古本屋がどうのと云っていたな」老人たちは、ラジオのボリュームを上げて耳を澄ましていた。

すると、いきなり、ドアが開いて、どっと群衆が雪崩れ込んだ。いままで、客など入ったこともない暇な、世に見捨てられていた古本屋が急に世間の脚光を浴びるようになった。老人たちは驚いて、隅に隠れた。どンドンと街の人が入ってくる。

「押さないでください」

外では警官が整理に当たっているようで、盛んにマイクで叫んでいた。押すな、押すなと詰めかけて、数分もしないうちに、店の中は人でいっぱいになった。それでも、満員電車のように、後ろから押して、さらに詰めてくる。老人たちは押されて悲鳴を上げていた。北村は本棚の上へ上がって難を逃れていた。いまだかつて、こんなに沢山の客が入ったことはない。これは夢ではないだろうな。北村は頬を抓っていた。すると痛くなかった。

「な、なんだって、痛くない？」

電話の音で北村は目が覚めていた。客のいない暇な古本屋の帳場で、店主は涎を垂らして寝ていたのを起こされた。

「なんだ、夢だったのか」

願望が夢になる。

第370話 わたしは誰だ

ある朝、目が覚めたら、自分がとんでもないところにいたという経験はおありだろうか。

老人が目覚めたとき、一夜にして世界が変わっていた。見たこともない部屋のやはり自分の蒲団でない、見たこともない柄の蒲団に寝ていた。

一ここはどこだろう。

どう考えても、思い出せないでいた。それよりも、もっと重大なことに老人は気付いた。

「わたしは誰なんだ。わたしの名前は……。」

酒を呑んだり、ひどい二日酔いのときなど、また薬の副作用で多少、記憶が白くなるときはある。だが、老人は酔ってはいなかったし、完全に醒めていた。どうしたことだろう。自分の名前が思い出せない。そればかりではない。昨日、おととい、十日前、一年前の記憶がまるでないことに気が付いた。ずっと遡ると、幼少の頃の記憶だけはある。七十年の生涯のうち、その大半が消えていた。

老人は恐る恐る起き出した。タンスを開けたが、背広なども自分のものではない。鏡に自分の顔を映してみた。それは見知らぬ顔だった。

「おまえは何者だ。」

老人は自分の虚像に向かって問いかけていた。部屋の中も見たことのない部屋だ。急に自分が幽閉されているのではないかと、恐怖を感じた。しかも、自分の記憶が何者かによって完全に消されていたと思った。きっと、薬物かなにかで、自分の過去が消去されているというのは、見えない大きな力が関与しているような気がした。

「わたしは、何か、知ってはいけない重大な秘密を知ってしまったに違いない。それで、当局によって記憶だけが消されたに違いない。」

老人は自分の置かれている状況を咄嗟にそう推測していた。

「あら、おじいちゃん、起きましたの」

部屋に襖を開けて美しい女性が入ってきた。年の頃は三十代後半か。髪をアップにして澆刺とした顔で笑っていた。

「おまえは誰だ。どうしてわたしをここに閉じこめておく」

すると、その女は意味ありげな笑いを僣ばせて、

「はいはい、嫁の顔も忘れたんですか。朝御飯できてますからね」

なんと、図々しくも嫁に成りすましていると、老人は思った。あの笑いは何もかも知っている笑いのようだった。

老人は恐る恐る居間に入ると、

「おはよう」と、見知らぬ子供が声をかけた。中年の男も新聞を見ている振りをしながら、にこりと笑って顔を見ていた。

「な、何なんだ。みんな、グルになって家族に成りすまして。わたしをはめる気にいるな。」

老人は懐疑が先に立った。さも、昔からここに一緒に暮らしているように装っている。たいした演技者たちだと、老人はみんなと距離を置いて睨んでいた。

「おじいちゃん、お顔洗って御飯にしましょう」

老人はむっとして応えた。

「気安く話しかけるな。おまえたちは、一体、何者なんだ。誰に頼まれて、わたしをここに閉じこめて監視しているんだ」

高校生の少年がぶっと吹き出した。みんな一斉に大笑いした。それが、老人には悪魔の笑いに聞こえた。老人はかっとなって、中年の男に飛びかかった。

「わたしの記憶を返せ、どうして消したんだ。何の目的があつて。おまえらはどこの国に雇われているんだ。家族の振りをしやがって」

とっくみあいになったら、笑いは青ざめて、みんな止めに入った。強引に引き離されて、女にきつい口調で窘められて、老人は泣き出した。

「おじいちゃん、何を訳の分からないことを云っているんですか」

老人は、さっきの蒲団の敷いた部屋に戻ると、タンスから誰の背広か判らないが、着換えると、玄関を探して靴も探した。

「どこへ行くの。あなた、大変だわ。電話して、やはり呼びましょう」

老人はきっとして女の顔を睨んだ。

一やはり、本音を吐いたな。当局に連絡して、わたしを捕縛しに応援を要請したな。

老人は逃げた。捕まってたまるか。老人は走った。見覚えのない町だった。全く記憶にない。一わたしは、誰だ。ここはどこだ。

町の人々が、みんな意味ありげな笑いで老人を見ていた。中には追いかけてくる者もいる。口々に聞いたこともない男の名前を呼んでいる。みんな、仲間なのだ。自分を掴まえようとしている。ここは日本ではないような気がしていた。そのうち、サイレンが聞こえてきた。老人の後ろから、救急車が走ってくる。その後ろをあの女と中年の男が走ってくる。みんな、逃亡者を捕縛するために何者かに命令されているのだ。老人は逃げた。走った。だが、体力の限界だった。ばたりと路上に倒れた。車が止まり、中から白衣を着た二人組が降りてくると、老人を掴まえた。老人は最後の力を振り絞って暴れて抵抗していた。二人組は屈強の若者で、もの凄い力でタンカに老人を縛り付けた。車の中に、さっきの女と男も乗り込んだ。目がきらきらしている。ざまあみろと云った顔だった。老人は観念して目を閉じた。

老人は病室にいた。さっきの男と女が医者と話している。老人は鎮静剤の注射をされて眠っていた。

「いつからですか」

「そうですね、その兆候はありましたが、今朝から完全に自分の名前も顔も判らなくなりまして、暴れて、徘徊するようになりまして」

「突発性の老人性痴呆症でしょうが、手に負えないようでしたら施設に入れるよりありませんね」

老人問題は突然やってくる。

第371話 拒否

街中を蝸牛たちが歩いている。自分という殻を背負い、ケイタイのアンテナを立てて、見知らぬメルトモたちと交信している。

彼らの名前はバブルの子供。生まれたときは絶好調の好景気で、親たちは笑いが止まらなかった。教育という二字のためには出し惜しみをしない親たちは、子供たちになんでも買って与えた。あまやかせて育った、贅沢な子供たちが、いまは二十歳になっていた。生まれたときからマイコンはあった。ファミコンがそろそろ世に出たころだ。

その子供たちの将来への夢もバブルと共にはじけていた。親が零落して、それまでの贅沢三昧もできなくなっていた。どんどん落ちてきていた。毎年、前年を割ってきていた。去年より今年は悪く、今年より来年はもっと悪くなる。世の中はどんどん悪くなってゆくものと、子供のときから学習していた。お兄ちゃんたちを見ている、折角いい大学を出ても、就職先はまるでない。なんのために、塾へ通い、いい高校、いい大学と目指して進んできたか、まるで判らなくなってきた。そして、税金はやたら高くなり、将来は自分たちの年金もあてにはならない。払った分は返ってこない。貯金しても目減りする。たまたま、いい会社に就職できても、あしたには倒産、合併、リストラ。これではお先真っ暗だ。政治家はいい加減。自分たちのいいように掻き回し、負担をすべて弱いところに押しつける。とても選挙なんか行く気がしない。どの政治家も信用できない。

そんなバブルの子供たちが、世の中との接触を拒否した。彼らは、見ざる云わざる聞かざると、耳には音楽のヘッドホン、目はケイタイのネットの世界、無口で周囲を見ることも聞くこともしない。外を歩いている、目は常にケイタイへ、耳は好きな曲をリピートしているヘッドホンで塞いでいた。

家に帰っても、自分の部屋に閉じこもり、ノートパソコンに向かってインターネット。顔のない友達、名前の知らない相手とメールのやりとり、あるいは、テレビゲームに興じている。シューミレーションゲームでは仮想の歴史を歩いたり、ロールプレイングゲームでは主人公になって、幻想の国を旅したり、シューティングゲームではストレス解消、すべて、嘘の世界に没頭している。彼らに云わせれば、この嘘には罪がないが、外界のきたならしい嘘は悪意に満ち満ちて、吐き気がするほど子供騙しでばからしい。

政治も経済も戦争も飢餓もすべてが人為的で作為的、人間の愚かさに満ちている。それだから、彼らは新聞もニュースも見ない。政治には無関心。経済がどうなろうと、戦争があろうとなかろうと、一切が関係ない。世の中が虚構で、作り物の世界が本当なのだ。

日本もいよいよ行き詰まり、消費税をどんと二割まで上げた。すべての税金を二倍にして、年金支給は半額にした。それまで、仕方ないと大人しかった国民も、我慢の限界は越えていた。頭にきた市民は、暴動を起こした。公用車をひっくり返し、役所と議会に火を放った。暴徒は金持ちの家を襲い、銀行、サラ金へと雪崩れ込んだ。自衛隊の中の不穏分子が、結束してクーデターを起こした。いまがチャンスと隣の国が攻めてくる。内戦が、外からの攻撃も受けていた。ミサ

イルが頭上を飛び交う。砲弾があちこちで炸裂する。街は瓦礫の山となる。死屍累々と街角に肉片が転がっていた。もう、歯止めが利かなかった。殺人は平気でなされ、一揆がまいの打ち壊し、食糧を奪い合っただけの殺し合い。日本人の本性はこんなときに露呈する。もうすでに無政府状態。日本は戦場と化していた。

それでもバブルの子供たちは、弾の飛び交う街中を無視するようにケイタイでメールを打ちながら、耳にはヘッドホンでアイドルの歌を聴き、我関せずと歩いていた。彼らの生活パターンは変化がない。外的要因に左右されることはない。

腹が減ったから、母親に「なんかおやつないの」と、いつものおねだり。ミサイル攻撃で、隣の家からもらい火して、家が燃えているのに、そんなことにもお構いなし。母親どころか、家人はすでに非難していないのに、本人は逃げようとしめない。メラメラと燃える台所で、平然と冷蔵庫を開けて覗きこんでいる。

そうかと思うと、家族がバタバタと銃弾に倒れて、ひとり生き残った少年は、瓦礫の中でゲームボーイに熱中していた。「そこだ、それっ」と、ひとり興奮している。一日中、ゲームばかりやっているから、家がふっとんだのも知らないでいた。

ケイタイ馬鹿は、一日中、ケイタイでメールを打っていた。次々にメールが来なくなる。相手に電話しても通じない。メル友もあちこちで爆死していた。でも、気にすることはない。いくらでも仲間はあるのだ。毎日のように「メルトモニナ口」と、知らない相手からメールがくる。みんな夢中でケイタイにしがみついているから、戦車がやってこようが、飛行機が墜落しようが、そうたいした問題ではなかった。

戦争はやがて、両国にもものすごい数の犠牲者を出して沈静化した。その戦いには勝者も敗者もなかった。すでに戦う兵士も武器もなく、生きているものの影がないほどのダメージを互いに受けていた。街は建物らしい建物がない。すべて灰燼と化していたのだが、ごそごとその隙間で生き残っている者たちがいた。

「サチ、元気、生きてたあ、ノッコよ」と、ケイタイで話しているギャル。防空壕跡で、死体の中に埋もれて、尚もゲームボーイに興ずる少年。

「ちっくしょう、もう少しで四面をクリアするところだったのにな」

そして、ぶつぶつと、耳にヘッドホンでJポップを聴きながら、ノートパソコンでメールを送っている青年。

「あらら、困った、バッテリーが切れる。電線がズタズタだから、ソーラーでも買ってあげばよかったかな」

焼け跡で逞しく生き続けているのは、彼らバブルの子供たちであった。

その日から、ぼくは真新しいスーツを着て、細いメガネもいま流行のものに取り替え、すっかりとイメージチェンジして入社した。ついで、イメチェンするとなると、徹底的にぼくが誰だか判らないところまでしてみたいと、ぼくは凝りに凝るほうだったから、前日にヘアサロンに行って、思い切ってベッカムヘアにしてもらった。三十過ぎていたが、これで二十代の前半には見えるだろう。ビジネスバッグも高いブランドものにして、靴もおニューだった。いままでのぼくは、自分の身なりにあまりにも無頓着すぎた。

それではいけないと、三十過ぎて彼女もできないいたらくで、多少の焦りもあったが、外見からがらりと変えてみようと、昨日の日曜日に大枚はたいて上から下までがらりと変えてみたのだ。

いままでが、どうしても堅い、真面目なイメージがみんなに定着してしまったような気がした。女の子には人畜無害とまで馬鹿にされて、女気がない、髪も刈り上げ、ズボンも折り目のないよれよれで、どう見てもだらしのないどんくさい感じがしたろう。それではいけない。自己改革を外側からやろうと、デパートへ勇んで出かけた。

ぼくの好みの服は、どうしても地味な濃紺やグレー、黒と無難な落ち着いた色を選んでしまう。持っているスーツもセーターもワイシャツも、ネクタイまでも目立たない主張のないものであった。元来、あまりファッションには興味がなく、着ていればなんだったよかった。そんな性分だから、女の子には無視されるし、もてたためしがない。

今度は、自分で選ぶことはしなかった。ぼくは自分にはセンスがまるでないと自認している。どんな色と柄、ブランドが流行しているのか全く興味もなければ無知だった。そこで、店のスタッフの人にすべて選んでもらうことにした。自分の主張は全く入れないで、目を瞑って買うのだ。髪だって、恥ずかしくてたまらないのだが、高所恐怖症だから、せめて日生劇場の舞台から飛び降りるつもりで、いまの若い男たちに人気のあるヘアスタイルにしてくれと、目を瞑ったのだ。

そうして、いよいよ月曜日だ。みんな、どんな顔をするのか楽しみでもあり、恥ずかしくもあり、そわそわしていたが、堂々と胸を張って出かけようと、鏡の前に立つと、昨日までの自分はどこへ行ったのか、ちょっとした芸能人とも見間違ふ。実は、意外といいマスクをしているのだ。背も高いし、少し角張って鰓が張っているが、スマップの草薙に似てなくもない。ダサイセンスで自分を押し殺してきたのだ。だいぶ、それで損もしてきたろう。今日からは変身したから、ぼくは派手に振舞うぞ。身なりで気分も全然違う。

外へ出ると団地の奥さんたちが、ぼくをじっと見ている。ぼくということが判らないようだ。わざと、「おはよう」と挨拶してやる。向こうは顔を赤らめて走って逃げた。なにもそこまで恥ずかしがらなくても。

電車の中でも、ぼくが立っている前の席に座ってチャームな女子大生が、何かを云いたそうにちらちらとぼくを見上げていたし、乗客の特に若い女性たちの反応はさっそく出ていた。

ぼくは実に気分がよかった。昨日までの自分にさよならをして、今日からは云い寄ってくる女子社員たちをメッタ斬りにしてやる。いままで、ぼくを馬鹿にしてきた女の子たちを見返してやるのだ。

会社の入居するオフィスのビルで、多くの女子社員たちと会ったが、みんなただ呆然と立

ち尽くして、ぼくを見ているのだ。確かに、反応はすごいものがあった。ぼくは勝ち誇ったように格好つけて歩いていた。エレベーターに乗ったときも、女子社員たちは、ぼくの回りから少し離れるようにして乗っていたし、廊下でも、みんなの視線を集めていた。中には、ぼくの視線をまともに受けられず、じっと俯いてすれ違う女の子もいた。

ぼくの変身は成功だった。今日、何人の女の子からデートに誘われるだろうか。初めてなら、食事からか。それからカフェへ飲みに行ってもいいな。ホテルまではまだ早いか。あれこれと猥褻な想像までして、ぼくは内心にんまりと笑っていた。女の子だけではなく。注目しているのは男子社員もだった。これで、ライバルが増えて、戦々恐々としているのだろう。

部長が、にやにや笑いながら、やってきた。

「部長、おはようございます」と、いつにない澆刺とした挨拶をした。すると、向こうは、ぼくの下半身を指さして云った。

「君、社会の窓が開いとるぞ」

第372話 スキャンダル

週刊新潮に青森県の木村知事のセクハラ問題がスクープされていた。それが、地元の新聞に出るや、コンビニでも書店でも掲載の週刊誌が朝一で売り切れ続出した。噂に寄れば、木村の後援会が手分けして買い占めていたとか。

ただ、木村知事側から何の反応もないのは、冬季アジア大会の最中で、それどころではなかったこともある。大会が終われば、どう出るのか。頼っかむりして知らぬ半兵衛を決め込むか。ただ、週刊誌の買い占めは失敗だった。本がないというと、ますます見たい知りたいというのが人情だ。見た人が得意げに、あちこちで話すから、逆効果になっている。

「聞いたか、あの木村が……」と、寄れば集まればその話。青森県もいろいろと醜態を晒す。そのうち、

「あなた、青森県の人、いやあね」と、差別されかねない。

でも、このセクハラ問題では、もっと深刻な被害が出ていた。それは……。

古本屋の木村は、趣味でポルノ小説をせっせと書いていた。それで、普段からスケベと云われてはきたが、それは青森のヘンリー・ミラー、はたまたアポリネールを目指して、さらに文学的にポルノを高めようという試みでであったのに、みんなは誤解して、日常生活からしていやらしいのではないかと、それで女性は警戒して近づかない。加えて、あのスキャンダルだ。

「やはりねえ、木村ってスケベな人が多いのよね」と、一把一からげに括って、木村イコールスケベという単純な図式が成立したのである。

木村の古本屋には一日に何度も県外のお客から本の注文が来る。その客から電話でこう云われた。

「店主の木村さんは、あの木村知事とご親戚かなんかですか」

迷惑だ。三沢の鈴木市長が、アメリカへ行ったときに、鈴木イチロウと親戚かと訊かれたのと同じで、掃いて捨てるほど木村、鈴木はいるのに、たまたま同郷となると、ひょっとしてと疑われる。

その暗雲の兆しは、じわじわと木村という姓の人に襲いかかってきていた。銀行や病院で、「木村さーん」と、呼ばれると、みんなの視線を集めた。さも、軽蔑するような視線で、ひそひそと小声で噂までしている。どこの木村さんも一様に俯いて、小さくなっていた。

(おれが悪いんじゃないのに、何でおれたちがそんな目で見られなきゃいかんのだ)

と思っても、木村という名前にすでにレッテルを貼られて、なかなかイメージダウンというのは払拭できない。それは青森県だけに限る、地域限定で、かの木村拓也なんかは関係がない。

古本屋の木村には小学生の息子と中学生の娘がいたが、二人ともある日、泣いて帰ってきた。「もう、学校へは行きたくない」と、部屋に閉じこもる。母親が理由を訊くと、なんと、学校ではなにかあると「H!」と、木村虐めが遊戯として流行していた。子供たちの間ではすぐに遊びとして拡がっていった。

「木村のスケベー」と、石まで投げられていた。そのことがPTAでも大問題になったが、何の根拠があつてのことか、悪戯な噂が信憑性を帯びて、

「あら、うちの子にもイヤらしいのが伝染するといけませんから、なるべく遊ばないようにと云っておりますのよ」と、親からしてそうだ。

それが、だんだんと酷くなってきた。古本屋の木村が、街を歩くと、「キャー、キャー、木村が来たわ」と、女の子たちが逃げまどう。「お、おれが、な、何をしたって云うんだ」

各地で、木村虐めと差別が始まっていた。それで、何もしていないのに痴漢にされたり、セクハラをしたことにされたり、頭にきた、ある木村は、ついに婦女暴行に至った。警察に捕まり、その供述はこうだった。

「あまり、濡れ衣を着せるからよ、やってもいないのに、スケベと云われるから、どうせ云われるなら、やっちまえということだ。判ったか」と、完全に開き直っていた。

ついに木村被害者の会まで結成された。その会を中心にリコール運動まで起こっていた。「木村は知事をやめろー。われわれは偉い迷惑を被っている。木村の家名を汚すやつは青森県から出てゆけー」

署名運動が、古本屋の木村を中心にして、テレビ局に勤める木村と、詩人連盟の事務局をしている木村、青森文学に所属する木村などついに木村は立ち上がった。

ところが、当の知事の木村は涼しい顔。どうせ人の噂も七十五日。そっとしていればみんな忘れると、沈黙、無視を決め込んだ。県議会はオール与党に近い。唯一、果敢に木村知事に立ち向かう県議の鹿内が、糾弾しようとして質問に立っても、

「あれは、ポルノ小説でしょう。事実無根、あまり馬鹿らしくて名誉毀損で訴える気も起こりません」と、相手にしない。

翌日の新聞では新聞社が行った知事の支持率調査で、史上最低の一パーセントを記録したと、でかでかと載っていた。それでも知事の座に居座る木村に新しいあだ名がついた。「ごじゃら

し（業晒し）」という津軽弁だった。

古本屋の木村が街を歩いていると、いきなり石が飛んでくる。子供たちが石を投げつける。「わーい、ごじゃらしが来たぞ」
いつまでも終わらない。

第373話 行先のない切符
雄冬岬

札幌営業所は閉鎖することになった。北欧家具と鋳物のストーブを売っていたオスロ商事は、北海道市場から全面撤退することになった。北海道の景気は沖縄と並んで、全国最下位だった。拓銀が倒産したり、大手の工場が続々と閉鎖しているときだった。

営業所長をしていた田村康幸は、自分だけが本社への転勤命令を受取り、あとの北海道全域の出張所、代理店の一切の閉鎖と、人員整理を頼まれていた。そこで働く七十人の社員の首切りを自分がやらねばならない。できなかった。とても鬼のようにはなれなかった。みんな気心が知れている家庭持ちの、いい社員ばかりだった。中には家族ぐるみの付き合いをしている部下もあった。いま、全員を解雇するのは、解雇辞令という紙切れ一枚で簡単に済むが、そのあとの、各自の家のローンはどうする。子供の養育費も教育費もかかるというときに、この厳寒の二月に解雇され、燃料も買えない家が出てくるのではないか。

退職金も積み立てしていないから、みんな裸で出されるのだ。しかも、社宅も売却が決定していたから、出された社員は住むところも失う。ひとり冷血な悪役にならなければならない。ひとつの船を沈めるのに部下を道連れにして、船長だけ助かるというのも解せない。営業所の全社員に解雇予告を手渡した日、康幸は本社に自分の辞表も同封して送った。

そのことが引き金になって、妻とも口論になり、家庭も不和になっていた。妻と親しい社員の奥さん方との確執もあった。高校生と大学の息子を持つ親として、五十近い康幸の再就職も難しい。今後、どうして家庭を守ってゆけばいい。結婚して二十年余ですべてが破局へと向かっていた。妻の雪絵は口も利かない。別れ話まで出るようになっていた。

不況は、単に経済が低迷することだけでなく、人間関係にも家庭にも暗い影を落とし、ぎくしゃくしたわだかまりの果てに修復ができない傷を与えていた。

康幸は、そんなときに普段開いたことのないアルバムを見ていた。妻と知り合ったときに初めてドライブしたときの仕合わせそうなスナップだ。

一どこだろうか。と、すっかりと忘れていた一番いい時代の思い出をまさぐっていた。国道231の道路標識が映っている。雪が積もっているから、今頃なのだ。どうしても気になるから、交通情報センターへと電話を入れてみた。

一ええ、国道231号線ですが、どこへ向かう道路なんですか。

電話の答えは、札幌からだど厚田から浜益を過ぎ、増毛、留萌と向かう日本海沿岸を走る国

道だった。康幸はなんとなく臆気に思い出していた。いまは滅多に走ることのない辺鄙な道路だった。

「おい、これからドライブに行くぞ」

康幸は強引に雪絵の手を引いて、車に乗せた。

「乱暴しないでよ。どこへ連れて行くのよ」

雪絵はひりひりする手首を押さえて、康幸の思い詰めたような異常な様子に震えていた。この人は何をすつもりなんだろう。精神的に追いつめられているのは判っていた。

一あの日、おれたちは、どうしてあんな淋しい海をわざわざ見に行ったのだろうか。何をしに行ったのか。

営業所閉鎖まであと一週間だった。多くの社員は有給を使って、もう顔も見せない。残務整理は春までかかるだろう。それから、どうするか、その先までは考えていない。おれは、おれの答えをみつけないといけない。康幸は人間の弱さを今回ほど見せつけられたことはない。窮地に死ぬことまで用意している逃げの自分が小さくなっていた。

車は無言の二人を乗せて、北へと走った。石狩を過ぎると左手に冬の日本海の荒磯が見えた。こんな二月の231号線は、たまに長距離トラックがすれちがうだけで、対向車も少ない。ずっと、仕事を休んでいなかったのが、ようやく時間が空いた。いままで、会社のために突っ走ってきた自分が、羅針盤を失って、荒海に浮かんでいるだけの船に思えた。

雪絵はようやく口を開いた。

「わたし、知っているのよ。あなたの机の中にある離婚届。判はついていなかった」

車は急にスピードを上げた。狂ったようにアイスバーンの路面をスリップしながら走っていた。雪絵は恐怖で身を低くして、

「やめて、お願いだから、冷静になって」と、懇願した。

一この人は、いまは死ぬより辛いのだ。誰も味方がいないで、ひとりで苦しんでいるのだ。死ぬことなんか何でもないほど自暴自棄になっている。

雪絵は、多少ノイローゼ気味になっている夫を毎日観察して判っていた。でもどうすることもできない。

淋しい漁村や入江をいくつか過ぎた。雪は吹雪になっていた。車はヘッドライトを昼間でも点けて走っていた。風が強いから、波も道路まで飛んでくる。雪が狂ったように舞い上がり、一瞬、視界が白い闇になる。見えない。まるで、明日が見えない家族の行く末のように、真っ白の前方に、道も海も陸もない。どこからどこまでが境目か判らない。

「あっ、判ったわ。この道路だった。あなたと初めてのドライブで来た道だった」

雪絵はようやく飲み込めたように夫のパズルのピースを一枚見つけていた。

迷ったら原点に還ることだった。もう一度、やり直すことができるかも知れない。

車は道路封鎖の柵とパトカーに止められた。怪訝そうな顔で康幸は窓を開けて警官に訊いた。警官は赤いライトを付けて、右折するよう指示していた。

「なんかあったんですか」

「この先の雄冬岬で土砂崩れです。復旧まで数日かかりますんで、迂回路を通ってください」

すると、雪は急にやんで、青空が覗いていた。雲間から日の光まで射し込んでいて、荘厳な帯

を海に放射していた。雄冬岬という懐かしい地名が二人に思い出された。あのスナッフはこの先の海岸で撮したものだった。初めて結婚という言葉が出たあの岬だった。荒々しい日本海からいきなり千メートル級の山へとそそり立つ男性的な岬が前方に見えていた。昔は難所だったろう。二人は黙って車から降りていた。警官も何かあるのかとしきりに後ろの岬を振り返っていた。人間を寄せ付けない厳しい自然の姿の前では実にすべてが小さく見えた。

雪絵は康幸の腕にしがみついていた。そんなことはもう長くしたことはない。その岬を見に行くだけで充分だった。

二人は思い直して車に乗り込んだ。きっとどこにでも迂回路はあるのだと信じて。

第374話 行先のない切符

かなしき町

小樽。かつては北海道随一の商業都市であった。啄木がいた。多喜二がいた。港としての機能は次第に札幌に取られ、いまは昔の荒い声もしない。

その町が如何に栄えたかということは、都市銀行がいくら支店を出していたか、映画館がいくらあったかという尺度で測れる。小樽に初めてわたしが訪れたのは、昭和五十四年だった。視察が目的だったが、他の仲間とは別に、わたしは小林多喜二について調べものをしに行った。というのも、わたしの姉が多喜二の本家の小林家に嫁いだことから、何か書いてみようかと調べだしたのだ。

姉が嫁いだ三つ星パンは、いまは苫小牧に大きな工場を持ち、道南一帯に支店を持つパン屋だが、戦前は小樽にあった。秋田の大館から多喜二親子が、叔父で三つ星パンの社長を訪ねて小樽へ出てきた。多喜二は父と共に、叔父からパンを卸してもらい、港の荷担ぎたちにパンと牛乳を売り歩いていた。秋田でも喰えなかった貧しい親子は、それよりも悲惨な生活を見て歩くことになる。叔父が多喜二の才能を認め、今の小樽商科大学への学資をぽんと出してくれた。

姉の嫁いだ小林家では、昔から多喜二のことは口にしてもいけなかった。何も知らない姉が多喜二のことを云うと、烈火のごとく姑は怒ったという。いまだに赤呼ばわりするのは、多喜二が虐殺されたことで無縁を主張する一族の沈黙という封印だった。

小樽の駅に迎えに出たのは、商工会の青年部の役員たちだった。こちらからは青森の青年会九名が訪問した。出迎えの中に紅一点の若い女性がいた。奈緒子だった。古くからある食堂の娘で、髪もただ後ろで束ねているだけの化粧もしないがさつな女の子だった。ただ、その粗野な荒削りのところが、何かアイヌメノコのように、わたしは惹かれるものを感じた。

彼らは町をひと通り車で案内してくれた。運河と騒いでいるが、ただのどぶ川のような感じだし、車も人も通らないうらぶれた町を見物しながら、斜陽都市の悲哀を目の当たりにしていた。確かに古い明治からの建物がいまだに使用されているのは彼らの云う通り、何かに使えそうだ。世

の中から見捨てられた町、かつての栄華を留めていたが、それだからこそかなしい町に思えた。

「われわれは、これからこの町を見違えるように改造いたします。古いものを利用して、観光都市として蘇らせる計画があります」

共に昼食をとりながら、自由に討議しながら、若い者たちの意見交換をしていた。小樽の青年会の会長は、そう遠大な都市計画をぶちまけた。われわれには信じられない。できるものかと思っていた。人口は札幌の次で二十三万人いたのが、この十年でみんな職を求めて流出し、十七万まで減少していた。商店街は空き店舗も多く、市場も閑散としている中、よく商売をしていると思った。奈緒子はあまり発言せず、じっと聞き役に回っていた。わたしもレストランの二代目だったので、同業者として奈緒子に近づいた。

名刺を差し出すと、奈緒子は羞恥みながら、

「いやあ、こんな立派な会社じゃないもの、恥ずかしいわ。うちはただのその辺の食堂よ」そう云って、後退りしていた。

午後は自由行動で、わたしは奈緒子の店を訪ねた。いまにも潰れそうな大衆向けの食堂で、メニューもありきたりの丼ものが並んでいて、客はいない。昼の出前でなんとか食べているという。店主の両親も無口で、ふて腐った対応だった。

わたしは、奈緒子に多喜二に就いて調べたいからと、坂道を昇って、公園の方や、図書館、文学碑、大学へと案内させた。

「へえ、あんた、変わっているわ。商売人で文学青年って可笑しくない？」と、奈緒子は初めて笑った。屈託のない笑いが、潮風によく似合った。実は、奈緒子も小説は好きでよく読んでいた。二人で競うように、伊藤整の小説や詩に就いて、あれこれと熱中して話した。並んで歩いていると、もう恋人同士のようないい雰囲気になっていた。わたしは小樽という地名にいま一人の女の名を刻印していた。

われわれは一泊して、帰途についた。駅まで見送りに出た青年会のメンバーの中に奈緒子が遠慮がちにいた。

「今度、手紙書きます」わたしはそう云う奈緒子の目を見ていて胸が痛くなるのを感じた。

わたしたちは、それから数え切れないほどの手紙をやりとりした。奈緒子も青森に遊びにきたこともあった。ただ、結婚適齢期なのに、そこまでは考えたことはなかった。それからわたしは見合いであっさり別の人と結婚し、家庭を持った。それから毎年、年賀状だけは奈緒子から来てはいた。

あれから二十年経って、わたしは女房と別れ、レストランは畳んでいた。青森は都市計画で失敗して、わたしのいる中心商店街は郊外型店舗と大型店に押されて、かなりのダメージを受けていた。倒産が続出していた。ウォーターフロント計画も町の活性化の起爆剤にはならなかった。観光都市青森は成功しなかった。

わたしは異業種に商売替えをして、なんとか生活の途を探っていた。そんなときに、札幌に仕事で出かける機会があった。札幌から小樽は近い。奈緒子という名前を呟いていた。

五十近くなって、わたしはすっかり白髪になっていた。奈緒子も四十半ばで中年だ。あの初々しさはもうないだろう。逢いにゆくのが恥ずかしい感じがしたが、二十年ぶりに逢うのも何か嬉しい。

小樽の駅は変わっていた。乗降客が多く、以前と比べても賑やかになっていた。町を歩いても、かつての寂れた雰囲気はまるでない。たまたま、日曜日ということもあろうが、観光客が群れなして歩いていた。どこの店もレトロ調に改装して、洒落たレストランや土産屋になり、われわれが訪れた北一硝子も支店まで出している。倉庫はすべてワインバーになったり、地ビールを飲ませる海鮮レストランに変貌していた。あれほど、人も車も通らない、何もない町が、彼ら青年会の手で生まれ変わっていた。どんな路地でも、古い港町のイメージで、いろんな小道具を配しながら、こまかな演出がなされていた。わたしは、初めて見る町のようにきょろきょろして歩いていた。

奈緒子の食堂のあった場所まで記憶を頼りに歩いていったが、判らないほどの変わり様だった。地元の人に訊いて、すぐ目の前の明治の建物を模したレストランがそうだという。入口にワインの樽が置いてあり、コルク栓の山と牡蠣の殻がさりげなく積まれている。看板も名前も洒落ている。当時の食堂のイメージは微塵もない。

わたしが、店内に入ると、昼は過ぎていたが、満員だった。すっかり洋風に改造して、社員も増えた。みんな粋なソムリエのような格好をしている。メニューも蟹と帆立、牡蠣などのシーフードに北海道の特産をコンビネーションしたもの。ただ、わたしは、いまの小樽もこの店もメニューも、なにひとつ気に入らなかった。かつての哀愁が漂う町はない。商業ベースに乗り、すっかり俗化してしまい、あらゆるものが作り物で、軽い。

わたしは地ビールをやりながら、この町でドイツ人の職人が製造しているというソーセージをつついてきた。ときに演出のしすぎというのは、くさい芝居になる。どうも鼻についていけない。それに騒々しすぎた。客が引いた頃に、ウエイトレスに奈緒子のことを訊いた。店内にはいないようで、ケイタイで呼び出したようだ。

やがて、派手な衣装に化粧もきつい女が現れた。見違えるような社長になった奈緒子がいた。わたしを外人のようなジェスチャーで迎えてくれた。やはり、綺麗な人には違いなかったが、昔と違うのは言葉と態度だった。わたしに名刺を差し出す。支店が三つも書いてある。札幌にまで店がある。

「暫くね、変わっていないんじゃない。二十年ぶりか。小樽はどう？　すごいでしょ」

奈緒子の自信に満ちた野太い声は、成功した女経営者のそれだった。ずっと独身を通してきた。家庭や配偶者はどうやら邪魔のようだった。

「そうだね、君らが変わると云っていたことは、こんな町だったんだね。うまく行っているようだし、君も昔と違いー」そこまで云って、わたしは口を噤んだ。

「昔と違って、どうなのよ」

奈緒子は深い笑いで見つめていた。町は変わった。人も変わった。ここは、小樽ではない。たんに歴史の上に厚化粧をした娼婦のような町になっていた。若いミーハーが全国からやってくる。

「石原裕次郎記念館もいらしたら？　なかなかいいわよ。吉本もできたし」

それ以上、聞きたくなかった。わたしは、少し酔って駅まで送るという奈緒子にさよならを云った。来るのじゃなかった。

あの頃の君だけでなく、若い二代目たちは必死で町造りに取り組んでいた。確かに這い上がる

うとしていたみんなは羨ましいくらい純粋な光を発していた。いまはどうだ。みんな声が荒い。
わたしは函館行の特急に乗り込んだ。過ぎゆく景色に昔の面影を探していた。やはり、啄木の歌にあるように、小樽はかなしい町に違いなかった。

第375話 マイ・ファナティック・バレンタイン

今日は二月十四日。甘い香りが漂っている。

野呂亀男は、来月の誕生日で三十になる。少し小太りで上背がない。顔は愛嬌はあるが、お笑い系には丁度いいくらい。どんくさく、何をやらせてもワンテンポ遅れる。彼女もいない。このまま、女に縁がないまま定年退職までかと思ったりする。見ただけで誰も近づかない。人生の半分は暗かった。

その亀男は、ケーキ職人として市内の大きな洋菓子店で働いていた。一年に一度の今日だけは仕事を休みたかった。

亀男は、ぐずぐずと仕事先のデパートの催事場へと向かった。洗濯したばかりの糊のきいたコックコートに緑のタイをして、コック帽をかぶる。前掛けを締めるともうケーキ屋さんだ。

のろのろと売場に出る。ずらりとチョコレートが並んでいる。販売員の女子社員たちも来ていた。開店二十分前だ。デパートの主任から朝のミーティングで、注意事項、売上目標が発表される。バレンタインの特設会場には、酒のコーナー、ネクタイ、紳士服、服飾小物、雑貨など、いまはチョコレートだけではない。各部門が参入してきて、凌ぎを削っていた。ただ、メインはやはりチョコレートで、亀男は今日一日で千個くらいのハート型のチョコレートケーキやチョコに名入れをする実演販売をするのだ。きっと、ふらふら、くたくたになる。電気の湯煎機にホワイトチョコを溶かしていた。パラフィンで絞り袋を造り、それに溶けたチョコを入れて、ケーキやチョコの上にお客の指定したメッセージを書くというものだ。ただ、それだけの作業とはいえ、ものすごい量だ。ケーキの箱が山積みされている。それにピンクの包装紙とリボンでラッピングするのは女の子たちだが、それもまた大変な忙しい仕事になる。

さあ、開店だ。来るぞ。来るぞ。と、みんな一様に身構えた。開店のアナウンス。全社員、直立不動の姿勢でお迎えする。どどどどと、と地鳴りがする。建物が地震のように揺れている。驚きはしない。いつものことだ。来た。来たぞ。我れ先にまるでバーゲンセールへの突撃隊のように、走ってくる黒い集団。すべて、若い女性からおばさん。学生たちは午後からだ。昨日も凄かったが、今日は最高だ。曜日の関係もあり、当日がピークになった。

「押さないで、何をあんだ」

「キャー、キャー」「わたしが先よ」「何云ってるの」

別に先着で何か上げるといってもないのだが、その迫力は凄まじい。あっというまに売場は女、女、女で溢れかえる。女の臭いがむせかえる。ひしめきあって、すかさずオーダーが入る。みんな忙しいから、会社から抜け出てきたOLもいて、並んで待たされるのが嫌なのだ。

「こちらの紙にメッセージとお名前をお書きください」と、女子販売員が叫んでも聞こえない。

「ねえ、このチョコケーキに『今度わたしのすべてを上げる』と、書いてくれない」

太ったおばさんだ。ゲゲ、この女のすべてどころか少しでもいらないと、笑いたくなるが、ぐっと堪えて亀男は器用にチョコで字を書いた。

「わたしは、『死ぬまで愛しているわ』と書いて」

と、八十過ぎたおばあちゃん。よたよたして、もう半分死んでいるんじゃないのか。

「いいこと、誰にもバラさないと約束してくれる」と、紙を渡されたが、それには『今年こそ奥さんと別れてわたしと一緒に』と、不倫の長い文。誰が、バラすものか。あんたは誰だよ。名前も顔も知らないのに、と危ない注文もくる。

亀男は汗をかきながら、人の愛の橋渡しのためにせっせと恋文の代筆をしている。自分にこの中の一人でもいいからいればいいのに、羨ましい。みんな恋人、もしくは意中の人がいるのだ。世の中にこれほど女がいるのに、どうして自分にだけ回ってこないんだ。今日ほど馬鹿らしい日はない。

午後より女子大生、高校生、中学生から小学生と、いまや国民的行事になったバレンタインに少女たちがどっと詰めかけた。

「おっじさーん、これ書いてえ」と、高校生が出したメッセージには『変』と書いてある。変すい変すいとは石坂の小説だが、いまも昔も漢字を知らない。

「これって、恋じゃないのか。ちょっと変だぞ」亀男が云うと、みんな友達がゲラゲラ笑って、「こいつう、国語2だからな」

と云っている女の子たちも、LOVEがL A V Eになっていたりする。英語力もない。日本語が乱れているのがこんなときに露呈する。

「早く書いてよ。急いでいるんだから。グズ、のろま」とまで云う女の子もいた。

「ちょっとお、急いで書いて、字が乱れているわ。書き直してよ。こんなんじゃ、笑われるわ」

「わたしが先に出したのに、なんでこの人のができているの」

「彼氏、三股かけてるの知ってる。でも、わたしも二股なんだ」

「おっじさん、汚い、汗が落ちてるよ」

ただでも煩い女の子たちだ。女三人で姦しい。女三百人ならなんと表現しようか。わんわんと耳鳴りがしていた。亀男はふらふらになって、苛々が最高潮に達していた。

「うるっさっいっー」とうとう亀男は切れた。日頃の恨み辛みも含めて爆発した。手当たり次第にチョコレートケーキを女の子たちの顔めがけて投げた。湯煎していたホワイトチョコをぶっかけた。大変なことになった。混雑していた売場はパニックになって、女の子たち逃げまどう。折り重なって倒れる。泣き叫ぶ。亀男も泣きながら、なおもケーキを投げつけていた。みんな、髪から服から顔までチョコレートまみれになって、ハンガーを倒す、販売台はひっくり返す。警備の係がかけつけるデパートの男子社員がかけつける。そのうち、火災警報が鳴り渡る。キャーキャーと悲鳴が拡がって、出口は大混雑になっていた。

「女なんてなんだ、女なんて、何がバレンタインだよ、ばかやろう」

亀男にとって、この日は一年で一番淋しい日でもあった。

新種のビールスがじわじわと日本全国に広がりつつあった。それは、ビールスに感染すると、急に態度が大きくなって、太っ腹になったり、何でも大きく見たりする気が大きくなる症状になることだった。肉体的な害はないが、街では大変なことが起こっていた。

サラリーマンたちが、いつも会社の帰りに寄ってゆく居酒屋に同僚と立ち寄った。晩酌コースというのがあって、三品の肴に酒かビールが二本ついて二千円だった。ほろ酔いには丁度よい量だ。それが、表の看板に〇が二つ多い。

「おい、二十万円じゃないのか」

「まさか、誰かの悪戯だろうよ」

とって中であいつもの晩酌コースを頼んだ。後で、おあいそと云ったとき、やはりお一人様二十万円也。酔っていたこともあるが、それよりこの居酒屋からビールスに感染していた。

「おお、いい度胸しているな、気にいった、すっぱりと払ってやろうと云いたいが、キャッシュはないから、カードでどうだ。一回払いで払ってやるよ」

客も気が大きくなっていった。いつから暴利居酒屋になったのかと疑いもしない。そのビールスに感染すると、桁の大きいのが普通に見えてくるのだ。

スーパーでは店長から販売員までみんなが雇っていた。店に来る客まで多くが雇っていた。まだ感染していない客が入ってくると、決まって大騒ぎする。

「なんですって、牛乳が二本で三万円、カップラーメンが一万円均一ですって？」

その病気は政府によって、インフレ・エンザと命名された。いままで、デフレで喘いできた経済連も大いに歓迎すると報じた。政府も進んで感染するようにと奨励していたから、国民の大半がその病気に雇ってしまった。

会社では、社長が太っ腹になり、

「さあ、今月からみんなの給与を百倍にしてあげよう」

明細書を貰った社員は大喜び。

「ええ？　すごい、月給が突然二千万になった。年収は三億はゆくな。よし、今月の給与で、家のローンの残高みんな返してしまおう」

借金のある者や会社は大助かりだが、逆に急激なインフレで、大口預金者たちは困った。

「貯めに貯めた一億円で、買えるのはブラズマテレビか安い車ぐらいだ。いままでせっせと貯め込んだのは何のためだったんだ」

銀行が困った。対外的な借金も目減りしたけど、みんな大きい顔して返済にくる。

「さんざん、いままで頭下げにきたけどよ、耳揃えて全額返済してやるよ。たかが、三億円じゃねえか、がはははは」と、それまで、何とか返済は待ってくださいと、小さくなっていた債務者も、態度が一変した。いままで借金で首が回らなかった人も、急に端金に見えてくる。いつも財布には百万くらいは入っていたからかさばって仕方ない。

「かあちゃん、がちゃぽんやってくるから小遣いくれ」と、子供が一万円持ってゆく。亭主がタ

バコ代と三万円持ってゆく。すでに硬貨は自販機でも使えない。最低の通貨が今や一万円札になりつつあった。

保険会社も困った。死んだら五千万。葬式代も出ない。ただ、資産価値がどっと上がり、すべての基準はクリアした。

当然、輸入と輸出にも大きな変化が見られる。安い海外旅行に人々は殺到した。買い物旅行大流行だ。その反対に国内の輸出メーカーは悲鳴を上げた。安価な輸入品がどっと入ってきた。チャンネルのバッグも子供の小遣いで買える。

銀行強盗も大変だった。いままでの百倍の札束を持って逃げなければならないから、体力も必要だ。

「百億円用意しろ」と、銃をつきつける。銀行員がジュラルミンのトランク五十個も積み上げた。

「どうぞ、持ってゆけるものなら、持って行ってください」

馬鹿な強盗は、台車をロープで列車のように繋いで、よいしょよいしょと引っ張ってゆく。駆けつけた警官にすぐに御用となった。

何よりもインフレ・エンザに雇って喜んでいるのは政府、小島首相だった。

「なんてたって、あなた、国債残高が、たったの四百兆円ですよ。来年度の国家予算が八千兆ですからね、それは年度内予算で消化できるってなもんです。はははは」

インフレ・エンザは、貧乏人が喜び、金持ちが嘆いた。有価証券や預貯金で財産を保有している人は大損することになった。いままで苦しんでいた不動産業者は景気がよくなる。

もう一人、密かに喜んでいる男がいた。古本屋の親父だった。

「これだけの在庫もいまはたいした財産だ」

でも、それだけは違っていた。資産価値のあるものだけで、本を読まなくなった現代は換金性のないものはゴミだった。世の中がどう変わろうが、古本屋だけは万年不景気。店主、本当のインフルエンザに雇って寝込んでいた。

「おれだけは蚊帳の外。貧乏から逃げられない」

と、嘆くことしきり。

「北村古本店さん、電気代の集金で一す。二ヶ月分溜めてましたから四百万円になります」

古本屋のレジにははまだ十円玉、五円玉しかなかった。

第377話 天井の眼

わたしのものごころついたときから、この家の天井には誰かがいると思っていた。家は二階建てで、戦後、焼け跡に祖父が大工けがあり、材木を購入してひとりで建てた家であった。その材木も新しいものもあったが、大概はどこから持ってきたか判らない。古い板は、当然古い家を解

体して持ってきたものだ。そこには、何があったか判らない。血のようなものが黒くシミになってついているものもある。昔の造りだから、狭い間取りで、物もない時代だから安普請だった。壁は漆喰で、藁が顔を出し、割れ蟬が走っていた。天井から欄間、廊下、すべて板を張ったもので、歩くときしぎしと鳴った。

わたしは幼少の頃から想像力の逞しい子であった。人間の眼の錯覚でよくひとりで遊んでいた。そばに誰もいなくとも、絵本やお玩具がなくとも、ひとりで厭きもせず遊んでいるのだ。それは、天井の顔と話していたのだった。

天井板は、木目がまっすぐの板もあったが、渦巻きのようになっていたり、節があったりしていた。その節が瞳に見えたのだ。じっと何ヶ月も蒲団の中で、その眼を見ていると、次第に、眼の周りに鼻のようなシミがあったり、口のような木目があったりして、輪郭まで現れてくる、そして、とうとう、ある日、そこに巨大な顔があったことに気が付くのだ。

わたしはいつも、その顔に見つめられていたと思うとぞっとして、蒲団を頭までかぶって寝た。それでも怖いもの見たさで、蒲団からそっと眼を出して、その巨大な顔を見上げるのだった。顔はときに変化して、睨んでいるような恐ろしい形相になったり、優しく笑っている顔になったりした。

天井に潜んでいるのは、顔だけでないことに気が付いた。よく天井の全面を観察すると、そこには背中に羽根の生えた天使もいた。それは、キリスト教の幼稚園に通っていたので、ひかりのくにとという絵本でいつも見ていて知っていた。まさしく、その天使たちが何人も空を飛んでいたのだ。

そうかと思うと、悲しげな女の顔がモジリアニの絵のようにデフォルメされて歪んでいた。死神もいた。大きな鎌を手に振りかざして、いまにも罪人の首を撥ねようとするところだった。それで、わたしはすべてを理解していた。それは、天国と地獄の絵図なのだ。真ん中の巨大な顔は全能の神の顔だった。やはり幼稚園で、天国の話先生から聞かされ、人間が生前のした行いで、振り分けられると、劫火に焼かれる町と人々を思い、死ぬということが恐ろしいことと、子供ながらに思っていた。まさにそれが、誰が描いたか判らないが、天井いっぱい展開していたのだ。

わたしは、そのことを二つ上の小学二年の姉に話したことがあった。姉は笑って、「眼に見えるけど、熊のようだ」と云い、見る人によって、違うように見えるのだなと思った。案外、それはわたしだけに見えるものかもしれなかった。

その「見える」ということは天井だけではなかった。蒲団のプリント柄の抽象的な連続した柄も、じっと見ていると、だんだんと人の顔に見えてくる。みんな大きな口を開けて、眼が潰れていた。それで、助けを求めよう顔だけがまるで血の海に浮かんでいるように、何かを叫び訴えていた。いままで、何げなくかぶっていた蒲団が急に怖いものになった。その薄紅色の花柄が、実は、血の池地獄に浮かぶ罪びとたちの助けを求める阿鼻叫喚の図だと思うと、とても寝てもいられない。

祖母に蒲団が怖いから別のと取り替えてくれと云うと、笑って取り合ってくれない。「また始まったか、このジグ（意気地）なしが」と、わたしの神経質なところを、知っていて、毎度のことと思っていたようだ。

それからだ。わたしは周りのすべてのことについて、意識的観察をするようになった。見るものすべてが、なにものかが、隠されていることに気が付いたのだ。どうして、家人はみな気が付かないんだ。わたしたち家族は、壁といい、床といい、柱といい、あらゆるところに隠れている眼に監視されているのだ。柱には蝋燭も火が揺れているように描かれ、その上には吊された子供が、蝋燭の火で焼かれていた。廊下の黒光りした古い板は、見知らぬ手が、いくつもあって、歩くたびに掴まえられるような気がした。だから、歩くときは、その手のない、端の方をそろりと歩くようにしていた。

こんなにも恐ろしい世界に暮らしているのに、どうして誰も判ってくれないのだ。平然と暮らしていること自体が不思議でならなかった。靈感が強い子だとは云われたことはないが、臆病で神経質とは云われた。それは、子供の頃だけで、人間、揉まれるとだんだんと凶太くもなる。想像力もだんだんと劣化してくるのか、わたしは小学生、中学生と大きくなるに従って、その地獄絵図や、巨大な顔、隠れている眼などを見ることはなくなった。

心霊写真と、テレビでも騒いでいる。わたしの子供たちも撮ったスナップで、変なものが写っていると、よく騒ぐ。木の枝や、葉っぱのひとつひとつが顔に見えたり、手に見えたり、まさに「幽霊の正体見たり枯尾花」である。

見えなくなったことは、また喜ぶべきことではない。われわれは、想像力を失ってはいけない。新聞やテレビのニュースを見ても、街を歩いても、われわれを取り囲む、不気味な眼や掴まえようとする手を感じていなければならない。隠れた巨大な顔が見えなくなったとき、きっと世の中が見えなくなっているのだ。